UNIVERSITY OF CALIFORNIA-LOS ANGELES
L 010 452 680 1

Date Due 9-12

JUN 1	AUG 24	NOV 21	
JUN 6	AUG 30	NOV 27	
JUN 1[illegible]	AUG 31		
	SEP 5		
JUN 15			
JUN 2[illegible]	SEP 11		
JUN 26	SEP 13		
	SEP 16		
JUL 1	SEP 18		
JUL 1[illegible]	SEP 25		
JUL 13	SEP 30		
JUL 20	OCT 2		
JUL 25	OCT 4		
JUL 29			
AUG 5	OCT 12		
AUG 16	OCT 17		
AUG 14	OCT 23		
	OCT 26		
AUG 22	OCT 30		
	NOV 4		
	NOV 14		

9-1251

富士

戯曲
戦はこれからだ　眞山青果

新版義士銘々傳
心直助晴の一口　小島政二郎

六月號

痔疾はなぜ治らぬ？

最も平易明快な痔疾治療の手引き

明るい初夏も病む身には仇

頒布方法

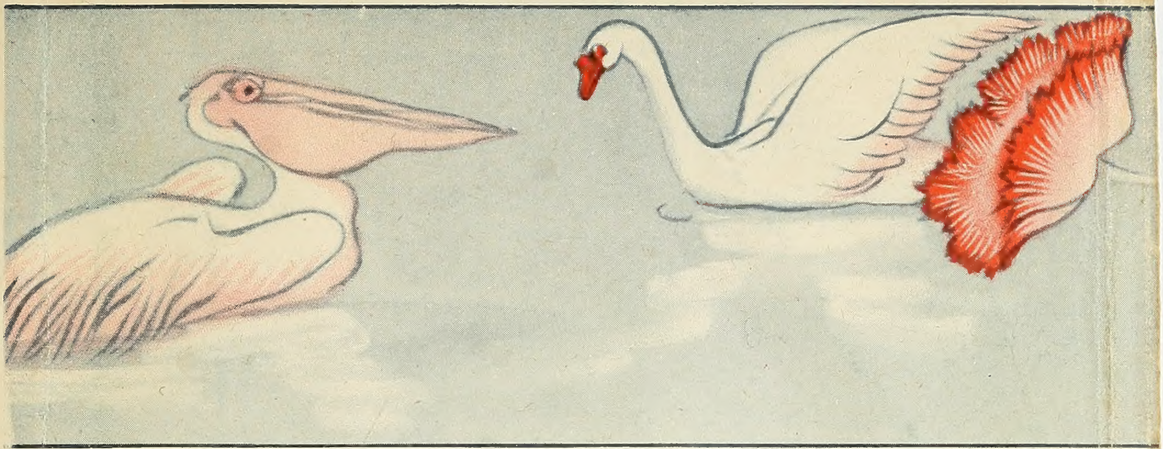
ハガキに冨士讀者なる旨明記して左記へお申込下さい、一人一册限無代にて贈呈します、至急ご一讀の上不愉快な痔疾を解消して、明るい生活を取戻して下さい

東京市日本橋區本町一丁目
申込先　玉置合名會社頒布係

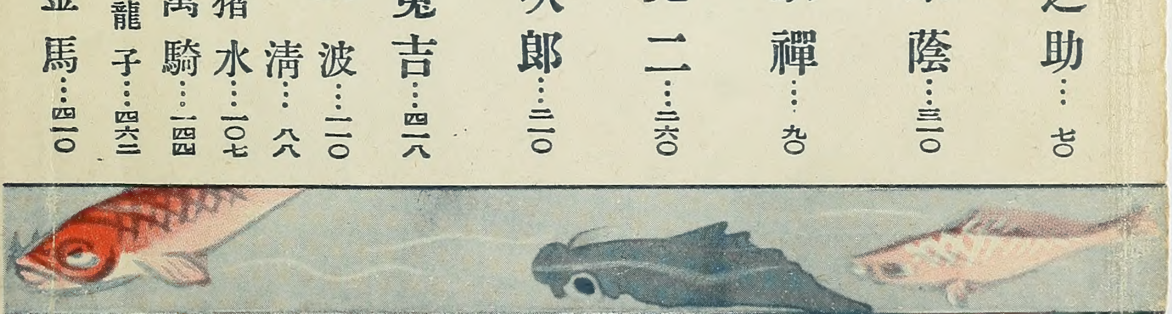
長からぬ人生に於て、痔疾に惱む方ほど不幸な方はありません、しかも色々な事情や、誤つた療法の爲に五年十年と病床に暮す方の多いのは何故でせうか、それは痔疾に對するほんとうの正しい知識を持たないからです、本書はかうした氣の毒な方々のために、なぜ痔疾が治らぬか、どうすれば治るか、その方法手當をハッキリとお敎へすると共に、多くの人の全治の體驗記を集めたものです、この一册は必ずあなたの痔疾を全治せしめる上の正しい手引となると信じます。（無代頒布ですから至急お申込下さい）

無代頒布

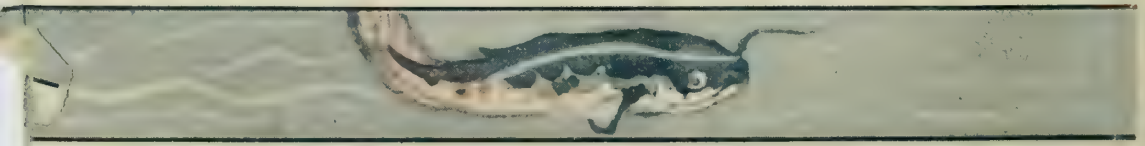
四六判
美裝七十頁册子



姿變れど心は錦、戀愛流轉の山男
青春の鬼……水守龜之助……一七
神出鬼沒、奇怪極まる變化の正體？
狐若衆十三變化……江見水蔭……三一〇
昔は人の身、今は我身に涙の情
殿樣百姓……渡邊默禪……九〇
快男兒、戀と劍の道場爭ひ
一刀流鬪士陣……小山寛二……二六〇
血あり、涙ある武士恩愛の義理人情
熊谷陣屋……鈴木彦次郎……二一〇
虛々實々、苦心の勤王七變化!!
桂小五郎流泊篇……三上於菟吉……四一八
◎島の西鄕どん（偉人秘話）……仁木笑波……一一〇
◎支那要人秘話……濱川淸……八八
◎昨夜の瘤（ユーモアコント）……吉祥寺猪水……一〇七
◎朗らかな水兵（海軍ユーモア）……梶野千萬騎……一一四
◎觀相にあらはれた馬越恭平翁……櫻井大路・石龍子……四六三
◇はてなの茶椀（落語）……三遊亭金馬……四一〇



冨士漫畫大笑館（オフセット色刷）……一九
△デカとキウリ（新連載漫畫）……新關青花……二〇
△三ブちゃんと梅雨（漫畫）……小寺鳩甫……二八四
△無軌道船長（漫畫）……田河水泡……三七八
△傑作漫畫集……三三〇
△浮世川柳（漫畫）……谷脇素文……三五八
善は滅びず（林唯一畫）……佐藤紅綠……三六二
地に爪跡を殘すもの（細木原青起畫）……佐々木邦……二三六
伊達事變（齋藤五百枝畫）……白井喬二……三八二
薔薇色の道（寺本忠雄畫）……中村武羅夫……二八八
晴曇（大橋月皎畫）……久米正雄……四四六
風流活人劍（羽石弘志畫）……野村胡堂……三三六
東京哀歌（山川秀峰畫）……加藤武雄……一九四
蒼眸黑眸（富永謙太郎畫）……菊池寛……一四八
すてうり勘兵衛（鰭崎英朋畫）……村上浪六……一六二



名物語傑作畫譜

宇治橋

木島柳鷗筆

（裏面の解說參照）

宇治橋

白雲菴主人

『水遶り山圍み地亦た淸し。翠の楊岸を挾んで白沙明かなり。碧瑠璃上畫橋の影、多少の遊人波底を行く』

月舟の詩は、宇治橋のすがたをさながらに詠ひ出して居ります。

長さ八十三間、珠を碎いたやうな淸冽な川水のせゝらぎ、積み上げたやうにこんもりとして居る峽間の翠綠、橋は其の間に夢のやうに横はつて居ります。春は春でよし、秋は秋でよし、四季折々の橋の眺めは、昔から繪になり、又歌によまれて居ります。かてゝ又、こゝは、大和から洛へ通ずる喉輪に當つて居るので、いざ事ある毎に、この橋をはさんで、戰の渦をまき起したことが幾度かありました。仲哀天皇の御代に於て忍熊王が宇治川に屯した頃は、まだこの橋は無かつたが、治承の兵禍、壽永の爭亂、延元、天正の戰火の繪卷物は、此の橋を中心にして展開されて居ります。されば日本歷史のページの上に於ても、重要な位置を占めて居るわけ。

さても、此の橋、いつ頃出來いたししかと、その緣起を尋ぬるに、大化二年南都元興寺の僧道登と申すもの、勅を奉じて、現在の位置よりも些しく下流に始めて橋を架けました。何せ、流が急なので、此の橋の出來上る迄には、澤山の人畜が水に流されたのですが、道登のおかげで、一同大助かり。その頃、瀨田、山崎の大橋とあはせて、この橋は三大橋の一つに數へられたが、その後、同じ寺の道昭が修覆したと申します。後世、しばしばこの橋は中絕しましたが、延曆十六年には、文室波多麿が建造し、弘安九年には、大和西大寺の僧叡尊が再興し、その橋供養の際には、畏くも龜山天皇の行幸がありました。

行末も道はまどはじためしなき
　けふの御幸のあとをのこして

『續後拾遺集』に此の一首が載せてあります。以來、この橋は放生院で管理することになりましたが、天正六年に當り、織田信長が豐臣秀吉に命じ、大和三輪山の檜材をもつて、此の橋を架けかへさせ、高欄に靑銅の擬寶珠をつけた爲、見ちがへる程美しさを添へました。

秀吉が、伏見の城にある時でありました。

『三の間の水を汲取つて參れ』

と、橋守の通圓に云ひつけました。

三の間と云ふのは、宇治橋の南の欄干を幅一間ばかり出張らせた處で、(原圖參照)元はこゝに橋姬の祠がありました。三の間の橋の下三間ほどの間を流るゝ宇治川の水は、いかなる旱に出會うても、曾つて涸れた例もなく、且又、淸らかで、味よく、最も茶の湯に適して居ります。

秀吉は茶を點じたので、ふと此の水を思ひ出したと見えます。

その時用ゐた釣瓶は、今も尙この橋のたもとにある通圓茶屋にのこつて居ります。此の挿話は、いかにも此の橋にふさはしい古雅な優美な趣が漂つて居ります。

× × ×

この繪の作者木島柳鷗畫伯は、本名を唯三郎と云つて千葉縣長生郡に生る。中年より東京に繪畫を學ぶ。初め島崎柳塢畫伯に師事し、圓山派を學び、後に大和繪を松岡映丘畫伯に師事す。發表せる作品は、帝展1・2・3・5・9・11回に、平和博・奉賛展・パリー日本畫展・シャム日本美術展等に、中にも帝展9回に入選の根岸の里は氏の代表作として好評を博せり、現に日本畫會の會員なり。

（寫眞は木島柳鷗畫伯）

りん病

登録 商標

堂 別府淋藥

淋菌の苦手

別府治淋藥

…誰れも驚く賣行と評判…

人に苦手がある如く、淋菌にも苦手があります。此の藥は胃腸内で化學的變化を起して強力な殺菌素となり、淋菌の安全地帶たる尿道や膀胱の粘膜内にもどしどし浸入して一匹も殘らず退治した上、尿と共に體外へ排出する作用を持つてゐますから、淋菌は閉口してゐます。だから他藥で効目なく失望落膽してゐる人にも希望と光明を與へる事請合です。尚ほ本藥は絶對副作用なく自宅で治療出來るため近頃の賣行と評判とはとても素晴しいものです。

知名新聞 東京朝日、東京日日、大阪朝日、大阪毎日、富士、講談倶樂部、實業の日本主婦之友及全國知名新聞廣告御參照を

雜誌推奬 乞ふ

（此雜誌名記入申込者に限り淋病治療書無代進呈）

藥價 急性用（黒箱）一週分 三圓
慢性頑固症用（赤箱）一週分 五圓

送料 前金無料代金引換廿八錢海外五十錢
振替下關八九四〇

特約店募集（先約各町村一ヶ所限り、藥店に限らず）

家傳秘藥なれば支店特約店以外には販賣せず

製造發賣元 合名會社 岩里天然堂
別府市鶴水園

別府温泉で出來た一回試用有効的確

別府皮膚藥 藥價 三十錢・五十錢・一圓
注文切手代用にても可

別府温泉で名高い **家傳秘藥**

地方配給所

東京市麻布郵便局前	岩里天然堂
大阪市上六大軌東一丁	岩里天然堂
名古屋市外布袋町	岩里天然堂
淸水市辻町江尻驛前	岩里天然堂
岐阜市長住町一丁目	岩里天然堂
神戸市籠池通一丁目	岩里天然堂
奈良市三條町	岩里天然堂
廣島市段原町的場通	岩里天然堂
下關市竹崎町一丁目	岩里天然堂
福岡市博多上洲崎町一	岩里天然堂
福岡市博多千代町交叉點東	
長崎市稲津町六七	岩里天然堂
鹿兒島市西本願寺筋	岩里天然堂
宮崎市瀬頭町ガード際	岩里天然堂
高松市櫻橋通	岩里天然堂
高知市金子橋	岩里天然堂
京城府西大門二丁目	岩里天然堂

大特約店

東京市本郷區駒込	大日本雄辯會講談社代理部
同上野驛前福仙旅館横	福助堂
同東京驛前海上ビル	共生堂藥局
同麹町區有樂町三一	日比谷藥局
同神田區花房町一	山崎帝國堂
同澁谷停車場前	鈴井藥局
同本所區錦糸堀終點	梅原藥局
同日本橋區水天宮前	キク藥局
同神田區表神保町十	神田藥局
市内王子町郵便局前	小林藥局
同龜戸町天神通	美天房藥房
同高圓寺驛南通	アサヒ藥局
同武藏小山驛前	西川藥局
同大森町京濱電車學校裏	ツル藥局
川崎市東田公設市場前	ポチ堂
横須市伊勢佐木町	加藤回陽堂

[illegible]	[illegible]
同 南旭町二三	内藤藥局
札幌市狸小路	三河屋菓子店
小樽市[illegible]町五丁目	菊池商店
旭川市三條通六丁目	太田牛兵衛
十勝國帶廣町本局前	林商店
函館市松風町	齋藤延壽堂
室蘭市港町	山本平治
石狩國瀧川町五丁目	照本藥舗
靑森市長島町	三勝堂藥房
弘前市中土手町	ミツヰ商店
山形市七日町	渡邊藥舗
秋田市牛島町	北島呉服店
秋田縣扇田町	城金之助藥房
盛岡市仁王内丸大通	菊屋藥房
仙臺市南町	豐田商會
宮城縣古川町	ウメツ商店
福島市荒町	キモト藥店
水戸市上市元山町	フジヤ商店
宇都宮市大工町大通り	篠田天狗堂
埼玉縣熊谷町	齋藤藥局
群馬縣草津溫泉場	釜屋百貨店
桐生市新宿通り一	高島藥局
栃木縣相生町西側	篠田天狗堂
靜岡市七間町三丁目	市川商店
靜岡縣燒津町	齋久藥店
岡崎市欠町	大原藥局
新潟縣三條町三ノ町	稲葉別府堂
新潟市本町通り	中郡藥局
長岡市本町二丁目	吉村藥局
富山市古鍛冶町	小褔日扇堂
同魚中町	野口商店
甲府市櫻町四六	齋藤藥局
長野縣松本市六九町	木下昇久一
上田市連歌町	齋藤天壽堂
金澤市犀川上	菊髙舘
福井縣武生町	澤田一二三屋
福井市神宮寺	山田藥店

名古屋上前津電停前	小島屋本舗
同中區東町四丁目	内藤藥房
同[illegible]	[illegible]
關市西宿	白井木工場
大垣市馬場町	ホシ藥店
津市北町	橋本藥局
四日市市西町	金龍商店
京都市東九條東寺道	第一藥局
京都府福知山紙人町	福知藥局
大阪市浪速區霞町二	性保堂藥房
同梅田阪神前	トミヤ煙草店
兵庫縣洲本町四	いぬねこや支店
同縣城崎溫泉	伊藤勧商場
岡山市城下電停	石原書店
廣島市小網町電車道	戸川藥品部
呉市中通五丁目	鎌田幸晃堂
下關驛前山陽通	ヒラタ藥局
米子市茶町	勝見藥店
德島市富田橋筋	横山光榮堂
香川縣善通寺町	桑島藥店
丸龜市風袋町	須藤商店
福岡縣飯塚市東町	丸林大藥房
同行橋町	ミツヤ藥舗
大牟田市三川局前	ロングサン藥店
若松市辨財天通	井上藥房
八幡市槻田五條橋	若松屋
小倉市魚町四丁目	岩中藥店
門司市櫻町通二丁目	松永藥房
大分縣杵築町	河野商店
熊本市寺町停留場前	熊本藥局
佐賀市東魚町角	田中昭明堂
佐世保市本島町	山崎西生堂
鹿兒島縣大島郡東方村	福藥店
臺灣屏東街市場後	屏東第一藥店
臺北市西門町	積商行
釜山驛前	古阪藥舗
元山府本町二丁目	岩井商店
大連市紫部通三三	天然堂藥局
撫順東三條通	ハルルヤ藥房

武者小路實篤先生著

二宮尊德

大好評！忽ち五十九版!!

感激と興味に滿てる稀有の名著！

金次郎と呼ばれた少年時代已に家を興し、家老からお家再興に聘せられて苦難幾年、よく難局を拓き産を治め、世に報德の教を傳へるまで、涙ぐましくも健氣なる尊德翁は

實に德川時代末期を飾る偉人である。而もその行蹟は之を偶像視すべきではない、我等の日常の生活に光明を與へ希望を與へ、我等を勵まし我等を導く人間尊德の偉大さである。

眞に——

感銘深く膽に銘ず！

即刻御清讀あれ！

矢野恒太氏

第一生命保險株式會社々長矢野恒太氏は本書の内容に感激して直に一千部を購入、親戚知己に頒たれました。斯くまで識者に注目せらるゝに至つた事は雄辯に本書の價値を語るものです。

定價壹圓三十錢　送料十錢

東京本郷　大日本雄辯會講談社　振替東京三九三〇

(二A)

高木博士
藤井博士
實驗御推奬！

鼻病に

肥厚性鼻炎、急性鼻炎、蓄膿症等の

治療に素晴らしい効果のある理想的洗鼻器

フーピーは獨特の洗滌薬によつて手輕に鼻腔を洗滌し、消炎作用、殺菌作用が理想的に行はれますから急性鼻炎は二三日の使用で症狀が輕減し、肥厚性鼻炎も數日で快通し頭腦明快になり、判斷力記憶力がよくなります。

使用法は寫眞の通り簡單で子供にも婦人にも容易に使用出來ます。鼻病一切の治療に豫防に又鼻腔の衛生保健にゼヒ朝夕御使用下さい

フーピー

定價（一組）洗滌液共 一圓三十錢
送料 内地 十五錢 領土四十三錢
補給用洗滌液 定價五十錢
送料 内地 十錢 領土四十三錢
御注文は東京本郷大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六二九）へ。

どもり

吃音研究の大家上原博士が自分の頑固な吃りを直した經驗と學理とから器械よりも薬よりもつと手輕に自分だけでどもりの治る秘法をお知らせします。先生の言葉を信じ迷はずにまづ申込あれ。

内容見本御申込はハガキに住所氏名分り易く書いて御送り下さい

東京市小石川區丸山町六
東京雄辯指導會
電話大塚(86)一八六五番

いぼ・ほくろ
除去劑

ヒドロアミーン

みにくい、イボ、ホクロ、魚ノ目、タコ等は本劑で早速おとり下さい。「ヒドロアミーン」は劇薬類を一切含みませんから、誰方も安心して用ひられ、然も使用法は極て簡單で、とれた跡が傷にならず、極く少量の塗布で綺麗になります。定價一圓（送料内地十錢領土十四錢）

東京・本郷（振替東京六二九）
大日本雄辯會講談社代理部

滿洲事變－上海事變

新滿洲國寫眞大觀

見よ！平和の光輝く東洋の樂土、燦たる滿洲國の全貌！

凡ゆる妨害逆宣傳に屈せず、營々として建國の偉業完成を目指して邁進する三千萬民衆の意氣と努力、同時に、終始一貫友邦の爲めに多大の犧牲を惜しまなかつた皇軍の功績は永久に滿洲國建國史を飾る華である

本書は事變の當初より建國に至る迄の輝かしき皇軍の大活躍と、特記すべき上海市街戰の狀況等眼前に見る如く、滿蒙の風俗習慣、數十億の富源の寫眞記事滿載

軍事參議官陸軍大將金谷範三閣下曰く、『この寫眞大觀は、全般的には國民精神作興の上に價値ある著述である。即ち我が國民が大陸に發展する氣機に資する所が甚だ多い。またわが將兵の勞苦奮戰の狀況を、如實に物語つてゐることは、軍事知識の普及の上にも、利する所が尠くないと信ずる。自分は常に國防の根本は、國民精神の作興にありと、確信して居るが、この意味に於て、本書は、一般の人々に取つて大いに有益な書物である。』

陸海軍巨星、各方面の名士教育家擧つて推奬、眞に怒濤の如き大評判です！

壯麗なる豪華版で、而も空前の大廉價、原色口繪、色刷地圖折込大寫眞挿入

四六倍判・總クロース裝・函入特製美本・定價一圓五十錢（送料二十錢）

書店に品切の節は直接本社へ御注文下さい。

東京本郷 大日本雄辯會講談社編纂並に發行 （振替東京三九三〇）

お父さまの葉巻

メリー『ジョンそれなあに、タバコぢやないの』
ジョン『ウンお父さんの葉巻だけど、ちつともおいしくないや』

映畫になつた 晴 曇

毎號大好評を博してゐる本誌連載久米先生の『晴曇』が松竹蒲田の手で映畫化されました。諸君の紅涙をしぼらせた薄命の女性房子には田中絹代が扮し、熱俠兒辻村には岡譲二、諸君の尠からぬ反感を買つた幸子と黑田には栗島すみ子と大日方傳が夫々扮してゐる。傑作『晴曇』が名優の演技と相俟つて一段と映畫ファンの血を湧き立たせることでせう。

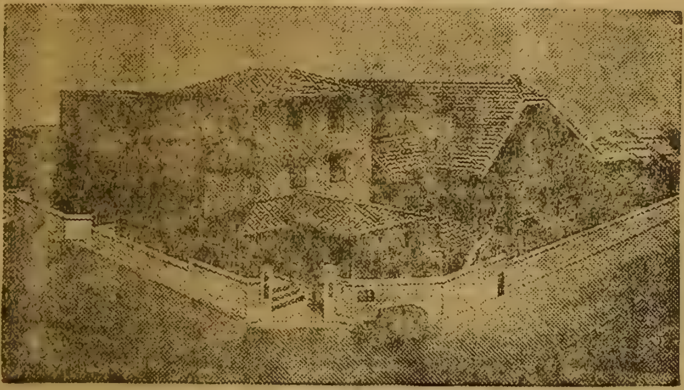
寫眞（上）岡譲二の辻村に田中絹代の房子（下）大日方傳の黑田に栗島すみ子の幸子

醫學博士六十餘名實驗證明推奨

男 生殖器弱小を强大に

短日の間に驚くべき發育
機能强健の物理療法器

現代醫學界の劃期的斬新なる**物理療法**の代表的發明品と云はれて海外にまでも名聲日に高き**専賣特許『ホリツク眞空水治器』**は、形は小さく輕便であるが、効力は非常に大きい、局部へ直接に、自分で輕便安全に祕密に、一日一回、一回僅かに五分間づつ使用すると、目前忽ち理學的眞空吸引力により局部へ血液を滿潮的に流集せしめ血肉細胞の活躍により神祕驚嘆すべきエンツンデユング作用を起し、一回毎に著るしく發育する寸法が本器のメートルへ數字的に實現し、同時に手淫、過淫の害、遺精、夢精、早漏、陰萎、〇起力減退、局部彎曲を回復して從來內服藥では數百圓の藥價を費しても効なかりし、生殖器の弱小を强大化し生殖腺ホルモンの內分泌を旺盛にし、腦力記憶力を增進して實驗界に好評湧くが如し、一生涯に青年時代は再び來らず、直ぐ實行せられよ。



內容外觀共に完備せる東京新療法研究所

生殖器短小に內服藥では發育せず
ホルモン劑でも內服ではダメ

近頃內服賣藥のみにて生殖器が長大に發育するが如き廣告をなす者あり、無責任なる賣藥業者の奸害に注意あれ。

包莖は無血無痛切らずに治る

包莖は從來手術して切取るより他に治療の仕方がなかつたが、**専賣特許ホリツク包莖安全器**で短期間に無血無痛人にも知られず、絶對安全に整形となる、包莖は淋病梅毒に感染し易く不潔で大害あれば速かに本器で根治せられよ。

専賣特許登錄商標

◇**ホリツク眞空水治器** 金四圓五十錢

◇**ホリツク包莖安全器** 金三圓五十錢

送料 內地二十一錢、臺、樺、鮮、滿、五十錢

代金引換十五錢增、治療器名並に代引と詳記の事

◇**生殖機能强精內服劑ポルチヨン**

半月分金三圓廿錢 一月分金六圓 送料各十五錢

無代進呈 非賣品 **圖入說明書** 實驗例付

（內容）性の新知識と告白文、ハガキで申込次第個人名義で祕密に送る

東京市芝區神谷町西の十八
電話 芝三一三一
振替東京七七三九
東京 新療法研究所

大阪市北區堂ビル西の四階
電話 北八二六八
振替大阪五七九九
東京 新療法研究所 大阪支部

流行新型 夏の子供服婦人服

第一附録

今夏流行の新型一切を發表した大全集！

明るくてスッキリとした最新流行型ばかり六十種を發表、目も覺めるやうな極彩色の畫報だけでも三十頁もあり、型紙と新考案の巻尺つきですから誰にも出來るので大評判！

今迄にない 婦人

① 夏の子供服婦人服の作り方

作り方は『婦人倶樂部』獨特の正確さで、子供物から女學生婦人物まで、全部親切丁寧な圖解と說明つきですから、始めての方にも造作なく出來ます、どうぞ御自由に選んでお仕立て下さいませ。

② 夏の子供服婦人服型紙六十種

③ 巻尺兼用 新案洋服型紙擴大器

可愛らしい赤ちやん物から御婦人物まで、全部で六十種の型紙を特に初心者に分り易くする爲に、いちいち基礎縫ひから敎へてありますので、之に新考案の巻尺を當てゝ縫へば誰方にも完全に出來ます。

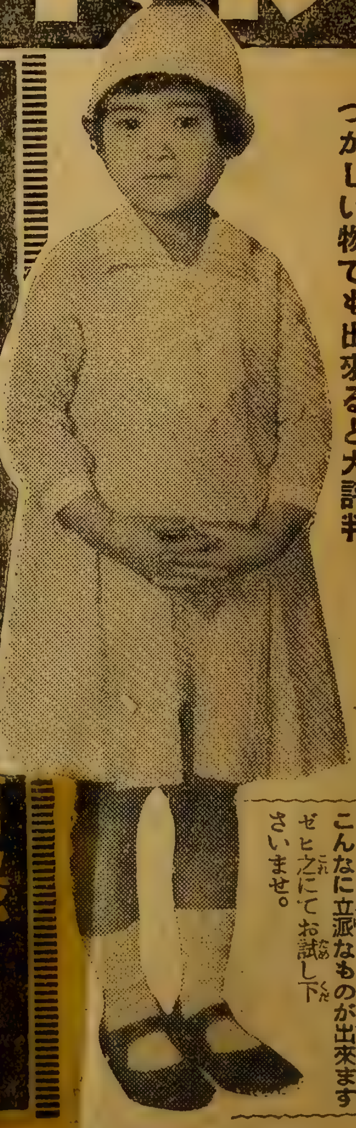
新案大附録と大懸賞つき！

倶樂部

六月號

十五日發賣

『婦人倶樂部』編輯局で永い間苦心研究して考案し、特許出願中である、他には絕對にない型紙の擴大器です、之さへあれば便利重寶、どんなむづかしい物でも出來ると大評判、



こんなに立派なものが出來ますぜヒ之にてお試し下さいませ。

第二附録

お子様へのお土産附録

漫畫繪本

凸凹黑兵衛

日本中の坊ちゃん嬢ちゃん方をヤンヤと熱狂させてゐる田河水泡先生が執筆された面白くて堪らない大評判の色刷漫畫繪本、ぜヒお子様にお與へ下さい。

尚、婦人倶樂部六月號には**重要記事**、**畫報**、**小說等澤山**、全國婦人間に大評判！富士愛讀者の御家庭ではぜヒ御覽下さい！

十五日發賣で賣切れの恐れがあります今スグ近所の書店にお申込み下さい

定價六十錢 送料十一錢五厘

東京本郷（振替東京三二九二〇）**大日本雄辯會講談社**

忽ち百版突破

われ等の陸海軍

聯盟脫退！愈々重大な我國防!!

南洋諸島は何うなる？ 滿洲は何うなる？ 眞に一刻の油斷も出來ぬ時、

もし戰爭が開始されたら!!

全國民悉く日本の實力を知れ

日本の現兵力はどれだけか。わが陸海軍は如何に戰ふか。何が最も活躍の花形か。如何なる武器があつて如何なる威力を發揮するか。わが國防に遺憾の點なきか。國軍の組織はどうか。なぜ諸外國が怖れるか。世界の軍備は今どうなつてゐるか。日本の假想二大敵國は如何なる準備をしてゐるか等々、日本國民たるもの一日たりとも忽せに出來ぬ問題は餘りにも多い。それら刻々に重大化する現下のわが國防の第一線に起つ皇軍の凡ゆる知識を、もつとも感激的に詳さに描きつくした名著こそ本書である。本邦隨一の軍事通たる著者の、言々愛國の熱血よりなる卓拔の識見と警告、眞に全國民を奮起させずにおかず、驚異的大好評!!

青少年諸君は勿論
全同胞の熱讀を切望す

興味津々、日本の強さが判然分る!!

平田晋策先生著

寫眞三百餘枚色刷多數
菊判 本文全部オフセット印刷

定價一圓三十錢 (送料十四錢)

全國の書店にあり

東京本郷（振替東京三九三〇）
大日本雄辯會講談社

富士グラフ

青空高く

畑　喜代司

陽光みなぎる空高く
乙女ごころの血は躍る
香り清しき緑の丘に
伸びる力よ青春よ。

翼かろがろ空高く
消ゆる小禽の影ひとつ
夢も陽炎ふ緑の丘に
伸びる力よ憧憬よ。

遥か希望の空高く
思ひ一すぢ身がしまる
素足冷たき緑の丘に
伸びる力よ感激よ。

新家庭カメラ訪問

作曲家古賀政男氏

新宿から小田急で五分、上原の靜かな文化住宅に、古賀氏の樂しい新家庭を突然訪れて玄關のベルを押すと、其瞬間、奥の方から美しい聲が聞えて來た。ハテ？　レコードか？と思つたが、案内されてみると左に非ず、御兩人お揃ひで睦まじいところ。奥さんが唄つて、夫君がギタアを彈いてゐる。今評判の作曲家古賀氏と、聲樂家中村千代子さんと、誠にお羨しい御似合の御夫婦だ。

『奥さんは作曲の御手傳でもなさるんですか？』

出し拔けの質問に對して、

『い、や、仕事中は絶對に近づけないんです。今一曲出來上つたものですから、その下しらべをしてゐた處です。』

主人の代辯中々意味深、そこを早くもカメラにをさめると、

『これぢや、まるで共稼ぎ風景ね』と云ふ奥さんの聲は一段と朗なものでした。

小說家北村小松氏

脚本家として小説家として、そして又豆自動車の愛用者として、も一つ愛妻家として、等々……。北村小松氏の名は餘りにも有名である。新婚の夢圓らかな、その新居を訪れると、門前にいと愛らしい豆自動車が横付けになつてゐる。ハハーン、外出の御用意だな。總てをのみ込んで來意を告げると、小松氏先づ笑ひ乍ら、朗に語り出す。

『ナニ？自動車の値段ですつて……。嚴しい御詮議ですな、千四百圓ですよ』

『毎日乘り廻すんですか？』

『雨でも降らない限りはね……』その時つゝましく控へて微笑んでゐた靜江夫人『近所へ行くにもこれに乘るんですよ。此の間なんか朝起き抜けに、どてらで銀座まで行つて來たんです。本當に困りますわ……』

『おい〳〵、餘りあけすけに言ふもんぢやないぜ』小松氏はちらと新夫人をにらんで又笑つた。

舞踊家　花柳壽二郎氏

『やー新家庭訪問ですつて……。どうも恐れ入りましたね、實は今起きたところなんで……。』

ニッコリした花柳氏は、そのまゝ奥へ引つこんだが、暫らくしてすつかり瀟洒な洋服姿になつて現れた。手にグロテスクなお面を持つてゐる。流石は假面舞踊の第一人者だけあるな――と感心する。それを先づピアノの上にのせて、さてお二人が、すつかりおすましになつたところが此の寫眞。夫人が聲樂家幕田しな子さんで、御主人が評判の舞踊の先生、なんと御似合の御夫婦ではありませんか。

『隨分グロテスクなお面ですね』

『あゝ、これ惡魔のほゝゑみと云ふ奴です、ははは……』

御主人の笑聲に相和して、奥さんも叉つつましく笑ふ。笑ひと笑ひ、惡魔の面など此の場合全く必要の無い、和やかな新家庭氣分です。

嘗て球界の花形
苅田久德氏

嘗て法政大學野球部の名ショートとしてその名を謳はれた苅田久德君は、卒業と共に內外二つの喜こびに惠まれた。外には難かしい就職戰線を見事突破して、放送局に職を得、內には美しい夫人を迎へて、樂しいスヰート・ホーム。正に惠まれたる若人の春ではある。

春秋のシーズンに、苅田君が、あの颯爽としたユニホーム姿を、神宮球場に現す時は、必ず秘かに聲援を送る一麗人があつた。それが今の夫人富江さんであるとは、知る人ぞ知る華やかな球界ロマンスの主達である。

お二人の仲の良さは又格別。スポーツマンの友人達も、時々當てられるさうだ。

『君が腰かけて、僕が立たう……』寫眞器を前にして、夫人をいたはる心のやさしさ。流石は名ショート、動作の敏捷さ、素早くポーズを作る。

『新家庭の御感想は？』

『さ、別に……』御兩人たゞニッコリ

外國新進

パラマウントの新進花形サリイ・コリツアは、第一回主演『忘られた戒律』（未輸入）『未亡人倶樂部』その他で評判となつた。

曾ては歐洲のステーヂに於て、盛んに活躍した女性である。父は英國人で母が伊太利人、一九一一年天津に生れたが、驚く事には五ケ國語を上手に話すし、大の女流スポーツマンで特にスケートは選手權を持つてゐると言ふ。やがて彼女の作品が、ファンの胸を躍らせる事だらう。

映画スター

一九三二年度に、ユニヴァーサル社で發見した新進評判女優、グローリヤ・スチュアートです。オキャンなアメリカ女性らしからぬ淑やかさと、つゝましさの風貌を持ち、さうした役柄を認められて早くも『大空の闘士』及び『全米軍』などの大作に主演し、更にその將來を期待されて居ります。年は二十三歳で未だ獨身

入江プロ特作文藝映畫
溝口健二監督作品
『瀧の白絲』
寫眞は瀧の白絲に扮せる入江たか子

芝居と映畫

日活特作『未來花』
牛原虛彥歸朝第一回作品
寫眞は田村道美の三宅友造と夏川靜江の千夜子
（主題歌——キングレコード吹込）

▲上
歌舞伎座四月興行
「助六由縁の江戸桜」
向って右より實川延若のひげの意休
尾上菊五郎の三浦屋揚巻
松本幸四郎の花川戸助六

▶
新興キネマ特作・田中重雄監督
「青島から来た女」
寫眞は河津清三郎の山口と水原玲子の青島から来た女　及び小宮一晃の稲員牧

▲上
東京劇場四月興行
「修禪寺物語」
市川左團次の扮せる面作師夜叉王と中村時蔵の扮せる妹娘楓

少女の皆様方大喜び！

少女倶樂部六月號は―

思ひ切った大奮發

下の寫眞を御覽下さい！
二人の少女が漫畫を切拔いて、貼って
ゐます。この面白い本が附錄につくのです。

大附錄 漫畫はりゑブック

今迄どこにも賣ってゐない珍しい大附錄

▲美しい色で印刷された、面白い漫畫を切取って
これを本の上へ貼ってゆくのです。

▲少女の皆様がお喜びになる『桃太郎遠征記』
や『スタコラサッチャン』などの、面白い場面が
出來上りますから、トテモすてきです。

はりゑブック
に出て來る漫
畫の場面は？

◆田河水泡先生作『スタコラサッチャン』
◆田河水泡先生作『桃太郎遠征記』
◆廣瀨貫川先生作『ミッキー鼠』
◆廣瀨貫川先生作『チャップリン』
◆大藤信郎先生作『千代紙漫畫人形』
◆河盛久夫先生作『童謠漫畫』

など、とても面白い場面ばかりで、誰でも夢中になる程、美しく愉快な大附録です。この附録を作ると手工が上手になると先生方がおほめになつてゐます。

全く珍しい爲になる大附録です

大附録つき 少女倶樂部 六月號

尙、『少女倶樂部』六月號には

◆**愛國歌グラフ** 勇ましい童謠や軍歌に美しい寫眞、心躍る愛國歌
◆**裏南洋のお話** 日本で統治してゐる南洋諸島の珍しい話の大特輯
◆**コッケイクラブ** 小學校や女學校の面白いお話が澤山！トテモ愉快
◆**おもしろ繪本** 美しい色刷の面白い漫畫が一ぱい！誰方も大笑

など、始からおしまひまで大讀物揃ひ

六月號は五月九日發賣
賣切れぬ中、早くお求め下さい

附錄がついても平月號通り五十錢です

東京本郷駒込坂下町四八 **大日本雄辯會講談社** （振替口座東京三九三〇）

ルーズ

大江專先生著

大好評！大増刷出來！

見よ！非常時世界に躍る大惑星！
富强大アメリカ新大統領の全貌！

就任早々勃發した財界大恐慌を一氣に解決し、愈々世界不景氣打解に邁進する彼、世界經濟界の癌といはるゝ戰債問題、關稅問題の解決に果して如何なる成算ありや？日本の聯盟脫退を契機として起つた武器禁輸、經濟封鎖、國際聯盟の諸問題に對する態度は果して如何

彼の動向こそ全世界注目の的！

北歐ノルマン人の烈々たる血を享けた彼は、海上生活を熱望し海軍士官たらんとして果さず、遂に政界に入り、若くして紐育州上院議員、海軍次官となつたが、彼は直ちに海軍大擴張を斷行して米國海軍の基礎を確立し、世界大戰に參加するや、海戰史上未曾有の北海大封鎖を敢行して世界を驚倒させた。爾來十有二年政治上經濟上、幾多秕政の中に混亂せる米國に敢然理想政治を標榜して蹶起した颯爽たる彼こそ人間壯觀の極みである。

これぞ讀書界を風靡した問題の名傳記

(御申越次第圖書目錄進呈)

ベルト

眞に波瀾萬丈、感激全卷に横溢！

見よ！　血沸き肉躍り萬人感奮興起するこの大内容

（内容の一部）

▲鵬程一萬五千浬
▲ルーズベルト家
▲デイラノ家の血
▲母の念願
▲自然を愛する少年
▲魚釣競爭
▲密偵と間違へらる
▲兵學校入學を斷念
▲キューバ遠征の夢
▲ハーヴアード大學
▲東郷大將と瓜生中將
▲最年少の上院議員
▲正義の少數派
▲凱歌は擧る
▲ウイルソンを知る
▲奇計の成功
▲私は海軍狂です
▲水兵の溺死
▲アメリカ海軍
▲世界大戰
▲大海軍擴張案
▲宣戰布告
▲旅順口閉塞の故智
▲前代未聞の壯擧
▲非常時の決心
▲海上の悲喜劇
▲四面楚歌
▲勞働者の友
▲人生意氣に感ず
▲再起不可能の診斷
▲悲痛な覺悟
▲闘病法の秘訣
▲野黨の悩み
▲危機を救つた電話
▲血を湧かす總選擧
▲掉尾の獅子吼

海軍大佐關根郡平氏曰く、大江君のルーズベルト傳は非常に面白い、單に米國の非常時大統領フランクリン・ルーズベルト氏の傳記として興味津々たるものがある許りでなく、過去數十年に亙る米國の發展史としても極めて貴重なものである。今や滿洲問題に關聯して日米關係は緊張してゐるが吾人は新大統領が必ずや其の好轉に努力せられるであらうと信ずるものである。果してさうなつたならば大江君の快著は日米親善の記念出版となるであらう。此の意味に於ても本著は此の際日本國民の一讀に値する。

あらゆる方面に於て日米兩國の關係愈々緊密を加ふるの秋、世論はこの『ルーズベルト』を繞つて眞に沸然として湧き返つて居る！　讀め、之こそ全國民必讀の大快著！

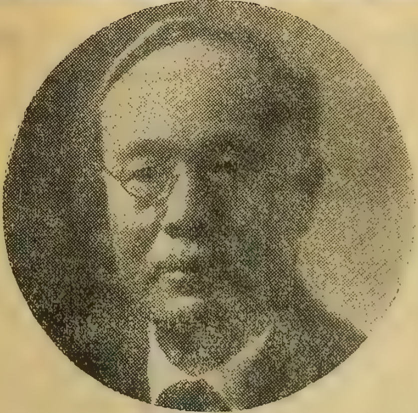
四六判四百餘頁定價一圓三十錢（送料十二錢）全國の書店にあり　東京本郷　大日本雄辯會講談社發行（振替東京三九三〇）

武藤山

初版忽ち賣切れ!!増刷又増刷!!

俄然讀書界を壓倒する大評判!

銀行、會社、工場員を始め實業家は勿論、青年、學生、軍人、教育家等各方面より引張り凧の大盛況!! これに勝る良書なし! と到る處素晴しい賞讃!! 全國から續々と來る感謝の書狀は山と積まれ、讀者の感激今や絶頂に達す!



著者武藤山治先生は一介の苦學生から身を起して、遂に鐘紡の社長となり、鐘紡をして日本有數の大會社にまで築き上げた育ての親である。今は又時事新報社の經營一切を引受けて操觚界に大活躍を續けて居られることは萬人周知の事實だ。先生こそ實に刻苦艱難、血と涙と汗とを以て今日を築き上げた立志傳中の人物である。

而も先生の胸中には、常に一貫して流れる大信念がある。微塵も私心のない事業中心の熱情がある。これが延いては國を思ひ世を愛ふる大抱負となり、又廣く古今の書物を漁り東西の實情を觀察して、世を警め人を訓ふる大見識を備へられるに到つたのである。本書がかくも全國の人氣を沸き立たせた所以を思ふ時吾々は唯々敬服の外はない。

悉く感銘深い大文字!! 讀めば讀む程味の出る人生讀本!

流石は腕一本脛一本から叩き上げた苦勞人の著者が、日本の全同胞と膝つき合せて共に人生を語り、天下國家を論じようといふのが本書だ。だからその一言一句が吾々の胸にピンと應へて、思はず胸の高鳴るのを覺える。例

(御申越次第圖書目錄進呈)

治百話

を廣く東西古今にとり、思ひを縦横無盡に馳せて、成程世の中はかうしたものか、これが處世の根本であり、事業のこつであると、實に愉快な氣持で讀み耽り知らず識らず成功の秘訣を覚り、品性を向上することが出來る。誰でも一度讀み始めたら面白くて止められない素晴らしい快著だ。

見よ!!讀んで痛快!味つて爲になる此内容!!

内容の一部

○人生の競馬場
○人生幸福の二面觀
○八尺男の悩み
○闇から光へ
○三十年目に集つた二十三人
○我子を忘れたる女
○生みの親より育ての親
○二重人格の戰ひ
○古い諺の中に眞理がある
○勞働の理想
○我國の要する政治家
○『議會政治』に改革の氣運
○米國州會に於ける祈禱
○アインシュタイン博士の憤慨
○軍人と政治
○米國政界秘話
○越中守と蕎麥屋の問答
○政の要道はどこにあるか
○大阪の中央公會堂
○市と市との交誼
○取らんとせば先づ與へよ
○農村生活と都會生活
○赤化思想と青年教育
○公共道德の必要
○金持と政治
○人類は貧困なる必要なし
○中小商工業者を救へ
○農村と町との經濟關係
○英國家庭豫算會議の一例
○金儲けの秘訣
○世界不況恢復策
○市政の改革と實業家の力
○社會より見たる新聞の使命
○讀書の經濟化
○發明家の受難
○財産よりも腕
○如何なる所にも成功の途はある
○エヂソン座右の銘
○人を動かすものは眞心である

何處を見ても肩の凝らない素敵な話! 解り易く面白くて實力を養ひ立身成功の基を會得出來る未曾有の快著!

是こそ誰にでも喜ばれる萬人向きの良書!未だ讀まぬ方は早速御覧下さい。

武藤山治先生著　定價 一圓三十錢・送料 十錢

—全國書店にて販賣—

東京本郷 大日本雄辯會講談社發行（振替東京三九三〇）

小島政二郎先生會心の大傑作!!

新版義士銘々傳

讀書界人氣の焦點!

白熱的大歡迎! 破天荒の賣行!

我が文壇随一の講談通たる小島政二郎先生が、渾身の努力を傾けて完成された昭和出版界稀有の大讀物! 従來の義士傳とは全然その趣を異にし、血を通はせ肉をつけ、生きた人間としての義士の面目を遺憾なく發揮す。

見よ!この颯爽たる筆力!これ程豪壮雄大を極めた新味ある義士傳は無い、息づまる面白さにさすが講談通の大文豪と讀む人悉く感嘆せざるなし。

「金さん、済みません、帯を直す間ちよつとこの子を抱いてゝ。」子供を膝に抱き取つた金右衛門なぜかあからんだ顔を伏せたものゝ、綾の袂をハラリと返してお太鼓を撫でさすつてゐるお艶の、海棠の雨に濡れた風情とも云ふべき凄艶な魅力に、流石の金右衛門も頭の尖から足の爪尖までくすぐられるやうな戰慄を感じた。
（仇、吉良家の繪圖面を覗ふ岡野金右衛門苦心の一節）

定價壹圓六十錢

四六判美本（送料十四錢）

賣れる〳〵重版又重版の大盛況!!

●只今増刷出來! 即刻お求め下さい。

發行所 東京・本郷 大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）

御申込次第圖書目録贈呈

評判画報

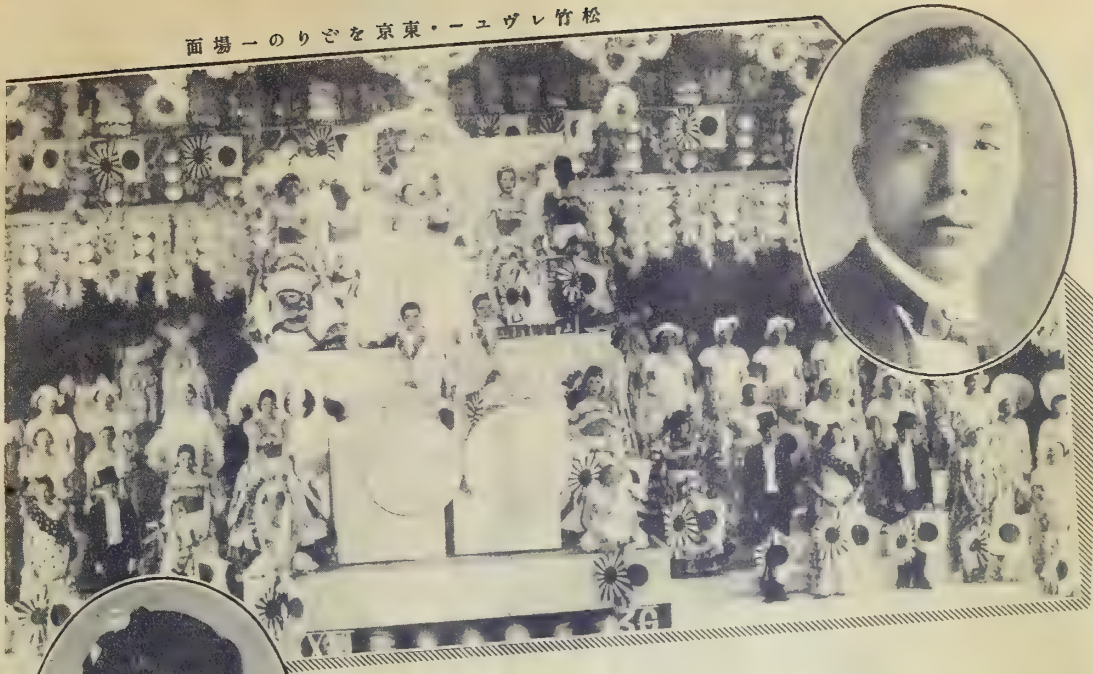
6月

人の花環

おや、おやこれは素敵だぞ
向日葵、ダリア、サイネリヤ
どんな花でもかなはない
美人の花が咲きました。
花が女性か、女性が花か
奇麗だ、無邪氣だ、朗らかだ
色も香もあるさかり花
輝やく初夏の陽を浴びて
パツト開いた麗はしさ……。

（この寫眞は、米國トレド舞踏研究所のダンサー達が作つた、人花の圓陣です。）

松竹レヴュー・東京をどりの一場面



大谷竹次郎氏

東の大谷竹次郎氏と西の小林一三氏とは、吾國興行界の兩横綱である。この御兩氏の指揮下にある松竹少女歌劇と、寶塚少女歌劇とは、必然的に物凄い競爭を演じてゐるわけだ。前者が潑溂とした若人の意氣に燃えて、清新な舞臺面を示せば、後者はすでに老練の演技を示して、その何れにもファンの血を沸かす百パーセントの魅力がある。

而も寶塚は、近く東京にその劇場までも作らうとしてゐる矢先だけに、此の四月、月組の天津乙女、草笛美子等々花形を送つて、東都の舞臺を花々しく飾つた。これに對して、松竹歌劇は、水の江瀧子、吉川秀子を先頭に、堂々たる陣容をかためての熱演、この兩者の健闘は、いやが上にも滿都の人氣を湧き立たした。

水の江瀧子

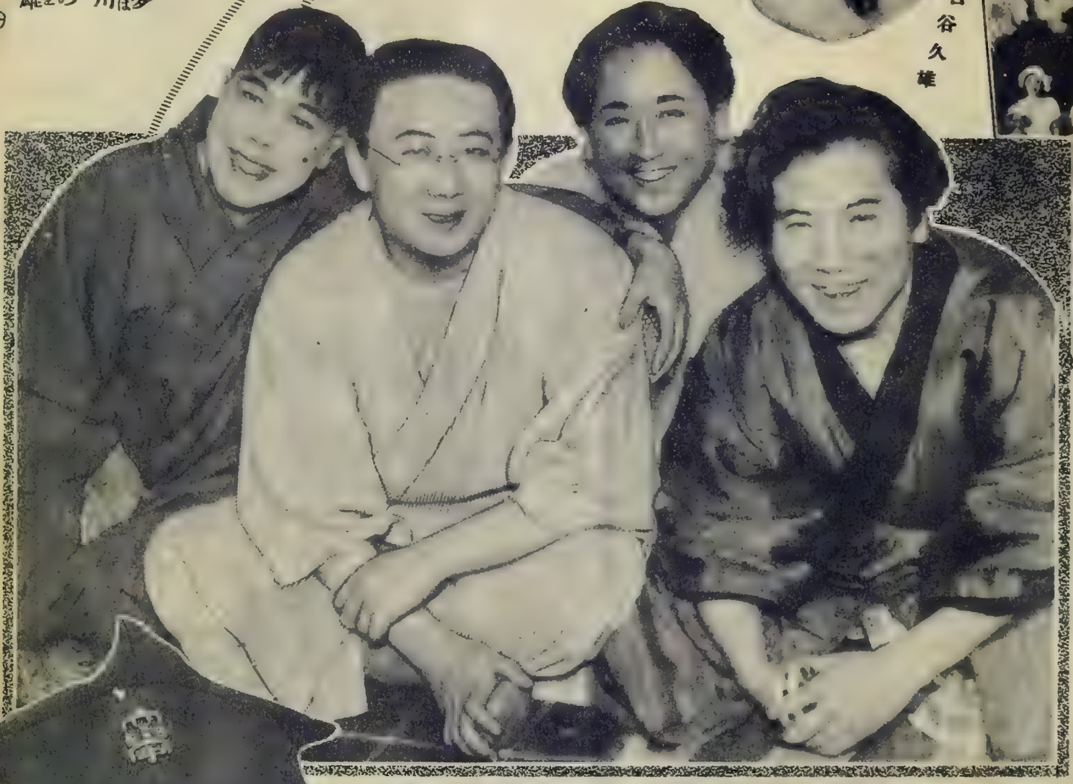
天津乙女

小林一三氏

寶塚歌劇ー巴里ーニューヨークの一場面

これは淺草金龍館の『笑ひの王國』で、朗かに春の笑ひを投げ與へた人々です。漫談家の徳川夢聲、大辻司郎、山野一郎、古川綠波、喜劇俳優ではお馴染の横尾泥海男、渡邊篤、吉谷久雄、

吉谷久雄



寫眞向って左より、大辻司郎・古川綠波・山野一郎・徳川夢聲

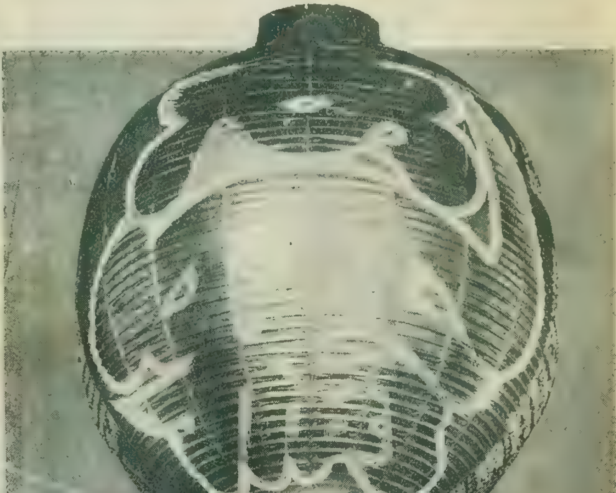
渡邊篤

横尾泥海男

關時男

關時男、それに小杉勇、瀧花久子、濱口富士子その他の面々がズラリと顔を揃へてゐる。名前を聞いただけでも笑ひがこみ上げて來ると言ふもの。『笑ひの王國』——成程とうなづける。

← 二千五百年の老つゝじ—近頃栃木縣下都賀郡の田村音治氏から、明治神宮に獻木した大つゝじは、齢二千五百年の老樹で、その昔皆川城主山城守が、俵藤太に亡ぼされた後、皆川の家臣横田監物が愛育したもので、高さ一丈六尺、幅二丈五尺、根廻り四尺あると云ふ。



二人加藤榮助—この春行はれた東京市會議員の選擧に、同姓同名の加藤榮助氏が、區を異にして二人とも當選し、市會事務局は勿論、議員同志でも、人違ひの喜劇が續出して話題を賑はした。寫眞向つて右、淺草區選出(民政)の加藤氏、四十七歲。左、目黑區選出(政友)の加藤氏、四十八歲。↓

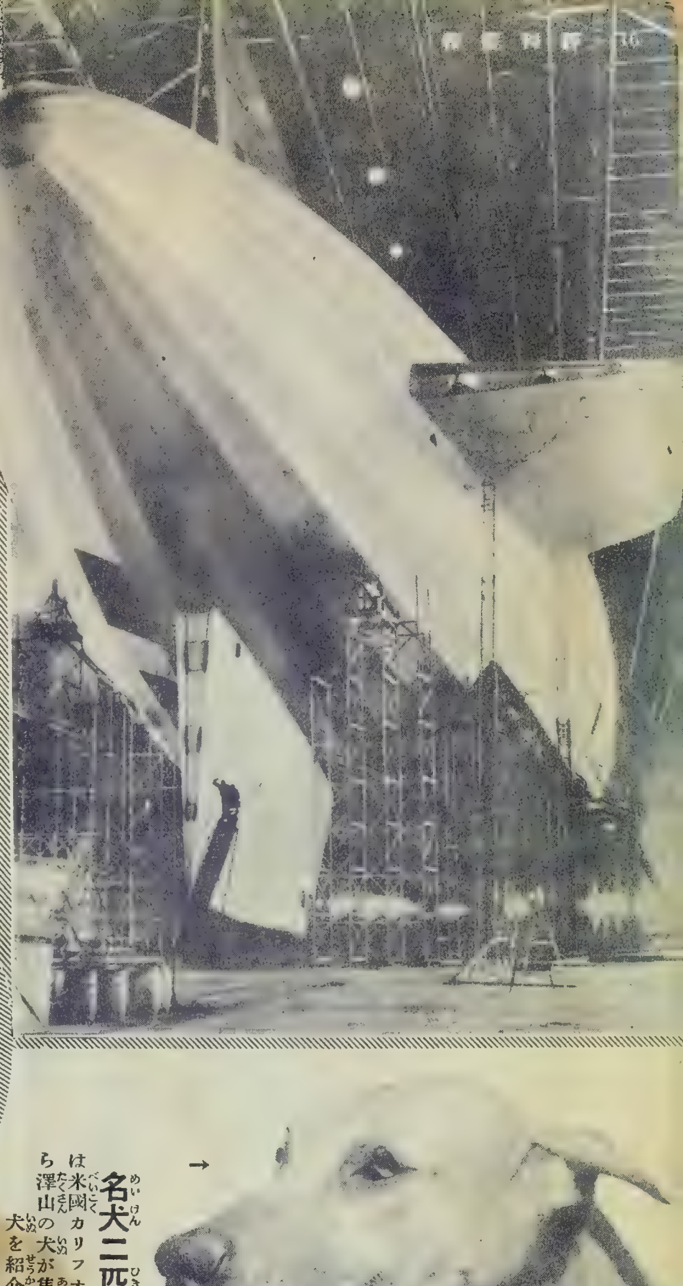
↑ 日本一の大鳥居—四月上旬に出來上つた靖國神社の大鳥居は、花崗石の鳥居では正に日本一。兩柱の高さ三丈四尺、直徑三尺七寸、重量一萬一千貫、笠の長さ四丈六尺三寸、用材獻納者は岡山縣人天野忠八氏、これに要した運搬費用は七萬圓で、支出者は長野縣の片倉氏一族である。

↖ 日本一の大提灯—これは、この程淺草觀音樣の本堂へ、新橋三業組合、同藝妓組合から獻納されたもので、長さ三間半、價格千五百圓だと言ふ。

趣味の麗人―武者小路實篤氏の「新らしき村演劇部」第六回公演に、新しいメンバーの一人として、楠田るい子と言ふ麗人が評判をとつてゐる。楠田るい子こと、實は春陽會の重鎭であつた故岸田劉生畫伯の令孃麗子さん(二十歳)である。お祖父さんに岸田吟香氏を、叔父さんに岸田辰彌氏を持つ麗子さんは、幼時から舞臺が大好きで梅原龍三郎畫伯の推薦で、遂に趣味の向上を計ることになつたのだ。繪のお上手なことは言ふまでも無く、國畫展などには何回も當選してゐると言ふ天才ぶりでちる。←

孔雀が女優に―松竹で今賣出しの女優坪内美子は、つい最近まで銀座パレスで孔雀と名乘つた女給だつたが、その美貌を見出されて、松竹蒲田撮影所に入るや、涙の渡り鳥及び島の娘に主演して、忽ち人氣者になつてしまつた。數多い新人中に於ても、特に一九三三年度の活躍を期待される一人である。→

丸の内賴助君―お手數を煩はして相濟みませんが、此の赤兒を淺草石濱町の同情園坂卷てる子様まで御屆け下さい―。斯う書いた手紙と共に、過日熱海發東京着列車の中に、可愛らしい捨子があつた。丸の内署から依賴され、同情園で救助したので、其の名も丸の内賴助として一家創立。ところでこの名前は大へん考へたわけで他日生みの親が、吾子を探し求める時の手がかりにならうと言ふのだ。切に賴助君の成長を祈り度い。(寫眞は坂卷てる子さんに抱かれた賴助君)←



空の巨人メーコン號——

世界一を誇つたアメリカの大飛行船アクロン號も、墜落の慘事に遭つたが、その直前寫眞の如き姉妹船メーコン號が出來ました。名付親は、アクロン號と運命を共にした海軍少将モフェット氏の夫人ださうです。有名なツエッペリンより遙かに大きいもので、その長さ實に七百八十五呎である。

世界最大の刀——

長さ八尺の日本刀！これが何事にも世界第一を喜ぶ米人の手に入つて、『これこそ全世界NO・1の刀劍だ』と珍重措く能はず、今ワシントン市の國立博物館に幅を利かしてゐる。この業物は四百年前の作で、八幡大菩薩の守刀として某神社に珍藏されてゐたものがいつか彼の

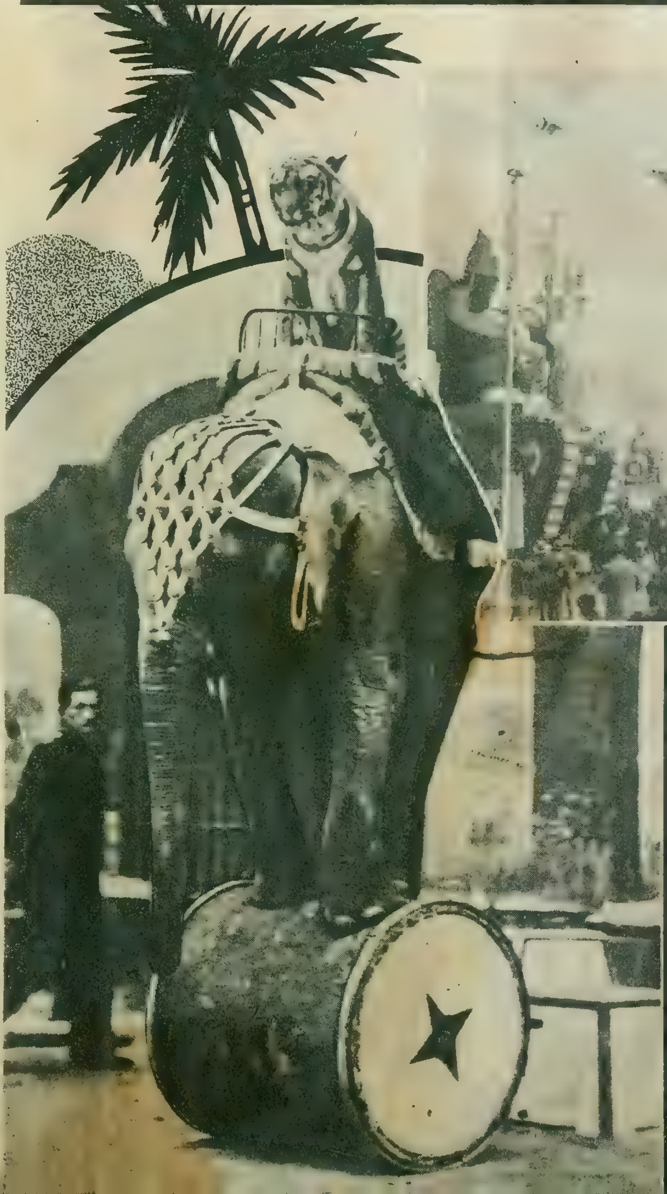
名犬二匹——

親だ、仔だといひたいところですが、これは米國カリフォルニア州パサデナ畜犬大博覧會に、各方面から澤山の犬が集まりました。そのときに最大の犬が、最小の犬を紹介してゐる處で、やんやの大喝采を博したものです。

地に渡つたものだといふ。

猛獸を眠らせる男——印度の修驗者ブラーカマン氏は、その驚くべき催眠術的な意志力に依つて、猛獸を眠らせます。寫眞は最近伯林のサーカス團に出演して恐ろしいライオンの檻の中で實演をしてゐるブラーカマン氏です。間違つたら大變命がないと云ふ冒險です。↑

二喜劇役者——これは三歳の坊ちやんスパンキイ君と愛嬌者の大猿ジッグス君で大の仲よし。彼等は今度相談して『若者とらんぷ』と云ふ素的なトーキーを完成しました。この新映畫も間もなく日本に來ることでせうが、片や老猩々、片や坊やの新取組はどんなに滑稽なことでせう。見逃せないもの〻一つ。←



花時を迎へた萬國婦人子供博覽會は、非常時も何のそので、帝都の人氣を一人じめにしてゐるやうな賑ひを呈してゐる。その中でも有名な獨逸ハーゲンベツク大サーカス團などの評判は大したもので、寫眞上は虎の曲藝、下は同じく虎と象の藝當で、流石に猛獸の見事な訓練振りには驚嘆の外なしです。中央は芝浦會場のスナツプ。

富士漫畫大笑館

せとばん畫

前川千帆畫

デカこ

連載

皆さんお馴染の横尾泥海男君とキウリ事吉谷久雄君が本號からお目見得することになりました。何分よろしく。二人はトテモ仲良しなんですが時々。

キウリ

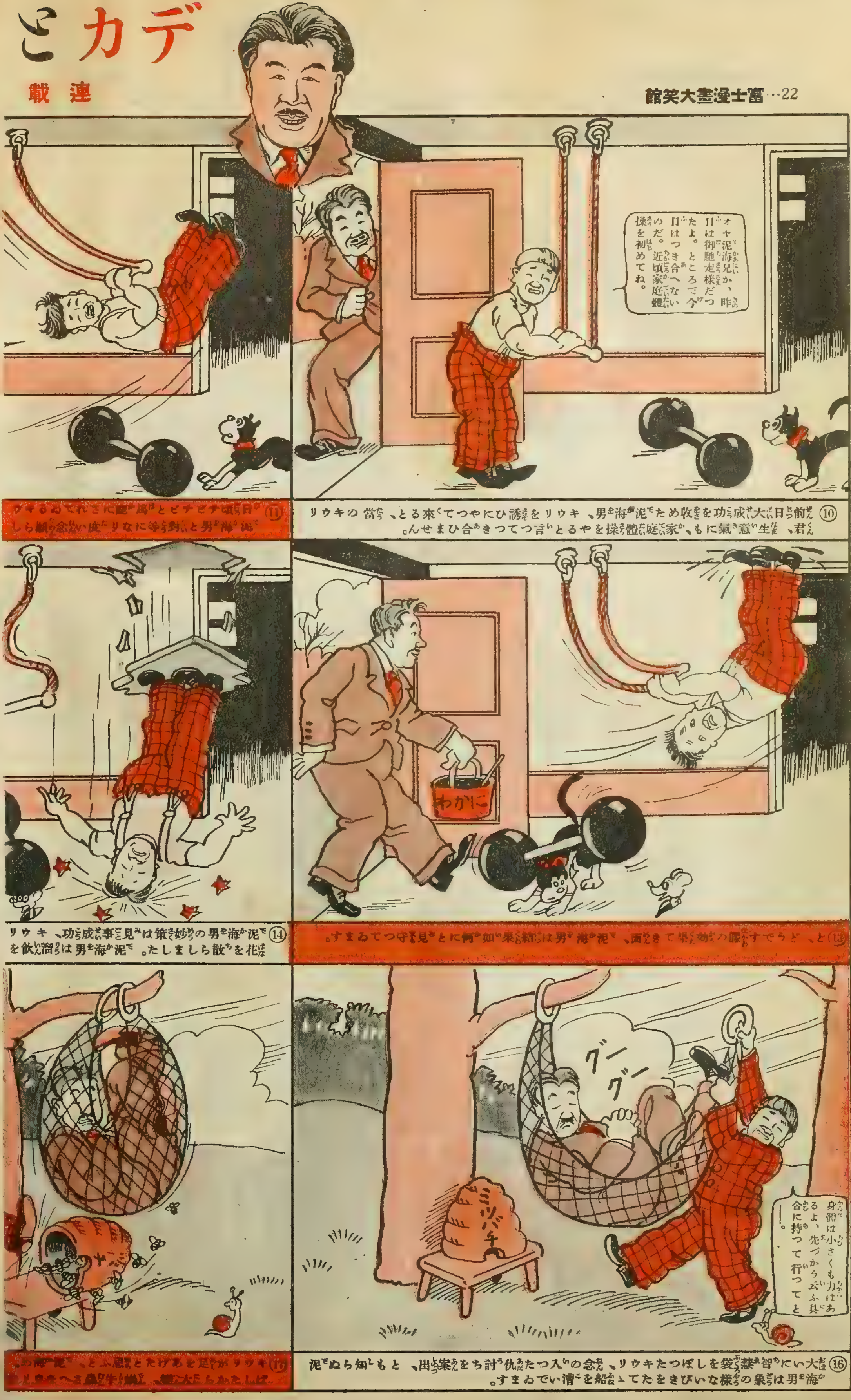
漫畫劇

喧嘩をやります、やり込めたりやりこめられたり各々奇策縦横祕術を盡しての大活躍。どうか畫面について御覽下さい。

繪・新關青花

デカと

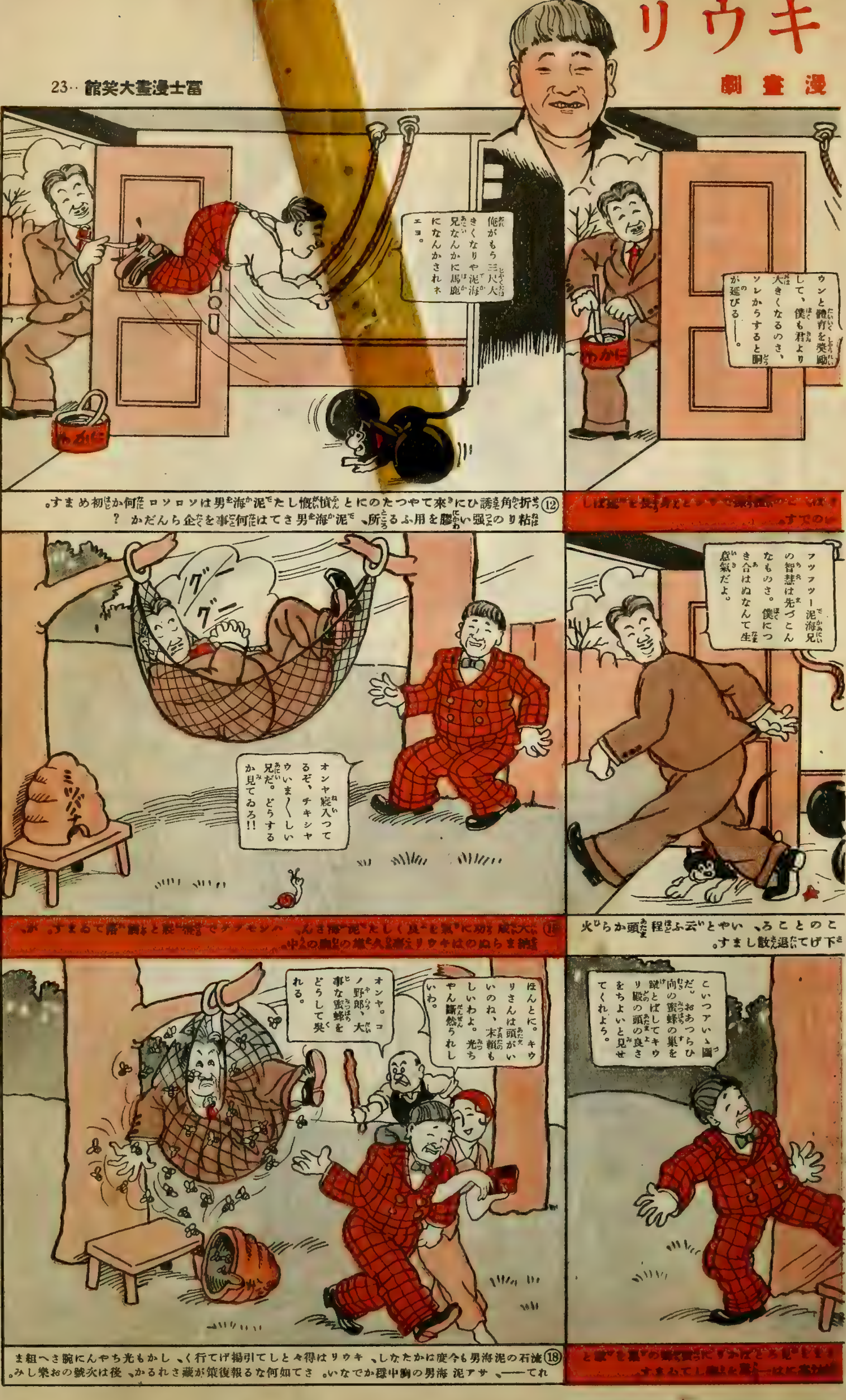
連載


オヤ泥海兄か、昨日は御馳走様だつたよ。ところで今日はつき合へないのだ。近頃家庭體操を初めてね。
⑩ 前日大成功を收めた泥海男、キウリを誘ひにやつて來ると、當のキウリ君、生意氣にも、家庭體操をやると言つてつき合ひません。
⑪ 日頃チビチビと馬鹿にされておるキウリ 泥海男と對等になり度い念願らし
わかに
⑬ と、どうです腕の効果てき面、泥海男は約束如何にと見守つてゐます。
⑭ 泥海男の妙策は見事成功、キウリ花を散らしました。泥海男は溜飲を
グーグー
ミツバチ
身體は小さくも力はあるよ、先づから云ふ具合に持つて行つてと――。
⑯ 大いに智慧袋をしぼつたキウリ、念の入つた仇討ち案を出し、とも知らぬ泥海男は象の様ないびきをたてゝ船を漕いでゐます。
⑰ キウリが足をあげたと思ふと、泥海男

キウリ

漫畫劇

◎泥海君もキウリ君も、來月は又一段と念の入つた脱線をやるさうです。お馴染の高尾光ちやんがチラリと顔出しをするのも愉快です。どうぞ次號を



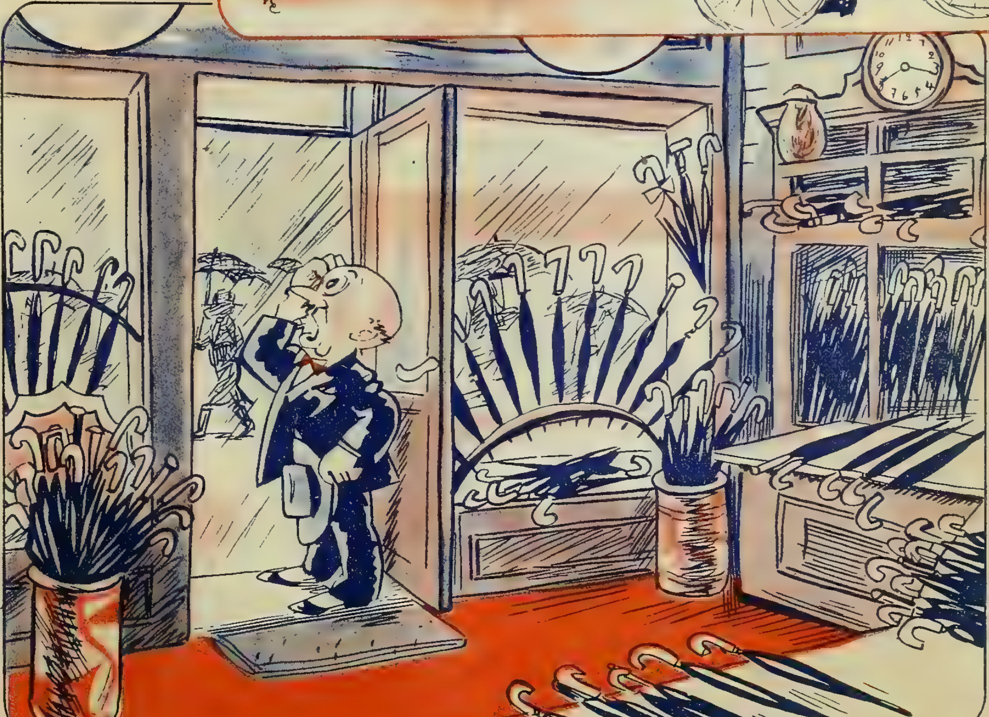
繪・川原くにを

至急電報→

電報配達夫に至急電報が來ました。

どちらが？←

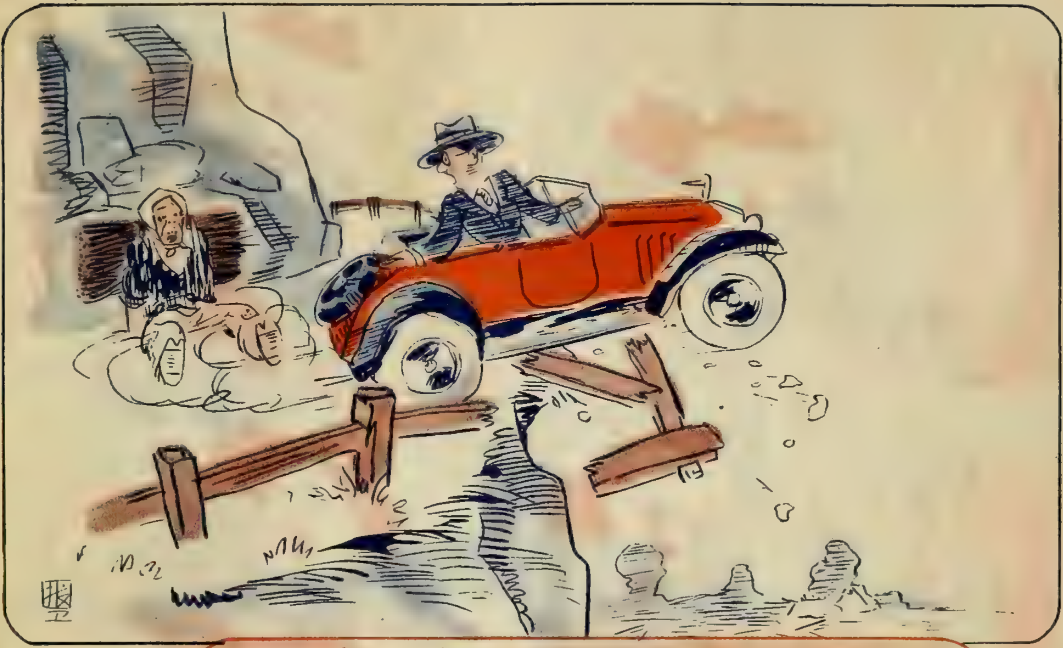
おい、あぶないぢやないか？　警笛が聞えないのか馬鹿!!



洋傘屋の主人曰く

『ワッこまつた。雨が降つて來たわい』

繪・近藤日出造



繪・長崎抜天

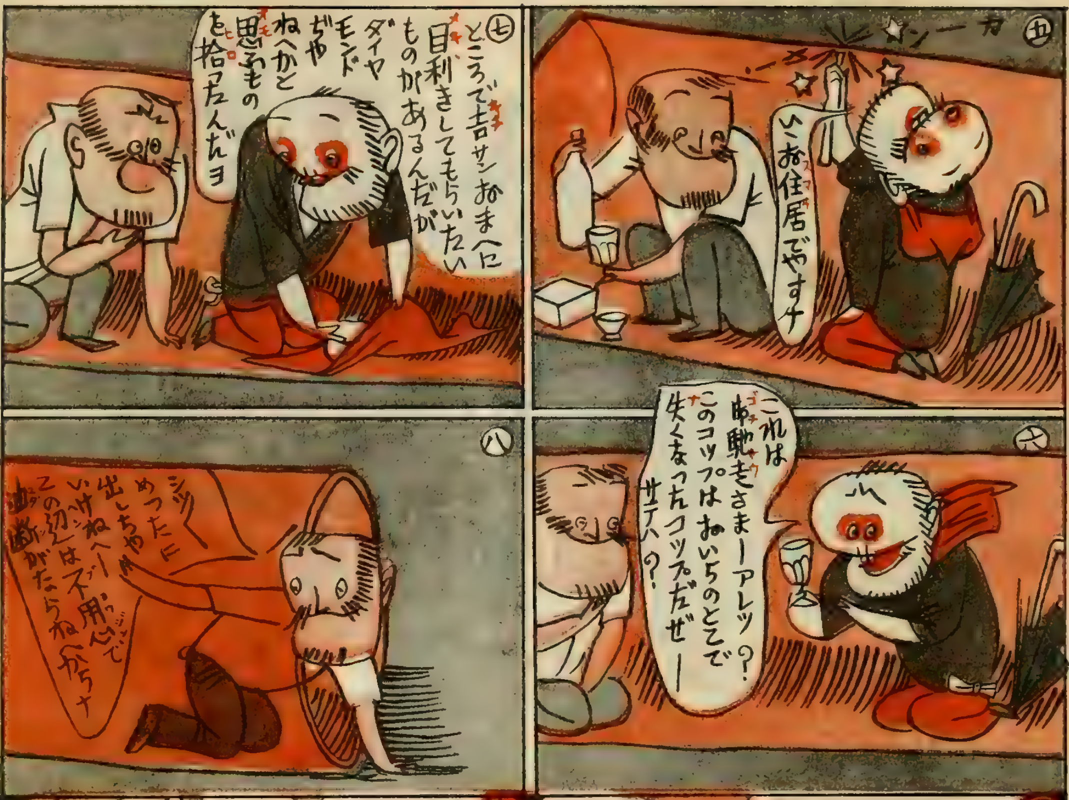
安全第一？

紳士『あーあ自動車にはこりごりだ。歩行が一番安全さね……』

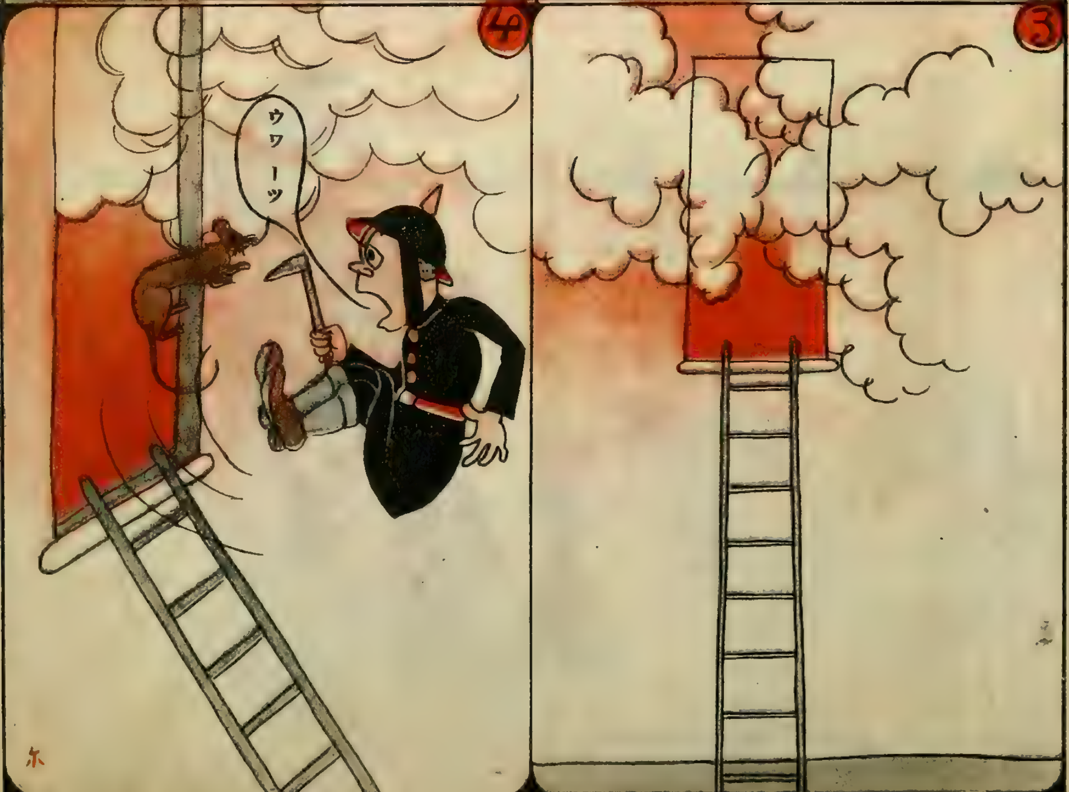
繪・川原くにを

ルンペン氣質
一
上州の吉公とこへ一寸急用が
出来た 無沙汰をしてる
から訪問してやろう
二
あいつは義理がたくていつも
何かしらもって来るから
おいらも手みやげに莨でも
拾ってって
やらう
三
今晩はー
上州の吉サンゐやすかい
四
ドーレー どちらから?
アレ上總やサンぢやねへかい
マアおめづらしい サア
ズツト上っておくんなさい

1
勇敢なる消防手
彼は勇敢なる消防手であつた
が、惜しいかな、たつた一つ嫌ひなも
のがあつたばかりで……
2



前川千帆畫



水島爾保布畫

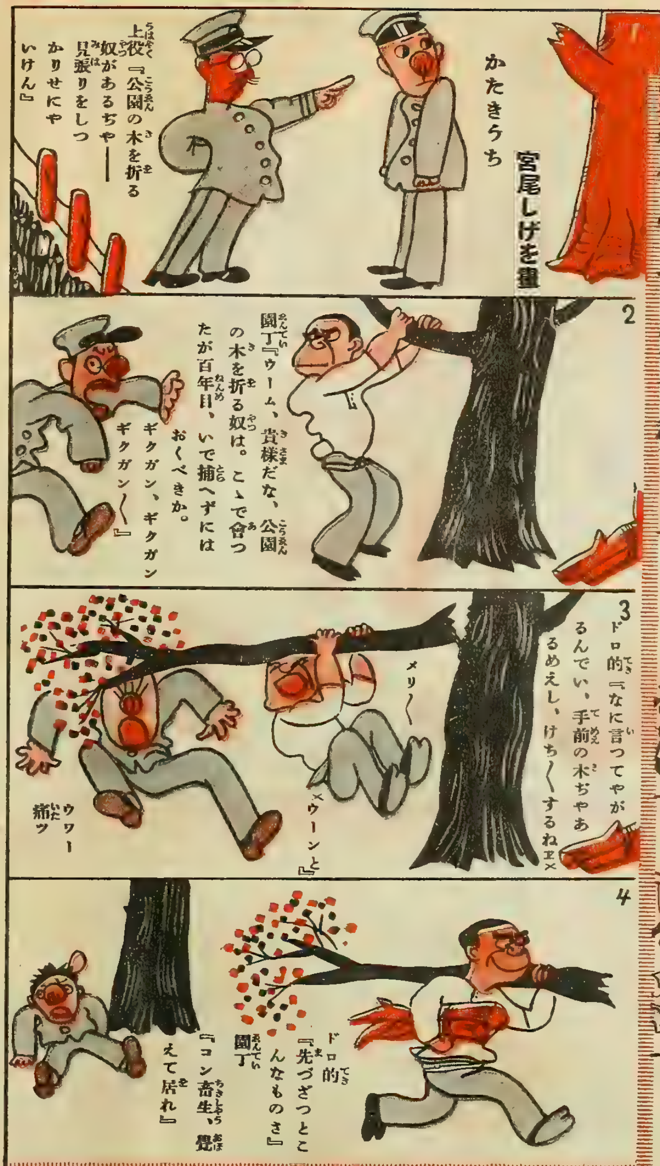
細木原青起畫

長崎抜天畫

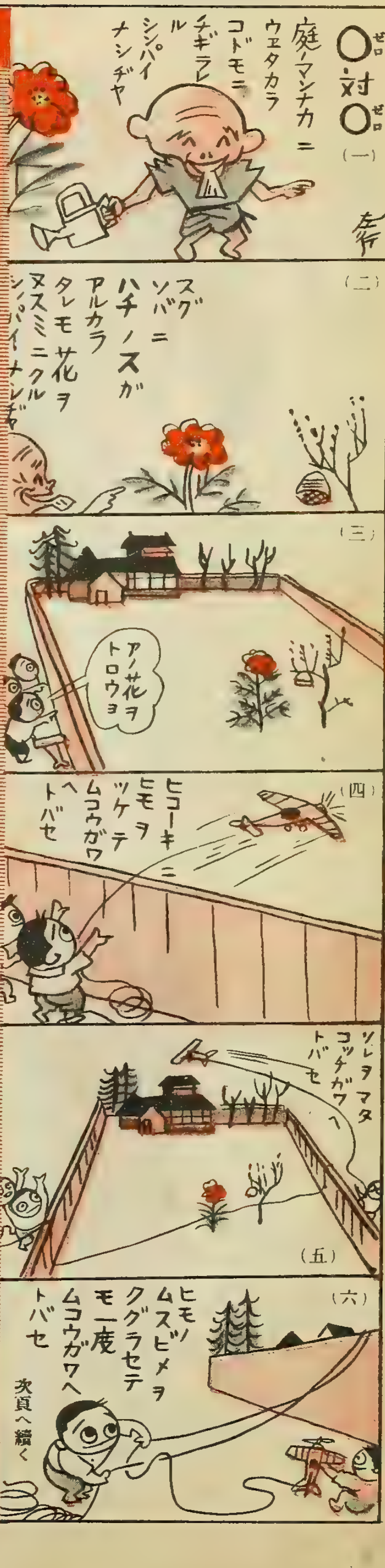
前川千帆畫

水島爾保布畫

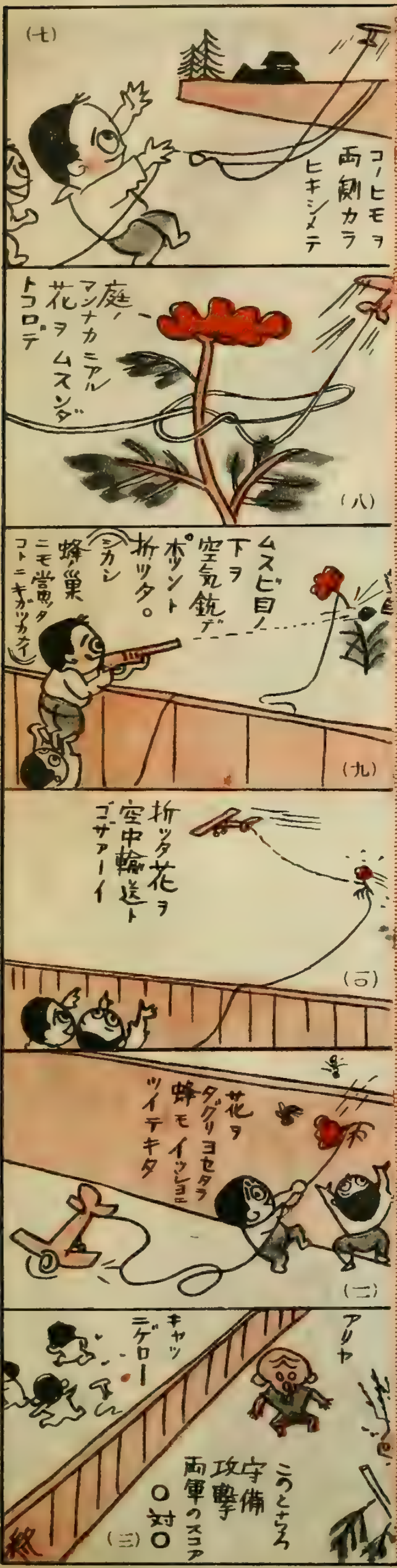
かたき


かたきうち
宮尾しげを畫
上役『公園の木を折る奴があるちや――見張りをしつかりせにやいけん』
2
園丁『ウーム、貴様だな、公園の木を折る奴は。こゝで會つたが百年目、いで捕へずにはおくべきか。
ギクガン、ギクガン、ギクガン〳〵』
3
ドロ的『なに言つてやがるんでい、手前の木ぢやあるめえし、けち〳〵するねエ×
×ウーンと』
メリ〳〵
ウワー痛ツ
4
ドロ的『先づざつとこんなものさ』
園丁『コン畜生、覺えて居れ』

時と場合
先輩『君の様にそはそはしてはいかん、男子は須らく何に落ちて來ようとも自若として動ぜざる覺悟でなくちや』
若者『…………』


〇対〇
（一）
庭ノマンナカニウヱタカラコドモニチギラレルシンパイナシヂヤ
（二）
スグソバニハチノスガアルカラタレモ花ヲヌスミニクルシンパイナシヂヤ
（三）
アノ花ヲトロウヨ
（四）
ヒコーキニヒモヲツケテムコウガワヘトバセ
（五）
ソレヲマタコッチガワヘトバセ
（六）
ヒモノムスビメヲクグラセテモ一度ムコウガワヘトバセ
次頁へ續く

ち う


(七)
コノヒモヲ
両側カラ
ヒキシメテ
庭ノマンナカニアル花ヲムスンダトコロデ
(八)
ムスビ目ノ下ヲ空氣銃デポツント折ッタ。
シカシ蜂ノ巣ニモ當ッタコトニキヅカナイ
(九)
折ッタ花ヲ空中輸送トゴサァーイ
花ヲタグリヨセタラ蜂モイッショニツイテキタ
キャッニゲロー
アリャ
このところ守備攻撃両軍のスコア○対○
(三)
終

宍戸左行畫

5
園丁『チキショウ昨日の仕返へしだ。細工は流々と來らアー』
6
園丁『こん度はかういふ具合に水を入れてと、さあこれでよし、いざ參れ枝盗人、水も洩さぬ作戰とはこのこと〱』
7
ドロ的『イヨーこれは素敵、こんな下の枝があるとは知らなんだ、しめしめのこしめのこ。』
フン今にどうするかみろ
8
シュウー
ウワッハッハッ
ウワーッブル〱
非常時の練習
ワーッ大變だ救助網が破けてゐようとは

珍香畫

音樂趣味

士官『誰かこの中に音樂の分る者があるか？』

一兵『ハッ！ 自分は分るであります』

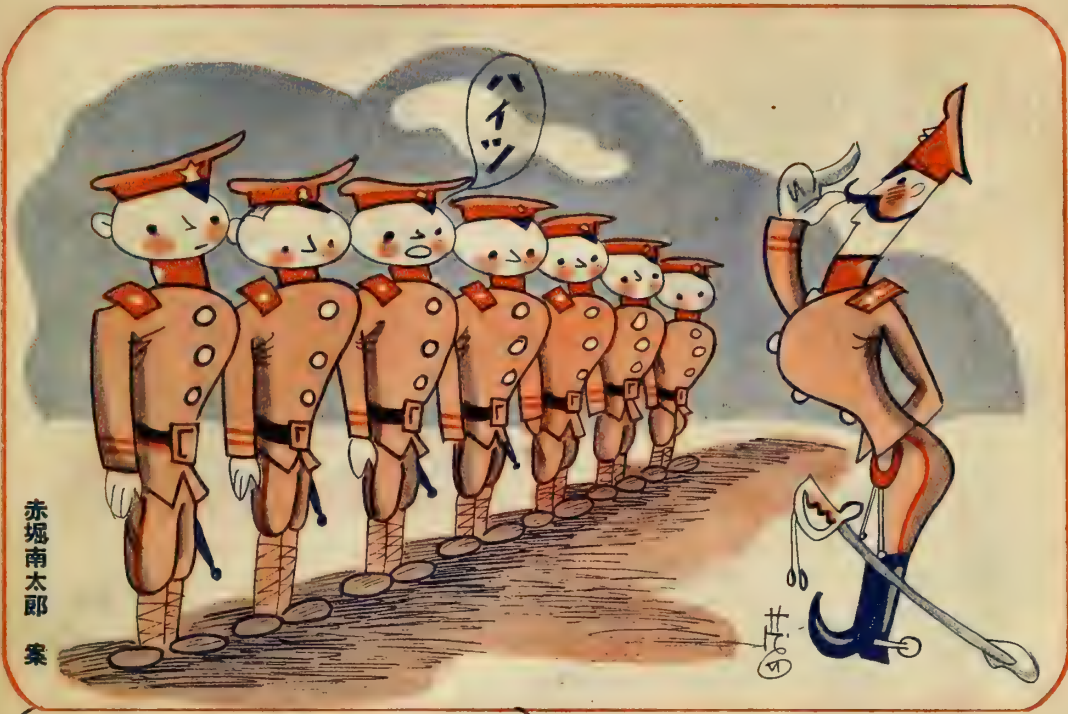
士官『ウンヨシ、聯隊長殿のお引越しだ、ピアノの運搬を手傳つてこい』

鈴木英二・案

繪・新關青花

熊井安一・案

繪・小野寺秋風



赤堀南太郎 案

繪・矢崎茂四

3

からいふこともあるデス

傘不用

途中雨に降られ、冨士を出して讀めば

内田定志 案

○漫畫案募集……名案を期待します

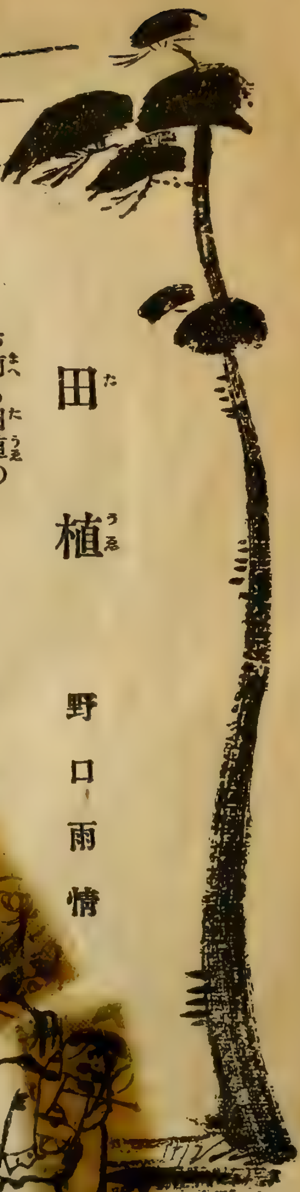
浮氣男のピクニツク

(一)今日は樂しい日曜日、新婚夫婦のピクニツク。フト御良人が眼をやると、向ふ岸に美人が一人モジ〳〵。小川を越せぬらしい。

(二)御良人こゝぞと許り、美人の手を取つてやり、すんでの處で渡り切らうとする時突然氣付いた細君の聲『あなたッ――』

(三)御良人その聲にビツクリして、いきなり美人の手を離す。美人は川の中へバチヤーン。

川原くにを畫



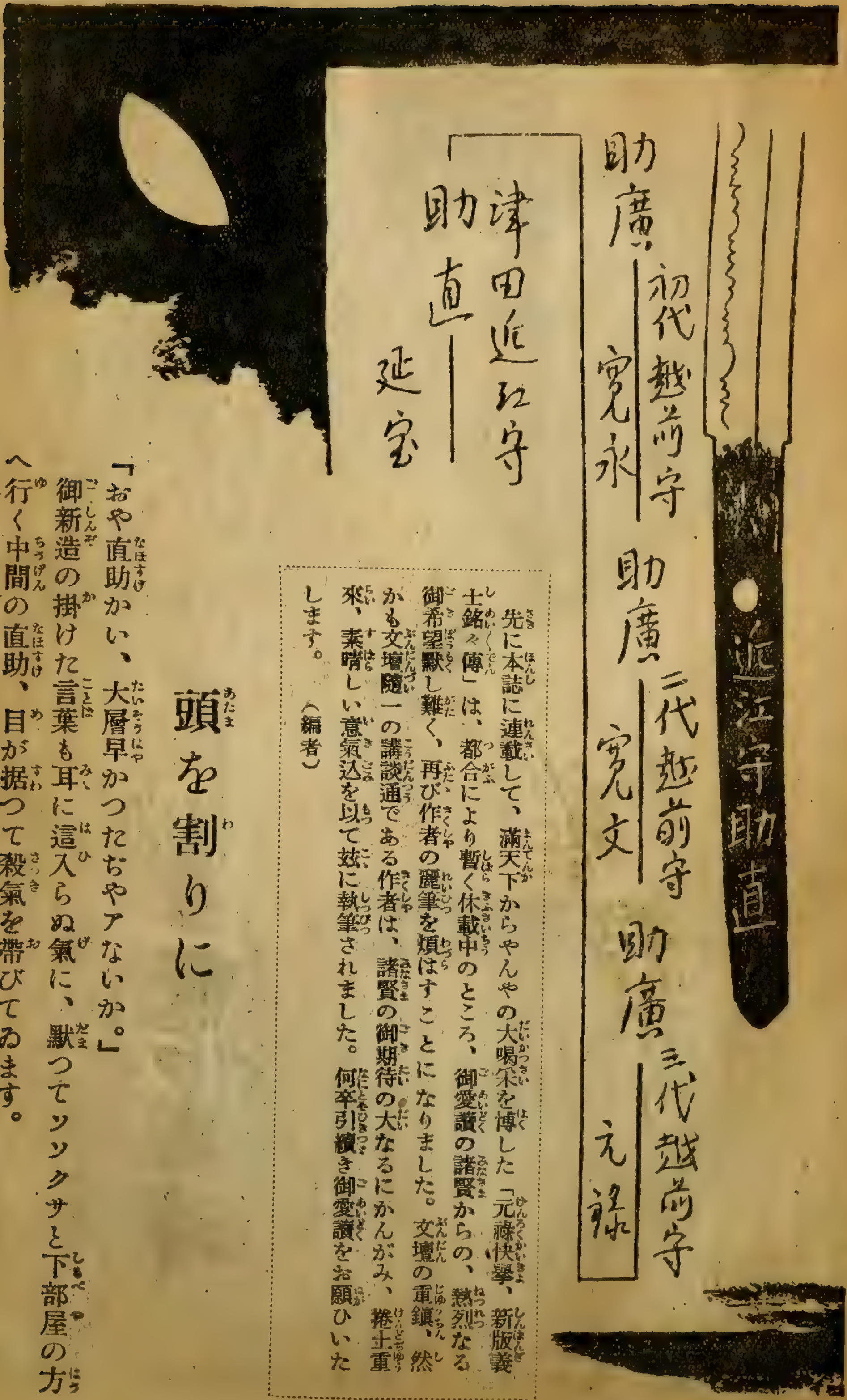
田植

野口雨情

お前も田植の
苗運び
わたしも田植の
苗運び
かうして運んで
ゐるうちに
お前は何んにも
知るまいが
言つてもよいなら
聞かせよか
わたしはお前に
戀心

＝さし絵　川原くにを＝

新版義士銘々傳
心直助晴の一口
こゝろなほすけはれのひとこゑ
小島政二郎
鈴木朱雀画
津田家刀譜



先に本誌に連載して、満天下からやんやの大喝采を博した「元祿快擧、新版義士銘々傳」は、都合により暫く休載中のところ、御愛讀の諸賢からの、熱烈なる御希望默し難く、再び作者の麗筆を煩はすことになりました。文壇の重鎭、然かも文壇隨一の講談通である作者は、諸賢の御期待の大なるにかんがみ、捲土重來、素晴しい意氣込を以て玆に執筆されました。何卒引續き御愛讀をお願ひいたします。（編者）

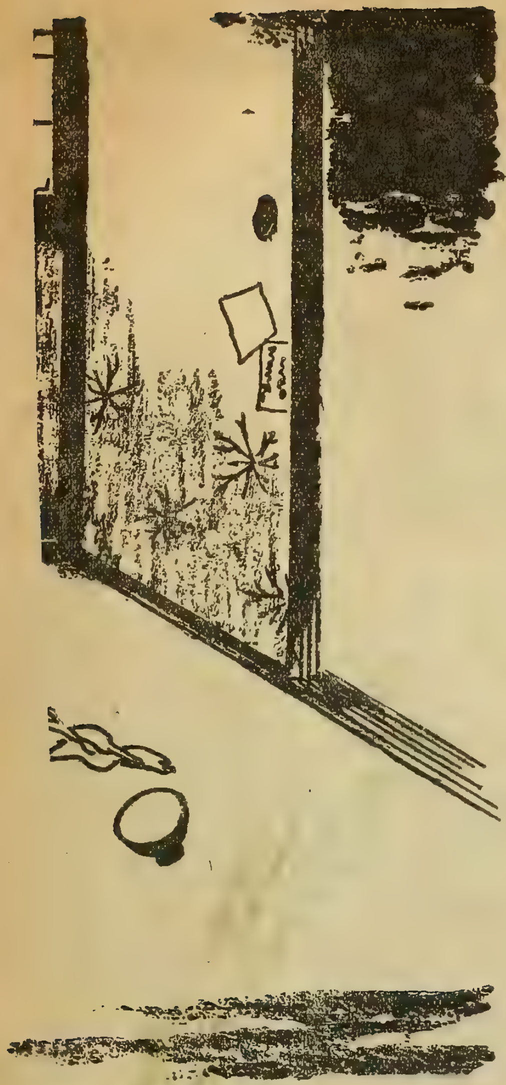
頭を割りに

「おや直助かい、大層早かつたぢやアないか。」

御新造の掛けた言葉も耳に這入らぬ氣に、默つてソソクサと下部屋の方へ行く中間の直助、目が据つて殺氣を帶びてゐます。

「――？」

御新造がそつと後を附けて行つて見ると、直助は、戸棚を明けて木刀を取り出すと、それを腰に、慌しくすぐまた引ツ返して行かうとする鼻尖へ、
『まあお前、血相を變へてどこへ行くのです？』
思ひも掛けぬ御新造の姿に、慌てて木刀をうしろへ隱しました。
『どこへ行くのです？』
『……。』
『いゝからそこへお坐んなさい。』



『へえ。』
『お前としたことが珍らしい、どこぞで喧嘩でもしましたか。』
『いゝえ。』
『と云うて唯ならぬ様子、何か仔細がなければなりません。お話しなさい。』
『……。』
ぢつと俯向いてゐた直助が、思ひ決したやうに顔を上げて、
『御新造さま、どうぞなんにも仰しやらずに、このままお見逃し下さいまし。』
『だから譯をお話しなさい。事と次第によつては、默つて出しても上げます。』
『へい。』
突然直助はハラ〳〵と膝の上に涙を零しました。
『男が泣くとは、よく〳〵のことでせう。聞きませう。』
『御新造さま、手前は口惜しくつて口惜しくつて堪りませぬのです。』
直助は塞き上げて來る涙を抑へ兼

ねて、また一しきり身を顫はせて泣きじやくつてゐましたが、やがて、

『御新造さまはまだお聞きではございませぬか。』

『いゝえ、何も聞いてゐませぬ。』

『今日お城で、うちの旦那さまが大野九郎兵衛の奴に――』

『これ。』

『いゝえ構ひませぬ。あんな人非人は奴と申してもまだ飽き足らない位です。――刀のことで、うちの旦那さまに恥をかかせやがつたさうでございます。』

『まあ。』

さすがに御新造の顔にも嶮しい表情が走りました。

『向うは家老で高頭、こつちは平の侍、同じ値頃の刀をさしてゐたら咎めるがようございます。向うが千両の刀をさしてゐるのに、うちの旦

那が五兩の刀をさしてゐたからつて、何も滿座の中で恥をかかせるには當らないぢやアございませんか。世の譬にも、身分相應と云ふことを申します。さうぢやアございませんか。それを畜生め、事情も知らないくせにしやアがつて――』

とう〳〵直助は、手の甲を額に當てて泣き出しました。『事情も知らないくせにしやアがつて』と云ふ直助の言葉を聞くと、御新造も溜息をついて、しを〳〵と力なく俯向いてしまひました。直助の云つた『事情』と云ふ言葉を、御新造は『貧しさ』と云ふ言葉に置き替へて胸に受け取つたのでした。しかも、その貧しさは、彼女の三年越しの長煩ひが原因であることを、御新造は身に沁みてよく知つてゐました。それ故に良人が恥をかいたと聞くにつけ、申譯なさに、彼女は胸を裂かれる思ひでした。良人岡島八十右衛門は、痩せても枯れても百石取りの侍でした。元より豊かと云ふ譯には行かないまでも、今見る如き貧しさではない筈。それを、今日のやうな逼迫した境遇に陷れた元はと云へば、――先立つものは涙でした。

『刀ゆゑに恥をかいた――？』

あの刀劍好きな良人が、刀ゆゑに人から辱しめを受けようなどとは、御新造には、今が今まで夢にも思ひ設けぬことでした。殊に、刀劍の鑑定に掛けては、藩でも屈指の定評のある良人でした。目が利くだけに、それこそ身分不相應によい腰の物をしじう肌身放さず帶びてゐた良人でした。

『濟みませぬ。申譯ございませぬ。鞘が元のまま故、つい氣が附かずにをりました。』

御新造は心の中で詫びるより外はありませんでした。が、詫びたとてなんにならう。良人は、病める妻の爲めに、療養費の一部にもと、妻に隱して愛する一腰を賣り拂つたのに違ひありません。それでなければ、刀ゆゑに辱しめを受ける譯がありませんでした。

『ああ、どうぞお許し下さいませ。外のことと違つて、刀のこと故、どんなにせつない思ひをなされたことでございませう。』

思へば思ふ程、御新造は生きてはゐられない思ひに身を攻められました。

『それにしても、何と云ふ我慢強い良人であらう。』

御新造の心の鏡には、歸つて來た時の、いつもと少しも様子の變つてゐなかつた岡島の姿が浮び上りました。衣服を改めると、手を洗ひ清めて、勸めた茶を飲みながら、城中での見聞をいつものやうに話題にして、居間に這入つたと思ふと、常の通り机に向つて書見をしてゐた良人……。

――自分の物思ひに打ち沈んでゐた御新造を、この時ハツと

我に返させるやうな空氣の動きがありました。

『これ、どこへ行くのです？』

鋭く見上げた目の前に、木刀をひツつかんで立ち上つた直助の姿がありました。

『どうぞ御新造さま、このまま手前を大野の屋敷へ遣らして下さいまし。虎と見て石に立つ矢のためしあり、透きを見て奥座敷へ躍り込んで、大野の野郎の頭を割つてやらなければこの胸が收まりませんのです。』

御新造は、この直助の志を嬉しいと思はずにはゐられませんでした。しかし、

『何を云ふのです旦那さまを蔑ろにして。』

『いえ違ひます。旦那さまは旦那さま、手前は手前でございます。旦那さまのやうに身分のある方は、ああしたい、かうしたいとお思ひになつても、御自分の思ひ通りになさることが出來ないことがあると伺ひました。殿さまへ獻げたお命ゆゑ、わたくし事には、ならぬ我慢もなさらなければならぬさうでございます。そこへ行けば、手前のやうな奴は、何をしようと勝手放題、旦那さまなら我慢なさらなければならないところも、奴は我慢を致しません。』

そのまま飛び出さうとするのを、

『待ちませぬか直助。』

『へい。』

『お前さう慌てて、――一體お前は人を相手にする、腕に覺えがあるのかえ？』

『とんでもない。』

『それでどうして相手の頭とやらを割るつもりです？』

『そりやア、――どんな奴にだつて透きのないと云ふことはございますまい。第一、勝ち負けはどうでも宜しいので――。唯名告つて、よくも俺の主人に恥をかかせやがつたと一太刀怨めば、後はどうならうと思ひ殘すところはございませんのです。』

『それでは犬死です。』

『いゝえ、こつちの思つてゐることが、向うに通じさへすれば犬死ではございません。』

『名告つて打つてかかつて、後で迷惑が旦那さまに懸つたら何とします？』

『では、名告るのは止めに致します。』

『名告らなくとも、お前が岡島の家の者であることは誰知らぬものはありますまい。旦那さまに迷惑の懸るのは同じことです。』

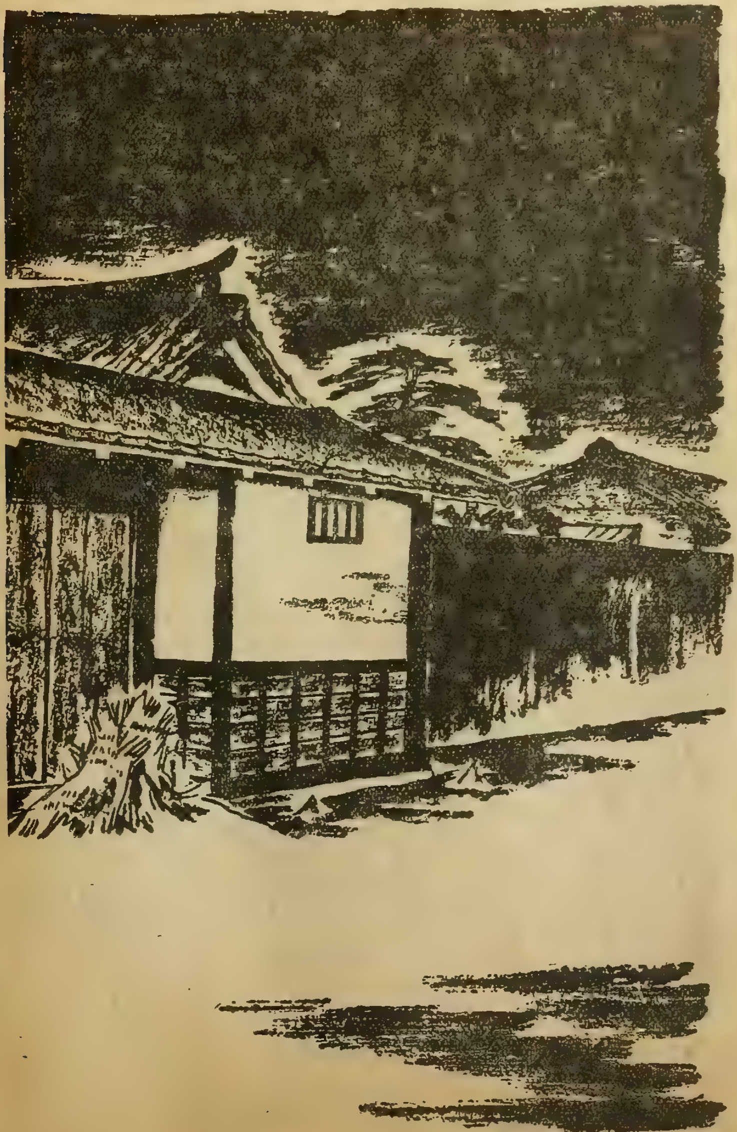
『それでは、この者は今日限り暇を出したと云ふ一札をお書き

下さいまし。それを懐に、手前は大野の屋敷へ斬り込みます。さうしたら、旦那さまに御迷惑のかかるやうなことはございますまい。』

『そのやうな子供瞞し見たいなことをしたとて、――主從が心を合はせて、――あれ見よ、岡島は、自分自身手を下して無念を霽すことが出來なんだ故、奉公人をそのかしてあのやうな眞似をしたと、世間の口には戸が立てられませぬ、まして相手はこちら憎やと思うてゐる矢先、どのやうなことを云ひ觸らさぬとも限りますまい。そんなことにでもなつたら、それこそ旦那さまに恥の上塗りをおさせするやうなものではありませんか。』

『それぢやア御新造さま、手前はどうしたら宜しいのでございます？』

『辱しめられたと思召したら、



その御返禮は旦那さまが御自分でなさるでせう。私達は默つて、――旦那さまがかうしろ、ああしろと仰しやるまでは、默つて控へてゐるべきです。』

『そんなことを仰しやつて、――御新造さまは口惜しいとはお

思ひになりませんのですか。』

『思ひますとも。お前でさへさうやつて口惜しがるものを、まして私は岡島の家内です。出來れば——』

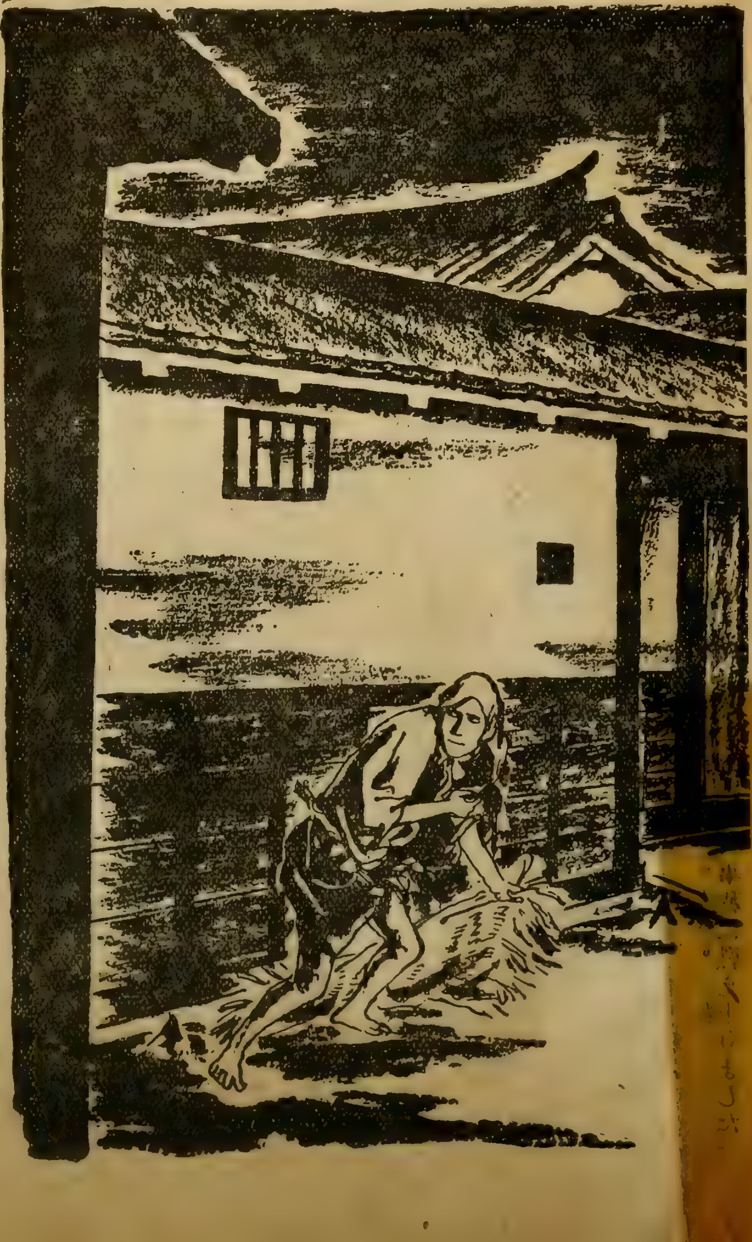
御新造は、袂を噛んで咽び泣きました。その悲しい言葉が、そのいぢらしい姿が、直助の胸をひしと嚙まずにはゐませんでした。

『それ御覧なさいまし。』

彼は子供のやうに泣きながら、——ガク〳〵顎を顫はせながら云ふのでした。

『それ御覧なさいまし。本心を云へば、御新造さまだつて、あいつの喉笛に喰ひついてやりたい位にお思ひでございませう。でございますもの、——御新造さま、——どうぞ——直助はもうお留めになつても、留まりませんでございますよ。』

『これ直助、なりませぬと云ふに。』



木刀の鐺を引かれて、彼はヨロ〳〵と引き戻されました。

『お願ひでございます。御新造さまどうぞお手をお放し下さいまし。』

『いえ放しませぬ。』

一瞬ためらつてゐた直助、
『御免下さいまし。』
云ふと等しく、我から木刀を放して駈け出した目の前に、
『直助どこへ行く。』
と、主人の柔和な姿が立ちふさがりました。

附け火

『フフ、かう來なきやア嘘だ。』
屋敷町の夜の闇に、風の吹いて來る方へ顔を向けて立ちながら、
『もつと吹け、もつと吹け。一年一度の大風になれ。』
手拭で隱した顔を星一つない秋空に向け、片手を差し上げて風の力を試してゐるのでした。
『見ねえ、晝間あんないゝ天氣だつたのが、夜になつてからすつかり曇つて風立つて來たのなざあ、神さままで俺に味方をしてゐて下さるいゝ證據だ。──ざまア見やがれ九郎兵衛め。』
ふと口から出た九郎兵衛と、目の前に立ち續いてゐる宏莊な黒塀との語呂のをかしさに、
『ハヽハ、どうでも此奴は燒かれる瑞相に生まれついてゐやがらあ。』
シーンと寢鎭まつた夜の深さの中で、彼は地に伏して巷の上下を透かして見てゐましたが、
『もう大概人通りはあるまい。どれ、やツつけようか。』
どこかで一匹犬の遠吠えしてゐるのが、一しほ夜の更けた感じを深めてゐました。
闇の中で、彼の姿が敏捷に動き始めました。見る間に、どこに隱して置いたのか、炭俵が、中の建物と外の塀とが一番密接してゐる黒塀の一角に、堆く積み重ねられました。
やがて、向う屋敷の塀際に、風を背にして踞んだ彼の手には、火打石と火打鎌とが握られてゐました。上手に股と裾とで風避けを拵へた地面の上には、よく乾いた引火奴が、身を燒くべき火を待つてゐました。
彼の手のうちから、小さな星のやうな火花が散り始めました。
『弱つたなこいつは──』
石と鐵との相打つ音が、あたりの靜けさの中に、彼の神經には人の眠りを醒ます程にも響くのでした。
『エー、ビク〳〵して幾度にも打つよりは、思ひ切つて大きく一つ打て。』
星の一つが、引火奴に小人の國の火事程に燃え上りました。

彼は急いで懐から附木を出すと、その火の上へ、硫黄の塗つてある方をかざして、器用に火を取りました。二枚、三枚、――ボーボーと附木の火が風に鳴るのを、消すまいとして袖屏風で圍ひながら、二足三足、四足五足、炭俵の方へ歩いて行く――火にばかり氣を取られてゐる彼の手首を、突然闇の中からむんずと擱んだ者がありました。

『イテテ、何をしやがんでえ。』

思はずポロリと落した附木の、地面の上でまだ燃えてゐる硫黄火に、下から朧に青く色取られた相手の顔を見上げた直助は、

『あツ。』

振りもぎつて逃げようと無駄に手足を踠きました。

氣が附くと、一二間離れたところに、彼と同じ身分の小者が黄い提灯の灯を差し出して、瞬きもせずに立つてゐるのでした。

『町角へ行つて待つてをれ。』

彼の頭の上で深みのある聲がしたと思ふと、やがてその提灯の灯が遠去つて行きました。

『何をしてをつた？』

相手は彼の手を放しながら、落ち着いた聲音で訊ねるのでした。

『御覧の通り、ここの屋敷へ火を附けようとしてをりました。』

相手が相手ゆゑ、彼はもう觀念して、頬被りを取りながら地面の上に踞んで、悪びれずにテキパキと云つてのけました。

『さつきの様子では、どうやらカレの顔を見知つてゐさうな氣振りだつたが、御城下の者か。』

『へい。』

『何れの者か。いづれへ奉公致しをる者か。』

『へい、それだけは――主人の名前を申し上げますことだけはどうぞお許しを願ひたう存じます。手前の名は直助、ここの屋敷の主人に怨みのある者とだけで、御勘辨を願ひたう存じます。』

『その方自身の怨みか。主人の怨みか。』

『何れとも宜しくお察しを願ひたう存じます。』

相手は暫く考へてゐましたが、

『ウーム左様か。――が、火を附けて何とする？　それで――火を附けただけで、ここの家を丸焼けにすれば、それでお前の怨みは霽れるのか。お前の怨みは、そんな果敢ない怨みなのか。』

『いえ、火事のドサクサまぎれに、ここの主人に怨みの一言を云つて、出來れば撲りつけてやるつもりでをりました。』

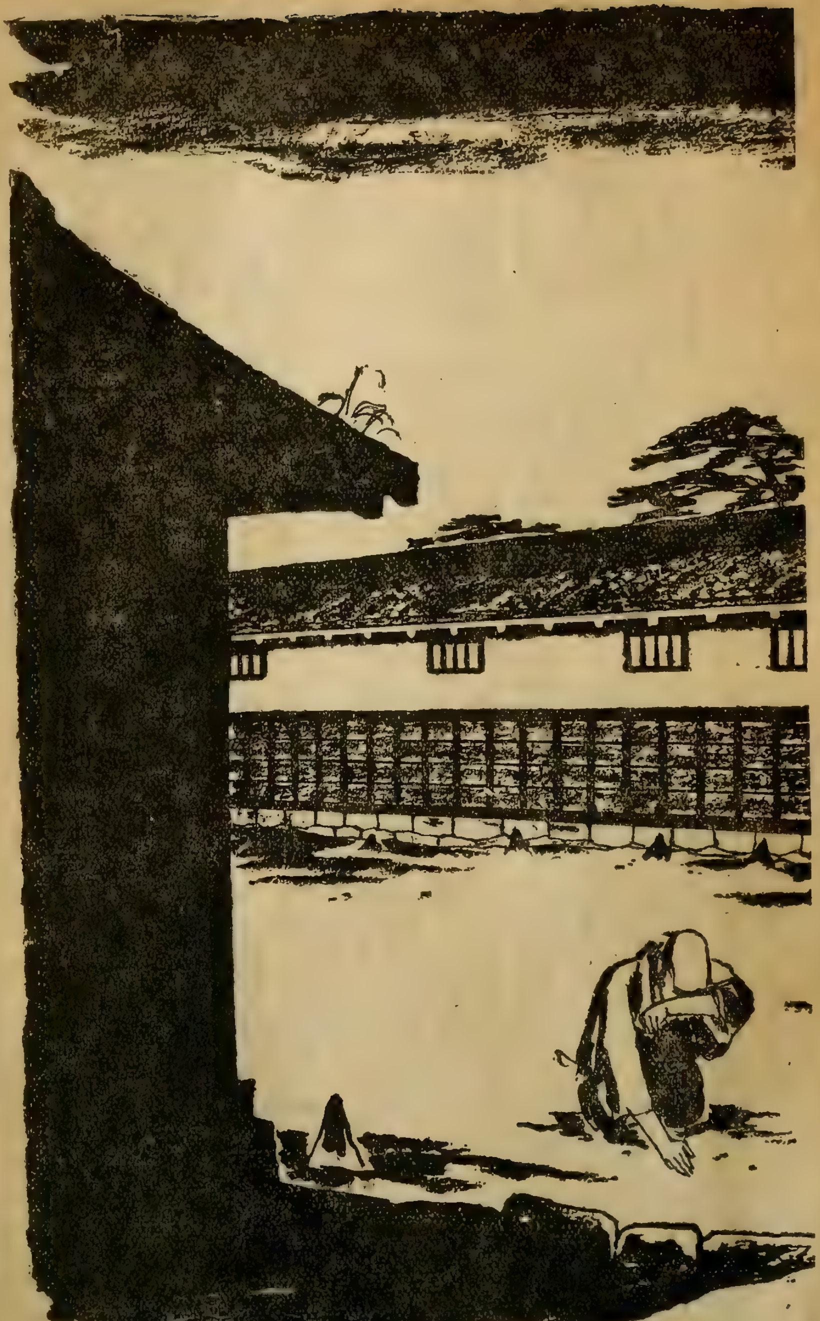
『お前の怨みはそんな小ツぽけなのか。』

『旨く行つたら、撲り殺してやるつもりでございました。』
『ハハ、殺してしまつては型なしぢや。怨みを霽らすと云ふのはな、相手を生かして置かなければ霽らし栄のせぬものぢや。さうは思はぬか。』
『そりやアさうかも知れませぬ。いえ、さうでございませう。でも、月と鼈ほど身分が違つては、そんな心ゆくまでの無念霽しは、しようツたつて出來は致しませぬ。それよりやア、奴は奴相應、果敢ない怨みか、小ツぽけな怨みかは存じませんが、火を附けて、撲りつけるか、撲り殺すか、それより外には致方がございませぬ。その代り、この怨みばかりは、一生かかつても遣り遂げずには置きませぬ。運がないのか、もう一息と云ふ土壇場で、旦那さまに見咎められてしまひましたが、命が繋がつてもう一度娑婆に出て來られたら、もう一度遣り直します。幾度しくじつても、命のある限りこの怨みは報いずには置きませぬ。――さ、どうぞどこへでもお引きなすつて下さいまし。』
立ち上つたと思ふと、彼はクルリとうしろを見せて、自分で手を背中に廻しました。
『これ〳〵、思ひ違ひを致すな、わしはお前を縛ると云つた覺えもなければ、また縛る係の役人でもない。』
『ではあの――』
思はず彼は顔を耀かして、
『お見逃し下さいますので――？』

が、相手はそれには返事も與へずに、
『まあ下にゐろ。』
『へい。』
と、相手の侍も前へ來て同じやうに踞んで、
『どうだ、物は相

談だが、奴の無念霽らしを思ひ捨てて、わしの意見に附かぬか。——お前は雲居禪師の話を知つてゐるか。』

『いえ存じませぬ。』



『雲居禪師と云ふ方はな、もと伊達政宗侯の草履取りであつた。或冬の日、お供をして他出した時、玄關に脫いである殿さまの草履を見て、このまま置いといたなら、お歸りに穿かれる時にさぞ冷たからうと思つて、草履をば背中に負つて待つ間暖めてゐた。ところが、いざお歸りと云ふ時、草履の上に一足足を載せられた政宗侯が、草履が暖いのを、下郎がその上に腰を卸してゐた故と思ひ違ひをなされて、短氣のお方ゆゑ、いきなり足を上げて草履取りの肩をしたたかに蹴られた。

下郎は堪らず土に尻を突いて倒れたが、倒れただけでは濟まなかつた。人の好意を足蹴で返した政宗侯に、怨みを抱いたのだ。――よく聞くがよい。ここが、この草履取りとお前の考への違ふところだ。おのれ政宗、いつか俺の前に兩手を突かして辭儀をさせずには置かぬから、と、さう決心をした。諸侯の上に坐し得るものは天下僧侶の外にない。その者は意を決して寺に入つた。――かうして、その草履取りは、遂に雲居禪師と云ふ名僧になつたのだ。この話を――いや、架空の話ではない、事實あつたことだ。この事實をお前はどう考へる？　雲居禪師に比べれば、お前の怨みの相手などは高が――いや、諸侯ではないではないか。』

『へい。』

『相手を傷つけて、同時に我身を亡す――そんな無念霽しは、最も拙い策だとわしは思ふ。この風だ、ここ一軒にとどまらず、お城下一圓の火となつたら、何とする？　たとひ隣一軒を類燒せしめたにしろ、怨みもない人一人に莫大な迷惑を掛けたことになるではないか。その邊の理合の分らぬお前とも思へぬが――！』

『へい。』

『お前の怨みの筋は知らんが、早い話が、刀の怨みとすれば、刀で無念を返すがよいではないか。また口論の怨みならば、口論で怨みが霽らせるやう勉强したがよからう。人間あせることは大毒だ。氣を長く持て。氣を長く持つて思ひを遂げろ。』

『へい。』

『主人の怨みを我怨みとして千々に心を碎くお前の情熱をわしは買ふぞ。情熱のあるところ、事の成らんと云ふことはない。が、焚火のやうにパーツと燃えて、あとはヘタ〳〵と消えてしまふやうな情熱は情熱でない。一つことをいつまでも心に抱いて、五年十年終始變らず、しかも始めの心の張りを失はぬのがまことの尊ぶべき情熱だ。さう云ふ情熱の漢になれ。』

『へい。』

『なれるか。』

『……。』

『なつて見ようと思ふか。』

『へい。』

『手を出せ。――これだけあつたら、大阪あたりまで行けるだらう。雲居禪師になつて來い。』

　返事をする暇もなく、直助が立ち上つた時には、既に、雪駄の裏金が一二間向うの闇に鳴つてゐました。

『大石の旦那さま。』

我を忘れて呼び掛けようとして、ハツとして聲を呑んだ直助は、

『手前きつと何かになつて戻つて參ります。』

彼は嬉しさに、――親切にされた嬉しさに、目の前に新らしい世界の開けた嬉しさに、感激の涙を拳固でこよりながら、目に見えぬ闇の中にむつくりとした、内藏助のうしろ姿を思ひ描きながら、風に吹かれて立つてゐたのでした。

泣きわかれ

『直さんだら、まあ何をボンヤリ立つてゐるのさ。』

若い女の聲がして、白い手が優しくうしろから肩に置かれました。

『誰だ？ ――お、お小夜か。』

闇に白く浮いた顏は、細面の、頸に色氣のあるいゝ女でした。

『あかまんやのお小夜』とて、今年十九。スラリとした全身を見せぬ闇が怨めしい。

『どうしたのさ？ 約束の時が來ても梨のつぶてだらう。さうでもない、若しやと思つて家を拔け出して來て見りやア、こんなところに風に吹かれてゐるわいな……。一體首尾はどうだつたの？』

『うむ。』

『何か邪魔でも這入つた――らしいねどうやら。どうしたのか聞かしておくれなね。』

『……。』

『あら、ホホホ、火さへ附ければいゝやうにちやんと支度が出來てゐるんぢやないか。何を考へてゐるのさ。火打石は？ どこ？』

『……。』

『早く、手廻しよくやつておしまひなね。』

『……。』

『いざと云ふ時になつて何をクヨ／＼考へてゐるのさこの人は？』

『……。』

『それとも、心變りでもしたと云ふの？』

『……。』

『そんならそれでもいゝしさ、いつまでこんなところに立つてゐて、見廻りの役人か何かに見咎められたら面倒ぢやないか。』

『……。』

『さ、遣るなら私も手傳ふよ。よすならよすで、早く行かうぢ

やないか。私は今夜のうちに一里でも二里でもここを離れてゐなければならない體のことは、お前さんだつてよく知つてるくせに。』

『うるせえな。ベラシヤラとよく喋る阿魔ぢやねえか。俺ア止したぜ。』

『……御免なさい。だつて、あんたが返事をしてくれないんだもの。——ぢやア行きませう、ね。』

『何云つてやがんでえ。俺の止したと云ふのは、手前との驅落のことだ。』

『えツ、何ですつて？』

『大野九郎兵衞の屋敷を丸燒けにさせて、うちの旦那さまに迷惑のかからねえやう、お前と手に手を取つてここを落ち延びようと約束をしたが、俺ア急に心變りがした。』

『ですからさ、敵討ちは止めにして、やつぱりこのままここに落ち着かうと云ふ氣になつたんでせう？ そんならそれでいゝわよ。私だつて、知らぬ他國へ行つて苦勞するよりは、あと二年と少し辛抱すれば、年期も明くし……。』

『お小夜。』

何か云ひ掛けて、直助はまた目を伏せました。

『あい。何？』

『……なんにも云はねえで、お前俺と切れてくれ。』

『ホホホ、どうしたの今夜は？ 人をおどかしてばかりゐて。』

『俺は眞劍だ、まともに聞いてくれ。』

お小夜は暫く默つてゐましたが、

『直さん、顔を見せておくれ。』

と、覗き込んで、

『まあ、お前さん泣いてゐるね。——何かあつたんだね、さうでせう？』

『何もありやしねえ。』

『ないことがあるもんですか。何かなければ、闇から棒に切れてくれなんて云ふ譯がありません。聞かして下さいそれを。』

『だからなんにも聞かずに切れてくれ。』

『厭です。』

『お前が厭でも、俺は切れた。』

『厭です、私は死んでも放れませんから。』

『勝手にしろ。』

そのまゝ行かうとする直助の體に、お小夜は兩手で——體ごとしがみついて來ました。

振り拂はうとすると、

『あれ、私大きな聲を立てますよ。』

『チョツ。』

『ですから譯を話して下さい。さつきまでは一しよに驅落をしよう、大阪で世帶を持たうと云つてゐた人が、半日もたたない同じ夜のうちに、切れてくれろぢや――はい、切れませうと云ふ女がゐるでせうかこの世の中に。』

お小夜は、胸に縋りながら體を顫はせてゐました。

『譯が云へる位なら、俺だつて云はあな。一口に云へば、赤穗なんて小ツぽけなところが厭になつたのだ。恥をかかされて、その返報一つ出來ねえうちの旦那にも愛想が盡きた。さうしたら、この世が何から何まで厭になつて來た。生きてゐるのさへ厭になつて來たのだ。』

『嘘、嘘。』

『譯を話せと云ふから話してやれば、嘘だなどと云ふなら勝手にしろ。』

『あれ。――だつて、一向胸に沁みないものを。』

この一言が、――この女らしい一言が、直助の一番優しい心の奥を掻きむしらずにはゐませんでした。

思はず兩手が肩に廻つて、細かく波打つてゐる女の背中を優しく叩いてやりながら、

『本當はなお小夜――』

お小夜は直助の懷の中で、『ええ』と云ふやうに男の胸へ頷きました。

『本當は、新らしい望みが出來て、この赤穗を立ち退くのだ。と云ふのは、――何から話したらいゝのやら。さうだ、今日まで二世かけたお前にも云はなかつたが、實は俺は親無しツ子――捨て子なのだ。びつくりしてくれるな。誰も話してくれねえから詳しいことは知らねえが、何でも華岳寺の門の前に捨てられてゐた俺を、拾つて下さつたのが、うちの旦那さま御夫婦ださうだ。襁褓の上から今日が日まで育てて下さつた御恩は、考へても見てくれ、口や言葉にやア云ひ現せねえ。しかも、二十何年の間、小言を仰しやる時でさへ、一言だつてお前は捨て子だなどと、これツぽちも口に出されたことはねえ。だから、二十の春に華岳寺の和尚さまから聞くまでは、俺は夢にも知らなかつた。尤も、物心附いた頃、親のねえのをいぶかしく思つて、伺つたことがあつた。さうしたら、お前の母親はお前を生むと間もなく死んだ、父親はお前が二つの歳に急病でこの世を去つた、だから二親の顏を覺えてゐまいと仰しやつた。不憫な奴がゐたものよと、俺ア我身で我身を哀れみながらも、さうとばかり信じて大きくなつた。』

言葉の途切れに、抱かれながら泣いてゐるお小夜の生暖い

泣き聲が聞えました。

『俺にとつちやア、二柱の神さまも同前の方だ、その旦那さまを恥ぢしめた野郎を、俺として生かして置けるか。御新造さまの長煩ひの間、――お前と馴染む前だ――俺はお百度も踏んだ、水垢離も取つた。いゝツてことで俺の體で出來ることは何でもした。若し御新造さまのお命をないものにしやアがつたら、俺ア醫者の良齋を生かしちや置かねえつもりだつた。面と向つてさうハツキリと云つてやつた。良齋坊主も一生懸命だつた。第一に、旦那さまの御看病もよかつたに違ひねえ。一時は首をかしげさせた御病氣が、持ち直した時の嬉しさ。

察してくれ、今日酒屋へ使ひに行く途中、お城歸りの若侍が話しながら來る擦れちがひに、旦那さまの御首尾を聞いた時の俺の胸のうちを。俺はカーツとなつた。大野九郎兵衛の禿頭を叩き割ることばかり考へた。それが出來ねえとなると、今度は火を附けることを考へた。俺はカーツとなると、そのことを仕遂げるまでは、外のことはなんにも考へられない妙な一途な人間に出來てゐるらしい。ところが、今、ついさつき、ここで或お方にお目にかかつたのだ。そのお方に懇々と意見をされて、俺ア始めて目が醒めた。俺はそのお方の意見について、これから大阪へ行く。さうして何か一仕事して、何でもかまはねえ、一廉の人間になつて歸つて來る。それから無念霽らしに取りかかるのだ。お小夜、さう云つた譯だ。色戀ひなどをしてゐる時ぢやアねえ。』

お小夜は直助の胸から顔を放しました。鼻を泣き詰まらせ、赤い袖口で涙を抑へながら、

『分りましたわ。』

と、まだ涙聲で小さく云ひました。

『實を云やあ、旦那さまや御新造さまのお目を盗んで、お前とかうして馴染んでゐることさへ、俺は氣にしてゐたのだ。が、俺は何も色戀ひだけでお前と馴染んでゐた譯ぢやアねえ。俺と違つて、また俺に似てゐるお前の身の上話を聞いて、身につまされ、理窟も何もねえ、辛い浮世にたつた一人のお前をはふつて置けなくなつたのだ。お互に親のねえ同志、寒い冬の夜に、小ツぽけな火一つしかねえこはれ火鉢に、兩方から手を翳し合つて、その火一つを消させまいと、落葉をくべたり、乏しい炭屑をついだり、代りばんこに吹いたり、荒い風の吹く浮世の片隅に、せめてはその一つ火を仲よく二人ではぐゝくみ合つて生きて行かうと思つたのが始まりだつた。』

『止して頂戴、そんなしんみりした話を聞かして泣かすのは。別れられなくなるばかりですわ。』

『だから、さつき俺はわざと邪慳なことを云つて、無理にも別れて行かうとしたのだ。さうでもしなければ、俺にやア別れられさうもなかつた。』

『ねえ。』

『うむ？』

『大阪へ行つて、一體何をするつもり？』

『まだ咄嗟のことで、いゝ思案も浮んぢやアゐねえ。が、泊り泊りの旅籠の夜々、一人侘しく膝を抱いても、向うへ着くまでには何とか目鼻はつくだらう。』

『お錢はあるの？』

『うむ。』

『たつぷりあるの？』

『うむ。』

『さう聞くと、一しよに行きたいねえ。』

『冗談云ふな、一人旅がやつとだ。』

『乞食をしてでも私は構はない。』

『俺ア眞平だ。』

『ホホホ、だつて、始めは連れて行つてくれるつもりだつたぢやアないか。』

『そりやアやけツ腹で逃げ出す時の話だ。望みがあつて、もう一度このお城下へ歸つて來なきやアならねえ身にやア、不義理な眞似はしちやア行けねえ。暫くの辛抱だ、なあに、遠いと云つたところで三十里、高が知れてる。』

『どの位したら歸つて來てくれます？』

『そいつはちよいと難題だ。が、俺も一生懸命だ。身を粉にして稼ぐつもり故、さう長えことはあるめえよ。』

『一年位？』

『おい、ふざけちやアいけねえぜ。一仕事、一商賣、これから何かにありつかうツてんだ。短くつて五年、長ければ――』

『厭、厭、それから先を云つちや厭。五年と云へば、月が十二で一年、それの五まはり。日に直すと、三百六十五日が五つ重ね。ああ、私は待ち焦れて死んでしまふわきつと。』

『そんな心細いことを云つてくれるな。辛いこと、悲しいこと、氣のくづをれる時などのあるにつけ、お前が遠いこの赤穗の町で俺の歸りを待つてゐてくれるのだと云ふその思ひばかりを力綱の俺だ。無理酒など飲まずに、體を大事にしてくれ。』

『あい。』

『俺の歸つて來る朝は、いき／＼とした顏で笑つて迎へてくれ。』

『あい。』

『ぢやア行くぜ。』
『あら、今夜は——明日の朝早くお立ちなね。』
『一夜でまた未練な心が起るといけねえ。このまま夜道を掛けようよ。』
『相變らず氣が強い。ぢやあね、大阪の居所が極まつたら、すぐ知らせて下さいよ。』
返事と歩き出したのと一しよでした。お小夜は、早や十足ばかりも向うへ遠去つたいとしい人に、
『體を大事にね——』
『大丈夫だ。』
向うでも叫び返してよこしました。お小夜は一段と聲を張り上げて、
『道中、水を氣を附けて下さいよ。』
『合點だ。』
聲の遠さよ。
お小夜は急に心細く、戀しさに二足三足バタ〳〵と跡を追ひましたが、我身の起した風に、ふと自分の顔に、胸に、體中に直助が殘して行つた男の匂を強く感じて、我とわが體を抱き締めて、思ひの限り吸ひ込みました。

觀月の宴酣の頃

『王子さまがお生まれ遊ばしたさうな。』
京都では、人々が、雲居の上のお噂を語り合つてゐました。
『またお守刀の獻上で御番鍛冶の火の出るやうな競り合が見られるわ。』
『左様さ。今度は誰のがお選みに與るだらうて？』
『おもろいなあ。』
この前の時は、野州烏山の一心齋貫の一口が御選に當つた。今度は誰のであらう？
『加賀の光家ぢやらう。』
『いや、今度こそお膝許の雲龍子に違ひない。』
下馬評とり〴〵の中に、期日が來て發表された名前を見ると、
津田近江守助直
とありました。
『助直？　どこの仁や？』
『大阪やさうな。』
『フーム、聞いたことのない名やな。』
『左様さ。しかしあんた越前守助廣はんを知つてやろ？　あの

仁のお弟子さんさうな。』
『フーム。』
　これが助直の出世の始まりでした。一躍して第一流の刀工と肩を並べるやうになり、刀劍に嗜好のある人々の註文が一時に殺到して來ました。
『聞いたか、助直が展墓の爲め歸國のついでに、當お城下に二三日滯在して、我等の需めに應ずるさうだな。』
『いや、もうお城下に這入つてゐるさうだ。どうする貴殿は？拙者は父にせびつて、是非一口依賴して見ようと思つてゐる。』
　赤穗の藩士達は、助直がどこか知らぬが當國の出身と聞いて、親しみを感じ、且つ名聲に吸ひ寄せられる好奇心も手傳つて、彼の鍛へた新刀を得たく思つてゐる者が少くありませんでした。
『昨日、お目通りが叶つて、殿から直々に大小一對の御下命があつたさうだ。拙者も一口依賴することに極めた。』
　間もなく、こんな消息が若侍の間に囁かれました。
　唯不思議なのは、熱心な二三人が、人に先んじて助直の宿を探し當ててわざ〳〵尋ねて行つても、いつも、
『生憎お留守でございます。』
　宿の主の困つた顏を見て歸るのが、はんで押したやうに極まつてゐました。
『亭主、どこへ行つてゐるか分らぬか。』
『へえ、それが朝早く出て夜遲くでなければお戻りがございませんので――。お客さまが尋ねて入らしつた時、御返事に困りますからと申して、お行先をお聞き致しますのでございますが、笑つて入らつしやるだけでお答へがございません。』
『フーム？』
　誰も小首をかしげはするが、さて、助直の振舞の謎を解き得た者はありませんでした。
　と、間もなく、近々に迫つたお月見の無禮宴の樂しい期待に、助直のことなどは忘れるともなく忘れられた時分になつて、
『明日の宴には、特に許されて助直が城中に召された上、我等に挨拶をするさうだ。』
『それは彼破格の光榮だな。』
『何でも殿におかれては、御領分內から高名の刀工を出したことをひどくお喜びとのことだ。』
『いかにもなあ。』

　　藍色の海の上なり須磨の月

　築山、芝生、枝振面白い松の木、泉水の水まで、蒼い銀色に

水の底の國のやうなシーンと動かぬ廣庭の眺めを前にした大廣間に、家中の人々が殘らず居並んで、膳部を前に、酒の氣を漂はして、締まりある中にもどこか寛いだ、樂しい人いきれが濃く流れてゐました。今年は長矩侯が御在國なので、同じ觀月の宴と云つても、『蔭祭』に對する『本祭』と云つた格で、何と云つても賑かさが表に浮き立つて感ぜられました。

上段の間には、長矩侯が脇息に靠れて、時々盃を口へ持つて行きながら、若侍達の興ずる隱し藝に微笑を含んだ目を向けてゐました。

上座には、痩せてヒョロ長い大野九郎兵衞、中背ではあるが肉付のいゝ大石内藏助、肥滿した奧野將監などが、ニコ〳〵とした顔を酒に染めてゐました。

宴酣に及んだ頃、いつの間にか、長矩侯の姿が茵の上から消えてゐました。

『ああ、お前が助直か。』

丁度その時、自分の前へ來て兩手を突いた助直に、よく瞬く目でジロリと一瞥をくれながら、かう云つたのは大野九郎兵衞でした。

盃をくれながら、

『お前は御領分の出身ださうだが、どこだ?』

『當御城下でございます。』

『フーム、それは淺からぬ緣ぢやな。屋敷へも一度來るがよい。』

『はい。生憎この度は忙はしない用を抱へてをりますので、或は御無禮を致すかも知れませぬ。』

『さうか。實は御領内出身のちなみもあること故、元來わしは新刀は好まぬが、一口打たせて遣はさうと思うてゐた。』

かう云つたら、高が職人、飛び附いて來るだらうと思ひの外、

『それはまことに殘念なことでございます。』

(此奴が!)

と思ふ一方、逃ぐるを追ふが人情──

お小夜様まゐる忠僕直助

『思ひ立つたことを遂げぬと云ふも何か不本意なものぢや。お前も、心殘りであらう。いゝわ、この席で依賴して遣はさう。』

『左樣でございますか。』

大野は、大刀をズイと助直の目の前に出すと、

『寸法はこれより二寸短く──。幅は、さうさな、年を取つたせゐか、それでは少し重い、二分も詰めて貰はうか。』

『――お見事な造りでございますな。』
『ハハハ、まあ自慢のつもりぢや。』
『お中も定めし――』
『まあ見てくれ。』
『拝見致しませんでも、存じてをります。』
『はて？』
『平安城の住、三條宗近でございませう。』
『助直、何か刀工の間では、わしのこれがそんなにも評判になつてをるのか。』
小さい目が一層激しく瞬いて、得意の色があり〱と、その痩せた皺の多い顔に盛り上つて來ました。
『いえ――』
と、助直は冷かに首を横に振つて、膝の上で指を折りながら、
『たしかあれは今から五年あと、やはり秋のことでございました。このお刀の御自慢から、岡島八十右衛門さまとやら仰しやるお方に、満座の中で恥をお與へになつたことがございましたでせう？』
『はあて。』
『御記憶で入らつしやいますでせう？』
『それが何と致したと申すのぢや？』
『いえ、唯風のたよりに、大阪でそんな話を耳に致しましたと申すだけのことで――。その風のたよりの申しますには、むごいことをする家老もあつたものだ、自分も百石取りに成り下つて、御家内に三年三月永煩ひをされて見ろ、などと申してをりましたつけ。――御免。』
スラリと鞘を拂つた秋水三尺、一目見るなり、さすがの助直も、名刀の威厳に打たれて心の襟を正さずにはゐられませんでした。素人ならば『目の果報』と云つても濟むでせうが、同じ道に修行の苦を積む身には、この刀の位の高さに、息苦しいまでの威壓をさへ感じずにはゐられませんでした。
早くもそれと見て取つた大野が、
『どうぢやな。新刀鍛冶中の名人の上手のと云はれても、古刀の前に出ては頭が上るまい。ハハハ。』
『大野さま。』
『何ぢや？』
『失禮ながら、このお刀は侍の魂にはなり兼ねませう。』
『何？』
『惜しいことに疵がございます。』
『何だと？』
『御覧なされませ、大事なところに疵がございます。』

助直の指さす個所を一目見るが否や、大野は大口あけて、

『ハハハ、槌を持たせれば小器用に打つか知らぬが、刀の目利にかけてはまだ嘴が黄いぞ助直。それは疵は疵でも、研ぎ疵ぢや。』

『御冗談を仰しやりませ。憚りながら助直は、槌を片手に二六時中鏨と睨めくらをしてその日を送つてゐるものでございます。研ぎ疵か鍛へ疵か、その見分け一つ附かぬ明き盲とあつては、折角受領した近江守が廢れます。たつて研ぎ疵と仰せあらば、論議は無益、この場で研ぎ疵でない證據をいつでも御覽に入れませう。』

『面白い。家傳來の寶刀にあたら非を打たれては、先祖に對して相濟まんばかりか、この大野九郎兵衞一代の面目にも拘はる。研ぎ疵でない證據とやらを見せて貰はう。』

『唯お斷り申して置きますが、――大野さまは物を粗末になさらぬ方とやら。研ぎ疵でないあかしの立ちました節は、この御佩刀二度とお役に立ちませぬ形になりますが、宜しうござりますな?』

『苦しうない。その代り助直、鍛へ疵でないと極まつた際はその場を立たせぬぞ。』

『お言葉には及びませぬ。御存分になさりませ。』

いつか一座は月見ることも忘れて、爭ふ二人を中に十重二十重に取り卷いて、凝視のうちにシーンと鎭まり返つてゐるました。

『恐れ入りますが、何か木質の堅いお机やうのものがございましたら拜借致したう存じます。』

助直の言葉に、やがて碁盤が持ち出され、彼の前に置かれました。

一禮して助直は、左の手に持ち替へた宗近の一刀を碁盤の上に横たへました。右手にかねて用意の小槌を振り被ると、膝を割つてキツと身構へた姿の清々しさ。五體に脈々と力が籠り、稍蒼みを帶びて引き締まつた細面に漲つた氣魄は、高い鼻からも、緊張した頰の肉からも、鋭い目の配りからも、目に見えぬ殺氣となつて一座を掩ひ包んだかと思はれました。

この一瞬の爲めに、主人も、愛も、喜びも、悲しみも、金も、命も、一生も、否あらゆるものを賭して惡戰苦鬪して來た彼でした。この一瞬こそは、文字通り彼にとつての一世一代でした。

肉體と精神とが、渾然として一體と化した時――その瞬間でした。

『エイツ。』

打ち卸した小槌の下に、キラリと燈火の影を切つて――と見る、鍔際五寸餘りを殘した刀身が、助直の手に命なき姿となつ

て握られてゐたのでした。
『いかがでございます大野さま。』
突き上げて來る喜びを、五年の間唯一筋に思ひ詰めてゐた望みが今叶つた最高潮の喜びを、復讐の快味を、ぢつと抑へて靜かにかう云つた助直、彼の血は、肉體の奧深く、高らかに凱歌を奏してゐました。
『……。』
大野は一言もありませんでした。興奮の醒めた目の色は、意外にも、屈辱を受けた憤りの炎を燃やしてゐませんでした。數百金を投じて購つた腰の物を廢物にしてのけられた落膽の激しさが、彼の表情をびつくりする程醜く歪めてゐました。
喜びの嵐の眞只中にあつて、助直はしかし、五年前の、あの、叶はぬまでも木刀をひツさげて斬り込まうとした時の、せめては火を放つて怨みを霽らさうとしたあの晩の、せつない口惜しさの一念を奧歯にギュツと噛んでゐました。
『これにつけても大野さま、金さへ出しやア武士の魂が身に添ふものと思ふのは、大きな考へ違ひと云はなければなりますまいね。今太平の御代だからいゝやうなものの、これがいざ鎌倉と云ふ時だつたら、こんな飾り澤山の疵物をたばさんでゐて、一體どうして御馬前の働きをなさるおつもりだつたのでせう。思つて見ただけでも、ぞつと身顫ひが出るぢやアございませんか。口の惡い方でも入らしつて御覽じませ、役にも立たぬ疵物を腰にしてゐるとは、ありや餘ツ程腰拔侍、祿盜人などと云ひ兼ねないでございましたでせうに――』
助直は今、五年前に岡島八十右衛門が浴びせられた罵詈雜言をそのまま大野の頭上に吐き返してゐるのでした。
『默れ下郎、世にも無禮の條々、そこ動くな。』
齒噛みをして立ち上つたと思ふと、九郎兵衛は小刀の欛に手を掛けました。
『ハハハ、お腹が立ちましたか。腹が立つたら人を斬つてよくば、大野さま、あなたなどは五年前に斬られてゐた筈。』
斬り附けて來る太刀尖を、つと一間も向うへ飛びすさりながら、
『五萬三千石淺野内匠頭さまから太刀打つことを命ぜられてゐるこの助直、斬つて濟むならさあお斬りなせえ。』

ふしぎな二人連れ

晴れた朝。だが、自然はまだパッチリと目をさましきらずに、沖の方や渚の松の梢に眠げに朝靄を絡ませてゐます。そんな早

くから、濱の漁師町では、魚河岸が立つてゐました。

『幾ら？　さあ幾ら？』

競つてる問屋のものの前に半圓を描いて、料理屋の板場のものや、近在への中賣りや、小賣りの魚屋などが、がや〳〵と符牒で値を附けながら指を立てたり寢かしたりしてゐる中に混つて、男と同じやうな印半纏を着た女の魚屋が二三人。

『はい御免よ。』

早いとこ仕入れを終へて、荷をかついで足早に町の方へ散つて行くもの、遲れて買ひ出しに來てソソクサと半圓の中に割り込むもの。

『魚いらんかな。』

女の魚屋の中で一番若い一人が、漁師町を出はづれると、すぐ觸れ賣りを始めました。姉さまかぶりにした手拭に朝日が白い。

やがて家並が途切れて、二三十間松並木が續く、その先がまた町。

ヒンヤリとした木下闇に、女のボテ振姿が吸ひ込まれて間もなく、うしろから、

『おい魚屋さん。』

『はい。』

振り返つた女の目の前に、頰被りで顏を隱した若い男が急ぎ足に追つて來る姿がありました。

『ああ、有り難え、やつぱりさうだつた。――おい、お小夜、俺だよ。』

頰被りの手拭をハラリと取つて步み寄つたのは、助直の直助でした。

女の顏には驚きと懷しさの表情が走りましたが、それも一瞬、すぐ消えて、

『いいえ、どなたでしたつけ？』

『厭だぜ、俺だよ、直助だよ。』

『さあ、私にも昔二世を云ひ交した直助と云ふいとしい人がありましたけど、その人なら、五年前大阪へ行つたきり、一度のたよりもくれない薄情男、今ぢや赤の他人の筈、その外に直助と云ふ方は存じませんが――』

『その直助だよ。』

『冗談でせう。止しておくれ、私はこの廣い世界に誰からも、お小夜の、俺のと、呼ばれる緣の結ぼれ一つ持たぬ一人ぼつち。――魚が腐ります、どいて下さい。』

『おツとツと、まあ待つてくれ、話があるんだ。』

『留めないで下さい、私ア生魚を商つてゐるんです。』

『そりやア知つての上だ。手間は取らせねえ、さうやつて荷をかつがれてゐたんぢやア、なんぼ何でも話が出來ねえ。まあ荷を下に卸しねえ。賴まあ。』

『お氣の毒さま。私は見ず知らずの他人から往來三途で物を賴まれる程暇な人間ぢやアありませんよ。どいて下さいツたら。』

『ぢやアまあいゝや。そのままで聞いてくんねえ。しかし相變らずのお小夜だな、さうやつて駄々をこねるところなんざあ。俺にはいつそ懷しい氣がする。』

『フン。』

『何は兎も角、まづ第一に俺はお前にあやまらなきやアならねえ。五年の間唯の一度もたよりをよこさなかつたのは、何と云つたつて俺が悪い。勘忍してくんねえ。』

『ホホホ、人を馬鹿におしでない。五年目にヒヨツコリ人の前に現れて、俺が悪かつたと云つて詫びさへすりや、どんな薄情な眞似をしといても、それで帳消しになると思つてゐるのかね男ツてものは。』

『まさかさうは思つてゐやアしねえやな。』

『厭だよ私は。勘辨しないよ。誰が人――。お前さんが百萬だら詫びをしたつて、私は一言だつて信用しないから。』

『構はねえ、信用されなくつたつて、俺はお前の目の前で、云ふだけのことを云やアそれで氣が濟むんだ。お小夜、お前さつき俺のことを薄情者と云つたつけが、俺ア薄情で一度もたよりをしなかつたんぢやアねえぜ。本當はそのあべこべだ。どんなに毎日たよりがしたくつてむずむずしたか分りやアしねえ。それをぢつと怺へて、筆を執らうとするこの手を叱り叱り、五年の間一度もお前に物を云ひ掛けなかつた俺のせつなさ、俺の氣持から云やアお前に褒めて貰ひてえ位のものだ。

『なぜかと云ふのか？ 別れる時、大阪へ落ち着いたら居所を知らせる約束はした。が、知らせて見ねえ、お前からすぐたよりが來るに違えねえ。お前からたよりが來て見ねえ、俺だつて木や石ぢやアねえ、人一倍熱い血の通つてゐる俺のことだ、すぐまた返事を書くに違えねえ。さうすると、俺の目の前にはしじゆうお前がゐることになるだらうぢやアねえか。俺アお前が

好きだ、好きで好きで堪らねえ、そのお前がしじゆういゝ俺の傍を離れずに附き纏つてゐるところを想像して見てくれ、俺は身を入れて仕事に夢中になれねえ勘定だ。まして小僧の時から年期を入れたんぢやアねえ、云はば中年者だ、その上、十年二十年年期を入れてゐる暇のねえ體だ、どうでも三五年の間に一人前の人間になつて、大野九郎兵衛の生きてゐるうちに、赤穂へ歸つて來なきやアならねえ望みのある體だ、と云ふことは、人一倍――いゝや、人の五倍は身を入れて修行しなければ一人前になれツこねえ。さう云ふ體で、一方でお前に魂を奪はれてゐた日にやア、神さまは見通しだ、俺の大事な望みを叶へさせて下さりツこねえ、第一、人間は一度に一つの望みしか遂げられないものだ。さう考へて、俺はお前の方を捨てたのだ。捨てたと云ふと聞えが悪いが、大野九郎兵衛への無念霽らしは待つてゐてはくれねえが、お前は――俺の心持をよく知つてゐてくれるお前なら、夫婦約束をしたお前のことだ、何としてでも待つてゐてくれるに違えねえ、俺はお前を信じてゐた。

『大阪へ着くと、俺は天滿の津田越前守助廣の弟子になつた。その日から五年の間、俺の口から云ふのもをこがましいが、自分でもよく勉めたと思ふ位、これツぽつちの暇も惜しんで仕事に精を出した。大抵毎晩二刻半(五時間)以上寝たことはねえ、掛け値なしに、一瞬間も無駄にした覺えはねえ、外のことは一切、俺の頭に這入つて來なかつた、一心不亂と云ふのは、大阪に於る俺の五年間見たいなことを云ふのだらう。炭の割り方、火のおこし方から始めて、――十年修行をしたものでなければ親方の向うへ廻つて相槌は打てねえ、また打たせもしねえと云はれてゐる相槌を、俺は三年目の春には打つてのけた。その時にやアさすがに親方もびつくりして、大勢ゐる弟子達に、ソレ手前達、直助を逃すな、べらぼうめ、三年やそこ等の年期で、そんな相槌の打てる譯はねえ、手前は一ぱし名のある刀鍛冶だらう、姿を窶して何か俺の秘法を盗みに來やがつたのだらう、手前達、直助をひツぱたいて音を上げさせろ、と、大層もねえ腹立ちよ。が、疑はれながらも俺は嬉しかつた。

『その時だ、俺はすべてを打ち明けて一部始終を親方に話した。それからと云ふもの、大變俺は親方から可愛がつて貰つた。そのお蔭で、松平阿波守さまのお腰の物を打つ相槌を打つことを許された。五年目の今年は、親方の情で大内へ奉るお守刀を、あらうことか、親方が俺の向うへ廻つて相槌を打つてくれて、俺に名をなさせて下さつた。この時の喜びは、生涯一度の大きな――さうして同時に二重の喜びだつた。恐れ多いことだが、全國から叡覧に供し奉つた八十口のお守刀のうちから、特に

俺の一口がお選びに與つた喜びと、さあ、これでいつでも國へ歸つて無念霽らしが出來る時が來たと云ふ喜びと。この日を境に、名もない中間奴の直助が、近江守助直となつた……。』

『まあ――』

ツンとすねて、始めは横を向いて話を聞いてゐるとも見えなかつたお小夜が、助直の話が進むにつれて、次第に話の眞實に動かされて耳を傾けて聞き入つてゐましたが、この時思はず目を耀かして、

『ぢやあ近頃お城下で噂の高い助直と云ふのは、直さんお前さんのことだつたの？』

『お前の耳にも這入つてゐたか。』

『這入つてゐたどころか……。それはさうと、肝腎の敵討ちは？』

『喜んでくれ、昨夜のお月見に、皆さまお揃ひの席上で、思ひ切り小ツぴどく旦那の無念を霽らしてやつた。』

『まあ嬉しいねえ。』

『旦那さまも――いや、御新造さまの喜んで下さりやうと云つたら――。俺のこの手を取つて、勿體ねえ、かうしてお前お戴きになるぢやアねえか。』

いつか助直は目一ぱいに涙を顫はせてゐるのでした。

『さうだらうねえ御新造さまとしたら――。旦那さまだつて、どんなにお嬉しかつたか知れやしないわ。』

『お二人ばかりぢやアねえ、大石さままで、意見の仕甲斐があつたと仰しやつて喜んで下さつた。俺アもう死んでも思ひ殘すことはねえ。』

『おや〳〵、お小夜ちやんこのところ型なしだねえ。』

『違えねえ。かよわい女の身を永いことおツぽり出して置いて濟まなかつた。苦勞させたことだらうなあ。』

『お前さんの苦勞に比べれば、私のは唯食べるだけの苦勞だもの、苦勞と云ふのも羞しい位だわ。』

『さうでねえ、食ふと云ふことは大變なことだ。よく立て通してくれたなあ。』

『さう云つて貰やあ私ア嬉しい。でも、正直、年の明けた時には途方にくれました。お前さんからはたよりは來ず、當てにしていゝものやら惡いものやら。餘ツ程岡島さまのお屋敷へ、お前さんの安否を伺ひに行かうかと、何遍思つたか知れなかつた。でも、私のところへさへたよりをよこさないお前さんが、岡島さまのところへたよりをよこしてゐる筈がない、さう思つて――さう思つたのが、私にはよかつた。梨のつぶてのお前さんを信じて、いつまでも待たうと云ふ氣になつたんです。さう

したら、それから先のことは、ひとりでにバタ〳〵と極まつてしまつたの。

『あかまんやではいろ〳〵に云つて私を引き留めようとしたけれど――看板を貸すから、商賣を續けてゐたらどうだ？ さうすれば、お前さんが歸つて來るまでには、小商ひをする位の元手は出來るだらう、さう云つてくれたけれど、あんな商賣をして拵へた元手なんか、お前さんが厭がるだらうと思つてね。何の彼のと云つても、私は心の底ではお前さんを信用してゐたんだね。歸つて來た時――一しよになつてから、後指をさされないやうにと、そればかりを考へて、――お前さんに痛くない腹をさぐられるのは死ぬより厭だし、さうかと云つて元手はなし、手に職はなし、私は思ひ切つてこの商賣を始めたのさ。

『こんな姿をしてゐれば、誰も色目を使ふものもなければ、袂引くものもありやアしないやね。お蔭で、後家が立て通せたと云ふ譯さ。ホホホ。

『でも、樂に體を持て扱ひ馴れた身には、始めのうちは隨分辛

かつた。冬になると、アカギレが割れて中の赤い肉がはじけ出て、水から手を出してゐる間の痛いことツたら。生まれて始めての苦艱だつた。直さん見ておくれ、こんな太い指になつてしまつた……。愛想を盡かされやアしないかねえ。』

『冗談云ふねえ。その太くなつた指を、俺はどんなに尊く思つてゐるか知れやアしねえ。俺は拜みたい位に思つてゐらあな。馴れねえ體で、よくお前堅儀の商賣を選んでくれた。禮を云ふぜ。』

『何だね水くさい。一厘二厘の利をせせつたお蔭には、お金の有り難みをしみ〴〵知つたわ私。これだけでも、無駄ではなかつたと思つてゐるわ。そりやアさうと、よく私が分つたねお前さん?』

『實を云やあ、知るまでに骨を折つた。赤穗へ着いてから毎日、

朝から晩まで、お前の行方を探すので痩せる思ひをした。ここと思ふ心當りはみんな尋ねたが、知れねえ。お前もまた、旨く知つてゐる人間の目の前から姿を消したぢやアねえか。お前を知つてゐさうなところは殘らず當つて見たが、みんな云ひ合は

せたやうにお城下にはもうゐまいと云ふ返事だつた。ところがあの何とか云ふ古い女乞食な――』

『あ、おかねさん。』

『さう〳〵、あれがお前を知つてゐて、魚屋になつてゐると教へてくれたんだ。』

『へえ、感心だねえ。時々魚が殘つたりすると遣り遣りしてるたけど、ヘエー、私を知つてゐたのかねえ。嬉しいぢやアないか。今日はこの魚をみんなおかねさんに遣つてしまはう。』

『さうしねえ、さうしねえ、二人にとつちやア結ぶの神だ。その笊も天秤棒もみんな遣つちまひねえ。ついでにお前の家も遣つちまひねえ。』

『ホホホ、さうは行かないやね、借りてゐる家だもの。』

『ハハハ、違えねえ。――さ、行かう。』

『行かうツてどこへさ。』

『知れたことよ。旦那さまのところへ御挨拶に行つて、それが濟んだら大阪へよ。』

『相變らず氣が短いんだねえ。御挨拶に上るんなら上るで、着物も着換へたいし、賣上げも少しは溜まつてゐるし――』

『そいつア强氣だな。勿體ねえ、取りに行かう。――おツと、お小夜、その荷はもう擔ぐにやア及ばねえ。』

神通不可思議の妖狸と大豪傑が
深山の廢寺に手に汗握る大爭鬪！

松山騷動 八百八狸

布裝美本 定價一圓（送料十二錢）

お家騷動を背景に妖獸と豪傑の大亂鬪！面白い〳〵未曾有の名講談、凄艶無比！

大日本雄辯會講談社版

『だつて、おかねさんに遣るんだらう。』

『いゝから俺に貸しねえ。』

『まあこの人ツたら。見つともないよ、男がそんなものを擔いで。』

『かまはねえから先へ行きねえ。』

『お止しツてば。後生だから。近江守助直の沽券に拘はるぢやアないか。』

『なあに、お前の舐めた苦勞の重さを、俺もちよいと味はつて

見たくなつたんだ。』
『優しいことを云つて泣かしておくれでないよ。』
秋の日に照らされながら行く、この妙な取り合はせの男女二人を、町の人達は寢起きの目を見張つて見送らないものはありませんでした。

嬉しい二人だよ
樂しい旅が
初旅が
二人を待つてゐるよ
秋の中國街道が
海の香
田の匂の中に
日を浴びて遠く見えるよ
（をはり）

義士銘々傳が、武士道の華であり、日本精神を高唱すべき代表的の讀物であることは、今更申上げるまでもありませんが、特に、小島政二郎先生の『新版義士銘々傳』は、その流暢な文章と、典麗な筆致とによつて、義士の面目を躍如たらしめ、從來の義士傳を甦新せしめた名作と、各方面の絶讃を博してゐます。順次掲載の各篇何卒御愛讀をお願ひいたします。
なほ、すでに本誌に掲載せる『新版義士銘々傳』は、單行本として本社から出版されてゐます。御愛讀の諸賢中、まだお讀みにならない方々は、此の際是非お讀み下さるやうお奬めいたします。
（定價一圓六十錢送料十四錢）

次號掲載の

新版義士銘々傳

はぐれ鳥妻怨詩

これは、義士中でその人ありと知られた磯貝次郎左衞門と、その美しき妻とに絡まる、數奇、悲壯を極めた物語、作者が素晴らしい自信をもつて執筆した傑作中の傑作、切に御期待を乞ふ。

現代小說

青春の鬼

水守龜之助
富田千秋畫

一

……不束なものでございますが、今後は何卒、眞實の妹とおぼしめして、おかばひ下さいまして、お導きの程、くれ〴〵もよろしくお願ひ申しあげます。この上は、一日も早く御歸省の程、心よりお待ち申して居ります。先は右御挨拶旁お願ひ迄あら〳〵

ゑみ子

御兄上様
　御許に

ある日、杉浦隆夫の許に、桃色の角封筒に、ローズの香りの高いレターペーパー。それに、ペン書きの跡も美しい、かうした文句の手紙が舞ひ込んで來たのであつた。

突忽として、降つて湧いたやうに出來た、まだ見ぬ義妹のことをいろんな風に想像してゐると、隆夫の胸は踊り、血が沸き立つのを覺えた。『馬鹿な奴だ！』と、自分で自分を叱りつけながら。

隆夫は、金澤の高等學校に在學の青年なのだが、母は三年前に病歿して、軍醫上りの町醫者である父は、氣樂ではあるが、わびしく暮してゐる。親一人、子一人になつたわけで、隆夫は、家政婦などに世話をさせてゐる父の孤獨を慰めてやりたい氣持は十分ありながら、いろんなことから互ひの間が氣まづくなつて、ともすると反撥するやうになつた。父の命に背いて、醫科を厭つて、文科に志望したことなども、二人を疎隔させる大きな原因となつてゐた。

そんなわけなので、隆夫は、休暇が來ても、東京の自家へ歸ることをしぶくつては、やれ旅行に出かけるの、友人の郷里を訪問したいだの、研究のために居殘るだのといつて、なるべく歸るまいとするやうになつた。生みの母の慈愛から離れて、殺風景な家庭に歸ることは、父とのいきさつがないまでも、若い彼には嫌に

なるのも無理からぬことではあつた。

　ところが、今年の四月は、丁度、亡母の三周忌に當るので、この休暇には、たとへ遲れても、歸らねばならぬと思ひ煩つてゐる矢先に、父から、此度、板野あき子といふ年四十の婦人を後妻として家庭に入れたから承知をしてほしい。あき子には、ゐみ子といふ一人の娘があるが、それも行く〳〵は入籍させてもいゝと思つてゐる。何分無人の家で、醫者といふ職業柄、人手も必要だから、却つて、幸ひではないかと思つてゐるといふやうな手紙を受けとつたのである。

　その時、隆夫は、父に對して一々尤もだといふ理解をもちながら、むら〳〵と湧きあがる反感を覺えた。そして、親子二人の見知らぬ他人が、自分の家へ闖入して來て頑張つてゐる樣子を想像するだに、胸がむか〳〵つとして、一層、歸るのが嫌になつた。自分に豫め相談をしてくれなかつたことも不服であつた。で父には返事も出さずにゐると、後妻のあき子から試驗が濟んだらすぐ歸つてくれと、再三手紙が來たし、今また、かうして、娘のゐみ子からの優しい純な氣持を見せた手紙を受けとつて見ると、根が善良で純情な隆夫は、それに、ぐん〳〵とひきずられて、どうでも歸らねば惡いやうな氣持になつて來るのであつた。

色彩のない家庭に育ち、肉親の兄妹の味を知らぬ隆夫が、今年、十九だといふゐみ子に對して、一種の好奇心と、ほのかな愛着を感ずるやうになつたことは、青春の彼としては、極めて、自然なことでもあつた。

（しかし、見て、びつくりの方で、幻滅を感じさせられるのかも知れないぞ！）

歸京の準備をせつせとしながら、かう苦笑を浮べて、獨語して見ることさへが、隆夫には、これまでにない、新らしい歡びであつた。

　いつになく土地の名産などを土産にして、大久保余丁町の杉浦醫院へ歸つて來た隆夫は、先づ、聽き慣れぬなまめかしい女の話し聲が洩れ、父の一段と若やいだ幸福さうな笑ひ聲が聞えるのに、異樣なときめきを覺えずにはゐられなかつた。

　玄關にゐた藥局生の注進に、奧の方では、ざわめきが起つて、ばた〳〵と迎へに出て來たのは、當のあき子と、ゐみ子であつた。

『おや、隆夫さん、お歸んなさいまし……』

『お兄さま、お歸り遊ばせ！　隨分、お待ちしてゐましたわ。』

　これが、歡びと、好意に滿ちた母と娘の最初の挨拶であつた。

隆夫は、われにもなく、妙に照れて、どぎまぎした。化粧料の香ひの立ちまよふ中にはつと咲き出た二輪の花のやうな、あでやかな姿――。これは、また、何と想像と違つてゐたことだらう。あき子の方は、お化粧のせゐでもあらうが、三十四五、そこ〳〵としか見えず、細面のきりつとした、言葉も齒ぎれのいい東京辯で、姿もすらりとして品位があつた。ゐみ子は、母親と瓜二つで、ちよつと見には、姉妹かとも思はれる程であつたが、若いだけにふくよかで、フレツシユで、モダン味があつた。

晩酌後の微醺を帶びて、にこ〳〵顔でゐる父の謙三のところへ行つて挨拶をすまし、それから、義理の母と妹に改めてひき合はされた。隆夫は、何となく面はゆい氣持で、勝手の違つたあたりの樣子に、そわ〳〵と落ちつかなかつた。

『お兄さま！　どうぞ、お風呂へ……』

ゐみ子は、まるで、女中のやうに、まめ〳〵しく、立ち廻つてゐたが、こんな風に勸めに來たりした。

隆夫が湯殿へ立つと、ゐみ子は、あとから肌着やタオルなどを、ちやんと揃へてもつて來てくれた。隆夫は、ゆつたりと、湯に浸りながら、何となく幸福感を覺えた。

（だが、一體、おやぢは、どこから、あんな女をひつ張つて來たんだらう？　誰が媒介役をつとめたのか知ら？　どんな境遇、素性の女達なのだらう？）

と、疑惑といふ程ではないが、次から次へと考へ初めると、小說的の空想が、むらがり起つて、無限に擴がつて行くのであつた。

二

隆夫は、身内に熾烈な感情をかくしてゐるやうな性格だつたが、表面は、きやしやで、柔和さうで、血色もよい方ではなかつた。唯、高等學校の學生氣質によつて、さうした纎弱感は、僅かに救はれてゐるといつた風だつた。

父は、矢張、苦手で親しめなかつた。妙に人見知りをする隆夫は、あき子にもうちとけることがなか〳〵むづかしかつた。ゐみ子にも同樣ではあつたが、互ひに、若くて話が合ふ上に、彼女の方から進んで近づいて來て、慣れ〳〵しく話しかけて來るので、大いに助かつた。

だが、ゐみ子なる異性は、隆夫にとつては、何といつても、惱ましい存在であつた。日が經つにつれて、いよ〳〵益〻チヤーミングになつて行くゐみ子をば、隆夫は、どうしても、自分の妹だといふ氣持になることが出來ないのであつた。

『お兄さまは、あたし達のやうな厄介者が出來たことを、うるさいとお思ひでせうね。』
ある夜二階の隆夫の書齋に、紅茶を運んで來たゐみ子は、そのまゝ坐り込んで話してゐたが、ふつと、かう呟くやうにいつた。
『そんなことないですよ。どうして……？』
隆夫は、若い女性の媚態だと思ひはしたが、つよく否定するやうな調子でいつた。
『だつて、厄介者なんですもの。あたし、母が、こちらへ參ることになりました時、職業婦人になつて自活する決心でゐましたのよ。でも、こちらのお父さまが、大變、親切におつしやつて下さいましたものですから……』
『それでいゝぢやないですか。ちつとも氣兼ねすることはないでせう。僕は、何とも思つちやゐないし、父も、一人の娘が出來たやうな氣がして、きつと、歡んでゐるでせうよ。』

『でも、あたし、なんだか、すまないやうな氣がいたしますわ。』
『そんなことは、考へない方がいゝでせう。』
『お兄さまが、そんなに仰有つて下さいますと、あたし、本當に、涙がこぼれる程、うれしく思ひますわ。』
ゐみ子は、かういひながら、面を背けたが、瞼にきらりと涙が光つてゐるのであつた。
隆夫は、胸がむずがゆいやうに感じられ、ゐみ子の感情が眼に見えぬ、えたいの知れない繩か紐になつて、こちらの神經にからみついて來るやうな氣がした。さうした快

い壓迫に、ちよつと口を噤ませられたが、急にむらく＼と、もどかしい氣持がつきあげて來た。たとへば、一氣に、この女の心臟を摑んでやりたいやうな、また、徹底的に、素性や、氣持を知りつくしたいやうな……。さういふ焦燥から來るものであつた。

一と時の互ひの沈默も、却つて、意味ありげな無言のさゝやきを交してゐるやうな氣持を與へられて、ふつと、合つた二人の視線は、かちりと閃光を發したやうに感じられた。

『ゐみ子さん、いつか、あんた自身について、詳しいことを聽かせてくれませんか？　何だか、さういふ氣持が僕にあるんだが……』

隆夫は、咽喉に聲がひつかゝつて、嗄れるのを[illegible]きまり惡く思ひながら、な[illegible]はない風を見せ、かまをかけるやうにいつて見た。

『……あたしの身の上話……！』

ゐみ子のうるんだ眼が怪しく光つた。

『えゝ、まあ、さういつたやうなもんですが……』

『あら！　あたし……』

ゐみ子は、かういつて、ちよつとしなだれかゝるやうな姿態を見せてから、後は口の中で濁してしまつた。が調子を變へて、

『えゝ、いつか、屹度、いろ＼／＼お話いたしますわ。それまで待つてゝ下さいね。』と媚びるやうにいつた。

隆夫は、その一語で滿足するより外はなかつたが、矢張、もどかしい氣持が尾をひいてゐた。

間もなくゐみ子は、母に呼ばれて行つてしまつた。隆夫は、急に、大切なものを奪はれたやうなさびしい氣持で、今迄、ここに坐つてゐたゐみ子の面影を追ひながら、いつまでもぼんやりと空想に耽つた。

あの母子には、何か、秘密があるのではあるまいかと疑つて見たり、父にはゐみ子を自分と結婚させたい下心があるのではあるまいかと邪推したり、掴へどころのないゐみ子の心理をあか、かうかと想像したりしてゐると、隆夫の心は怪しくもかき亂されるばかりであつた。(自分は、ゐみ子に戀をしてゐるのではあるまいか。でなければ、このやうに彼女のことで、心を煩はされる筈はない!)と、思ふと、嵐のやうに動悸が昂つて行くのであつた。

父と同じ醫者の高瀬といふ人が訪ねて來た時、隆夫は、會つて挨拶するやうにと父から命ぜられた。そして、父はかうつけ加へた。

『……あき子のことで、一方ならぬ世話になつてゐるから……』

『ぢや、高瀬さんが媒介者といふわけですか。』

『うむ。さうぢや……』

謙三は、些のあいまいさもなく、きつぱりと答へた。

隆夫は、それで、何やらほつと安心されたやうな氣がして高瀬に挨拶をして丁寧に、お禮を述べた。好々爺といつた感じの高瀬は、暫く話してゐるうちに、

『御子息と、お孃さんとは、丁度、似合の夫婦ぢやがね。ハハハツ……』といつて、冗談らしく笑つた。

隆夫は、はつとして、赧くなりながら、父の顏色を偷むやうに見たが、意志不明瞭な表情をしてゐた。隆夫は、何だか座に居たゝまらぬやうな氣持になつて、直ぐひき下つたが、いつまでも顏がほてつてゐるやうに感じられた。

兩親とも福岡縣出身だつたので、こちらに親戚とてもなく、立ち入つて後妻の世話をする人はない筈だが、と思つてゐたので、隆夫は、高瀬なる人物が現れたことによつて、あき子の身分や、素性が保證されたやうに思ひ、ほつとしたのだつた。

而も、高瀬のあの一場の冗談も、父やあき子の氣持の片鱗を反映させたものではあるまいかと、勝手な空想を恣まにするやうになつた。何となく、行く／＼は、ゐみ子が杉浦姓を名乘るやうなことがあつても、それは、妹としてゞはなく、自分の妻としてゞあらうといつた風な。……

そんなわけで、隆夫がゑみ子に對する愛着は、加速度的に高まつて行くのであつた。それは、彼自身にも不可抗力で、ちよつと心と心とが觸れても、直ぐぱつと燃えあがりさうな危險性の燃料のやうに思はれた。

ゑみ子は、寧ろ、平氣で馴れ親しんで『お兄さま！　お兄さま！』といつてなついた。それを母のあき子の方でも、歡んでゐるらしく、氣ぶりにも警戒するやうな樣子は見せなかつた。

（父は……？）と、隆夫は、時に自問することがあつた。それには、直ぐ答へは出ないで、寧ろ、自分ながら嫌な氣がしたが、父の考へは、確めて見るまでもないことのやうにも思はれた。

ある夜、隆夫は、ゑみ子の柔軟な肉體を抱擁して、熱い唇をもつて行かうとして、夢から醒めて、ぎよつとした。全身にぬる／＼と、盜汗をかいてゐて、戰慄を覺えるやうな不氣味さだつた。

（あゝ、もう仕方がない！）

隆夫は、自分で自分を制しきれぬ力を感じて、かう、惱ましく心の中で叫ばずにはゐられなかつた。

三

亡母の三周忌の法養は、四月の上旬に營まれた。その夜、杉浦家では、神樂坂の料理屋で、極、內輪の小人數を招いて饗應した。その席へは、あき子だけ列したが、傍の見る眼にも、何となく肩身が狹く、さびしさうに思はれた。隆夫は、それを心から氣の毒に思つた。

留守居をしてゐるゑみ子のことを思ひ出すと、隆夫は、急に歸りたくなり、口實をつくつて、一足先に辭したのであつた。いろんな複雜な思ひに胸をかき亂されながら、せか／＼と歸つて來ると、少しく飮み過した酒の醉も手傳つて、息苦しい位であつた。

ゑみ子はうれしさうに飛び出して來たが、一と目彼の顏を見ると驚きの表情で、

『お兄ざま！　どうなさいましたの？』と、憂はしげに訊いた。

『いや、別に……』

隆夫は、突つ立つたまゝ、ゑみ子の顏をぢつと見つめ、怪訝さうにいつた。

『あツ！　そんな怖い顏をなすつちやいや。あたし、今晩は、何だか怖くつてたまらないやうな氣がするのですよ。』

ゑみ子は、奥の室へ一緒に行かうとして、眞劍に訴へるやう

にいつた。

『どうして、怖いの……？　僕の顏までが……』

『どうしてだか、あたし自分でも解らないんですけれど……』

『何も、怖い筈はないんだがね。』

隆夫は、顫へ聲でいつたが、いつの間にか、えたいの知れない運命の力に、ぎゆつと全身を摑まれてゐるやうな氣がした。而も、その運命が、(今だ！　今だ！)と、隆夫の耳に囁いてゐるのであつた。

『もう、お休みなさいよ。お疲れになつたでせうから……』

ゐみ子が優しく、劬はるやうにいつた。

『ゐみ子！』

隆夫は、われを忘れて、息を喘ませながら、かう呼びつけにいつてから、

『僕は、君を愛してゐるんだよ。戀してゐるんだよ。……あゝ、苦しい！』

『あら！　何を仰有るの？　今晩は、本當に、どうかしてゐらつしやるわ。』

ゐみ子の美しい顏には、怖れと、驚きと、防備の氣持が、露はに濃くにじんでゐた。

一旦、告白した隆夫は、も

う後へはひかれない氣持だつた。いや、ゐみ子の方に、意外にも、冷たい防衛の氣持があるのを見てとると、却つて、積極的に突進する猛志が燃え上つて來た。

『僕の氣持が分つてるなら……。そんなに僕を怖がる必要はないだらう？』

隆夫は、かう熱にうかされた病人のうは語のやうにいひながら、いきなりゐみ子に迫り寄つて、肩に手をかけて、ぐいつとひき寄せながら、接吻しようとした。

『そんな亂暴なすつちや、いけません！ いけませんたら……』

ゐみ子は羽搔締めのやうにされて、ばたばたと悶えあがきながら、遁れ出ようとして、ふり絞るやうにいつた。

『ほ、ほ、僕の愛をうけ入れてくれないのか！ 接吻だけでも許してくれないのか。』

隆夫は、平素の溫健さとは打つて變つた狂暴性を發揮して、無理無體に思ひを遂げようとしたが、やつと、ゐみ子の白い額に唇が觸れた時、表の方で誰かゞ歸つて來た氣配がしたので、さすがに、彼も、ぎよつとしてわれに返り、ゐみ子を突き飛ばすやうにして廊下へ出ると、そこで、ばつたりあき子にぶつゝかつてしまつた。が、ものをもいはずにすれ

違つたまゝで、二階へ駈けあがつた。そして、毛布をひき出して電燈を消し、外套のまゝで、頭からひつ被つて寝轉んでしまつた。が、いつまでも、獸のやうに眼を睜り、息を喘がせてゐた。

敏感なあき子が、ゐみ子の様子を見て、變だと思はないわけはあるまい。ゐみ子も仕方がなくなつて、自分のしたことをほのめかすかも知れない。若しも、それが、父に知れたら？――いや、それ位のことは恐れはしないが、ゐみ子の拒絶は、今の自分にとつては致命的ではないか。隆夫は、千仭の谷底へ、彼女の無情な纖手によつて、突き落されたやうな氣がした。かつて、かういふ經驗をもたない彼は、ゐみ子の心理が、どうしても分らないのみか、寧ろ、背かれ、恥ぢしめられたやうに感じたのであつた。

(よしツ！　明朝は早速、金澤へ行つてやらう！)

隆夫は、憤激と、失望とで、居ても立つてもゐられないやうな氣持で、かう決意せざるを得なかつた。

翌朝は、皆なが驚いて留めるのを、隆夫は、强情を張つて、どうしても行くといひ張つて、小型のトランクを離さなかつた。その様子を見ると、まるで狂氣も同様で、眼は血走り、唇は顫へてゐるのであつた。

『留めるな！　留めるな！　勝手にさせとくがいゝ……』

父の謙三は、まだ、朝寝をしてゐたが、床の中から荒らく〳〵しく怒鳴つた。後妻に不滿でもあつて、母の三周忌にぶつゝかつて、それが一層、高じて爆發したものと感じたらしかつた。

隆夫が、荒らく〳〵しく玄關を出ようとすると、後から、ゐみ子が追ひ縋つて來た。そして涙に眼を瞬かせながら、

『……お兄さま！　これをどうぞ、御覽下さい。あたしが、昨夜眠らないで書いたものですから……』と、訴へるやうにいつて、手早く、そつと彼のポケツトに封筒を捻ぢ込んだ。

隆夫は、それに對して、一語でも優しく酬いてやりたかつた。だが、行きがかり上、默つて出て行くより外はなかつた。かうなると、最早、誰も留めはしなかつた。通りへ出て、タクシーに乘つたが、涙がはふり落ちて仕様がなかつた。ゐみ子の姿が、幻となつてたえず眼前にちらついた。

(どうして、自分は、輕率な、見つともないことをして出て來たんだらう？)

やがて、悔恨の情がむら〳〵とこみ上げて來たが、ポケツトにあるゐみ子の手紙に氣づくと、そこには、貴重な秘密と、彼女の魂が籠つてゐるやうな氣がして、俄かに緊張し、一種の期待に心が彈むやうになつて來た。

上野驛へ着くと、隆夫は、待合室の隅へ行つて顔をかくすやうにして、早速、ポケットを探つて手紙をつかみ出した。

四

隆夫は、金澤へは行かずに、信州の柏原で汽車を降りてしまつた。輕井澤、小諸、長野、いづれのところでも下車を誘惑されたが、たうとう、柏原まで來たといふのは、彼の頭腦には、まだ見ぬ野尻湖への憧れが無意識のうちに働いてゐたのかも知れなかつた。

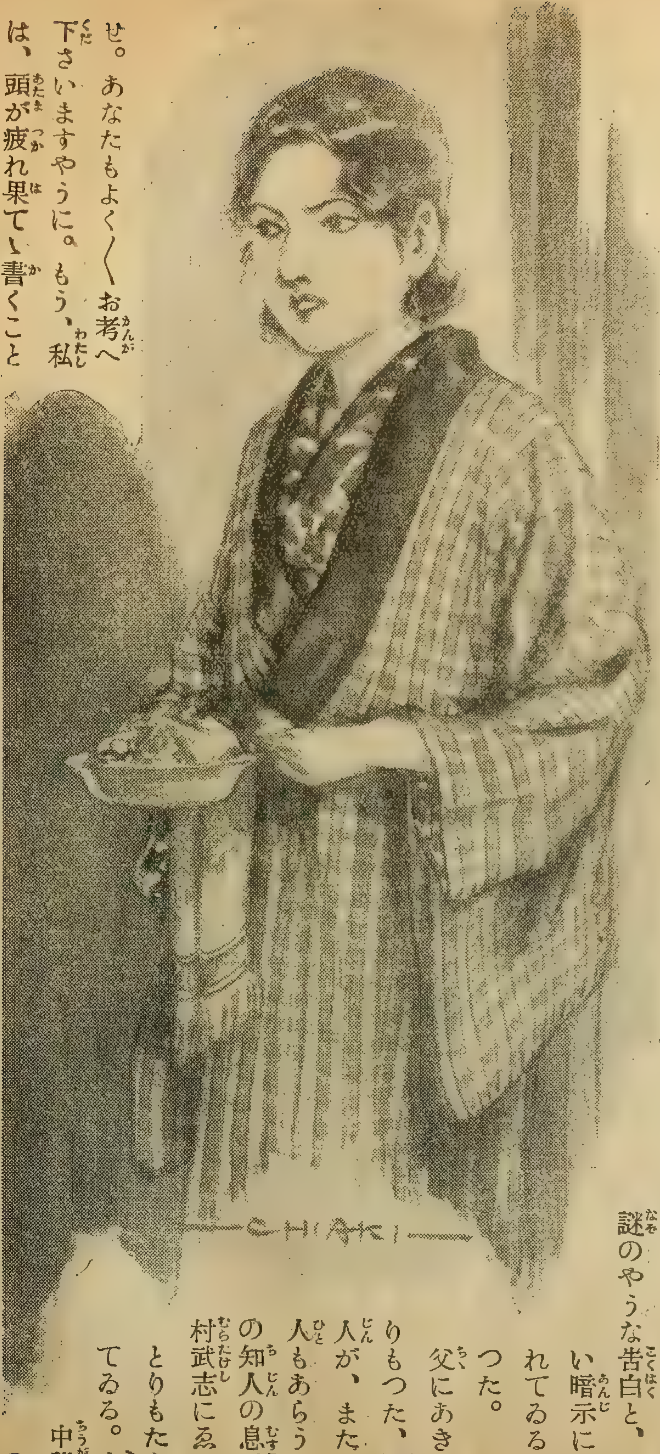
だが、目的と意志を失つたやうな隆夫は、東の野尻湖の方へは向はずに、西の方、戸隱山への道をとつて、ふら／＼と歩いて行つた。而も、いつしか、名もない山路に迷ひ入つたのも氣づかず、當もなくどこまでも歩いて行くのであつた。

お兄さま、すべてをお許し下さいませ。でも、いつか、私の身の上話を申しあげますとお約束しましたのに、それまでお待ち下さらなかつたのを殘念に存じます。私は、初めからお兄さまをお慕ひ申してゐました。しかし、私は、實の父を知らずに育てられて來たやうな悲しい運命の子でございますし、それに、幼少から長い間、母とも別れ／＼になつて、他家に預けられてゐましたので、母の身の上についてすら詳しいことは分つてゐないやうな有樣でございます。それが、不思議な運命の手によつて、お兄さまにひき合はされたのでした。私は、お慕はしさに心の中で煩悶いたしました。それを早くも見ぬいた母は、お前には他に結婚すべき人があるのだから、過ちを犯してくれては困る。必ず身を謹んで、隆夫さんを實の兄と信じておくれ。さうしてくれぬと、私自身まで破滅に陷ることになるのだからと、涙を流しながら申しました。でも、それ以上のことは申してくれないのでございます。私の悲しみは、增すばかりでした。でも、却つて、眞の兄妹のやうにして暮して行ける方が幸福かも知れないと諦めるやうになりました。それが、今晩のあの出來事です。私は、何を考へる餘裕もなく、お兄さまに隨分、失禮をいたしました。その上、母からいろ／＼な疑ひをうけてなじられたのでございます。母の申しますには、私は、あの高瀨樣の御盡力で、將來は木村武志といふ方と結婚させられることに話が進んでゐるとのことでございます。木村武志といふ方は、お兄さまのかつての御親友で、今年帝大にお入り遊ばした方といふことではございませんか。私の心は亂れるばかりでした。餘りにも苦しい立場にある身を考へますと、私は、どこかへ行つて、一人になり、皆さまの眼の前からかくれてしまひた

いやうな思ひがいたします。その時の母の意味あり氣な言葉から察しますと、ひよつとすると、私といふ女は、お兄さまとは、きつても切れない血のつながりがあるのではないかと考へられるのでございます。私は、すつかり恐ろしくなりました。お兄さま、どうぞ、私を哀れとおぼしめし下さいませ。あなたもよく／＼お考へ下さいますやうに。もう、私は、頭が疲れ果てゝ書くことが出來なくなりました。やがて夜も明けませう。これをごらん下さいましたら必ず／＼お破り捨て下さいませ。折を見て、書き洩らしましたことを申しあげませう。

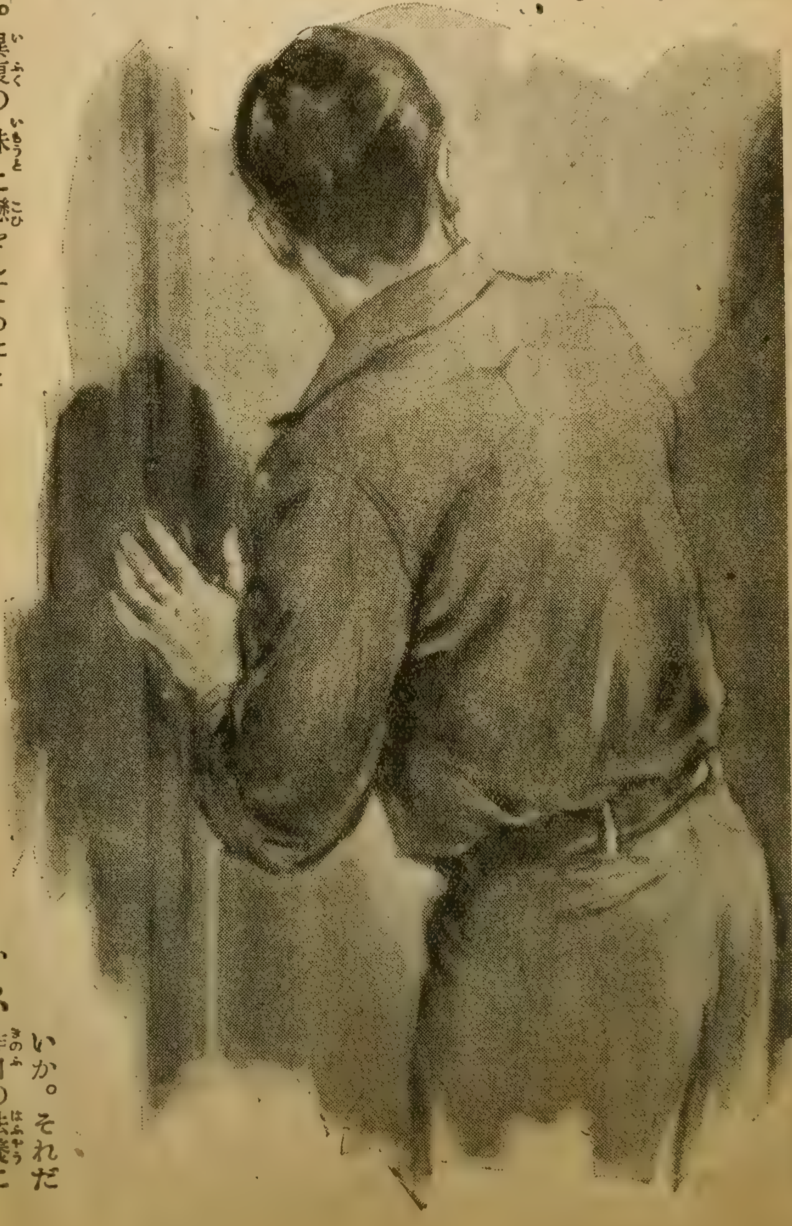
隆夫が、上野驛の待合室で、こつそり讀んだゐみ子の手紙には、かう書かれてあつたのだ。期待はすつかり裏切られたばかりか、剰へ、考へれば考へる程、謎のやうな告白と、恐ろしい暗示に滿たされてゐるのであつた。

父にあき子をとりもつた、高瀨老人が、またもや、人もあらうに、その知人の息子の木村武志にゐみ子をとりもたうとしてゐる。木村は中學時代の友人



で、學問上の競爭者でもあつたのだ。何といふ皮肉な運命であらう。しかし、それはすべて、父の指金であるかも知れない。そんなことはどうでもいゝとして、ゐみ子の身の上は、果して、謎のやうなものであつた。而も、この、自分とは血の繋がりがあるかも知れないといふのだ。それは、一體、どう解釋していゝのか。ゐみ子は、父のかくし子であつたとでもいふのだらうか！

こゝまで來ると、隆夫は、がぁんと鐵槌か何かで腦天をうち下ろされ、うちのめされたやうな氣持に壓しつぶされた。異腹の妹に戀をしてゐたといふ呪はしき運命の惡戲を自覺した驚きと、悔いと、苛責とが、一時に、襲ひかゝつて來たからだ。だが、三年前の母の死！あの不思議な急死と、あき子とに何か關連があるのではあるまいか。それだから、昨日の法養にも、あき子は、さながら罪人のやうにうち悄れ、ゐみ子は、また、ひどく怖がつてゐたのではあるまいか。迷信を拒け、科學を信ずる隆夫も、そこに何か恐ろしい秘密が潛んでゐるのでは



あるまいかといふ疑惑に捉はれると、忽ち、頭腦は均衡を失つてしまつた。

　だから、その後の彼の行動は、全く精神的統制を失つた夢遊病者のやうになつてしまつたのであつた。そして、日の暮れかかつた早春の山國の大氣の、だん〳〵冷えて肌に沁み、凍えるやうに寒いのも忘れて、ぽかんとした表情をして、うつろな眼で空を仰ぎながら、どん〳〵と森林地帶の方へ迷ひ込んで行つたのだ。時々、夢から醒めたやうにわれに返ると、（何のために、何をなすべくこんなところへ來てしまつたのだらう？）と、立ち留つて自分に問うたり、ゐみ子のかくれてゐるところを探りにでも行くやうな妄想に耽つたりしたが、遂には、（水を飲みに溪流を求めてゐるのぢやないか！）と、氣づいて、さびしい笑ひを浮べるのであつた。

　最早、深夜とおぼしかつた。春にはめづらしく晴れ渡つた空には、無數の星が、案外近いところで、ちか〳〵と囁き交してゐるやうに頭上に仰ぎ見られた。山々は、黑々とした凸起物のやうに、空とのけぢめをくつきりと際だたせて、四方に群がり、聳つてゐた。寒冷な山氣は、ひし〳〵と身に迫り、どこからともなく起る嵐の音は波の音のやうに吹き來り吹き去つて行つた。やがて、隆夫は、自分の立つてゐるのは、岩石の上であることが分つた。眼の前を見ると、闇より外には何もなかつた。視線の落ちて行くところが、深い崖であることは、だん〳〵と感じで分るやうに思はれた。

　隆夫の頭腦には不思議な靈感のやうなものが閃いた。さうして、淨化の火と、救ひの水とが、その崖の下にあるやうな氣がするのであつた。しかし、それは『死神』の誘惑であることはいふまでもなかつた。

　隆夫は、突嗟の決心で、丁度、水泳の選手がダイヴィングを試みる時のやうな姿勢で、前方に兩手をのばして、巖頭から、崖下を目がけて、身を躍らせて飛んだ。が、忽ち、木の枝のやうなものにひつかゝつてぶら下り、それが外れたかと思ふと、ごろ〳〵と急坂を轉げ落ちて行つて、さうして、顏面をいやといふ程、岩角のやうなところへぶつゝけた。眼からは火を發し、熱い血潮がぱつとしぶいたやうな瞬間の感覺があつた。それから後も、截り立てたやうな岩壁だか、崖だか分らぬやうなところを、石塊のやうに奈落の底に轉落して行つたが、やがて、氣が遠くなつてしまつた。最後の記憶は、大きな一つの星の光がつよく網膜に映じたやうな印象であつた。――

五

隆夫が、原因不明の家出をしてしまつてから、早くも五年の歳月が過ぎ去つて、全く、行方不明なのであつた。あるものは、自殺したのであらうといひ、未だに、失踪であると信じてゐるものもあつた。無論、その當座は、出來得る限り捜索に努めたのだけれど、どうしても分らなかつた。父の謙三は、似寄りの自殺者があるとの知らせで、檢分に出かけて、空しく歸つて來たことが二度もあつた。

謙三は、どこかに隆夫が生きてゐるものと思ひ、失踪と定めてゐる一人であつたが、いつしか、諦めてしまつた。それより外に仕様はなかつたからだ。

一番悲み、恐れ、嘆いたのは、身に覺えのあるゐみ子であつたが、しかし、自分にのみ罪があるわけはなかつたし、唯、早まつたのは、自分と隆夫とは異腹の兄妹ではないか知らと疑つたことであるが、それも、少女にありがちなローマンチツクな考へに過ぎなかつたので、さして、深く良心の苛責をうけはしなかつた。

要するに、若い日の過ち、失策が、いや、冷酷な運命に操られて、あゝしたことになつてしまつたのだと、考へるより外はなかつた。現に、ゐみ子は、あの木村武志ではなくて、醫専を三年前に出た島田清行といふ男を養子に迎へさせられて、杉浦家を繼ぐやうな形で納つてゐるのだから、隆夫は、結局、貧乏籤を引いたことになるわけであつた。

ところが、ゐみ子は、結婚して初めての正月に、スキーの好きな夫の清行に伴はれて、赤倉へ出かけて行つた。さうして、面白く遊んでゐたが、その宿屋の雇人に、一人の人相のよくない若者がゐた。火傷か、傷痕か、顔の半面が潰されたやうになり、また、その半面にも無慘な傷痕があつて、眉も削りとられてゐた。そんな風で、まるで、お化けのやうに不氣味であつたが、人からは調法がられ、愛されてゐる樣子であつた。

清行は鬼のやうだと云つたが、ゐみ子は痛々しくて正視したことはなかつた。ある夜、湯殿から歸る途中、ゐみ子は、その陽さんといふ若者に擦れ違つた。すると、若者は、丁寧にお辭儀をして『御機嫌よろしう……』と、呟くやうにいつた。ゐみ子は、その意外な言葉よりも、聲音に、何かを感じさせられて、悚然とした。その時の眼の光は、いつまでも忘れられないやうな氣がした。

ゐみ子は、夫には何もいはずに、いろ〳〵と考へてゐるうちに、ふつと五年前に別れた時の隆夫の眼の光と、聲音とが、あの若者に共通してゐるやうに思はれ出した。そんな馬鹿なことをと懸命になつて否定しながらも、後から〳〵と湧いて來る妄想に惱まされた。

『あなた！　もういゝ加減にきりあげませうよ。』

ゐみ子は、たうとう鼻聲になつて、歸京をせがみ出した。
『もう、飽きた……？』
淸行は、別に、不思議がりもせず、氣輕にいつた。
『えゝ、それに、もう歸らないとお父さまに惡いでせう？』
『それもさうさね。』
淸行は、妻のいふことなら、何でも聽いてやるといつた樣子であつた。
かくて、夫婦は、早々に赤倉溫泉をひきあげて歸京したのであつた。
ゐみ子が持ち歸つた荷物の片づけをしてゐると、思ひがけなくも、旅館の封筒を使つた自分あての手紙風のものを發見した。不審に思ひながら恐る〳〵開いて見ると、彼女は、氣絕せんばかりに驚いた。その中から、かつて、隆夫と別れる時に渡した自分の手紙が、黑い血に染んで、くちや〳〵になつたのが出て來たではないか。いつの間に誰が荷物の中へ入れたのか！　何れにしても、あの多數の客の中に隆夫が交つてゐたか、それとも、隆夫に賴まれたものゝ仕業かどちらかに解釋するより外はなかつた。
この奇怪極る出來事に、ゐみ子は、眞つ蒼になつて、極度の恐怖に襲はれた。が、自分の手紙を包んだ用箋に何か書いてあるらしいので、顫へる手先にとりあげて、昏みさうになる眼を睜つて、讀みとらうとした。それが、隆夫の筆蹟らしいことを直感すると、全身が支へ切れない位にがた〳〵顫へ出した。
この手紙をあなたのお手許へお返しいたします。それは、杉浦隆夫の切なる願ひであつたのです。彼は、氣が狂つて千丈の崖を飛んで死にました。しかし、幸か不幸か更生して、別人となつて、この世に生きながらへてゐます。靑春の鬼ともいふべき相貌となつて。だが、更生の刹那に悟道に入つた彼には、最早、世をも人をも恨む心は毛頭なく、今は、山の陽さんとして、朗かに明るい氣持で生きてゐます。彼は、矛盾と過誤に滿ちたこの世に生きんが爲には、それを克服しつゝ勇進するところに生の意義があるのだといふことを信じ、且つ、そのことをあなたに傳へたいのです。杉浦隆夫に代つて、あなたの御健康と、幸福を祈りあげます。
山の陽さんは、無論、杉浦隆夫と異つた人間ですから、あなたとは、何の緣故も交涉もあるべきでなく、また、あつてはならないのですから、どうぞ、左樣御承知の上、御安心下さい。
ゐみ子はこれを讀みながら、まざ〳〵と眼の前に浮んで來るのは、あの赤倉の陽さんの醜い、おつかない、不氣味な顏であつた。だが、あれが、眞實の隆夫だつたのかと思ふと、手紙を胸に押し當てゝわつと泣き俯してしまつた。が、暫らくすると、あの醜惡な顏が神々しく輝くやうに思はれ、尊敬と、感謝の思ひが泉のやうに、彼女の胸に滿ち溢れて來た。……。（をはり）

判事と盜人の涙

竹田敏彦

ずつと古い話だが、大阪の裁判所に、中澤重業といふ謹嚴な判事があつた。殊に親孝行で同僚間に評判が高かつたが、この人が、まだ判事に就任して間もない頃、或る窃盜事件の裁判をした。ところが、その被告人が、なか〳〵剛情で、何と訊ねても罪を白狀しない。すると、中澤判事、何と思つたか、突然、法官席の壇を降りて、つか〳〵被告人の傍へ近づいた。何事が起るかと、檢事も傍聽人も呆氣にとられてゐると、中澤氏、被告に向つて、言葉を改め、

『實は本官は、判事となつてまだ間もないのである。其方が白狀をしないのは、全く本官の取調べが未熟なためであらうと思ふ。未熟にして職に堪へなければ、潔く官を辭するまでであるが、實は本官に老いたる父親があつて、本官の出世を祈つてゐる。どうせ免れぬ罪なら、快く白狀して、本官に手柄をさせてくれまいか。』

と、慇懃に賴んだ。すると、聞いてゐた被告人、急にはら〳〵と涙を流して、

『いや、よく判りました。全く私が盜んだのであります。實は私にも年寄つた母があり、長らくの病ひで臥せつてゐますが、私の長の失業で、藥もろくに與へられず、つい惡心が起きまして……』

と、潔く白狀して、その場に泣き伏した。

變り種 支那要人秘話

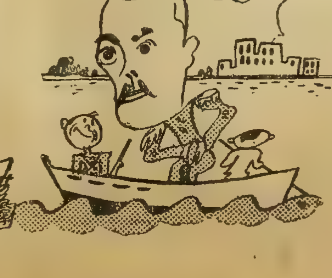
濱川清

何杜國のエロ・サービス

支那の政界、軍閥の大立者が女色に耽るのはあまりにも有名な話だが、亭主の好きを人に施すで張學良一派は彼のリットン一行の聯盟調査團には、全部女をつけきりで、それこそ痒い所に手が届くやうに世話をさせた。列車の中まで女を乘り込ませるといふしつこさだ。北戴河附近にリットン卿が海水浴に行つた時の接待役が何杜國だつたが、そのエロ・サービス振りが滿點だつた。何としても支那婦人は肌を見せるのを嫌るので、海水浴場附近にはどこからも見えない様に、幕をはりつめて、娘たちと一所に遊ばせたといふほどにやつたものだから、リットン卿が張學良に對して何杜國をバカに褒めたものだ。さうすると山海關附近で旅長だつた何杜國が、一躍して軍長に引き上げられたといふエロ・サービス成金だ。彼は日本に抵抗しても叶はないことを承知してゐるので、萬一日本軍が山海關から押し込んで來る時には、俺は途中で寢返りうつから、あまり俺の方は射たないでくれ、それから赤旗を振りながら逃げるのは俺の方だから、その方に彈丸を射たないでくれと日本に申込んで來たといふ話さへあるほどで、一番先きに滿洲國へ歸順するだらうとさへいはれて居る。

外國嫌ひの呉佩孚

支那の軍閥巨頭で、今兵力を持つてゐないルンペンだが、いざといふと以前の部下連中がついてくるので、再び返り咲くことが出來る。此の男極端な外國嫌ひで、漢口に在るときどうしても外國租界を通らねば波止場へ出られない。租界を通れば二町か三町で行けるのを六里も遠まはりして外國租界を通らずに船に乘りにゆくといふ變りかただ。第二奉直戰爭で山海關附近に於て張學良に打破られたときも、部下は天津の外國租界に逃げこましたが、自分は風前の燈のやうな身



を以て、雲霞の樣に押し寄せる敵に追ひ立てられても、目の前の天津には目もくれず秦皇島から小舟に乘つて、荒海を乘り切つて四川省の方におちのびたといふ變り者だ。

二十萬圓の第八婦人

支那の兵隊は食ふための商賣で、掠奪、暴行も御勝手次第といふのがあるほどだ。從つてその大將も女と金には目がない。張宗昌は韓復榘に濟南で暗殺された男だが、元は山東の大將で良民からしぼり上げた金を何百萬圓といふほど銀行に預けてをつた。實に精力旺盛な男で第一夫人から第二十一號まであつた。そして自分で樂しんだ後で之を部下に賣りつける、一番金になつたのは第八夫人の二十萬圓だつたといふ。阿片の煙が濛々としてゐる中に、藝者を總揚げでもしてゐるのかと思つたら、それが皆んな彼の夫人たちだつたといふ。

萬福麟と空軍

萬福麟は學良の第四軍長で、滿洲髯といふ山賊のやうな面構へ、破鐘のやうな聲で一異彩を放つて、見るからに強さうだ。ところが今回の熱河戰鬪の際には第一集團軍司令官といふ總大將で平泉附近まで押し出して來たが、なだれうつてくる退却部隊に卷込まれて、一戰も交へず北平に逃げかへつた。そしてその報告が振つてる。『地上から押寄せる敵は百萬人といへども敢て動ずるものではないが、空から來る敵には策の施し樣なし矣』と。

顏惠慶の電報演説

この男は支那外交の巨頭で、佛語英語が達者で、僞八百何でもいふ男だ。彼の演説は電報演説といつて有名だ。壇上に立つと先づ『只今南京より電報が參りました。日本軍は婦女子に暴行すること三百人、江南地方遂に處女なし、尙ほ略奪……』こんな調子の僞の電報を讀んでから外交演説を始める。五分もすると又、『北平から電報が參りました日本軍は！……』とやつて又演説をつづける。宿屋を出るときチヤンとさういふ電報を澤山拵へて自分のポケットの中へ忍ばせて置き、演説中隨意に之を取出すのである。此出鱈目は却つて國際聯盟では惡い印象を與へた。

事實物語

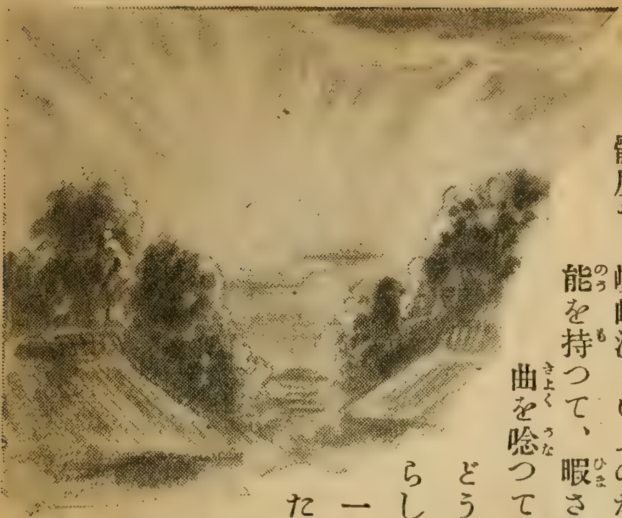
殿様百姓

渡邊默禪
野崎貞雄畫

俸給八圓の村吏

二十六年前の明治の末、江戸川一つで千葉縣になつてゐるが、東京といつてもよい東葛飾郡八幡町の役場に、福田助役の推薦で、鳥山猛といふ新參の書記が就任した。

齡はまだ若い。瘦形で身長が高く、顔の型もひよろ長いところから、彼の顔は「糸瓜にトンボがとまつた



やうだ。」と役場の小使から批評された。農村だけにピンと跳ねかへらせた小髭をトンボに見立てたのが面白い。それが、色のあせた黒紬の五所紋の羽織に、くちや〳〵の小倉の袴を一着に及んで、いかな場合といへ、ども扇子を離さず、威儀正しく椅子に反りかへるところや、優しい眼から流れる品位、おつとりと落ちついた體度や、嵯峨流といふのか、筆蹟の美しい技能を持つて、暇さへあると小聲で謠曲を唸つてゐるところなど、どうも尋常人ではないらしい、と同僚だちは一つの疑問にしてゐた。或る日、收入役が自席からこの猛を呼んだ。

「鳥山君。一つ君に行つて貰ひたいところがあるんだがね。」

「は。何處へか出張で。」

テーブルの上に肘を張らせ、縣廳への申達書を認めてゐた猛は、ひよいと首を立直した。

「この先の橋戸に、嶋田林藏といふ百姓がゐるんだがね、村税の滯納分をいくら督促しても納める樣子がないんだ。今日が最終期限だから何とか處分しなければならない。君、御苦勞だが一寸出かけて行つて、手續をしてくださらんか。なに、大した金ぢやない。督促手數料を合せて只た七十五錢だ。」

收入役は甚だ不機嫌である。猛はちよつと迷つたやうな顏で、

「は。手續といひますと、どんな……」

「財産差押だ。」

「えッ。差押……あの、執行ですか。」

喫驚して大きな聲。みんなどつと笑つた。

「名題の貧乏者だから、どうせ碌な物のありッこはないが、ホンの形式だけでいゝ。蒲團や食料、一通りの

農具を除くの外は、何でも押へて來て下さい。嵩張物でなかつたら持つて來るやうに。いゝかね。當役場で競賣してしまふから。』

猛は眼を圓くして默りこくつた。何か恐ろしい重大な問題が自分の頭上に覆ひかぶさつたかのやう、惱ましげな太息さへ洩らすのであつた。と、上席の村長が、

『あゝ、鳥山君、迷惑でもあるだらうが、何も經驗だ。一つ行つて見てください。』

『承知しました。兎も角出かけて見ませう。』

こんな迷惑な役はない。が、これも職務の一つである。猛は澁々椅子を離れた。

二月始めの寒い日だ。表へ出ると雲低く空を包んで、米粒のやうな白さをばら／＼と路上にふり播く霰のなかを、市場歸りの青物馬車ががたぴしと動いてゆく。泥に喰込む轍の跡もすぐ凍てつきさうだ。

やがて橋戸の部落についた。其處は原野地で、草の家が僅かに五六戸、齒の脱けたやうに淋しく立つてゐるだけだつた。林藏の小さな住居を、冬枯の草なかに見出した時、彼は思はず立停つて、情なさうに低い簷を見やつた。破壁の上に繩を這はして架けてある大根の干葉が、から／＼にいぢけ切つてゐるではないか。

涙の人形劇

默つてがらりと扉をあけると、なかからぷんと異樣の臭氣が流れて出た。見ると陰鬱ななかに、蠢いてゐる人の影。誰やら蒲團をかぶつて寢てゐるやうだ。

『もし／＼。嶋田林藏といふのはあなたン所ですか。』

門口に立つたまゝ聲を懸けると、煎餅蒲團の傍で、小兒の聲がした。

『おッかア。誰だか來たよ。』

『え。お客かね。はい、はい。どなたでごぜえます。』

やつと据つた瞳は、薄暗い內部の影像を映して見せた。狹い蓆敷の室に横たはつたのが、髮もおどろ、蒼く憔れた顏の病婦だ。五つばかりの榮養不良らしい男の子が、その枕頭に坐つて、何やら玩物をいぢくつてゐる。

『私は役場の者だが、おやぢさんは居るかね。』

『あゝ役場から……はい、居ります。庄や、早くとツちやんを呼んでおいで。』

子供はすぐと外へ飛出した。

『あなた、おかみさんかね。あゝ然うか。如何したんだ。病氣

かい。』

『はい。ちやうど三月越、かうして寢たツきりで。血脚氣でね。』

『それは困るねえ。なに、流産？　いやア、然うか。』

猛はその一つを聞いたゞけで、もう眉を顰せた。と、外に忙しい足音、手洟をかみながら林藏が戻つて來た。

『はい。今日は……ど、どんな御用で。』

燃料にするのであらう、森から拾ひとつた枯木を小腋一杯に抱へてゐた彼は、急いでそれを戸口に置いて、ぴよこりとお辭儀をした。正直さうな顔に不安な色が漲つてゐる。

『外のことでもないが、あなたン所に税金が滯つてゐるね。役場でも取扱ひに困つてゐるんだが、如何だ。今日全部納めてくれる譯にはいかんかね。』

『はい。どうも濟みません。とうに納めなけりやならねえので、いろ／＼心配して見たんでがすが、家がいかく困つてるところへ、此の通り嬶が病つてゐますし、餓鬼も三人からゐるけんど、まだ小ちやい奴ばかりで、根ツから役には立たねえし、何とも仕様がなくつてね、つい、おまへさん、その何で……』

おどおどした詞の底には、訴へんとして訴ふるに處なき悲痛の眞情が血の泉の如くに鳴りどよんでゐる。猛は惻然とした。が、自分の使命は枉げることはできない。この場合、女々しい感情は禁物だ、と勇氣を絞り出した。

『併し君。事情はどうあらうと、義務は義務だ。役場としても、責任上、さういつまでも抛ツたらかしては措かれんのだ。是非何とかして納めて貰はんけりやならん。其場限りの言譯で平氣でゐられちや困るぢやないか。』

わざと口を尖らして、險しい眼の光を見せるのが、猛にとつては苦痛なる表情の作爲であつた。と、林藏はむつとした樣子で口を歪めながら、

『いえ、平氣でゐる譯ではねえだ。濟まねえと思へばこそ、苦勞の重荷にして、毎日頭腦を惱めてゐるのではねえかよ。將棋をさして、太平樂を列べて、机の上で居睡をして、そいで結構給料を貰へるおめえさん方にやア、私等のこの苦みが分るめえ。些とは百姓の苦せえことも考へて見さつせえ。』

『ひどいことを言ふなア。アハヽヽ。』

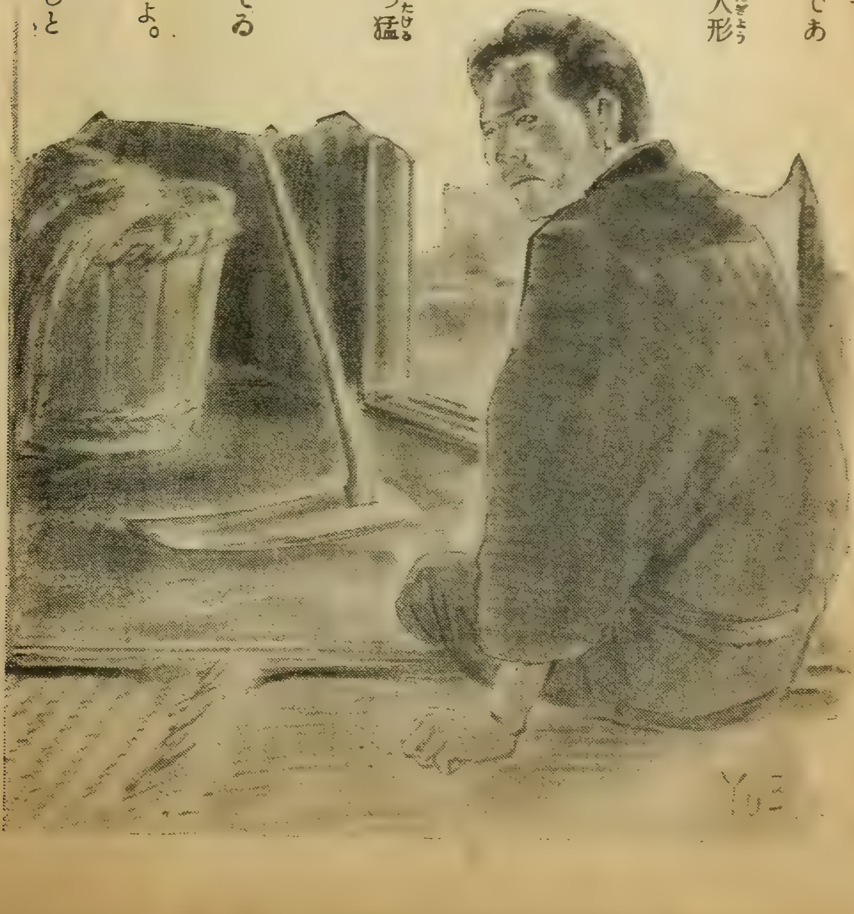
『笑えどこぢやねえやな。それで如何するちふだ。』

自棄に咬みつかれると、むら／＼と反感が湧く。

『どうしても納められんなら、仕方がない。財産の差押をする。』

『なにツ、押へる？　ホウ、この掘立小屋に綱でも打つかけて、

背負つてゆくちふのか。勝手にしろツ。』
『む。宜しい。斷然處分する。』
腕捲りして突と蓆の上にあがつた。が、野獸の住む穴のやうなこの伏屋に、少しなりとも價を算ふべき何物が有るであらう。
見廻す眼に、ふと發見したのが、小兒の傍にある一つの人形だつた。
『何だ。これは。』
いきなり取上げて見ると、一尺程の木彫の鍾馗だ。用材は檜、全身に塗つた色彩はおぼろに剝げて、ところどころに施した金粉の光が、何ともいへない古朴幽雅な時代の寂を殘してゐる。彫も凡手ではない。小鬼を捉へた忿怒の相貌など入神の作だ。かういふ藝術に深い鑑識をもつ猛は、思はずじいつと見入つた。
『こりや好い物が有るな。むン、これを押へてゆくぞ。』
すると、いきなりワッと泣き出したのが、足下におびえてゐた小兒だ。
『いけないよう。小父ちやん。これツ、僕ンだよ。僕の物だよ。持つてつちやアいけないよツ。』
飛びついて引奪らうとした。が、猛が放さないので、ひしと腕にとり縋つて、火がついたやうに泣きつゞけた。
『何だ、野郎。そんな物。欲しけりやくれてやるから、持つて



きやがれと、何故言はねえ。エツ、畜生ツ。罪も報もねえ餓鬼の持物まで取りあげぁがつて。今に、ど、ど、如何するか覺えてゐろッ。』

父の林藏は土間にどつかと坐り込んで、しくしくと洟を啜りながら、拳を握つて猛を睨まへた。同時に蒲團から這ひ出して來て、猛の袴にとりついたのが、母の病婦だつた。

『もし、旦那。そ、その人形だけは、どうか、この子に與れてやつてお呉んなせいまし。ちやうど去年のこの子の誕生日に、千葉の伯母が祝ひに持つて來てくれたものでね、昔から家に傳はつた古い物だといふことでがんしたが、子供に玩具一つ買つてやれねえ私らの境界だもんだで、此の子が珍らしがつてね、何處にゆくにも懐に入れて連れて行くし、夜寝るにも枕もとに立てゝ置くくらゐに、いかく可愛がつてゐた人形でがんす私らのとこにすれば、火吹竹にも劣る瓦落多ですけんど、子供の身には弟み

たいな懷こい思がしますだよ。どうぞなア、惨いと思つて見遁しておくんなさいまし。』
窪んだ眼から滴る涙が、げつそりと肉の殺げた蒼い頬へ、二行にころ〳〵と分れて走る。

若い男爵

耳を突き刺すやうな悲痛な訴へである。猛は默つて聞いてゐるうちに、目頭が熱くなつた。
『然うか。むン、然うか。坊や。そら、返してやるぞ。』
取りあげた人形を子供の手に持たせて、雲脂だらけな天窓をつるりと撫でてやると、嬉しさうににこりと笑つた。
『有難うごぜえます。庄や、小父さんにお禮を言つたらよかんべえ。』
『小父ちやん。有難う。』
人形を逆さに吊したまゝ、ぴよこりとお辭儀をした。
『アハヽ。惡いことをして濟まなかつたなア、坊や。いや、林藏君。實際のところ、君ンところの生活にはまつたく驚いてしまつたよ。俺も今まで隨分といろんな不幸に出會つて、ほとんど生血を搾られないばかりに人から虐めぬかれ、情なくつて泣いたことも何度だか知れあしないくらゐだから、貧乏の味は普通人の十倍以上にも分つてゐるつもりだ。こんな不幸な境遇に落ちた君だちの苦みには同情するよ、君。併し公税だけは重い輕いは別問題として、一旦課せられたものなら、國民である以上、厭でも負擔しなけりやならない。どんなに困つても納めてくれなきや、町村といふ自治體自身が立ち行かなくなる。分つたかね。エート。それでは恁うしよう。滯納分の七十五錢は俺が立替へて役場に納めて置く。いゝか。これは心配せずに、次の税金はこの四月にまたやつて來るから、それまで一生懸命に働いてな、今度は滯納しないやうに納めてくれなくちやいかんぞ。』
恁ういふと、林藏夫婦は意外らしく目を見合つて、默然と俯垂れてゐた。と、猛は懷中から蟇口を出して、いきなり逆さに振ると、銀貨や銅貨が三圓程飛出した。そのうちから七十五錢だけを取除けて、殘つた分を掻ひ集めた。
『おい。坊や。手を出せ。』
子供の小さな掌にのせてやると、病婦は喫驚したやうな顏で、
『旦那。何でごぜえます。』
『おまへへの見舞だ。少いがこれを藥價にしてな。早く快くなつて、親父さんと一緒に働かなくちやいかんぞ。もし困るやうだつたら、私の所へ相談に來るがいゝ。宿の眞中で鳥山といへば分る。』

立揚つて沓脱に下りると、林藏は矢庭に袖を摑んで、

『旦那ッ。お、お、おめえさまはほんとに……か、神とも佛とも喩へやうのねえ…… 私、き、屹とこの御恩を……』

と熱の籠つた聲を亢ませたかと思ふと、わッと泣出して上り框のところに倒れてしまつた。病婦も破れ蒲團の上に泣き頽れてゐる。

『まアまア、氣を落さずに稼ぐんだね。蟻の思ひは天まで……アハヽ、人間の力は君、恐ろしいもんだぜ。左樣なら。』

行く時には寒く、足も重かつた。が、歸る時の彼は、剃刀の刃を立てる野風の刺戟も膚に快く、輕い歩調で枯草の徑を飛ぶほどに、爽朗な心もちであつた。

善いことをした。無上の快感である。が、その日の務を終つて、役場の門を出ると共に、今まで影を潜めてゐた新たな惱が不意に足下から衝きあげて來て、茫然と立停らせた。月給の使ひ殘り、全財產を傾けつくした懷中には、代納の七十五錢を吐き出せば、もう一錢も――明日の米、煙草代も無い。それを妻に何と辯解すべきかに思ひなやんだのだつた。

月給八圓。糸瓜にトンボの書記先生こそ、明治維新の功臣、伯爵、鶴田龍修の次男龍準（共に假名）である。大織冠鎌足の後裔たる殿上人の父龍修は、青年時代から勤王のために盡瘁、戊辰の役に殊勳をたて、陸軍少將、地方知事、元老院議官に歷任、次で伯爵を授けられた。龍準はその妾腹の子である。伯爵家は嫡出子の龍俊が繼ぎ、庶子の彼は十七歳の時、分家して男爵を賜はつたのである。

父の伯は豪放磊落、家庭のことなどは一向無頓着だつたため、縫ひ切れぬ財政の綻びは山のやうな負債を拵へて、整理のつけやうがなく、京都の東山や桂川の畔、または東京の柳島に數寄を凝らして建てた別莊など、殘らず高利貸の餌食にされ、つひに沒落して京都に退隱するやうになつた。

龍準はそんな悲劇のなかから、形式的に分家させられたのであるから、與へられた資產といつても家財什器の一部に過ぎなかつた。一時下谷の入谷町にさゝやかな僑居を求め、新夫人として迎へた仙子と同棲した彼は、父の債務にたづさはつたため、幾度となく高利貸に襲はれて、血の出るやうな慘めな痛手をうけ、ほとんど着の身衣の儘で、仙子と共に淺草千束の裏長家に侘住居をするほどの落目になつた。

男爵と名乘るのも恥かしい寒境にあつて、彼は骨を削るやうな苦みに耐へ、仙子と共稼ぎの內職をつゞけて、次から次と迫つて來る生きる惱と鬪つた。娛しかるべき愛の巢には、いつも牢

獄のやうな陰慘な影が漂つてゐた。あまりのことに華族としての體面を汚さぬうち、爵位を返上しようかとも考へ、再三父の伯爵にその相談を持ちかけたけれど、伯爵は一笑に附して取揚げようともしなかつた。

夫妻二人で開墾

『あゝ、俺はどうして恁うなんだらう。是ぢや今に野垂死をするかも知れない。俺はよい。慘忍な人生苦に打ちのめされて死ぬのは何とも思はんが、おまへまでも卷添に犧牲とするのは、どうしても堪へられんことだ。』

男爵は時として、こんな風に絶望の太息を洩らすこともあつた。

『あなた、何を仰しやるんです。私たちの生活は兎に角、あなたは零落なすつた御本家を立派に再興しなければならない責任のあるお體ぢやありませんか。もつと／＼元氣を出して根限り闘つて下さい。私も一生懸命に働きますわ。ね。さうして最後の勝利を摑むことにしませうよ。お互ひにまだ前途があるんですもの。』

さういふ場合、仙子は傍から涙を呑んで、雄々しく勵まし立てるのであつた。

『むン。然うだつたなア。こんな弱いことぢや不可ん。鶴田家の再興、父への孝養、よしツ。馬力をかけて働かう。』

かくして龍準はカンフル注射をされたやうに、新らしい生命の力を得ては、荊の道の進行をつゞけるのであつた。この賢夫人は府下南葛飾郡鹿本村の農飯田頼藏の次女で、相當の教養もあり、男爵夫人として耻かしからぬ美貌と品位をもち、きはめて腹のしつかりした女性だつたので、かよわい腕ながらも何卒して鶴田家に今一度の花を咲かせたいと涙ぐましい悲願を懸け、物價の高い都會よりは寧そ田舍に引込み、靜かに一陽來復の春を待たうと夫にすゝめ、生家の親戚にあたる福田助役に手引を求めて、八幡町役場の書記に推薦して貰つたのである。勿論深く身分を秘するといふのが條件、助役の外は男爵であることを知らず、みんな風來人だと思つてゐた。

それから幾日か過ぎた。龍準は出勤の途上、よく林藏が一人の少年に後を押させ、荷車を挽いて過ぎゆく姿や、畑で妻と二人でせツせと働いてゐる影を見かけた。もう病氣も快くなつたのだな、と微笑して心から一家の幸福を祈つた。

秋になつて淪落の公子に一つの歡びが訪れた。仙子の生父頼藏と福田助役とが、彼に同情しての計ひから、八幡社後で町の所有に係る一町歩ばかりの原野地を、龍準の名義で租借させ、

開墾の上桃の栽培を試み、ゆくゆくは一つの農園として經營させることにして、開墾費は賴藏から貸出すといふ計畫が成立したのである。龍準は役場に辭表を出し、急拵への百姓になつて鍬とシヤベルを握ることになつた。

涯もなくひろがつた利根川緣の曠野に立ち、靜かな青空と、そして金色に彩られた落葉林とを眺めながら、全身に明るい秋の光を浴びて、シヤベルをざくりと打下した刹那から、彼は始めて人間らしい生活の第一線に進み出たやうな愉悅を感じた。足下に跳ね返る眞黑な土塊から、咽るばかりに發散する自然の呼吸、今こそ大地を征服する自分の生命が、一鍬毎に展びてゆくのを振回つて見て、滴る汗を拭つた時に、彼は淚するばかりに嬉しかつた。

が、只一人の努力である。いかに焦つても思ふやうに開墾事業が捗取らなかつた。仙子は見かねて赤い襷に手拭冠り、晴にも雨にもよく手傳つた。

と、そのころから一つの不思議を臺所に見出された。早朝背戸をあけると、南瓜、枝豆、葱、大根など、新鮮な秋を色づけた蔬菜類をどつさり置いてある。何者が持つて來たのか、近所に尋ね廻つても心當りがない。それが隔日、或は三四日置きに繰回され、時としては生立の鷄卵も添へてある。夫妻は首をかしげ合つた。

『をかしいなア。誰がこんなことを爲るのだらう。』

『さア、どう考へても分りませんわ。お隣の源兵衞さんの話では、今度開墾した野原に太郎狐といふのが棲んでゐるんですつて。その狐が原を荒されるを悲しく思つて、どうか止めてくれツてお願に來るんぢやないかツて、さう言つてゐましたわ。』

『ぢや、狐の賄賂か。アハヽ。そんな莫迦な話があるもんか。いつも如何するね。到來物は。』

『折格ですから、頂いてお茶に使つて居りますわ。棄てちやア勿體ないですもの。』

『身勝手なことを言つてるぢやないか。アハヽ。何しろ不思議だよ。』

あまり變なので、龍準は曉方ちかく臺所に見張つてゐると、背戸でゴトリと音がした。いきなり扉を開けると、何やら黑い物が慌てゝ逃げ失せるのが、有明の月の光に映つた。が、人間か、獸か、はつきり分らなかつた。

怪異はそれのみではない。開墾地のまだ鍬を入れてない部分が、前夜のうちに掘起されて、きれいに地均しまでしてある。或ひは二坪、三坪、五坪に及ぶこともあつた。連續せる野外工作、奇怪な援助に、夫妻は薄氣味惡い感じさへした。

『いよ〳〵尋常事ぢやないぞ、こりや、源老人の推測通り、やつぱり太郎狐の所業かな。』

始めて迷信といふものに捉はれた彼等は、太郎狐の棲むといふ古塚の上に、小さな紅殻染の祠を建てゝやつた。その話を傳へ聞いた町の人だちからも、鳥居だの幟だのを寄進した。けれど依然として美しい怪異が續くのであつた。

二人の努力は報いられて、どうかかうか二三反歩の畑らしい物ができた。翌年の春に桃の苗木を栽ゑつけ、餘地を利用して麥、豆などを作つた。二年後には數十本の果樹から多少の收穫を見、夏季にはみづ〳〵しい甜瓜や、西瓜のやうな副産物まで採れるやうになつた。形なき太郎狐の援助はその時までも絶ゆることなく、夜間の月明を利用して肥料を施したり、又は害蟲の驅除をなすべく、殺蟲劑を混和した水をふりかけた痕跡を、翌る朝まざ〳〵と發見することもあつた。

『やれ、驚くではねえかよ。鳥山さんが華族さまだとよ。昔は何でも烏帽子直垂で、杓子みてえなものを持つて。天神さまみてえにおやかつてゐたお公卿さまだツてえ話だ。』

『えツ、あの糸瓜のトンボがかえ。へえー、人は見かけに依らねえもんだな。』

いつしか秘密の殼が割れた。伯爵の子の男爵だといふことがぱつと擴まると、町の人だちはみんな肝をつぶした。『殿樣百

姓』といふ渾名を呼ばれて、八幡の藪不知と共に土地の一名物とされたのは、それからのことである。しかも敦厚な、情誼に篤い男爵の風格と、自ら肥桶をかついで野良稼ぎをやり徹した三年間の奮闘振は、仙子夫人の貞節と共に凡ての人を心から感動させ、一町の模範としてたゝへられた。

野分の嵐

大正五年には町の青年團長に推され、郡農會に重要な椅子を占め、其他の公共事業にも關係して、地方文化の促進には無くてならぬ人物になつた。めでたさはそればかりでなく、龍治といふ嫡子が生れ、經營の農園も次第に整頓されて、枝もたわゝに實る桃の果から、甘い幸福の蜜汁が滴るのを見ては、男爵夫妻は相顧みて北叟笑まずにはゐられなかつた。

『仙さん。やつと物になつたね。是もおまへのお蔭だ。有難う。』

『あら、私の故になさるんですか。あなたがよく忍耐をして下すつたからですわ。でも七八年前のことを振回つて考へて見ますと、ほんとに辛うございましたわねえ。』

『むゝ。二人で手を取合つて泣いたことも、幾度かあつたなア。善因には惡果がない。最後の勝利はよく忍ぶ者にのみ降る、いふことをつくづくと體驗したよ。

紙を讀んで御覽。

遇つてお禮を言ひたいから、一度京都見物に連れて來いと書いてあるぞ。』

『まア。私。そんなことを承はると、嬉しくつて如何してよいか分りませんの。でもまだ十分成功した譯ではありませんから、そんな贅澤な眞似はできませんわねえ。』

『然うだとも。花を咲かせるのは是からだ。あゝ早く本家を再興させるだけの資金を造つて、お父さまが生きてゐらつしやるうち、お土産に持つて行きたいもんだなア。』

『ほんとにね。もう一我慢ですわ。』

と、突然恐ろしい呪の惡魔が嵐のやうに殺到した。同年の九月二日。市川驛で汽車を乘捨てた一團の人々は、横濱で有名な高利貸白池某と、東京の金融業梁川某（共に假名）外一人の債權者代理が、執達吏を尖頭に立てゝ、暴力團の壯漢七八名を隨へたものだつた。彼等は腕車をつらねて一度に男爵家に踏込み、市場に出すばかりに荷造してあつた桃及び瓜籃をはじめ、飼養の蜜蜂、豚の子、家財は盥、張板、梯子、他から貰つた菓子折までも、ひた〳〵と差押へた。

　これは危く時効にかゝつた古い債務――父伯爵の命によつて自分がサインした祟の餘波が、忘れたころにひよつくりと擡頭したもので、執念深く行方を捜し廻つてゐた債權者だちは、男爵が此處に居るこ
全部差押ふる手續を濟ませ、それから、
たのであつた。

　想ひがけぬことだつたので、男爵夫妻は一時茫然としたが、この場合默つて爲すがまゝに任せるより外はなかつた。

　林藏の子供だちはみんな大きくなつてゐた。長男の平太郎は徴兵の義務を果して歸つてから、父を助けて農作に從事し、十八歳の弟の淸吉は、自作の青物を荷車に積み、東京の市場へ運搬するのが毎日の課業だつた。鍾馗人形の持主である庄平は、もう十三といふ敏捷な少年で、方々へ傭はれては小仕事の手傳や、走使ひなどをしてゐた。男爵の農園にも忙がしい時分にはよく應援にやつて來たこともある。一家協力して働くために、だん〳〵生活が樂になり、今では賣放つた田畑を買戻した上、相當の貯金までするやうになつてゐた。

　驢馬のやうに可憐な少年庄平は、その日も農園に來合せて、果物の荷造を手傳つてゐた。それを暴力團が押へにかゝつたので、庄平は憤慨し、小腕をふるつて突飛した。壯漢は怒つてめちや〳〵に撲りつけた。庄平は泣きながら駈出して、野良に働いてゐる父と兄とに急報した。

『何だと。借金取が十人連で押掛けて來たつて、てめえ殴られ

たのか。いやア大變だ。殿樣をそんな目に遇はせては置けねえ。おい平太郎、何とかならねえか。』

『ようがす。奴ッ、くそ！』

長男の平太郎は切齒をした。そのまゝ脫兎の如く町へ走り出して、消防詰所前の火見梯子に攀登り、力限りにヂャンヂャン警鐘を亂打した。見る〳〵諸方から、消防隊靑年團の若者が宙を飛んで馳集つた。

『おい、火事は何處だよ！』

『火事ぢやねえんだ。團長の殿樣がえらい目に遇はされてるだ。お願ひだ。みんな救けて上げて呉んろよ！　どんなことがあつたつて、迷惑は懸けねえ。罪は俺一人が背負つて立つだ。』

平太郎は梯子の上から、悲痛な叫を投げた。

我が町の大きな誇として尊敬してる『殿樣百姓』が、社會から憎惡されてる〻高利貸の群に襲はれたといふ警報は、血の氣の旺んな若人だちをひどく激昂させた。彼等はちやうど牧場に闖入した狼を狩出す時のやうな意氣込で、どつと農園に突撃した。と、大芝原の辻あたりで、揚々と引きあげて來る一行にばつたり出會つた。

『それッ、あの野郎共だ。叩ッ殺してしまへッ！』

わツと鬨をあげて途を塞いだ。忽ち一大亂鬪。毆る、蹴る。怒鳴る。引組む。債權者側はさん〴〵に敗北、衣を裂かれ、帽子を破られ、全身埃だらけになつて、命から〴〵市川驛まで遁れたが、壯漢たちは殆んど半殺しにされた。あまりに忌々しいので、土地の駐在所に告訴したけれども、加害者が全然分らないので、そのまゝ泣寢入になつた。

影なき救主

この騷ぎに多年世話をしてくれた福田助役や、仙子夫人の里親なども馳けつけて、いろ〳〵と相談をして見たが、差向き是ぞと思ふ解決方法もなかつた。で、兎に角執行異議の申立をして競賣を停止し、ゆつくり考へようといふことで分れた。假令裁判にかけようと、結局奪られる物は奪られる、といつて此上恩誼をかさねた人だちにまで迷惑をかけたくはない、寧ろ潔く凡てを投出して、もとの裸一貫に還元すれば問題はないのである。父のための犧牲、それは子としては寧ろ悅ぶべきことだ、自分はそれで滿足する、と男爵は思つた。けれど前後八年間、妻と共に死力をつくして築きあげた礎を根底から覆へされ、鶴田家復活の望も泡になるのか、と考へると、あまりに儚ない幻滅さに、胸も裂けるほどに悲しかつた。

『人生はやつぱり無意味なんだ。好きな謡曲の邯鄲にある章句、げに何事も一炊の夢、南無三寶南無三寶とは、如實に俺の身上だ。ああつまらんなア。何のために生きてゐたのか分らん。よくよく思へば、出離を求むる智識はこの枕なり。その悟の枕は俺に持合せてない。強ひて求むれば死だ。死の枕だ。その枕にかゝつて、一思ひにこんな苦痛の人生から遁れたなら、どんなにかさつぱりとするだらう。』

とう〳〵彼は多感な青年だちの切端詰つた時に、落ち易い底なしの穴にまで曳摺込まれた。さう決心するや、邪魔になる仙子に用を吩咐けて子供と共に里方へ出してやり、其跡で彼女と京都の父に宛てた二通の遺書を認め、貧乏時代にも是ばかりはと離さなかつた一文字宗吉の短刀を錦の袋から取出し、それを膝に此世の名殘、嗜みの謡曲蟬丸一番を朗々とうたふうちに、今し死を迎へる最後

の感覺は、玲瓏として月の如く澄み渡つた。

と、門先に足音。

『鶴田さん、郵便。』といふ聲が聞えた。出て見ると可なり嵩のある書狀が書留で配達されたのであつた。差出人は東京市日本橋の正木人形店としてある。

『人形屋？ はゝア。仙子が何か註文でもしたのかな。それにしても書留が訝しいぞ。』

急いで開封した彼は、あツと目を瞬らずにはゐられなかつた。差押をやつた高利貸白池と梁川とに差入れた父及び自分名義の貸借公正證書に、執行文のついたもの二通。どつちも十四年前の物、其外延期の都度に取られた約束手形、差押全部の解放申請書二通が、一括されてひよつこりと出て來たではないか。

『あツ。ぢやア解決したのか。どうして、誰が……いやア、これは實に……あゝ俺は救はれたのか、さうだ。夢ではない、現實に救はれたのだ。』

俄かに大地が明るくなつた。黑い死魔の手は煙のやうに彼の身邊から消え去つた。彼はあまりの嬉しさに聲を放つて泣き頽れた。併し不思議の限りである。何人が自分の大難を救つてくれたのであらう。といろ／＼に考へ廻したが、更に心當りがなかつた。夕刻仙子が歸つて來るのを待ちかねて、この喜悅を頒つた彼は、同夜直ちに出京して、先づ梁川を訪ね、その足で橫濱に廻り、白池家について事情を糺した。と、二人の答は符を合せたやうに一致してゐた。

『昨日貴君の代人だといふ老人が見えて、いろ／＼困難な立場を話して、千圓で勘辨してくれといつて、どつかり坐り込んだまゝ動きません。私の方ぢやア利息にも引合はない金ですが、貴君のお身分もあり、また御事情もお察ししましたので、ホンの淚金のつもりで切捨勘辨といふことにして、證書をお返しした上、差押を解いたのです。左樣、到つて正直らしい百姓さんのやうでした。』

『はてな。誰でせう。』

男爵は五里霧中、首をかしげてじつと考へ込んでゐたが、やがてポンと手を拍つた。

『あゝ分りました。』

にこりと打笑む頰に、彈き出された熱淚がつゝーと滑り落ちた。

ちやうどその晩だ。嶋田林藏の家では、夕餐を濟ましてから、親子四人が爐を圍んで、愉快らしい大きな聲で語り合つてゐた。

『ハヽ。今頃は殿樣、あれを前におツぴろげて、にこり／＼と笑つてござるべえな。』

『さうだとも、父さん、誰だつて嬉しいやなア。失くなつた物がそつくり戻つて來たんだもの、だけんど丁度いゝとこにまた、二千圓の無盡が當つて來たもんだ。殿様を助けろといはねえばかりによ。』

『ほんとうだな、平太郎。これでやつと昔の御恩返しができて、肩から重荷が下りたやうだ。分らなければいゝがなア。』

『いや、お母ア。今度のことが分つても、野菜を持込んだことや、開墾の手傳をしたことだけは分ンめえぜ。今でも狐だと思つてゐるから、可笑せえや。アハヽ。』

『庄平。五月ぢやねえけんど、今夜鍾馗の人形を飾つて、御神酒でも供へてやらざアなるめえぞ。人形もどんなにかはア、悦ぶべえと思ふからよ。アハヽ。めでてえ、めでてえなア。』

その後、農園の利益は男爵の手から折半されて、年々林藏一家を霑ほした。（をはり）

▲憂鬱病も不眠症も神經衰弱も腦溢血も、多くは腦の過勞から起ります。心身過勞に陥り易い現代生活に於て、斯うした病に侵されないやうにするにはどうしたらよいか、若し侵されたらどんな手當をしたらよいか、それを懇切に敎へてゐるのが佐多醫學博士の著『神經病時代』です、誰方も是非御一讀下さい。
（定價一圓五十錢、送料十四錢　本社發行）

感冒頭痛
報知診療所長醫學博士
田口勝太先生創製
トラシン
春先に多い頭痛や感冒に
素晴しくよく効く感冒頭痛薬
トラシンは田口博士新發見の殺菌劑カロキシンを主劑としこれに數種の優秀な薬を配劑したもので、副作用習慣性絶對になく、高熱を降げ、頭痛、齒痛、咽喉の痛みを鎭め心臓を强め、咳や痰を止めるなど數々の優れた治効を奏します。猶扁桃腺炎、鼻カタル、咽喉カタル、神經痛等にも効果あり。
定價 大 五十錢 小 二十五錢
發賣元 大日本雄辯會講談社 代理部
全國薬店にあり

ユーモアコント

昨夜の瘤

吉祥寺猪水

▲　▼

『ご免下さい、ご免下さい。』

『はい、誰方？』

と、お虎が出て見ると夫の吉三郎です。

『フン、何處のお客様かと思つたら、お前さんかい、悪戯けた眞似はお止しなね、今頃ひよつこり歸つて來て、仕事の方はどうしたのさ。』

『ヤ、これは吉のお主婦さんですか、始めてお目にかゝります、僕は……』

『何を云つてんのさ、馬鹿々々しい。』

『イヤ、僕は吉三郎ぢやないんです、吉四郎ですよ、姉さん。』

『何だつて？』

『ぢや兄貴は、まだ僕のことを姉さんには話しちやゐないんですね。十年ばかり前、別れ別れになつて各地を流浪して來た吉四郎です。双生児の兄弟ですよ。』

『へえゝ。』

『一家散り〲になつてから、兄貴のことを思はぬ日とて一日もなく、方々探し歩いてゐるうち不圖此頃、兄貴がこの東京にゐることを聞きこみ、やつと今日、此所を探し當てゝ訪ねて來たやうな譯です。兄貴は壮健でせうね、今仕事に出て留守ですか。』

『まあ、さうですか。家の人一度もそんなことを話してくれないんですもの、失禮しました。道理で、よく似てると思ひました。』

お虎も事情を聞いて始めてそれと知り、初對面の挨拶を交しました。双生児とは、よく云つたもので、顔から聲までそつくりの瓜二つ、──お虎は夫の兄弟と思へば急になつかしさを覺えて座敷へ上げて歡待しようとしたけれども、吉四郎の方では、何しろ十何年振りに巡り會ふ兄弟、早く顔が見度くてたまらない様子で吉三郎の仕事先なる深川の工場へ會ひに行くと云つて、お虎と別れて家を出たのでした。

ところが、その晩吉三郎が歸つてから、お虎が晝のことを話し出すと、吉三郎は、

『うん、彼奴は工場へ來たよ。だが俺、頭から怒鳴りつけて追ひ返してやつたんだ。あの野郎十年前、親爺の金二百圓を盗んで持逃げした不孝者だ。前科何犯も持つてゐる無頼漢だよ。いゝか、此後彼奴が訪ねて來ても決して、寄せつけるんぢやねえぞ。』

『へえ、そんな野郎かね、彼奴。』

お虎も、姉さんなどと猫撫聲で話しかけた吉四郎のことを思ひ出すと、憎らしくなるのでした。

××　　××　　××

それから二三日後、吉三郎は工場を休んで、この頃愛人にしてゐる馬肉屋のお春を連れ出して、街を公園の方へ歩いてゐました。

『ねえ、あんた、二人でかうして歩いてるの

笑ひばなし

インフレ

息子『お父さん、インフレ景氣つて大したものですね。物價が何もかも上りましたよ。』
父『お前もそんなこと考へるやうになつたかな、ウン感心なものだ、やつぱり學校は有難い。』
息子『そこで小遣の方も上げて頂かうと思つて……。』

名士の出生

△新聞なんてまつたく可い加減なものさ。

を、もしあんたのお主婦さんにでも見つかつたら、あたし、どんな目に會はされるか知れないわね。とても力の強いお主婦さんだつてことぢやないの。』
『うん、家の山の神にや、さすがの俺も弱つてるんだ。何しろ、俺が一所懸命かゝつても、かなはねえんだからね。まるで女拳鬪家みてえな女なんだよ。』
『あたし、恐いわ。』
『昨夜もね、この頃、俺があんまり金を渡さねえもんだから、そんなことから喧嘩になつちやつて俺ひどい目に會つちやつたのさ。ほれ、こんなに頭の横つちよに大きな瘤まで出來しちやつたんだよ。』
『あたし、きつと殺されちやふわ。』
『なアに、そんな心配はいらねえこつだ。そんなとこは、俺がうまくやつてるからね。』
そんな話をしながら歩いてゐる向ふから來かゝつたのは、運悪く、吉三郎の山の神、お虎ではありませんか。さア、大變、この街頭に於て一大亂痴氣騒ぎが持上るに相違ない——と思ひの外、吉三郎は案外平氣なのです。
『や、姉さんぢやありませんか、この間は失敬しました。今日は、何處へお出かけです。』
『フ、ン。』
お虎の方も不思議、フ、ンと、そつぽを向いて洟もひつかけないと云つた態度で行過ぎてしまひます。
『今の人誰アれ。』
『イヤ、どうも俺も、ちよつと、冷やりとしたね。あれが山の神だよ。』
『えつ、あれがお主婦さん？　だつて、あんた姉さんて呼んでたぢやないの。』
『それが、俺のえらいところさ。俺には、吉四郎といふ双生兒の兄弟があるつてことになつてるからね。彼奴、今頃、俺は工場で働いてるものと思ひ込んでゐるもんだから、この俺が吉四郎なのさ。どうでい、しかも、吉四郎つていふ奴は、前科者の無頼漢と來てゐるんだから、先生、無心でも云はれると大變だと、そつぽを向いて行つちまつたつていふ譯なのさ。素晴しい芝居だらう。』
『まア、あんた、なんて智恵者だらう。』
『お春、感心したか。女房の前を大手を振つ

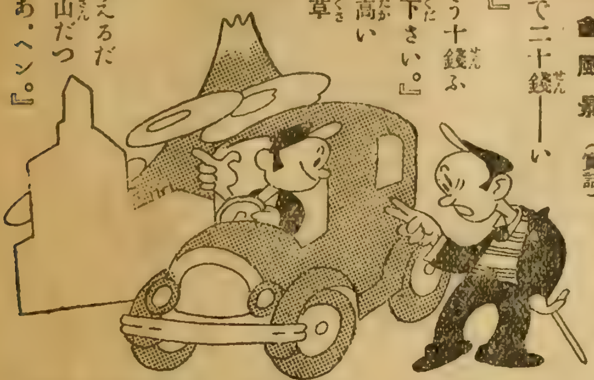
○どうしてだい？
△例へばだれ、名士が死んだ時にはいろ／＼書き立てるが、名士が生れたつてえ事はちつとも出さないぜ。

眠つた仲

○僕はあの男と、學校時代によく同じ室で眠つたものさ。
△すると寄宿舎で一しよだつたのかい？
○いや、同級生さ。いつも教室で眠つたよ。

都會風景（實話）

客『淺草まで二十錢――いいだらう？』
運轉手『もう十錢ふんばつして下さい。』
客『そりや高いよ、君、淺草の地下鐵の塔がソラ、見えるぢやないか。』
運轉手『見えるだけなら富士山だつて見えまさあ、ヘン。』



て、愛人と手をつないで歩けるちふ男は、世界中に、またとあるめえぢやねえか。』
『ぢや、誰に見つかつたつて平氣だわね。』
『さうだとも。そのため、ちやんと俺がうまく仕組んでおいたことさ。』
と悦に入つて二人はそれから公園へ入り、ベンチに掛けて喃々喋々とランデブーを樂んでゐると、咄々！ 吉三郎は背後から、ドカーンと腦天を撲られて、ふら／＼と前へのめり倒れてしまひました。そこには、夜叉のやうな山の神お虎が立つてゐたのです。
『どうも變だと思つたので、あとをつけて來て見ると、こん畜生奴、よくも／＼人を欺してこんな若い女と、いちやつきやがつてゐたな。』
『ま……ま……待つた、待つた、姉さん、ぼ……ぼ……僕は吉四郎です。こ……こ……これは、僕の……僕の女房です。』
『何をつ、この野郎奴、そんなことで、もう欺されるもんか。頭の横つちよの、昨夜の瘤はどうしたい。瘤まで似てる双生兒が何處の世界にあるものか。』
『ヒヤーッ。』
また一つ、ドカーン、お蔭で吉三郎の頭には三つの瘤がむく／＼と出來上りました。

配所の偉人秘話

島の西郷どん

仁木笑波

一

大西郷が、沖の永良部島（鹿兒島縣に屬する、薩南諸島中の一島）に流されたのは、文久二年八月のことだつた。丁度三十六歳、男のさかりであつたが、何せ、急ごしらへの牢獄にぶちこまれては堪るものでない。あの大男が、げつそりと痩せて來た。

　牢舍は、二坪ばかりの小屋がけ、東西に戸はなく、南北に壁なく、四寸角の格子をめぐらしてあつた。内半分は居所、半分は厠で、板で仕切がしてあつた。大男の翁が、こゝへ入つたつきりで、きちんと端坐したまゝで、些しも動かなかつた。

　横目役（監察）の土持政照が、見るに見かねて、代官の黒葛原源助に談じ、自分の家の一部に『圍』をつくつて、そこへ翁をうつした。

『土持どん、おかげで身が元通りになりましたけん、相撲の相手はなか。』

『ようござります、島一番の力持をつれて參りませう。』

と、土持は松尾璞潤を呼びよせ、翁と組合せて見た。片や大西郷、片や松尾、どちらも負けず劣らずの大男であつた。

『や！』

　土持が行司役。ところが七回の申合せに、松尾は一度も星をとることが出來なかつた。

『はツはゝゝ、おはんな豪い力なア、ぢやがな、技が出申さんで、技ば、いゝべち見んかい。』

　翁は、こんな事を云うた。

　在番附屬役川口萬次郎の下男三五郎がこれをきいて、

『どりや、俺が西郷どんを負かしてくれる。』

　と、一丁、挑んで來た。三五郎はもと相撲の弟子入をしたことがあるので、力もあるし、技も心得て居た。ところが、大西郷と四つに組むと、手もなく土俵の外へポンと投げ出されてしまつた。力士上りの彼は、ムツとして、

『土持さんな、ひどいことをなさる、此の人は西郷どんぢやなか、本職の關取ぢやろが……？　人をこけにしちよる。』

ぷん／＼し乍ら、歸つて行つた。

あとで大笑ひになつたが、流人西郷翁の健康は、かくして日一日と恢復して行つた。

二

夜食がすんだ後、御機嫌のいゝ時には、『俺どん、軍學を聞かせてあげるけん、どうぢやろか。』

と、煙草盆を持出した。

『先生の軍學とは、これは、お珍しい、どうぞ御願ひいたします。』

『よか、みな聞きなはれ。』

どうするのかと思ふと、いきなり煙草盆を裏返しにした。これが釋臺のつもり。張扇のかはりに、白扇をかう手にもつて、

『天下分目關ヶ原の一戰、島津勢の武勳を語らうな。』

パチリと扇子で煙草盆の裏を叩く。

ところが、話が、佳境にすゝむと、めつ、た無性にパチリ／＼とやるので、白扇は、忽ちバラ／＼になつて、破れて了ふ。だが、心得たもので、いざこれから

と云ふ際どい處へくると、又明晩と、ぷつり話を切る。

つぎの晩になると、土持の家人が、

『先生、昨夜のつゞき、どうぞ御聞かせ下さいませんか。』

と、せがむ。

『ほう、聞きたいかな、ようがす、土持どん、扇子を御かし。』

『先生の軍談も結構ですが、又扇子が一本ムダになりますて。』

『コレ／＼、そぎやんこつ云ひなはんな、おはん方、一文いらずで、軍談を聽きなはつてゐなさる、……はツはゝゝ、それとも木戸錢を出しなはるか。』

大西郷は、どこ迄も洒落なものだつた。

此うして、翁は、晝は讀書したり、揮毫したりして居たが、ある時、土持が、翁の部屋の中をのぞくと、何か細工ものをして居る。

『先生、そりや何ですか。』
『これかな、何にごつ見えるぢやろ。』
『分りませんな。』
『まア、見てゐなはれ、俺どんが今に烏賊を振舞うて進ぜる、まだすつかり出來まッせんので、姿が分らんぢやろが、大島では、これを烏賊つりの餌木にしちよります。』
頓と、小魚のやうな恰好のものだが、翁は不器用な手つきをして、これを作りあげた容子。二三日たつと、大きな烏賊をもつて來て、
『土持どん、座敷の中で、こげいなのが釣れ申したぞ、はツはゝゝゝ。』
『ほゝう、これは、これは、……何うなさつたので。』
『此間の餌木な、あれを漁師にかしてやり申して、何んもかんも、まかせといたところ、よう釣れたというて、これを持つてな、今禮に來ちよりました。』
と、にこ／＼して居つた。
永良部では、漁師が、甘木で、烏賊の餌木をつくる方法を知らなかつた。それからといふものは、漁師がやつて來て、翁に餌木の注文をした。
『よかこつ、削つてあげまッせう。』

大西郷の餌木の內職がはじまつた。翁は、一所懸命になつて、小刀細工をして居ると、刀の尖がすべつて、疊の上へグザとつき刺さることがある。
『や、しもたツ。』
かう云つて、あの巨人が、いかにも大罪でも犯して恐入つたやうに、片一方に餌木、片一方に切出しをもつたまゝ、呆然として居つた。

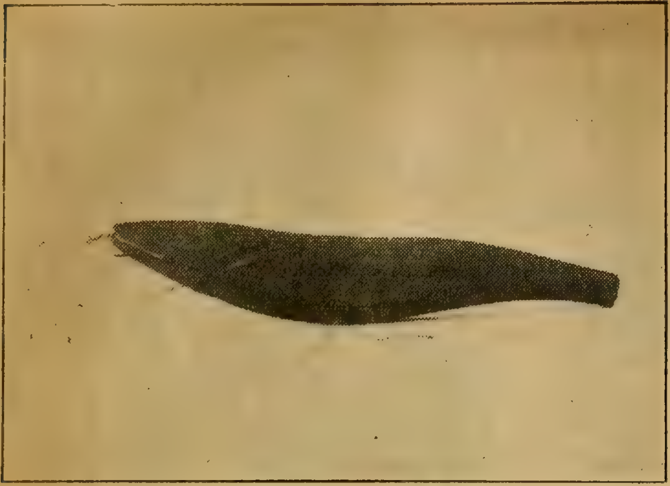
三

翁は、元治元年二月二十一日まで、此處に此うして、流人の生活をつゞけて來た。ここに流されるのは、藩でも重罪人に限つて居る。そして十中の八九人までは、島に骨をうづめることになつて居たのだが、天運こゝにめぐつて世は倒幕の旗上となり、思ひがけなくも彼は再び召出されて、中央の舞臺へのり出すことになつたのである。

迎への船がついた時は、流石の翁もウロ〳〵して座敷中何かさがしまはつて居る。

『先生、何を探してゐらツしやるので？』

土持が聞くと、きよとんとして、



（西郷翁の手に作られた烏賊の餌木）

『いや、土持どん、永い間、御世話になり申したが、流人の悲しさちうか、何一ツあげるものも無か、こゝにな、烏賊つりの餌木がのこつちよりますので、記念にあげまツせう、そいから、先君(齊彬)から拜領の縞縮緬の袷な、これは、俺どんが、肌身はなさず持つちよりましたが、これも土持どんに御禮心に差上げまツせうと思うとるけん、どこへか行き居つて……』

しきりに探して居る。

『先生、それなら、脇の下にかゝへてゐらツしやるではありませんか。』

『あ！ なるほど、これはいかんぞ、うははは、はゝゝ、内密々々。』

頭をかゝへて、翁は笑ひこけた。

こゝにかゝぐるものは、當時翁の手によつて作られたる餌木の一つ。（土持政照氏の息綱義氏より筆者が寄贈せられしもの）孤島に流されてゐた當時の英雄の面影が、小さなこの細工品にハツキリと現はれて居る。（をはり）

○かくして起る

子供が父親に何故戰爭が起きるのかと訊いた。

『さうされ、英國がフランスと戰爭するとすれば……』すると母親が傍から言つた。

『英國はフランスと戰爭しませんよ』

『そりや知つとる。だが俺は假りに例へてみたんだ』

『貴方は子供を間違へさせますよ』『いや、間違はせはせん』『します』『せん』『します！』『せん！』

その時子供が叫んだ。『何故戰爭が起きるかつて、僕、ちやんと分つちやつた！』

戰(たゝかひ)は

愛國戲曲

これからだ

眞山青果

齋藤五百枝畫

その一

北滿の或る市街地に近き村落。村内に果樹園を經營する日本人新納尙人の住宅。その居宅の一部を示すと共に、農場用の廣庭を裝置す。農具置場あり、井戸あり、滿洲風の垣、門を設く。

背景は一望荒寥たる滿洲の平野。時は昭和六年晩秋の頃。滿洲の地には萬寶山問題などいふものありて、日支間の關係やゝ險惡にして、何となく風雲の急なるものあるを告ぐる頃。

幕あく――舞臺その邊には修學旅行團の持用品、外套などを散亂し、專門學校學生らしき者二名、ポンプ井戸を押して水筒に水を汲み入れてゐる。學生の大部分は指導者に導かれて、家屋の裏面に立ちてその說明を聞くなり。ガヤ〳〵と笑聲など聞ゆれど、言語は明かならず。

奉天新聞記者笹木某、新納の長男茂をつれて入り來る。茂は二十三四歲、藝術家らしき情熱靑年なれど、目下家庭に對する不滿より殆んど自暴自棄に陷りて、放浪生活をなす者にて、今日もまた少しく酒に醉ふ。

笹木 茂君、賴むよ。僕の顏まで潰しちやいやだよ。

茂 君に潰れる顏があるのか。はゝはゝゝ。

笹木 兎に角、僕は君の嚴君に逢つて來るから、君はこゝにおとなしくしてゐてくれないぢや困るよ。

茂 僕を親父に謝まらせようといふんぢやあるまいね。

笹木 又それを……、君、親父に謝まるのは恥かい。

茂 親父になら謝まるよ。が、おらア、あんな瘦虎には謝らねえ。

笹木 これ、聞えるよ！

茂 何んだいあいつは、虎は虎でも、毛のぬけた虎の皮だ。

笹木 （少し嘆息して）茂君、君は何うしてそんな滅茶を云ふやうになつたんだ。君は奉天の學校でも、溫厚優秀の秀才だつたぢやないか。

茂 おい、二時間ツて約束だよ。女から體を借りて來てるんだ。虎の皮に會はうよ。

笹木 形勢を見て來る。靜かにして、こゝに寢てゐてくれたまへ。

茂 葉卷があつたら置いて行けよ。

笹木 お母さんが泣く譯だ……。

笹木は煙草を置きて前庭の方に去る。茂、穀打場の腰掛に寢轉んで煙草をふかす。

修學旅行の案內者（××學堂教諭）山尾某、專門學校教授鳥井某、學生十數名と共に、談話しながら前庭より廻はり來る。山尾は教授鳥井と對話するなれど、いつもその言葉は次第に學生等に對する演說らしくなる。

山尾　そんな次第で、今お話したやうな譯で……、ほゞ御了解を得たことゝ存じますが、日支兩國間の狀勢事情等は、實に今危險なる狀況に瀕してゐるのです。われ等は決して、聲を强め、聲を銳くして、諸君に敎唆し煽動してゐる者ではありません。元來この滿洲に於ける排日態度は……。

茂　（相手の顏も見ず、仰向きたるまゝ）遣つてるな。（演說口調を眞似て）元來この滿洲に於ける……。

山尾　（茂を初めて知り、不快な樣子なりしが、故と聞かざる眞似して）元來この、滿洲に於ける排日態度は、もはや民族間の感情問題や敵愾心の單純なる表現ではなくなつたのであります。いかに計畫的に、いかに組織的に、微妙に、巧妙に行はれつゝあるかは、諸君がです、諸君が一度滿洲小學兒童の教科書を手にしひもとく時に明瞭に知り得られることゝ信じます。（次第に熱し來りて）彼等は百年の計畫として、山に樹木を植ゑることはせず、百年の遠謀として兒童に日本國憎惡と日本呪咀の觀念を養成に勉めつゝあるのであります。諸君、世界の何れの國家に於て、公然としてその隣國を辱め、侮蔑し、彼等は敵なり、惡魔なりと、教壇に立ち講堂に立つて、敏感なる兒童の腦裡に印象させんとつとめつゝある國家があるでありませうか。諸君、實に滿洲に於てはその事實があるのであります、支那に於ては顯然行はれてゐるのであります。諸君、試に思へ、今日の小學校生徒は十年の後には、銃を肩にする壯丁であります、二十年の後には政事に參與する役人であります、三十年の後には國策を遂行する政治家にもなるのであります。（汗を拭く）

茂　はゝはゝゝ。辯士、ハンケチが穢ないぞ！

山尾　（不快を忍びて）諸君、道々もお話する通り、支那人の性情は、到底われ〳〵日本人には理解し得ざるものがあるのである。諸君は滿洲の山河草木を見學さるゝ前に、先づこの支那人といふものを實地に研究されたいのであります。百千の殖民地施設問題よりは、この支那人國民性の研究といふことが、われ〳〵日本人に於ては最大の急務であらうと考へます。

茂　面洗つて來い。先づ、自分を研究しろ！

學生等二、三人、その暴言にむツとする。

山尾 （目くばせして、學生等に關係するなと敎へつゝ）先刻、支那人盜癖の話が出ましたが、一二三の實例をお話して諸君の參考に供しませう。わたくしの同僚にKといふ者が、鞍山に居ります。彼は自宅の周圍に丹精して松の木を植ゑました。五年になります、木は次第に生長しましたが、或時その松の木の所々に枯枝を見出しました。Kは、風に折られたか、蟲に蝕はれたのであらうと考へました。と、或日三人の支那人が來て、その枯枝をペシ〳〵折つて持去りました。Kは、自分が折取らうと考へてゐた松の木の枯枝が掃除されたのを見て寧ろ喜びました。が、翌朝起きて見ると、又ところ〴〵松の木の枝が新しく折られてゐるのを發見しました。Kは初めて知りました。支那人は初め松の木の枝を折つて置いて、その枯枝になるを待つて取ると同時に、又次の枝を折つて次の日に集める枯枝をつくるのでした。日本人には出來ません、やれません。M――、彼の家のボーイは、毎日豬口に一杯づつ米を盜みます。二杯づつは盜みません。又、同じMは、いつも投出してある財布から、支那ボーイが白銅一ツ或は三ツ、連續的に盜み去るのを見ました。然し、毎日つゞきます。彼等には日課でゝもあるかのやうに、義務的に行はれます。石炭商の某は、一年中毎日一ざる宛の石炭が盜まれました。それが泥棒の一年中の燃料となると共に、それで立派に石炭屋を開業しました。又滿鐵の周水子の石炭集積所では、毎晩數十人の石炭泥棒に襲はれます。然し、決して彼等は大仕事をするといふのではなかつた。ざる一杯か、乳母車に一杯ぐらゐの泥棒です。然しその盜みぶりの無恥破廉恥なる點に於ては……。

茂 （むツくと起きて）山尾さん、僕にも些と喋らせてくれませんか。やはり泥棒話の續きです。

山尾 （初めて氣が付きたる風を裝うて）おゝ茂君ですか……當時やはりこちらに……。

茂 こゝは、親と名のつく者の住居です。刑務所からでも、行路病者としても、引渡される時はいつもこの家だ。

山尾 君、今日も醉つてゐるね。

茂 僕の醉つてるのは飲んだ時だけだ。あんた達の支那人觀察は年中醉ぱらツてゐる。（學生に向つて）諸君、いま××學堂敎諭山尾先生の講話があつた。が、日本の法律にも竊盜罪の規定がある。泥棒とは君、世界的、國際的存在だよ。支那人に泥棒根性が多いからと云つて、それを攻撃するのは何うかしてゐるだらう。否、寧ろ、僕は支那の泥棒の態度の賢明

なのに敬服してゐる者なのだ。

　茂、心中極度の憎惡をいだきながら、反對に冷嘲的にいふ。

鳥井　何んです、支那泥棒の態度は賢明だ――？（むツとしていふ）

茂　君等にや分らんよ。日本人の心をもつて支那を見ちやいかん。支那人は自ら何んといつて誇つてゐる。われ等は仁義の國だ、禮讓の國だ、文字の國だといつてゐるぢやないか。はゝはゝ。然うだらう。はゝはゝ、だから泥棒も皆仁義道德をもつて泥棒を稼いでゐる。日本の盜人のやうに、貧のために盜むとか、窮する故に他人のものを奪ふなんて、少くともそんな不見識な泥棒は一人もゐない。日本國産和製泥棒は、少くとも惡いと知りつゝ盜むのだ。支那泥棒は少くとも、その道を行はんとして盜むのだ。

山尾　茂君、大抵にしないか。何をいふんだ。

茂　大抵にすべきは君等だ。腰拔け！

山尾　何――？

　引率教授鳥井某、茂の放言に呆れて、山尾某と切りに囁き合ふことありて後、學生等にいふ。

鳥井　さ、そろ／＼出發の用意をしようかね。

茂　君、僕の話を聞かんのか、何んのために遙々修學旅行に來たんだ。僕は君等に、支那人といふものを好く理解させるために喋つてゐるんだ。（學生等に向つて）聞きたまへ、諸君。彼等が松の枝を少しづつ折り、米を豬口に一つ宛盜むのは、大事なお得意さまに一度に多大の御損をかけまいとする、彼等の道德心のあらはれなのだ。日本泥的のやうに自分の窮狀のみを考へて、盜むのとは違ふ。先方の御都合も考へて、少しづつ／＼チリ／＼と盜むところが、支那人の國民性なのだ。孔子さまの子孫の國だよ、立派な御國だ。はゝはゝ。（嘲笑に極度の義憤を示しつゝ）だから同じ盜むにしても、少しづつ、併し根氣よくといふモツトウが生れて來るんである。少しづつ、少しづつ、併し根氣よく――これは、支那の國民性を知るには、決して忘れてならぬ大事實なのだ。（言語不思議に高潮せるが、やがて又自嘲的に冷笑して）本國の政治家外交官は、この第一に注意すべき點に何等の注意をはらつてゐないのだ。支那を論ずる資格がない、みな低能階級だ。

鳥井　さ、みな用意はいゝか。

茂　諸君、聞給へ、議論は舍して事實を話さう。先年シベリア出兵の留守中、日本の兵營あたりではよく、この少しづつ併し根氣よくの泥棒に襲はれたものである。歩哨が建物の一

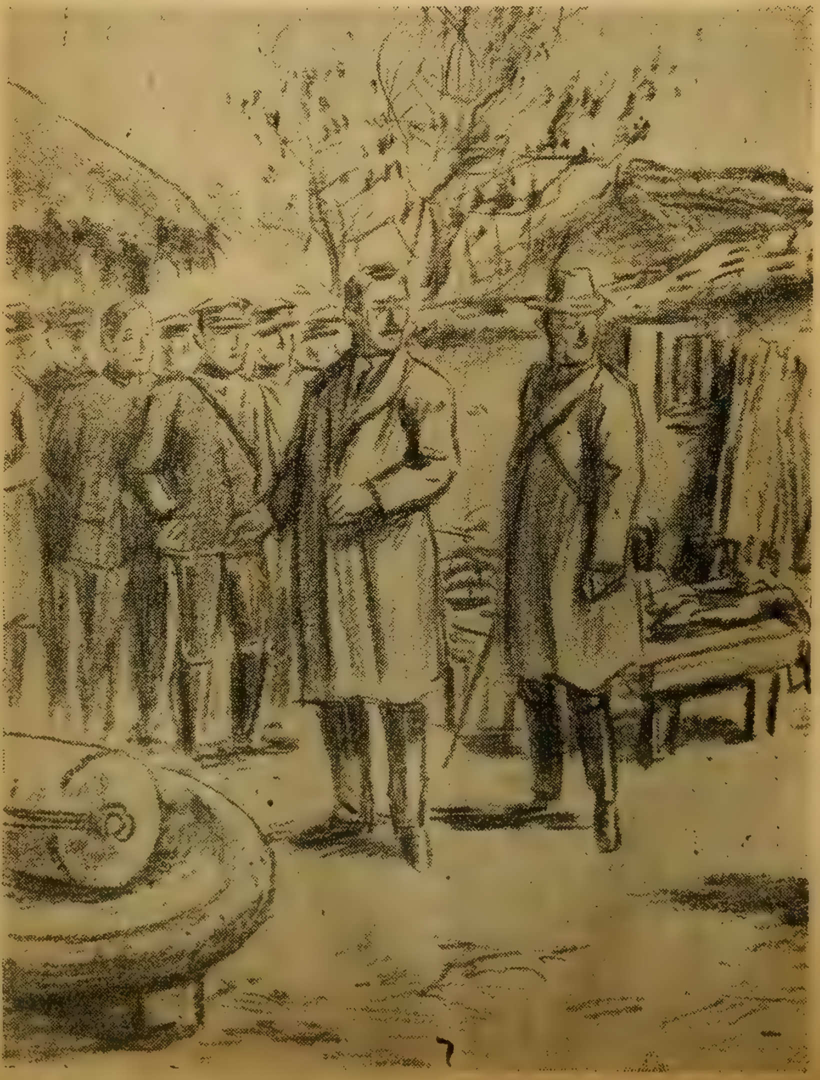
方へまはると、反對側の硝子戸を一枚はづして遁げる、氣がついてそつちへ廻はると、又反對側の硝子戸を一枚外した。彼等は少しづつのモツトウを守りながら、その目的とするところは完全に遂行せずにゐない。日本人は、よく支那人の泥棒を鼠が嚙るやうに盜むといふが、然り、彼等の目的とするのは、その鼠の嚙るやうにといふ點にあるのだ。(聲に淚を含む)

この少し前、茂の父新納尙人、支那側官廳に談判に行きたる姿にて、朝鮮人朴仁と共に歸り來る。學生を相手に悴茂が何か演說しゐるを見て、ギョツとして立停る。尙人は五十前後、休職軍人にて日露戰爭に從軍せる人にて、身には滿洲服をつけたり。朴仁は果樹園の雇人にて、極めて忠實に仕ふる男、三十歲前後。茂の放言を父の尙人に聞かせまいとして氣を揉むことあり。

尙人、朴仁を叱りて物蔭に立つて凝つと悴を睨む。されど悴は父に心付かざるなり。

茂　彼等は又文字の國民である。盜みを働くにしても必ず透

徹したる論理を有してゐる。僕の友人Hは、その雇人の何某が物を盗んだのを見付けて叱りつけると、雇人は盗品をドタンとそこへ投出した。『品物を返したら好いでせう、あなたに何んの損害をも與へてゐない。』と云つて、威猛高になつて、あべこべに泥棒から凹まされた。支那は流石に文字の國だ。公然と盗むを『盗』といひ、竊に盗むを『偷』といふ。同じく他人のものを奪ふにさへ、偷盗の二字をつくつてその態度を明にしてゐる。はゝはゝ。（嘲笑）又、或男は、雇人が物を盗まうとするのを見付けて叱ると、雇人は居直つて、『まだ盗みもしないのに、泥棒呼はりはひどい。』と云つて、猛然として反抗されたことがある。諸君、立派な論理ぢやないか、實に間然するところなき、立派なる哲學ぢやないか。日本の政治家外交家はこれだけの明哲なる論理が立たないのだ。彼等が今萬寳山事件その他の問題について、手を



燒き足を燒きつゝあるのは、當然過ぎるほど當然なる問題なのだ。この上論じても詰らない、もう舍さう。

この時、支那服を着たる朝鮮女二名、男一名來りて何

やら切りに、朴仁と囁き合つて悦ぶものゝ如し。

尚人　(突と進み出る) いや、詰らなくはない。茂、おれが聞いてゐる。云へ、進んでその後を云へ。(子を睨む)

茂、流石にギヨツとして父の眼光を恐れる。

茂　えゝ……。

尚人　放蕩無頼の汝の口から、それだけの言葉でも……聞くことを父は悦ぶ。云へ、その後を聞かう。

山尾　(調停顔に) いや、新納先生、茂君は今日少し……、何か興奮してゐられるやうですから……。

尚人　いや、然うぢやありません。國家の問題の前には、彼も私も同じ一人であります。聞きませう、彼の言葉を聞きませう。茂、貴様は、父の前にその論理を進めることは出來ないのか。

茂　無駄といふ言葉を知つてゐるのです。あなたと話すぐらゐなら……、樹木と話します。

尚人　うむ、然うか。(去らんとする)

茂　お父さん。

尚人　何んだ。

茂　見ツともない眞似はやめて頂きたい。日本人排撃は彼等の豫定行動だ。あなたが如何に支那官憲に哀訴嘆願しても、彼等の敷設する鐵道線路は變更しませんよ。

尚人　わしの經營する果樹園の運命について云ふのか。

茂　少しづつ、併し根氣よくといふのは、彼等支那人の泥棒術ばかりではないんだ。彼等の政治方策も外交術策も、みな日本人を滿洲の地から追拂はんとして、彼等の不斷に遂行してゐる方策なんだ。靑島戰爭にあれほどの犧牲を拂つて得たる二十一箇條は今何んの姿なんだ。鼠が嚙るやうに、今日は一箇條、明日は又一箇條と……日本國の權益は日に〱侵略されて行つてゐるではありませんか。吉林の農安では、八百人の日本人が次第に追立てられて、今はやうやく……五人しか殘つてゐません。法庫門では百三四十名の日本人が、悉く追立てられて、今は一人もゐなくなつた。洮南は何うです。××は何うですか。

尚人　追立てられて、出る者が悪いのだ。追立てられても踏止まる、最後の一人がなくてはならぬ筈だ。

茂　然し支那人の方針は……。

尚人　えゝ！(グツと睨み) おれの植ゑた木だ。おれが守らんで、誰が守るのだ。(去らんとする)

茂　それならあなたは、一村結束して暴虐なる支那官憲と鬪爭する勇氣がありますか。最後まで權益を主張する勇氣があ

りますか。

尚人　何――。

茂　支那人の威嚇に恐れて、村内一同の朝鮮人に支那服を着せた人は誰だ、誰なのだ。

　この時、前の笹木出で來り、茂をなだめ、尚人に哀願する。

尚人　云ふまでもなく、それはおれだ。が、同時に、われ〱は他人の國、滿洲の地に殖民生活をしてゐるといふ事實を忘れてはならないのだ。

茂　他人の國？　この滿洲の地は、日本人のために他人の國ですか。

尚人　世界地圖を見ろ。まだ滿洲の地は日本帝國と同じ色には塗られてゐない。

茂　それなれば日本は、何故に日清日露の兩戰爭に於て、多大なる犧牲をこの地に拂つたのですか。

尚人　それは貴樣の云ふことぢやない。(嚴然高壓的に)この地に血を流し骨を埋めたのは、みなおれの友人、同僚、部下なのだ。(聲をふるはし)おれの見る滿洲は、お前などの見る滿洲ではないのだ。

茂　然し――。

尚人　(それにかぶせて)えゝ、おれはお前などの口から、この滿洲の地について論じられることを好まないのだ。

茂　私もあなたとは論じない。僕は、僕の行動をとるだけだ。

尚人　何、行動――？(凝つと悴を見詰める)

茂　えゝ、何うともなれ！　おれはおれだ！

　茂、又さきの筵の前に身を投げる。

笹木　(ハラ〱しつゝ)新納先生、先生。奥樣も御心配なすつてゐらツしやいますから、今日は何も仰しやらん方がいゝです。近來民國の挑戰的態度を見ては、茂君に限らず、誰でも興奮せずにゐられません。ねえ、先生、新納先生、何うか今日は……。(袖を引く)

尚人　は、は、いゝえ……何も云ひません。はゝはゝゝ。(苦笑して)只、一時の興奮はさめる時があります。われ〱は今、永久にさめる時のない覺悟を要求し、又要求されてゐるのです。(學生等に向つて)諸君、飛んだ親子の醜態を御覽に入れましたな。

　尚人、カラ〱と笑つて笹木と共に去る。

　支那服の朝鮮少女二名、又心配さうに來りて切りに朴仁に囁く。

　學生等も出發の用意を終る。

山尾　ぢや玄關に廻つて、あちらで奥さんに御禮を申して行きませう。

鳥井　御もてなしの茶道具や何か、あちらに搬びたまへ。

教師、學生、ゾロ〳〵と表の方に去る。

朝鮮人朴仁、呆れたやうに近づく。

朴仁　息子さん、あんた悪いなあ……。

茂　(侮蔑の目にて見返し) 何、おれが悪い？

朴仁　自分の悪いに、氣が付きませんかねえ……。(嘆息) 大人(朝鮮語)は、今實に苦しんでゐられますよ。

茂　あの人はのう、日露戰争の時、虎と云はれた人ださうだ。今日のざま、何んだい。腰がぬけては虎も型なしだ。

朴仁　でも、皆辛苦して作つた林檎園です、いま支那人に奪られては、惜しい、勿體ない。

茂　然うだ。惜しいと云つて泣付いたら、支那人は親切だ、親切者だ。はゝはゝゝ、屹度豫定を變更してくれるに相違ないよ。

朴仁　大丈夫々々、民國役人請合つた。鐵道決して林檎園通らせない。あれからカアブつくつて、西の方、あつちへ曲げて行く。大人、大變安心してゐる。

茂　時に、今日村では鎌入の祝があると云ふが本當か。

朴仁　うむ、それで困つてゐる……。(當惑さうに俯向く) 果樹園の方は鐵道問題が引掛つてゐるから仕方もないが、然し米作の方は村民一同一年間辛苦の結果を收穫するんだ。

茂　景氣よく、賑かに鎌入をしたら好いだらう。

朴仁　處が可けない……。女どもが承知しない。

茂　女ども？

朴仁　(そこに佇む朝鮮婦人を指示し) あの通りみな、不承知なのだ。

茂　(女どもに向つて) 何うしたんだい、何か民國側から干渉でもあるのか。君等が一箇年間働いた、正當なる所得ぢやないか。

朴仁　息子さん、駄目々々。女ども、皆小さい事考へてゐる。

茂　不當なる干渉なら、僕が立つて斷然排撃してやる。何うしたんだ。何う云ふ理由なのだ。

女ども、互に顏を見合ふうち、一人の少女進み出る。

少女(一)　息子さん、みんな本國の着物着たいんだよ。

茂　本國の着物――？

少女(二)　この支那服、この家の大人すゝめて、村の人へ皆着せた。けれども今日、鎌入の祝、支那服いやだ。

茂　(思はず走り出て) ぢや何か、今日は一年に一度の祝日

だ。本國の衣服を着けて、本國の風俗のまゝで祝ひたいと云ふのか。

少女(一) わたし共、本國ある。本國の着物、よろしい。

茂 (ハラ／＼と落涙) 然うだ、本國の服だ。殖民地生活者の只一つの悦びは、われ／＼は本國を持つといふことなのだ。本國を奪はれて我々に生活があり得ない。着ろ／＼、本國の着物を着飾つて、今日の午後を賑かに勇しく歌つてくれ。

朴仁 (驚いて) 息子さん、それ可けないよ。

茂 親父への遠慮なら、おれが爭ふ。親父は、支那官憲の鼻息をうかゞふために、自分も支那服をつけ、村人一同にまで支那服を着せたのだ。關はん、着たまへ。村人に支那服を着せたのは、決して支那側からの要求ではない。或る日本人の卑屈心から着せられたのだ。

少女等 (悦びの聲を上げつゝ) 息子さん、本國の服着てよろしいか。

茂 着なければならんのだ。朝鮮乙女のよろこびは、朝鮮衣服を着けなければ顯はれない。田の神さまも、畠の神さまも、一年間田地に勞働した勞働者の、心からのよろこびをよろこばれる。本來の朝鮮人に復つて、この滿洲の一角地から、勇ましく本國の歌を歌つてくれ。勇ましく……勇ましく歌つてくれ。

少女等、わツと聲をあげて悦ぶ。

朴仁 これ、それ可けない、大人の許し得なければ、それ駄目、可けない。

少女等、喜悦のあまり朴仁を突倒して走り去る。

朴仁 これ、これ……。

茂 (進んで朴仁の手をつかみ) 朴仁、何故とめる。貴公は、この支那服を脱いで、本國の服を着たいとは思はんか。

朴仁 (相手の銳き視線を避けながら) それは……。

茂 故國をはなれて千里の荒野にさまよふ……、彼等少女の身にもなつて見ろ。一年にたゞ一日の祝日に、わが本國の衣服をつけられないといふ法があるか。

朴仁 はい……。

茂 日本の政治家、外交家は、この事實を遠方から何う眺めてゐるんだ。もしこのために問題が起れば、おれが責任を負ふ。

朴仁 はい……。

茂 親父の卑屈はおれが償ふ。恐れるな、首筋を立てろ。

新聞記者笹木某、戸内より走り來る。

笹木 おい／＼、茂君、泣かせるぜ。人がヘイコラ謝まつてゐる

る處へ、親父の卑屈々々と大聲で喚き立てゝ、中に立つたおれが何うなるんだよ、おい！

朴仁　（びツくりして）大人、聞えましたか。

笹木　筒抜けだ！

朴仁　怒りますか、顫へて怒りますか。

笹木　怒らんから恐いのだよ。默つて、忰の惡態を聞きながらこれだ、斯うしてゐる。（姿勢を恰好にて示す）

朴仁　それ大變々々。その後の破裂、一等恐い。うゝ、大變大變。

朴仁、そこの藁束をかついで走り去る。茂、何か決心してツカ〳〵と家内に入らんとす。

笹木　（驚きて前に立ち）何んだい、おれが話してゐるうち、何處へ行くんだ。

茂　（唇を噛んで、笹木を引倒し）えゝ、かまつてくれるな！

笹木　いかん、そりや可かん、飛んでもない。

茂　えゝ、放せ！

笹木　放さん、君は氣が違つたのか。

茂　えゝ　。

茂、笹木を突除けて内に入らんとする時、母夫人雪枝、家内より出で來る。

雪枝　茂さん、お歸りか。

茂　（母を見て流石に少し躊躇せしが）歸つたと云ふよりは侵入したと云はれるのが、適當でせう。

笹木　奥さん、こりや私の手には……行きませんよ。

雪枝　誰の手にも……行きますまい。双方の外

に立つて、眺めてゐるより外に仕方がございますまい。

笹木 そりや困りますよ。片方はあなたの御主人、こちらはあなたの子でせう。あなたが投出しては、誰が調停するんです。

雪枝 調停の境はもう……過ぎました。今はただ親子の間に、どちらが勝つか、どちらが負けるかといふ一事が殘つてゐるだけです。

笹木 達觀なすつたなあ……。が、僕はまだ諦めません。もう一度先生に謝つて來ます。茂君をお頼みします。

雪枝 はい。

笹木 茂君、おれは肉彈勇士のつもりで、又飛込むんだよ。

笹木、家内に入る。野の方より朗らかな朝鮮の刈上歌聞え來る。

雪枝 茂さん、焚火でもしませうか。

茂 僕は奉天へ歸りたいんです。あなたが苦勞してゐるからと…笹木君が切りに說くので、仕方なく足を向けたんです。

雲枝　母の苦勞と聞けば……氣が引かれますか。

茂　引かれます！（叫ぶやうに云ふ）とし子を奪はれた後のあなたの後姿……、僕は遠くにゐても、想像するに忍びません。とし子を殺したのは、やはりお父さんの頑固だ！　あれほど日本へ歸りたがつてゐるのを、お父さんは、無理からこの滿洲に引据ゑようとして、到頭……殺してしまつたのだ。

雲枝　（冷靜に）私は又……反對にも考へられます。

茂　反對に？　何う？

雲枝　お父さんが、これほど滿洲の地に執着して、何うしても離れまいとなさるのなら、娘としてとし子は、日本も東京も學問も忘れて、お父さんの意志に從ひ得る筈でした。それを病氣になつて……死ぬまでも、日本と學問を戀しがつたといふのは……、やはり自分のための片意地でした。お父さんと同じ……頑固さでした。

茂　お母さんは何も、知らないんだよ。（足踏みして叫ぶ）

雲枝　知らないことがありますか……。（顏をそむけて）知つてはならないから、知らうとしなかつたのです。

茂　それぢや、お母さん、それぢや……？

雲枝　娘はたゞ一圖に東京へ歸りたがり、伜はたゞ起つて民國人と爭はんとし……、父は追はれても滿洲の土地をはなれまいとする……、一家族の心が三人三樣に分れてゐるやうに見えるが、これはこの滿洲に住む日本人の心を、一家族のなかに集めたゞけに過ぎません。三つの心は、みな殖民地生活をする人の心理なのだらうと思ひます。何れを好しとも、どれを惡しゝとも、云はれることぢやありません。

　この時、遠く鐵砲の音聞え、異樣の叫聲聞ゆる。

茂　（びツくりして立つ）何んだ、馬賊の侵入か。

雲枝　いゝえ、何んでもありますまい。ま、お話しなさい。

茂　いや然し……、女達の叫聲が混つてゐます。

雲枝　それに驚いてはいけません。あなたには覺悟があるべき筈です。

茂　え、何んです……。

雲枝　自分がつけた野火に、驚いてはいけませんよ。（母の冷靜なる態度に忸怩としつゝ）

茂　え、私が……。

雲枝　枯草は火を待つてゐます。誰の捨てた吹がらからでも、一面の野火とならないとも限りません。

茂　お母さん、あなたは何うかしてお父さんのあの醜態を救ふことが出來ないのですか。お父さんは滿洲の地には、友人の血が流れてゐる骨を埋めてゐるといふが……、その以上の執着は物慾から起つてゐます。到底容れられべき筈もないこ

とに、支那人に媚び支那官憲に媚びてまで、こんな林檎畠を經營したいんです。樹に赤く熟してゐる果實はありや何んです、卑屈と、便佞と、諂ひと、恥辱と……みな日本人として忍ぶべからざる不名譽な結果ではありませんか。私が云ふ通り、起つて支那人と爭ふ勇氣がなければ、死んだとし子の說を容れて、本國へ歸つて下さい、引上げて下さい。

雲枝　…………。(無言、燃上がる焚火を見詰むる)

朴仁、顏色を變へて走り來る。

朴仁　(茂を引張りて小聲)息子さん〳〵、大變だ〳〵。

茂　(朴仁の囁くを聞いて)え、何、支那官憲が村人の田地に鎌入を禁止した……?

朴仁　娘たちの朝鮮服がいけなかつたのです。民國役人はそれを敵對行爲と認むると云ふんです。

茂　何、敵對行爲? 朝鮮人が朝鮮服を着るのが、彼等に敵對行爲なのか。彼等が云つたか、明かに云つたか。

朴仁　娘どもゝ惡い　。民國の惡口、歌にうたつた。

茂　好し。村人に支那服を着せたのは父だ、それを脫がせたのは子だ。村人等の迷惑に對する責任は、その子にあるか、その父にあるか、いづれか一人は負はなければならないんだ。朴、一緒に來い、支那官憲と爭ふ。

朴仁　それ危險だ、危險だ……。

茂　えゝ、一人行くのが恐いんぢやない。お前にも、正しい正義を主張させようと思つたんだ。(駈出さんとする)

雲枝　あ、茂さん!

茂　(母の手を摑んで)お母さん、とし子だつて命に換へて自分の主張をまげなかつたでせう。茂だつて、自分の意見は……通します。通さして下さい!(叫び、泣く)

鐵砲の音又聞えて、村民騷動するものゝ如し。

雲枝　…………。

茂　お母さん、この責任は茂にあるんだ。やつて下さい。

雲枝　然う……。(唇を嚙みて決心)なるべく穩便に——といふは、母としての願ひです。その以上は……、(茂の手をはなして)お前さんの自由にまかすより外はありますまい……。

茂　お母さん、僕……お父さんの子ですよ。(泣く)

茂、走り去る。朴仁、狼狽して引止めんとすることあり。

發砲の聲、わツと悲鳴をあげて遁げる男女の聲。尙人、笹木と共に家内より出で來る。

尙人　何んだ、何んだ、村の方が騷がしい、何んだ。(妻に)雪

枝、駈出して行つたのは茂ではないか。

雪枝　あなたの着せた支那服を、茂は村人からぬがせました。

朴仁　大人、大變だ。民國役人朝鮮人を追拂つてゐる。

笹木　そりや可かんあの亂暴者……。

笹木、茂のあとを追うて走り去る。

尙人　（ワク〳〵怒に顫へつゝ）これ雪枝、何、何故、あいつを引止めない。あいつ、あい

つ、俺の折角の苦心を蹴顛すやつだ。朴、呼んで來い、連れて來い。えゝ、何を躊躇するんだ。果樹園の者共を總出にしても、茂のやつを引擦つて來い。國の大事だ、大事になる。支那官憲には、お、おれが行つて謝まる。朴、呼んで來い、連れて來い。

朴、澁々として行く。

尚人　えゝ埒の明かんやつぢや。雪枝、行け、引擦つて來い。おれは役所に行かなければならぬ。一年の收穫、米や林檎を惜しむのぢやない、一年々々この土地へ植付けて行く、日本人の勞力を惜しむのだ。呼、呼……呼んで來い。これほどに苦しむ、お、お、おれの勞苦を無にするか。

雪枝　私には……そのお使が出來ません。

尚人　何――？

雪枝　父のとる道も道でせうが、子のとる道も……道かと思ひます。靜かに眺めて、わたしは茂をばかり……叱られません。

尚人　えゝ……。（足踏みして）追はれるぞ、この土地から追はれるぞ。折角つくつた日本人の足溜が、この、この重要な土地から失はれるのだぞ。お、おれは役所へ出て謝つて來る。茂を頼む、抑へてくれ。頼む、頼む。（出で行かんとす）

雪枝　あなた。

尚人　え。

雪枝　（一點を見詰めて、ハラ／＼と泣き）あなたは禁う抑しやつて、とし子の望みも……死ぬまで抑へて……おしまひなさいましたよ。

尚人　とし子――？（ギヨツとして妻の顏を見詰め、聲を沈め）うむ、あれも……この土地には犠牲の一人だ。わしの頑固ゆゑに死んだ、父のための犠牲と思ふなよ。この滿洲に對する日本人の犠牲なのだ。はゝはゝゝ。（苦笑）何を愚痴な……。茂を頼む。

雪枝、身支度をしに家内に入る。尚人、ドボ／＼出行かんとする時、支那人官憲王爲徳、支那士官何將國と共に從者をつれて入り來る。

爲徳　新納さん、あんた噓云つた、わたしもう信じないよ。一切の約束破棄します。

尚人　これ、飛んでもない、何を仰しやる……。

將國　軍隊はあなたを信じて、村内の自治制にはなるべく干渉せんやうにして居つた。今日の騷動は何事ですか。民國軍隊を耻かしめ、民國政治に侮辱を加へられますか。

尚人　何事か……ありましたか。

將國　朝鮮人を煽動して、わが民國軍に敵對行爲をとらしたの

は誰です。

爲德　われ〳〵は朝鮮人に向つて、民國服裝を要求した譯ありません。朝鮮人自身自發的に、支那服が着たいと、あなたからの願出であつた。わたくし、それ許可したゞけです。

將國　彼等が自發的に着た民國習慣を、今日自發的に放棄するのは、民國國旗に對しての挑戰的態度でせう。われ〳〵は本國國旗に侮蔑をうけながら、しかもその殖民移住者を保護する情誼を認めません。斷然移住地の鎌入を禁止します。（兩人立去らんとする）

尚人　待ちたまへ、王君、何君、待つてくれたまへ。わしは信義をもつて貴官等に約束したのだ。若しその信義を破り、貴國民に不快を與ふる者あらば、わしはその者を罰し、その者を制裁します。村内の小娘等が、今日の鎌入祝に本國服をつけたのは、彼等は貧しくして民國風の祝ひ着物を持たなかつたといふ、娘らしい些細の虚榮心に過ぎません。

將國　いや、決して些細ぢやない……。

尚人　あんたも子があるぢやらう。許してやつて下さい。常の服を脱いで、赤い青い飾をつけたかつただけの少女心なのだ。が、脱がせます〳〵、即刻わしが脱がせますから。今日のことは許してやつて下さい。

將國　いや、可けません。今日の侮辱は意識的の侮辱です。現にその煽動者があつて生じた結果なのだ。

尚人　煽動者――。（ギックリして對者の顏を見る）

爲德　あなた、嘘吐きだ。私ども最う信じません。

尚人　（立去る爲德の後を追うて）そりや可かん、そ、そ、そりや可かん。何君、王君。一二の……不心得者のために、村民一同に難儀をかけては濟まんことです。考直してくれたまへ。ねえ、兩君、村民一同の生活が脅される問題ぢや、わしは必ず貴官等に酬ゆるの方法をも講じるし、主張兵士等の不快をとく方法もあります。何うか、今日のことは……。

將國　賄賂で濟さうと云はるゝのですか。（嚴然として云ふ）

尚人　え、――。

將國　（冷笑をもつて）日本人の觀察みなそれだ。支那官憲への交渉、すべて賄賂で濟むと思うてゐる。怪しからん、大に怪しからん。

尚人　いや、決してそんな譯ぢやないが……。

將國　いや、可かん、大に、大に怪しからん。（節をつけて大聲に叫ぶ）侮辱は一層甚しく加へられたのだ。われ〳〵は煽動者について論じてゐる。賄賂とは――怪しからん、大に、大に、怪しからん。

尙人　その煽動者、無論罰します。一人の煽動者のため多數の損害を打棄てゝは置けません。

爲德　煽動者、新納さん、あなた御存じですか。

尙人　（面を伏せ、苦しげに）無論知つてゐます。罰します、罰します。今日のところ、何うか兩君とも、穩便なる御處置を願ひます。

將國　（爲德と顏を見合はせ）然うですか、兎に角、結果を見た上のことです。

　この時又村內騷擾の聲聞え來る。

將國　（屹としてその方を見る）怪しからん。又村內を攪亂し居る、怪しからん、怪しからん。

　王爲德、何將國、走り去る。

　尙人も外出の用意する時、わツと叫んで朝鮮少女等明裝のまゝ他の女どもと共に遁げ來る。

少女甲　大人、大變。支那兵朝鮮着物を奪りに來ます。

同乙　鐵砲うたれる、恐い〳〵。（ウロ〳〵する）

尙人　雪枝、雪枝、行つて來るぞ。茂を賴む、連戾してくれ、騷ぎを大きくしては國家の大事だ。

　新聞記者笹木及び村民二三人に介抱せられて、足部重傷の茂、興奮しつゝ歸り來る。

茂　（興奮）何故おれを搬ぶ、何故引取る。あ、あの支那兵の暴狀を許して置けるか。隊長に會はしてくれ、兵營へ連れて行け。

笹木　先生、奧さん、飛んだ事です、茂君はやられました。大腿部の銃創です。

雪枝　（驚きて家內より走り來り）えゝ、茂が……。

　尙人、ツカ〳〵と進みていきなり息子を引倒す。

尙人　茂！　貴樣、貴樣……。貴樣は自分の所行のために來る結果を知つてゐるのか。

雪枝　あれ、何をなさる……。

尙人　いゝや、放せ。こいつ、こいつ……。おのれ一人の興奮から一村の人に難儀を與へて何んとする。例へ卑屈、恥辱、便佞の結果であつても、地にみのるものあり樹に熟するもののある間は、日本の勞役がこの滿洲の地に證據立てられてゐるのだ。土を追はれ地を奪はれて、何處にわれ〳〵の足溜りがあると思ふのだ。

茂　その愚痴はもう遲い。われ等は既に追はれてゐるんだ、奪はれてゐるんだ。滿洲全領土のうち、何處に一つ、日本人の枕する地がありますか。

尙人　さ、行け、謝まれ、及ばぬまでも官憲の前へ出て、潔く

謝罪しろ。村人一同のため、立派に自分の責任をきてくれ。

茂　殺して下さい……、殺して下さい！

尚人　これ、これ、な、茂。一旦の激昂のために興奮して、こ、この土地を失ふには、餘りに長い複雜な歴史を吾々は持つてゐるのだ。見ろ、見ろ、この一草一木、吾々に到底忘れることの出來ない深い深い……歴史がひそめられてゐるのだ。

茂　あなたは、日清日露の兩役に、わが國民の血を流した土地だからと云ふのだらうが、その主張を容れるやうな今日の支那ですか。歴史を無視し、蹂躙するのが彼等の現前の目的ぢやないか。彼等の前に歴史を說き、權利を主張するのは……、もう舊い、駄目だ。日本

人のこれに對する方法はたゞ一つこれに處する方法は儼乎として唯一つあるのみだ。最早や條理や道義の理論をつくす場合は過去つてゐる。決心！　たゞ一つ決心を要する時なのだ。

尚人　いや、舊くはない。おれは戰友の血を流した土地だから、この土地に戀々とするのではない。寧ろ、吾々の血を流し足らぬ土地だから、今この地を放棄することは出來ないのだ。

茂　（むツくり起きる）え、何んです？

尚人　それはいづれ分る時がある。さ、官憲にあやまれ。戸板のまゝ一緒に行け。行つて一村騷動の責任を着てくれ。

茂　厭だ。血を流すと云へば、僕も今日、この滿洲のために血を流

してゐるんだ。

尙人　馬鹿！（思はず大喝）父は、貴樣の今日のこの血を、心に喜んでゐるのを知らないのか。

茂　えゝ――？

尙人　雪枝、何か、擔架の用意をしてくれ。茂の負傷を無駄にはしない。村中のためだ。國のためだ。用意をしてくれ。

笹木　先生、そりや無理です。この出血を御覽なさい。直に病院へ連れて行きませう、ねえ奧樣。

尙人　いや、然うはならぬ、兎に角役所へ……。雪枝、大事な場合だぞ。擔架、擔架……擔架はないか。

この時、又ワッと悲鳴をあげて朝鮮人等走り來り、そこゝに遁げ散る。發砲二三發。

茂　（ムックと起きて）お母さん、遣つて下さい。僕あの暴虐と、戰つて死ぬんだ！（ヨロメきつゝ走らんとす）

雪枝　これ……。

果樹園の朝鮮人夫三四名、朴仁と共に走り來る。

朴仁　大人、村ばかりではありません、果樹園も襲はれた。

尙人　何――。

朴仁　彼等は豫定の行動です。鐵道線を敷設すると云つて、どんどん樹木を切倒し始めました。

茂　それ見ろ！　それが待つた結果なんだ。（倒れて泣く）

尙人　うむ……。

果樹園、日本人夫五六名武裝して走り來る。

人夫（一）　旦那、もう可けません。もう駄目です。

同（二）　支那兵は、果樹園前の大岩にダイナマイトをしかけてあれを爆發しようとしてゐます。

人夫（一）　もう駄目だ、死者狂ひ、武裝して立ちます。

尙人　待て〳〵、待て！　まだ早い、まだ可かん。おれは最う一度地方署へ出向いて、談判を試みて來る。騷ぐな、騷ぐな。

雪枝　あ、あなた、お待ち下さい。

尙人　何んだ。

雪枝　もうその時ちやございません。堪忍の時はもう過ぎました。もはや起つべき時と存じます。

尙人　何――？（凝つと妻の目を見詰める）

雪枝　女の私でも、もはやこの上の我慢はなりません。命をかけて覺悟いたしました。

尙人　戰へといふのか。

雪枝　あなたが御躊躇なされば、私から果樹園一同の方にお差圖します。立派に爭つて、戰つて下さい。

尙人　おゝ……。（ハラ〳〵と泣き）おれはお前のその言葉を待

つてゐたのだ。

雪枝　え、……。

尚人　おれはお前に動かされたのぢやない。今まで幾度かはやり立つ心を抑へて……冷靜な日本人の判斷として、お前の動く時を待つてゐたのだ。時は來た、今だ。二十何年忍び來つた、おれの決心を示す時だ。國旗を用意しろ、日本服を着せてくれ！

一同歡聲をあげる。

茂　お父さん！

尚人　茂、見てゐろよ。父の滿洲に對する熱愛は、今にお前の目にも見えるだらう。

雪枝、衣服をもち來る。

村民等も武裝して追々に駈集る時、轟然としてダイナマイトの爆發する音。

一同ドッとときの聲をあげる。（暗轉）

その二

果樹園の一角。夜。

遠方に篝火など見え、時々騷擾の音聞ゆる。

日本服の新納尚人、高手小手にいましめられ巨木の下に捕縛せられ、付劍(ノ)支那兵五六人その周圍をかこむ。支那將校何將國、ピストルを尚人の胸に擬して爭論してゐる。

將國　（その邊を歩み、語調をやはらげつゝ）然う激昂しちや可かん。少くとも君等は、先づ二十一箇條の內容を檢査するの必要がある。彼の條約は、兩國家間に於ける正當公平なる條約と云ひ得るか。日本帝國に侵略的意志なきものと云ひ得るか。

尚人　それは、條約締盟以前に論ずべき問題だ。彼の二十一箇條は、日本國として、日本國民として必然已を得ざる必要のために要求せる條約だ。浮薄の外交遊戲のために設定したるものではない。その一箇條々々は、總て日本人の意志である、日本帝國の意志である。その條約を破らんとするものは、日本人全體の意志を破り傷けんとするものだ。

將國　日本人の意志のためには、隣國たる國家の威權を傷けてもよろしいといふのか。

尚人　國家の威權？　敢て問ふ、支那には果して國家としての體系ありや。

將國　國境を存する、民國は嚴然として國境を有する。

尚人　國境――？　はゝはゝ。民國の國境とは、何人がつくり何人が設けたる國境なのだ。もしこの滿洲大陸に國境ありと云はゞ、そは云ふまでもなく日本人のための國境だらう。

將國　何――？

尚人　意志をもつて作用せざるところに、その人の所有はない。空飛ぶ鳥は、たゞ遠く眺めた者の所有ではない。狙を定めて撃ち落したものゝ所有なのだ。滿洲の地は日清日露の二大戰によつて、われ等同胞が血をもつて染めたる境界線がなければならぬ筈だ。かの無法暴虐なる三國干渉なくんば、この遼東半島は今いかなる狀態にあつたと思ふんだ。

將國　言語を愼しめ。日本はその過剩なる人口を吐出さんとして、平和なる他人の國を侵すものだ。

尚人　他人の國、他人の國とは、聞きたい！若し世界の創造の神の力になれりとすれば、果して神は支那人のために滿洲の國土を創造したと云ひ得るか。

將國　何――。

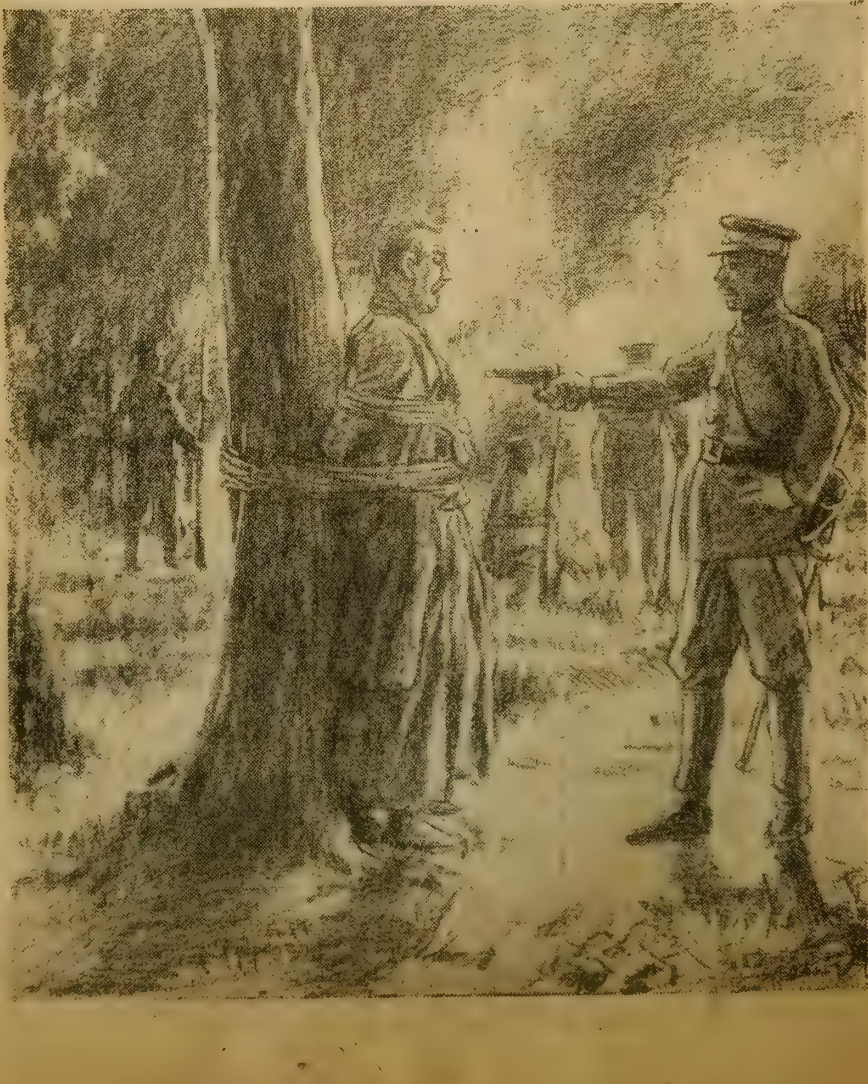
尚人　君、靜かに考へたまへよ。君等の祖先は、漢民族の國境として、所謂萬里の長城をいづくに築いたのだ。日本紀元第四百五十年の頃、秦の始皇帝は漢民族の爲めの國家境界線をいづくに設けたのだ。長城の外は、總てこれ他人の國ではないのか、君の謂ゆる平和なる隣國の所有ではなかつたのか。それを侵し、それを奪つた侵略國民は誰なのだ。

將國　何——？

尚人　これは君の迷妄をひらくために云ふのだ。靜かに聞いてもらひたい。今日現在にいふ國境とは何んだ。如何にしてそれが作られ、如何にしてそれが保たれて來たか、君等は何故目を開いてその事實を檢査しないのだ。或國では、流竄の强盜犯人が地上に殘した足跡を拾つて、それをその國の國境としたではないか。或國は又、未開野蠻の島國に上陸し、鐵砲を發射して土人を遁げ隱れしめ、その空地に白墨の線をひいて、次第にひろげて、島全體を自分の所有にしたではないか。凡そ現在、わが日本帝國を除いて、世界に國境と稱するものに、不義ならざるものありや、不正ならざるもの一つにてもあるか。斷じて云ふ、過去の國境の歷史は、何國に於ても、必ずその罪惡史と一致するものである。

將國　擊つぞ、命は惜しくないか。

尚人　擊て〳〵、もとより覺悟だ。が、最後に云はしてくれ。



君等は今日、日本人の滿洲の地に移殖するを見て、侵略と叫び、侵入といふ。われ〳〵日本人も同樣の謬見を抱いて居つ

た時代があるかも知れん。然し、翻つて觀察すれば、三百年以前に滿洲の地に侵入し、蒙古の地を奪ひ遼東の地を掠めた君等漢民族は侵略者でなくて、本國面積の狹小に苦しんで、天惠の空氣と地面とを求めて、この滿洲に移住し來る日本人のみが侵略者と呼ばれるのだ。三百年以前に侵略と認められざる事實が、何故、三百年の後には侵略者になるのだ。世界諸大國の殖民地を見たまへ、彼等にのみ殖民の自由あつて、何故われ／＼日本人にはその自由を拘束されるのだ。何君、聞いてくれたまへ。僕のこの主張は、いかにも無法な凶暴言のやうに聞くだらうが、これは只一つ、自分は日本人であるといふ誇りのために主張し得る言葉なのだ。御承知の如く日本は島國だ。四面環海の島帝國の天皇は、他國の侵略難をうけられんとしたことはあるが、未だ嘗て一度も海を渡つて他國を侵し掠めんとせられたことはないのだ。歴史に遡つて見たまへ、滿韓の地は二千年以前われ／＼大和民族の居住活動の地ではなかつたか。

この時、村の方に騷擾の聲聞ゆる。

將國 何んだ、又暴發したのか？

尚人 何君、鐵道破壞の責任者は僕だ。他を罰する必要はない。世界は平和を欣求し、戰爭を否定して聯盟を組織するならば、何故にこの不義不正なる國境改作の大會議を開かないのだ。國際闘爭の一大源因は、この不正なる國境問題にあるのだ。この要求は、たゞわが日本國のみが世界に請求し得べき問題なのだ。世界各國ともに、この國境事實に於てはその手が穢れてゐる、穢れざる手を有するのは、たゞ一つ日本帝國が存在するのみなのだ。支那人はわれ／＼を帝國主義軍國主義といふが、言語を正しく擇びたまへよ、人間が唯一つ眞の生存の意志によりて行動する時、それは野心とは呼ばれぬ、侵略と稱すべきものではない。必然の事實だ、天然の命なのだ。われ／＼は天賦の空氣を要求するのだ。たゞ土を要求するのだ。

將國 （やゝ尚人の言に感動したるが、强ひて兵士等に） 兵營に引け、更に一應訊問するの必要とする。

尚人 いや、この場は離れぬ、この場で撃て！ 鐵道線を破壞したのはおれだ。

この時、雪枝、茂を擔架にのせて笹木と共に入り來る。

雪枝 （びツくりして） おゝ……。

尚人 驚くな。今日のこの結果は、お前が願ひ、茂が願ひ、おれが願ひ、全日本人があらまほしと願つた結果なのだ。戰友があれほど流しても……流し足りないといはれる滿洲の地に更に一滴おれの血を加へるのだ。

笹木　先生、茂君の出血は多量です。一言……顔ばかりも見てやつて下さい。

尚人　茂！

茂　お父さん……。

尚人　雪枝、國旗を上げよ。

雪枝　はい……。

尚人　茂！二人とも國旗の下で倒れるのだぞ。

茂　日本、日本帝國……。

尚人　これ、萬歳と云はれんか、萬歳だ。

茂　ばんざあい……。

尚人　日本帝國萬歳——！　（幕）

作者附言　この脚本は櫻井忠溫氏より材料を給せられ、作中の人物内容等につき多大の厚意を受く。出所を明記して同氏に感謝す。

本篇は左團次、猿之助によつて歌舞伎座五月狂言として上演

『日本の決意』は我が國隨一のアジヤ通たる細井肇先生が、憂國慨世の至念より、滿天下の奮起を促した熱血の大文字！　發賣以來眞に熱狂的の大賣行を示し、朝野の諸名士擧つて推奬。これこそ全國民刻下必讀の大快著です。（定價五十錢　送料八錢　本社發行）

リウマチ神經痛を治したき人々へ

原因の毒素を取り去つて治す自宅療法

リウマチや神經痛、せんきはいくら藥を服用しても、病氣の原因から治されば、たとへ一時は治つた樣でもすぐ再發するものであります。病の原因を治すには、内服療法によらねばならぬ事は勿論でありますが、今時賣出される賣藥はアスピリンの如き一時的の痲痺藥か、或は下劑を主としたる一時押への氣休め藥が多く、原因に對して有効なものは中々見付かりません。

そしてあれこれと迷つて居る内に病氣はだんだん重くこじれて來ます。此病氣の原因は體毒、淋毒、梅毒、蓄毒、其他血の檢査をしても分らない老廢物や種々の惡熱毒素が淋巴腺や骨關節に結滯してそれが深因で冷えたり打つたり使ひ過ぎたりして弱つた所が痛み出すものであります。當院のお知らせする秘法は二千年來の皇漢醫方のもたらせる排毒素療法で、病根とも言ふべき痛みやしびれを發作發病する淋巴腺や骨關節の惡熱毒素を小便と共に取り去りますから、實に合理的に自宅で治す事が出來るのであります。その治療成績のよい事は、有名な脇本醫學博士を始めとして責任ある糸山海軍軍醫、其他の先生方も各〻有効なる事を認められ、實驗證明書を寄せられて居ます。當院では一昨年來本誌に此の漢方秘法の公開を發表して以來數知れぬ全快者から涙の出る樣な禮狀や感謝狀を隨分澤山下さいます。

此病氣でお困りの御方は色々と迷はずこの有効な漢方自宅療法で健康な身體になつて下さい。本誌愛讀者には無料でくはしくお知らせ致しますから今スグハガキで大阪府中河内郡布施町荒田招福院へ申込んで下さい。

時は非常時（時局民謡）

川路柳虹

一

時は非常時、氣の締めどころ、
心弛めちや、お上にすまぬ。ソレ、
力一つにドンと突き當りや、
どんな敵でも追ひのけ拂ふ。
日本男兒だ、日本男兒だ、
きりゝと、しやんと、しやんとせー。

二

時は非常時、油斷はならぬ、
とるに足りない五尺の身でも、ソレ、
心合せて精出すかぎり、
どんな難儀も恐れは要らぬ。
日本男兒だ、日本男兒だ、
きりゝと、しやんと、しやんとせー。

三

時は非常時、外には嵐、
雲がかゝろと、あの富士の山、ソレ、
高い氣高い姿は消えず、
いつか見えます高嶺の雪は。
日本男兒だ、日本男兒だ、
きりゝこ、しやんと、しやんとせー。

四

時は非常時、思案の棄て場、
たとへ異國の鬼ともなろと、ソレ、
やまと心は櫻の花よ、
散るを惜しまぬ忠義の魂。
日本男兒だ、日本男兒だ、
きりゝこ、しやんと、しやんとせー。

定方耀慶畫

海軍ユーモア

朗らかな水兵

梶野千萬騎

油蟲上陸

『甲板士官、油蟲上陸をお願ひします。』

一等水兵茶山平助は、その日もサイダーの空瓶を大事さうに提げて、士官次室に現はれた。

『また油蟲か、よく捕へるなアお前は、どれ見せろ。』

茶山の差し出したサイダー瓶の底に、黒褐色の小さな油蟲の死骸が、かたまつてゐる。プンとヘットの腐つたやうな異臭がした。

甲板士官の郷中尉は思はず顔をしかめて、

『これで二百あんのか、いつもより少ないやうだぞ。』

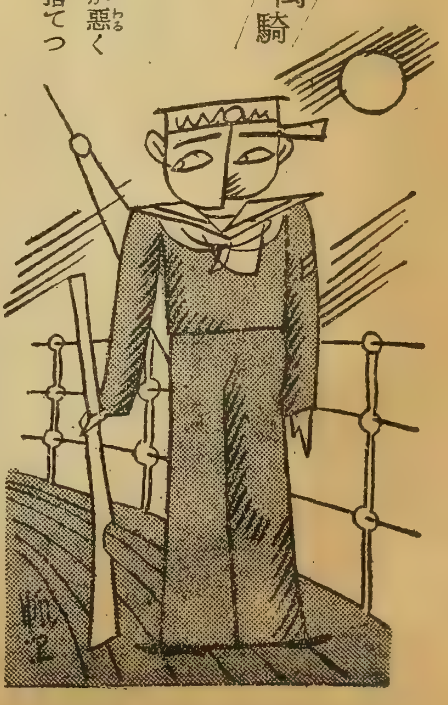
『そんなことはありません。ちやんと數へて持つて來たんですから……お疑ひなら出して見せうか？』

『イヤ宜しい。見ただけで胸が惡くなる。上陸札をやるから早く捨てつちまへ。』

『ハッ……』

茶山はニヤ〳〵しながら、サイダー瓶を舷窓から投げ捨てると、その代りに『特別上陸』と書いた紙片を貰つて、嬉しさうに出て行つた――。

海軍に『鼠、油蟲上陸』といふのがある。艦内で捕つた鼠又は油蟲を、甲板士官へ持つて行くと、鼠なら一匹か二匹、油蟲の方は百匹乃至二百匹（艦によつて違ふ）に對して、上陸一回の恩典、つまり、上陸を唯一の樂しみにしてゐる乘組員を悦ばせて、鼠や油蟲を退治しようといふ一石二鳥の策なんだ。



ところで茶山平助だが、彼は一等行狀だから四日に一度しか上陸が出來ない。イヤこれだけなら何にも文句はないんだが、彼には此の春結婚したばかりの戀女房がある。人生最大の幸福期にある彼にとつて、四日に一度は相當辛い話だ。だから、毎晩夜の目も寢ずに油蟲をとつてはせつせと上陸するのだ。

士官次室の連中は不思議に思つた。三十や五十なら兎も角、二百なんて數を彼は何處から集めるのだらう？

『この前、陸から輸入した鼠で上陸した頭のいゝのがゐたが、茶山の油蟲もその手ぢやな

いかね？』

『僕もさうぢやないかと思つて、朝歸つた所を調べて見たが、そんな樣子はなかつた。』

鄕中尉は否定した。

『あいつはいつもサイダー瓶に入れてくるが、數へたことがあるのか？』

『瓶の外からでも大體見當はつくよ。』

『それはさうだが、一度調べる必要があるぞ。何うもそのサイダー瓶が怪しい。』

翌々日の夕方、茶山は例の如くサイダー瓶を持つて士官次室にやつて來た。

『甲板士官、油蟲上陸を……』

『よし、今日は數へるぞ。』

瞬間、茶山の顏にサツと狼狽の色が流れたのを鄕中尉は見逃さなかつたのである。

『なにを愚圖つてる。早く出して見ろ。』

『ハツ……しかし、二百は確かに……』

『だから出せといふんだ。いつも貴樣の方から數へるといふぢやないか？』

『ビ、瓶の底にくつついて出ないであります。』

『ぢやこの針金で出せ！』

『ハ、ハイ……』

茶山は絶體絶命といつた態で、針金を瓶に突込んでは、油蟲を一匹づつ掻き出した。

『……七匹……八匹……』

『なんだ、泣ッ面して、もつと元氣な聲でやれ！』

愈々怪しい茶山だが、一體、どんなインチキが行はれてゐるのだらうか？ 鄕中尉の眼はぢつと茶山の手許に注がれてゐる。

『……四十九匹……』

こゝ迄數へた時、茶山は世にも悲しさうな顏をして、瓶の中を覗き、それから鄕中尉の顏を恐る〳〵見上げたのである。

『どうした？ まだ殘つてるぢやないか？』

『モ、申譯ありません。』

ペコンと頭を下げた。

『妙な奴だな、それは何んだ、その澤山殘つてるのは？』

『これは、フ、福神漬であります。』

『ヘエ!?』

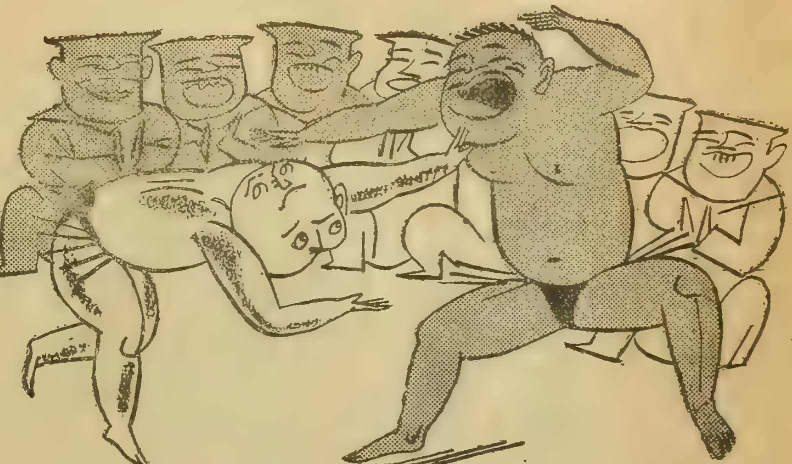
よく見ると、成程、瓶にあるのは、一見油蟲のやうな福神漬だ。色も形も實によく似てゐる。

『となにか？ 貴樣はいつも福神漬で上陸したのか？』

『さうであります。』
『賄所から盗んでくるのか？　さうだらう!?』
『チ、違ひます。女房が五錢づつ買つてよこすんであります。』
『うーむ……』哀れ甲板士官は獨身者だつたのである。
茶山平助が『福神漬』と呼ばれるやうになつたのは、實にこれ以後のことである。

へゝのゝもへじ

海軍記念日吉例の角力大會が、本艦の上甲板で催された。
右舷對左舷、双方三十名づつの猛者連、追追取り進んで、いよ／＼最後の一番となつた時、右舷の大關が俄かの腹痛、で、誰か代りを出さうと相談してゐると、大へんな人物が飛び出して來た。
『お前!?』
選手たちはアッケにとられた。
『駄目だよ、お前なんか、第一、角力とつたことあんのかい?』
『あるとも！　これでも村角力ぢや手取りだつたんだ。』



『チビ禿』といふ機關兵曹だ。やつと三十を越したばかりなのに、後頭部までツンツルテンに禿げ上つて、痩せこけた見るから貧弱な小男だ。
『なる程、その身體ぢや手取りだつたかも知んねえが、對手は大關だぜ。寝呆けてるんぢやあんめえな。』
『大關だつて横綱だつて、俺にかゝつたら敵ふもんか。伊達に禿げてるんぢやねえぞ。』
一同は思はず噴き出して、
『そんならやつて見ろ。鼻息で吹飛ばされねえやうにしろ。』
『細工はリウ／＼さ。氣の毒なは高島兵曹でございとな、ヘッヘゝゝ』
やがて、仕度とゝのへた兩力士が土俵に現はれると、上甲板は割れるやうな拍手、哄笑の渦――。
『チビ禿！　しつかりやれ！』
『村の大關、たのむぞオ。』
左舷の大關高島兵曹は、二十五六貫もある本艦隨一の剛力、片やチビ禿兵曹は十四貫た

らずの小兵、ところで彼はどういふわけか兩手で禿頭を抑へ、口をへの字に、瘦せた毛脛をかまきりみたいに立てて、じろつと對手を見上げた。不思議な構へである。さういへば彼は土俵へ上る時から禿頭を兩手で抱へてゐた。

行司が注意した。

『おい、手を下すんだ、手を……』

『なアに俺アこの方がいゝよ。』

依然として珍妙な構へ――。

『妙な角力だな。ぢややるぞ、いゝか、……双方見合つて、見合つて……』

サッと軍配を引くと同時に、チビ禿は頭から兩手をはなして立ち上つた。そして燦然たるどたまを對手の鼻先きに突き出したのである。

『あれ!?』

高島兵曹はアッケにとられたやうに、禿頭を見たが、急に大口開いてとめどなく笑ひ出した。

『はッはッはッ……ばかにしやがつて、はッはッ……』

行司も軍配で腹を叩いて笑ひ出す。

どうしたのだらう？　乘組員は不審さうに伸び上つた。次の一瞬、爆發する哄笑が後甲板に起つた。

なんと！　チビ禿兵曹は、自分の頭に墨黑黑と、へゝのゝもへじを書いておいたのだ。

こんな一頭二面の怪物にかゝつたらどんな豪傑だつて敵はない。哀れ高島兵曹は、笑ひ通しに笑つてゐるうちに、苦もなく押し出された。

『どッ、どッ、どんなもんでえ！』

大見得を切つて下りてくるチビ禿兵曹を、乘組員は怒濤の如き歡呼で迎へたのである。

さし畫――前川千帆

風呂屋ナンセンス

大妻技藝學校長　大妻コタカ

近眼青年のG氏が朝起きるなり、いつもの通り齒ブラシを使ひながら風呂屋へ行つた。所が今朝に限つて何て朝寢坊な湯屋だらうと思つて見ると『本日休業』の大ビラが下つてゐる。G氏はいま〳〵しげに次の風呂屋へ飛込んだ。

着物を脱いで眼鏡をはづして、和やかな湯氣に包まれてゐる浴槽に體軀を浸した。朗らかな氣分に滿悦してゐると、何時の間にか湯氣の向ふに人影らしいものが動いてゐる。近眼のG氏は少し變だなと思つてヂッと見つめると、どうでせう、その人影は婦人ではありませんか、『やア！　女湯！』と感じた瞬間G氏は濡れた體に着物を抱へたまゝ、一足飛びに往來へかけ出した。

◇

これは慌てやのK氏の話。

K氏がある町の旅館についた時先づ風呂に入つた。連れの者が一足おくれて行つて見ると、浴槽の中にはK氏の姿が見えない、少し變だなと思つてゐると、K氏は上り湯槽に這入つて蹲踞んでゐるではありませんか、

『君それは上り湯ですよ』といはれて、

道理で湯加減は少し熱いが、湯槽が小さくて少ないと思つた』

現代小説

蒼眸黒眸

菊池寛
富永謙太郎畫

最初知つた五月蠅男性櫻井に或失望を感じてゐた壽美子は、次いで青年作家の三木に眞の思慕を覺え、其後彼と熱海に遊ぶ中、突如戀敵としてちか子と呼ぶジャズ歌手が現れたのを動機に、進んで彼と愛の誓を交して相別れたが、皮肉にも其直後當の三木は、遂にちか子の魅惑に打負けて了つたのである。とは知らぬ壽美子は、一日歸京した三木を彼の住居に訪うた所、意外や彼は『僕は貴女を愛する資格を失つて了つた』と告白したではないか！　驚愕した壽美子は、更に其瞬間、玄關先に脱がれたちか子のらしい派手な履物を見て總てを悟り、激情にをのゝく心を制へて急ぎ足に此家を辭し去つた。(前號までの梗槪)

櫻井の手紙

どう歩いて來たか分らなかつたが、いつか壽美子は、池の端に出てゐた。彼女は、三木に對する呪咀と憤怒と、口惜しさに、舌は乾き身體は燒き盡されさうだつた。

チン〳〵と脈打つてゐる顳顬、頭の中は、はち切れさうに痛みつゞけた。三木の尤もらしい態度や、藝術家らしい容子などが、今は唾を吐きかけてやりたいやうな厭はしさで、考へ出された。

いとはしき色魔。卑しむべき女たらし、、、二階へ女を置きながら、自分に向つて深刻ぶつた憂鬱さうな顔、凡てがインチキであると思ふと、玄關で見たコートや草履が、堪へがたいさまざまな幻想を次ぎから次ぎへと、湧き立たせる。

彼女は、三木の愛情を信頼し、

櫻井との關係を、ハツキリ斷つて、心に叶つた結婚生活に、は入る事を望んでゐた。その希望が、三木の背信で、かくも早く、かくもあつけなく、滅茶苦茶に、壞されてしまふとは、夢にも思つてゐなかつた。

壽美子は、人通りさへなかつたら、そこのベンチで思ひ切り泣いて、了ひたかつた。

それにしても、純情と共に、初て異性に許した唇は！　色魔！　色魔！　壽美子は、口惜しさのために、身體中がほのかに震へた。

上野山下は、夕暮の往來で、雜沓を極めてゐた。

壽美子は、いまは全く病人のやうに蒼ざめて、自動車を止めると、高輪へと命じた。

身を小さい車房に置くと、もう運轉手の思惑など考へるゆとりはなかつた。

それまで、雄々しく抑へて來た感情が、盛り上つて來るのを、嚙みしめるやうにして、しのび音に泣き出した。

家に歸ると、幸ひ母が外出してゐたので、二階の居間にかけ上ると、灯も點けずベツドに身を投げ出して、淚の堰を切つて落した大げさなすゝり泣きに、暫くは身も世も無い有樣だつた。頭の中が、キユーン〱と音を立てんばかりに廻つてゐた。

その淚が、納まると、またしても三木と佐伯との奇怪な幻影に、何か吐き氣に似たやうな感じが、再び新しく歸つて來た。

白々しい、耐へがたいまでに、落莫としたものが、煙のやうに身邊に渦卷いてゐた。

壽美子は、やうやく、電氣スタンドの鎖を引いた。

部屋が明るくなると、サイド・テーブルの上に見馴れた鳩居堂の封筒が、キチンと置いてあつた。

櫻井からの便りで、壽美子が留守なので、母が其處に置いてくれたものらしかつた。

今の壽美子にとつては、それが氣をまぎらしてくれる慰めの一つになつた。

壽美子さま。

僕も風邪氣味で、今日は社を休んでゐます。昨夜は、微熱のため、よく眠れなかつたので、今日は朝から貴女の容態が案じられてなりません。

咽喉はようがひをして下さい。咳が出るやうなら、吸入をかけて下さい。痛む方の耳は、あまりいぢらぬやうになさるといゝと思ひます。

先達の申込は、全く僕の發意ではありません。
僕には、そんな勇氣はありません。僕は、貴女に、ハツキリ斷られたりすることを考へると、恐くてそんな事は出來ません。
先刻から、コロムビアのエスキヤールと云ふ東洋的な交響樂を聽いてゐるのですが、此の曲のやうに、第三樂章がめでたく、輕快に終るといゝのですが、僕は第三樂章で、行き惱んでゐるやうです。
しかし、作曲家も、戀する者と同じに、第三樂章で難澁するさうです。
悲劇的な終末が來るならば、僕はむしろ第一樂章の緩徐調に戻りたいです。
くどいやうですが、風邪の方氣をつけて下さい。

櫻　井　生

壽美子の氣持では、櫻井との事は、まだ序曲も終つてゐないやうなのに、櫻井だけが勝手に終曲で行き惱んでゐると定めてゐるのが、櫻井らしくて可笑しかつた。
が、讀んで了ふと、曾て覺えないほど、明るい櫻井の顔が、浮んで來た。弱々しく滅入りこんだ心は、櫻井の手紙のやさしく甘えるやうな調子で、かるく撫でられたやうに思つた。
壽美子は、もう一度櫻井の手紙を取り上げた。
階下では、母が歸つて來たらしい氣配があつた。

妖魔の絲

壽美子を歸した後、三木は深い慚愧に打たれた。
愛しながら……しかも、將來の愛情の誓約である唇を、易易と受けながら、かくも無殘な裏切りで、壽美子の純情を、滅茶々々に傷つけてしまつた事を考へると、三木は我ながら、激しく恥らはれた。
壽美子が、歸りがけに殘して行つた『さよなら!』と云ふ言葉が、微かではあつたが、恨みを奥ふかく含んで、三木の心に銳く突き刺つて來る。
彼は、暫らく二階に上りかねて、そのまゝ應接間にゐた。
ちか子の居る處は、そこは世にも厭はしい邪惡な部屋のやうな氣がした。
しかし、それはわづかな時間であつた。忽ち部屋の外に、人の氣配がして、
『三木さん何していらつしやるの?』
と云ふちか子の華かな聲がきこえた。
彼は、返事をしなかつた。

『少しお腹が空いたのよ。』
部屋の扉をカラリと開けて、不機嫌な三木の前に、ちか子は明るく立ちはだかつた。
『貴君も、たいへんねえ。』
それは、三木の表情をさし窺くやうにして

云はれたので、三木は思はず苦笑せずにはゐられなかつた。
『お二階から、チラとお嬢さんの後姿を見たのよ。私が、今日フラリとやつて來たことは、最悪だつたのね。お嬢さんなんて、みんな怒りん坊だから、困るわねえ。』
『誰だつて怒りますよ。貴女だつて、僕とあの人との間を邪魔してやらうと云ふ意識があつたんでせ

う。實に僕は……』

三木は壽美子に對して、取り返しのつかぬ罪を犯した後悔で、言葉がつゞかなかつた。

『そんな意識なんかなかつたわ。たゞ貴君が、とても好きだつただけよ。……あの方と結婚するんだつたら、今からだつて引き下つてもいゝことよ。』

夕闇の中で、ちか子の整つた白い顔に、大きな二つの黑眸が、泉のやうに落ち着いてゐた。

『貴君が、あんなお孃さんなんかもつと、上手にあしらへばよかつたのよ。』

『貴女は妖婦だな。』

ちか子の顏には、蠱惑的な微笑がのぼつた。

『今更、泣き言をおつしやつても始まらないわ。食事をしに、どつかへお出かけにならない？』

『とても、そんな氣は起らないから、今日は歸つて下さい。』

三木は顏を背けながら云つた。

『大袈裟ねえ。お孃さんなんか、貴君が一寸氣のきいた手紙でもかけば、すぐ御機

嫌が取れるのぢやない？』

『馬鹿な事を云つちや困る。』

三木は吐き出すやうに云つた。

『一體、文士とか詩人とか物事を深刻に考へすぎるからいけないんだわ。もつと、拘はらずに無邪氣にすればいゝのよ。私なんか熱海でお逢ひしたとき、貴君が好きだつたし、貴君も私が好きなことが分つたからかうなつたのよ。それだけで、あのお嬢さんに對する競爭意識なんかないことよ。あのお嬢さんと貴君と、どんな關係であつたつて、私ちつともかまやしないわ。貴君だつて、さうぢやない？　あの方が好きなら、あの方はあの方で愛してあげればいゝのよ。男のくせに、二人位の女があやつれなくつて、どうするの？』

ちか子のケロリとした理論に、三木は思はず、唇がほどけかゝつたが、

『貴女のやうな考へ方だつたら、男と女との間の惱みなんかなくなつてしまふな。』

『さうよ。ほがらかに、こだはらずにやればいゝのよ。』

『しかし、それだとほんとうの戀愛なんか、なくなつてしまふね。』

『でも、十に一つはあつてよ。』

『あはゝゝゝ。』

思はず、三木は笑つてしまつた。

『ねえ、ほんとうにお腹が空いちやつたの。御食事に出かけませうよ。』

『いや、ともかく今日は歸つて下さい。』

三木は、自分の過失が、どんなに壽美子を傷つけたかと思ふと、壽美子のためにも、二度とこの女に體を許すまいと思つた。無論、今更そんな事をしたからと云つて、壽美子との間が、舊に還るとは思はれなかつたが、たゞ自分の氣持の上で、壽美子に對する激しい心の責から少しでも免かれることが出來ると思つたからだ。

『さう、そんなにお厭なら歸るわ。でも、今度の日曜日には、交際つて下さらなければいやよ。』

ジツと、三木の顔に眸を注いだ。

『いや、それも堅いお約束は出來かねますな。』

『いゝわ。日曜日には、貴君がまだ起きない裡に、來るわ。妾は、自惚では、人後に落ちないんですもの。三木さんも、日曜日頃には、きつと妾がなつかしくなつてゐるわ。』

ちか子は、そんな事を幾度もくり返して、漸く歸つて行つた。

三木は、獨りになると、また壽美子に對する後悔の念に耐へ

られなくなつた。

彼は、心の昴しさをまぎらすため、また旅へ出たくなつた。熱海へと思つたが、そこへ行つて、ちか子とのなま〳〵しい慚愧の跡を見るのもいやだつたので、つい近くの鎌倉の海濱ホテルへ行つた。

ちか子のやつて來ると云ふ日曜日だけでも、東京にゐないつもりだつた。

鎌倉へ行つて、氣持を替へて、壽美子に對する陳謝の手紙をかかうとしたが、それが結局ちか子の誘惑にだらしなく參つてしまつた辯解ばかりのやうになつてしまふので、結局だまつて壽美子の叱責を受けてゐる方が、男らしいと云ふことに氣がついた。

その翌日の金曜日は雨だつた。ふと、新聞のラヂオ版を見ると、ちか子の寫眞が出てゐて、八時二十分からジヤズ小唄を放送するのを知つた。

その夜三木が、ちか子が日曜にきつと來ると云ふ言葉を思ひ出しながら、部屋にゐると、ちか子の甘く肉感的な聲が、遠くのラヂオからきこえて來た。

いつか原稿紙の上に『無實なる妖婦』『無學なる才人』そんな言葉を、いくつも書きちらしてゐる自分に氣がついた。

三木のやるせない慚愧の心は、しづかに癒し切れるものでなく、結局ちか子の妖しい肉感に醉ひしれて、まぎらす外ないと氣がつくと、三木はその夜の終電車で東京へ歸つて來た。妖魔の絲にでも引きずられるやうに。

遭遇戰

壽美子には、無殘な憂鬱な一週間であつた。

野路に摘む一莖の花の如く、あつけなく投げ捨てられて、このまゝ泣き寢入りになつてしまふのかと思ふと、口惜しさと淋しさが、ひし〳〵と胸にこたへて、この世さへ暗い思ひがするのだつた。

それでゐて、なほ三木からの手紙とか、不意な來訪とかを、心のどこかで甘くも、待つてゐるやうな止みがたい戀情もあつて、七日ばかりの間に、壽美子は全く、大患後の人のやうに、頬にも肩にも瘦が目立つた。

日曜日は、日本晴に晴れた。壽美子は、午後から訪れて來るであらう櫻井の事を思ひながら、戀らしい戀、愛人らしい愛人を得た歡喜も束の間、結局自分は櫻井の根づよい執着の力に、だん〳〵引きずられて行くのではないかと考へられた。

間もなく、型の如く現はれた櫻井を、壽美子は我ながら、いぢらしい眼差しで、迎へてゐた。

『ちよつと、痩せましたねえ。風邪は、もういゝのですか。』

と、櫻井は椅子に着くと、すぐ訊いた。

『ありがたう。もう、すつかりいゝの。』

壽美子の答が、やさしかつたので、忽ち櫻井の氣持は、ほどけかゝつて、饒舌になつた。

『手紙を見て下さいました？』

『えゝ。』

『あれ、なか〳〵名文でしたらう。』

『小説でもお書きになるつもりで、お書きになつたの？』

壽美子は、苦笑しながらさう云つた。

『相變らず、皮肉ですね。……今日出かけられますか。』

『出かけてもいゝですけれど……何處へ？』

壽美子は、今の空虚な心を、何かでまぎらしたかつた。

櫻井は、壽美子の答をきくと、すつかり元氣になつて、

『また横濱へでも行きませうか。』

と、云つた。

『横濱はもう澤山。ムウラン・ルウジュでも見に行きたい氣持……』

ムウラン・ルウジュと

は、巴里の有名なレヴュー劇場の名を、そのまゝ新宿にある新興レヴュー一座だつた。

『ムウラン・ルウジュは夜になつてからでいゝぢやありませんか。晝は、繪を見に行きませうか。』

『よい展覽會があります？』

『上野に新興美術展があるし、三越では浮世繪があります、資生堂には……』

『ほゝゝ、プレイガイド見たいね。』

壽美子は、苦笑しながら、一しよに出かけたら夜まで、一しよに遊びたがる櫻井の氣持に、心では贊成してゐた。

たま／＼めぐり會つた三木は、恐ろしい幻滅であつたので、もう新しい戀を追ふ心も萎え、知らず／＼の裡に、平凡ではあつても心安く、唯々諾々たる櫻井の求愛を甘受するやうな氣持が、壽美子の胸に、おぼろげながら、浮んでゐた。

二人は、間もなく連立つて家を出かけた。櫻井の顏色は、相變らず、へんに白かつた。

自動車に乘つて了つてから、

『貴君も顏色がよくないわねえ。』

と、云ふと、櫻井はニヤ／＼としながら、

『昨夜のんだんですよ。』

と、云つた。

『なぜ、そんな事なさるの。』

『もう、僕は實際落着かなくつて、苛々して、つい飲んでやれと云ふ氣が起るんです。殊に、貴女はこの一月ばかり、妙に僕を冷遇したんですものね。』

櫻井は、平氣でそんな事を云ひながら、ショールの下につゝましく重ねられてゐる壽美子の手を、ショールの上から固く握つた。

『そんな事、妾のせゐにするものぢやないわよ。』

と、報いながら、壽美子は櫻井が常に、自分の氣を引くやうな小才覺をしなければ、もつと好きになれるのにと思つた。

二人の性格の間隙を思ふと、壽美子は、やはり淋しく思はずにはゐられなかつた。

展覽會は、その名の示す如く、色彩の華やかな立派なもので、日曜の晴天に惠まれて、可成澤山の人が、は入つてゐた。

音樂派、超現實派、殆んど何を意味するのか解しがたいやうな繪で、たゞ色彩の華麗さに、眼を奪はれるばかりだつた。

『あたしには、難解だわ。俗人と思はれても仕方がないわ。』

と、壽美子が云つた。

『全くですね。はゝあ、この繪ですね、岡本一平氏が、どこかの雜誌で紹介したのは。』

と、櫻井が云つて、ピカソの『顏』と云ふ繪を指し示しながら、立ち止まつた時に、壽美子は誰にともなく、背後から肩を、かるく叩かれた。

振り向いたとき、彼女は息がとまるほど、ハツとした。

この七日間、いやな幻となつて、夢にも忘れられなかつた佐伯ちか子が、あたりの繪から拔け出したやうな艷麗さと、捕

捉しがたい微笑で、そこに立つてゐた。

『熱海では、失禮致しました。お一人ですか？』

『いゝえ。連と。』

壽美子は、口をきくのが苦しかつた。

ちか子は、櫻井の方をちらと見ると、

『私も、三木さんと、御一しよなの。お差し支へなければ、御一しよに、お茶でも召し上りません？』

ちか子の一語々々が、壽美子の胸を、無殘に、ブツ／＼と突き刺した。

しかし、一しよにお茶を飲まないかと云はれると、壽美子の心は、一瞬の裡に、敵愾心に燃え上つた。

『參りませうか。私、三木さんにお目にかゝりたいし……』

三木が、ちか子とどんな顏をして、自分の前で並ぶか、自分の二つの眼で、ハツキリ見てやりたいと思つた。

『今、そこにゐた筈よ。』

ちか子は、ふり返つて群衆の中を物色した。

× × ×

三木は、會場を歩いてゐる裡に、知人に會つたので、挨拶をしてゐる內、ちか子を見失つてしまつた。

それらしいのを眼で追ひながら、次ぎの部屋へは入つて來ると、片隅に壽美子と立話をしてゐるちか子を見て、愕然としてしまつた。

身をひるがへして、逃げんとしたが、もうちか子に氣づかれてゐた。

三木は、壽美子に對する面目なさで、足元が吹き拂はれたやうに、心もとなかつた。

萬事休す！ 壽美子とちか子は、眞直ぐに彼の方へ歩いて來た。

怒りに燃えた壽美子と、妖女にも似たちか子とが、圖らずも顏を合してしまつた。そしてその傍に三木もゐる。櫻井もゐる。

ちり／＼とした波瀾の前の息詰まる靜けさ。待たれよ！

いよ／＼次號は最高潮場面へ……。

（つゞく）

りん病

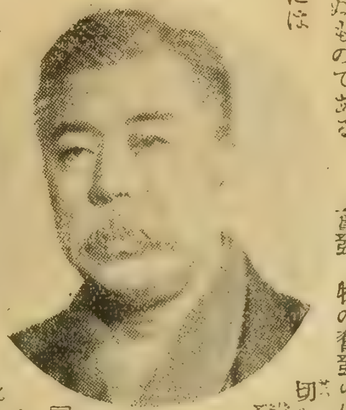
淋病淸渇は不治かと歎く氣の毒な方に、數多の全快者が現今の新發見藥も及ばぬキヽメある良藥なりと賞讃する當院傳來の淋藥お知らせ致升▲當院淋藥の特長は一人一劑主義●所謂金取本位の新賣藥の如き患者の弱點を付込み無効藥を巧みに幾劑も服用を強ゆる要なく隨つて手當の時機とムダな大金を失なはしむる事なし特に根治せず再發する方に責任を持つておスヽメ致升▲博士證明藥や自己全快の口實で賣る自己發見の創製藥、猶ない處方の家傳藥或は黑燒藥等の巧妙な廣告に迷ひ病をコジラかし日夜惱む方は、思ひ切つて今スグ委細の手紙でお尋ね下さい▲當院は人助本位故、事情により代金後拂にも應ず遠慮なく申越あれ▲至急望む方へ有効藥急送す。

大阪西區北堀江御池通一ノ二五角南 妙法院

資本がなくとも成功する！

『赤手空拳を以て仕事を創めるのには、初めから儲ける算盤を採るより仕方がないかも知れませんが、大體論としては、初めから儲ける算盤を採つては、その仕事は成立たぬものである、その仕事は迚も儲からぬものである、榮えゆかぬものである――私にはどうもさう信ぜられるのであります。何の商賣でも三年位は我慢しなければならぬと思ひます。

初めから儲けようといふ算盤を採つたら、多くは失敗であります。初めは損を覺悟の算盤を採つて、一年或は二年、或は三年目からどうやら儲かるといふ算盤でなければ本當でない。「それでは全然資本の無い者は、仕事を創められないではないか。」といふ疑ひは當然起つて來ませうが、私は考へやうによつては、金が無くても、その算盤を採つて行ける途があるのではないかと思つて居ります。どうしてもさうする事は出來ないまでも、せめては此の心掛でも持つて居ていただきたいと思ひます。尚左樣な場合は、金の奮發、物の奮發の代りに愛嬌の奮發です、深切の奮發です、誠意誠心の奮發です、勞力の奮發です、金や物の代りに心身の努力奮發を以て之を償つて參りたいと思ひます。』



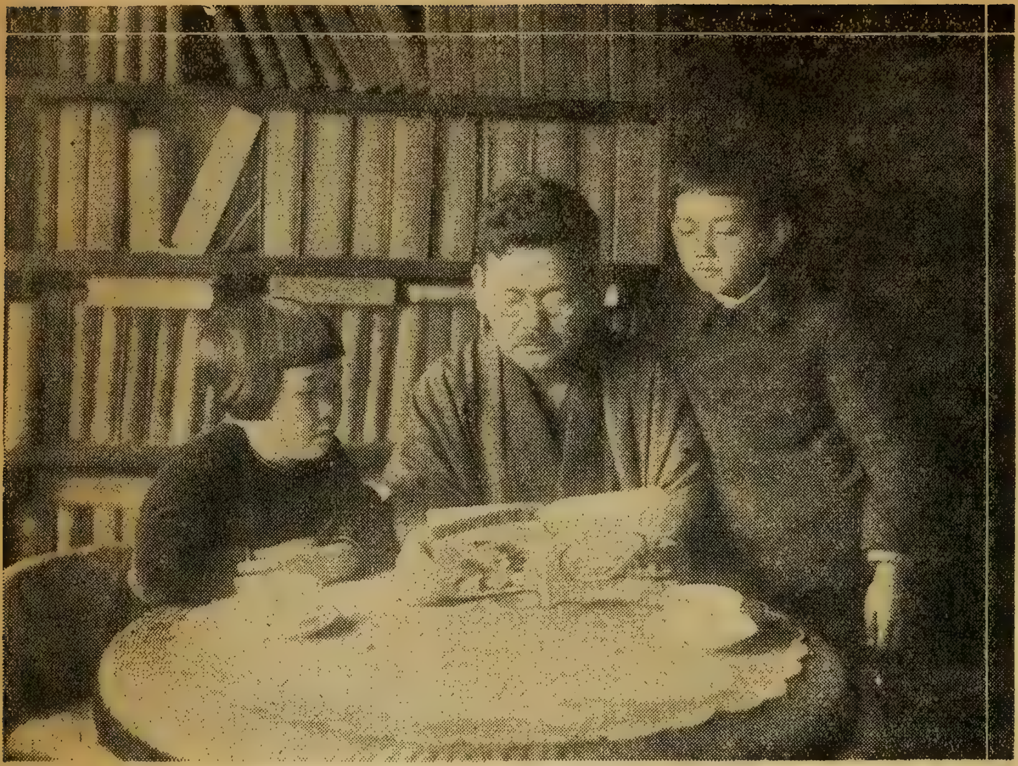
以上は本社長野間淸治著『榮えゆく道』の中の一節ですが、本書は主として、著者がこれまで種々の事に當り物に接した心境の移り變りを述べ、この考は誤りであつた、このやり方は本當ではなかつた、成功の道は是れだ、人間の行くべき眞の道は是れに違ひないといふやうな所に力をこめ、日常茶飯の事柄を對象として、完全な自分を作り上ぐると共に一店一社を繁榮せしむる大方策を面白く解り易く說かれたもので、事業家としても、又俸給生活者としても是非心得て置かねばならない珠玉の文字です。

この外に特に職を求むる人の爲に、現に職にある人の爲に、又、人を使ふ人の爲に、著者が過去二十餘年間の赤裸々な體驗を發表されたのが『體驗を語る』です。其他『處世の道』『出世の礎』『修養雜話』と題する三著がありますが、孰れも皆著者の永年の體驗から得られた人生の活教訓で、決して無味乾燥な机上の空論ではなく、一言一句悉く私共の血となり肉となる人生讀本です。以上の五著は凡ゆる方面の諸名士、先輩の方々から多大の御褒めの御辭を頂戴し、出版界未曾有の大賣行を示してゐます。就職戰線突破の秘策として、又事業界に活躍の好指針として此の際、是非御一讀を御奬めします。

榮えゆく道　定價五十錢　送料八錢

體驗を語る
出世の礎
處世の道
修養雜話
定價各冊二十錢　送料四錢

（本社發行）



私の幼年倶樂部觀

菊池寛

後から後から、よくいろ〳〵な智恵が出ると感心させられるやうな、あらゆる注意と工夫とで毎月々々編輯せられてゐる。我々の子供時代の雜誌に比べると、何といふ豐富な變化の多い內容であらう。現在の子供がむかしの子供に比べて、いろ〳〵な知識や趣味を持つてゐるのは、小學校教育の發達よりも、むしろ幼年倶樂部などの進步した編輯に依るのかも知れない。子供にとつて精神的なお菓子であると共に、また必要缺くべからざる榮養素でもある。

寫眞――菊池先生のよきお父樣ぶり。右、令息英樹さん、左、令孃ナナ子さん。

すてうり勘兵衞

村上浪六

鰭崎英朋畫

正月の四日、淺草の觀世音へ參詣の歸途、兄の田島幸兵衛に出逢うて面上を斬られた勘兵衛、實は申譯の一端にもなるかと斬らせて來た勘兵衛、固より段違ひの武道で急所を遣られる筈はないが、手足では得心が行くまいと、左の額際から眉毛の上まで二寸あまり、すッと糸を引くやうに大刀の鋒鋩を受けた危ふさ、鮮かさ、ばた／＼と五六人の敵を前後左右に斬倒したよりも難かしい武術の放れ業で、わざと大げさに血汐の半面を掩うて遁げ出した後姿を見れば、流石に兄の心も少しは和らいだかと思はれる、

たとひ千萬言を盡したとて、君の愛妾に押付けられた戀を避け得ずして自己の口から若氣の至りでは濟まぬ身、この面上に受けた淺疵一個所で聊か藩中へ兄の面目でも立てば何よりの幸ひ、片耳の一個ぐらゐは手土産の印に持たせて歸したいが、そこまで千番に一番の曲藝も出來かねた勘兵衛、生命は暫く此まゝ御預け下さりたいとして見れば、猫に引ッ掻かれたほどでもない、

然し鶴吉は小屋掛け芝居の女俳優から遁げて來て生涯この人と縋り付た男の顏に疵、それが前夜の枕頭で介抱しながら打明けられた大名のお部屋、樣といふのも口惜しい菊枝とやらの無理な横戀慕が禍の基と思へば、四年前の事にもせよ、今の目の前に連れて來て、あやまらしたいやうな氣がする、

三日目の朝、蒲團の上に坐り直して身を捻りながら臺所の方へ顏を向けた勘兵衛、

「水でも宜いが、あれば、なま溫の湯にしてくれないか、顏を洗ッて見たい」

びッくりして出て來た鶴吉、蜘蛛の巣を拂ふやうな手付で、

「まア、あなた、何といふ事を仰ッしやるンですよ、其お顏が洗へますか、氣持が惡ければ嗽だけになさい、こゝへ持ッて來ますから」

「さう病人扱ひにするな、この通り身體は、ぴち／＼してるぞ」

『身體は兎も角お顏に現在、そんな疵があるぢやありませんか』

『なアに、かうして醫者に卷かれた晒木綿で大層に見えるが、張り膏藥で一針も縫はないくらゐだ、加之も世間並よりは面の皮が厚く出來て居て、うまく骨へ觸らないやうに受けたからね、はゝゝゝ』

『笑ひ事ではありませンよ、いよ〳〵お醫者樣、これで宜いといふまで、じツと其まゝ横に寢て居て下さい、お顏なンか洗はなくツても宜う御座います』

『ぢやア洗はずに居らうか』

『もし、それがために癒りが遲くなツたら、どうなさるンですよ』

『お前さへ、かまはなければ一年や二年、垢だらけになツても乃公は平氣だ、折角の色男、よごれては濟まないと思ツてね』

腹が立つやら嬉しいやらで返事も出來ずに臺所へ遁げ出した鶴吉、朝飯の用意に忙がしい長さンの背後から不意に抱付いて、

『どうしませう、あンな無理ばかり、わたし知りませンから長さン代ツて下さい』

『痛い』

『痛いもンですか、ちよいと肩を押へたぐらゐで』

『六年も鐵砲笊を背負ひ馴れた肩だ、おツ被さツても乘ツても宜いが、だしぬけの背後からのめる拍子に前の鍋へ手を突ツ込で仕舞ツた、おまけに今朝の味噌汁お流れだ、これから火に掛けようとしたところで火傷は免れたが、いてエ』

『あら、すみませンが、お鍋の緣で手首を擦り剝いたぐらゐでせう、大切な顏の疵に比べて御覽なさい、何でもありませンよ』

『何でもありませンかね、そりア此方のいふこツた、どうせ痴話や不足の掃き溜になツて居ますが、いち〳〵さう御丁寧に持ツて來られちやア、やりきれねエ』

『だツて、どこへも持ツて行けませンもの』

『御挨拶だ、はゝゝきれいな優しい顏をして居て、段々と似て來ましたね』

『誰に』

『誰にといふのが、もう皮肉だ、似て來たといへば大將の外、誰に似ますかね』

『はゝゝどンな事が似て來ましたの』

『根は親切で萬事を承知して居ながら、をり〳〵人を馬鹿にしたやうな、ふざけ半分に横着な工合、自分の勝手が惡くなると、まるで人の迷惑を引受けたやうだ、はゝゝだが因果と長助』

そこに惚れ込で、かうなツて見りやア何をされても、何といはれても腹ア立ちませンよ、お前さンだツて親兄弟はなし、わツしも子のねヱ身體だ、怒ツちやア困りますぜ、實ア娘のやうに思ツてるンだ、いくらでも遠慮なく我まゝ一ぱいに甘えて貰ツた方が嬉しいよ』

急に顔を寄せた小さい聲で、

『そンな事ア萬々、ある筈もないが、もし大將、外の女にでも妙な目付をし出したとなりやア第一この長助が默ツて居ねヱ、どう考へても萬年町の貧乏長屋に居た縁で、たゞ戀の取持ち役だけに出來たやうな氣がしませンよ』

ほろりと涙を落した鶴吉、

『長さン、た、たのみますよ』

『安心して居なせヱ、屑屋アして居たが、まだ人間の屑にはならねヱ男だ』

『これですから』

『拜まれなくツても宜うがすよ』

門口の開いた音、うかと出せぬ鶴吉を搔き退けて長さン出て見ると、例の川口周藏、

『田島、居るか』

始めに來た時は探し歩いて居るところを見付け出した工合で、よけいな男も女も追ひ拂うて仕舞へといふやうな苦々しい面體も、今は案外に打解けて野暮堅くないばかりか、彌勒寺橋の上の人違ひを幸ひ鶴吉のために鬼熊の一札を取ツてくれた力強い味方と、にこ〳〵顔の長さン、ぺこ〳〵頭を下げて、

『入らツしやいまし、さア、どうぞ』

これまでの五六度も來た心易さに、すぐと其まゝ勘兵衛の居間へ通りて、起き直りし額の晒木綿に目を注ぎながら、

『や、田島、よく斬られてくれた、それで兎も角も一應は、まづ兄御の面目も立ち、また自然と御前への聞えも惡くない、たとひ不意の急場にせよ、まさか兄の幸兵衛殿に遣られる弟の勘兵衛とは藩中一同、誰しも思はないため猶更、よく〳〵の後悔が現はれて、この川口も聊か安堵したが、疵は』

竹馬の友の嬉しさに幾度か首肯いた勘兵衛、

『いや、ほンの少々ばかり、これぐらゐでは相すまぬと心得ながら、その場に同伴もある事、もし長引いてはと、輕く一太刀を受けて後も見ずに遁げ出したが、なか〳〵際どい、あぶない、難かしい藝當でな』

『その邊は兄御も内心、存じて居られるに相違ない、さもなくて相手は無敵の武道者、人よりは手並を承知の弟に打込めるか、はゝゝゝやはり兄弟ぢや』

『どこへ向いても弱い勘兵衛、自己の心に自己が縛られて、この四五年は満足に動けた事がない、自業自得とはいひながら』
『そろ〳〵何とかして、その心の繩を解かねばなるまい、たとひ勘兵衛の身は此まゝの貧乏浪人で埋めるにせよ、あたら勘兵衛の業は惜しい、今更、返らぬ愚痴のやうでも、數ある女の中で、とりわけ出逢ひ運の惡い女に引ずり落されたぞ』
そろりと襖を開けて、茶を持出した鶴吉、お辭儀に水際の立つ襟首を見せて額越の目千兩に今は、わざとらしい芝居氣もないが、どこやらに殘る花の風情で、この冬空に咲いた寒牡丹の一輪、振返りし川口は思はず微笑を浮べながら、
『これは別物ぢやが田島、女運と武運、はゝゝゝどツちが宜い』
勘兵衛も苦笑ひしながら、この川口には何事も安心で遠慮がない、
『武運は手の內にあるが女運、此奴は向ふ次第で、生涯の不覺、あゝいふ遣り損ひもある、はゝはゝ』
かうなると碎けて洒落れた人にもなれるらしい、
『ところで、この鶴、どのは』
『それは、男運を間違つて來たかも知れない』
とぼけた面で臺所から這ひ出した長さン、
『こゝに一人、置て遣ツて宜いか叩き出して宜いか、厄介運の

分らない奴が御座いますよ』

ます〳〵心地よげに笑ひ出した川口周藏、

『面白い、かうして居ても面白い浪人住居の氣樂さに出來てるわい、これを此まゝ片落のないやう無事に三人とも世の中へ浮び上らせたい、押上げたいな』

また我を忘れて調子づいた長さン、

『もし芝居の舞臺とすりやア此三人で』

じろりと鶴吉に睨まれて、はツと首を縮め、

『何分とも、よろしく、お願ひ申し上げます』

お客扱ひと親類扱ひの半々に川口周藏を送り出した後で、長さンに小膝を向け直した鶴吉、

『あンな時に芝居だの、舞臺だのと、わたし顔が赤くなるぢやありませンか、わざ〳〵さういはなくツても、この前に入らした時、さンざ自分の恥も外聞も曝け出して仕舞ツて、よく御存じですよ』

長さン痒くない頭を搔きながら、

『わざ〳〵、さう思ツて口へ出ますかね、つい、うツかり辷ツ

たので、片落のないやう三人とも一緒に浮び上らせたいとか押上げたいどかいはれて見ると、嬉しくツて堪らねエ、でれンでれんといふ調子に乘ツて奈落の底から、ぐい〳〵と、せり上りのやうな氣がするでせう』

『しませンよ』

『しませンかね、た大將は、どうです』

『はゝゝもし、するといへば、どうなるンだ』

『まづ御殿の床下で大將は男の助、この長的は毎日この通り踏まれ付けてるから鼠でせうな、鐵扇を喰ツて其場ア消て無くなるが今度目は幕外の一人舞臺だ、澁い長社袮の反身で懷手の印を結ぶといふ仁木彈正』

『鶴は』

『政岡のやうに痛々しい、かはいさうな目に逢はしたくないでせう、そこで男の助が小脇に抱へ込で』

『ほゝゝ長さン、そンな床下がありますかね、抱へ込で居て落されると大變ですから、さうなれば仕方なく、やはり嫌でも政岡を勤めますよ、千松も四年か五年前、どツかの女に產まれた子と思へばね、ふしぎありますまい、殺すのは八汐で、わたしは大事に育てる氣』

ちらと横目で見られた勘兵衞、

『おい、そンな馬鹿々々しい、くだらない話しは止せ、はゝゝはまるで氣狂ひが寄ツてるやうだ』

川口周藏の來たのは朝の內で、その晝過に買物のため出かけた長さン、門口を出るや否、慌てながら走り込で、

『大將、來ましたよ、彌勒寺橋の上から此方を睨ンで、あの家かと子分らしい奴に指さしてる工合は年恰好といひ圖體の大きい野道で、藥研堀の鬼熊に相違ねエ、畜生、いよ〳〵こゝを見付け出しやアがツたンだ』

今朝から無理に寢蒲團を方付けさして、長火鉢の前に莨の煙を吹きながらの勘兵衞、

『どうせ遲かれ早かれ來る奴だ、どンな事があツても、きさまと鶴は隱れて居て出るな、入口の障子も、この襖も開け廣げて表から直ぐ乃公の面を見えるやうにして置け、何疋、來た』

『親犬と案內犬のやうな奴と二疋ですよ』

『今までは臆病に何處へでも五六疋づつ繫がツて居たが今日は吠えるばかりでなく、嚙み付く考へだらう、よし、さア早く引ツ込め、鶴、心配するな』

まづ門口まで、そツと樣子を窺ひに來た子分が格子の間から

差覗いて、橋の袂に待受けた鬼熊の前に目の玉を剝き出し、
『親方、うか／＼出來ねエ、どうして匂ツたか不思議だ、あの凄い奴が白鉢卷で待受けて居ますぜ』
『何だ、白鉢卷で待受けてる、馬鹿野郎、そンな筈があるけエ、これまで幾度も下手な眞似で相手に遣られたから面くらツて、さう見えるンだ、乃公が來た以上、どういふ工合にするか後學のために覺えて置け、いくら凄くツても手剛くツても向ふに引け目のある奴で、高が貧乏痩せの素浪人だ、ゆる／＼と騷がずに取ツちめて、やンわりと締めて遣るよ、はゝゝゝ』
穴を見付けた上は、もう動かさねエといふ場數の大膽で、わざと靜かに門口を引開け、のそりと大きい身體を入れた鬼熊、
『御免なせエ』
ひよいと見れば、まだ癒えぬ額の疵を包みし勘兵衞、熊藏の目には嘘でない白鉢卷、や、此奴、油斷がならぬと思ひながら、
『是非お目に掛りたくツて、藥研堀から來たもンですよ、お手間ア取らせねエ』
『藥研堀から、ふウ、どういふ用か、取次もない見通しだ、ずツと其まゝ此方へ』
火鉢を中間に坐り込で、じろ／＼見廻した目を眞正面に向けた鬼熊、
『ちよい／＼陰ながら噂ア聞いて居て、始めて逢ひますが、なるほど、面の雜作も引締ツて苦み走ツた好い男振だ、これぢやア年の行かねエ世間知らずの甘ツたるい女ア手もなく引ツ掛るよ、だがね、罪だ、こゝまでいへば盲目でも聾でも分るだらう、わツしやア廣小路の女芝居を持ツてる男で、中村鶴吉の太夫元だよ、はゝゝゝどうですい、今日は一番お互ひに笑ツて、あツさりと本人を出して貰はうぢやアねエか、その男振なら外でも女に不自由しめエ、わざ／＼何も人の金を掛けた商賣物を引ツこ抜いて、女喰ひだの俳優盜賊だのと、いやな名を背負ひ込まずとも宜い筈だ、おとなしく四の五のいはずに本人さへ出しやア今までの事、此方の災難と諦めるが、どンなもンだね』
すぱ／＼と二三服の莨を煙に吹いた勘兵衞、
『よく分ツてる』
知れた事を吐せといふ調子に頤を突出した鬼熊、
『これで分らないとすりやア、どうかしてる奴だ』
一度は首肯いたが二度目の首を横に振り出して、
『わかツたが、そりやア皆、そツちだけの分ツた話しで、此方へは少しも通じない、わからない』
『な、何だと』
『慌てるな、落着いて聞け、いかにも中村鶴吉、乃公の方へ遁

げて來た』
『遁げて來たンぢやアねエ、楽屋からの歸り途を暗闇に覘ツて、盗み出しやアがツたンだらう』
『いや、辛い遁げたい、どうかして强慾な無慈悲の手を離れたいと一生懸命になつてる本人、ちと迷惑でも可哀さうだから人助けに連れて來たンだ、いやがるのを無理に引ツ掠へては來ないぞ、盗ンだ覺えはないぞ』
『やさしく出りやア好い氣になツて、ふざけるな、この野郎、親知らずの子飼から藝を仕込で、やツと一枚看板に拵へ上げた鶴吉だ、これからといふ大事な稼ぎ人を不意に横取された太夫元は何處で息をするンだい、第一また江戸中の興行師に藥研堀の男が何處で立てるンだい、さア、今までの盗賊沙汰を水に流してやらうと思ツたが、さう横車を押して出りやア此方にも覺悟があるンだ』

『どういふ覺悟がある、此方にも鶴吉を渡さぬ覺悟があるぞ』
『渡さねエ覺悟』
『これは誰が書いた』

手早く懷中に入れて居た例の一札を取出して、片手に刀を引寄せた勘兵衞、

『一私儀、抱への女俳優中村鶴吉の事に付、申譯なき御迷惑を相かけ何とも以て恐れ入り奉つり候、今後これには毛頭、彼是と申す間敷、爲後日一札、依而如件、はゝゝ藥研堀の熊藏としてあるが江戸市中、この外に鶴吉といふ女俳優も熊藏といふ太夫元もあるまい』

うツかりして居た顋の下から竹串で突かれたやうな鬼熊、呆れて驚いた滿面に朱を注ぎながら、

『女を盜ンだ上に他人の證文まで盜ンで居やアがツたな、そりやア、てめエに渡した一札ぢやアねエ、子分の奴等が人違ひで松、松平伊勢守の家來を相手に面倒だから川口とかいふ侍へ氣休めに出した一時遁れの詫び證文だ、これも基ア、うぬから起ツた事で、考へて見ろ、金凾の鶴吉を盜まれたのは乃公だぜ、その乃公が盜ンだ奴に今後一切、彼是、いはねエといふ一札を入れる筈があるけエ、あやまり證文なら現在、てめエから此方へ取るのが當然だ』

あせり出す奴に向へば、ますゝ落着て來る勘兵衞、

『この一札に川口とも何とも宛名のない以上、どこにあツても證文は證文で、加之も鶴吉の身體こゝに來て居れば猶更の事、もう彼是はあるまい』

『はゝア、あの川口といふ奴も同じ穴の狸で、まンまと一ぱい

喰はしやがツたな』

『無理に喰ツてくれと、頼ンだものでもあるか』

『かうなりやア』

『どうする』

『どうするか、今に見ろ、たゞの興行師や太夫元ぢやアねエぞ、十年前までは二足の草鞋を穿て來た熊藏だ』

『たツた二足か、おまけに十年前といへば一昔、はゝゝゝそれが今こゝで何の役に立つンだ、よく世間にある金持ち町人の若旦那が戀女と手に手を取ツて遁げたとか走ツたとかいへば、おどし文句に怯えて震へて青くなるかも知れないが、この方は少少お門違ひの男で、石地藏の頭を藪蚊が刺したとも思はない、諦めろ、第一また十四の歳から十九の末まで、さンざ晝夜の舞臺に働いて身の膏を絞り上げられた本人、儲けさした剩餘はあるとも損はさして居るまい、のみならず生命がけに惚れた男の身體へ、いはゞ死物狂ひに喰ひ付てる女、これを引裂いて離せば死骸だ、死骸は金にも賣物にもならンぞ』

『少しは氣まりの悪い面でもするかと思ツて居たに此奴、のろけ交りに洒アくとして、すきな熱を吹きやアがる、まア今日のところは怪我もなく、その邊で幾何か饒舌り甲斐があツたとして置け、利息は金ばかりに付くもンぢやアねエぞ、あらためて近い内に總勘定をしてやるからな』

四邊を睨み廻した大聲で、

『やい、鶴吉、この狹い家だ、どこに居たツて聞えるだらう、長年の間、うみの親よりも有難い乃公に向ツて、よくも恩を仇で返しやアがツた、引ずり出すに手間ア入らねエが、いちく面倒だから今いふ通り總勘定の時まで待ツてろ』

天井を仰ぎながら大欠伸をした勘兵衞、獨言のやうに、

『うるさい奴だ』

くわツとして膝を立てた鬼熊、

『も一度、いツて見ろ』

また欠伸しながら、

『あゝうるさい奴だ』

白鉢巻は額の腫物と見て、これ幸ひの急所と、その上を無言のまゝ力瘤の覘ひ突に突出した握り拳、だしぬけの不意打も勘兵衞には不意打でない、加之も長火鉢を越して腕の伸びたところを片手に攫むや否、ぐいと引寄せて片手に灰を掬ひ、ごしごしと目鼻の間に磨り込まれた鬼熊、

『わツ』

目潰しを喰うた盲目滅法に立上る向ふ脛へ、ぴかりと抜いた勘兵衞の一刀、

『遣りやアがツた人、人殺しツ』

どたりと倒れた襟首を引起して、

『はゝゝ斬ツて居ないぞ、刀の峯打だ、向ふ脛の骨は折れても、這へる、這ツて見ろ』

さらぬも薄氣味惡く、いざとなれば遁げ出す考へで、びくびくしながら入口の方に腰を掛けて居た子分の奴、

『親方、大丈夫だ親方、生きて居ますよ』

鯉口の音高く、ぱたりと鞘に入れて、笑ひながらの勘兵衞、

『おい、こら、背負ツて出て、その邊の辻駕にでも乘せてやれ』

まツ黑な面を灰だらけにして、ぶら〳〵足の鬼熊を背負ひながら、狼狽へて遁げ出した子分の後姿は、畫にも描けない、

『さア、もう、すンだぞ』

鐵瓶を提げて來た長さン、

『大將、驚きましたぜ、彼奴も驚いたでせうが、襖越の此方も驚きましたよ、わツといふ下から人殺しと來ましたからね、まツ兩斷になツたかと思ツて』

『はゝゝ見たところは大きい身體で、閻魔のやうな面をしてるが、口ほどにもない奴だ、あンなものを斬ツたり殺したりするかい、ちよいと痛めて置けば宜い、あれで當分まアひよこひよこ出られまい、その鐵瓶は何だ』

『これですか、こりやア大將、萬一の場合に飛出して彼奴の頭へ、ぶツかけてやらうと思ツたンですよ、よく沸いて居ましたからね』

『あぶない、乃公の刀は自由自在に使へるが、きさまの沸え湯は何處へ來るか知れない、ぶる〳〵した手で無闇に湯玉が飛で來ては防げないよ、まだ乃公は湯玉を相手にした事がないからな』

『まさか、大將、いくら面くらツても敵味方の見境ひは付きますよ』

『それが怪しい、うか〳〵すると敵味方より自分の頭へ浴びるぞ、はツはツはツ』

どうなるかと思うて居た鶴吉も一時、ほツとしたが、まだ後の心配が取れない、

『あンな事で、これから猶更、ひどい仕返しに來ると、困りますね、聞て居ても胸が、どき〳〵しましたもの』

『どンな仕返しが來るもンか、幸ひ川口のくれた證文を握ツてるからね、この上は向ふに押切れない弱身があるよ、ゆすり半分に來る奴と見て蹴飛せば宜いンだ、然し正直に考へると、あンまり此方も自慢の出來ないこツた、あゝいふ家業に馴れた奴だから、おどし文句で何の苦もなく取返せる女を、わるい相手

に盗まれたよ、第一お前が善くない、楽屋裏から紅筆で、生命がけですから盗ンでくれの、いや逃げ出したいのと、そこへ屑長といふ此、おせッかひな小まめな男が飛出して、よけいな世話を燒いたからねエ』

『だッて、さうなッたンですもの、今更、わたし、そンな事をいはれて』

『實は乃公に惚れ過ぎたよ』

『ほゝゝゝ御免なさい』

二人の顔を見比べた長さン、

『好い加減にして下さいよ、沸え湯の鐵瓶を提げたり、そンな事を聞かされたり、この長さン、どこに立つ瀬がありますかね』

『おい、鶴、長さン怒ッてる、乃公は殘念だから、お前、うまく何とか、ごまかしてやれよ』

ごそ〳〵と蟹のやうに臺所へ逃げ出した長さン、

『今年四十三になッたが、まだ去年の後厄が殘ッて居やアがるは、ゝゝゝ嬉しくッて笑ッたンぢやアありませンぞ、これが泣き笑ひといふもンだ』

臺所へ追ひ縋りし鶴吉、

居なせエよ』

また鶴吉の目が濡れて來て、ほろりと一雫、

世間の一口に木戸錢の小屋ものといふ子分の奴等には、これまで二三度も出合頭に齒の立たぬ手並を見せたのみか、その親分の鬼熊を當分の半片輪にした以上、もう手も足も出まいとは思ひながら、慌て氣味の長助と肝心の鶴吉を置たまゝで、うか〱外へ出られない、また二人も火事後に火の粉の殘るやうな氣がして、なかなか外へ出さない、

額に巻付けた晒木綿を取れば、なるほど、案外の淺い疵、まして十日目の今は、うツすりと赤い痕が殘るばかりで、

『どうだ、何でもなからう』

『堪忍して下さいよ、つい、うツかり、あゝなツたンですよ』

長さン打消すやうに片手を振りながら、

『夫婦喧嘩の仲裁よりも、どのくらゐ氣持が宜いか知れねエ、大將あの調子の人といふ事を間違はずに、しツかりと抱き付て

やう〳〵安心した鶴吉、

『案じたほどでも御座いませンね、その分で行けば痕も殘らずに消えませうね』

『すツかり消えもしまいがね、かういふ工合に疵を受けるのは、よほど難かしい藝だぞ、自慢しては相すまぬが、あの場合、あの打込を外しもせず眞正面に受けて現在、これくらゐの淺痍にするものは恐らく今この江戸中で、さう幾人もあるまい、そこで乃公が前夜、寢ながら考へたよ、もし喰へなくなれば、これを賣物にする』

『あら、また、御冗談を』

『いや、冗談でも金儲けになるぞ、夜晝あの通り群集雜踏の絕えない淺草へ出て、武士と町人に限らず誰にでも我と思ふ奴に眞劍で斬らせるンだ、珍らしいのと面白半分に向ふ意氣の強い奴が多いからね、これは繁昌するぜ、一度の打込を五百文づゝとして、ひよい〳〵と身を交せば一日の稼ぎ高、大きいぞ、さしあたり口まめの長助に人寄せの口上を饒舌らしてね、はゝゝはゝ』

　呼ばれるのを待たずに次の室から這ひ出して來た長さン、

『天下一品、珍無類、そりやア大將の外に出來ねエ藝當だ、きツと江戸中の大評判になツて、わい〳〵と押寄せますよ、さアさア種も仕掛けもない、皮一枚の下から赤い血の吹き出る生面を曝して、どなた樣にも眞劍の斬込み次第、もし間違へば生命の瀬戸際を僅か五百文づゝの大安賣、さう混み合ツては困ります、どうか御順番に』

　ぎゆうと橫から耳を捻ツて放さぬ鶴吉、

『長さン、何をいふンですよ、べら〳〵と、此方へ來て下さい』

『さア遣られた、愛嬌ですよ、折角あゝして氣の乘ツてる大將に調子を合したゞけのこツてすよ』

『そンな調子の合せやうがありますか、わたしの親にでもなりさうな、いゝ年をして』

『御尤樣だが、そこは家來の悲しさで、大將、こンな目に逢ツてるのは、あなたのためですよ、見て居ちやア分りませンが意地惡く段々と爪を立てゝ來ますよ、痛い〳〵助けて下さい』

『はゝゝゝもう宜い、その邊で放してやれよ、お前も隨分、一酷だからな』

『あなたも、あなたですよ、そンな事をなさるくらゐなら、わたしが編笠を着て、門付けの三味線を彈いて步きますよ』

冗談の中にも眞面目な哀れさに打たれて來る長さン、

『さうなれば此方も、元の鐵砲笊を背負ひますよ』

笑うて居ても、しンみりとして來た勸兵衞、

『なアに、そこまで落ちるもンか、三人寄れば文珠の智惠といふ事もある、まさか飢死もしまい』

唾を吞込むやうに小首を動かした鶴吉、

『たとひ、たとひ飢死になツても、此まゝの三人ですよ』

兄の

疵を受けてから十二日目、鬼熊が押寄せて來て二日目、夕飯の箸を措て膳の前に立ちし勘兵衞、

『手拭を出してくれ』

『お手に何か付きまして』

『いや、久しぶりで湯に入りたい、十二三日も洗はなかツたからね、ちよいと近處の錢湯へ出かける』

なるべく外へ出したくない鶴吉、まして宵闇の今ごろは猶更の事、

『お風呂なら日中にして下さいよ、今時分は、混み合ツて居りませう』

『その方が却ツて、いろ〳〵の世間話しを聞くから面白いよ、どうだ長助、一緒に行かないか』

『わたし一人になるぢやありませンか、長さンまで連れ出しては困りますよ、つい過日、あンな事があツて、まだ間もないンですからね』

『はゝゝゝあの向ふ脛が三日や四日で滿足に歩けるもンか』

『外の奴が來ないとも限りませンよ、あゝいふ手には多勢の相手知らずが居るンですもの、あなたでも、御用心なさらないとね』

『よし〳〵、ぢやア用心して一風呂、浴びて來る』

風呂屋へは二町あまり、入片町から五間堀に添うて伊豫橋の手前、時刻が時刻で、男湯も女湯も大入の眞ツ最中、

いはれた通りに混み合うては居るが、半月近くの垢を落した心地、何ともいへない、加之も一月の寒中、ゆツくりと常より氣持よく長湯に暖まりて、急に輕くなりし身を表へ出ようとした時、一人の下女を供に女湯の入口へ這入りし横顏、あけた腰障子の灯に照されて、ちらと一目、たしかに四年前の菊枝に相違ない、

いかなる剛敵にも恐れぬ勘兵衞、これには流石に驚いて、はツとした拍子に二三間を其まゝ走り出したが、殘る戀でもない、過ぎし昔の懷かしさでもない、念のため、そツと立戻りて、幸ひ腰障子の破れ目から女湯を差覗くと、今しも着物を脫ぎかけたのは正しく後悔の種、その菊枝が屋敷風を捨てゝ町住居に馴れたらしい姿、

身に餘る君恩で御成敗もなく、無事に追ひ出されたといふ事は、川口周藏から聞かされて居たが、よもや今この錢湯へ來るほどの近くに住むとは思はない、外は宵闇で出ると入るとの違ひに我とも知らず、うかとして居たのは、せめての僥倖、鬼熊よりは恐ろしい氣がして、いよ〳〵用心せねばならない、

折角の長湯で暖まりし身も、急に寒くなりて、五間堀の河岸傳ひに彌勒寺の裏門、入片町に這入らうとした暗闇の中から不意に飛出した奴、さツと向ふ脛を拂ひに來たが、武道の心得もない力業に氣の荒い奴、あせり過ぎたばかりか此方は飛鳥の勘兵衞、お望み通りになる男でない、間一髪に身を躍らして、二度目の横薙ぎに來た面上へ濡れ手拭の端を摑みし一擊、ぴしりと叩いて引いた激しい手際は樫の棒よりも堅い、

湯歸りの丸腰を覘うて待受けた奴、何で遣られたか分らない、ひやりと斬られたやうな痛さで、あツと叫ぶや否、ばた〳〵と闇の中へ遁げ出した足音、

はゝア、生命取を遠慮して向ふ脛の敵討だけに來をツたと、笑ひながら我家の門口へ、今の奴は心にも掛けないが、どうも菊枝に追はれるやうな氣がしてならない、

『お歸りなさい、大變な長湯でした事ね』

『久しぶりで、好い心持だツたよ、年寄は思はず念佛の出る筈だ、若い奴等は眞ツ白な湯氣で面を見られないからね、これ幸ひに恥も外聞もなく下手な淨瑠璃や出來損ひの新内、清元に常盤津、荻江、蘭八、長唄、小唄、投げ節、いやはや騷がしいこツた、はゝゝ然し一日の疲れも心配も、あれで忘れるンだな、うき世の極樂だよ』

それを聞くと長さンも急に行きたくなる、

『ぢやア早速、わツしも極樂行をして來ませう』

『今夜は止せ、あすの晝にしろ』

『何ですい大將、自分だけ無理に出かけて』

『いや、どツから迷ツて來たか今夜、あの邊に惡い犬が居るぞ、だしぬけに暗闇から飛出して、乃公は蹴散したが、きさまは喰ひ付かれるよ、あすの晝が宜い、ねエ鶴』

『長さン、さうなさいよ、もし萬一、そンな犬に噛まれると不足の持ツて行き場處もなくツて、つまりませンよ』

『二人に一人だ、今夜は素直に負けませう、はゝゝ』

長さンは臺所の隣室で四疊半、二人は奥の六疊に枕を並べて、次第に夜も更けて來たが、いつものやうに寢られぬ勘兵衞、もぢ〳〵する身體の動きに鶴吉も睡れない、

『どうか、なすツたンですか』

『どうもしない』

『どうもしなくツて何故、さうなンでせう、久しぶりのお湯に這入れば猶更、よく睡れる筈ですよ』
『ふしぎだな、まアお前、かまはずに寢ろ』
『かうして居て、わたしだけ、寢られませンよ』
『口をきくからだ、そツち向いて、目を閉ぢて、默ツて居れば、自然に睡氣がさして來る』
『あなたこそ、さうすれば寢られますよ』
暫く無言のまゝ目を暗くして居たが、あの風呂屋の入口、あの腰障子の破れから差覗いた菊枝の姿、ます／＼はツきりと浮び出して來る勘兵衛、
戀しい女でなく、いはゞ恨みの女、懐かしい女でなく、それがために我生涯を埋めた禍の基、どうして今この目に殘るか、思ひも寄らぬ近くに住で居ても、たとひ見付けられても取付かれても、相手にせねば濟む筈を、我ながら不思議でならない、
すや／＼と睡りし鶴吉の息を窺うて、そツと夜具を這ひ出し、寢卷の上に着物を羽織り掛け、行燈の灯を遠ざけ、長火鉢の埋み火に莨の煙を吹出しながら、この夜半に起きて考へるほどの事でもないと思へば、馬鹿々々しくなるが、その馬鹿々々しさに寢られぬ勘兵衛、癪に觸ツて堪らない、
おもはず火鉢の角に叩きし煙管の音で、ぱちりと目を覺した鶴吉、
『あなた、起きて居らツしやるンですか』
また一個の責め道具が増たやうに思うたが、もう仕方がない、
『どういふもンか今夜は、寢られンよ、おい／＼お前、起きて來なくツても宜い』
さういはれても寢て居れない、さも心配らしく起きて來て、
『何か、あなた、考へて寢られない事があるンでせう』
『いや、別に』
『だツて、こンな事は始めてゞすもの、きツと何か、わたしに隱して、いはれない事があるンでせう、どうせ役に立ちませンが打明けて下さい、山が崩れても動かないやうな、あなたが夜の夜半に起きて』
もはや包みきれない、煙管を拋げ出して腕を組だ勘兵衛、
『くだらない事で、よけいな心配さしても氣の毒だから打明けるが、實はね、前に一度、話した事のある菊枝といふ女、あれに今夜、出喰はしたよ』
この一言で、自分を押退けられたやうに目を見張りながら小膝を進めた哀れさ、わざと平氣らしく、
『まア、それで今夜、して見ると惡い犬に出逢うたと仰ツしやツたのは、わたしも長さンも欺されて居たンですね』

『それと、これとは違ツてるよ、さういふ工合に取ツては困る、此方は出る、向ふは這入ツて來る、その風呂屋の門口で、加之も相手は氣も付かずに居たがね、彼女』

『お可哀さうに、彼女ですか』

『默ツて聞け、乃公のためには現在、この素浪人にした女だ、どこに未練がある』

『あるか、ないか、わかりませンよ』

『さう出るから間違ツて來るンだ』

『ですがね、その方ばかり惡いのでは御座いますまい、あなたも隨分、何よりの證據は、殿樣に申譯がないため、御朋輩に顏を合されないため、お屋敷を、もし潔白なら御浪人なさらずに濟みませう』

『そこだ、そこが勘兵衞、一生の過りで』

『すれば、他人ではないでせう』

『わるい夢を見たンだよ、丸四年前のこツたよ』

『四年前でも、現に今夜また』

『その今夜、ちらと一目、加之、幸ひ向ふは知らなかツたから

ね、疫病神に出逢ツたやうな氣で、すたこら遁げて歸ツたが、彼女あの風呂屋へ來る以上、この近くに相違ない、もし今度また途中ででも、ばツたり眞正面に出喰した時、どうしてやらうかと思ツて、それを考へてるンだよ、これも結局、お前といふものがあるからね』

『ありがたう御座います』

『禮をいふない』

『わたしのある故で、彼女、彼女と仰ツしやれば、有難いと思ひますよ、わたしどいふ厄介なものが居なければ、彼女ではないンでせう』

『お前は平生、至ツて優しく柔和で、おとなしいが、ちよいと妙に拗ンで來ると、いやに皮肉で難かしくなるよ、まだ二十歳になツたばかりだが、やはり苦勞して、どツかに舞臺馴れた科白の下地が物をいふンだね、やり出して來ると容易に抑へきれない』

『賤しい廣小路の小屋がけ芝居で、お座敷に出せない女俳優の成上りですもの、あなた、それを御承知なンでせう』

『しまツた、今のは乃公が悪かツた、いひ過ぎたよ』

『いえ、今のが全くの本音、ほンとうですよ、お大名の御上品なお部屋様と違ツて』

かうなると勘兵衛は叶はない、そろ〳〵夜具の中へ遁げ込まうとしたが、寝卷の袖を捉へて放さない、

『お邪魔になれば、わたし、いつでも、何處へでも行きますか

ら、かうなら、かうと話しの仕舞ひまで聞かして下さい、お腹が立てば、踏むなり蹴るなり』

どうした虫の居どころか、去年の暮あの萬年町へ遁げて來てから今日まで、これほどに手嚴しく遣られた事のない勘兵衛、叱るに叱れず怒るに怒れず、慰める言葉もなく、實は自分の苦しまぎれに、じツと睨み付けたが、睨み付けられた鶴吉も心は弱い、わツと泣き出したので、猶更ます〳〵持餘して、

『長助、起きてくれ』

さうでなくても耳を欹てゝ居た長さン、ねぼけ眼に驚いて來て、

『どうしたンですよ大將、もう夜あけ前ですぜ』

『やり損ツた、かういふ事になる筈はないンだが、つい、妙な工合で、ちよいとした拍子から大失策、御機嫌を損じて仕舞ツた、もう乃公の手には終へない、よほど火柱が強く立ツてるからね、うまく消してくれ』

『全體、どツちから燃え上ツたンですよ』

『乃公の方は莨の吸殼を落したぐらゐに思ツてるが、火事を大きくしたのは鶴の方だ』

『さうぢやありませンよ長さン、わたしの寢息を考へてね、この夜半に』

『はゝゝまさか寢首を掻かうとした譯はなし、また大將も大將だ、わざ〳〵夜半に起きて、何の用があツたンですね』

『あらためて明日にでも委しく話すから兎も角、これを寢かしてくれよ』

『そりやア大將の役目だ、外のもンでは寢かされもせず本人が寢ませンよ』

『その大將、降參してるンだ』

『どンな奴にも負けた事のない大將この通り兜を脱いで、降參したといへば宜いでせう、さア早く、夜あけ前の寒さは風を引きますぜ、口惜しくツて堪らない事でもあれば、さう泣かずに男らしく、いや女らしく引ツ掻くとか喰ひ付くとか、誰に遠慮の入らねエ仲だ、思ふ存分に遣ツた方が情愛も深く、お互ひに後腐りがなくなツて、さツぱりするもンだ、もや〳〵胸に持ツて居ちやア却ツて、よくねエ、まだ何か心に殘ツてる不足でもありやア、ぶちまけて仕舞ひなさいよ、その場の樣子で、尤だと思へば助太刀しますぜ、なアに大將だツて無理は無理だ』

『おい長助、きさま、何のために出て來たンだ』

『ぐツすり寢込でるところを起きろ、起きろといはれたから出て來たンですよ』

『出て來たのは丸く納めるためだらう』

『納めるためでも、納まらなかツたら、どうするンです』
『なか〳〵豪い勢ひだな』
『こゝを大将、よツく考へて貰ひたいもンで』
『どこを考へるンだ』
『大将は浪人こそすれ、ひよろ〳〵した痛々しい浪人でなく、さア矢でも鐵砲でも持ツて來いといふ人でせう、然し一方は大将に身も心も打込で仕舞ツて、あれだけの世間に騒がれた藝も評判も捨てゝ來た今更、どこへ身體を持ツて行けますかね、うツかり一歩でも外へ出りやア鬼が口を開けて待ツてるンだ、この廣い世の中で誰を力に生きて居るンですい、それを夜の夜半に引起して泣かしたりするなア、あンまりだ、むごツたらしいぢやありませンか』
　頻りに長さンの袖を引き出した鶴吉、
『わたしが勝手に泣いたンですよ』
　しツ、こゝで凹垂れちやア何にもならないと、その手を拂ひ退けて、
『さうでせう大将、わツしのいふ事、間違ツてますかね』
　また頻に袖を引く小聲で、
『わたしが悪いンですよ、つい甘え過ぎて、我まゝが出たンですから』
　力ぬけと拍子ぬけに腰を折られて、がツかりした長さん、
『いけねエ、うか〳〵すると此方が夾撃にされさうだ』
　始めて笑ひ出した勘兵衛、
『はゝゝゝ鶴、もう寝ようか』
『はい、今夜の續きは明日、して下さいますね』
『あゝ宜いとも、わかるやうに話してやるよ』
　ぽかんとして、元の四疊半へ逆戻りの妙な顔、
『御苦勞だと、いはれなくツても堪忍しますよ、お静かに、おやすみなさい』

主人のやうでなく、家來のやうでなく、置き候でもなく居候でもなく、親類にも見えず友達にも見えぬ三人の内その一人が缺けても、かうした暢氣な面白さのない浪人住居で、それ相應に世帶向の役割は出來て居るが、必ず飯時には顔を揃へて、ゆふべの今朝は猶更また笑ひの種が盡きない、
『長助、あれから寝られたか』
『寝られたか寝られねエか、お察しを願ひますよ、おまけに直ぐと夜明けだ、これからア大将、どんな事があツても起きませンぜ』

『長さン、後でね、わたし、ほンとうに濟まないと思ひましたよ』

『後で何と思はれても、その場で背負ひ投げを喰ツたンだ、ここは默ツて居れねエ時だと馬鹿正直に力瘤を入れて、すツぽかされた面可笑しかツたでせうな、はゝゝゝ我ながら夜寒の獨り寢に物の哀れを感じましたぜ、これでも一度は嬶アを持ツた事があるンですよ、まだ外に一人や半分、色女に追ひ廻された事もあるンだ』

『おや、おかみさンのあツた事は兎も角、その外にも追ツかけられて長さン、遁げ歩いた事があるンですか』

『あの萬年町で屑屋になツてから六年だ、長の間に自然と塵や埃が沁み込で、かう薄ぎたなくはなツたが、すツきりと垢ぬけのして居た若い時を見せたかツたね、さう大將にも劣らねエ男振でしたぜ、はゝゝゝ』

『さうでせうか』

『かとは、なさけねエ、いつ何時、その女に出喰すかと今でも年中、びく／＼してるンですよ』

『ほゝゝ御馳走さま』

『おい鶴、好い加減に聞けよ、いくら新しくツても古びても目鼻の置き工合が變るもンかね、面の雜作は生來だよ、まア、さうでもいはなければ本人、お前と乃公の間で無事に居れないから、はゝゝゝだがね、ゆふべは少々、かはいさうだツた、世間並の人間なら小癪に觸つて堪らないところを、さういふ捌けた洒落もンだからね、あゝなツて一言の文句もいはず、おやすみなさいと神妙に元の寢床へ返るンだ』

『おかげで世間並の人間と思はれて居ないンですね、捌けたくも洒落れたくもねエが、そも／＼始めツからの役廻りが惡いンですよ、人といふものの出端が大切だ、わツしに金の捨場處がなくツて大將を何かの用心棒にでも置たとすりやア、こんな目に逢はないンですが、途中で脱いだ羽織を一朱に買ツて八百文を儲けたのが緣に引ずられた基で、それが何處までも附き纏ツて來るンだ』

『あの時、あの古羽織一枚で八百文も儲けたのかい』

『はゝゝあの時は商賣ですよ、それから八百の錢を今日までの日割勘定にすりやア一日、幾何になりますね、まして前夜のやうな役は三兩でも五兩でも、安いもンだ』

『なるほど、さう算盤を彈いて來ると、なか／＼粗末に使へない人間だ、ねエ鶴、これから改めて大切にしろ』

『口へは出しませンが、わたし心の內で始終、お父さンのやうに思ツて居ます』

『ところが此娘、をり／＼親不孝で、いざといふ場合は男の方へばかり片寄ツて困る』

『さうか、そりやア心得違ひだ、男は幾人でも浮氣ツぽく好きな相手を取替へられるが親の代りはない』

急に驚いて片膝を立てた勘兵衛、股の邊を強く捻られたやうで苦い顔、長さン兩手で自分の目を塞ぎながら、

『助けて貰ひてエ、ゆふべで澤山だ』

ゆふべの事は今朝、けろりと忘れた顔の鶴吉、まるで餘所の夫婦喧嘩を聞いたやうでも、菊枝といふ事だけは氣に掛りて、加之も四年前の災難といはれて居るが、現在の今この近くに住ンで居るとすれば、まさかと思ひながらも、すツかりと落着た安心が出來ない、

『わたし、これから、お風呂へ』

『行くが宜い、ゆふべは長助を止めたから今日は一緒に行けよ、晝間は別に何事もなからうが、あれでも少しは途中の氣丈夫になるよ』

『さうですね、さうしますが、その菊枝さンと仰ツしやる方、どういふ、お顔立です』

『馬鹿、あれほど委しく話したに、まだ、そンな事思ツてるンだな』

『もしひよツと、お目に掛ツて、御挨拶しないでは惡う御座いませう』

『馬鹿には念を入れるもンでない、お前の顔を向ふで知ツてるかい』

『この邊で、お近くといへば、どういふ事で、御存知かも知れませんよ』

『小兒のやうな事をいはずに行くなら早く行けよ、出喰して分るのは乃公だけだ』

『では猶更、あなた、あの風呂屋へは禁物ですね、うか／＼行けませンね』

『もう、あの湯屋へは行かない、外にもあるからな』

もうあの湯へ行かないといふだけの事を確かめたいので、これだけの廻り遠い言葉を盡して、やう／＼安心したらしい鶴吉、赤い手柄の大丸髷に結ひたいところを、わざと無雜作の櫛巻にして居るが、荒い棒縞の秩父織に眞ツ白な素足の日和下駄、その若々しい色艶の美はしさと歩く姿の華やかさは、どこやらに舞臺藝の餘波を殘して、わづか一町ほどの間でも人目に立ち、おもはす行違ひに振返るものが多い、

『長さン、ゆツくり這入ツて居て下さいよ、わたしの出るまで』
『さうしなくツても光ツてるンだが、まア氣の濟むまで、お磨きなせエ』
『時に長さン、わたし、內でいへない事で、是非お願ひがあるンですよ』
『內でいへない願ひ、うす氣味の惡いこツた、念を押して置きますが、今年四十三だよ』
ぴしやりと背中を叩かれてきゆツと首を縮めながら、
『冗談は冗談、どういふこツて』
『探し物』
『何を探すンですね』
『あのウ、人ですよ』
『人も人によりけりだ、若い男ぢやアありますめエな』
今度は自分で橫面を毆る眞似した長さン、
『女でせう』
『さうですよ』

『そツと今朝、ゆふべの一件を搔い抓ンで大將から聞きましたが、或お大名の、お部屋で菊枝とかいふ女が屋敷を下ツて、この邊に住んでるらしいといふ其こツてせう』

『わたし、隠して居たに、いつの間にか長さンへ、やはり氣に掛ツてるからですね、わたしは決して妙な考へでも何でもありませンが、どこに住で居なさるか、それだけちよいと聞て置きたいンですよ』

『大丈夫、心配無用、それなら大將の方で遁げたくらゐだから、たとひ向ふが探して居て、もし出逢ツたところで、仕て遣られる筈がねエ』

『長さン、請合へますか』

『太鼓の判だ』

若い女の長湯に待草臥れた長さン、捨てゝ置て先へ歸りたいが、わづか二町ほどでも當分まだ一人歩きをさせられない、

『どこを洗ツてるンですい、はゝゝゝ』

『お待遠さま』

『毎日あゝして見てるが、なるほど、湯上りは別だ、きれいですな』

『いやですよ長さン』

『湯に這入ツて居ても横目でじろ〳〵見られるでせう、わけて女ア嫉み妬みの多いもンだからね、自分は自分だけの事を思ツて居りやア宜いに、どうも他の事を燒きたがツて、つまらねエ氣ばかり揉ンで居やアがる』

ちよこ〳〵と小走りに先へ歩き出されて、うツかり辷りし口の端を捻りながら、追ひかけて行く入片町の角で、横から出たのは色黒に肥えた四十前後の女、長助の顏を見るや否、

『おやツ』

『やア』

下手な劍術使ひの掛聲に等しい聲を出し合ツたかと思へば、長さン胸倉を摑まれて、

『この薄情野郎、さア承知しないぞ、さンざ玩弄にしやアがツて今、どこに平氣な顏をしてるンだよ』

『久しく逢はないね』

『久しいも口惜しいも此方のこツた』

『まア放せ、みツともない、こゝは往來だよ』

『みツともない事を知ツてるのかね、づう〳〵しい、まだあンな若い女を追ツかけてるンだね』

『ありやア乃公の主人だよ、主人の御新造だよ、今お伴した湯歸りだよ此、この濡れ手拭を見ろ』

『それなら、それで其、御主人に何もかも洗ひざらひ一切、かういふ不人情な男ですと、ぶちまけてやらなければ腹が癒えない、どこだよ、お家は』

振返りて、びツくりした鶴吉、轉げるやうに我家へ飛込で、

『大變です、あなた大變ですよ長さン、どツかの人に胸倉を取られて』

『どういふ奴だ』

『ちよいと見たゞけですが色の黑い、大きい』

『や、また藥研堀の端た人足め來やアがツたな、よくお前が捉まらなかツた』

『いえ女ですよ女ですよ』

『何、女だア』

『ゆふべ一人や半分、これでも女に追ひ廻された事があると、その一人か半分に違ひありませンよ、早く何とかしてあげて下さい』

半笑ひに急いで門口へ出て見ると、半泣きの長さン、自分より二倍もありさうな大女に胸倉を締められて、ぎゆう〳〵遣られながら、ふと勘兵衞の顏を見た嬉しさ恥かしさの大聲で、

『たゝ大將、とンでもねエ阿魔に出喰しましたよ』

笑うても捨てゝも置けない、其まゝ走り寄りて無理に女を引放し、

『どうせ、かうなる譯もあるだらうが兎も角、こゝでは話しを聞けない、つい其處だ、家へ這入ツて、この男の事なら何でも引受けるぞ』

『御主人で居らツしやいますか』
『主人といへば主人のやうなもンだ、わるく扱はないからね』
やう〳〵胸倉を放された長さン、
『それ見ろ、くだらない事が知れて仕舞ツたい』
『くだらない事を誰がしたンだよ』
まア宜いと、兩方を押へながら、ひよいと何心なく向ふを見ると、櫓落しの頭髪に山のやうな猪首の肩を怒らした相撲取が一人、その背後に小屋者らしい奴が一人、じろりと凄い目玉を光らして居る工合、どうも通り掛りの見物でない、

一方には思ひも寄らぬ長助の事と、また一方には面倒な荒手の奴が押寄せて來た事と、さぞや内では鶴吉が立ツたり居たりの心配、三方の兼合ひを一時の一身に受けた田島勘兵衛、

どれを先にせうか、どれを後にせうか、とほけた長助に女沙汰の仲裁も面白いが、こけおどしに相撲取の來た土俵の外の勝負も面白い、

のそ〳〵と我家の門口へ歩き出した勘兵衛、振り返りもせずに、
『誰でも遠慮なく這入ツて來い』

（次號へつゞく）

高速度滋養料 どりこの

健康者も病人も、老人も子供も、
そろつて『どりこの』を飲みませう。
トテモ美味しくて、身體がメキ〳〵丈夫になる、素晴らしいお飲物です！
全國有名藥店、食料品店にあります。
發賣元 東京本郷 大日本雄辯會講談社代理部

名人一龍齋貞山大熱演

代表的武勇傳！
天下の名講談！

評判講談 寛永御前試合

見よ！血湧き肉躍る、名人達人勇士豪傑の眞面目!!

龍攘虎搏、將軍の面前、名と命をかけし大試合!!

會するは、荒木又右衞門、宮本武藏、關口彌太郎、由井正雪をはじめ、劍聖伊東一刀齋、羽賀井一心齋、柳生飛驒守等々一流の始祖一世の名達人四十有餘人、弓馬槍劍、棒長刀、柔術手裏劍、鎖鎌もあれば一喝猛虎をたふす合氣の術、武藝十八般、日本武術の精粹ことごとく集る！

全く素晴しい顏合せ、決死の大試合！

しかも、これは單に勇壯無類、前代未聞の大試合の活記錄たるに止らず、出場勇士豪傑の生立ちから一流一派を開く迄の苦心談、親の仇討、武道の意氣地、任俠助太刀、山賊退治、戰場美談の類まで悉く取り入れた無双の講談。

眞に武勇傳の豪華版、評判中の評判はこれ!!
英雄豪傑譚の面白い處は悉く出て居ります!!

次に掲げた諸册と共に絶妙の家庭讀物として大評判、今すぐお讀み下さい。素晴しい傑作ばかりです。

人氣白熱の評判講談

- 松林伯知　鼠小僧治郎吉
- 神田伯山　野狐三次
- 旭堂南陵　怪傑兒雷也
- 神田伯龍　祐天吉松
- 錦城齋典山　天保六花撰
- 太田貞水　黑田騷動
- 名人總出　赤穗義士外傳

- 寶井琴凌　大岡政談（村井長庵・雲霧五人男）
- 伯鶴　關口彌太郎
- 小圓朝　怪談牡丹燈籠
- 田邊南龍　八百八狸
- 桃川若燕　浪華女俠傳
- 西尾麟慶　一心太助
- 神田伯治　霞のお千代
- 旭堂南陵　猿飛佐助

どれでも一圓　送料十二錢

大日本雄辯會講談社
（振替東京三九〇番）

物凄い人氣、滿天下ただ驚嘆！

文豪菊池寛先生最近の大傑作二大長篇

未來花 並 良人ある人々

映畫にレコードに世を擧げてこの大評判

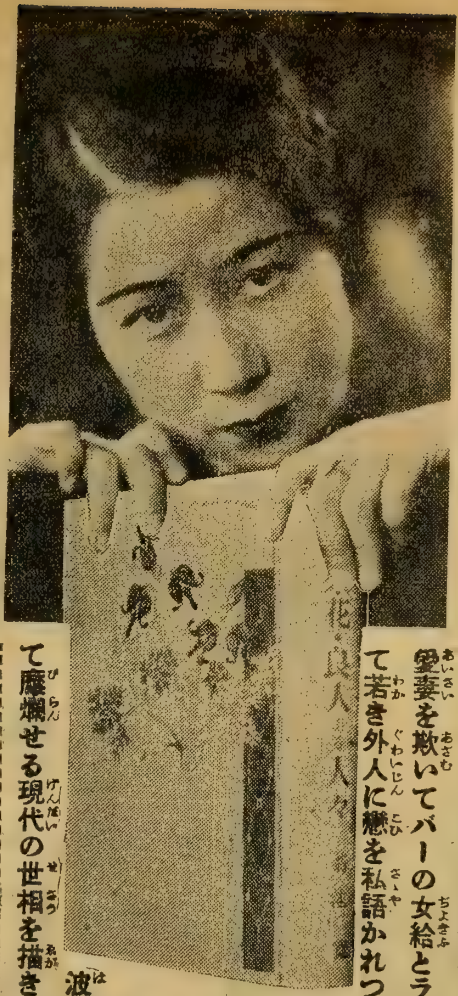
どこへ行つても噂の中心！　これ程面白い、これ程氣を揉ませる小説は初めて謹んだと、讀者悉く感嘆激賞！　到る處、文字通りの引つ張り凧です。

家のため母のために、身を犧牲にして思はぬ男に嫁いだ千夜子が、その良人の愛を滿身に受けつゝもなほ以前の戀人たる青年を忘れ兼ね、つひに家出をして職業婦人となる。而も彼女は、その時既に人の母とならうとしてゐた。

千夜子の惱み、千夜子の悶え、千夜子の此の苦しみを描いて藝術の香高き文豪の筆は

縦横に躍り、汲めども盡きぬ感激の泉に、讀者をして恍惚たらしめ、また嗟嘆せしめる。

『未來花』と共に發表せられて、その姉妹篇とも云ふべき『良人ある人々』は、構想の特異、取材の清新、共に時代の尖端をゆく名小説！　四年餘りの戀愛を思ひ諦めて、心ならずも嫁いだ彼女が、新婚早々まざ／＼と見せつけられた醜い人の世の姿！



愛妻を欺いてバーの女給とランデヴーする青年紳士あり、良人の眼を掠めて若き外人に戀を私語かれつゝドライヴを樂しむモダンマダムあり、さては常に、カフエーにバーに待合に、渡り鳥の如く飲みめぐり宿り歩く藝術家を良人に持ち、ダンスホールに野球に映畫に拳鬪に、若き燕の如き男を伴ひて遊びまはる典型的有閑夫人あり、愛慾葛藤、眞に眼を蔽はしめ、波瀾又波瀾、作者の快筆は、その良人その妻をめぐつて靡爛せる現代の世相を描き、犇々と讀者の胸に迫る。

共に天下の名篇！未來花を若し文壇に燦たる太陽にたとふれば良人ある人々は正に玲瓏たる月に比すべく、讀者はこの兩篇を併せ讀む事に依つて心ゆくばかり人生の歡喜に浸り明暗を見む

◇この二大長篇が併せて一册定價一圓五十錢（送料十四錢）東京本郷大日本雄辯會講談社發行（振替東京三九三〇）

現代小説

東京哀歌

加藤武雄
山川秀峰畫

寂光

「襟子――。」
流石の重田も呆氣にとられて、しばらくは惘然として言葉も無かつた。
「お久振ね。重田さん!」

襟子は、鋭くその眼で斬りつけながら、頰には白々とした笑ひを浮べてゐた。
「何しに――何しに來たのだ?」
「その方に、用事があつてまゐりましたの。」
襟子は、部屋の隅で慄へてゐる奈々子の方を見やつて、
「あなた。こんなところに何をしていらッしやるので

御座います？　早くお歸んなさいませ。」

同じやうに呆氣にとられてゐた奈々子は、思ひ掛けない救助者の出現を知ると、急に衝き動かされたやうに、扉を眼蒐けて突進した。

「待て！」

重田は叫ぶと共に、逸早く扉に飛び附き、うしろ手にぴしやりと締めると身を楯にして出口を塞いだ。そして、咽喉佛をふるはして、乾いた聲で笑つた。

〔前號迄の梗概〕　渾身の誠を奈々子に捧げる件廉吉は、其の爲に、女給襟子の戀も、可憐な瑞枝の思慕をも一蹴した。だが其奈々子の境涯もゆめ順調ではなく、今は踊子と迄沈淪して居るが、仔細を知らぬ彼女の生家青江家では、其搜索方を廉吉に要求する。そこで廉吉は必死の奔走を始めたが、何ぞ圖らん其時奈々子は、重田と呼ぶ惡魔の誘惑で怪しい家に監禁され、將に風前の燈火の難場に在つたのだ。だが此危機の瞬間、狂氣の如く其場へ飛込んだ女性、それこそは噫！　嘗て我家の幸福をこの重田の爲に蹂躙された可憐な襟子だつた。彼女は憎惡に燃ゆる眼で惡魔重田を睨んで立つた。

「は、は！　逃げるなら逃げて見ろ！――おい襟子！　何だつて下らん眞似をするんだ。君はさつさと歸り給へ。」

「重田さん！」

襟子は、重田の前に歩み寄つた。そして、睫毛と睫毛とがもつれ合ふ程、近々と顏をさし寄せた。

「何だ？」

「私ぢやいけないの？」

「何だと？」

「此の方の代りに私ぢやいけないの？」

「代りに？」

「私が代りに來て上げたのよ。私ぢや駄目？　私ぢや不足？」

「駄目だ。お前なんか――。」

重田は吐き出すやうに云つた。

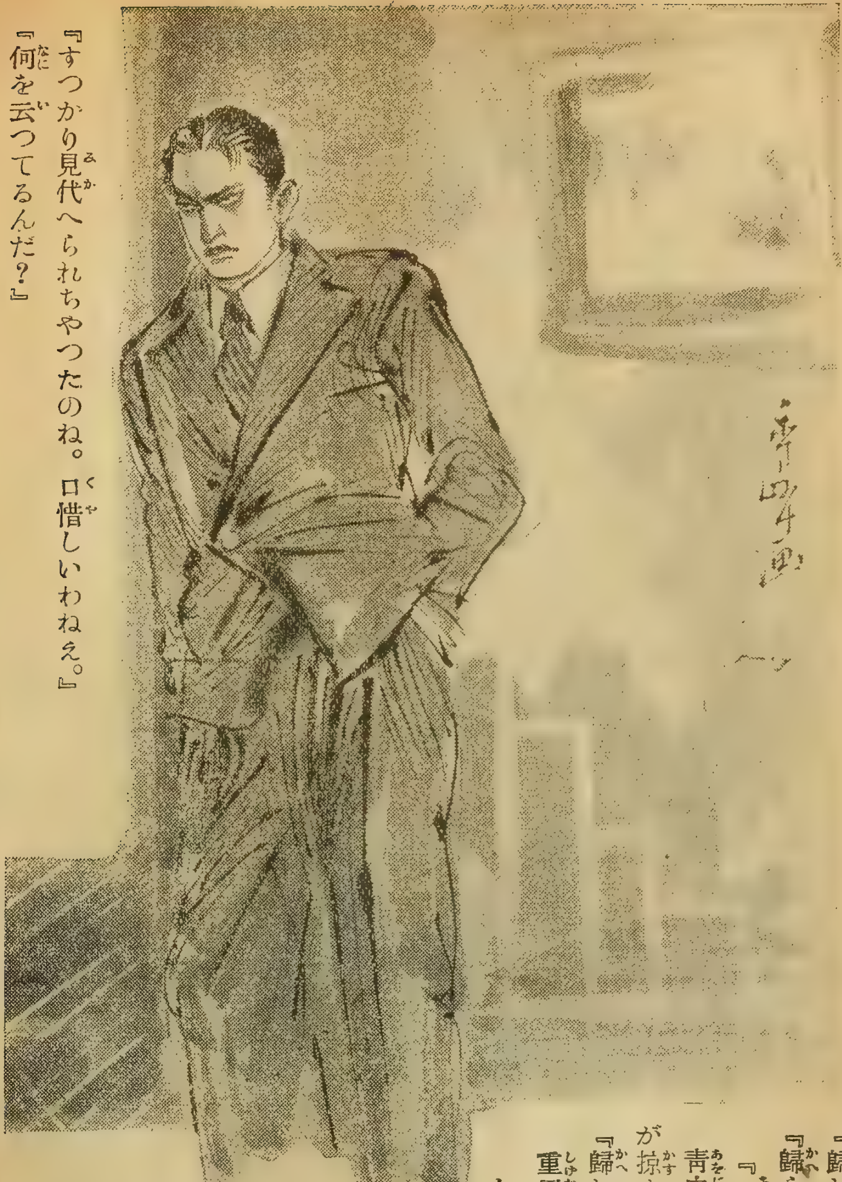
「ほ、ほ！　あんたは浮氣ものねえ。あんなに私を追蒐け廻してゐたくせに。私だつて、滿更でも無いでせう？」

口元では笑つた。眼からは稲妻のやうな殺氣が迸つて居た。

『お氣の毒だがね。お前と、その女とは少し代物が違ふんだ。』

重田は苛立つて、

『おい、歸れと云つたら歸らないのか？』



『すつかり見代へられちやつたのね。口惜しいわねえ。』

『何を云つてるんだ？』

『歸れ無いわ。』

『歸らんのか？』

『一寸、歸りにくいわねえ。』

青白く緊張した顔を、奇異な微笑が掠めた。

『歸れ！』

重田は襟子の肩に手を掛けて荒々しく突き飛ばした。襟子はよろよろと二三歩うしろによろめいた。と同時に、どうしたのか、

『あツ！』

と叫んで、重田も反對の方によろめいた。

『何を、何をするんだ！』

重田は兩手で右の脾腹を抑へ、兩足を踏み開いて倒れようとする身體を僅かに支へなが

ら、少し前屈みになつて、襟子の顔を睨み据ゑた。

『何うかしたの？』

襟子は壁際に踏みとゞまり、冷たく見返した。その手には、きらりと刃物がきらめいてゐた。

『あれ！』

奈々子は思はず悲鳴をあげた。

『奈々子さん。早く、早く――。』

襟子は扉を開けた。そして、うろたへ惑うてゐる奈々子を室の外へ突き出すやうにして、

『早く歸つて下さい。愚圖々々してゐるとかゝり合ひになります！』

『待て！』

重田はよろめきながら奈々子に追ひ縋つた。

『早く、早く！』

襟子は、奈々子の背を荒々しく突きやると身を翻しざま、重田へ飛び附いた。

『おツ！』

と、重田は二度目の叫びを立てた。二つの身體がもつれからまるやうにて、その影が怪鳥のそれのやうに大きく壁に搖れた。と見たのはほんの瞬間で、

『何を――何をする！』

と、苦しい呻きと共に重田が叫んだ時は、重田は、もう床の上に倒れ、襟子は、血のついた剃刀を片手にしつかと握り締めたまゝ、その前に立つてゐた。

梟の鳴くやうな聲が階下から聞えて來た。奈々子を引止めよ

うとする見張りの老婆の喚きだつた。――が、その聲も直ぐ止んだ。奈々子は無事に逃げ去つたらしい。あとはごう〳〵と吹く凩の音ばかりだつた。

重田は、手足をばた〳〵と動かして、起き上らうともがきながら、苦痛の呻き聲を立てた。

襟子は、突立つたまゝじつとそれを見てゐた。襟子の呼吸は激しく亂れてゐたが、その顏は石像のやうに冷かだつた。

床にはインクを溢したやうに血が流れはじめた。その血の色が、ぱつと襟子の視野ににじみひろがつた時、襟子は、自分が何をしたかに氣がついた。襟子は、眼を自分の右手に移した。剃刀も血で濡れ、拳にも少し血がついてゐた。それを見ると、急に全身がわなゝき初めた。――が、襟子の心は割合に平靜だつた。大へんな事をしてしまつた！　と思ふ一方では、何でも無い事のやうな氣もした。これで此の男は死ぬのか知ら？　人間なんて何て脆いものだらうと思ふと、それがへんに可笑しかつた。襟子は聲を立てゝ笑はうとした。が、流石に、笑へなかつた。聲が咽喉にからびついてしまつて、口の中がひどく乾いてゐた。

重田は、呻きつゞけた。呻き聲は、高くなつたり低くなつたりした。

すうツと、つめたい風が吹いて來た。振返つて見ると、扉が音も無く搖れてゐた。そして扉の蔭から、そつと首をさし入れたのは階下の老婆だつた。闇を背に、白髪あたまの老婆の顏には、おづ〳〵とした二つの眼が燐火のやうに光つてゐた。

『お婆さん。』

襟子は右手をうしろに廻しながら、落着いた聲で呼びかけて、

『今の女の人、歸つたかえ？』

『へえ。』

『水を一ぱい持つて來てお呉れ。旦那樣が少しお加減が惡いのだよ。』

『へえ。』

老婆は首を引ツこめた。しばらくすると、盆の上に水を一ぱいにしたコツプをのせてあがつて來た。

『そこへお置き。』

老婆は、がた〳〵とコツプを躍らせながら、閾際に置いたが、瞳を凝らすやうにして、重田の姿を見ると、

『ひやあ！』

と、魂消る叫びを立てゝ、まろぶやうに階下に降りて行つた。

襟子は冷たい笑ひを口元に浮べた。

襟子は、剃刀を措かうとしたが、指が硬ばつて握りがほどけなかつた。左の手で、指を一本づつ起すと、やうやく剃刀が手から離れた。

襟子は、コツプをとりあげて、一口ぐつと呑むと、卓の前の椅子によろめきかゝつた。ふと、卓の上に立てられてゐる鏡が眼についた。吸ひ寄せられたやうに鏡の中をのぞき込んだ。のぞき込むと、はツとした。

草の汁で彩られたやうに眞青な顏がそこにあつた。瞼一ぱいに大きくみひらかれた眼がそこにあつた。洞孔のやうに暗い二つの眼は、底深く、動かぬ瞳を沈めてゐた。亂れた後れ毛の二筋三筋が、色の無い唇で嚙みしめられてゐた。怖ろしい顏だつた！

それは自分の顏では無かつた。――此の世のものとも思はれぬその凄慘な顏は、墓の彼方からのぞいてゐる幽鬼の顏だつた！

さうだ！　姉さんの顏だ――と、襟子は思つた。姉の絹子の死顏だ――と襟子は思つた。襟子は血のついた手を見、床に落ちてゐる剃刀を見た。姉の手にも丁度こんな風に血がついてゐた。姉の枕元には、丁度こんな風に、この剃刀が投げ出されてあつた――。

重田は、呻きつゞけてゐた。そのうめき聲が聞いてゐるうちに次第に弱つて行くやうに思はれた。

『重田さん。』

襟子は、重田の頭の傍に膝を突いた。

『苦しいの？　重田さん。』

『水を――水を呉れ。』

襟子は、呑みさしのコツプをとりあげて、重田の口元にあてがつてやつた。重田は、二口ばかり、ごくりと音を立てゝ呑んだ。

『重田さん。』

重田は、眼を開いた。

『あんたは惡い人だつたわねえ。惡魔ツてのは、あんたのやうな人を云ふんだわねえ。』

『う、う――。』

と、重田は呻くばかりだつた。

『死に際にだけは、せめて、人間らしい心になつて下さいよ。』

やさしくいたはるやうに、襟子は云つた。

『あつちへ行つたらね、姉さんにあやまるのよ。え？　重田さん。あんたがいぢめ殺したあのかあいさうな姉さんに――。』

重田は、じつと襟子の顏を見つめた。

うとする見張りの老婆の喚きだつた。——が、その聲も直ぐ止んだ。奈々子は無事に逃げ去つたらしい。あとはごう／＼と吹く風の音ばかりだつた。

重田は、手足をばた／＼と動かして、起き上らうともがきながら、苦痛の呻き聲を立てた。

襟子は、突立つたまゝじつとそれを見てゐた。襟子の呼吸は激しく亂れてゐたが、その顏は石像のやうに冷かだつた。

床にはインクを溢したやうに血が流れはじめた。その血の色が、ぱつと襟子の視野ににじみひろがつた時、襟子は、自分が何をしたかに氣がついた。襟子は、眼を自分の右手に移した。剃刀も血で濡れ、拳にも少し血がついてゐた。それを見ると、急に全身がわなゝき初めた。——が、襟子の心は割合に平靜だつた。大へんな事をしてしまつた！　と思ふ一方では、何でも無い事のやうな氣もした。これで此の男は死ぬのか知ら？　人間なんて何て脆いものだらうと思ふと、それがへんに可笑しかつた。襟子は聲を立てゝ笑はうとした。が、流石に、笑へなかつた。聲が咽喉にからびついてしまつて、口の中がひどく乾いてゐた。

重田は、呻きつゞけた。呻き聲は、高くなつたり低くなつたりした。

すうツと、つめたい風が吹いて來た。振返つて見ると、扉が音も無く搖れてゐた。そして扉の蔭から、そつと首をさし入れたのは階下の老婆だつた。闇を背に、白髪あたまの老婆の顏には、おづ／＼とした二つの眼が燐火のやうに光つてゐた。

『お婆さん。』

襟子は右手をうしろに廻しながら、落着いた聲で呼びかけて、

『今の女の人、歸つたかえ？』

『へえ。』

『水を一ぱい持つて來てお呉れ。旦那様が少しお加減が悪いのだよ。』

『へえ。』

老婆は首を引ツこめた。しばらくすると、盆の上に水を一ぱいにしたコツプをのせてあがつて來た。

『そこへお置き。』

老婆は、がた／＼とコツプを躍らせながら、閾際に置いたが、瞳を凝らすやうにして、重田の姿を見ると、

『ひやあ！』

と、魂消る叫びを立てゝ、まろぶやうに階下に降りて行つた。

襟子は冷たい笑ひを口元に浮べた。

襟子は、剃刀を措かうとしたが、指が硬ばつて握りがほどけなかつた。左の手で、指を一本づつ起すと、やうやく剃刀が手から離れた。

襟子は、コツプをとりあげて、一口ぐつと呑むと、卓の前の椅子によろめきかゝつた。ふと、卓の上に立てられてゐる鏡が眼についた。吸ひ寄せられたやうに鏡の中をのぞき込んだ。のぞき込むと、はツとした。

草の汁で彩られたやうに眞靑な顏がそこにあつた。瞼一ぱいに大きくみひらかれた眼がそこにあつた。洞孔のやうに暗い二つの眼は、底深く、動かぬ瞳を沈めてゐた。亂れた後れ毛の二筋三筋が、色の無い唇で嚙みしめられてゐた。怖ろしい顏だつた！

それは自分の顏では無かつた。――此の世のものとも思はれぬその凄慘な顏は、墓の彼方からのぞいてゐる幽鬼の顏だつた！

さうだ！　姉さんの顏だ――と、襟子は思つた。姉の絹子の死顏だ――と襟子は思つた。襟子は血のついた手を見、床に落ちてゐる剃刀を見た。姉の手にも丁度こんな風に血がついてゐた。姉の枕元には、丁度こんな風に、この剃刀が投げ出されてあつた――。

重田は、呻きつゞけてゐた。そのうめき聲が聞いてゐるうちに次第に弱つて行くやうに思はれた。

『重田さん。』

襟子は、重田の頭の傍に膝を突いた。

『苦しいの？　重田さん。』

『水を――水を呉れ。』

襟子は、呑みさしのコツプをとりあげて、重田の口元にあてがつてやつた。重田は、二口ばかり、ごくりと音を立てゝ呑んだ。

『重田さん。』

重田は、眼を開いた。

『あんたは惡い人だつたわねえ。惡魔ツてのは、あんたのやうな人を云ふんだわねえ。』

『う、う――。』

と、重田は呻くばかりだつた。

『死に際にだけは、せめて、人間らしい心になつて下さいよ。』

やさしくいたはるやうに、襟子は云つた。

『あつちへ行つたらね、姉さんにあやまるのよ。え？　重田さん。あんたがいぢめ殺したあのかあいさうな姉さんに――。』

重田は、じつと襟子の顏を見つめた。

『ね、姉さんにあやまるのよ。いゝえ、神さまにあやまるのよ。あんたがどんな惡魔だらうと、人間である以上、人間らしい氣持をなくなし切つちやゐないでせう？　ね、人間になつて死ぬのよ。惡かつた――と、懺悔する氣になつて死ぬのよ。』

重田の眼には、一種の表情が動いた。

『ねえ、斯うなればもう恨みも憎みも無いわ。何も彼もみんな帳消しよ。あんたと、私たち姉妹とは、思へば因果同志だつたんだわねえ。』

重田の眼に動きはじめた一種の表情――それは、柔らかな物かなしげな表情だつた。

『呪はれてゐたんだわねえ。――人間はみんな呪はれてゐるの

よ。でも、死んだら呪ひの無い國に行けるかも知れないわ。』

重田は眼を閉ぢた。そして、すこし首を動かした。うなづいたやうに見えた。

『でも、このまゝぢやいけないわ。懺悔するのよ。懺悔してきれいな心になるのよ。』

その魂の深みから出るやうな言葉を、少し節をつけるやうにして、襟子は、靜かにしみ〴〵と云つた。

『わかつて？　重田さん！　え、わかつて？』

襟子は重田の額に手を當てた。呻きを止めた重田の唇は幽かに動いた。

『わかつた――。』

と、さう云つたやうに思はれた。

『わかつたのね。さう？　わかつたのね？　ぢや、私も一緒に死んであげるわ。』

母親が子供に云ふやうにさう云ふと、襟子は立ちあがつた。立ちあがつた襟子は、もう一度卓の上の鏡をのぞき込んだ。あの凄慘な表情は、もうすつかり消えてゐた。眼にも頰にも、なごやかな色が行き亙つてゐた。

襟子は、につこりと笑つて見た。黄昏の光と微風との中に白い花の搖れるやうな微笑だつた。

襟子は、床に落ちてゐた剃刀を拾ひあげようとして、その傍に散つてゐる萬年筆に眼をとめた。

その萬年筆が、彼女を誘惑した。卓の上を見廻すと、一綴りの書簡箋があつた。

襟子は、その書簡箋に、ふるへるペンの先を押しつけた。

（るり子ちやん！　姉さんが居無くなると、あなたはひとりぼつちになるのね。あなたをひとりぼつちにして死んでゆく姉さんを恨まないで下さい）

こゝまで書いてくると、熱い塊りがぐいとこみあげて來た。が、襟子は、唇を嚙んでそれを押し戻した。

そして、襟子は書きつゞけた。

戸外では、夜風が益々吹き募つてゐた。

電線がぴゆうん〳〵とうなりを立て、隣邸の庭樹が大波のやうに鳴つてゐた。隙間風が時々窓帷をゆすつた。置電燈の光がそれにつれて動いた。襟子はしづかに書きつゞけた。襟子の頰は、青白く輝いてゐた。此の世ならぬ遠い國からさして來る光――その寂光土からの靜かな光に彼女の顏は照らし出されてゐるのだつた。

最後の聲

奈々子は、どうしてそこに戻つて來たか？ まるで夢中だつた。夢中で馳け込んで來た奈々子を見ると、

『あら、奈々子さん！』

と、二三子が叫んだ。

『私、私――。』

奈々子は、そこによろめき伏した。すつかり動顚してしまつて、頓には言葉も出なかつた。

『どうしたんです？ 奈々子さん。』

廉吉は性急に問ひかけた。廉吉は、二三子の口から仔細を聞きとつて、これから直ぐに、その柴田の家に飛んで行かうと、今、立ちあがつたところだつた。

『あら、廉吉さん！』

奈々子は、はしなくも廉吉をそこに見出して、益々うろたへるばかりだつた。

『今、出掛けようとしてゐたところですよ。でも、よく無事に戻つて來て呉れたですね。一體、何處に居たんです。――柴田とか云ふその男の許に居たんぢや無いんですか？ 襟子さんに――襟子ツて人に會は無かつたんですか？』

廉吉は、たゝみかけた。

『あの人、襟子さんて云ふの？――私、危いところを――危いところをその人に助けられたのよ。その人が來て呉れて、私、やつと逃げ出す事が出來たのよ。』

『襟子さんに助けられて――そして、襟子さんは、どうしたんです？』

『それが――それが大變なのよ。』

『大變？』

廉吉が云ふと、

『まあ、大變ツて？』

と、二三子も腰を浮かした。

瑞枝もそこに居た。瑞枝も、息を詰め、瞳を据ゑた。

『早く行つてよ。廉吉さん、早く、行つて上げてよ。あいつ、惡者だわ！ あの方が――あの方が――。』

奈々子は、しどろもどろに叫んだ。事情はよくのみこめ無かつた。――が、何か大變な事が起つたこと、乃至起りつゝある事だけはわかつた。事は急なのだ！ 此の上、くはしい事を聽いてゐる餘裕などは無かつた。

『行かう！』

廉吉は立ちあがつた。

奈々子も立ちあがつた。

『あんたは、行かない方がいゝ。』

『でも、場所がわからないでせう？　私が一緒に行くわ！』

『さうですか？　ぢや、行つて下さい。行つて家だけ數へて下さい。』

『私も――。』

と、二三子も云つたが、

『あんたは、行かない方がいゝ。瑞枝さん、もう遅いから、あんたはお歸りになつたら――。』

廉吉はこんな場合にも、細かな心づかひを忘れなかつた。

『いゝえ。私、こゝでお待ちしてゐますわ。氣になつて、歸れやしません。』

『さうですか？　ぢやあ――。』

廉吉は奈々子と二人で飛び出した。折よく通りかゝつたタキシを拾ふと、行先を命じて全速力で急がせた。

十分とはかゝらなかつた。

『こゝよ。』

その家の前にタキシを停めさせると、幽かな灯影の漏れる窓を見上げて奈々子は叫んだ。

（――でも、許して下さい。姉さんには斯うするより外無かつたのです。これが姉さんの運命だつたんです。私ばかりでは無い、絹子姉さんも――あなたの二人の姉さんが、どんな怖ろしい運命に弄ばれたか？　るり子ちやんの幼い心ではまだはつきりとそれを知る事が出來ないだらうと思ひます。あなただけは、こんな怖ろしい運命に會はせ度く無い、こんな怖ろしい世の中を見せ度く無い――これが、私の唯一つの願ひです。だから、姉さんは、此の世の中の惡いことはみんな背負つて行きます。そして、好いことだけをあなたに殘して行き度いと思ひます）

そこまで書いて來た時、襟子は、吹き荒ぶ風の音に交つて、次第に迫り近づいて來る自動車の音を聞きつけた。

何處かへ走つて行つたらしいあの老婆――あの老婆の訴へで、警察の人でもやつて來たのぢや無いか知ら？

さう思つて耳をすましてゐると、自動車は、慥かに此の家の前に止まつたらしかつた。

もういけない！　愚圖々々してはゐられない！

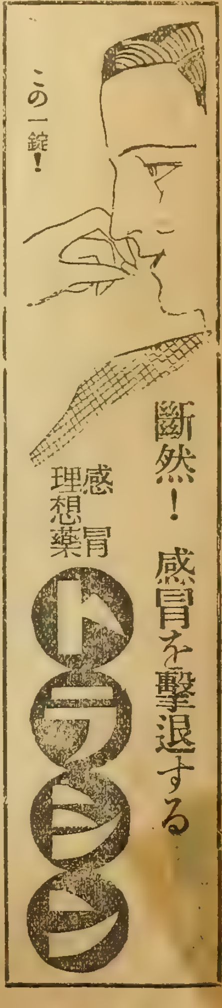
襟子は扉の方へ走り寄つて、鍵をおろした。

そして、卓に戻ると、るり子への手紙を折り疊んで、封筒に入れた。

そのうちに、階段を走り上つて來る慌たゞしい足音がした。

襟子は、剃刀を取り上げた。そして、咽喉へ押しあてようとした時、扉が激しく打ち叩かれた。同時に、
『襟子さん！　襟子さん！』
といふ聲がした。
その聲を聞くと、襟子は、思はず剃刀を取落しかけた。
それは、廉吉の聲だ！
『襟子さん！　襟子さん！』
廉吉の聲は繰返された。
襟子は、我知らず椅子から立ちあがつた。氣がついた時は、扉の傍に走り寄つてゐた。
荒々しい叩が扉を揺つた。
『襟子さん！　僕だ、伴だ！　居無いんですか！　襟子さん！
襟子さん！』
おゝ、懷かしい聲――もう一度、その聲を聽く事が出來たのか？　襟子は、ぴつたりと扉に身を寄せると、全身で、全細胞で、その聲を吸ひ込むやうにした。
だが、襟子は靜かに扉の前を離れた。そして、血潮の上に轉んでゐる重田のもうことされた死顏をもう一度見直すやうにすると、その傍に膝をついた。
剃刀はぐざと突き立てられた。見事に斷ちきられた頸動脈からは、さつと鮮血が迸つた。――そして、重田の上に折重なつて、かつくりと突伏してしまつた。
『襟子さん、襟子さん！』
扉の外ではしきりに繰返された。その聲は、斷末魔のあへぎの中に薄れ行く襟子の意識の中に、揺れながら消えて行つた。
『どうしたんだらう？　居無いのか知ら？』
『そんな筈は無いわ。』
『へんだな。』
と、廉吉は首を傾げた。
『もう一度呼んで見てよ。』
奈々子がうながした。
『襟子さん！　襟子さん！』
廉吉はくりかへした。
――が、矢張返事は無かつた。

（つゞく）



感激と涙に終始した長谷川伸氏母子を祝ふ會

——四十七年振りで母子の再會！

「目をつぶると瞼の中に、いつもきつと母の俤が浮ぶ。母は自分の瞼の中に生きてゐられるのだ」

『瞼の母』の主人公は恁う云つてゐます。この主人公こそ現大衆文壇の重鎭長谷川伸氏自身であつて、實に氏は四十七年の長い間、只管に瞼の母親を探し求めてゐました。しかも運命の奇しき導きは、つひに追慕止まなかつた生みの母親にまで氏を誘つて、こゝに氏は第二の誕生の喜びを迎へたのであります。その喜びを祝ふ會が、先般帝國ホテルで華やかに開かれました。世にも不思議な運命を持つた母子を主賓とするだけに、文士、俳優、政治家、新聞人等、會する者二百五十名といふ近來稀有の盛會を呈しました。見るも涙、語るも涙、涙の母子を圍んで會はたゞ涙と感激に終始しました。

當夜の長谷川伸氏母子

人情作家と稱せらるゝ多感の長谷川氏は、如何に感激したことでせう。氏は當夜の感激を恁う語つてゐます。

『私を祝ふの會の盛大さは、私一代の誇り。もし他日、幸ひにして「傳」を編まるゝ程の人と成り得るものならば、その夜の盛觀は、重大なる事項の一つとなるでありませうが、それ程の人となり得るかどうか疑はしい限りであります。併し、あれ程の會を催して頂いたのでありますから、私としてこれに酬ゆる途はたゞ一つ、文筆精進の他ないのでありますので、今後、佳い作品をつくらねばならぬと深く感じてをります。當夜、私は支離滅裂なご挨拶をいたし、後になつて汗を掻きました。述べてゐる事の一に對し、思ふことは走つて十にも百にもなり遂に中絕の醜態をおみせしました……』言々句々犇々と我々の胸を衝つものがあります。

氏は既に文壇に獨自の世界を作つてゐます。流麗の筆致、特異奔放の構想、そして哀切の人情を描いては天下双ぶものなく正に氏の獨壇場であります。その特色が最も多く現はした氏の代表的名作として文壇擧つて激賞の『馬頭の錢』は、氏が全身全靈を傾け盡したと云はるゝ大傑作で、小說家今戒光氏は『「馬頭の錢」は驚くべき世界を描いてゐる。それは單に善惡の世界ではない。亦それは人情の世界だけではない。文字通りそれは驚くべき境地に達した作者が、驚くべき世界を描出したのである。「馬頭の錢」は大衆文藝の最高峰を示す一つの道標であらう』と激賞讃嘆してゐます。本書の人氣は正に絕頂、到る處大歡迎大評判です。是非御一讀を御奨めします。（定價一圓五十錢送料十二錢本社發行）

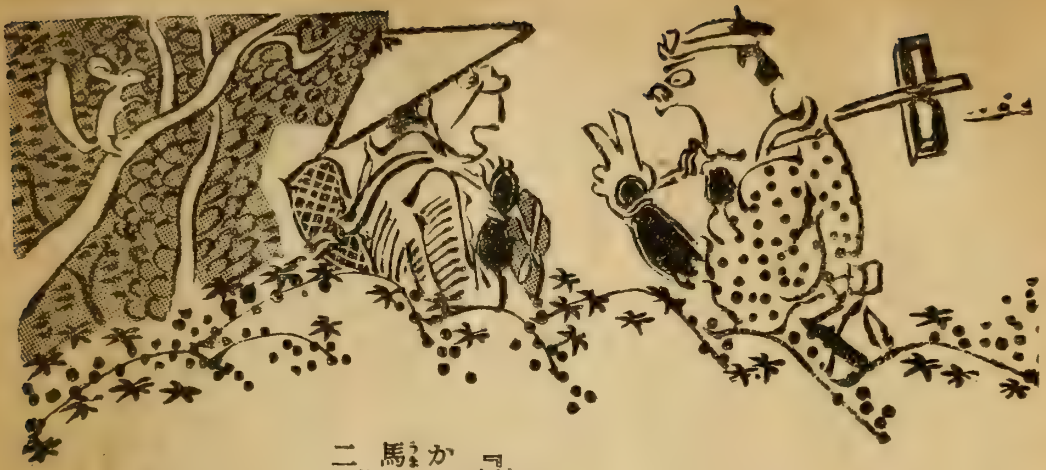
滑稽詩

スタコラサ

サトウ・ハチロー

スタコラ　スタコラ　スタコラサ
みどりのもえる　山道を
カポカポ行くのが　栗毛馬
ならんで飛脚が　スタコラサ

パタリ出逢うた　旅人が
『もし〳〵急ぎの　様子だが
なぜに馬には　乗らぬのか
その馬病氣か　乗れぬのか』



するど飛脚は　『何を言ふ
わしは急ぎの　早飛脚
それ故かうして　馳けてゐる
それがおぬしに　わからぬか』

旅人けげんな　顔をして
『急ぎの用なら　尚のこと
馬に乗つたら　早やからう』
飛脚は手をふり　首をふり

『馬に乗つたら　四本足
かうしてわしが　馳けてれば
馬と合はせて　足六本
二本分だけ　早いのじや』

ものの道理が　わかつたか
いそげいそげと　スタコラサ
聞いた旅人　あきれはて
こりや驚ろいたと　スタコラサ

宮尾しげを畫

珍談 救ひの狂歌

小田吉郎

帝國美術院會員として、且つ、帝室技藝員として、世に時めく京都畫壇の巨頭山元春擧畫伯は、一方、稀れに見る狂歌の名人である。然かも畫伯の狂歌の徳は、多くの人の一生を幸福に導いてゐる。

その一、

ある時、畫伯邸へお出入りの按摩さんが、畫伯を揉療治してから、キマリ惡さうに言ふことに、

——私は先年、評判の美しい女を妻としたが、不幸にも不貞の所爲があつたので離婚した。ところが今度、世話するものがあつて、新たに妻を娶らうとしたところ、その女は、他に缺點はないが、たゞ、顏に一つ大きな痣がある——

『私は眼が見えませぬから、痣のあるぐらゐ何んとも思ひませぬが、世間からそれを後指さゝれるのが辛う御座いますし、そんなわけで、貰つたものかどうか、と迷つてをりますので……。』

と、相談を持ちかけた。すると、

畫伯は、

『しかし、その女は他人が貰ふのではなく、お前さんが自分のために貰ふのだらう。』

と言つて、直ぐと、傍らの半紙へすらすらと一首。

心だに操正しき妹ならば
誰があざ笑ふものゝあるべき

とやつたので、按摩さんは『成程』と、これですつかり喜んで、その女と結婚した。

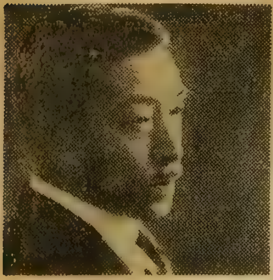
その二

またある時、ある料理屋の料理人が、ついした出來心で、甚だ美しからぬ近眼の女と問題を惹起し、夫婦になるならないで大悶着。そこで料理人は、前の按摩の話を聞込んだところから傳手を求めて畫伯に相談に來た。すると、畫伯は即座に、

夜眼遠眼傘のうちよりま

のあたり
　近眼とのこそ
　めでたかりけ
　る

と歌つて、こゝに又、三々九度の一組を成立させた。

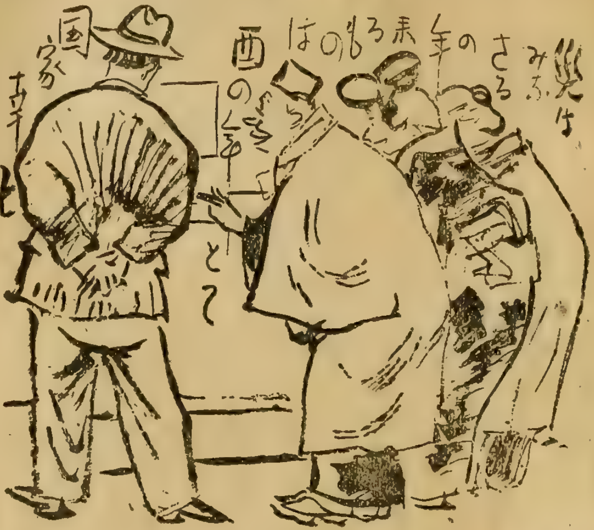


その三

畫伯邸に出入したある呉服店の店員幸七といふのが廿歳に獨立して呉服屋を始め、『幸七屋』といふ看板を揭げたが、營業思はしからず、思案にあぐねた幸七は、畫伯を訪ねて窮狀を訴へた。

すると、畫伯は、その場で紙片へ、

　災はみなさる
の年來るものは



酉の年とて國家幸七

と書き與へると幸七は、大喜び、その狂歌を店頭に懸額として揭げたが、それからはトントン拍子の繁昌、忽ち屈指の富豪となつたが、その後、大正十二年に積立金全部を預金した積善銀行の破綻に遭つて、悲鳴をあげながら又も畫伯を訪ねて來た。そこで畫伯は又、

七福の神に幸ひ一つづつ
　別けて貰うてこゝに幸七

これを見ると、悲觀の極みの幸七が忽ち樂觀、爾來、業を勵んで年一年と盛大になつて行つた。

その四

畫伯の甥で、東京で莫大小商をやつてゐた山元直次郎といふ人が、大震災に燒出され、無一物で畫伯の家に避難、悲觀のどん底に陷入つた。しかし、畫伯その他の力添へもあり、山元が再び商賣復興を計つた時、畫伯は、蕨の芽生えする圖を描き、それを手で握り摑む形にして燒け跡になほ萌え出づる蕨手の

攫め取れ取れ運は直次郎

と賛をした。直次郎はこれに元氣百倍、大奮闘をやつたので、今日では店運隆盛だ。

春擧畫伯の狂歌の德はまだまだあつて、以上はその片鱗に過ぎない。（寫眞は山元畫伯）

芝居物語

熊谷陣屋（くまがいぢんや）

一谷嫩軍記（いちのたにふたばぐんき）

鈴木彦次郎

小山榮達畫

一

どん、ど、ど、どん……

陣太鼓の音も威勢よく、すうッと、幕が開きますと、舞臺は、須磨の浦、生田の森かげに、鳩八の定紋うッた幔幕を、いかめしく引廻した熊谷次郎直實の陣屋。——庭に一幹、いまを盛りと咲き亂れる櫻花も、折からの夕日を受けて、さながら、すぎし一谷の合戰で、平家の公達敦盛を討ち取ッた勇士直實の大功名を誇るやうに、美しく照り映えてをります。

だが、無氣味なのは、花散る下に建てられた眞新しい制札。

墨黑々と、達筆で、

「——一枝を切らば、一指を切るべし。」

と、恐しい文句が、したためてある。

里人の噂によれば、義經公が、この花を惜しむ餘り、辨慶に命じて、かうした掟を書かせたのだ、と云ひますが、生きた花でも手折るならいざ知らず、たかが櫻の一枝ぐらゐで、指を切るとは、慈悲深い九郎判官にも似合はぬ仕打ち、ちと腑に落ちぬ御布令です——。

時しも、濱邊傳ひに、此方をさして急いでくる旅姿の凛々しい女房、ふと、幔幕の定紋を見ると、俄かに勇み立ち、供の若黨をうながしながら、陣門近くたどりついて、

「頼みます。お頼み申します。」

と、おとなふ聲に、奥から出てきた直實の家臣、堤の軍次。

「はて、陣中に女の聲。——どなたでムいまするな?」

さう云ひながら、門の扉あけて、女の姿を見るが早いか、

「ヤッ、あなたは奥さま! これは〳〵、思ひがけないお目見得。さ、何はともあれ、まづ、まづこちらへ——」と、驚きあわてて、引き入れたのも道理、この旅の女は、直實の妻女相模だッたのであります。

だが、郷國で留守を守ッてゐる筈の相模が、何故、はるばる陣屋へ訪ねて參ッたのでありませう?——軍

次は、やがて上手に座を構へた相模の顏を、いぶかしげに見詰めながら、

『奧さまには、長の御道中、何か、急な御用でも厶いましてか？』

と、恐る恐る問へば、相模は膝を進めて、

『いやいや、別段、用事といツてはないが、ただ、初陣の小次郎の身が案ぜられ、それ故はるばるやツて來ました。ここまで來る途中も樣子を聞けば、いま戰ひの最中との噂。お上は御元氣か、小次郎は無事でゐやるかのう？』

『はツ、殿樣始め若殿小次郎さまにも、至極御健勝でいらせられます。』

『おお、それ聞いて、やツと落ちつきました。』と、相模は、始めて、にツこり笑ひ、

『して、旦那樣や小次郎樣は？』

『あいにくながら、殿樣は、今日、思ひ立たれたことがあると仰せられて、御佛參にお出掛け。――また、若殿は、先日の合戰以來、御本陣へお詰め切りで、まだ、お歸りが厶いませぬ。』

と、軍次が、恐縮して答へる折から、バタ〳〵バタツ！

と、足音もあわただしく、高貴の人と見える女性が、裏手の方から、髮振り亂して、走ツてきた。

これぞ、敦盛の母、藤の局。――今しも、源氏の兵に見咎められ、逃げて參ツたのであります。

藤の局は、もう、無我夢中、陣門の扉を、しきりに叩いて、

『もし、後より追手のかかる者、どうか、おかくまひ下さいませ！』

と、聲も必死に、呼び立てますが、軍次は更に受け付けず、

『お氣の毒ながら、御覽の通りの陣屋、女子を入れる譯にはいかぬ。他をお頼みなされませ。』

と、きツぱり、斷りかけるのを、相模は、あわてて、押しとどめ、

『ああ、これ軍次。お可哀さうな方ではないか。誰しも女子は相身互ひ、一先づ、お入れ申したら――』

と、言葉もやさしく、云ひさとしながら、立ち上ツて陣門を開けば、藤の局は、ほツとして、禮もそこそこ、飛び入る途端に、思はず、見交はす顏と顏！

『おお、あなたは、たしか藤の方さま。』

『さういふそなたは、相模ぢやないか！』

『まあ、お久しう厶いました。』

『ほんに、思ひもよらず、そなたに逢ふとは、これも、全く神佛のお引き合はせ。――いま、云ふ通り、わたしは、危い身の

上、どうか、昔馴染みに、かくまツてたも。』
『何の、勿體ない。今こそ、昔の御恩返し、きツとおかくまひ申しますから、御安心遊ばしませ。ま、ともかくも、あれへ――
――』
相模は、手を取らんばかりに、藤の局をいたはりながら、恭しく上座に導きました。
いまは、源平二氏。――互ひに、しのぎをけづり合ふ夫や子を持つ二人の間には、果して、どんな縁故があるのでムいませう。
相模は、軍次を奥へ引き取らせた上で、改めて、兩手をつかへ、しみじみ語り始めました――。

二

『お局さま！　お懐しうムいます。――思ひ廻せば、はや一昔、私がお宮仕へ致してゐる時、つい勤番の武士佐竹次郎と馴染んだことが現はれて、すんでのことに、重いお仕置を蒙るところ、あなたさまのお情により、お咎めもなく東國へ落していただいた御恩は、夢にも忘れは致しませぬ。その後、お局さまには、尊いお方のお胤を宿されたまま、平家の御家門、参議經盛さまへ御縁付きなされたといふ御噂を伺ひ、かげながら、御喜び致してをりましたのに、此度の合戰で、御一門も散り散りと聞くにつれ、藤の方さまは何と遊ばした、どうなされたかと、お案じ申してをりましたが、はからずも、御無事なお顔を拜見致し、こんな嬉しいことはムいませぬ。』
さう云ふ相模のやさしい言葉に、藤の方は、思はず、ほろり涙ぐみ、
『ほんに、かうして逢へたのも、盡きぬ縁であらうのう。さういへば、あの時、そなたも身持ちの樣子だツたが、生れた子は、姫御前か、それとも殿御か、息災で育ててゐるかえ？』
『はい、男の子でムいますが、おかげさまで、すくすくと成人致し、此度の合戰が初陣、どうやら健勝で、働いてゐるやうでムいます。』
『おお、それにひきかへ、此の身は、無官の太夫敦盛といふ器量すぐれた愛しい兒を、今度の戰に討死させたばかりか、夫經盛も遠く別れて、いまは只ひとり、涙に暮らす果敢ない運命。
――相模、察してたも。』
と、嘆き悲しむ藤の方の樣子に、何にも知らぬ相模は、共に涙に誘はれて、
『お道理でムいます。おいたはしう存じます。だが、お局さまの御身は、私ども夫婦、命にかへても、お守り致しますから、

お心靜かに、敦盛さまの御回向を遊ばしませ。夫も、唯今では、熊谷次郎直實と名も改め、源氏方でも、人に知られた武士、決して御心配はムいませぬ。』

と、しきりに慰める言葉を聞き咎めた藤の方、

『えツ、そんなら、そなたの連合ひ佐竹次郎は、今では熊谷次郎と云やるのかえ?』

『はい、左樣でムいます!』

『すりや、熊谷次郎は、そなたの夫であツたのか!』始めて知ツた藤の方は、思はず、きツとなツて、聲も鋭く、『これ相模、そなたは、昔の恩を忘れぬと云ツたねえ?』

『はい、お咎めもなく東國へ落して下さツたお局さまの御恩、いつも、夫と語り合ツては、しみじみ有難く感じてをります。』

『おお、眞實、さほどに思ツてゐてくれるなら、私に助太刀して、敦盛の仇敵を討ツてはくれまいか?』

『そりや、また誰を?』

『そなたの夫熊谷次郎直實を討つのぢやわえ。』

『ひえツ、では、夫が敦盛さまを――お局さま、そりや、本當でムいませうか!?』

意外のことに、相模は、ぎツくり打ち驚き、聲もふるへて問ひ返しました。

『すりや、そなたは、何にも知らぬのか?』

『はい、何せ、只今、はるばる東國より參ツたばかりで、まだ夫にも逢はぬ始末。――おツつけ夫が歸り次第、樣子を尋ねるその間、暫くお待ち下さいませ。』

と、わななく胸をおし靜め、相模が、眞實こめて、猶豫を願ふ折から、表の方で、高らかに、

『梶原樣のお入り――。』

と、呼ばはる聲!

『なに、梶原が參ツたとな!』

と、あわてて立ちかける藤の方を、相模は、靜かに押しなだめ、

『お局さま! たとへ梶原が參ツたとて、決して御心配には及びませぬ。夫は夫、私は私、如何なる事がムいましても、必ずお守り致しますから、まあ、奧で暫く御休息を――』

と、健氣に云ひ切ツて、藤の方を伴ひ、上手の座敷へ姿を消しました。

程なく、肩で風切つて、のツし〱と、入ツてきた梶原平次景高、急いで出迎へた堤の軍次を尻目にかけ、さも横柄に、上座に着きました。

『こりや軍次! 梶原平次景高、ちと尋ぬることあツて參ツた、

直實どのは、御在陣か。』

『はツ、今日は主人直實、折惡しく佛參に出掛けて不在でムりますれば、御用の趣、何卒、某へ仰せ置き下さりませ！』

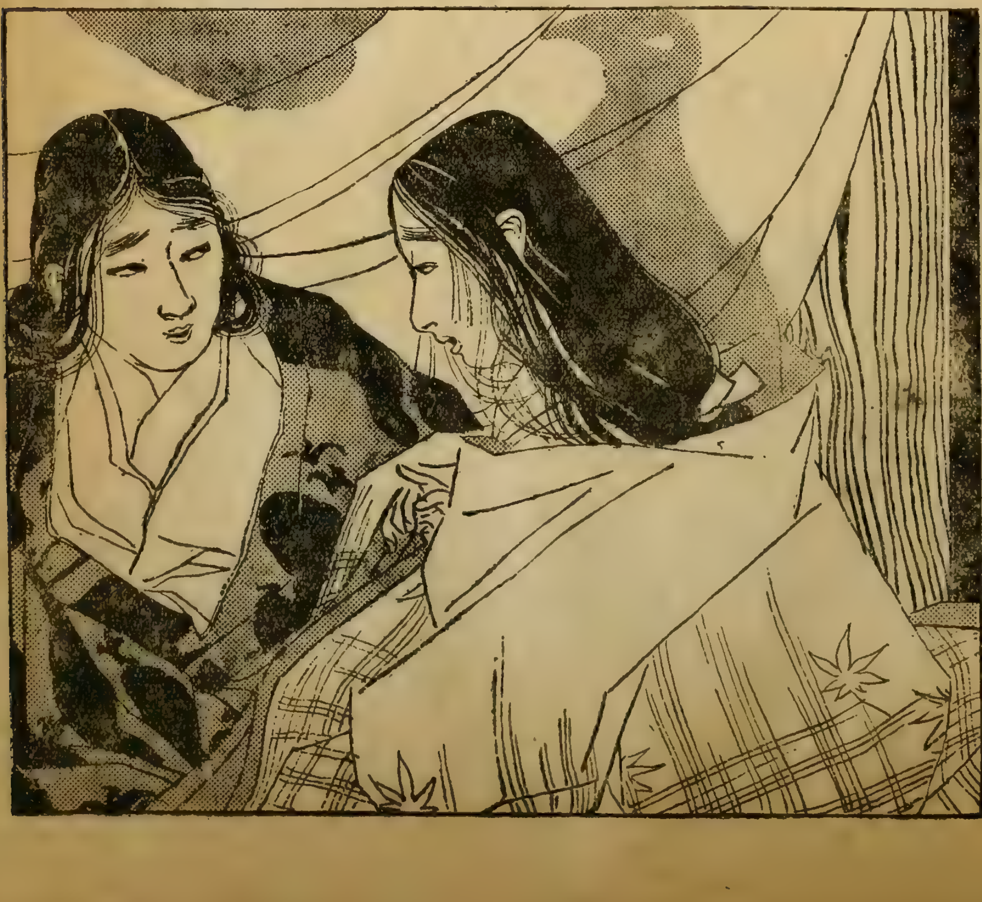
『なに、熊谷どのは他出とな。——やあ〳〵家來ども、石屋の親仁めを引立て參れ！』

『ハ、ハーツ！』

聲もろとも、七八人の家來どもは、繩にかかツた白髮頭のよぼよぼ爺を、ぐいぐい引き立てて參り、邪險に肩を小突いて、梶原の前に引きすゑました。

——此の親仁は、彌陀六といふ土地の石屋、恐れげもなく敦盛の石塔をたてたので、梶原に見咎められ、かうして縛り上げられたのでムいます。それにしても、梶原は、何故、わざわざ熊谷の陣屋へ、此の石屋の親仁を引き立てて參ツたのでありませうか。——梶原は、威丈高に聲を張り上げました。

『やい、なまくら親仁め！　おのれ、何者に賴まれて、敦盛の石塔を建てた!?　平家は、殘らず西海へ逃げ失せて、誂ふべき相手もある筈はなし、察するところ源氏方の二股武士が賴んだに違ひあるまい。さあ、眞直に白狀しろ！　僞る時は、背を斷ち割り鉛の熱湯、鎌倉どのの御威勢で云はさにやおかぬぞ！』



さういふ梶原は、どうやら、心中ひそかに、熊谷を疑ツてゐる様子です。だが、彌陀六は、ちツとも恐れず、ぎろり、白い眼で、梶原を見上げながら、

『てもさても御無理な御詮議ぢや。先程も申した通り、石塔の誂へ手は敦盛の幽靈、手前もうツかりだまされて引き受けたもののの一文にもならず、といツて冥途へ書出しもやられず、ここのところ、ほと〲困り切ツてをります。その鎌倉どのの御威勢とやらで、幽靈めから代金を取ツていただければ、親仁大助かりでムります。ヘツヘヘ……』

と、人を喰ツた答辯に、さすがの平次景高も、弱り果て、

『チエツ、強情な親仁めぢや。よしよし、その方が白狀せずとも、大方石塔の誂へ手も見當がついた。熊谷が歸ツたなら、對決させて詮議を致さう。ソレ者ども、そやつを奥庭に引き立てい！』

と、命じておいて、身勝手極まる梶原は、ここで、熊谷の歸りを待ち受けるつもりか、いつかな動かぬ様子なので、軍次は、機轉を利かし、奥の一間へ、案内いたしました。

三

やがて、日もはや西に傾いて、夕風に、はらはらと、庭の櫻が散りかかつたそがれどき。

『殿さまの御歸り――』

供の者の呼ぶ聲が、はるか彼方に聞えました。待ち兼ねてゐた相模は、軍次ともども、飛び立つ思ひで、出迎へますと、熊谷次郎直實、なぜか、日頃の颯爽たる姿に打ツて變り、下俯向いて思案顔、歩む足どりも重々しく、無言のまま歸ツて參りました。

その不機嫌な様子に、相模は、どぎまぎしながらも、懐しげに挨拶を述べましたが、直實は振り向きもせず、どツかと座に就き、軍次に向ひ、ただ一言！

『これ、留守中、本陣から、何ぞ御沙汰がなかツたか！』

『はツ、別に御本陣からのお使ひはムいませんでしたが、先程、梶原さまが、何か詮議の筋があるとて、石屋の彌陀六を引き連れてお出でになり、唯今、奥の一間でお待ちなされてをりまする。』

『ほう、詮議とは何事だらう。――まあ、よいよい。その方は、奥へ參ツて、暫時の間、梶原どののお相手をしてゐてくれ！』

直實は、さういツて、軍次を奥へ去らせた後、きツとなツて、相模を見据ゑました。

『こりや女房！ そちは、ここへ何しに參ツた。國許出立の節、陣中へは便りも無用と、かたく云ひつけおいたのに、その言葉

に背いて陣中へ訪ねくるとは、不屆き至極の女めぢや！』

聲高らかに罵られて、相模はもぢもぢ。

『そのお叱りを存じながら、とかく案ぜられるのは初陣の小次郎の身、一里行ツたら様子が知れうか、五里來たら便りがあらうかと、たまりかねて百里餘りの道を、ついここまでたどツて參りました。お言葉に背きましたのも、子に惹かされた親の因果、どうぞ御料簡下さいませ。――して、小次郎は、元氣でをりますかえ？』

と、詫びろ下から、早くも愛兒の安否を尋ねる親心、だが、直實は、一層聲も荒らげて、

『何を申すか！　戰場へ赴くからは命はないもの、もし討死したら何とする！』

『いえ、小次郎が初陣に、よき大將と引組んで、名譽の討死を致しましたら、嬉しいことでムいます。』

轟く胸を靜めながら、きツぱり答へた健氣な言葉に、直實は、やツと機嫌を直し、

『うむ、それでこそ、武士の妻ぢや。小次郎はな、一谷の合戰で、平山武者所と先陣を争ひ、見事、平家の陣中に、眞先かけて躍り込み、目覺しい働き、手疵は少々負うたが、天晴れの功名を擧げたぞ！』

『えツ、して、その手疵は、急所ではムりませぬか!?』

『ソレ、また手疵に驚く顔付き、もし急所ならば悲しいか!?』

と、問ひ正されて、相模はへどもど、やツと、聲を勵まして、

『いゝえ、かすり疵でも負ふ程の働きがよく出來たと、嬉しさの餘り、お尋ねしたのでムいます。すりや、その時、あなたも小次郎と、一緒にお出でなされましたか。』

『おおさ、小次郎が危ふしと見るより早く、敵陣に驅け入り、手疵に惱む小次郎を小脇にかかへ、群る敵を蹴散らして、無事に我が陣屋へ連れ歸ツた。しかも、その日、某は、搦め手の大將無官の太夫敦盛の首討ツて、陣中一の手柄を致したぞ！』

『ひえツ！　では、やツぱり、あなたが敦盛さまを――』

と、相模が、ぎよツとして問ひ返す途端に、障子のかげで、立ち聽きしてゐた藤の方は、たまり兼ねて鋭い聲！

『我が子の敵、熊谷覺悟！』

云ひざま、懷劍、ぎらりと拔き放ち、一氣に突いてかかるのを、とツさに扇で打ち落して、有無を云はさず引きすゑた熊谷直實！

『やあ、身に覺えなき敵呼はり！　な、何奴ぢや！』

と、極め付けながら、膝下に踏みしく様子に、相模は、あわてて取りすがり、

『あ、もし、御無禮をなさいますな。こちらは、藤のお局さまでムいますぞ！』

『なに、藤の方とな!?』聞いて、びツくり直實が、引き起して顏を見れば、窶れこそすれ、忘れもせぬ昔の俤。『おお、誠に藤の御方ぢや。こりや、思ひも寄らず、飛んだ失禮、平に御容赦下さりませ！』

と、詫びながら、懷劍拭うて手渡すが早いか、パッと飛び退き、平伏致しました。

けれど、愛兒を討たれた母の恨みは、何でこれしきの詫で晴れませうか。——藤の方は、我を忘れて半狂亂！

『こりや熊谷！　如何に軍の習ひぢやとて、年端もゆかぬ若武者を、ようむごたらしう首討ツたな！　さあ、約束ぢや、相模！　助太刀して、夫を討て！』

と、せき立てますが、たとへ、恩人の命令とはいへ、どうして、夫に刄を向けられませう?——

相模は、おろ／＼、うろたへながら、

『これ、直實どの、敦盛さまは尊いお方の御胤ば

かりか、御母君は大恩あるお局さまと知りながら、どうして、むざ／＼討たしやんした。これには定めし仔細もありませう。さ、その譯をお聞かせ下さりませ。』

と、云ふ聲も涙にむせんで問ひ詰めます。しかし、直實は、平氣なもの。

『やあ、愚か／＼！　源平二氏に分れて戰ふ以上、平家の將敦盛を、何で容赦ができようぞ！』

と、事もなげに云ひながら、改めて、藤の方に向ひ『お局さま！　戰場の儀は、ぜひなしと、何卒お諦め下さりませ！　だが、せめてもの御慰めに、敦盛卿の健氣なお働きを詳しく申上げませう！』

と、云ひ放つたものの、やがて、膝を正して直實、首うなだれて、しんみりと物語りました。

四

『さても去ぬる六日の夜、はや東雲と明くる頃、先を競ツて攻め入ツた平山熊谷討ち取れと、雄叫びながら迎へ撃つ平家の軍勢の中に、一際目立つ緋縅を付けた若大將の武者ぶりは物すごく、さすがの平山武者所もあしらひかね、濱邊をさして逃げゆくさまを、見て取ツた某、やをら、大音あげて、――ハテ、勇しき若武者よ！　逃げる相手に目をかけ給ふな。熊谷次郎直實、ここにあり、返せ！　戻せツ！　おゝい／＼！――と、扇を以てさし招けば、若大將は、健氣にも駒の頭を立て直し、まツしぐらに打

ち向つて參りました。よき敵ござんなれと、某も太刀引き拔いて五六合渡り合ひましたが、瞬時を爭ふ亂軍の間、暇取ッては面倒と、打物投げすて、駒を進めて組み付けば、敵もさる者、むんずと組んで、ここを先途と揉み合ふ內、我が力まさッてか、相手を小脇にかかへたまま、兩馬の間に、眞逆さま！』

『ひえッ、すりや、その若武者を、組み敷いたか！』――と、鋭く叫ぶ藤の方！

『はい――だが、御顏をよく〳〵見れば、年も我が子小次郎と同年輩に思はれる若大將、――ああ、定めし御兩親も在さう。その御嘆きは如何ばかりかと思へば、さすがに、むざむざ討ち奉る氣にもなれず、上帶取ッて引き起し、さ、此の場を、すぐに落ちられよ！　とおすすめ申しました。』

『おお、そんなら、お救ひ申す心でムんしたのか！』相模は、ほッとして云ひました。

『うむ、然しな、さすがは剛勇の聞え高き敦盛卿、――一旦、敵に組み敷かれてはなに面目あッて長らへようぞ。はや首取れよ熊谷！　――と雄々しい仰せ！　そのお言葉に、いとど、胸も張りさけるばかり、ああ、我が子小次郎も、或ひは、この通り敵に組み敷かれて、命を捨てぬものでもない。淺ましいのは武士の習ひと、つい太刀も拔き兼ねてゐる折から、逃げ去ッた平山が、後の山から威丈高に、――やあやあ、敵の大將敦盛を組み敷きながら、助けるとは、熊谷直實、二心ありと見極めたぞ。――と叫ぶ聲に、詮方なく、――ええ、是非もなや！　御遺言はムりませぬか？――と、申上げれば、敦盛卿は、御淚を浮べ給ひ、――ただ心にかかるは母人のこと、熊谷賴むぞ！――と仰せられたきり、兩眼を閉ぢて御覺悟の樣子に、やむなく、心を鬼にして、御首を討ち奉ッてムります。』

と、情のこもる物語に、藤の方は、ただ淚！

『おお、さほど母を思ふなら、なぜ父上經盛どののお言葉に從ひ、都へ身を隱さずに、一谷へ向ッたのか！　チェッ、情ない！　悲しい！』

と、口說き嘆かせ給ふ御有樣！――相模は、御尤もとは思ひましたが、わざと聲勵まして、

『もうしお局さま！　御一門殘らず、屋島の浦へ落ち給ふ中に只お一人踏みとどまり、潔く討死なされた敦盛さまの御振舞こそ、天晴れ、平家隨一の御名譽ではムりませぬか!?』

と、慰める言葉を聞いて、大きくうなづいた熊谷直實！

『やあ、出來した〳〵。こりや女房！　藤の御方さま、ここにお出であッてはお爲にならぬ、少しも早く、いづれへかお供致せ！　某も早速敦盛卿のお首を、義經公の實檢に供へねばなら

ぬ。軍次は居らぬか！　早う参れ！』

呼ぶ聲もろとも、直實は、座を立ツて、奥へと立ち去りました。

――時、すでに、日も、とツぷり暮れ果て、わびしい鐘の音に、陣屋々々の灯火は、ゆらゆら、とまたたいて、たださへ、人の心に、しみじみと、世の無常を感じさせます。

まして、愛兒を失つた母の心は、如何ばかりでありませう！

――藤の方は、形見の笛を取り出して、じいッと見詰めながら、絶え入るばかりに泣きむせんでをります。その不憫な樣子に、相模も、思はず、貰ひ泣き！

『お局さま！　その笛こそよいお形見！　敦盛さまのお聲を聞くと思召して、一曲お吹き遊ばしては？』

『おお、さうぢや〳〵。』

うなづきながら、藤の方が、一念こめて、吹き鳴らせば、親子の縁に惹かされてか、不思議や、上手の障子のかげに、朦朧と浮き出た姿は、たしかに、敦盛卿！

『やツ、障子に映るあの影は!?――おお、我が子、懐しや敦盛！』

と、子故に迷ふ藤の方、我を忘れて驅け寄り給ふを、あわてて抱きとめた相模！

『もし、おとどまりなさりませ。ありや、敦盛さまの御靈魂！御對面なされては、御身にお障りが厶りますぞ！』

『何の、身に障りがあらうとて、これが逢はずにをられうか！』

と、尚もとどめる相模の手を振り拂ひ〳〵、障子を、さらり、押し開ければ、こは如何に、姿は見えず、ただ、緋縅の鎧が、いかめしく飾られてあるばかり！

『ああ、さては、鎧の影であツたか！』

『戀しと思ふお心から、お姿と見えたので厶いました！』

『相模！』『お局さま！』

二人は、もはや物も云へず、手に手を取つて、泣き崩れました。

五

折から、首桶小脇にかかへ、靜かに、立ち出でた次郎直實！

相模は、その姿を見るより早く、夫の袂をしツかと引きとめ、

『あなた！　これが親子御一生のお別れ、せめて、お首になりとも、お暇乞ひを！』

と、取りなせば、藤の方も涙ながらに、

『なう熊谷！　そちも子のある身ではないか！　親の思ひを辨

へて、情に一目見せてたも！』

と、すがりつきましたが、直實は、激しく首を振ツて、ただ一言！

『いや、實檢に供へぬうちは、内見は叶ひませぬぞ！』

云ひざま、兩女を突きのけ、刎ねのけ、づかづかと行きかかる途端に、突如、奥から呼びかける大音聲！

『やあ〳〵熊谷！　敦盛の首持參に及ばず、義經、これにて實檢せん！』

云ふより早く、一間を、さツと押し開き、現はれ出でた御大將、近侍の武者二人を引き連れて、悠々床几へかかる御有樣に、直實始め兩女は、意外の御入來に驚きながら、下手はるかに平伏いたしました。

『こりや直實！　首實檢の延引といひ、また先程、本陣へ參ツて、暇を願ふ汝の心底、どうやらいぶかしく存ぜられた故、ひそかに思ひ入ツて、最前より、始終の樣子は奥にて聞いた。さ、すぐさま、敦盛の首、實檢致さう！』

『ハツ、畏りました！』

きツぱり答へた次郎直實、やをら、走り出でて、櫻の前に立てられた例の制札を、恐れ氣もなく引き拔くなり、それに首桶をのせたままずいと、義經公の御前に差し出して、沈痛な聲！

『此度の合戰の前日、ひそかに某をお召しなされ、必ず敦盛を賴むぞ！と仰せられたばかりか、一枝を

切らば一指を切るべしと、花になぞらへた制札の御布令!——直實、とくと考へました末、御諚にまかせ、見事、敦盛の首、討ち取りましてムります。さ、御實檢下さりませ!』

云ひつつ、パッと蓋を開ければ、瞬間、素早く、その死首を見て取つた相模、

『あッ、そ、その首は!』

と、なぜか、魂切るやうな聲もろとも、わッと泣き叫んで、驅け寄るのを、やにはに、むずと引きすゑた次郎直實、これ又、せめて死顏へなりと、一目別れを告げようとゐせる藤の方の視線を、扇で遮ッて、

『いやさ、實檢に供へし上は、ゆるゆるお目にかけるこの首、先づ〱お靜まりなさりませ。』

と、かたく制しながらも、熊谷ほどの豪の者が、思はず、涙ぐんだのも道理、その首こそは、意外にも、敦盛ならで、我が子小次郎の無慘にも變り果てた死首だッたのであります。いはんや、一瞬にして、藤の方の盡きぬ嘆きを、我が身に移した相模の胸中は、そも如何ばかり!?

（夫の言に背いてまでも、はるばる山河幾百里を、いとひもせずに陣中へ訪ね來たのも誰が故ぞ！ 無事を祈ッた甲斐もなく、いとしや我が子はむごい死にざま。）――子を思ふ親の心は皆一つ、最前、藤の方を勵ましたことも忘れ果て、相模は、今や、御大將の御前も憚らず、悲涙に袖をしぼるのでした。

だが、それにしても、直實は、何故、敦盛と稱し、我が子小次郎の首を實檢に供へたのでありませう!?

『敦盛卿は、尊いお方の御胤、されば、あの御制札の御深意を察し申して討ッたるこの首、果して御賢慮に叶ひしか、または直實誤りしか、御批判如何にムります？』

直實は、涙に曇る聲を勵まして、きツぱり言上致しました。

――つまり、花になぞらへて、一枝を切らば一指を切るべしと、制札に誌した義經の心は、尊い御胤の敦盛卿を花にたとへ、一指（一子）を切ッても、決して、その花を散らすな！ といふ意味だッたのです。それ故に、大義を辨へ、人情に厚い直實は、主君の尊い心を悟ッて、敦盛卿の身代りに、潔く最愛の一子を犧牲に致したのでムいます。

その氣高い精神！ その烈々たる義心こそ、まさに、日本武士道の精華。――義經は、ほと〳〵感じ入り、

『おお、花を惜しむ我が心を察し、よくぞ、思ひ切ッて討ッてくれた！ 敦盛に紛れなきその首！ 由緣の人に見せて、名ごりを惜しませよ！』

と、兩眼に涙を浮べながら、情をこめてうながしました。その仰せに、直實は、

『こりや、女房、敦盛の首、藤の方へお目にかけよ！』

と、云ひながら、それとなく女房へ手渡せば、相模は、變る我が子の死顔に、胸はせき上げ、身もふるへ、持ッた首がゆるぐのさへ、うなづくやうに思はれて、門出の時に振り返り、にツこと笑うた面差も思はれて、涙にうるむ聲ふりしぼり、

『お局さま！ お嘆きなされた敦盛さまの御首、しかとお目にとめられませう！』

と、差し付ければ、始めて氣付いた藤の方！

『や、や、やッ！ こ、この首は!?』

『あいなあ！ これ申し、よう御覽遊ばして、お怨み晴らし、よい首ぢやと褒めてやッて下さりませ、この首はな、わたしが身持ちながら東へ下り、產み落した源氏の若武者敦盛さま。その節あなたも御懷胎、誕生なされたお子樣は、ソレ無官の太夫敦盛さま、兩方ながらお腹に持ち、國を隔てて十六年、音信不通な主從が、お役に立ッたも不思議な因果でムりますなあ。』

『おお相模、今の今まで我が子ぞと、思ひの外の熊谷の情。そ

なたはさぞ悲しからう。かうした事とは露知らず、敵を取らうの切らうのと云ッた言葉が恥かしい。我が子の爲には命の親、ああ、有難い、忝いッ！　だが、それにつけても、合點のゆかぬのは、この濱の石塔は、敦盛の幽靈が建てさせたとの噂といひ、また最前、笛を吹いた時、あの障子に映ッた影は、たしかに我が子と思ッたのに、言葉も交さず消え失せたのは？』

と、まだ半信半疑のまま、小首を傾げる藤の方の樣子に、義經は、微笑みながら、聲を掛け、

『いや、その笛の音を聞いて驅け出したのは、確かに敦盛の幽靈、だが、人目に掛ッてはならぬと存じ、わざと障子越しに對面させた義經の計ひ。ようお察し下されい！』

と、打ち明ける言葉を聞いて、藤の方は、漸く我が子の無事を悟り、ほッと胸なで下す安心にひきかへ、相模は、尙も込み上げる胸の悲しみに耐へ兼ねて、よよと、泣き崩れるのでありました。

時しも、夜風に誘はれて、遠く聞える陣鐘太鼓！　――義經は、勇み立ち、きッとなッて、大音聲！

『やあやあ熊谷！　ありや合圖の陣鐘太鼓、急ぎ出陣の用意、用意！』

『ハ、ハッ！』

仰せに直實畏り、直ちに一間へ入りました。

六

途端に、足音も荒々しく、奥庭から走り出た梶原平次！

『聞いた〳〵、かくあらんと思ひし故、石屋めの詮議にかこつけて窺ふところ、義經熊谷心を合せ、敦盛を助けて平家に組する心底、しかと見拔いた！　どれ、鎌倉へ注進致さう！』

憎々しげに云ひ捨てて、驅け出す拍子に、いづこからか、ひゅう！　と飛び來つた手裏劍の狙ひは、寸分誤たず、見事、梶原の脊筋に、ぷすり！　突き刺さッたからたまらない！

邪智佞奸の平次景高も、わッと云ふより、血反吐を吐いて、バッタリ、その場にのけぞりました。

『すは、何者の仕業！』

と、一同、目を欹てる折しも、上手の方から、柴垣を押し分け、よちよち出てくる石屋の彌陀六、ぢろり、梶原の死骸を見すまして、

『ハッハハ……、あなたさま方の邪魔になる石ころを捨てて上げました。それに幽靈の御講釋も承はりましたから大安心、どれ、親仁は、これでお暇致しませうか！　フッフフ……』

と、驚く一同を尻目にかけ、とぼ〳〵歸りかける無氣味な親

仁。――義經は、その姿を、目ばたきもせず見守ツてゐましたが、突如！

『親仁、待てッ！』と、鋭い聲！

『へい、御用でムりますか。』

『おお、そちの名は何と申す。』

『ハハハ……、わしは、この土地に年久しく住む彌陀六といふ石屋の親仁でムります。』

『左様か、用事はない、立て〳〵！』

『へい。』彌陀六は、こツくりうなづいて、二三歩行きかけた途端に、またも響き渡る義經の凛々しい聲！

『こりや、彌平兵衛宗清、待てッ！』

だが、親仁は、振り向きもせず、尚も歩みを進めましたが、義經の指圖によッて、近侍の二人は、バラ〳〵バラッ！ と走り寄り、彌陀六の兩手を捻ぢ上げて、

『君の御上意！』『下に居らう！』

と、その場に引きすゐました。

『あれ、何をなさるのぢや。とんでもない、此の彌陀六が何か御無禮でも致しました

か!?』

親仁はぎろり、凄い目をむきました。けれど、義經は、にツこり微笑み、

『いや、宗清！ 久しぶりであツたなあ。その昔、平家の軍に追ひ立てられ、母常磐の懐に抱かれて、伏見の里まで落ちのびたものの、降りしきる雪に惱まされ、すんでのことに親子四人、凍え死ぬかと思はれた折、幸ひお前の情によッて、命助かりしその嬉しさ、義經、未だに忘れぬぞ！ その時、我は僅か三歳なれど、命の親なるその方の面影は、はツきり記憶致してをる、何よりの證據は、見覺えのある眉間の黒子、宗清！ 隠しても隠し切れぬぞ、重盛

の死後、行方知れずと聞いてゐたが、達者で何よりぢやなあ！』

と、圖星を差した一言に、性根を極めた彌平兵衛宗清、

『ハテ、恐しき眼力ぢやなあ！』

云ふより早く、支へる軍兵を刎ね退け〳〵、つかつかと、御前間近に進み出て、どツかとあぐらをかいたまま、白髮頭を振り立てて、思はず洩らす悲痛な述懷！

『かく彌平兵衛宗清と見破られた上からは、義經どのに申すことがムる。あの時、伏見の里で、そなたを助けずば、先達て、平家の立て籠ッた一谷鵯越を攻め落す大將はあるまい。また池の禪尼どのと云ひ合せ、賴

朝を救はずば、平家は今に榮えてゐる筈！ 思へば、宗清一生の不覺でムッた！ 平家の爲には、獅子身中の蟲、さぞや御一門の魂魄は、宗清を恨んでをられる事であらう。チェッ、情ない運命ぢやなあ！』

老忠臣宗清は、口惜しさに身を揉んで、男泣きに泣きむせびました。

――この宗清こそ、重盛の命により、武士を棄て、その忘れ形見の姫君を守ッて、この土地に身を隱し、石屋となッて、亡き平家一門の人々の石碑を建てて、供養を營んでゐる奇特な老人、むろん、熊谷から、ひそかに、敦盛の石塔を、と賴まれて、早速建て

たのも宗清だッたのです。
　義經は、暫し、宗清の心中を察して、不憫に思つてをりましたが、やがて、何思ッたか、
『やあ／＼熊谷！　申し付けた品を、これへ持て！』といふ聲に、ハッと答へて次郎直實、はや、出陣の扮裝も美々しく、鍬形の兜を着け、家來どもに大きな鎧櫃を運ばせながら、凛然として立ち出でました。
『御諚の品、持參仕ッてムります。』
『おお、御苦勞々々。』うなづいた義經は、ぢろり、宗清を見詰めて、『こりや親仁！　その方が大切に育てる娘へ、この鎧櫃を屆けてくれ！　賴むぞ彌陀六！』
『なに、彌陀六とは!?』
『ハッハハ……、宗清なれば平家の餘類、源氏の大將義經が賴むべき筋合がないわい。』
『むう、成程面白い！　彌陀六めが賴まれて進ぜませう。したが、娘へは不相應な下され物、――一體、內は何でムりまする。鳥渡、改めて見ますぞ！』
　云ふなり、ぐいと、蓋をこじ開ければ、內にひそむは、意外にも、無官の太夫敦盛卿！
途端に、ちら！　と、隙見した藤の方は、びッくり喜んで、
『やあ、そなたは敦盛、懐しや！』
と、驅寄る刹那に蓋ぴッしやり、思はず、快心の笑を洩らした石屋の彌陀六！
『いや、この內には何もない。おお、何もムりませぬぞ。義經どの！　お志、有難く頂戴致しますぞ！　ああ、これで、やッと蟲も落ち付いた。ワッハハ……』と、身をゆすッて喜んでをりましたが、ふと、熊谷夫婦の樣子を見て、氣の毒さうに、
『これ直實どの！　この制札の御布令、一枝を切らば一指を切つての意味を悟ッての御慈悲、忝うお禮致すぞ！』
　さういふ彌陀六の言葉に、相模は、つひにたまりかね、夫に向ッて悲しい問ひ！
『もしあなた！　我が子の死んだも忠義と聞けば、もう諦めてはをりますが、一體、源平と別れて激しく戰ッてをられる最中に、どうして、まあ敦盛さまと小次郎をお取り替へなさッたのでムいませう？』
『ハテ、最前も話した通り、手負ひと僞り、無理に小脇へ抱きかかへ、連れ歸ッたのは敦盛卿、また、平山を追ひ退けて、勇しく進み出たのを呼び返し、むんずと組み敷き、首打ッたのは小次郎さ。知れたことではないか！』
　と、憂ひをかくして、無造作に云ひ切る直實の答に、妻の相

模は、亡き我が子の健氣な最期を思ひやツて、一しほ、涙に暮るのでありました。その心を不憫と思召した義經公、わざと聲も高らかに、

『やあ熊谷！　西國出陣の時が移る。用意はいいか！』

と、うながせば、直實は、ぢりり膝を進めて、意外な願ひ！

七

『ハツ、恐れながら、先達お願ひ申したお暇の一件、何卒、只今お許し下さりませ。直實の姿、かくの通りでムります。』

云ひざま、すツくと立上り、兜を取れば、こは如何に、髪剃り落した入道姿！　義經は、ハタと膝を打ツて、感じ入り、

『おお、道理！　道理！　抑ゝ、武士が功名手柄を望むのも、家の擧を子孫に傳へんが爲ぢや。しかるに、その傳ふべき子を先立てては、軍に從ひ、手柄を擧げる望みもあるまい。こりや、熊谷！　願ひに任せて、暇を仕はすぞ！　堅固に出家を遂げ、亡き小次郎の亡魂を弔ふ傍ら、我が父義朝公や母常磐の回向も、よろしう頼むぞや。』

『ハ、ハツ、恐れ多いお言葉、身にしみて有難く存じます。』

と、云ひながら、立ち上ツた直實、やをら、上帶を引き解いて、鎧を脫げば、下は、白無垢の着付けに墨の袈裟！

折しも、涙ながらに、つと顏を上げた相模は、打ツて變ツた夫の姿に、びツくり仰天！

『やあ、そのお姿は!?』

『ハツハハ……、驚くな女房！　大將の御情により、軍半ばに願ひの通り、御暇を賜はりしは身の本懷！　直實の向ふところは、西方彌陀の國。倅小次郎が先驅け致した九品蓮臺ぢや。某も一つ蓮の緣を結び、今より我が名も蓮生と改めよう。一念彌陀佛卽滅無量罪。十六年も一昔、ああ、夢であツたなあ！』

浮世を棄て、肉緣を去ツた直實は、無量の感慨を覺えて、思はず、ほろり、涙の露を頰に傳はらせました――。

こつちは彌陀六、長居は無益と鎧櫃に連尺をかけ、例の制札

お顏剃りのアトに
美顏ユーマー
美顏ユーマーは最も科學的な乳白美容液で、剃りアトの皮膚を完全に消毒し、皮膚の荒れや剃刀マケを防ぎ、地肌のキメを細かにツヤを增します。入浴洗顏後等にも近代人の間で一等喜ばれてゐるのはこの美顏ユーマーです

を杖に、えんやらやッ！　とかつぎ上げ、

『これ〳〵これ、義經どの！　もし又敦盛、此の世に生き返り、平家の殘黨をかり集め、恩を仇に返す時は、何となさる？』

と皮肉に問へば、義經公は、靜かに笑ひ、

『ハヽヽ……、それこそ、兄頼朝や義經が助かツて、仇を報いたその如く、天運次第に、恨みを受けよう。』

と、鷹揚に答へれば、つゞいて、直實は、更に穩かな悟りの言葉。

『その時は、この熊谷、浮世を棄てた僧らしく、源平兩家の差別なく、互ひに爭ふ修羅道の苦難を救ツて、回向致しませう。』

『むう！　しほらしや熊谷どの！　それにひきかへ、この彌陀六は、機を見て、また宗清の昔に立ち歸り、敦盛さまや姫君を守り立て、平家再興の旗を擧げるぞ！』

『某は心も墨染に代へ、黑谷の法然上人を師匠に頼み、一念こめて敎を受けませう。我が君には益々御安泰のほど、ひとへに祈り上げまする。さらば、これにて、お暇を！』

と、立ちかかる直實を、涙ながらに見送る妻の相模に藤の方！

此の時、義經公は、熊谷を呼びとめ、小次郎の死首をかざしながら、

『こりや直實！　この首は、須磨寺に葬り、末世末代まで、敦盛の首として、供養をさせるぞ。心得ておけ！』

と、あくまで、行き屆いた御大將の計ひに、直實は、ただ恐れ入るばかりでした。

――やがて、ゆらめく陣屋の灯かげに、互ひに見交はす顏と顏！　さすがに、いづれも、名殘りは盡きぬ樣子です。

『武藏坊の制札も、』
『花を惜しめど花よりも、』
『惜しき子を捨て、武士を捨て、』
『住み所さへ定めなき、』
『有爲轉變の――』
『世の中ぢやなあ。』

と、きッぱり渡る割り臺詞。――折から、音もなく、定式幕は引かれ、幕外を、悟りに入つた熊谷が、悠々引込みにかかるのでムいます。

一代の巨匠並木宗輔の絶筆にかかはる『一谷嫩軍記』熊谷陣屋の場、先づ此の邊でお別れ致します。

（をはり）

美しい色刷の繪が五百枚、片假名で讀める面白くて敎訓的な物語百篇、お子樣方がラヂオでお馴染の村岡花子先生の名著「日本イソップ繪物語」は、全國に非常な評判、學校の先生方にも大好評であります。お子弟の方々へ是非一冊はお與へ下さい。（定價一圓三十錢送料十二錢本社發行）

読書界を風靡せる

鶴見祐輔先生の二大名小説

『母』『子』

二著共に鶴見先生が渾身の熱誠を傾けて描かれたる日本に始めての大理想小説！ 發刊以來凄じい大歡迎を受け、重版又重版、『母』の如きは遂に四百七十五版を突破して出版界空前の大賣行きです。

興味津々！ 感激あり希望あり理想あり

眞に新時代の大道を示せる大理想小説

未だお讀みにならぬ方は是非お求め下さい。

全國書店にあります。

母 定價二圓 送料十二錢

子 定價一圓八十錢 送料十四錢

本社發行

（書店に品切の際は直接本社に御注文下さい。）

子供にも大人にも面白い！ 家庭絶好の讀物

大評判の『少年講談』

お家庭に、ゼヒ一揃ひお備へ下さい！

- 里見八犬傳
- 寛永三馬術
- 岩見重太郎
- 彌次喜多道中記
- 山中鹿之助
- 由井正雪
- 塙團右衛門
- 堀部安兵衛
- 孫悟空
- 笹野權三郎
- 左甚五郎
- 近藤勇
- 塚原卜傳

一册でも二册でも、お好きなのが自由に買へます。書店で賣切れの時は、直接本社へ申込んで下さい。

定價一册各八十錢　送料一册各十二錢　本社發行

笑話

魅力（チャーム）

―あの人、ほんとにチャームされちやふわ。

―アーラ、あんなハゲアタマ、どこにチャームされるの？

―だつてお聞きなさいよ。十萬圓の生命保險に入つてるんですつてサ。

入齒（いれば）

祖父―ハネ子、またそんな髪の毛をちゞらして、きゝわけのない子ぢや、人間は何でも自然のままがいゝ樣に出來てるんぢや。

ハネ子―あーら、だつてお祖父さんの口ずゐぶん人工的ね、總入齒でせう？

職業本能

軍醫『フン、背中の骨がすつかり折れてゐる。一體此の男はどうして怪我をしたのか？』

負傷者を運んで來た兵士『ハイッ、ノロノ二等兵は、入營前自動車の運轉手をしてゐたんであります。それで馬が動かなくなつたので馬の修繕をしようと腹の下へ這ひ込んだんであります。つまりそれで馬に踏まれたんであります。』

？？？

―ハ、ア、服を新調したナ。よく似合ふよ。すばらしく上手な洋服屋だね。僕もつくるから敎へてお呉れよ。

―よし、敎へてやる。そのかはりことわつて置くが、僕のことを洋服屋の奴に敎へちや不可んぜ。

さうと知つたら

母親『昨夜戸棚のお菓子鉢へお菓子を二つ殘して置いた筈なのに、今朝一つしかないんだよ。まさか鼠が引きはしまいし、太郎や、お前知つてるんだらう？』

太郎『えゝ、だつて眞つ暗で、一つしか見付からなかつたんだもの。』

飛行機

墜落飛行機を搜索に來た人達が空氣銃を持つた少年と逢つた。

——この邊に飛行機が落ちやしなかつたか、君は知らんか？

——向ふの森へいま落ちたよ。をぢさん、でも僕射ちやしないよ。僕すゞめ狙つただけなんだよ。

獨身主義

——僕は女が大嫌ひだから、一生結婚しない心算です。

——あら、私も男なんか大嫌ひ、一生獨身で通しますわ。

——おや、貴女も……こりや不思議だ、そんなら氣の合つた同志で一そ結婚しませうか。

賣言葉に買言葉

赤鼻夫人『まあ、奥樣、五年お會ひしない内に隨分お老けになりましたこと。本當に見違へる程でございますわ。』

骨川夫人『全くお互ひ樣にね、私も五年前にお締めになつてゐたその帶を見て、赤鼻樣の奥樣だと知つた程でございますからね。』

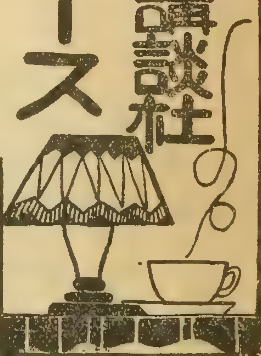
おのれやれ！

——ナポレオンでさへ、その人の前へ出たらいつも必ず帽子を脱いだ男が居る。誰だか知つてゐるかい？

——ホウ、知らん、よつぽど偉い男と見えるね。

——なーに、ナポレオンのお抱への理髪師さ。

大日本雄辯會講談社ニュース



意氣冲天！野間會の大活躍

曩に野間會が、新興日本の建設と云ふ崇高なる理想の下に、その主義信條を宣揚して滿天下に呼號するや、全國津々浦々は勿論、遠く海外よりも至誠愛國に燃ゆる老若男女の壓倒的共鳴を博し、連日應接に遑なき盛況であります。

野間會が一躍大修養團體として堂々現代知名の人士を網羅し、專ら學術、思想、修養の大講演會、慰安娯樂の觀劇會を始め、各種の文化事業を企畫し、着々その大理想實現に精進しつゝあるのは、極東日本の一大偉觀であります。

更に意氣冲天の野間會は、會員相互の親睦を計る機關として、全國各地に支部、分會、班を新設して、愈々目的貫徹の大運動を起し今や名實共に比類なき團體として國民的大歡迎をうけてをります。

殊に毎月發行する機關誌『報國』は、修養、娯樂の大册で、内容悉く一流大家の名篇玉稿揃ひ、特に會員に限り誌代一ヶ年僅か五十錢の購讀料で配布してをります。

入會希望者は東京市小石川區諏訪町五六野間會本部宛、入會金五十錢、雜誌『報國』一ヶ年購讀料五十錢、計一圓送金すれば即座に會員になれ『報國』が送附されます。

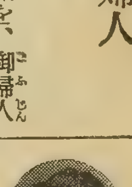
童話と講演　全國巡回婦人講演會

兒童には面白い童話を、御婦人方には有益な講演をして、各地に非常な感銘を與へ、盛況を博してをります本社講演部講師安倍季雄先生の、宮城縣下に於ける全國巡回婦人講演會の日程豫定は左記の通りです。貴地開催の折は、精々御誘合ひの上御來聽下さい。

五月八日　**白石町**、九日より十六日まで（十四日だけ休み）　**仙臺市**、十七日、十八日　**石巻市**、十九日　**涌谷町**、二十日　**古川町**　二十二日　**若柳町**、

清新潑剌の氣漲る キングレコード

バリトンの名歌手を迎ふ



作詩陣に西條八十氏、作曲陣に田村しげる、竹岡信幸の兩氏、聲樂陣に渡邊光子、彌生ひばりの兩孃を迎へて、意氣軒昂のキングレコードでは、こゝに又若きバリトンの名歌手東海林太郎氏を加へ、一段の輝きを添ふることになりました。來る六月新譜によつて華々しくデヴューすべく、目下着々準備中です。

流行歌は未來花時代

『未來花の歌』『千夜子の歌』は果然大當り、物凄い賣行きで大變な流行振り、流行歌は未來花時代の盛況であります。

椿咲く島の映畫化

發賣以來劃期的の大賣行大流行を示した椿咲く島は、早くも各映畫會社の注目する所となり、その獨占權爭奪戰に火花を散らしたが結局河合映畫との諒解なり、小澤得二氏監督、琴糸路孃主演で、椿咲く樂土大島を背景に、小唄映畫椿咲く島を完成、四月下旬封切の豫定であります。

三原は晴れて 大好評

新進竹岡信幸氏の作曲になる三原は晴れては、魂に喰入る哀調を帶び、聞けば聞く程胸に迫るものある絶妙の三原山抒情曲です。その他五月新譜は何れも傑作揃ひ。

のらくろについて急告

のらくろの商標及び意匠は既に登録してあります。販賣等の目的で文房具、玩具、菓子、樂器、印刷物、メダル、藥品等に、のらくろを無斷で使用することは嚴禁してあります。

尚、のらくろは、横濱シネマ商會の手で映畫化されました。從つて同商會が一手に製作配給する契約になつてゐますから、他へは絶對にお許し出來ぬことになりました。また單行本『のらくろ上等兵』は、素晴しい評判で既に百三十版、出版界驚異の的となつてをります。（定價一圓　本社發行）

又々本社單行本は 飛び抜けた賣行！

先般東京出版協會の圖書通信大市會では、本社出版の單行本は冊數に於ても、賣上高に於ても、飛び抜けて素晴しい賣行でした。如何に本社の出版物が社會に歡迎されてゐるかに、事業界では驚嘆してをられます。之も偏に皆様方の御後援の賜物と深謝致します。

映畫にレコードに 大人氣の『未來花』 素晴しい賣行！

キングに連載されて大好評を博した菊池寛先生の『未來花』は姉妹篇『良人ある人々』と合せて一冊に纏められ、華々しく賣出されましたところ、流石に菊池寛先生の傑作で、然も、普通單行本二冊分の内容で定價も至廉と云ふので大變な賣行です。

まだ御覽にならない方々に是非お奬めします。

（定價一圓五十錢　本社發行）

婦人子供博に『どりこの』喫茶店新設

連日滿員の大盛況です

既報の如く、本社が萬國婦人子供博覽會に特設しました上野會場の九大雜誌報國塔、芝會場のどりこの噴水塔、のらくろ不思議館等、何れも素晴しい出來榮え、非常な好評で、入場する人々の目を瞠らせ、その人氣は期せずしてこれ等に集中すると云つた有様であります。

所で更に、各方面の熱望により上野池の端會場に、上品で氣持のよい『どりこの喫茶店』を特設し、入場客の慰安をはかることに致しました。

こゝでは、どりこの應用の、色々の美味しい飲物をはじめ、輕いお食事を各種取揃へてをりますが飲物や食物に不便な會場のことゝて、非常な歡迎をうけ、連日盛況を呈して居ります。御入場の折は是非一度お立寄り下さるやうお待ちしてをります。

地に

秀才の豊彦君と堅固君とは、美女智惠子さんを必死に爭ふが、當の美女が『何方か早く龍の首を獲た方に』といふので、成功の象徴である其『龍の首』を取るべく、夫々早大と一高で一心に努めてゐる。所で兩秀才の中學時代の友人に小泉君といふのがあり、鈍才の上に其父親が因業だつた爲二人に輕視されてゐたが、一夏休暇で歸省して見ると、これが父を亡つて立派な後繼の主人となり、色々亡父の惡評一掃に働くので兩秀才は感心する。すると或日此小泉君が『折入つて一身上の相談がある』といつて、二人を料亭に誘ひに來た。兩秀才は肯いて一緒に行く事にする。

（前號迄の梗概）

爪跡を殘すもの

佐々木邦
細木原青起畫

一身上の相談

夕刻、小泉君が俥を三臺つれて迎へに來たには、豐彥君も堅固君も少し驚いた。しかし小泉君はもう旦那さまだ。村一番をもつて任じてゐる。成程、景氣の好いところを見せつける積りだらうと思つて、二人はその爲すがまゝに委せることにした。俥屋は皆村のものだつた。

走り出してから間もなく、小泉君の俥屋が、

『旦那、今晩は御愉快でございますか？』

と話しかけた。小泉君は先頭だつた。

『うむ。懇親會だ。』

『結構でございます。』

『佐藤君達は始終東京へ行つてゐるから、滅多に顏が合はない。』

『へい。』

『暑いなあ、相變らず。おい、未だ早いんだから、急ぐことはないよ。』

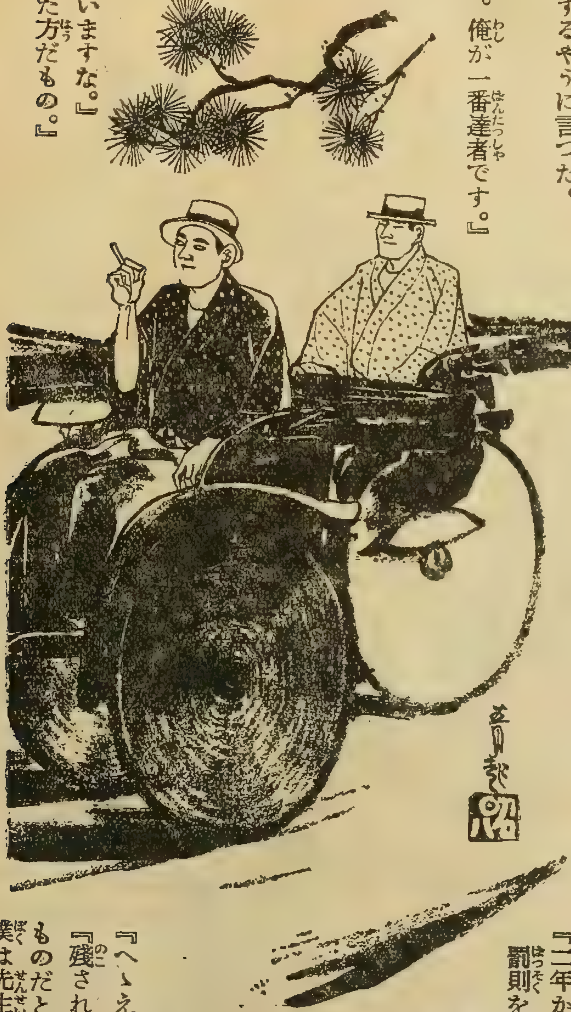
と小泉君は俥屋を犒つた。

『へい〳〵。旦那。』

『何だい？』

『旦那は今に藤島の銀行へお勤めになるつて話ですが、本當でございますか？』

『誰から聞いたね？』
『専ら評判でございますよ。俺は當てにしてゐます。』
『何を？』
『旦那の藤島通ひが始まつたら、常雇ひにして戴きます。』
『成程。考へてゐるね。』
『今からお願ひ申上げて置きますよ。』
『よし〳〵。』
『常雇ひなら、俺だよ。』
と堅固君の俥屋が主張するやうに言つた。
『…………』
『この中で俺が一番若い。俺が一番達者です。』
『若い筈だよ。勝ちやんは學校で僕と一緒だつたからね。』
と小泉君が振り返つた。
『へえ。』
『君の方が二年上だつたけれど。』
『よく覺えていらつしやいますな。』
『學校の歸りに泣かされた方だもの。』
『まさか。』



『ハッハヽヽ。』
『これで極くおとなしい方でした。』
『いや、暴れものだつたぜ。』
『今でもよく喧嘩をしますよ。』
と豐彦君の俥屋が素つぱぬいた。豐彦君は殿後を勤めてゐた。
『勝ちやんにはお世話になつてゐる。』
と小泉君が續けた。
『何でございますか？』
『二年か三年の時だつたよ。僕は罰則を食つて殘されたんだ。教室の窓からションボリと運動場を眺めてゐたら、君が通りかゝつた。「何うしたんだ？」と訊く。殘されたと答へた。「馬鹿だなあ。智慧がない。」と君は言つたよ。』
『へゝえ。』
『殘された時はお腹が痛いと言ふものだと教へてくれたよ。そこで僕は先生のところへ行つて、腹を

捩るやうにして見せた。「何うしました?」「お腹が痛いんです。」「それぢや早くお歸り。」つて次第さ。』

『ハツハヽヽ。』

『君のお蔭で、假病つてことを覺えた。以來今日まで調法してゐる。君は一種の恩人だ。』

『何うせ好いことは教へませんが、そんなことがありましたかな?』

と勝ちやんはもう忘れてゐるやうだつた。

三臺の俥は中の松原へ差しかゝつた。

『君、渡邊村長はこゝで俥から落ちて死んだんだよ。』

と小泉君が後ろの俥の堅固君に紹介した。

『うむ。然うだつてね。』

『村の俥だつたといふから、或はこの中に村長を殺したものがゐるかも知れない。』

『そんなものはゐませんが、實は俺でございますよ。』

と小泉君の俥屋が言つた。

『ゐないけれど俺だつてのは矛盾してゐるぢやないか?』

『何もしちやゐません。』

『君が殺したのか?』

『滅相なことを仰有いますな。』

『しかし君の俥から落ちて死んだんだらう?』

『違ひます。渡邊村長は大旦那と同じことで卒中でした。卒中で死んだものですから、俥から落ちたんでございます。』

『成程。』

『それを俺が落して殺したやうに言ふものがあるから、實もつて困り切ります。』

『何んな具合だつたね?』

『突如スル〳〵つと落ちて來たんです。俺が受け止めた時には、口をパク〳〵やる丈けで、もう性がありません。何しろ人通りのない時でしたから、途方にくれました。これはお家よりも病院へと思つて、梶棒を上げましたが、もういけなかつたやうです。丁度この邊でした。』

『南無阿彌陀佛。この俥かい?』

『へい。』

『厭だよ、もう常雇ひは。緣起が惡い。』

『やれ〳〵。渡邊さんつて人は何處までも俺に迷惑をかけます。何の因果でございませうか？』

と俥屋は歎息した。

藤島に着くと、三人は大國屋といふ大きな料理屋へ乘り込んだ。豐彦君と堅固君は初めての經驗だつたが、小泉君は卒業以來修業を積んでゐる。女中とも顏馴染みになつてゐて、

『おい。このお客さん達は何よりもお山がお好きだから、見晴らしの好いところを。』

と慣れ切つた態度だつた。その案内に從ひながら、

『素晴らしく大きな階段だね。』

と豐彦君が囁いた。

『うむ。』

と堅固君が頷いた。東京なら平氣だらうが、鄉里では何となく落ちつかない。中學時代には斯ういふところへ上り込むと放校處分を受けることになつてゐた。それが未だ頭に沁みてゐるのだつた。

三人は二階の大廣間へ通された。

『こゝかい？　だゝつ廣い。』

と小泉君が言つた。

『でも見晴らしはこゝが一番でございます。』

『成程。お山が眞正面だ。』

『會がございませんから、空いてゐます。』

『しかしこゝぢや見通しで困る。些つと粹を利かせるものだよ。』

『まあ。オホヽヽ。それでは此方へ。』

と女中は次の間へ案内した。そこも見晴らしが好かつた。しかし間もなく日が暮れる。お山は薄紫に霞んでゐた。

一風呂浴びて汗を流して來たら、支度が出來てゐた。小泉君は元來飲む。先年怪我をして入院中もビールを飲みたがつて問題を起したくらゐだから、昨今は當然制限を加へない。堅固君も決して嫌ひの方でない。豐彦君丈けは下戶だつた。

『豐彦君、何うだね？』

と小泉君が度々薦めた。

『駄目だよ、僕は。』

『一杯ぐらゐ宜いだらう？』

『飲むと頭痛がするんだ。』

『しかし見てゐるばかりぢや氣の毒だな。』

『いや、食つてゐる。』

と豐彦君は箸を運んで見せた。

『退屈だらう？』

『何あに。』

『今に音樂が來る。』

『音樂？』

『藝者だよ。』

『そんなものは要らない。』

『堅固君は何うだい？』

『敢へて辭さない。』
『これは話せる。』
『ハツハヽヽ。』
と堅固君は一向驚かない。
『それよりも君、一體何だい？ 相談といふのは。』
と豐彥君が訊いた。
『後からゆつくり君達の勸辨を借りる。』
『醉つ拂つてしまふと駄目だよ。』
『一身上の問題で話が込み入つてゐるんだ。』
『それなら尙更のことぢやないか？』
『まあ〳〵、一騷ぎやつてからさ。』
と小泉君は落ちついてゐる。
『親父の殘した財產を何う使はうかつてのかい？』
と堅固君も用件を問題にした。
『うむ。それもある。』
『そんなことなら勸辨も何も要らない。僕が將來代議士運動で使つてやる。』
『しかし君は外交官だらう？』
『外交官だつて金が要る。後楯がないと成功しないさうだ。』
『何方にしても、及ばずながら、兵糧方を勤めるよ。豐彥君は矢つ張り文學かい？』
『うむ。』
『文學者は貧乏をするに定つてゐるから、これも僕が將來兵糧方を勤める。』
『有難い次第だね。』
と豐彥君は空嘯いた。折から堅固君の首が頻りに動いた。見ると電光のやうな目くばせをしてゐた。豐彥君はその意味が分らなくて小首を傾げた。
『熱ツ！』
と小泉君が忽ち右の手を擧げた。
『失敬々々。』
『ひどい目に會はせやがる。』
『つい觸つたんだよ。失敬した。』
と堅固君があやまつた。煙草の火が小泉君の手の甲に觸つたのだつた。堅固君は又目くばせをした。豐彥君は又首を傾げた。
間もなく小泉君が、
『おい。何をするんだ？』
と言つて、腦天から盃を取つた。堅固君が載せたのだつた。
『ハツハヽヽ。』
『いたづらばかりするなよ。』
『おれは少し醉つ拂つた。』
と堅固君は腕を組んで、又々意味深長な目くばせをした。再三だつたから、豐彥君は、
『おい。何だい？』

と露骨に訊いた。

『何でもないよ。』

そこへ藝者が三名入つて來て、額で三人を見上げながらお辭儀をした。

『晩かつたぢやないか?』

と小泉君は待ち兼ねてゐたのだつた。

『濟みません。でも早い方よ、これくらゐなら。』

と年嵩の藝者が代表して答へた。

『普段着で來いと言つてある。』

『然うは參りませんわ。賣物ですから。』

『理窟を言つてゐないでお酌をしろ。』

『はい。』

『お客さまからだよ。』

『何うも失禮。』

三人の藝者は三人の間に席を占めた。

『おい。この先生に飲ませればお手柄だよ。』

と小泉君は豐彦君を指さした。

『先生。』

『駄目だよ。』

『そんなことを仰有らないで。』

『私、助けて上げますから。』

と右左から攻めかけられて、豐彦君は仕方なしに一杯受けた。

『このお方、先生?』

と一人の藝者が小泉君に訊いた。

『うむ。學者だ。』

『道理で四角張つてゐるわ。あら、失禮。』

『お前達が圓くしてやりな。』

『先生、もうお一つ。』
『駄目々々。』
と豐彦君は手を振つた。
『僕は何に見える？』
と堅固君が自分を問題にした。
『さうねえ。矢つ張り……』
『四角張つてゐるかい？』
『それほどでもありませんけれど。』
と藝者は香を嗅ぐ眞似をして、
『先生よ、矢つ張り。』
『當つた。』
『白墨臭いわ。』
『爭はれないものだよ。何處の先生だい？』
『中學校よ。』
『大當り。』
と堅固君は中等教員に成り澄ます。
『藤井マスキユラーさんといつて、英語の先生だ。』
と小泉君は思ひつきをそのまゝ紹介した。本當の藤井先生こそ迷惑だけれど、子弟といふものは先生の感化が身に沁みてゐると、咄嗟の場合に名前を利用することがある。
『まあ、西洋人みたいなお名前ね。』
『うむ。それだから英語が出來る。』

『何キユラーさん？』
『藤井マスキユラーさんさ。家は八軒町だから　今度遊びに行つて御覽。奥さんに食ひつかれる。』

『オホヽヽ。』
『ヘッハヽヽ。』
『怖いわ。君子は危きに近寄らず。』
『好いことを知つてゐる。』
『君子よ、私。それですから君子。』
『成程。これは一本參つた。』
『それぢやお酌。』
『僕よりもそのマスキユラー先生だ。ウンと飮ましておくれ。』
『先生。』
『よし。』
と堅固君は強い。
『それから其方の先生。』
『僕は駄目だ。』
と豐彦君は又手を振つたが、強ひられて、二杯目を傾けた。
小泉君は一方藝者達に諢ひ、もう一方斡旋に努めながら、大分飮んだ後、
『堅固君、君は藤島音頭つてのを知つてゐるかい？』
と言つて、盃を差した。
『知らない。』
『去年から出來たんだよ。この邊の名所が讀み込んである。僕が一つ踊つて見せうか？』
『驚いたね、これは。』
『然う馬鹿にしたものぢやない。』
『いや違ふ。急速の發展に敬服してゐるんだよ。やつて見給へ。』
と堅固君は融通が利く。
『よし。支度をして來る。』
と小泉君は立つて、ヨロ〳〵しながら階下へ下りた。藝者が二人ついて行つた。
豐彦君は又強ひられて飮んだ爲め、醉つて苦しかつた。これも立つて、緣側へ出た。
『おい。何うした？』
と堅固君が案じて續いた。
『風に吹かれてゐると心持が好い。』
『醉つたね。』
『うむ。』
『頭痛がするのかい？』
『少し。』
『もう飮まない方が宜い。僕も醉つた。』
『ところで先刻のは何だい？』
と豐彦君は目くばせが疑問だつた。
『君は小泉君の擧動を不審に思はないか？』
『さあ。』
『僕達をこゝへ引つ張つて來たのには魂膽があるらしい。』
『何の相談だらう？』

『油断がならないよ。』
と堅固君はもう少し話したかつたが、藝者が立つて來て邪魔を入れた。
『藤島音頭、始まり〳〵！』
と小泉君が褌一つに羽織を被つて、拍子木を叩きながら現れた。裸踊りだ。藝者が三味線を弾いて歌ひ出した。見物の豐彦君と堅固君は、
『馬鹿だな。此奴は矢つ張り。』
『これ丈けの人間だよ。』
『人生も斯う煩悶がないと樂だらうな。』
『この分ぢや早晩身上を使つてしまふね。』
『何て態だらう？』
『親父が見たら泣くだらうぜ。好い罰當りだ。』
と評し合つた。しかし三味線の音が打ち消すから、一向通じない。
小泉君は踊り終つて、
『僕には斯ういふ一面があるんだよ。ハツハヽヽ。』
と得意のやうだつた。
『手に入つたものだ。感心した。』
と堅固君が褒めた。
『もう一遍やらうか？』
『いや、もう晩い。ソロ〳〵十時だ。』
『ゆつくりで宜からう。何なら泊つて行かう。』
『そんなことは出來ない。豐彦君は醉つて苦しいんだ。』
『少し寢ちや何うだ？　豐彦君。』
『いや、大したことはないんだけれど、何なら僕はもう失敬したい。外へ出て風に吹かれゝば直るんだから。』
と豐彦君は眞赤になつてゐた。
『困つたな。相談があるんだけれど。』
『それで來たんだから、我慢して待つてゐるんだよ。』
『實は折り入つて、君達二人の智慧を借りたいんだ。』
『何だい？　一體。』
『それぢや一つ人拂ひをして話さう。おい〳〵、手の鳴るまで彼方へ行つてゐておくれ。』
と小泉君は藝者達を退けた。
『おい。小泉君。』
と堅固君が呼んだ。
『何だい？』
『君は今僕達の智慧を借りたいと言つたらう？』
『うむ。』
『それなら少し禮儀を守れ。裸かで何だ？』
『惡かつた。』
と小泉君は手を鳴らして、浴衣を取り寄せた。それを着て、かしこまつて
『實は兩君、僕は困つたことが起つてゐるんだ。君達二人に助けて貰

ひたい。』

　と頭を下げた。

『ふうむ。』

　と受けて、堅固君は豐彦君の顏を見た。

『結婚問題が起つてゐる。困るんだよ。』

『些つとも困ることはないぢやないか？　君は僕達よりも年上だし、生活の心配もない。』

『手つ取り早いところを言つてしまふがね、君達、相手は青木の智惠子さんだ。』

『え？』

　と豐彦君が目を見張つた。

『定つたのか？』

　と堅固君が突つ込むやうに訊いた。

『いや、勸めるものがあるんだ。』

『誰だい？』

『佃さんだ。』

『ふうむ。』

『丁度好い釣合だからつて、頻りに言つてくれるんだが、僕は君達の關係を知つてゐる。』

『成程。』

『君達は二人とも智惠子さんを貰ひたいんだらう？　三四年前も然うだつたから、今でも矢つ張り然うだらうと僕は思つてゐる。』

『うむ。豐彦君は知らないが、僕は然うだよ。』

『僕もあの頃と變らない。君が智惠子さんを貰ふつてことには何處までも反對だ。』

　と豐彦君は力強く言つた。

『それで困るんだよ。』

『…………』

『何うだらうね？　妥協の餘地はなからうか？』

『ないよ。』

　と二人は異口同音だつた。

『しかし君達は青木さんへ申込んであるのかい？』

『…………』

『先口で話が纏まつてゐるのなら仕方がないが、青木さんだつて、一人の娘を君達二人にくれる次第には行かないから、僕はあの事件は矢つ張りあのまゝになつてゐるんだらうと思つてゐる。』

『あのまゝだよ。』

　と堅固君が答へた。

『そこで一つ考へて貰ひたいんだ。僕があの頃も始終言つた通り、君達は何方が智惠子さんを貰つても、片一方が失望する。それも君達のやうな生一本な性格だと、自暴になつてしまつて、折角の天分を駄目にする心配がある。』

『…………』

『智惠子さんを貰つた方はトン〱拍子で出世するだらうけれど、貰へなかつた方は一生の貧乏鬮だよ。或は厭世自殺をするやうなことに

ならないとも限らない。』

『…………』

『從兄弟同志が血で血を洗ふんだ。僕は頭の惡い人間だから、君達に忠告の出來る柄ぢやないけれど、これ丈けのことは、君達をよく知つてゐるから、今から保證して置く。目に見えてゐるんだもの。』

『…………』

『何うだね？ 世間に女は多いんだ。殊に君達は東京へ出てゐる。東京には智惠子さんよりも綺麗な人が幾らもある。僕と違つて君達のやうな秀才なら、華族や百萬長者の令孃でも貰へるんだ。』

『君は僕達をお爲めごかしにして、智惠子さんを横取りする積りか？』

と豐彦君が睨んだ。

『横取りの何のつて次第ぢやない。緣談が纏まつて、智惠子さんが僕のところへ來るやうになれば、仕方がないぢやないか？』

『智惠子さんは君のところへ行くまい。』

『そこは緣だ。』

『緣がないよ。』

『僕はあると思つてゐる。智惠子さんが馬力に轢き殺されるところを助けたのは僕だよ。君でもない。堅固君でもない。』

『それは分つてゐるけれど。』

『深い緣ぢやないか？ 僕はその爲め不具になつてしまつた。そこを考へてくれたら、靑木さんだつて智惠子さんだつて厭と言へた義理ぢやなからうと思ふ。今でもこの通りだ。』

と言ひながら、小泉君は右の腕を漸く肩と並行するまで擧げて、

『これから上へは行かないんだ。あゝ、痛い。』

と顏を蹙めた。

『狸！』

と堅固君が一喝した。

『何だ？』

『そんなことだらうと思つて、先刻から試してゐたんだ。』

『うむ？』

『先刻僕が煙草の火を押つつけたら、君は右の手を高く擧げたぢやないか？』

『…………』

『腦天へ盃を載せたら、右の手で取つたよ。』

『…………』

『成程。』

と豐彦君は初めて目くばせの意味が分つて、堅固君を大いに賴もしく感じた。

『下らない馬鹿踊りを神妙に見物したのも腕が何の邊まで擧がるかと思つたからだよ。』

『…………』

『おい、何うだい？』

『堅固君、恐れ入つた。』

と小泉君は問題の右の手で頭を掻いた。

『ハツハ、、、。』

『狸だな、此奴は。』

と豐彦君は呆れた。

『參つたよ。ハツハ、、、。』

『もう疾うに直つてゐるんだらう？』

と堅固君は少し氣の毒になつたのか、見舞ふやうに訊いた。

『未だ悉皆とは行かないが、もう不自由はない。』

『見給へ。』

『しかし直つたにしても、智惠子さんを助けたのは事實だらう？』

『うむ。それは認める。』

『それだから緣がある。何うだね？ その邊を考へて、何とか妥協して貰へないか？ もう狸はやらない。これから先はザツクバランの懇談だ。』

『僕は手を引かないよ。』

『僕も引かない。君が貰へるものなら、勝手に貰ひ給へ。』

と豐彦君も意思を明瞭にした。

『然う頭から斷られてしまつたんぢや取りつく島がない。そんなことなら何も君達の智慧を借りるまでもないんだけれど。』

『兎に角、駄目だ。僕は受けつけない。』

『しかしそこがお互の間柄ぢやないか？ 僕は貰へる自信があるんだけれど、君達の理解を得ないと氣が濟まない。君達とは竹馬の友だ。これから先も變らない。一生お世話になる積りでゐるんだから、勝手にしろと突つ放されたんぢや困る。』

『…………』

『これが君なら君一人、堅固君なら堅固君一人の問題なら　僕は決して斯ういふお願ひをしない。しかし君達は二人とも貰ひたいんだから、出來ない相談だ。何方か一人、手傷を負ふに定つてゐる。お爲めごかしぢやないけれど、僕は何方が失望して自暴自棄に陷るのを見たくないんだ。』

と、この邊、小泉君の言ふところは充分筋が立つてゐる。

『…………』

『世間は廣い。君達は廣い世間へ出て行つて、何んな出世でも出來る身體だ。しかし僕は違ふ。萬事諦めてゐるんだから、同情して、手を引いてくれ給へ。』

『………』

『何も言はないで委してくれ。それ丈けのことは屹度するから。』

『何をするんだ?』

と堅固君が訊いた。

『先刻も言つた通り、君達の兵糧方を勤める。』

『本氣かい? それは。』

『うむ。誠心誠意だ。今から直ぐ引受けても宜い。』

『馬鹿野郎!』

『何だい?』

『親讓りはやめろ。僕達に買收が利くと思つてゐるのか?』

『買收ぢやない。恩返しの積りだ。』

『打ん撲るぜ。』

『分らないんだな、君は。豐彦君、君は何うだ?』

『堅固君と同じことだよ。』

『それぢや何うすれば宜いんだらう?』

『何うも仕樣はない。僕達の競爭の中へ君が割り込んだんだ。君は買收を試みたけれど、失敗に終つた。それ以上でもそれ以下でもない。』

と豐彦君は有りのまゝを說明した。

『よし。堅固君も然うか?』

『その通りだ。』

『これ丈け言つて置けば、出し拔いたことにはならない。智惠子さんは僕が貰つて見せる。』

『貰へるものなら貰ひ給へ。』

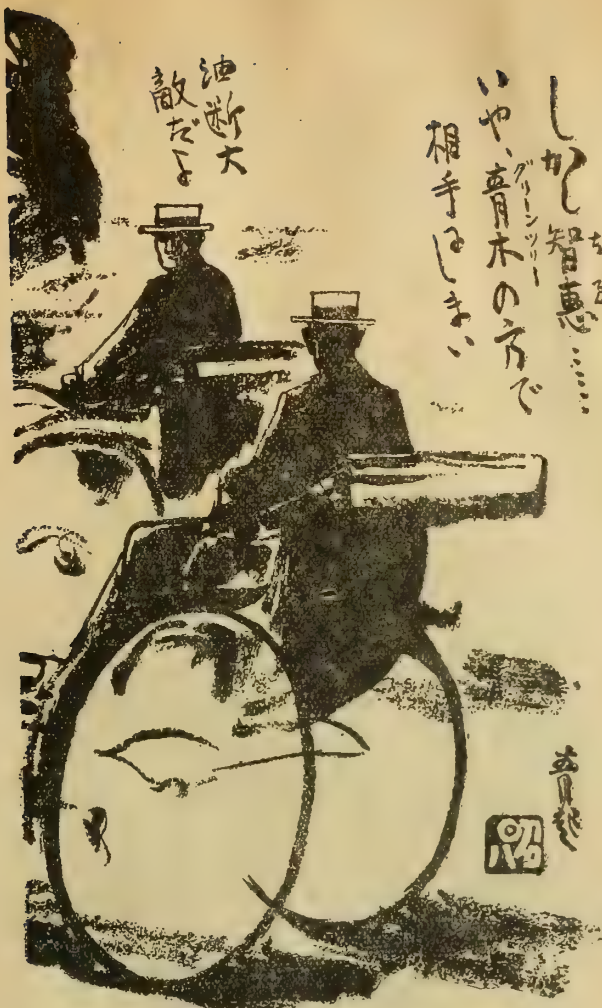
『話はこの春親父の亡くなる前から始まつてゐるんだが、一應君達の理解を得ようと思つて、待つてゐたんだ。』

『ふうむ。』

『君達も始終言つてゐる通り、競爭は競爭、友情は友情だ。宜からう

ね？』
『宜いとも。』
『これで話が定つた。一杯やらう。おや〳〵、悉皆冷めてゐる。』
と呟いて、小泉君は手を鳴らした。
豐彦君と堅固君は間もなく小泉君を殘して辭し去つた。又俥だつた。殊に豐彦君のは、小泉君の常雇ひを志望した老車夫だつたから、差當りの問題については語ることを憚かつた。しかし二人とも同じやうな屈託で頭の中が忙しかつた。村へ入つてから、

『堅固君。』
と豐彦君が前の俥を呼びかけた。
『うむ？』
『君は矢つ張り頭が好いよ。』
『何故？』
『狸の目的が初めから分つてゐた。』
『一身上の問題と言つたから、直觀的に氣がついたんだ。それだから腕が直つてゐるか何うか試したんだよ。』
『何ういふ意味だい？』
『不具の人間に鐵拳制裁を加へる次第には行かない。しかし、あの分なら自由自在だ。遠慮は要らない。』
『やるのかい？』
『機會を逸したよ。目語が通じないんだもの。』
『うむ。』
『僕は狸が買收の申出をした時、もう少しでやるところだつた。』
『成程。思ひ當る。』
『君、狸はあの椿事以來豫定の行動だつたんだよ。』
『然うらしい。』



『それだから案外話が進んでゐるのかも知れないよ。』
『しかし智惠、……いや、青木の方で相手にしまい。』
「油斷大敵だよ、斯ういふことは。』
『うむ。』
『君、明日の朝相談に行くよ。』
と堅固君は態〻振り返つた。
『待つてゐる。』
と豐彦君は頷いて見せた。片割れ月が高くかゝつて、可なり明るかつた。

『場合によつては、青木へ押しかけて、事實を確める必要がある。』
『あるとも。』
『何しろ例の當分が馬鹿に長くなつてゐるんだから。』
『今度は未だ會はないのかい？』
『會はない。』
『本當か？』
『念を入れるなよ。』
『元來小泉と青木は氷炭相容れないんだから、豫定の行動にしても、大したことはないと思ふんだけれど。』
『それが油斷だよ。間に入つてゐる人間がある。』
『成程。』
『此奴が元來お互のところの敵で、小泉の同類だぜ。』
『うむ。』
『慾得づくなら何でもする。』
『始末が惡いな。』
『君、失敬する。明日の朝行くよ。』
と堅固君は自分の家の門前に着いた。
豐彦君はその前日東京から歸つたばかりだつた。落ちつき次第智惠子さんの動靜を探る積りでゐたところ、早速問題に行き當つてしまつ

た。智惠子さんは二つ年下だ。此方が二十二だから、先方は二十になつてゐる。ソロ〳〵緣談を持ちかけるものゝあることは當然免れない。しかし人もあらうに、小泉君が三年間その計畫をしてゐたと聞いては驚かざるを得なかつた。智惠子さんをクレオパトラだと言つて忠告した小泉君だ。或は既にあの頃から豫定の行動だつたのかも知れない。堅固君は然う睨んでゐる。制裁云々とはその意味だ。三四年間此方を籠絡してゐたのだ。大奸だな、奴。制裁の値打は充分ある。

『詫證文！』

　と豐彦君は晝間のことを思ひ浮べて、覺えず呟いた。

『渡すんぢやなかつた。畜生！』

『若旦那、もうお家でございますよ。』

　と折から俥屋が現實に呼び戻してくれた。

『晩かつたのね。』

　とお母さんが迎へた。もう十二時だつた。

『濟みません。』

『堅固ちやんは？』

『一緒に歸りました。』

『小泉さんも？』

『いや、小泉君は醉つ拂つてしまつて、動けないんです。』

『まあ〳〵。』

『待つてゐても仕方がないから置いて來ました。』

　と豐彦君は持て餘したやうに言つて、茶の間へ通つたら、お父さんが未だ起きてゐた。

『何うだつたね？』

『晩くなりました。』

『詫證文のお禮かい？』

『はあ。』

『藝者でも呼んで騷いだんだらう？』

『小泉君が藤島音頭を踊りました。』

『ナカ〳〵やるんだね。親父とは違ふ。今朝の態度でも分つてゐる。』

　とお父さんは好感を持つてゐるやうだつた。

　翌朝、豐彦君は堅固君の來訪を

待つてゐた。善後策について夜前あれから大いに考へた。それを打ち合せて、若し必要があれば、共々青木家へ向ふ積りだつた。しかし十時になつても堅固君が姿を見せなかつたから、自身相談に出掛けて行つた。

『堅固はゐませんよ。』

と叔母さんが言つた。

『何處へ行つたんですか？』

『さあ。本家へと言つたやうでしたが、あなたのところぢやないんですか？』

『それぢや裏から來たのかな。』

『もう先刻ですよ。』

『變ですね。來る約束になつてゐたんですけれど。』

と豐彦君は合點に苦んで引き返した。

外交官は文學者よりも機敏だ。堅固君は丁度その頃、田川の青木さんの玄關に立つてゐた。

『御免。』

『はあ。』

と應じて、誂へ向きに智惠子さんが現れた。

『あらまあ！　堅固さん。』

『先日は失禮。』

『私こそ。』

『今日はお父さんにお目にかゝりに推參致しました。御在宅ですか？』

と堅固君は改まつた。

『居ります。何うぞ。』

『しかし……』

『流石にお約束をお忘れになりませんわね。』

『はあ。當分です。長い當分ですけれど。』

『堅固さん、あなた狡いわ。』

『何故ですか？』

『出し拔いて。』

『いや、用件です。』

『御冗談よ。お待ち下さい。』

と智惠子さんは取次に入つて、直ぐに又、

『何うぞ此方へ。』

とニコ／＼して出迎へた。

堅固君は座敷へ通つた。青木さんに會つて、久濶を敍してから、
『ところで僕、變なことを聞き込んで、心配になつて溜まりませんから、伺ひに上りました。』
と切り出した。
『何ですかな？』
『小泉の問題です。何かお話があつたやうに承はりましたが、本當でございますか？』
『ありました。』
『はゝあ。』
『しかし卽座にお斷りしましたよ。』
『はゝあ。』
『佃さんが來ました。私達も智惠子もあなた方のお心持が分つてゐますから、それを明らさまに申しました。』
『有難うございます。』
『ついこの間のことでしたよ。』
『しかし小泉君はお父さんの亡くなる前からだと言つてゐました。』
『そんなことがあるものですか？ 佃さんは親父も死んだしと言つて、それを條件のやうに力說してゐました。』
『それぢや小泉君が嘘をついたんです。』
『何か小泉君から直接交渉があつたんですか？』
『はあ。』
『奴さん、買收を申出たでせう？』
『よく御存じですな。』
『佃さんの差金でせう。それでは二人に手を引かせればお話に乘つて下さいますかつて、念を押してゐましたから。』
『はゝあ。』
『氣に入らない人達ですよ。』
と青木さんは舊家を誇つてゐる丈けに、所謂成り上りを好まない。
『宜くて？ お父さん。』
と智惠子さんが緣側に立ち現れた。お茶を持つて來たのだつた。
『宜しいよ。』
『はあ。』
『お母さんは？』
『髮結さんが來てゐます。』
『宜しい。』
『…………』
『堅固さんが話し惡さうだから、お前はもう少時。』
と青木さんが茶の間の方へ頤を向けた。
『私の惡口？ 堅固さん。』
『いや、決して。』
『それなら何うぞ御ゆつくり。』
と智惠子さんは立つて行つた。その後姿を見送つて、
『僕、序ながら一つ御注意申上げて置きたいことがございます。』
と堅固君が續けた。

『何ですか？』

『小泉君は又佃さんを寄越すに定つてゐます。その折、屹度、小泉君が智惠子さんを助ける爲に怪我をして不具になつたと言ふかも知れません。』

『實は私もあの件では未だに頭を惱ましてゐるんですよ。何分右の腕が不自由になつてゐますから。』

『その右の腕です。實はもう直つてゐるんです。悉皆とは行かないが、不自由はないと言つてゐます。』

『本當ですか？』

『はあ。本人を取つ占めて告白させたんですから大丈夫です。』

『はゝあ。それは〳〵。』

と青木さんは覺えず膝を進めた。

『恩に着せる積りで、僕にもそれを主張したんですけれど、退つ引させません。』

『何うしたんですか？』

『豫め試して置いたんです。』

と堅固君が説明しかけた時、奥さんが大丸髷に若返つて席に列した。

堅固君は大國屋の一件を悉皆話した。

『これで私も肩が拔けました。』

と青木さんは大喜びだつた。

『然うとも知らないで三年越し案じてゐましたわ。何て横着な人でせうね。』

『矢つ張り親の子だよ。何處までも因縁をつける。』

『助けて戴いても、それぢや御利益が薄らぎますわね。』

林 京太郎

『恩は恩だけれどもな。會ふ度に見舞ひを言つて、好い馬鹿を見たよ。』
『智惠子にも話して置きませう。智惠子や。』
と、お母さんが呼んだ。
『はあ。』
『智惠子や、小泉さんはね、もう悉皆お直りになつたんですとさ。』
『あんな方、何うでも宜いのよ、私。』
と智惠子さんは嚴しかつた。小泉君は全く問題になつてゐない。堅固君は安心した。
『ところで堅固さん、何うですか？　學校の方は。』
と青木さんが間もなく訊いた。
『法科へ入りました。』
『イヨ〱大學生ですな。』
『はあ。これからです。』
『豐彦さんは去年からよ。』
と智惠子さんが言つた。
『早稻田は早いです。豫科が二年ですから。』
と堅固君は官立と私立の差異を述べた。
『お父さん。』
『何だい？』
『これで大學生が二人揃ひましたわ。』
『揃つた。』
『お忘れになつて？　お父さん。』
『何を？』
『大學生になるまでと仰有つたぢやございませんか？』
『成程ね。』
と青木さんは頷いた。
『お母さん。』
『はい。』
『もう御交際をお願ひしても宜いんでございませう？』
『然うね。後からお父さんに御相談申上げませう。』
とお母さんは堅固君の手前、一寸持て餘した。當分の期間がソロソロ切れかけてゐるのらしかつた。（つゞく）
なんと面白い小說でせう。御愛讀の諸賢、何卒次號を御期待下さい。

「未來花」主題歌
未來の花の歌—渡辺光子
千夜子の歌—丸山和歌子
大評判のキングレコードは一枚一圓五十錢全國の蓄音器店にあります

お奬めしたい蒜食

腺病質・結核症・婦人病・胃腸諸疾患に素晴らしい効果のある自然藥草

古來にんにくは萬病に神秘的な効果を奏する民間藥として又漢方藥として廣く尊重せられて居ります。どうしてにんにくが斯く萬病に奏効するか、これを科學的に調べて見ますと其の素晴らしい成分に基くのであります。即ち、にんにくは殺菌、淨血の作用が特に著しい硫化アルリール、植物性アルカロイド、燐酸鹽類、消化を促進するアミノ酸、砒素、それに多量の各種ヴイタミン等の人體に缺く事の出來ない必須の榮養物から成つて居るからであります。

これが即ちにんにくが惡疫の豫防に解毒に又精力增進等に尊重されて來た所以でありまして、特に著しいのは急性及慢性の胃腸病、肺病其他の呼吸器障害などに對して偉大な治効力を有し、又殺菌力が強いので急性の下痢や消化不良等にも適應して整腸の効果があります。その外、體質が弱く精力元氣の乏しい人、虚弱、腺病質、婦人の冷症などに用ゐてなか〳〵効能のあることが多數の實驗者によつて證明されて居ります。

斯くの如く大効あるにんにくが何故一般に用ゐられなかつたかと云ふと、にんにく特有の惡臭と苦辛い味の爲め常用されなかつたのでありますが、偶〻にんにくの愛用者であり其の効果を確信して居た關口定伸氏は色々研究の結果、にんにくの缺點を除いた『にんにく丸』の創製に成功したのであります。

即ちこの『にんにく丸』はにんにくの強い精を搾つて飲みよい丸藥としたもので、生のにんにく以上の効果があると盛んに愛用されて居ります。

近來他にもにんにく製劑として賣出されて居るものも隨分澤山ありますが、このにんにく丸は服用後口から惡臭を出さぬのが特長ですから藥嫌ひの婦人や子供にも容易に服用出來ます。每食後十粒位宛連用しますと、虚弱體質や急性慢性の胃腸病や消化不良等も何時の間にか丈夫になり、長年の肺病、心臟病等にも適應して優れた効果を奏します。實驗上から見ましても、にんにく丸の短時日服用によつて見違へる程丈夫になつた方や、病弱の體質を改造して素晴らしい健康體になつた方々が多數にのぼつて居ります。而も『にんにく丸』は化學品と異り、全然副作用などの心配はありませんから安心して服用が出來ます。每食後數粒のにんにく丸の服用は理想的な健康法です。家庭常備藥としてゼヒお備へ下さい。

にんにく丸は三百粒入(約十日分)一圓七十錢、九百粒入(約三十日分)四圓五十錢、全國藥店、百貨店藥品部にありますが、品切の節は送料(内地十五錢、領土四十五錢)を添へて、東京市本鄉區駒込坂下町、大日本雄辯會講談社代理部(振替東京六六二九)へ御注文下さい。

病弱體が温灸の使用で

家庭療法としてお奨めする
ラヂウム温灸器
病弱體がメキ〱恢復して短時日に肥り出す素晴しい効果

昔からよく、うまいものを食へば太るといはれてゐるが、瘦せて居る人が美食して必ず太るとは限らない。粗食家に太つた人がある樣に美食家でも瘦せて居る人は多い。

又滋養劑で誰でもキット太るといふこともないのです。

＝正しい肥滿法＝

うまいものを如何程食べても滋養物を如何程攝つても、太り得ないのは胃腸のはたらきが完全でないからで、胃腸さへ健全であれば、どんなに粗食であつても健康的に丸々と太つて長壽を保つことが出來得るのであります。

一體、胃腸は常に適當な食物を供給されてゐる時が最も健康な狀態であるから、胃腸疾患の治療も、適當の食餌を與へて胃腸を刺戟し、機能を活躍させて鍛錬し乍ら積極的に健康に導くのが、理想的の正しい治療法です。

＝ラヂウム温灸＝

胃腸病の治療法として一躍斯界に重きを爲した、專賣特許ラヂウム温灸器が永年の諸病統計から見て、むしろ榮養增進肥滿器として優れた効力を示して居るのは、以上のわけからであります。

このラヂウム温灸器を使用すれば、沈滯し切つた胃腸も健康者同樣の活躍をして、非常な空腹を感じドシ〱食慾が增進し、大抵二貫や三貫は太り積極的に健康を增進致します

昨日まで重湯で寢てゐた樣な重症患者が、その日から普通食を攝り然も平氣で消化も出來、且つ次ぎ〱と空腹を感ずる樣になつたといふ實例も數多く、短時日のうちに血色が大變よくなり、見違へる樣に肥り出す事實は本器使用の經驗者達の一樣に驚嘆される所であります。

必ず肥る

＝本器の特長＝

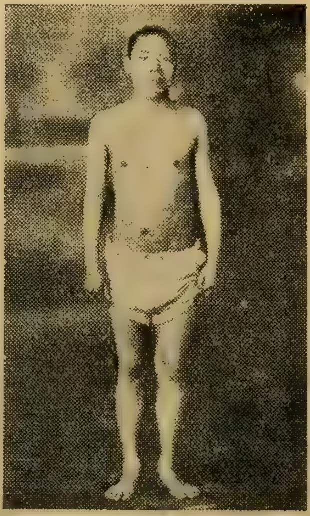
一般の藥や療法は效果そのものより理論や能書が先に立つて居るが、このラヂウム溫灸器は數千年來の實驗醫術（灸法）の優れた效果から發明された器械で、灸艾の療法に藥効を加へ、誰にも容易に使用出來る樣、簡單に器械化したもので、人體の生理的機能と結合させた理學的の治療法であります

★こんなに肥える★

（ラヂウム溫灸治療器使用者肥滿の狀態）

日數	增加體重（貫・匁）	姓名
八〇	七・三〇〇	沼田松夫
三五	五・〇〇〇	板倉周作
三五	三・七〇〇	秋本篤三
二一	二・六〇〇	安水行一
二二	一・六〇〇	沼田三之助
四〇	一・五〇〇	阿部忠一
九〇	一・二〇〇	奈良末次郎
三五	二・五〇〇	關口鐵助
六〇	三・〇〇〇	小島キヨ
四八	二・五〇〇	靑池淸

其他千餘名の肥滿成績表あり



（足腰立たぬ病人本器使用百日で四貫肥えて全快　金澤　本田由雄君）

熱い灸に對する溫い灸といふ廣い意味の溫灸器には、澤山の種類がありますが、それらの多くは艾を其儘空氣中に露出して焚くので澤山煙が出ます。高價な艾を多量に燃して室内を燻らすのが效果ではありません。

このラヂウム溫灸治療器の發明に永年の苦心を要したのはこの點の改良であります。

＝家庭の治療器＝

本器は獨特の裝置に依つて煙を器外に逸出せしめず、器械内で燻燒し乍ら臍に當て腹中へ効力を浸透させる方法で、倒して火災の憂ひなく觸れて火傷の虞れもなく、眼や咽喉を害する事がなく絶對安全です。

ポカ〳〵と臍から全身に傳はる快適な使用感、斯くて毎日の使用により、衰弱した胃腸機能は溫灸の補助を受けて活躍し、食慾を增進し、肉體を肥らせるもので、使用者から『肥る器械』といひ囃される樣になつたのは本器に相應しい別名です。

ラヂウム溫灸器は、各國の專賣特許を有し數十名の博士の推奬證明ある優秀な肥滿法であるが、大量理想生產法に依る爲、藥と艾付で十三圓であります。療養には藥も滋養物も不用であるから、最も廉い肥滿法といふことが云へます。

＊　＊　＊　＊

慢性胃腸病、神經衰弱、貧血症、冷え性、病中病後の衰弱者、食慾不振の人、肥り度い人等には特にお奬め致します。

尙詳細をお知りになりたい人は東京市本郷區駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九）にお申込みになれば小册子をお送りします。

定價は特製溫灸器（藥及び特効艾五週間分付）一揃十三圓（送料内地八十錢領土一圓）上製溫灸器（藥及特効艾五週間分付）一揃十圓（送料内地七十錢領土九十錢）で前記本社代理部でお取次致して居ります。御註文の節は富士六月號に依る旨御記入下さいませ。

剣侠小説

一刀流闘士陣（いちたうりうとうしぢん）

小山寛二

馬場射地畫

劍俠危難篇

不忍池畔雪中の亂刄

朝から吹荒れてゐた師走の空つ風が、暮方に入るとぱたりと落ちて、こんどは、暗く重くたれ下つた空と、凍つた地上とを、唯見る白銀一色に塗りつぶした大雪である。その雪も四ツ刻を過ぎると漸く止んで、後には皎々とすさまじいまでに冴え渡る寒月の色。

神田お玉ケ池の千葉周作が許を辭して、快く酔うた身體を駕に搖らせ乍ら、根津權現裏の己が浪宅へと急ぐ笹淵小平は、うつらうつらと辿る夢路の中に、ふつと劍戟の音を聞いて、

「駕屋、待て！」

「へい、何でがす？」

「劍の刄音が耳に響いた。誰か其處らで斬り結んでゐるの。」

「えつ？」

思はず、とんと息杖ついて、不氣味さうに眼をきよろつかせ乍ら、

「誰も邊りには見えませんが、のう、相棒。」

と後ろを振り返つた時、チャリン――とまさしく、はつきり響いて來た刄の音。

「な、なーる程、こいつはいけねえ。呀つ、向ふの樹蔭に人の影が――」

「そうれ見ろ、小野派一刀流の笹淵小平、刀の音だけには地獄耳ぢや。」

と笑ひ乍ら駕を出て見ると、月光冷々たる不忍池畔の雪の中に、群り蠢めく一團の人影。

「旦那、引返して切通しの方から廻り道致しやせう。」

駕舁きの聲は慄へてゐる。

『いや、お前等はもう此處で歸つてよい。珍らしく美しい雪景色、此の中で果合とは、これは又一段の風趣、見落しては目の損ぢや。それ、酒手を遣はす。』

『へえ、これはどうも――』

お禮もそこ〳〵に飛ぶ樣に逃げ歸る。

笹淵小平は中國岡山の郷士、若くして劍技に秀で、諸國遊歷の後、江戸に出て、小野派一刀流を極め、關東の劍客の間に鬼小平の名を謳はれたが、性來の拗ね者で、仕官を求めず、門戸を張らず、飄乎として浪々の生活を續けてゐる。北辰一刀流の千葉周作は殊に小平の腕と氣骨と識見を愛して、斷金の交りを結び、客分の扱ひで門弟の敎導を賴んでゐた。

小平、悠々として月に嘯く風流人の樣な足どりで小半町ばかり歩いてゆくと、柳の蔭により掛つて、さも樂しげな見物だ。

斬り結んでゐる人影は五つ。而も奇怪なのは、その中の四人が黒裝束の覆面で、たつた一人の、前髪立ちの華奢な若者を、半圓陣に押取り圍み、鋩揃へてひた〳〵と迫つてゐるのだ。前髪立ちの若者、時々斬りこんで來る相手の刄尖を跳ね返し受け流し、懸命無言の力鬪、相當に腕は立つらしいが、次第々々に押されて池の縁へ退つてゆく。と、前面の一人、つと一歩進出て、

『えいつ！』

烈しい氣合で撃下ろした一刀。それを拂つて横へ飛び違へようとする

機みに、若者は、足踏み滑らしたか、がくりと膝をついた。同時に、月光にきらめく四本の刄。

『危いッ！』

小平は大聲で叫んだ。鍊へに鍊へた掛聲である。若者の頭上

に落ちようとした四本の劍尖が、電撃に襲はれた様に、ぴたりと止ると、

『誰だッ！』

と期せずして振向く、その眼の前に、ずいと立現はれた小平。

『何事の果合かは存ぜぬが、多勢に一人、而も轉んだ隙を撃つのは作法に悖りませう。此處で水を入れて、改めて、一人と一人の太刀打ちにしたら如何ぢや。』

不敵な差し出口に、むつとしたらしい覆面の一人、向き直つて、

『無用の忠言。命が惜しくば默つて立去れ。』

『ワハハ……これは御挨拶ぢや。』

と先づ大きく笑ひ飛ばして、

『自體、東照權現御靈廟の下をも憚らず、人も無げなる刄物三昧。汝等は夜盗か、辻斬者か。關りはなくとも見過し難い此の場の有樣。若し理筋の立つた爭ひなら、拙者も武士ぢや、立會人として見屆けて進ぜる。さなくば、夜叉鬼神たりとも一匹殘らずふん捕へて、上野の鐘撞き堂に吊し物に致すぞ。さ、云へ、仔細を云へ。譯を申せ。』

忽然と降つて湧いた男の烈しい權幕に、氣をのまれたか、四人の黒裝束、押默つて睨みつけてゐるばかり。その間に、危急の瀬戸際に押し詰められた若者は、立直つて躙り足で横へ廻りこみつつ、
『申します。これは仇敵討ちで御座ります。卑怯にも私を取りこめて討たうと――。願はくは武士の情け、何卒お助太刀下されませ。』
意外にもそれは銀鈴を鳴らす樣な美しい女の聲だ。
『や、そなた女子か。何にしても仇敵討ちとは容易ならぬ。中國浪人笹淵小平、助太刀致すぞッ。』
『おつ!』
叫んだのは、若者も、覆面共も同時であつた。笹淵の名に驚いたのであらう。
『退け。』
喚いて一人が駈け出すと續く三人。雪を蹴立てて一散に廣小路の方へ――。
『逃げるか、卑怯な。』
追はうとする小平に、若者が、
『先生、お待ち下されませ。』
『何? 待てとは?』
『仇敵はあの中には居りませぬ。あれ等は唯仇敵一味の壯士で御座ります。』
『うゝむ。それでは追うても詮はない。御身、怪我はなかつたか。』
『お蔭樣にて、危き一命とりとめました。何とお禮を申上げてよろしいやら――』
切長の涼しい眼、形のいい紅い口許、白い額にかかる亂れ毛が凄艶で、これがたつた今、大の男四人を相手に眞劍の勝負を爭つた女とは思へない。
『婦人に似氣なき腕達者、感服仕つたぞ。』
『お恥づかしう存じます。したが、此處で先生にお助け戴きましたのは何たる幸福で御座りませう。此上、厚かましいお願ひ乍ら、是非共お力に縋りたいことが御座りますが、先生、枉げて、願ひの趣きを聞いては下さりませぬか。』
『うむ。袖振り合ふも他生の緣とやら。承らう。が此處ではちと冷え過ぎる。浪宅まで參られい。お茶など進ぜる。』
『有難う御座ります。』
男裝の婦女の眸にはもう感激の淚が光つてゐる。小平は何事もなかつた樣な顔つきで、白々と冴ゆる月光の中を寛々と歩き出した。

義に勇む

その翌日の晝過ぎ、お玉ケ池の千葉道場の、周作の部屋で、主客、火鉢を圍んで何か談じてゐた。客は笹淵小平。
『で、その女を浪宅へ伴ひ歸つて、話を聞いて見ますると、女は紀州浪人畔柳英之丞の妹お町と申す者。英之丞、お町を連れて浪々、江戸で困却してゐる時、四谷の旗本、谷八十郎と識合ひ、その手引きを以て、因州家へ仕官する事となりました。然るに、いざ仕官といふ時に

なつて來て、八十郎は、お町を己の妾に差出せ、といふ。英之丞、それは武士としてなりかねる、すつたもんだの末が八十郎の激怒となつて、英之丞は八十郎の邸で討たれて了ひました。お町は己の身の危險を感じて、藝者に身を落し、ひそかに武藝を修錬しつゝ、仇敵討ちの日を待つて居りますと、はからずも八十郎に巡り會ひ、八十郎は尙も執念の手を延ばして、お町を己の物にしようとするので、一日油斷を見て斬りかけると、まんまと失敗、八十郎の爲に拘禁され、危い所を逃げのびて、男裝し、下谷に潜んで居ります中に、八十郎方の刺客に狙はれ、昨夜の危急と相成つたもの。まことに、聞けば聞く程不憫な話で御座ります。』

周作は腕を組んで、

『ふゝむ。して、貴公、その娘の仇敵討ちを助けてやる氣か？』

『縋られて見れば、拙者の氣性としては打棄て置けませぬ。まして、相手は士道を辨へず、理非を沒した色餓鬼、七百石の旗本ともあらう者が言語道斷の振舞。たしか、長坂血鎗九郎の家と親戚ぢやさうに御座りますから、尙更以て面白い。一揉み揉んで、江戸の天地に波瀾を起して見せませう。』

『ではこちらも千葉道場が後楯になるか。氣位ばかり高うて節義を知らぬ當世の旗本共、よしや八萬騎打揃うた所で、何事も出來まい。浪人と旗本の喧嘩ぢや。せいぜい、華々しく押合ふことぢやの。』

『いや、先生のお力添へがあれば萬人力。どれ、今から行つて一つ掛合うて參りませう。』

小平は笑ひ乍ら大刀を取ると、輕く一禮して部屋を出た。

と、次の間から、

『笹淵氏、面白さうな話ではないか。』

聲をかけて出て來たのは、千葉四天王の一人、海保帆平。その後ろから、これも門弟筆頭の平手造酒が、

『暴れる事なら、ちとこちらにも役を振つて戴きたいな。』

『アハヽ……直ぐそれだ。まあ待つて居ろ。尋常で濟む事ではないから、そのうち、貴公等の出る幕もあらうて。』

小平は肩を搖すつて立去つた。

のつぴきならぬ小平が掛合

『賴まう。』

玄關で呶鳴ると、取次ぎが出て來て、

『何れから。』

『笹淵小平と申す。御當家御主人に是非共至急に御面談致し度い儀があつて參つた。』

『お待ち下さい。』

引込んで、又出て來ると、

『御來意、これにて承ります。』

『八十郎殿は會はぬと申されるか。』

『所用中にて御面會なり兼ねるとの仰せ。』

『アハヽ……。この小平を素浪人と侮つての扱ひか、但しは會ふのが

恐ろしいか。』
『何を申される。』
玄關子、流石に憤然として顔色變へた。
『いや無理に押込んでまで御目に掛らうとは云はぬ。口上を述べるぞ。貴公、判るか?』
『判らねば、此の御玄關は勤まらぬ。』
『ほう、偉い見識ぢやの。』とじろり、鋭い眼を光らせて『其の衝立の蔭、襖の裏に潛んでゐる面々もよく聞け。當家に於て無法の刄に掛つた畔柳英之丞が妹お町、八十郎殿に怨みの刄をつけ度いと申して居る。笹淵小平、義に依つてお町の後見を仕るが、覺えがないとは云はさぬこと、男らしく御勝負あるか、どうか。若し承知なれば、場所、時日等も打合はせ度く、又若し御不承なれば、町奉行に訴へ出て、表沙汰の爭ひと致す。掛合ひは一切拙者が仕る故、千葉道場に、客分笹淵と名指して來て戴き度い。右、傳言、しかと頼んだぞ。』
七百石の玄關口で横柄極まる口の利き樣。玄關番、むつつりと膨れて返事をせぬ。
『返事の無いは、唯今の言葉が耳に入らぬのか。それで、旗本の玄關が勤まるか。』
忽ちに逆襲のしつぺい返し、肩を張り、足を踏出して、受け方如何によつては、拔撃たんずの勢。玄關子、狼てて、
『御傳言、しかと承知。』
『よし。それで先づ筋は通つた。御返答は明日の夕刻まで。それ迄沙汰が無ければ、拙者再び出向いて參る。萬ケ一、聞いた、聞かぬといふ樣な、あやふやな事になると、笹淵、勘辨なりかねるから、貴公の首を貰ひ、此の玄關を血潮で染めるぞ。よいかな。』
びし〳〵と釘を打たれて、
『御念には及ばぬ。』
『立派ぢや〳〵。お若いのに見上げたもの、色黒、あばたで、少々お顔は拙いが、男の出世は根性次第、御主人を見倣うて偉くなられい。では失禮。』
飽迄人を喰つた小平、用も無いことをまくし立てて、さつさと引揚げる。出來るだけ、怒らせてやれといふ腹だ。
小平の姿が門前に消えると、バラ〳〵と出て來た七八人の武士。中には町道場をごろついてゐる樣な、風體人相よろしからぬ、いはゆる武家暴漢らしいのも混つてゐる。
『變物だと噂に聞いてはゐたが、何たる不敵な奴だ。』
『衝立の蔭、襖の裏に潛む奴輩もよく聞け、などとぬかし居つた。油斷もすきもならぬ。』
『一寸も逃げ道のならぬ今の掛合ひ、殊に、若し不承ならば町奉行に訴へて表沙汰にすると申したが、さうなれば、どうせ谷の家柄に疵がつく。それにあの氣性では、己の首と引替へに、七百石を斷絶廢家の地獄へ道伴れせぬとも限らぬぞ。何しろ困つた狼に飛び込まれたわ。』
『だから、昨夜もあのお町めを斬り捨てて了へばよかつたのに、慾じ

手捕りにせよとの命令ゆゑ、愚圖々々してゐる中に、とんだ野郎に見つかつてしまつたのだ。』

『何を言ふ。お町を殺す位なら、始めから問題は起らぬのだ。世事萬端、物の間違ひは女色から、はて恐ろしき色の道——』

『シッ。馬鹿め。冗談どころか。兎に角、奥へ參つて、評定ぢや。』

がや〳〵言つてゐる所へ、戞々と蹄の音が響いて、乘りこんで來た骨格逞しく、風采堂々たる武士。

『や、長坂の殿樣が御見えだ。』

ぴたり、一同手を仕へた。

襲撃

夜色沈々として、閑寂と音もない根津權現裏の、森に續いた崖つぷちの一軒家、笹淵小平が浪宅の、垣根に殘る斑雪を、草鞋の泥に踏み躙つて、呼吸を殺し跫音をひそめ、忍び寄つた十人餘りの黑影。いはずと知れた谷八十郎が手の者だ。

今日の書下り、小平の出現に當惑した谷八十郎が、折よく來合はせた親戚の長坂血鎗九郎に切羽詰つた相談をかけると、血鎗九郎、小癪な笹淵が振舞かな、事の善惡はとまれかくまれ、素浪人の威勢に押されて、指を啣へてすつこんだでは、旗本直參の面目、地を拂ふに似て世上の聞え面白からず、ひいては幕府の御威光に關はる。よし。彼奴等に千葉道場三千の後押しあれば、こちらには、東照權現以來、數代武功の譽も高い血鎗九郎の名を受繼いだ、この長坂が、八萬騎を控へての後楯だ。一歩半歩も、退くな、躊躇くな。と何がさて泰平に倦んで、事あれかしの血に沸る男、持前の横紙破りの氣性も露はに、直ぐに己の食客、神道無念流では相當人に知られた芦邊要之助を呼び寄せ、これに十一人の手練者をつけて、深夜を待つて押出させたのは、先手を打つて敵の虚を衝く孫子の兵法。繰出した連中が又生命知らずの腕自慢ばかり、笹淵小平とてよも鬼神にあらじ、押し包んで擊つて取り、女を奪うて、千葉が高慢の鼻をあかしてやれ、と、後楯が後楯だけに凄まじい氣勢で、各々口に梅干を含み、刀の目釘濕らせて、肌に着こんだ鎖帷子も物々しく、かくて、根津權現裏の夜襲とはなつたものである。

垣根を越え、庭を過つて雨戸にそつと手をかけた一人、力を入れて引開けようとすると、中からがらつと開いたので、喫驚して飛退かうとする瞬間、サッと灯りが流れて、雪影の如く躍る棒。發止！　額を突かれてのぞけ返る。

『や、氣づかれたか！』

一同、流石に動搖して踏み込まんとすれば、雨戸は再び、ぴたりと閉まつて、家の中はコトリともせぬ。烈しい擊合ひを挑んで來るものとばかり思つた寄手は、豫期に反した鮮やかな應手に、度膽をぬかれて、氣味の惡い事夥しい。

小平は既に、敵が垣根に迫つた時、目をさましてゐたのだ。已、卑怯な八十郎め、其儀ならば考があると、隣室に寢てゐる弟子の上田彌一をそつと搖り起して、飯炊き婆とお町との居る部屋を護らせ、自

分は緣側につくばつて、襲撃隊の邀へ撃ち。
暫しが程は、雨戸を隔てて無言の睨合ひを續けてゐたが、漸く焦つて來た寄手の面々、一齊に雨戸を破つて亂入しようとすると、
『待て。』と制したのは隊長格の芦邊要之助。つかつかと進んで、
『おい、笹淵小平。男らしく雨戸をあけて勝負せい。斯く言ふは、神道無念流の芦邊要之助だ。義理と義理、意地と意地、今更喧嘩の譯を話すにも及ぶまい。』
と、言葉は立派だが、實は雨戸の中に如何なる戰備があるか判らぬので、そこは喧嘩の場數を踏んだ老獪者、所詮覺られた上は、誘ひ出して地の利を得ようとの策戰である。小平は、ふふん、と鼻で笑つて、
『喧嘩なら喧嘩らしく何故堂々と表口から名乘つて來ぬ。見るかげもない破家でも、此處は笹淵小平が城廓、汝等如きごろつき劍法で破れるものなら破つて見ろ。二兩か三兩の端た錢で買はれた蛆蟲共、夜盗として、小平が成敗して遣はす。命の要らぬ奴は、さあ雨戸を開けて見い。』
罵られて要之助、嚇となり、
『どうしても出て來ぬな。出て來ねば、家に火をつけて、いぶし出すぞ。』

『面白い。燃やせ、强盗より、火つけの方が罪が重い。汝等を捕へて奉行所へ突出せば褒美が貰へるわ。』
此の問答の間に心利いた二三の奴、崖添ひに身體を匍はせて、裏口の方へ廻つた。要之助これを見ると、〆たとばかり、更にも一人向ふへ廻はして、自分は、庭の大石を抱き上げ、どん、と雨戸にぶつつけた。めり〳〵

と碎け倒れる雨戸と共に、斬りこんだ二本の白刃。途端に、びゆうんと棒の唸り。一人は刀を跳ね落され、一人は肩口强たかに打ち据ゑられたが、今や隔ての要害が破れたので、殘りの連中、必死の斬り込み。

其時、裏口の一隊、戸を蹴破つて亂入した。上田彌一が、部屋の入口に立塞がつて、大刀引拔き、

『さあ來いッ。』

と身構へる。お町も襷十字に綾どつて小刀の鞘を拂つたが、先程からの物凄い亂刄に、腰をぬかした飯焚き婆、齒の根も合はず、お町の兩足にしがみつくので、邪魔で動けない。小平、ちらと後ろを振返つて、

『チエッ、しまつた。裏へ廻られたか。彌一、賴むぞッ。』

呶鳴つた隙に、躍り上つた要之助。

『笹淵、一騎撃ちだ！』

『洒落臭い。』

と、小平、振り冠つて一擊。要之助、拜んで受けて、ずばりと棒を斜めに斬り落す。流石に腕の出來た奴。小平、飛退ると拔いた一刀。左行秀、二尺八寸。つゝつ、とつけこんで來た要之助の鋩を輕く叩いて、

『えいッ！』右の奴の小手へ——。峰打ちだが、手が痺れて刀を取り落す。

と、背後で、

『無念ッ！』と叫ぶ彌一の聲。彌一は四人の敵を受けて、正面の一人を斬つた刹那に、橫合から薙いだ刀に、太股やられてぶつ倒れたのだ。

『おのれッ！』

憤然として小平が駈け出さうとすると、それを遮る要之助。

『面倒なッ。』踏込んで一刀。要之助、辛くも後ろへそつて避けたが、鋩掠めて橫鬢にサッと滲む血潮。

『それもう一本!』
だが、要之助早くも横へ逃げて、行燈蹴倒すと、家の中は眞闇。その闇の底から、
『呀ッ!』とお町の絶叫。同時にばた／＼と走り出す黒影。不覺にも、敵の手に捕へられたらしい。
小平、要之助を打棄てて、庭へ下りると、待ち受けた二人、鋩揃へて行手を沮む。背後からは要之助、相當の腕の奴三人に圍れて、斬る氣ではない小平、左右なくば進めない。その中に、お町を引擔いだ奴等は、どん／＼森の中へ逃げてゆく。恐らくは駕でも待たせてゐるのであらう。
小平、焦つて、
『退け。退かぬと本當に斬るぞ!』
と、喚いて、突き出した劍尖は目にも止らず、一人の咽喉を貫いて、返す刄に一人の腰へ割りつけ、後ろから躍りこんだ要之助を引外して空を斬らせた儘、一散に森の方へ。
と、坂下の路から宙を飛んで來る御用提灯。手先が二三人、追縋つて、
『待てッ、狼藉者ッ。』
小平は立止つて、
『拙者は狼藉はせぬ。夜盗の群を追駈けてゐるのだ!』
『默れ、その刄は何だ。』
と言つて、左右から詰め寄り、
『神妙にせい。』
『ええ、判らぬ御仁達だ、森の中へ女を攫つて逃げる奴が……』
『言譯無用、同道せい。』
二本の十手が兩袖に搦んだ。多寡が小勢の役人、ふりもぎつて打倒す位は何でもないが、御用の聲は絕對である。若し此處で暴れて後難を殘しては一大事、攫はれたお町はまさかに直ぐ殺されもすまいし、奪回の手段はいくらもある、と分別して、大人しく、
『是非もない。同道致す。がこの崖上の家には未だ盜賊が殘つて居る筈、召捕つて戴き度い。』
『其方の指圖は受けぬ。歩め。』
と、手先がとんと背を突いた。

義亂闘篇

奉行所

『不埒なッ!』
平手造酒はかん／＼に怒つて、袴をつけ乍ら、
『俺が師匠の代理として、北町奉行にかけ合つて來る。相手方は一人も捕へずに、笹淵を曳いて、而も手負の彌一迄召連れるとは、片手落ちも甚しい。長坂血鎗に賴まれての仕業であらう。公儀の權力を濫りに私する北町奉行は、死罪だぞ。』

海保帆平が笑つて、

『さう俺に怒つても仕方がない。が、先生が歸られるまで待つて、先生に出向いて戴いたらどうだらう。』

『いや、闘はん。』

『若し、奉行がきかなかつたら？』

『役人を鏖殺しにして來る。』

『アハヽ……そりやあ無茶だ。』

『笑ひ事ぢやないぞ。』

造酒は帆平を睨んで、大刀を腰にさした。

『吾等も一緒に――』

と五六人の門弟が進出ると、

『お前等、役に立ちやせん。温和しく待つて居ろ。』

凄い勢で、造酒は千葉道場を出て、奉行所に乘りこんだ。一間に通つて待つてゐると、二刻程も經つてから出て來た男。

『與力、浦賴母で御座る。』

造酒、一應は座を滑つて、

『神田お玉ケ池、千葉周作が名代、平手造酒と申しまする。先刻取次ぎに申上げし用向きによつて――』

と言ひ掛けると、浦賴母、先を取つて、

『あ、笹淵小平氏の件、押込みに對して爭ひたりとの事、明白になり申した。今日、上田彌一と共にお歸し申す。』

『相手方、つまりその夜盗の類は捕縛されましたるや、伺ひます。』

『唯今、手配中で御座る。』

造酒、憤然として、

『これはこれは。あの時の情況を飯焚き婆に聞くに、夜盗共は、手負ひを收容して悠々と引揚げし由、笹淵を召捕る暇に、何故彼奴等を御手當てにならなんだか、腕利き揃ひの北町支配下に於て、寔に似合はしからぬやり方。』

『其の行違ひも唯今調べ中で御座る。』

『自體あの押込み共の正體、御存知で御座るか。』

『いや、それがその――』

『まさかに北町では旗本などの依賴によつて、好い加減に人數をお繰出しにはなるまいな。』

浦賴母、屹となつて、向き直つた。

『何を言はるる。此處は役宅で御座るぞ。』

『某は唯後學の爲に伺つた迄。萬一左樣な事が行はるれば、御政道は闇。吾等、正義の爲に斷然蹶起致す。吾等が劍道は伊達では御座らぬ。いや、失禮仕りました。御免。』

造酒、いとも鮮やかにやつて退けて、玄關へ出ると、大聲で、

『御不審を蒙つた笹淵小平と上田彌一が、不思議にも青天白日の身となつて、召放たれるさうぢやが、未だ出て參らぬか。』

『向ふへ御廻り下さい。』

門番は造酒の烈しい眼つきに恐れをなして、案内に立つた。

外には、海保帆平等が五六人、中の樣子に耳を澄まし乍ら、穩やか

でない眼つきをして佇んでゐる。

お多久出現

奉行所から道場に引上げて來ると、取り敢へず彌一の屍を手當てして弟子部屋に寢かせ、小平と造酒と帆平の三人、一室に鼎坐した。

『いや、敵を侮り過ぎて不覺を取つた。芦邊要之助といふ奴、割合に出來るの。』

小平が言ふと造酒が、未だぷん／＼し乍ら、

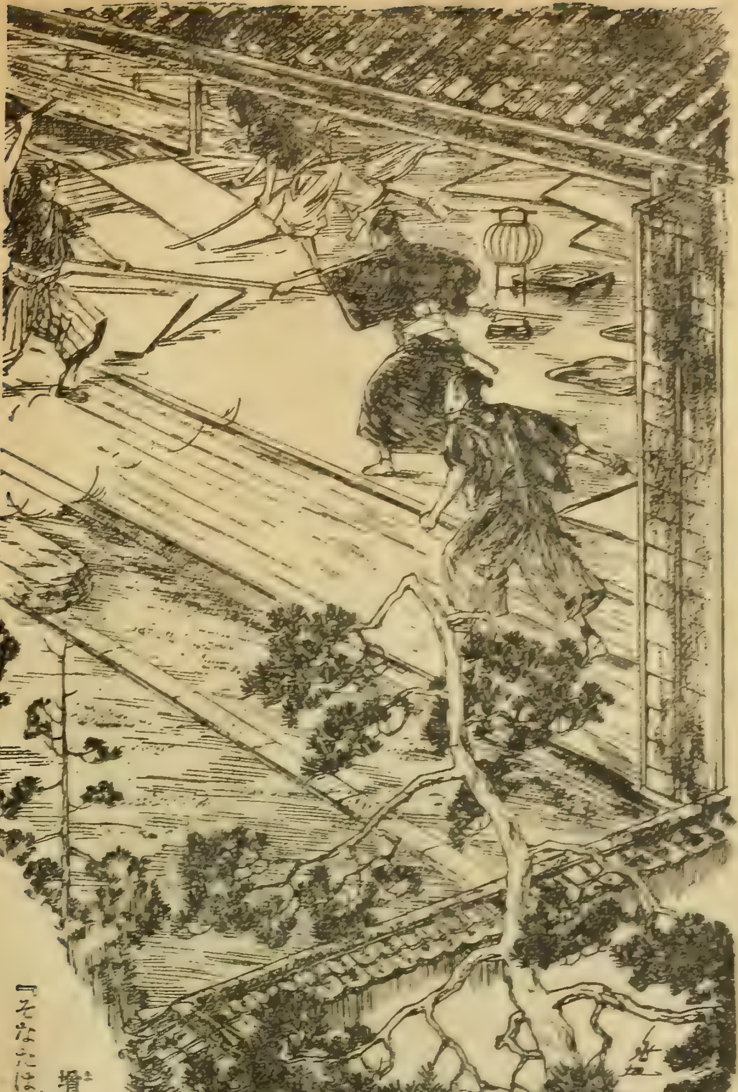
『卑怯な奴等だ、役人に手を廻したりなどし居つて。併し今日俺が浪人の

決意を示して來たから、もう迂濶に手は出すまいて。今度はこちらから斬り込みをかけるか。』
『いやそれより、女を奪ひ返さねばならぬ。先生ももう歸つて見えるから、ゆつくり協議致さう。』
帆平の言葉に、造酒は押被せる樣に、
『師匠は成る可く事を好まぬ性だから、一々相談する必要はない。吾等だけで事を運ばう。喃、笹淵。』
小平は頷いて、
『千葉大人には一應の御了解を得て居る。いよ〳〵最後の時にだけ相談をかけよう。』
『ちや、さし當り、どうするか。』
と帆平。
『まさか、お町を八十郎の邸に匿つては居まいが――』
と小平が思案の腕を組んだ時、庭から、
『今日は――、平手先生。』
と聲をかけて這入つて來た町人がある。
『お多久か。何しに來た。』
お多久こと、お多福屋久吉、表面の渡世は大道商人の元締めだが、内實はばくち打ちの、下町ではこれで相當幅の利く男である。造酒はこんな手合とばかり交際つてゐるので、千葉周作の御機嫌を損ねるのだ。
お多久、揉手をし乍ら、
『こちら樣とお旗本と、お出入りが始まりましたさうで、仲々よろしう御座んすな。へい。私あもう大好きなんで、こんな事が。へい。みんなお役に立ちたがつてゐますが、何かその、石でもぶつける樣なこたあ御座んせんかな。』
『何處で聞いて來た。』
『蛇の道でさあ。笹淵の先生がおひかれなすつたから、千葉の御門弟衆が北町奉行所と戰をおつ始めるつてんで、子分の奴が飛んで參りやした。そこで私も飛んで來たんで、へい。飴の中から、おたさんが飛んで出たよ。とはちと、おたさんが違ひますあね。役に立ちやすぜ、先生。』
小平と帆平は苦笑してゐる。造酒は眞顏で、
『好い所だ。ひとつ賴まう。』
『よし來た。何ですい。』
『四谷の谷八十郎の邸にお町といふ女を連れこんでゐるか、どうか。若し、谷の邸でなかつたら、何處へ運んだか、早刻、調べて來てくれ。』
『なあんだ、喧嘩ぢやないのかい。』
『不服か。』
『いえ、仲々もちまして。』
『その別嬪が、喧嘩の種だ。』
『よいしよ。喧嘩の種なら、拾はざなるまい。』
お多久、忽ち庭から消える。
『あゝして置けば晩方迄には、女の所在が知れる。あ奴等は、探索に

かけちや、役人より上だからな。どれ、一眠りしておくか。』
造酒はごろりと横になつた。

けだもの

お町は薄暗い部屋の中に、両手を縛られ、猿轡をはめられて、凝つ



と、身じろぎもせずに坐つてゐた。此處が一體、何處か、八十郎方の家である事は分つてゐるが、根津權現裏からどん／＼駕で運ばれた身の、薩張り見當がつかない。あの飯焚き婆が邪魔さへしなかつたら、こんな見苦しいことにならなかつたのだ、と思ふと、しわ苦茶婆の顔が憎らしくなつて來るし、又、通り掛りの一片の義氣によつて、相手にとつて厄介至極な旗本共を向ふに廻はして、自分を助けてくれる小平に對して、靠々と面目無さ、濟まなさが感ぜられて來る。

疲勞と昂奮で、混亂してゐると、襖が開いて、八十郎が這入つて來た。默つて縄をとき、猿轡を外して、

『お町、今度こそは逃れられぬ所と觀念したであらうな。』

お町は答へぬ。

『笹淵であらうと、千葉であらうと吾等が睨んだら歯は立たぬ。惡あがきせずと拙者の意に從つたらどうだ。』

逆からはるれば逆からはれる程可愛さが增すと見えて、八十郎、未だ口說いてゐる。

『そなたは拙者を仇だといふが、幾度も申す通り、英

と、白く嫋やかな手首を掴むと、
『何を遊ばす。』
とお町は強く振りもぎつて、
『放して下さい。』
クスくと何處かで忍び笑ひの聲が聞えた。八十郎の一味か家來かが、竊み聞きして笑つたのであらう。それを聞くと、お町は更に屈辱を感じて、敵はぬ迄も飛掛つて咽喉笛を喰ひ切つてやらうかと思つた。
『強情な奴だ。今度は今迄と違つて、長坂血鎗九郎殿が事件に采配振つて居られる故、早くそなたが心を飜さぬと、本當に斬られるぞ。よいか、斬られて。』
『本望で御座います。貴方樣の樣な卑怯者の色情狂ひに、誰が操を――』
『何ッ。無禮な。』
と叫ぶと、八十郎、野獸の如く、お町を引摺り倒した。お町はその手首に噛みつき、顔をつき上げ、足で蹴つて飛退き乍ら、
『人非人、氣違ひ――』
甲高い聲が外に洩れると、誰かが、
『お止めなさい、長坂殿に聞えますぞ。』
とたしなめた。八十郎は鋭くお町を睨んで、
『覺えて居れ。』
と言捨てて、荒々しく出て行つた。

之丞が拙者の心持を誤解して斬りかけたのを、居合はせた奴等が仕止めてしまつたので、決して拙者が殺した譯でもないし、迷惑なのはむしろこつちだ。併し出來て了つた事は今更繰り返しても詮はない。拙者は今通りそなたを不憫と思ひ、そなたを可愛いと思つてゐる。な、お町、下らぬ意地張りを捨てて、拙者の物になつてくれ。』

策戦

上野山下の雁鍋の二階で、三人は盃を交はしてゐた。お多久が此處で待つてゐてくれと云つてよこしたのである。

『久め、もう現れさうなものだが。』

造酒が呟いた時、お多久のにこ〱した顔が部屋をのぞいた。

『やあ、先生、判りましたぜ。』

『何處だ！』と小平も帆平も膝を立てる。

『駕屋調べに廻つた方から、ちやんと返事が來やしてね。矢つ張りその何ですね。考へ過ぎると却つて判らないもので。』

『といふと、八の字の家か？』

と造酒。お多久、頭を振つて、

『もう一つおまけの、九の字、九の字。』

小平は盃を差出して、

『御苦勞であつた。禮を云ふぞ。』

『なあに貴方、これ位は朝めし前で。で、誰方樣がお迎へに？』

『俺がゆく。』

『へえ。笹淵先生がお一人で――』

帆平が手を上げて、

『いや、暫く。九の字とはつきり所在が判つた以上、恐らくは八の字もあの邸に來合はせて居るであらう。一同出向いて、いつそのこと、一緒に八の字も生捕つて來ては如何。生捕つても相手はまさか、生捕られました、とのめ〱訴へて出る譯にゆくまいから、明日になつて、何喰はぬ顔で、千葉先生を煩はして公儀御帳に仇討ち屆けを致すのだ。そして、さつさと討たせて了ふ。若し其後で面倒が起つても、女子の身上だけは安全にしてやれる。』

『名案、名案。』

造酒は箸で德利を叩いて、

『久、生捕り物をお前に一晩預けるぜ。』

『合點だ。八十郎といふから爺だらう。相成る可くは別嬪さんの方だけ預り度えな。』

『阿呆。冗口叩く間に、でくの棒共を二三十人集めて置け。駕が二挺。當事の指圖は小平さんがするだらう。俺は、九の字の血鎗とちよいと双合はせをして見る。』

『何時になつたらこの人の、荒い氣性がなほらんすやら、つてね。平手先生。その病が癒らなきや、何時迄も國へ歸れませんぜ。笹淵先生の樣に、おつとりとおなんなせえ。』

『馬鹿野郎。餘りおつとりともしてやしねえぢやないか。今度の問題を拾つて來たのも、此の荒神樣だぜ。』

小平はぐいと一杯呷つて、

『俺は徒らに喧嘩種を拾つたのぢやない。貞女孝子を助けて不義を懲らし、天下の士道を明らかにするのだ。』

『いや大きい、全くだ。』

帆平の合槌に、造酒は些かてれて、

『俺だつて、其の義だなあ。でも忠だの義だのと、腐儒の講釋は俺あ嫌えだ。好む所に從つて行へば、是悉く義、ぢや。』
『酒を召上るのも義ですかい。』
『それは孝ぢや。養老の瀧を見倣つて居る。どれ、御輿を上げて、久の家で準備に掛らうか。』
造酒はふら〳〵してゐた。

殺生一匹！

長坂血鎗九郎の家では、主人を正面に、八十郎、芦邊要之助、其他の武家暴漢と、血鎗九郎にかね〴〵頭を抑へられてゐる旗本の荒い所が五六人、座敷に集つて、酒を汲んでゐた。血鎗九郎が、
『此の儘では面白くない。千葉の道場に行つて、笹淵に、お町はこちらに居る。ほしくば取りに來い、と申入れるのぢや。すると向ふでも引込みはつくまい。』
『いや、さうでなくてもあの捻くれ浪人共が、默つては居ますまいて。』
と言つたのは八十郎である。
『やれ、やれ、大いにやれ。千葉が何ぢや、笹淵が何ぢや。講武所に楯をついて、水戸や薩摩の田舍者を養成して威張り腐つてゐるのが、土臺氣に喰はぬ。浪人々々と、病犬見たいに恐れるが、野犬なら殺して了ふ可し。惜しむらくは、今の幕閣に、安部豐後守なき事ぢや。』
そろ〳〵怪しくなりかけた舌で、氣焔を上げてゐるのは、近々に甲府詰めになるらしいといふ噂のある櫻井主膳といふ男。
と、廊下に慌しい足音がして、
『曲者が、離れへ、女を――』
『何ッ！』
芦邊等の一黨、押取り刀で馳せ出す時、庭先の植込の中で、騒々しい人聲、劍の音。
『灯りを點せ！』
血鎗九郎の下知に、障子は開け放たれ、燭臺は運ばれる。だが大身の家とて廣々たる庭には、光りは屆かぬ。
高塀を乘り越えて侵入した曲者達は、警戒の番士を叩き倒し、お町を擁つて、植込みの闇を縫ひつつ裏木戸の方へ逃げてゆくのだ。
木戸の外には馬が三頭、駕が二挺。その周りに二三十人、押固つて、黑々と鳴りをひそめてゐる。
『久吉、頼む。』
お町の手を引いて出て來たのは、小平だ。今夜はこつちが覆面黑衣の忍び裝束。
お多久が、お町を駕に押しこんで、
『それ、一挺お先だ！』
心得て駕舁きが走り出すと、先に尾けてゆく奴が七八人。
『若し、咎める者があつたら、關はぬから、北町の手の者だと云へ。』
言捨てて、小平は再び邸の中へ取つて返す。
『笹淵さんは擊劍ばかりかと思つたら、盗みも巧めえや。』
お多久の呟きに、邊りの三四人、ぷつと噴出した。

小平、植込みの中に戻つて見ると、造酒と帆平二人、大分敵を誘ひ寄せて、あちらに隠れ、こちらに現はれ、惱ましてゐる。小平は地を匍つて縁側近く忍んでゆく。

『えゝ、何をのろ〳〵してゐる。斬り捨てろ、斬り捨てろ!』

血鎗九郎、短槍を杖に呶鳴つてゐたが、性來の癇癖、もどかしくて見て居られなくなつたか、たたつと、庭を走り出した。五六間後から續く八十郎。庭樹の前を通り過ぎようとする時、小平、地を蹴つて躍り立つと、ぐいと當てた無言の氣合。倒れる八十郎を諸手で受けて横抱きに、又じり〳〵と奥へ〳〵。

造酒は、血鎗九郎を見つけて、追手をあしらひ乍ら、

『血鎗、やい血鎗の九郎助。ぼんくら九郎助。此處だ〳〵。』

血槍九郎、怒り立つて、

『素浪、推參!』

走り寄つて突つ掛る穗先。造酒飛違へて、

『若いの未だ、手筋が。』

『うぬッ!』と手繰り出したのを、今度はぴたりと押へて、

『天下の義の爲、首を貰はうか。』

小平は、その傍を風の如く摺りぬけ乍ら、

『捕つた!』

『おゝ。』と造酒が答へた時、バラ〳〵と五六人取り圍む。その背後から、終始無言の海保帆平、いきなり敵の二人に峯打ち喰はせて、だつと開く中を、

『俺が運ばう。』

小平、帆平の手に八十郎を渡すが早いか、刀を振つて、追手の中に躍り込む。その間に、帆平は裏門へ駈けぬけた。

『そろ〳〵、歸らうか。』

造酒は鼻唄まじりで、併し充分の體配りを崩さず、血鎗九郎が穗先と、圍んでゐる鋩を睨み乍ら退り出した。

小平も、一定の間隔をおいて、じり

じりと後へ――。

突然、塀の外で『わあつ――』といふ多勢の叫聲と、人の走る足音。

追手が喫驚して立竦んだ瞬間、造酒を先に立てて、小平は裏門へ一目散。潜り戸をぬけようとずる時、横合の闇から、

『待て、笹淵!』と彈丸の様に飛びこんで、斬りつけて來た一人。慥かに聲は芦邊要之助。

小平、颯と地に伏して、拂ひ上げた烈刀。強たかに脾腹に斬りこんだので、

『ううつ!』と轉倒する。

小平振向いて、

『一匹、殺生。南無阿彌陀!』

と嘲笑つて、潜つた木戸を外からばたん。

お多久の一團既に影もなく、八十郎を抱いた帆平と、好い機嫌の造酒が、馬に跨つてゐる。

『早く、笹淵。』

帆平に急き立てられて、小平、後ろの馬にひらりと飛乘る。

折からの凩、ごうつと一陣、戛々たる蹄の音は、その凩の中に、忽ち聞えずなつた。

仇討ち對陣篇

兵法隨一

『さうか。到頭、そこ迄やつたか。』

小平の話を聞くと、千葉周作は微笑して、

『何はともあれ、仇討ちだけは、正式にさせねば、後が煩はしい。併し果して、上が受けつけてくれるかどうか。受けつけない、と言つても、やらぬ譯にはゆかぬのだから、兎も角も私が出掛けて談判して

やる。』
『宜敷くお願致します。』、
小平は頭を下げた。周作は小平の眼を凝つと見て、
『篠淵。貴公、そのお町の爲に、生命を捨てても、厭はぬか。』
輕い言葉ではあるが、それをどういふ意味にとつていいか――。小平は吾にもなく一寸顔を赧らめて、
『成りゆき次第――』
『うむ。では私の方の結果如何を待たず、討たせて了へ。仇討願ひを受けつけてくれるか、くれぬかはお上の勝手、役人の手心。私も北辰一刀派の千葉だ。理筋を通して爭へば、八分通りの自信はあるが、便便とそれ迄、手を拱いて待つ必要はない。長坂としても、昨晩からは、相當の心構へをしてゐるであらうから喃。』
『は――。併し、八十郎を手籠めにして討たせた、となると――』
『だから、お町と八十郎を道で行會はせればよいではないか。』
『成る程――。流石は兵法隨一、恐れ入りました。』
小平は周作に一禮して、退らうとすると、周作は呼止めて、
『どつちにどうなつても、貴公は當分、江戸を遠ざからねばなるまい。路銀。』
と言つて、金の包みを差出した。
小平は押戴いて、周作の厚情に涙を感じた。

腥風血雨

お多久の家に一晩監禁の憂目を見た八十郎は、縛めをとかれて、裏口から、路地へつき出された。
駕がそこに待つてゐた。
『お乘んなせえ。』
お多久が腰を突いた。
『無禮な。何をする。』
八十郎が睨むと、造酒が朝酒の臭い息を吐きかけて、
『乘らぬか。』
と胸倉取つた。八十郎は怨めしげに、
『覺えて居れ。』
と駕に入る。お多久と子分共がどつと笑つた。
『それ、刀――』
お多久が、大小を駕の中にはふりこむと、駕は直ぐ地をはなれた。
造酒は後ろの駕に乘つて、
『お玉ケ池にやれ。』
八十郎は、自分を千葉道場に連れこんで、嬲り殺しにするのか――と思ふと、お町に惚れたばかりに、こんな亂暴な素浪人共に、手ごめに會つて、七百石の直參ともあらう者が――と、情けなくもあり、憤ほろしくもなつて來る。
『たつた一人をとりこめて、卑怯ではないか。』
と駕の中から、叫んだが、造酒は鼻唄を唄つてゐた。
神田の通りを横へ切れて、駕が止つた。そして造酒と、八十郎を下

ろすと、駕はどん／＼走り去る。
千葉道場裏手の廣場である。
『どうするのだ。』
八十郎が言ふと、造酒はぴよこんと頭を下げて、
『御苦勞様で御座りました。ではこれにて、拙者、失禮仕る。』
と、ぶら／＼懐手をし乍ら、そこらを歩き廻つてゐる。何の事だか薩張り判らないが、逃げるなら今の中、と、八十郎、足早やに、もと來た道へ引返さうとすると、向ふから、お町を先に立てて、出て來たのは笹淵小平。ぎよつとして、引返さうとすれば、造酒が、ぎろ／＼眼を光らせてゐる。
お町は手早く、鉢巻をしめ、襷を綾どり、八十郎の前に突立つて、
『珍らしや、谷八十郎――』
と叫びかけると、造酒が、
『アハハ……珍らしくもなからうが、斬つて了へ、斬つて了へ。』
八十郎は嚇と頭へ血が上つて、羽織を捨て、雪駄をはねて、大刀を鞘拂ひ、
『返り討ちだ！』
二人は鋩すれ／＼に、相青眼の構へで、呼吸をつめて、氣合を計る。
何時の間にか、周圍は、海保帆平に率ゐられた千葉道場の門弟達と、見物に來たお多久の一味に取り巻かれて、
『貞女、しつかり。』
『八十、負けるな。』
などと、大道芝居でも眺める様な陽氣さである。
小平は、お町の横に付き添つて、鐵扇を握りしめてゐた。
ガッ！と二本の刀が合つた。八十郎の擊込みを、お町が受け止めたのだ。
『その儘、突いて入れッ。』
小平が聲をかけた。
お町、八十郎が摑んだ刄を放さうとするのにつけ入つて、
『えいッ！』と渾身の力を一刀にあつめた直刀突き。八十郎、首を捻つて危く避けると、流れた鋩。その一髮の間、八十郎の刀が横なぐりにお町の肩へ――。小平、素早く鐵扇を突出して、掬ふ様にその刀を止めると、左手の一拳、強たかに八十郎の顎を突き上げる。八十郎、よろ／＼とよろめく所に、お町が、懸命の袈裟掛け。美事きまつて、左肩口から右胸へ、斬り破つた着物の間からサッと血が飛ぶと、
『わあつ！』と喊聲が上つた。
八十郎は眼昏んで、猛然と手負獅子の様に狂ひつつ、目茶／＼に刀を振り廻す。お町は後へ／＼と退り乍ら、擊込みの隙を狙つてゐる。
其時、群集が、ざわ／＼とどよめいた。
『血鎗九郎が來たぞ！』
誰かの叫聲に、小平がのび上つて見ると、向ふの町角を、砂塵を蹴立てて、馬上に槍を閃かして來る武士。その後に多勢の一團、殺氣をはらんで、押寄せる氣配だ。
今はもう躊躇の時でない。小平、一歩踏出して、

『とうつ！』と一聲。鐵扇振つて、八十郎が刄を跳ね落すと、得たりとお町、胸へ一突き。それをまともに喰つて、

『ううむ！』と倒れる八十郎の上に、乘り掛つて、お町は止めの一刀。

その間に、造酒と帆平は、人垣の前に立塞がつた。

馬を飛下りた血鎗九郎、槍を杖に、

『素浪人共、谷を渡せ。八十郎を返せ。』

と滿面の怒氣。

『左様な御仁は存ぜぬ。』

と造酒が嘯く。

『何を白ばくれる。昨夜、吾邸に忍びこんで、狼藉の上、引攫つて置いて、存ぜぬなどとは、卑怯千萬な。』

『これは迷惑、證據あつての論判か。』

『證據？』

ぐつと詰つた所へ、冷やかに、

『今そこで、行摺りの仇討ちがあつた。討つたは女、討たれた方は旗本らしい武士だ。谷とか申される人ではないか。お檢べになつたら宜敷からう。』

血鎗九郎、既に八十郎が討たれたと知つて、

『己れ、無法な振舞。この上は、汝等が相手だ。參れッ！』

と槍取直してぴたりと構へると、從ふ面々三十人餘り、一齊に白刄を拔き連れた。

『理不盡な。千葉道場を侮つて、喧嘩を賣る氣かッ。』

造酒が喚くと、千葉の門弟達も、拔刀する。白晝、江戸の眞中で、物凄い血の雨が降らうとして、まさに腥風樓に滿つるの觀だ。

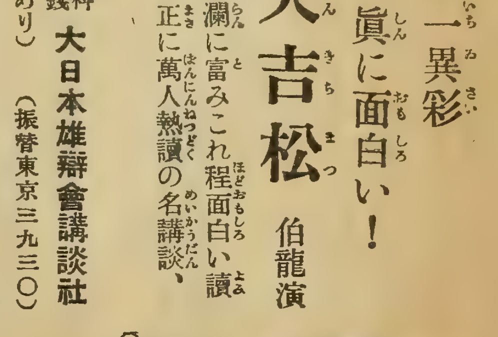
折も折、又しても戞々と馬蹄の響き。

『待つた！　待つた！』

大聲あげて駈けこんで來たのは、千葉周作を先頭に、奉行所役人五六人。

『畔柳英之丞の妹お町が、谷八十郎に對する仇討ち願ひは、南町奉行の計ひに依つて、公儀御帳にお屆け濟みに相成つたぞ。この上、刄傷沙汰に及ぶものは、双方共、天下の暴徒と相成らう。控へい。退け。』

師匠の叱聲に、千葉方の者は、刄を收めて、どつと退く。

俠客傳中の一異彩
面白い、眞に面白い！
評判講談 祐天吉松 伯龍演
俠客物の中これ程波瀾に富みこれ程面白い讀ものは蓋し珍しい。正に萬人熱讀の名講談、是非御覽下さい！
布裝美本 定價一圓 送料十二錢 大日本雄辯會講談社
（全國書店にあり）（振替東京三九三〇）


血鎗九郎は歯がみをしたが、正當の手續き踏んだ仇討ちであつて見れば、追つかないし、殊には奉行所役人の前、非を理に通す横車も押せぬ。すご〳〵と槍をさめて引揚げて行つた。

結び

さしもに暗雲を孕んで、どうなるかと思はれた此の大事件も、本人のお町と、笹淵小平が江戸を逃れ、平手造酒が、千葉道場を破門、といふ事で一段落ついた。

本人達が居なければ、旗本の方でも喧嘩にならないし、又、千葉道場で、師範代の平手造酒を、旗本に對する遠慮から、といふ名目で、破門の形式を取つた以上、暴れこんでゆく筋はなくなつたのだ。

造酒は格別破門を苦にもせず、飄々として房總に遊び、持つて生れた俠客氣分から、笹川繁藏の食客となり、飯岡助五郎との大喧嘩で、いやが上にも有名になつたことは、天保水滸傳で、讀者諸氏は先刻御存知であらう。海保帆平は穩健な人だから、長く千葉門下に在つて劍名を轟かした。

が、そんな事は何れも後日の話。江戸を逃れた笹淵小平と、お町はどうなつたか。

どうなつたかと氣にかけるだけ損である。一方は稀代の劍豪、一方は絶世の美女、當然二人は一緒になつて、中國岡山の城下で、鴛鴦の契り睦じく、極めて安穩な生活を送つた。（終り）

文部大臣　鳩山一郎閣下跋　茅原華山先生著

『日本國民に遺言す』好評忽ち六版!!

國同總裁安達謙藏先生曰く『日本國民に遺言す』は近來の快著也、天に向つて、何故に君の如き人物を今日の樣な境遇に置くかと質問致度相成候云々……

本書は一世を風靡した茅原華山先生が、滿身の熱血を注いで十數年の思索と體驗を披瀝して全國民に訴へたもの、これこそ日本國民の實生活に光明を與へ希望を與ふる名著として、一流大家諸名士擧つて御推奬！　青年男女學生は勿論、官公吏も、軍人も、會社員も、非常時日本の全國民は一人殘らず御覽下さい。

（定價一圓二十錢　送料十錢　本社發行）

三ブちやんと梅雨
小寺鳩甫作
① 水道はイクラでも出るものだなア
② 水を無駄使いしてはいけません
③ 雨が無くてお百姓さんたちが大困りの時よ
④ そのやうな捨て方をしないものよ
⑤ 庭樹にかけておやり

⑥
くたぶれちやつた
⑦
雨が無いと困るもんだなア
⑧
よしッ雨を呼んでやる
⑨
お百姓さんも喜ばせてやらう
⑩
雨ふれ〳〵ガア〳〵
ガア〳〵
ガア〳〵
ガア〳〵
⑪
雨なんか降らしては駄目だよ

⑫
約束のボートに乗りに行けないや
⑬
蛙どもッやめろッ
⑭
曇つたようなら日和坊さんに頼もう
⑮
ぼくにも漕がせておくれよ
⑯
池に水が無いよ
⑰
やはり雨がいるだらう

ジヤンジヤン降ってはボートに乗れない
すぐ止む夕立がよい
夕立は雷に頼まないとナカ〱来ないもんだよ
雷に頼む事ならナンでもないよ
早く起きて雨を降らせておくれよッ
俺は雨など降らせないよ
だって皆が雷親爺といってるんだよ
ええッ

長篇小説

薔薇（ばら）

色の道

中村武羅夫
寺本忠雄畫

膝の上の頭

三人が、自動車を飛ばして、横濱の町に入つた時には、既に、日はとつぷり暮れてゐた。

街通りには、ネオンサインや、裝飾電燈の光りが、華やかに流れてゐた。

自動車は、櫻木町驛の前を通り、馬車道を過ぎると、直きに吉田橋を渡つて、松屋の前から、左りに曲つたが、早苗は、ずゐぶん遠くまで來たやうな氣がした。それに、自動車の窓から瞥見する街々の風景が、やつぱり東京とは違つて、何んとなくエキゾチックな感じがした。

「まだなの？」

早苗は、自動車が仄暗いやうな通りを、いつまでも走りつゞけてゐるので、ちよつと不安な氣がした。

でも、彼女は、岩崎と口を利くのは、あまり好まなかつた。青木とは、二三度會つたことがあるだけで、實際に顔を見るまでは、思ひ出せなかつたくらゐであるが、それでも青木の方に、信頼も出來るやうな氣がし

（前號迄の梗概）青年高濱陽一郎は、早苗といふ許婚迄ある身で放埒に耽つてゐたが、同時に彼は儚なく純情で、瀕死の踊り子マユミを最後迄眞心以て看護り、とゞ死に行く彼女の前で、其妹の絹子と結婚する事さへ誓つた。一方、絶えて歸邸せぬ許婚の事を案じ煩ふ早苗は、折から訪れた陽一郎の從兄弟岩崎の口から、彼がキャバレーの踊り子に溺惑してる事を聞かされて胸を顫かす。而も密に早苗を思ひ且つ高濱家の財を狙ふ岩崎は、氣配を悟つて益々話に輪をかけ、遂に青木といふ陽一郎の友人が、猶委細の事情を知つて居るからとて、强ひて彼女と同伴して其青木のアパートに乘りつけた。

たし、親しみも感じられた。

だから早苗は、自動車の中でも、岩崎には、なるべく口を利かないやうにしてゐた。必要があれば、青木に話したり、聞いたりするやうにした。

『もう直きです。』

青木は、飲み過ぎのせゐだらう。少し蒼ざめた、元氣のない顔をして、くつたりと、クツションに凭れてゐた。

『退屈したんですか？』

岩崎が、媚びるやうな微笑を湛へた瞳をして、早苗の顔を覗き込んで、かすかに囁いた。

早苗は、ぞつとするやうな嫌悪を感じて、思はず身體をすくめると、殻に入つたやうに固くなつた。

『いゝえ。』

と言つて、かすかに頭を掉つた。いくら、陽一郎を迎ひに行くためとは言へ、岩崎と一緒のことが、早苗には、つくづくイヤで堪らなかつた。

嫌はれゝば嫌はれるほど、猶ほ、執着せずにはゐられない岩崎だつた。自分が、口を利いただけで、早苗の美しい眉宇の間に、暗い、嫌悪の表情が現はれたのを、素早く見て取ると、さすがに岩崎の顔にも、むつとした色が浮んだ。

（どこまで、おれを嫌つてゐるんだ！　だが、今に見ろ！）

忌々しさうに、岩崎は心で呟いたが、直ぐに平靜に返ると、顔色をやはらげて、

『もう五分と經たない中に、陽一郎君に會へるんですよ。』と、早苗の耳の傍に口を寄せて、意味あり氣に囁いた。

『…………』

早苗は、返事をしなかつた。

『ほんたうは、僕は、早苗さんは、キャバレーなんかに入つて、高濱君に會はない方が、いゝと思ふんだけれども……』と、青木は獨りごとのやうに言つた。

もとく青木は、東京を出る時から、その意見だつた。自分

と岩崎と、二人で迎ひに行つて、連れて歸ればいゝので、キヤバレーなんか、早苗のやうな淑女が、行くべきところではないと言ふのである。どんなことをしても、陽一郎は、二人で連れて歸るから、早苗は屋敷に歸つて、待つてゐる方がいゝといふ意見だつた。

だが、どういふものか、青木の其意見に、岩崎は強く反對した。早苗が一緒に行かなければ、二人だけで行つたところで、それは無駄だと言ふのである。醉つぱらつてゐる時の陽一郎が、二人の言ふことを聞いて、素直に歸るやうなことは、絶對にないから、早苗が一緒に行つてくれなければ、折角、迎ひに行つても、何んにもならない結果になる。飽くまで、早苗が一緒に行くことが必要であると、主張して止まなかつた。

岩崎は、早苗と一緒に出かけて來たのに、途中で別れてしまふのが、殘念だつたばかりではない。屋敷を空けてゐる間の陽一郎が、どんな風に醉つぱらひ、どんな狂態を盡してゐるかを、直接、早苗に見せたいと思つた。

たとへ、早苗が、どんなに陽一郎を熱愛してゐるとしても、實際、陽一郎の狂態を見たら、きつと愛想を盡かさずにはゐられないだらうと思つた。

それが、わざ〳〵早苗を一緒に連れて來た、岩崎の大きな期待だつた。

『君は、まだ、そんなくだらないことを、言つてゐるんか。』

と、岩崎はどなりつけた。

『だつて、さうぢやないか。キヤバレーなんて、あまり感心したところぢやないからな。』

『感心したところでなくたつて、陽一郎君が、そんなところに入りびたつて、出て來ない以上、斯うして迎ひに行くよりほか、仕方がないぢやないか。』

『だから僕は、迎ひに行くのはいいけれども、何もわざ〳〵、早苗さんまで煩はさなくたつて、僕たち二人だけで、迎ひに行けばいいと、言つてゐるんだ。』

『それで、陽一郎君が歸つて來なかつたら、どうするんだ。』

『大丈夫だよ。』

『大丈夫なことがあるものか。僕たちの言ふことを聞いて、素直に歸るやうな陽一郎君でないことは、君にだつて、疾つくに分つてゐるぢやないか。』

『だが、そこを何んとかして、連れて歸ればいいぢやないか。』

『何んとかするつて、一體、どうするんだね?』

と、岩崎は冷笑した。

『どうするつて……よく、わけを話すのさ。』

『どんなわけを?』

『迎ひに來たわけを。』

『いくらわけを話したつて、二人とも引き留められて、また今夜も、徹夜して飲むことになるだらう。』

『まさか。』

『ほんたうだよ。』

『高濱君だつて、そこまでは、理性を失つてゐないよ。』

『分るものか。』

岩崎は吐き出すやうな調子で言つたが、

『それとも、君は今夜も、陽一郎君を取り巻いて、大いに飲みたいといふ肚があるなら、別問題だがね。』と、皮肉に言つて、意地悪い微笑を浮べた。

『君は、僕を侮辱してゐるのか!』

さすがに人の好い青木も、さつと顏色を變へた。

『侮辱するものか。』

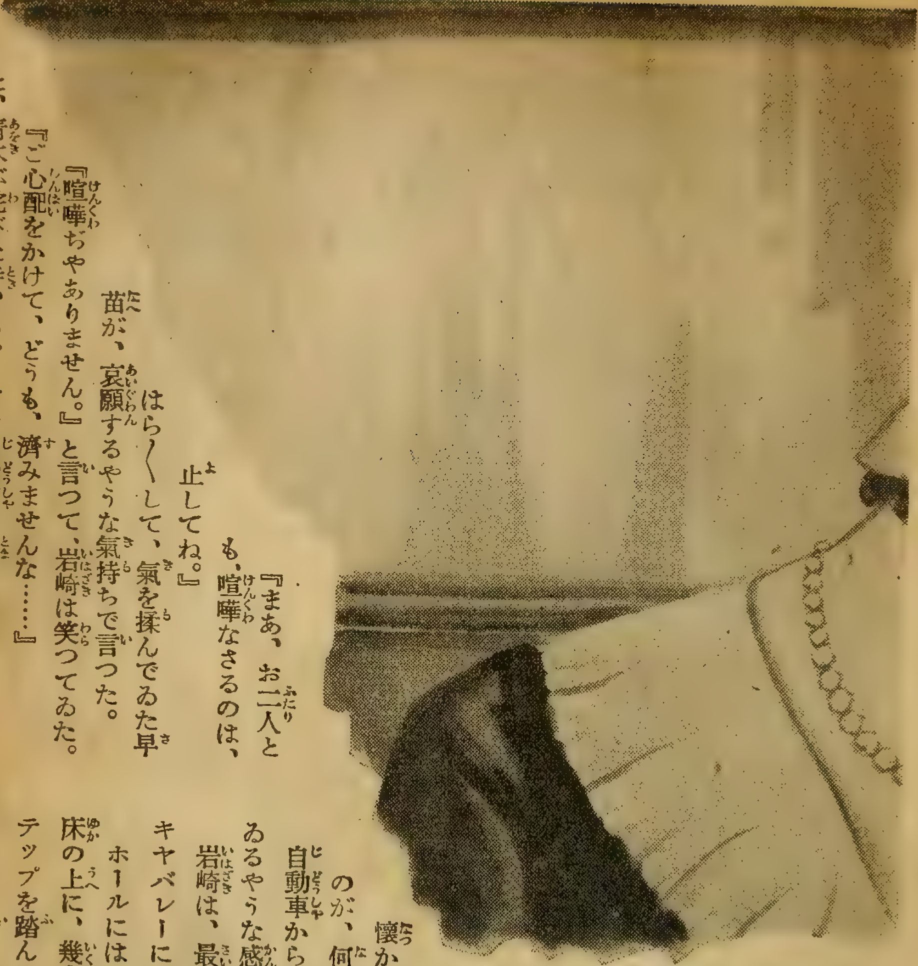
『僕は、君の言ふやうな、そんな卑しいことなんか、考へたこともないんだ。』と言つた青木の聲は、かすかに顫へてゐた。

『それなら、それでいいぢやないか。何も君のやうに、そんなにむきにならなくたつて。』

と、岩崎は苦笑に紛らせた。

『君が、あんまり、聞き捨てにならないことを言ふからさ。』

青木は、怒氣のために、少し呼吸を彈ませてゐた。



『まあ、お二人とも、喧嘩なさるのは、止してね。』

はら／＼して、氣を揉んでゐた早苗が、哀願するやうな氣持ちで言つた。

『喧嘩ぢやありません。』と言つて、岩崎は笑つてゐた。

『ご心配をかけて、どうも、濟みませんな……』

と、青木が詫びた時、ちやうど、自動車が留つた。

華やかな電氣の光りと、ヂャズの音と、なまめかしい男女の笑ひ聲とが、外まで洩れて來た。

『こゝですよ、陽一郎君がゐるといふのは。』

岩崎はさう言つて、早苗を先きに降ろしてから、自分もつゞいた。

早苗は、こんなところに入つて行くのは、初めてだつた。東京のダンス・ホールには、時々お友達と一緒に、踊りに行つたことがあるし、ホテルのパーテイにも、幾度か行つた。けれども、第一、横濱といふところには、數へるほどしか來たことがないし、況んやキャバレーになど、一度だつて、足踏みしたこともない。

早苗は、こゝに陽一郎がゐるのかと思ふと、懷しさは懷かしかつたが、でも、こんな初めてのところに入つて行くのが、何んだか恐ろしかつた。

自動車から降りて、大地を踏んでも、身體がふら／＼して、搖れてゐるやうな感じがしてゐるし、胸も、脚も、かすかに顫へてゐた。

岩崎は、最後に青木が降りるのを待つて、早苗を促がして、K・Sキャバレーに入つて行つた。

ホールには、華やかなシャンデリアが輝いて、ぴか／＼光つた廣い床の上に、幾本かの男女の足が入れ亂れて、フォックストロットのステップを踏んでゐた。

『あら、入らつしやいませ。』

蜂眉を引いて、アイシャドウで、眼のまはりに薄青い影を作つた、

イートンクロツプの女が、青木の姿を見ると、微笑して迎へた。

彼女は、カウンターのところに立つてゐたが、ハイヒールで、滑つこい床を踏んで、近づいて來た。

『高濱君は？』

青木は、小聲で聞いた。

『あちらの、スペシアル・ルームにゐらつしやるわ。』

と、蜂眉の女も、青木の後ろにゐる、見知らない早苗と、岩崎とを憚かるやうに、急に聲をひそませた。

『飲んでるの？』

『えゝ。』

『どうも驚いた。それでよく、身體がつゞくものだな。』

青木は、驚嘆したやうに言つて、眼を見張つた。

『ほんたうに！　わたしたちも、びつくりしてゐますの。』

『ちよつと、會ひたいんだが。』

『あなたならいいでせうけれども……』

と、蜂眉の女は、ちよつとためらつて、ちらと早苗と、岩崎の方を見た。浮つかり知らない人を、案内してもいいかどうか、分らなかつた。

『いいんだよ。この方たちは、高濱君の家の人だから。』

と、青木が説明した。

『では、どうぞ。――知らない人を通してはイケないからつて、マダムに言はれてゐるものですから。』

女は辯解した。

『マダムも、一緒？』

『えゝ。』

『さうか。』

青木が先きに立つて、三人は、ホールの向ふのスペシアル・ルームの前に、つか／＼とすゝんで行つた。

『こゝにゐるんだね？』

部屋の中は、ひつそりしてゐたが、岩崎は入口に立つて、蜂眉の女を振り返ると、ちよつと確めた。

蜂眉の女が、默つて、かすかに頷くのを見ると、岩崎は、形式的なノツクをしたが、返事も待たないで、行きなりドアを開けると、つかつかと入つて行つた。

八疊くらゐな廣さの部屋に、粗末な椅子と、テーブルとが置いてあつた。窓際には長椅子を置いて、そこに半裸體のやうな洋装のマダムが、くつたりしたやうに身を凭れてゐると、上衣を脱いで、ワイシヤツと、チヨツキの男が、彼女の豐滿な膝に、子供のやうに顔を俯伏せてゐた。

部屋の中の照明の光りは、仄暗くて、緋色の壁紙や、焦茶色のカーペツトや、すべての器物や、人の姿などを、さながら夢のやうに、ぼんやりと照らしてゐるのであつた。

小さなテーブルの上には、ウキスキイの瓶や、シヤンパン・グラスなどが、散らかつてゐるし、テーブルの下には、シヤンパンを冷やす氷

の入つた桶や、空瓶などが、亂雜にころがつてゐた。長椅子の向ふの窓硝子が開いて、夜の微風が、時々、そよ〳〵と流れて來る度びに、涼しさうな水色の紗のカーテンが、ひら〳〵と搖れてゐた。

マダムの膝に、顏を伏せてゐるのは、まぎれもない陽一郎に、ちがひなかつた。――二人は、人の入つて來たのも知らずに、酒に飲み疲れたのだらう。すや〳〵と眠つてゐる。

『高濱君。』

岩崎は、入口のところに突つ立つて、呆れたやうな眼をして、部屋の中の光景を一瞥すると、ちらと早苗を振り返つて、その顏に侮蔑的な冷やかな微笑を、ほのかに浮べたが、直ぐに、長椅子の傍に、つかつかとすゝんで、遠慮もなく聲をかけた。

早苗は、その光景を一眼見た時、あまりの淺ましさに、思はず自分の眼を掩はずにはゐられなかつた。このまゝ、何んにも言はずに、驅け出して、歸つてしまひたいと思つた。

どうして、こんなに酒が好きなのか、それとも何か、酒でも飲んで、醉つぱらはずにはゐられないやうな、特別な理由でもあるのか。

それは、早苗には分らなかつた。

でも、純眞な處女の氣持ちを捧げて、心から陽一郎を愛し、慕うてゐる早苗は、自分の愛してゐる陽一郎が、いくら酒に醉ひしれてゐるとは言へ、こんなところで、こんな風に女の膝なぞに顏を突つ伏して、前後も知らずに眠りこけてゐる姿を見ると、淺ましいと言つていいか、情けないと言つていいか、分らなかつた。折角、こゝまで迎ひには來たやうなものゝ、こんな光景を見ると、どうしたらいいか、急には分別も附かなかつた。

見ると、陽一郎に膝を貸して、自分もすや〳〵と眠つてゐる、半裸體のやうな洋裝の女は、いつぞや三河臺の屋敷に、突然訪ねて來て、一度、會つたことのある女であることが分つた。

すると、あの時あの女は、たしか横濱で、キャバレーを經營してゐると言つてゐたが、このキャバレーだつたのか。マユミといふ踊り子が、行方不明になつて、その踊り子を、陽一郎が隱したやうな口ぶりだつたが、それならマユミは、今はどうなつたのだらう？

咄嗟に、早苗の頭には、いろんな疑惑が走つた。

『高濱君。』

一度呼んでも、容易に眼を覺まさないので、岩崎は、早苗の方を振り返ると、(仕樣がないな。)とでもいふやうに、ちよつと舌打ちしたが、また、今度は聲をいくらか高くして、呼んだ。

『…………』

それでも陽一郎は、同じやうにくう〳〵眠つてゐたが、マダムの方が、ぽつかりと眼を開いた。

口を利かなかつたけれども、びつくりしたやうに、その美しい眼を見張つて、思ひがけない三人の姿を、きよろ〳〵見詰めてゐた。

『やうやく、眼が覺めたんですか。――ずゐぶん、よく眠つてゐたものぢやありませんか。』

マダムの傍近くに立つてゐた岩崎が、馴れ〳〵しく言つた。

『あなた方は?』

(どうして、こゝに入つて來たんのです?)といふやうに、マダムの眉が、ひそめられた。

『僕たちは、高濱君の迎ひに、やつて來たのです。』

と言つて岩崎は、青木の方を振り返つたが、青木は、岩崎の後ろに隱れるやうにして、うじ〳〵してゐた。

『あら、青木さんも、ご一緒なのね。』

マダムは、隱れるやうにして、顏を伏せてゐる青木の姿を、初めてたしかめると呼んだ。

『どうも……』

青木は、口籠つて、ます〳〵岩崎の後ろに小さくなりながら、頭を搔いてゐた。

惡夢の中

『高濱さんのお迎ひつておつしやるのは……お屋敷からでございますの?』

マダムは、自分の膝の上に突つ伏してゐる陽一郎の頭を、さながら子供の頭でも愛撫するやうに、そろ〳〵と撫でながら、改めて聞いた。

『何しろ、四日も五日も、家を空けたまゝ、歸つて來ないものですからな。』と、岩崎が言つた。

『それで、お父さまが、ご立腹なすつてゐらつしやいますの?』

『早苗さんが、一人で、心配してゐるのです。』

『まあ、お孃さま。』

マダムは、その時、初めて氣が附いたやうに叫ぶと同時に、思はず長椅子から、身を起さうとした。

だが、膝の上に、陽一郎の頭が、載つてゐることに氣が附くと、立ち上ることが出來なかつた。

『ご免あそばせ、こんな恰好をしてゐまして。』

それでもマダムは、恥含むやうに、顏を赧らめると、片手では、やつぱり、陽一郎の髮の毛をいぢくりながら、片手で口もとを抑へた。

『…… ……』

早苗は、どう言つて挨拶したらいいのか、分らなかつた。陽一郎にこそ、言ひたいことも、聞きたいことも、山ほどあるのだが、マダムになど、何んにも言ふことはなかつた。

だが、折角、斯うして迎ひに來て見れば、陽一郎は、マダムの膝になど凭れて、前後も分らずに、眠りこけてゐるのである。

早苗は、淺ましいやら、心細いやらで、泣き出したいやうな氣がした。

でも、こゝで、氣を弱くしてゐては、イケないのだと思つて、自分で自分の勇氣を勵ました。

思ひ切つて、つか〳〵と、長椅子の前まですゝむと、行きなり陽一郎の背中に、やさしく手をやつて、

『陽さん、陽さん。迎ひに來ましたのよ。お眼ざめになつて下さいな。』と、一生懸命に言つた。
『あら、お起しにならない方が、好うございますわ。』
マダムは、早苗の態度に、むつとしたやうに、片方の手で遮つた。
『まあ、どうして？』
と、早苗は、眼を見張つた。
咎めるやうなマダムの態度が、早苗の氣持ちを傷つけた。
『折角、よくお眠りになつてゐらつしやるのですから。』
『でも、わたし、早く屋敷にお連れして、歸らなければなりませんから。』と、早苗は恥かしさうにして、口籠り勝ちに言つた。
『お孃さま。あなたは、何んにもご存じないのでございませう。』
マダムは、改つた調子で言つた。
『えつ。』
『あなた方が、斯うしてお揃ひになつて、折角、お迎ひにいらしても、高濱さんは、お屋敷にお歸りになるかどうか、分りませんのよ。』
『どうしてゞせう？』
と、早苗は反問して、息を呑んだ。
『それは、自棄になつてゐらつしやるからですわ。』
『なぜ？』
『いつか、わたくしが、お屋敷に伺ひました時に、お話しいたしましたでせう。あの子が――マユミが、たうとう亡くなつたのですわ。』
『まあ。』
『そのために高濱さんは、すつかり失望してゐらつしやるのよ。もう生きてゐることもイヤだなんて、おつしやつてゐるのですもの。』
『まあ。そんなことを……』と言つて、早苗は恐ろしさうに肩を竦めた。
『屋敷にも歸らないし、誰の顔を見るのも、イヤだなんておつしやつて……お酒ばかり召し上つてゐらつしやるんですもの。』
『……………』
早苗は無言のまゝ、絶望的な眼色をして、呼吸を喘がせてゐた。
『青木さんは、昨夜も一緒に飲んで、そのことは、よくご存じぢやありませんか。それだのにお孃さまには、お話しにならなかつたの？』
と、マダムは、青木に向つて言つた。
『そのことは、まだ、話してゐなかつたのですが。』
と、青木は呟いた。
『早く、お話しして上げれば、いいのに。』
『だが、何しろ醉つぱらつて、口走ることですからな。どこまでが本當で、どこまでが出たらめだか、分らないものですから……』
『いくら醉つぱらつてゐらしても、おつしやることは本當ですのよ。何度も〳〵繰返して、同じことばかり、おつしやるのですもの。』
『屋敷には、歸らないと言ふんですか。』と、岩崎が確めた。
『えゝ。』
『それが本當だとすると、困つたものだが……早苗さん、どうしま

す？』と、岩崎は口ではさう言つても、一向、困つたやうな樣子もなかつた。

『でも、わたし、どんなことをしても、ご一緒に、歸りたいと思ひますの。――歸らなければなりませんわ。』

と、早苗は強い決心を見せて、きつぱり言つた。

『歸らなければならないと言つても、醉つぱらつて眠つたまゝ、起きないものは、困るのだが。』

と、岩崎は呟いた。

『だが、斯うして三人で迎ひに來たのだから起さなくてはならないよ。』と、青木が言つた。

『でも、斯うして眠つてゐらつしやる間だけが、高濱さんに取つては、天國なんですから。折角、何もかも忘れて、よく眠つてゐらつしやるものを、わざ〳〵お起しするなんて、罪ですわ。』

マダムは庇ふやうに言つて、右の手で、

房々した陽一郎の髪の毛を、いぢくつてゐた。
『起すと、亂暴でもするんですか。』
と、岩崎が聞いた。

『いゝえ。亂暴なんか、なさるものですか。』
『ぢや、その何んとかいふ踊り子が亡くなつたために、悲しんでゐるのですか。』
『えゝ。そのために、お酒でも召し上らずには、ゐられないのですわ。』
『どうします？　早苗さん。』と、岩崎は、早苗を振り返つた。
早苗は、折角、こゝまで迎ひに來たものを、どんなことがあつても、いつしよに連れて歸らなければならないと思つた。

でも、子供のやうになつて、眠入つてゐるのを起すのも、あまりに無慈悲なやうな氣がした。

『………』

早苗は、どうしたらいゝか分らないので、途方に暮れたやうに、默つてゐた。

『事情が分つて見ると、起すのも氣の毒ですから、こゝは、このまゝ歸つた方が、いいではないでせうか。』

『でも……』

早苗は、何か言はうとして、口籠つてしまつた。

『どこにゐるのか、分らないやうだと困るけれども、こゝにゐることが分つてゐれば、このまゝ歸つても、いいではないでせうか……』

『若し、こんなことが、をぢさまに分ると、困りますから。』

と、早苗は思ひ切つて、やうやく言つた。

『では、起して、どうしても連れて歸るのですか。』

岩崎はむつとして、いくらか詰るやうに言つた。

『……』

早苗は、岩崎に強く言はれると、その上、何んにも言へなかつた。

『とに角、たとへ事情は、どうであらうとも、やつぱり起して、連れて歸らなくては、イケないな。』

青木が、いつもの人の好いのに似合はず、決然として言つた。

『君は、さう思ふのか?』と、岩崎は怒つたやうに言つた。

『當り前ぢやないか。踊り子が死んで、どんなに悲しいか知れないけれども、三日も四日も屋敷に歸らないで、こんなところで飲んだくれてゐるなんて、それは決して褒めたことぢやないからな。』

『まあ。あんな尤もらしいことを言つて。ご自分だつて、昨夜も一昨日も、あんなに醉つぱらつたくせに。』

と言つて、マダムはその美しい顏に、皮肉な微笑を浮べた。

『いや。自分のことを言はれると、面目ないが……』

と、青木は頭を掻いてゐた。

早苗は、マダムも岩崎も、何んだか陽一郎を起さないで、このまゝにして置いた方が、いいやうな口吻だのに、青木一人が、自分の味方をしてくれるのが、頼もしい氣がした。

その時、陽一郎は、部屋の中が、あまり騷〳〵しいので、自然に眼が覺めたのだらう。

かすかに身動きをして、マダムの膝の上の頭を、少し擡げたと思つたら、眼を開いた。

初めは、意識がハッキリしないらしく、酒と不眠とに濁つた瞳を、ぼんやり開けてゐるだけだつたが、その中、その瞳と顏とに、次第に表情が現はれて來た。驚いた、落着きのない眼が、皆なをぐるりと見まはしてゐたが、早苗や、岩崎の姿を見ると、急に不機嫌になつた。

『まあ、やつとお眼ざめになりましたのね。』

早苗は思はず叫んで、陽一郎の傍に驅け寄つた。

『何しに、こんなところまで、來たのです?』

陽一郎は、濃い眉を蹙めて、怒つたやうに言つた。

『わたし、あなたのお迎ひに來ましたの。』と、早苗はおづ〳〵言つた。

『父の命令ですか?』
『いゝえ。』
『あなた一人の考へで、迎ひに來たのですな。』
『えゝ。』
『迎ひになど來てくれなくたつて、好かつたのです。』
『まあ。』
早苗は、頭から叱りつけられたやうな氣がして、今にも泣き出しさうになつたのを、やうやく我慢してゐた。
『僕は、當分、自由にして、何をしようと、打つちやつて置いて貰ひたいんだ。』と、陽一郎は絶望的に言つた。
『どうして、そんな自棄なことばかり、おつしやるのでせう。』
早苗は、途方に暮れたやうに言つて、溜息を吐いた。
『僕は、これから、この世の中に、生きて行く希望も、勇氣も失つたのだ。早く、死んだ方が、いいと思つてゐるんだ。』
『まあ。』
『僕を慰めてくれるのは、酒だけだ。イヤ、慰めてくれるのではなくて、苦痛を忘れさせてくれるのだ。』
『ね、陽さん。どうぞ、わたしといつしよに、お歸りになつて下さいませな。』と、早苗はおろ〳〵して、哀願した。
『歸らないよ。』
『でも、こんなことが、若し、をぢさまに分つたら、どうなさるの?』
『構ふものか。』
『また、そんな無茶なことを、おつしやつて。』
『ほんたうなんだ。』
『でも、今度、こんなことが、をぢさまに分つたら、あなたは、屋敷にゐることが、出來なくなりますのよ。』
『僕は、あんな屋敷に、ゐたいとは思つてゐないんだ。』
『まあ。』
『僕は、苦しいんだよ。』
と言つて、陽一郎は、胸を掻き挘るやうにした。
毎日飲みつゞけた酒が、一時間や二時間の睡眠で、醒める筈はなかつた。まだ、正氣に返つてゐるわけではないのだらう。顔の色は蒼白になつて、瞳は悲痛な色に、キラ〳〵燃えてゐた。
『お願ひですから、どうぞ、屋敷に歸つて下さいませな。』
早苗は、繰返して哀願するよりほかなかつた。
『イヤだ。』
『まあ。』
『酒だ〳〵。酒を飲むんだ。マダムも飲めよ。靑木君も岩崎君も、いつしよに飲まうぢやないか。早苗さんも、迎ひに來たの、いつしよに歸らうのと、そんな面白くもないことは言はないで、皆なと一緒に、大いに愉快に、飲まうぢやないか。おい〳〵、シヤンパンを持つて來い!』
陽一郎は、急に快活に叫ぶと、自分でウヰスキイの瓶を取つて、なみ〳〵と、大きなシヤンパン・グラスに注いだ。その手は烈しく顫

へて、グラスを唇に持つて行かうとすると、縁を溢れるウヰスキイが、たら／＼とこぼれた。

『ね、もうこの上、お酒を召しあがらないでね。』

早苗が、やさしく言つて、グラスを取らうとすると、

『何をするんだ！』

と、陽一郎は一喝して、大きなグラスに一ぱい注いだウヰスキイを、ぐつと一氣に、呷つてしまつた。

『まあ。』

早苗は、泣くにも泣けなかつた。良心も、義理も、人情も、痲痺してしまつたのかと思ふと、情けないよりも、むしろ恐ろしい氣がした。

『酒だ／＼。皆な飲め！　一緒に騷げ！　我が苦惱と、心の痛手とを忘れさせるものは、酒よりほかにないのだ。』

陽一郎は叫びながら、すつくと立ち上つて、よろめく足で踊るやうに、部屋の中を、どた／＼と驅けまはつた。

どうにも、手が附けられなかつた。

早苗は、ぼんやりして、まるで惡夢の中で、魘されてゐるやうな氣がした。悲しみと、苦しみの溢れる眼をして、ぢつと陽一郎の狂奔する有様を、眺めてゐるよりほかなかつた。

だが、馬鹿のやうに、氣狂ひのやうになつて、部屋の中を驅けまはつてゐる陽一郎の眼に、薄く涙がにじんでゐることを、早苗は、眼ざとく見てゐた。

早苗の胸は、一層切なく、遣る瀨なくなつた來た。

託された女

朝の食事の時、惣造は、食後の果物を食べた手を、ナプキンで拭きながら、

『陽一郎は？』

と、早苗に向つて聞いた。

惣造が、陽一郎のことを、早苗に聞くことなど、滅多にないことだつたので、早苗はハッとした。

だが、洋館の二階の自分の部屋に、寢てゐることを思ふと、早苗は、直ぐに安心して、何氣なく、

『二階のお部屋に、おやすみになつてゐらつしやいます。』

と、答へることが出來た。

早苗は、（まあ、好かつた。）と思つて、ほつとした。

これが、若し、昨日聞かれたのだつたら、どう言つて返事をしたらいいか、分らないところだつたと思つた。

醉つぱらつて、どうしても歸らないと言つて、手も附けられないのを、やうやく無理に連れて歸つて置いて、好かつたと思つた。若し、マダムや、岩崎が言ふ通りに、あのまゝ置いて歸つてしまつたら、今、惣造から聞かれて、或ひはぼろを出してしまふところだつたかも知れない。

『どうも、毎日々々、寢坊をして、困つたものだな。』

と呟いて、惣造は濃い眉を、ひそめてゐた。

『明日から、早くお起きになるやうに、申し上げて置きますわ。』

『なか〳〵、素直に言ふことを聞くやうな奴でないものだから……』

『でも、さうでもございませんわ。』と言つて、早苗はにつこりした。

『夜は、相變らず遲いやうだし、朝は寢坊するし……わしと顏を合せることなど、一ケ月の中に二三度もない。これでは困つてしまふ。』

『あの、わたしからも、よく申し上げて置きますから。』

『あんたには、氣の毒だと思つてゐるのぢや。』

『まあ。』

『陽一郎には、わしから、よく言ひ聞かせなければならないことがある。――眼を覺ましたら、あんたから、そのことを言つて置いて下さい。』

と言つて惣造は、食卓から離れると、食堂を出て行つた。

早苗は、惣造を送り出してしまふと、何んの用事もなかつた。

自分の部屋に入つて、婦人雜誌を讀んでゐたが、九時になつても、十時になつても、陽一郎は、起きて來なかつた。

『まだ、おやすみになつてゐらつしやるの。』と、召使に何度聞いても、『はい。まだ、お眼ざめになりません。』と、同じやうに答へるばかりだつた。

棚の上の置時計が、やさしい音で、十一時を打つた時、たうとう早苗は、堪らなくなつて、洋館の二階に、上つて行つた。

入つたところの十二疊ばかりの洋室が、書齋になつて、寢室は、その奥になつてゐるのであつた。

書齋に一歩入ると、今朝早く、大きな花瓶に挿して置いた鐵砲百合が、ぷん〳〵と、強い香りを放つてゐるのが、早苗の鼻を衝いた。

早苗は、書齋までは、ちつとも躊躇せずに入つたけれども、さすがに寢室には、平氣で入つて行くことが出來ないで、入口に、ちよつと佇んだ。

書齋と寢室との入口は、カーテンで仕切られてゐる。厚ぼつたい、濃い紫色のカーテンが、ぼつてりと下つてゐるのを見ると、それから奧へは、どうしても入つて行けないやうな氣がした。

いくら親しい仲でも、若い異性が、たつた一人で寢てゐるところへは、若い女の身として、どうしても平氣では、入つて行けなかつた。

（でも、こんなに、いつまでもおやすみになつてゐらつしやるなんて、何んだかをかしいから。）

早苗は、そのまゝ引つ返すことも出來なかつた。

いくら何んでも、お晝近くまで眠つてゐるなんて、たゞごとではないやうな氣がした。若し、ベッドの上に、冷たくなつてゐるやうなことでもあつたら、どうしたらいいかしら？ と思ふと、胸がドキ〳〵して來て、脚が慄へた。

或ひは、昨夜連れて歸つて、たしかに、こゝへ寢させたやうに思つてゐるのが、何かの錯覺だつたかも知れないといふ氣がした。若しかして、今朝早く――自分たちが眠つてゐる間に、そつと拔け出して行つたのではないかと思つたりした。

とに角、寢室に入つて、たしかめて見るまでは、早苗は不安な氣がして、どうしてもそこから、離れることが出來なかつた。

處女らしい臆病さと、羞恥心とが、早苗の小さな胸を、どき〳〵と、はげしく波打たせた。

（やつぱり、ちよつと確めて見なければならない！）

さう思つて早苗は、自から勇氣を勵ました。

カーテンを少し押し開くと、そつと寢室に入つて行つた。

八疊くらゐな廣さで、何んの裝飾もない、さつぱりした部屋の壁際に、マホガニーの豪奢な寢臺が、どつしりと据ゑてあつて、枕もとに、小さなテーブルが一つ、燭臺の形を模した銀の古風なスタンドからは、仄かな光りが流れてゐる。

寢臺の上に、陽一郎は、まるで死んだやうになつて、こん〳〵として眠つてゐる。疲勞と、不眠と、酒のために、すつかり憔悴して、頰や、眼のまはりが、げつそり瘦せて見える。眠つてゐる時のせゐばかりではなく、顏の色が蒼ざめて、廣い額に、房々した髮の毛の一房が、亂れて、掩ひかゝつてゐる。早苗は、やつぱり眼を

醒まさせない方が、いいのだと思つて、足音を忍ばせるやうにして、そつと寢臺の傍に近づ

いた。

顏の色は、蒼ざめてゐるし、身動きもしないし、それに寢息の音も聞えないので、ちよつと見たところは、死んでゐるのではないかと思はれた。

が、近づいて見ると、死んでゐるのではなくて、やつぱり、昏々として、深い眠りに沈んでゐるのである。

（無理はないわ。三日も四日も、一睡もなさらなかつたといふのだから。）

と思ひながら早苗は、そつと華奢な手を延べて、額に亂れかゝつてゐる一房の髮の毛を、搔き上げてやつたが、その時、突然、彼女は胸を、刺し貫かれるやうな痛みを感じて、あつと、口の中で低い叫び聲を洩らした。

マダムが、陽一郎の頭を、膝の上に載せて、子供の頭でも愛撫するやうに、髮の毛をいぢくつてゐた時の光景が、まざ〳〵と眼に見えて來たのである。

あの時には、自分一人でなく、邊りには人もゐるし、場合が場合なので、早苗は、極度の自制心を以て、自分を抑壓したのであつたが、今は、單に、その時の光景を思ひ出しただけで、はげしい嫉妬の爆發を、抑へることが出來なかつた。

(あの美しいマダムと、あんなことをして、三晩も四晩も、いつしよにお過ごしになつたのだ！)

早苗の胸は、燒鐵でも當てられたやうに痛んだ。

(わたしのことなど、ちつとも思ひ出しても下さらないで。)

口惜しさと、失望とに、早苗の全身は、木の葉のやうに顫へた。

(さう！　お眼覺めになつたら、今日こそどうしても、陽さんの氣持ちを確めなければならない！)

たしかめさへすれば、まさか、自分なんかは、どうなつてもいいなどとは、思つてゐないだらう。

マダムと、あんな樣子をしてゐたのも、恐らく酒に醉つたまぎれのことで、本心からではないだらう。

(男の人つて、お酒に醉うた時には、自分の本心なんか、どこにあるかも分らず、何もかも、めちやくちやなのだといふことだから……)

さう思つて早苗は、わづかに自分を慰めた。

嫉妬の暴風が過ぎ去ると、直ぐに愛しさと、慕はしさとが、泉の水のやうに、胸一ぱいに溢れて來た。

(どんなにか、疲れてゐらつしやるのだわ。せめても、安らかな眠りで、元氣を回復なさらなければ。)

早苗は、スタンドの電氣を消し、閉め切られた部屋の中に籠つた、惡い空氣を出して、新鮮な空氣を入れようとして、窓を開けた。

でも、あまり輝やかしい光線が入つて來ては、瞼の上からでも、眼を刺戟してイケないと思つて、鎧扉と、カーテンとで、光線を調節して置いてから、寢室を出て行つた。

陽一郎は、早苗が寢室を出て行つてからでも、たしかに二時間以上は、たつぷり眠つてゐた。

快い熟睡の後の自然な眠覺めは、氣持ちがすが／＼しく、頭がさつぱりした。四五日つゞいてゐた泥沼のやうな夜と晝と、それから、連日の酒と絶望とから來た疲勞と、傷心とも、まるで拭はれたやうな氣がした。

でも、陽一郎は、眼を覺ました瞬間、自分が、どこに寢てゐるのか、自分に、こんなにも安らかな眠りを與へてくれた寢室とベッドとは、一體、どこであるのか、ちよつと分らなかつた。

が、しばらくする中に、見馴れた天井や、カーテンや、テーブルや、スタンドを見て、自分の家の、自分の寢室で、自分のベッドに寢てゐることを知つて、びつくりした。

(一體、僕は、いつの間に歸つて來たのだらう。)

混濁した意識で、昨夜のことは何も分らなかつたが、思ひもかけず早苗が、わざ／＼迎ひに來てくれたことや、歸らないと言つて、自分が駄々をこねるのを、早苗や、青木に宥められたことなど、斷片的に、かすかに、ちら／＼と思ひ出した。

都會に蠢く惡魔の姿——北國の寒村からいきなり大東京の眞中に飛込んで來た純眞無垢な一處女と、二少年との恐ろしい愛難哀史、中村武羅夫先生の著「嘆きの都」は、青少年子女は勿論、親達も是非一讀して置かればならぬ名著である。(定價一圓六十錢送料十四錢)

（やつぱり、屋敷に連れて歸られたのだ。）
この屋敷も、この部屋も、再び見まいと思つてゐたのに！
でも、マユミの死んだことは、何んだか二年も三年も、遠い以前のことのやうな氣がしたが、そのことを思ふと、やつぱり胸が突き刺されるやうに痛んで、生きてゐる甲斐がないやうな氣がした。心が滅入つて、眼の前が暗くなつた。
（たゞ、一人の女！）
その女は、今や失はれてしまつたのだと思ふと、慰めることの出來ない悲みが、汪然として陽一郎の胸を壓した。
（さうだ。僕には、マユミから託された女がある。）
偶と、陽一郎は、白芙蓉のやうな清楚で、可憐な、絹子のことを思ひ出してゐた……
二人はマユミの最期の賴みに依つて、神に誓つて結婚すると約束したのに、今まで惡夢にうなされたやうな日を送つて、絹子のことなど顧みる暇もなかつた。
（どうしてゐるだらう？　早速、一度見舞つてやらなければ！　溫和しい、美しい娘だが。）
陽一郎は、ぼんやりと、絹子の淑やかな印象を、幻のやうに思ひ浮べてゐたが、もう何時かしらと思つて、枕もとの時計を見た。
（一時過ぎてゐる！）
三日も四日も、眠りつゞけてゐたやうな氣がして、陽一郎は跳ね起きた。
（つゞく）

賀川豐彥先生著『一粒の麥』百七十版突破！

今や著者の名聲と共に滿天下を風靡する大評判、大歡迎！
男も女も淚なしには讀めない感激の名小說！　農村救濟のモデル小說！

憂鬱な日本を救ふ道はあるだらうかと考へながら、都會に、貧民窟に、また農村に日本全國を、魂のうづきを感じつゝ歩き廻つた著者が、まだ日本に眞の意味に於て目醒めてゐないことを痛感して、血の滲むやうな同志達のことを描いたのが本書だ。
窮乏に陷つたデンマークは、土に對する愛、隣に對する愛、神に對する愛によつて復活した。この三つの愛さへあれば苦しい日本の現狀も救はれるのだ。たゞ我々に缺けたることは、神に對する愛と困苦を突破する信仰であると著者は絕叫して、日本の山奧に埋もれた麗はしい物語の中に、日本の行末を示してゐる。

見よ！　燃え上る人類愛！　新日本を待望する熱烈なる魂！　これこそ本書の眞價だ！　ぜひ御愛讀下さい。

定價一圓三十錢　送料八錢　本社發行

おゝ悲痛な胃腸病地獄

だが！その治療力貴下の慢性胃腸病に適切のアイフがある

是非とも服用せられよ

慢性胃腸病

アイフ

高級治療藥

若葉青葉の今は

胃腸の受難期

若葉青葉……萬物悉く躍動する時、病魔も亦跳梁を逞しうする、胃腸はとかく故障勝ち

こなり、慢性胃腸病は益々增惡する、恐るべき傳染病すら擡頭する
だから今こそアイフを活用してこの胃腸受難期を突破することだ

慢性胃腸病は少しも油斷のならぬ病氣で人目には左程大病らしく見えぬが何しろ腸胃の機能がすつかり損じ內壁には恐ろしき疵や爛れを生ぜるため

◉食慾進まず胸先痞へ嘔つきゲップ出で
◉いつも下痢や軟便にて便には粘液血液膿汁を混じ
◉腹膨りゴロ〱ジッ〱鳴り放屁多く下腹痛み
◉滋養物を食するも身に附かず身體衰弱し
◉元氣衰へ顏色惡く神經過敏で短氣となり
◉少しの酒や不消化物を食するもすぐ下痢し痛む

諸症には是非ともアイフを服用して治療せられよ

アイフは胃腸病に最も適切の治療藥である。卽ち

病原効果 主藥が病原たる胃腸內壁の瘡面に沈着して炎症を癒し粘膜を強め粘液を整へ弛緩を引締め蠕動亢進を制する等敏活の治療作用を營む

對症効果 且つ亦獨特の對症作用と相俟つて食慾不振、消化不良、發熱、嘔吐、嘈囃、胃部膨滿、胃痛、腹痛、鼓腸、腹鳴、下痢、軟便等の諸病苦を速に消退する

健康効果 更に胃腸を強くしその機能を昂め食慾を進め榮養吸收を頗る佳良にし以て全身の衰弱を回復せしめ血色體重を加へ元氣健康を頓に增進する

藥價 三服入 二十錢・四日分 七十五錢・八日分 一圓五十錢
十七日分 三圓・四十五日分 七圓・特製十一日分 五圓

全國到る處の有名なる藥店に販賣す

發賣本舖
大阪市東區淸水谷西之町 振替貯金口座大阪三四五番 電話(東)五〇〇〇・五〇〇二・五〇〇三
東京市本鄉區眞砂町九番地 振替東京六二二八八番 電話(小石川)四〇一〇番
大連市山縣通一丁目 振替大連三七六五番 電話七六〇八番

順和商會

怪奇物語

狐若衆十三變化

江見水蔭
石井朋昌畫

五色の顔面

中仙道は美濃國、御嶽の宿。唯今は御嵩町と成つて居りますが、昔から繁昌の土地で。それは此所から木曾の大井の宿へ出ます間に、十三峠といふ名代の難所が有りまして、嶮しい坂が十三も續き、その間に細久

手、大久手といふ合の宿は有りましても、泊るやうな家が有りません。それで先づ御嶽宿で一泊。旅客が泊ると泊らないとでは、宿へ落ちる金高が餘程違ふので御座います。

宿の中程に有りまする蟹藥師。その近くの大鹽屋といふ旅籠屋。奥の一ト間で泊りの武家一人。もう寢床を敷かして横に成つてゐます。それに觸つてゐますのは女按摩。腰の方を懸命に揉んで居りまする。

「明日は十三峠へお掛りで御座いませうで、能くお下の方を揉んで置きませう。」

「能く揉むのもいゝが、どうもお前のは强過ぎるな。痛いほどだよ。」

「皆樣、左樣仰有います。女に似合はない恐ろしい力だと。」

力自慢です。女と云へば女ですが、男にだツて餘り見かけないやうな醜惡さ。年は未だ若いのですが、黑痘痕に赤痣、それで白眼で、齒並が黃色で、髮の毛が茶色。五色面といふのです。

「昨日、當國大垣藩の兵隊が大勢、中仙道を進軍致したが、この宿も定めし混雜致したであらうな。」

「はい、もう、どの宿屋も一パイで、トコトンヤレの唄で賑やかで御座いました。」

「これから後も、未だ〳〵澤山の兵隊がまゐる。御公家の岩倉卿が、東山道鎭撫將軍といふ御役目で、薩州、土州、長州、因州などの藩兵をお連れに成り、中仙道から江戸の城を攻めに參られる。その先鋒として、大垣藩からは、御家老戸田三彌殿が軍事總裁、御年寄高岡三郎兵衞殿が副總裁、既に御先發と相成つたのだ。」

「大層御くはしう御座いますが、旦那樣も、大垣の御藩士でゐられまするか。」

「おう、御弓組の一人、園部龍三郎。仔細有つて一ト足遅れた。明日は是非とも追ひつくつもりで、明朝四時立を致すつもり。」

「はア左樣で御座いますか。それなら猶よくお揉み致しませう。ですが、旦那樣、御存じかは知りませんが、十三峠には、怪しい變化が出まして、旅の者を惱まし

て居りまするで。』

『おう、十三峠の怪異に就ては、承はり居らぬでもないが、近くで聞けば猶委しく知れて、正體が判明致すであらう。揉みながら能く話してくれぬか。』

園部龍三郎は、何か思ひ當りでも有るらしい様子。

女按摩は、まるで目が見えるやうに、

『旦那様、その變化と申しますのは、能く若衆に化けて出ますさうで。女にしても好いほどの美しさ。それが様々に姿を變へて、出ますさうで。』

『若衆が姿を變へて出る。それは又何んの目的で、左様に致すのか。』

『人間なら、何か目的が有りませうが、變化で御座います。魔物の事で。目的なんか當りがつきません。どうも白狐の悪戯かも知れません。と申しますのは、十三峠を越しますのに、最初の道祖坂でスレ違つた若衆が、同じ姿で又其次ぎの音頭坂で向ふから來る。確かに先刻、御嶽の方に降りた者に、又向ふから來て出會ふなんて、まア人間わざでは御座いません。さうかと思ふと、同じ若衆でありながら、次ぎの善知鳥坂では、扮裝が變つてるなんて、十三峠を十三種に化け變つたと申します。旦那、どうしても白狐に相違御座いませんよ。』

『ふ、ふン、そんな馬鹿な事が有るものか、狐は陰獸。化けるとしても、白晝に於て、天下の街道筋だ。人間の眼をくらましやうが無い。』

『いえ、皆様も最初は左様に仰有いますが、扨て出會つて見ると、不思議だ〳〵と、小首を捻つてゐらツしやいます。』

『で、旅人に、何か被害が有るか。たとへば懐中物を抜かれるとか。或は、知らぬ間に、何處か、傷けられてゐるとか。』

『さア、それは、如何で御座いますか、知りませんが。左様、かうした話が御座いますよ。』

女按摩は、一寸揉む手をやすめました。

敵討の逆手

『どこの御家中か知れませんが、お侍様が、怪しい變化と御刀を抜いて、切りつけようと成さいましたが、どういふものか、御刀が抜けません。大も、小も、鯉口が鞘から離れません。その間に、もう若衆の姿は、見えなく成つたと申す事で。』と、女按摩は語りました。

『で、その侍は、何か、盗まれはしなかつたか。』と、園部龍三郎の問ひ方は、今までよりも強く響きました。

『さア如何で御座いましたか。それよりも、まア、旦那様。』

と女按摩は肝腎な處で、答へを反らしかけます。

龍三郎は、默つて、女按摩の顔を、小首捻りに、見てゐました。

『あれが、白狐で無いとすれば、双兒が別々に働くのだらう。それも、敵討の爲だらうなんて。敵を十三峠で探してゐるのだらうなんて。然ういふ噂も御座いまして。』

『敵討とな。』

『はい、十三峠に網を張つて、敵を探してゐるのだらうなんて。』

『ふむ、敵討。双兒が十三峠で別々にわかれて、敵を探すと申すのか。や、その方が狐の化けるのより、理窟に合つてゐる。や、何んにしても明日の峠越しは面白い。どうかして其若衆に、めぐり合ひたいものだ。や、その敵といふのが、實は拙者かも知れぬて。はゝゝゝ。』

『御冗談を。おほゝゝゝ。』

暫く揉んで女按摩が、歸つた後へ、入替りに表座敷の方から、廊下まで來て、閾の上に手を突いた供の男。重吉。

『旦那様、未だお寢みでは御座いませんか。』

『おう、重吉。まア入れ。』

『いえ、これで御免蒙りますが。今の、あの、女按摩。あれは、どうも。』

『や、何も申すな。怪しい女だ。拙者にもわかつた。どうも彼女が、若衆の半肩だ。二人の間に連絡が有るかも知れぬ。敵討とは、片腹痛い。こちらが敵討だ。や、明日の十三峠は、面白いぞ。拔かるな。』

『心得ました。』

昔から敵討と云へば、大概討たれる方が年上で、憎々しい面構へ。討つ方が若者で弱々しい。處が、園部龍三郎が、敵と狙つてゐるのは、アベコベで、敵が若衆。

但し、普通の敵討とは違ひまして、正しく云へば敵討といふには當らず。仕返し位の程度。龍三郎の兄は、小林魁一郎と申しまして、矢張大垣藩士。御近習役。(龍三郎は小林家から養子に出て、園部姓を名乘つてゐます)魁一郎が江戸からの歸途に、十三峠で怪しき若衆と道連れと成つて、御嶽の宿まで出るまでに、江戸家老から城代家老への手紙を一通紛失さしました。

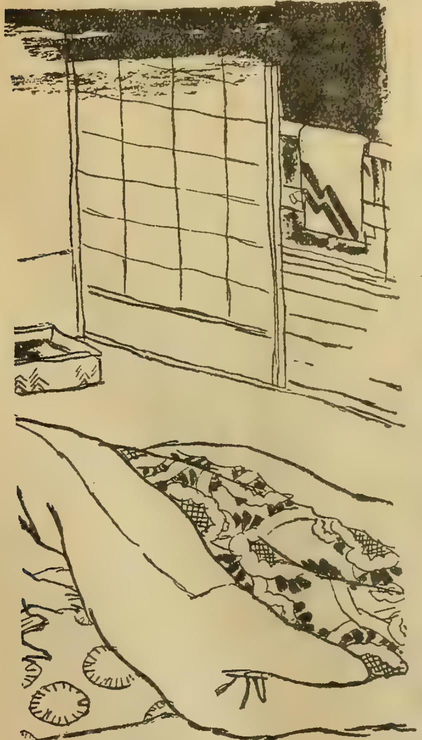
大した用事でもなかつたのでせうが、兎に角御家老の手紙を落したのでは不覺千萬。それを苦にして魁一郎は發狂。座敷牢に入つてゐる始末。然らばその書面は、たしかに若衆が拔き取つたのかといふと、別に、どうも、確證は無い。十中八九は彼であらうといふ處。

龍三郎としては、今回の出陣に、十三峠を通過するを幸。何んとかして其奴を取押へて、調べて見たい。この者次第に依ると、關東方の間諜で、勤王諸家の通信を、途中で妨げる役目かも知れぬといふ。そこで、一人旅を粧ふ爲に、供の重吉は、姿を變へて、一歩先に出立。白木の厨子に大きな赤面の天狗の面を入れたのを背負ひ、自分は白づくめの淨衣、金剛杖を突いて、金比羅參りといふ扮裝で、先へ宿を立ちました。

生きた杖

その後から園部龍三郎、野袴に、ぶツ裂き羽織。菅笠と小包とを肩に掛けて出立。寅刻立ちですから未だ暗い。五本松、和泉式部の墓なんて、迚も見分けられない間に過ぎましたが、どうも不思議な事には、體中が痛む。首から、肩から、背筋へ掛けて、ヅキン／＼痛んで、兩腕もどうやら痿れ膝です。歩くにつれて、腰までが痛みを加へます。

『は、はア、遣つたな。どう考へても、あの女按摩、怪しい女だ。これは、今日、おれを、働けないやうに、筋々を殊更、痛めて揉んだのだな。』



果して然りとすれば、それは、何の目的で然うしたのか。單なる惡戯とも思はれぬ。事によると、變化若衆との連絡で、萬一、十三峠で、彼の者を取押へると成つた時に、自由を利かせぬ魂膽か。

いよ／＼之は計畫が深い。幕府からの手が、木曾街道にまで伸びてゐるのだ。斯う疑はずにはゐられなく成りました。

けれども、どうも、何分にも、五體が痛みます。駕に乘るか、馬に乘るか、それには未だ時刻が早いので、客待の彼等を見付け得ません。我慢をして歩く。ヤケに歩くので却つて早い。井尻村から、いよ／＼十三峠の突鼻。道祖坂、これを越す

と齋藤村といふ、淋しい山里。この邊でそろ〳〵明るく成つて參りました。

前を行く、金比羅參り。それは重吉の變裝で、それに追ひつきました。

『おい〳〵、重吉。』

『へえ。』

『どうも、お前の後から行くと、背中の天狗の面に睨みつけられてゐる樣で、氣持がわるい。拙者の方で先へ出る。』

『左樣で御座いますか。では、どうぞ。』

重吉より先に立つて龍三郎が、行きかかると、忽ち重吉が、驚きました。

『あッ、旦那樣、一寸お待ちなされませ。』

『何んだ。』

『御羽織の背中一面に、變な物が附いて居ります。』

『えッ。』

見ると、黒ゴロのぶッ裂き羽織に、眞白な動物の毛が、澤山附いてゐるのであ

りました。

『ふ、ふン、白狐といふ洒落だな。細工はわかつた。昨夜の女按摩だ。目が見えぬと見せて矢張見えたのだな。十三峠の變化若衆に、この人、油斷すな、といふシルシか。それとも、荒方こなして有るから、安心して仕事に掛れといふのか。どちらにしても皆狂言だ。好し、其つもりでゆく。』

龍三郎は、重吉に密語いて、又しても離れ〳〵。音頭坂から十本木の立場へ掛りまして、伊勢櫻の散つた後、地藏前の一呑の清水といふので、口を嗽がうとしますると、そこに拔け參りの若衆が、ちらと姿を。

出たなと思ふ間に、もう何處へやら。まるで消えた樣に見えなく成りました。

善知鳥村の善知鳥坂、一名鵜沼の長坂。降りと成ると黐の木坂と名が變りまして、左は岩崖、右は谷底。既に深山幽谷の趣が備はつてゐます。

此所まで來て困りました。登りは未だ我慢が出來ましたが、降りと成ると、膝頭が、ガクリ〳〵、迚も痛みます。

『畜生、遣り居つたな。』

つぶやきながら、それでも一町ばかり。

岩陰からヒョイと出て來ました一人の若衆。山稼ぎの扮裝、藁編のしよひこを背につけて、腰に櫻の皮を鞘にした山鉈を差してゐます。手に雜木で作つた杖を七八本。

『旦那樣、十三峠を杖無しでは御無理で。どうか一本お求め下さいませ。』

一呑清水で見た前の拔け參りとは、扮裝は勿論、顏も、違つて見えますけれど、體の形、髮の具合、どうも同じ感じがして成りません。

いよ〳〵出たな。

龍三郎は然う思ひながら、

『おう、買つてやらう。』

『有難う御座います。どれでも六文で宜しう御座います。』

『や、拙者は、その雜木の杖よりも、生きた杖が買ひたい。』

『えツ、生きた杖とは。』

『お前の肩に縋つて歩きたいのだ。』

『それは、御駄賃さへ頂けますなら、之から藤上げ坂、梅の木坂、細久手の合の宿までは、未だ大分御座いますから、それまでお供を致しても宜しう御座います。』

『うむ、一朱遣はす、賴む。』

『有難う御座います。』

拔けぬ刀

若衆の肩に縋つて、といふよりも、半分負はれるほどにして、參りまする間に、何か此小僧、掏摸の奥の手でも出すだらう。そこを捕へてやらうと、龍三郎に油斷は御座いません。

が、津橋村を過ぎましても、何んの變も無いのですが、唯不思議な事には、腹に卷いた皮財袋が、段々緩む樣な氣持。

そんな譯は無い。腹卷の上には襦袢から衣類、帶を締めて、袴まで穿いてゐる。緩み樣が無いのですが、と、猶も、細かに氣を配りまする と、道の出岩の凸凹を踏んで、上り下りの一歩一歩、それに連れて、若衆は、巧みに懷中へ手を突込んで、少しづつ腹卷の皮財袋を、引出さうとしてゐるので有りました。

『小僧ッ。』

いきなり龍三郎は、後から羽搔い締めに抱き締めた。つもりが、背負子だけ手に殘つて、若衆の體は、ツルリと拔けました。鰌か、小鰻の樣。

『おのれッ。』

引捕へようとしました時に、崖上から垂れ下つてゐる山藤の蔓に若衆は飛着いて、猿の如く岩壁に登らうとしました。

龍三郎は、齒咬みをして、その藤蔓を切つて落さうと、刀に手を掛けて、早わざに拔かうとしまして。

『あッ。』

刀身が鞘から走りません。居合の術も一通りは心得てゐるのですけれど、鯉口が鞘口にピッタリ密着してゐて、どうしても拔けないのでありました。

急いで脇差の柄へ手を掛けましたが、同じ事。

『はゝゝ。』

崖の上から若衆は笑ひました。

『拔けるものか。』

『ウン。』

『武士の不覺だ。今朝、出立の時、念の爲鐔鳴りを、させぬからだ。』

昨夜、女按摩、いつの間にか、大小に仕掛けをしたのだ。寅刻立のあわたゞしさとは云へ、それが今まで氣の着かなかつたのは、確かに武士の不覺。此上は、手裏劍をと、小柄を拔かうとしたが、矢張、拔けなかつた。笄も亦その通りでありました。

『う――ム』と龍三郎は唸りながら、崖の上を見上げるばかりでした。

若衆は、岩崖の中腹に根を張る槙の木の枝に腰を掛けて。

『口惜しくば此所まで來い。藤蔓を傳へば來られるよ。』

然う云ひながらも、もし龍三郎が、藤蔓を傳つて登りかければ、山鉈で蔓を斷ち切らうといふ身構へ。

憎さも憎しと龍三郎は、身をふるはせて上を睨みつけて――然うしてゐるより他には無いのでした。

『大垣藩の者は皆腰拔けだ。昨日此所を通つた大勢の兵隊で、わしの爲

に、五十三人まで、何か知ら一品づつ、拔かれてゐる。斷つて置くが、わしは、金子は取らない。お前の皮財袋を探つたのも、目當は他に有る。』

いよ〳〵此奴、徳川方の間諜に相違無い。引捕へて、兄の仕返し。藩兵の恥辱も雪がねば成らぬと思ひ、龍三郎は路上の小石を拾つて、礫打。

それを悉く、山鉈の背で受けて、彈き返す。侮りがたき腕前。落ちて來る小石が、却つて自分に當つて、危いのでありました。

鵺打の一ト手

此所へ駈付けて來たのが、金比羅參りに身をやつしてゐる重吉。

『私にお委せ下さい。』

重吉が來たので龍三郎は、ホツとしました。身分の輕い者は大概劍道を學ばず、その代り棒を遣ふ練習をしてゐるので有りました。重吉は斯道の達人。斯うした時には鵺打といふ一ト手を用ゐます。主として屋上の怪漢を下から召捕る時の秘傳で、手に突いて來た金剛杖を『えいツ』と高く投付けました。唸りを發して飛んでゆき、崖中腹の樹幹に腰を掛けてゐる、若衆の體に當つて、眞逆様、杖と共に落ち來る、と思ひの他、それをも若衆は山鉈で、發止とばかり受け留めました。杖は二ツに斷れて、左右に落ちました。

『金剛杖なんか投げたツて駄目だよ。鎗を投げても驚かないのだ、弓矢でも恐れるものか。鐵砲だけは御免だよ。』

毒言を放つたかと思ふと、突然、上から垂れかゝる岩松の根に手を掛けて、ヒヨイとそれに身を移し、爪先を岩の裂け目に當てながら、スラ〳〵と岩壁を登り始めました。迚もそれは人間わざとは思はれません。手掛りが無い處では、草一本にも輕輕と縋つて、忽ち頂上の林の中に姿を隱しました。

龍三郎も、重吉も、唯茫然として見上げるばかり。

『どうも此崖を登る事は、拙者には出來ない。』

『魔物で御座います。變化で御座います。や、人間としても普通の人間では御座いませんな。』

『逃がしたのは返す〲も殘念だ。彼こそ兄上の密書を奪つたに相違有るまい。』

『この後に、山へ登る杣道が有つた樣に思ひました。私はそちらから登つて見ます。』

『よし、拙者は、この先へ行つて見る。そちらにも登り口が有るかも知れぬ。有つたらそれから登つて、挾み討だ。』

重吉は後戻りをしました。龍三郎一人で、峠道を、先手に向ひ走りかけましたが、どうも困つた事には、ます／＼五體が痛むのでありました。なか／＼思ふ様に進めません。すると既に峠道は、旅人の往來が、そろ／＼繁く成りかゝり、向ふから巡禮の親子連れも來ました。行脚僧も來ました。老年の乞食なども來ました。

『山稼ぎの若い者が、向ふへ走つて行くのを、見受けなかつたか。』

一々、念の爲に聽きましたが、どれも知らぬと答へました。

岩山への登り口。未だ見付かりません。半町ばかり行きますと、左手の崖根に、清水を取る洞穴がありました。低い入口に小さな不動尊の石像。その後に山清水が湧き出してゐますのを見て、龍三郎は先づ喉を濕しに入りました。

序に帶刀の拔ける様に、此所で手を掛けるのに都合が宜しい。峠道の道中で遣つてゐては、人に見られて恥かしい。武士の恥辱ですから。

不動の石像の後で、刀を調べますと、急に拔けない譯で。それは木曾名方狐膏藥が、ペツタリ鯉口に塗つてあるので有りました。

『酷い事を致した。確かに女按摩だ。若衆の仲間だツ。』

龍三郎はその膏藥を取る爲に、骨を折りつゝも、若者の行方に就いて、氣がイラ／＼。

天狗の鼻折れ

又もや向ふから峠道を、こちらへ人の來る足音。如何なる旅人か知れませんが、これにも問ひ掛けて見たさに、龍三郎は洞穴から、ヒヨイと立出でました。

來掛つたのは科編みの山帽子を冠つて、弓矢を持つた獵人、

――この獵人は、突然、洞穴から龍三郎が出ましたので、吃驚した樣でしたが、その儘急ぎ足で行過ぎました。

山帽子の中でしたが、どうも顏の若々しさが、變化若衆の樣に感じられました。

だが、それとすれば、變裝が餘りに素速い。のみならず、山上から他の方に逃げるのが普通なのに、わざ〳〵此方へ向つて來る。まさか、それ程大膽でもあるまい――いや〳〵、逆に出る法も有る。油斷は出來ぬと、痛みを忘れて、龍三郎は追ひかけて、

『これ〳〵、お前は、向ふに行く山稼ぎの若者に、出會はなかつたか。』

獵人は聽えぬふりして、益〻足を早めました。

いよ〳〵怪しい、と龍三郎は。

『待てツ。』

折も折、後戻りした重吉が、登り口を見出し難ねて、急ぎ足で此方へ來る處でした。

『怪しい奴だツ。もう化けたのかツ。』

大手を擴げて待ちかまへました。こちらからは

龍三郎、走り寄りました。果然、果然、獵人は彼でした。生憎此邊には、崖から山藤の垂れたのが有りません。いくら身輕の變化若衆でも、鏡の如き岩壁に、手懸り足掛りを見出せず、已むなく山の方を斷念して、深い谷川の方へ、身を躍らせて飛込みかけました。

重吉がイキナリ山帽子へ手を掛けて留めました。スッポリ脱げました。

『畜生ツ。』

重吉も亦、羽搔い締めに抱き留めました。抱かれたまゝ、後樣に、龕燈返し、ドンと眞向後捨身。重吉は下に成つて、岩道の上に倒れて、後頭部を打つて死ぬ處。背に天狗の大面を負つてゐたので、その高い鼻が折れたのに支へられて、助かりました。

『生意氣なツ。』

龍三郎、踏み込んで、前から組付きました。もう斯う成つては、鰌拔けもかなひません。

刀の提げ緒で後手に縛り上げました。龍三郎は一刀を引拔いて。

『これ見ろ。刀は拔けたぞ。斬れるか、斬れぬか、試めしてやる。』

殺す氣は有りませんが、彼が最前の惡口に對して、成敗をすると見せなければ、此場が納まらぬのでありました。

『まア〳〵、お待ち下さいまし。』

後からスタ〳〵と走つて來ましたのは、小間物女行商。紺木綿に麻の葉、白糸繍の布呂敷を背負つて、白地手拭で道中冠りはしてゐますが、凄い樣な美人。

『どうぞ、まア、命だけはお助けを願ひます。これは私の弟。惡いのは私。罪は皆こちらに御座います。』

『何、其方の弟と申すか。』

『はい。』

『罪が其方に有るとは。』

『實は、私、昨夜の女按摩で御座ります。』

『よ、よ、よ。』

この美人、眼は見える。黑痘痕は無し、赤痣は無し。ですが聲だけには、思ひ當りました。

『弟を御ゆるし下され。私を、どうか、御成敗下さりませ。』

弟を庇護ふ姉の眞心。それが又美しい容貌の持主でありました。

まア此美貌。それをあの五色面の醜婦に、どうして巧く變相したか。若衆の變化の素速さにも驚かされましたけれど、女の方にも感心させられました。聲まで變へられたら、迚も同人と

は思はれません。

だが、事件は益々怪奇の度を加へました。抑も何の目的で、變相又變相、世にも不思議の連續。變装の姉と、變装の弟と、諜し合せての十三峠荒し。この秘密が知りたさの好奇心。龍三郎に於ても、重吉に於ても、絶頂に昂るので有りました。

『助け難き奴ながら、弟を庇護ふ眞情に見處が有る。先づ、素姓を明かせ。イヤサ、何の目的で、狐の變化を粧ふのか。さツ、それをキリ／＼白狀せよ。』

『はい／＼、それは殘らず申上げます。けれども、此所で其內情を申上げても、とても御信用には成りますまいで。もう之から近い私達の隱れ家、そこまで御足勞が願ひたう御座います。然う致しますれば、すべてがハツキリと致しまして、然ういふ事情かと、一度に御合點が參りまする。』

然う云つて欺いて、山賊の住家へ連れて行つて、そこで手下共と力を合せ、此方の命を絶つのでは有るまいか。これはうツかりとは乘れません。

その猜疑の樣子を、敏くも見て取るほどの眼力は、ちやんと備へて居りました。

『いえ、これから遠くも御座りません。弟は縛めのまゝ御引立てなされませ。さらに私を此所で後手に縛つてお引き下さりませ。それで萬一、貴所方に、危ない事でも有りさうでしたら、二人は人質、その時二人の首をお刎ね下さりませ。』

斯うまで云はれてイヤといふのは、餘りに卑怯。龍三郎は重吉と眼配せして、

『よし、それでは、若者だけ人質に取つて行く。其方先に立つて案內せえ。』

山賊か仙人か

琵琶坂にかゝる前に、松林の中を右に曲りました。山犬か野狐しか通らないやうな細徑です。山と山と迫つた、その間の、細谷川端を傳つてゆきますと、突當りの山崖の根元に、大きな洞窟が、口を開いて待つてゐました。

『あれが、私達の隱れ家で御座います。』

先に立つた姉といふ妖女が云ひました。

中から鬼のやうな山賊の首魁でも出て來て、種ケ島の小鐵砲でも突きつけるのでは有るまいか。然うしたら、棒縛りの若者を、唯一刀にと、龍三郎。重吉は又、懷中から合口を出して手にして、妖女を一突きといふ。

『さア、どうぞ。』と、若衆も立留つて言葉を添へましたが、こ

れを留めては置かれません。

『先へ行けツ。』と龍三郎は突き遣り〳〵、洞窟の入口まで行つて見て、吃驚しました。餘りにそれは奇怪なる一場面。

洞窟の內部に日の光が射し込んでゐる、その照らす限り、種種の小道具物が並べて有りますので。それが又、一々克明に、部類分けがして御座いました。

文箱、狀箱、御用箱、革造りのもあり、厚紙造りのもあり、木製のもあり。

他の一部には、矢立を束にしたり、積重ねたりして、置いてありました。大名矢立の黑塗金紋。文人墨客の檜扇形。札差矢立の意匠奇拔さ。金質の贅澤さ。山入り矢立、商人矢立、それ〳〵種類分けがして有りまする。

と又、他の一部には、岩角から岩角へ、藤蔓を引張つて、それに種々の印籠、袂落し、火打袋、巾着の類が、吊下げられてありました。

と又他には、懐中鏡、筥迫の飾りが、萩棚を吊つて置き並べてありました。

緒締玉や根付細工を紐に通して、蜘蛛の巣の様に張つてあるかと思へば、水晶や瑪瑙の珠數を、藤の花の如く岩天井から下げてもあり。其他、小柄、笄、鐔、何といふ事無しに有りまする。洞窟の奥深く、光線の達かぬ處には、未だ何が有るか、わかりませんので、

龍三郎も、重吉も、唯啞然として、立つてゐました。かゝる山中の洞窟内に、日本一の古物店、不思議といふも餘りありで。

が、龍三郎も、文武の道の他に、趣味に富んで居りますので、つい、その珍品に見惚れる様に成りました。その間に、姉といふ女行商は、弟の縛めを解いてやりました。

『さア、まア、こちらに。私達の父が、お目に掛りまする。』

窟の奥の方には、別に又一室を成す岩穴が御座いました。初めには氣が着かなかつたのですが、眼が暗さに馴れたので、其方を初めて見ますと、大きな熊の皮を敷いて、木の根株の自然に脇息の如く成つてゐるのに、片臂を載せてゐる一老人。雪の如き總髪を後茶筅に結び、長き銀髯を貯へて、鹿皮の袖無し羽織。繪で見し仙人に異らず。

『御免下され。拙者、足元不自由。このまゝにて御挨拶を。』

山賊と思ひの他、仙人がゐました。仙人が無人の山奥で、古物店を開いてゐる。謎にしても變だ。ます〳〵不思議が重なりました。

『一體、これは、どうした事情か。』

龍三郎は、油斷なく問ひ掛けました。

白狐一傳流

『さぞ、御不審の事ばかりと存じまする。娘と伜、何か不重寶

を致せしと思はれまするが、父より幾重にも御詫びな仕る。拙者、舊會津の藩士、代々江戸詰の者。津川兵庫と申して、今は浪人致し、五輪軒。娘は、友江。倅は麗之助、御見知り置かれを願ひまする。』

人品骨格、僞りとも思はれませぬ。舊會津藩士、江戸詰といふので、言葉に訛りもありません。

『拙者は、大垣藩士。園部龍三郎と申す者。シテ、貴殿には、一體何の目的で、かゝる處に。』と龍三郎は問ひを急りました。

『恥入つた次第ながら、拙者こそ眞の腰抜け武士。中氣の爲に足の運びが不自由。浮世に住む資格が無く、この山中に隱棲致して居りまする。』

『然るに、その娘御といひ、御子息といひ、姿をいろ〳〵に變へて、十三峠、通行の者に對して、好からぬ事を。』

『アイヤ、それも皆、二人が拙老への孝行。』

『えツ、二人が孝行、アノ、旅人の持物を奪ひながら、それが孝行とな。』

『面目次第も御座りませぬが、皆、足腰の立たぬ拙老を、慰めの爲に。』

津川五輪軒の語るのに從ひますと、二人は最初に十三峠にて、杖を賣り、草鞋を賣り、或は旅人の小荷物など持つて、其料金を得て、浪々の生活の足し前をしてゐる間に、道に落ちてゐた印籠を拾つて來たのが始まり。窟住居の退屈晴らしに、古器物の好きな五輪軒が、それを見詰めて喜んだのから、老父を益々喜ばせる爲に、つい腰の印籠を拔き、或は巾着を切り、段々に深入りして、或時某藩の密書さへ手に入つたので、後には五輪軒も子達の好からぬ働きを感附きながらも、默許。その默許もいつしかに、公然と成つたので有りました。

『と申すのも、スッパと申す言葉が、昔は軍事上の隱密師を申したのが、今では盜人の異名に成つたのと同じ事。人間も行詰ると、そこまでに成り下ります。拙老の家は代々、會津家の御庭番。則ち忍び組の家柄で、伊賀甲賀の二流の別に、奧羽諸藩で專ら採用されました蘆名流の支派、白狐一傳の秘卷を所藏致し居りまするで、それを二人に授けまして、氣の散らぬ山の中、念入りに練習を致させ、手當り次第に、物を取らして居りました。但し、金錢には決して手を觸れなと、これは忍家總じての戒めで御座りまする。』

『すると、あの十三峠。峠ごとに姿を變へて出るといふのも、矢張忍術であらうが、それにしても、スレ違つて峠を降つたのが、いつしか次の峠の上に登つてるといふのは。』

『それは別に不思議でも御座らぬ。旅人の知らぬ間道を先廻り

致すだけ。一の峠で失敗つた時には、二の峠へ先廻り、姿を變へて別人のつもりで現はれる様に、要所々々著替へを隱しても御座ります。』

『と、姉娘の方は、見込のある旅人に、獸物の毛を附けて、シルシとされる役目か。』

『はい、萬一の場合に、大小の用を缺かせる爲に、木曾名方狐膏藥を、鯉口へ塗らします。總じて二人一組に働く。蘆名流にては合せ鏡の秘傳と申しまして、未熟の者の致す術。』

『各藩の秘密書は、大分集められたか。』

『木曾街道通過のものは、殆ど手に入れまして、公家方のも大分御座ります。それ故、かゝる山の中、洞穴の內に住みましても、天下の事情には、明るいつもりで御座り申す。大垣藩戸田家に於ても、小原鐵心殿の御苦衷、いよ〳〵勤王の御旗幟が鮮明に成りまして、關東方面へ御出陣。御先手と云へば聞えも宜しいが、實は伏見鳥羽の一戰。佐幕の息の强かつた、その懲らしめとも見られまするな。後から薩長からツヽカレて、之から先々、いろ〳〵御苦戰の事と、御察し申上げます。』

成程、何んでも能く知つてゐるので有りました。

『その書面の中に、大垣藩の戸田三彌殿へ宛て、江戸在邸、岡田朝十郎殿よりの手紙が御座らうな。』

『おう、確かに、それは有りました。』

『それは拙者の兄が拔かれたので。』

『相濟まぬ事を致しました。早速御返し致します。』

軍事隱密師

いつの間にやら、姉弟で、食事の支度をして、酒は竹筒、肴は折敷、岩魚の燒いたのに早蕨の浸し物、香氣高き山獨活の汁

大奉仕、大奮發の書籍附錄

「現代青年成功者物語」

之は本誌の兄弟雜誌「雄辯」六月號が大發展記念に添へた書籍附錄です。收むる所十數篇。何れも逆境にめげず、自ら起ち上つて雄々しく新生命を開拓したもの、商人、農夫、發明家、海外發展等、悉くこれ當代若人の躍進記錄！ 血湧き肉躍る成功談！萬人必讀の活模範です。ぜひ御一讀をすゝむ。

さへ出されました。

『拙老も、足腰さへ自由なら、今、日の本に於て、一番大事な時節柄。及ばずながら勤王の爲に、一働き致さうもの。殘念この上も御座りませぬ。』

津川五輪軒は、不遇を嘆じるのでありました。

龍三郎は、同情しました。老年に及んだ上に足が立たぬ。それに時世が急轉して、鎖國の夢が破れた。いよ〱勤王の曙光を認めた。とは云ふものゝ、對外的にも、對内的にも、動搖に動搖を重ねてゐる最中。これは五輪軒としては耐へ難き苦痛でせう。

『や、津川殿。如何で御座る。今更貴老が世に出て働く。といふ譯にも參るまいが、御子息は、之からといふ年齡。空しく山中で、狐の眞似でも御座るまい。同じ忍術を用ゐるとしても、もつと大きな舞臺で立廻つて、それが、禁廷樣の御爲にも成るといふ、然ういふ風に致しては、どうで御座るな。』

龍三郎の發言に、老人は勿論、姉も、弟も、知らず〱膝を乘り出させました。

『それは思はぬでは御座りませぬ。一番それが苦に成つて居りましたが、この通りの隱れ家に、近隣との交際さへ、致しませぬ。故に、そのまゝに成つて居り申すが、せめて倅にだけは、禁廷樣の御役に立つ樣、何んなりとも御奉公が致させたいと存じまする。』

老人の言葉に押冠せて、姉娘の友江は、兩手を突き、

『それに就きまして、貴郎樣に、是非お願ひが御座います。斯ういふ處へ御案内するに至りましたのも、何かの因緣。他にお縋り申す方もなし。父への孝養は私が引受けますで、御國の爲に、忠義を盡す爲に、弟の身の上を、どうぞ宜しくお願ひ致しまする。』

姉と一緒に麗之助も手を突いて、賴み入るので有りました。

『よろしい。お引受け申さう。軍事上の隱密師が盜人と成下るのを、逆に、盜人から軍事上の隱密師に成つて、官軍の爲に偉勳を樹てられよ。蘆名流別派白狐の一傳、忍術を役に立て、賊軍の内情を探るには、嵌り役と存じるで。』

それには幸ひ、兄の拔かれた密書を、重吉に持たして大垣へ歸らし。その代りの供として麗之助を連れてゆき、いづれは軍事總裁戸田三彌、副總裁高岡三郎兵衞に引合せて、官軍先鋒隊の、その又先手を承はらして、敵情搜索の大役を勤めさせるといふ。然ういふ事に相談が纒まりました。此際に、不圖、龍三郎は妙に心殘りを生じました。老父への孝養、それさへ無くば、姉娘をも共に連れたいといふ、然うした氣分を持つのでした。一方――この御時世だ。一死報國、それ處では無い。然ういふ覺醒にも鞭打たれて、勇躍麗之助のみを伴ひ、琵琶峠下の洞窟を、出發する事に成りました。

（をはり）

原稿募集

今までに、あなたが見聞された事柄で、子供に聞かせたいと思はれる、色々な話をお持合せと存じます。御參考までに編輯局で選んだ題目を、左に擧げてみましたが、この他各方面に渉り、お氣づきの面白い事がありましたら、是非滿天下の少年少女の爲にお聞かせ願ひます。

少年倶樂部編輯局

○突飛な蒐集家の話
○特別な藝、特殊な技能をもつた人の話
○變つた動物を飼つてゐる人の話
○新しい發明をした人の話
○珍しい發明品
○こんな物がこんな役に立つのかと吃驚した話
○奇拔な風習の話
○珍しい食物の話
○自然の奇現象の話
○旅で見た不思議な話、珍話、感話
○珍しい動植物の話
○感心な人のかくれた話
○兩親の有難さを痛切に感じた話
○可笑しくてたまらぬ話
○感心した子供の話

○變つた研究をしてゐる人
○友人を持つた事を感謝した話
○近頃特に心をうたれた事實
○動植物の面白い觀察
○奇妙な出來事
○變つた職業
○面白い數字、統計
○感心な動物
○世界の新知識
○珍しい旅行談
○變つた町、變つた村
○物產の驚異
○植物の珍しい効用
○植物の不思議な習性
○子供ならでは言へぬことを感じたこと
○子供たちを見て氣づいたこと

應募規定

長さ 四百字詰原稿用紙で十枚以內（一、二枚でも結構。原稿にも必ず住所姓名を明記すること）

程度 少年倶樂部の讀者、卽ち尋常四、五年生から中學二、三年生に向く內容及び書き方のこと

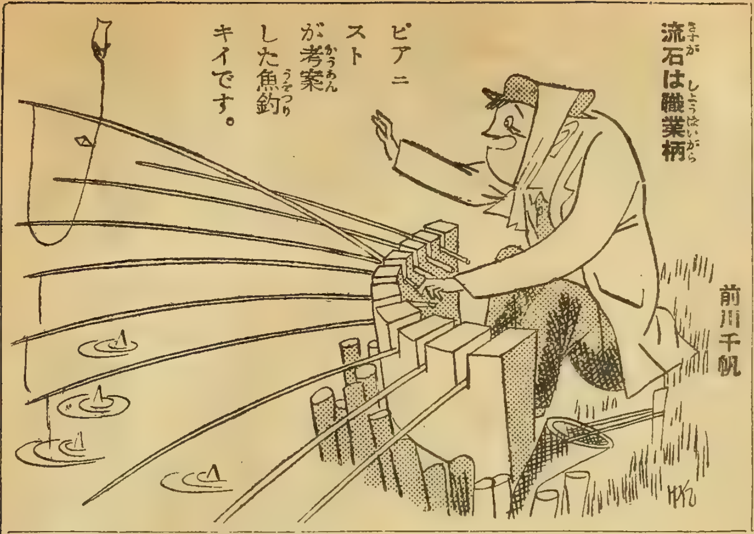
宛先 東京市本鄕區駒込、少年倶樂部編輯局（封筒に『子供に聞かせたい話應募原稿』と朱書のこと）

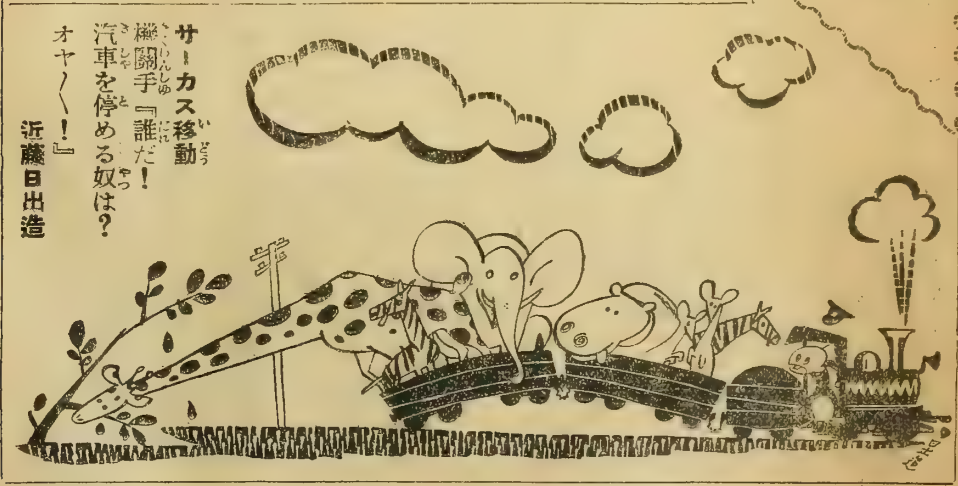
〆切 五月三十日

賞金 優秀篇十圓以上三十圓
秀逸三圓以上十圓

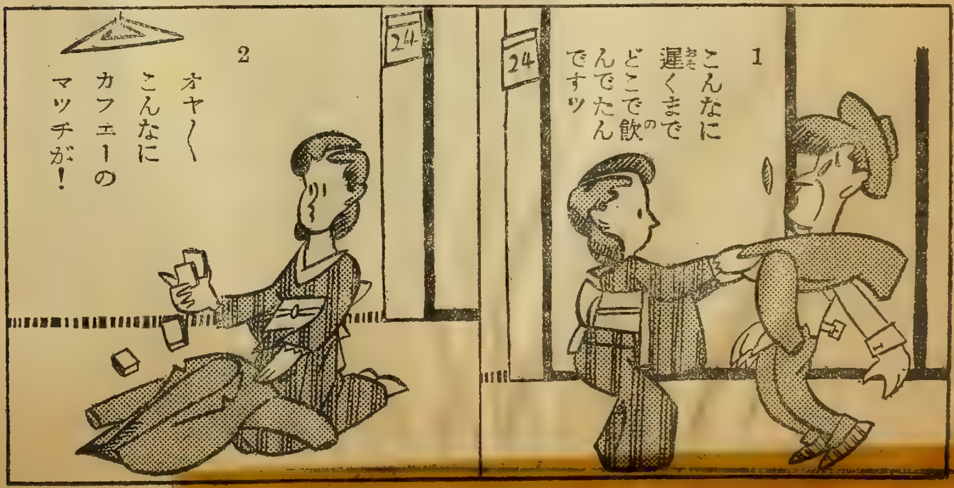
發表 昭和八年九月號『少年倶樂部』誌上

傑作漫畫集





御主人行状記　益子しでを



斥候
冬木ゆか
オオッ！敵だ、直ちに報告しなければならんぞ！
隊長！敵兵が向ふの丘に！
よし突ッ撃ッ!!
オヤ！オヤ！
天狗の出陣
前川千帆
ヤアヽ遠からん者は音にもきけー近くばよって目にも見よー
日本釣友會支部長
秋季競技會一等受賞
全国大會優賞カップ受領
帆
3
まあ、呆れた！まだゝゝ出るワきつと
14
4
くやしいイッ！
MENU

藝は身を助けず　岸文夫

大サーカス
なぐつたからどうした
喧嘩なら來い
よしッ!
得意の刄物投げでゆくぞ
おゝ
おたすけえ!!
餘りうますぎて當らぬとはじれつたい
おや〳〵
商賣通り行き過ぎたぞ
殺せなかつたは如何にも殘念なりッ!!

衣替へ漫景

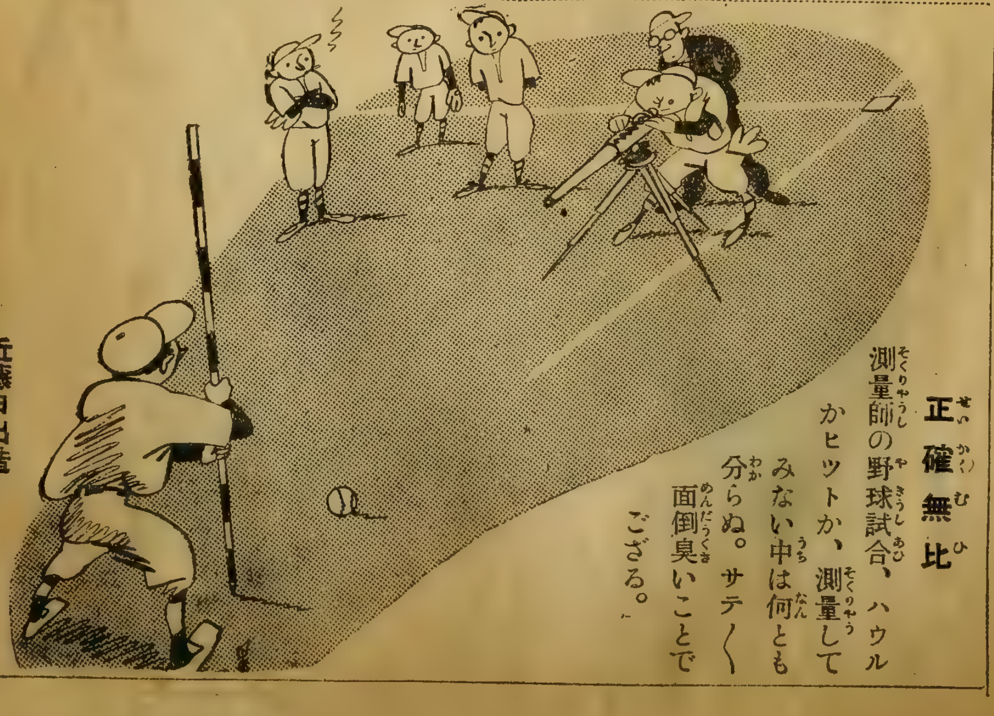
『おや何處の美人だらう？』會社歸りの彼吾家の門で追ひついて見ると、なんと愛妻だつた。『なーんだ君だつたのか、衣替へすると又見違へるもんだなあ』

『まあいやーな人』 川原久仁於

木村九平

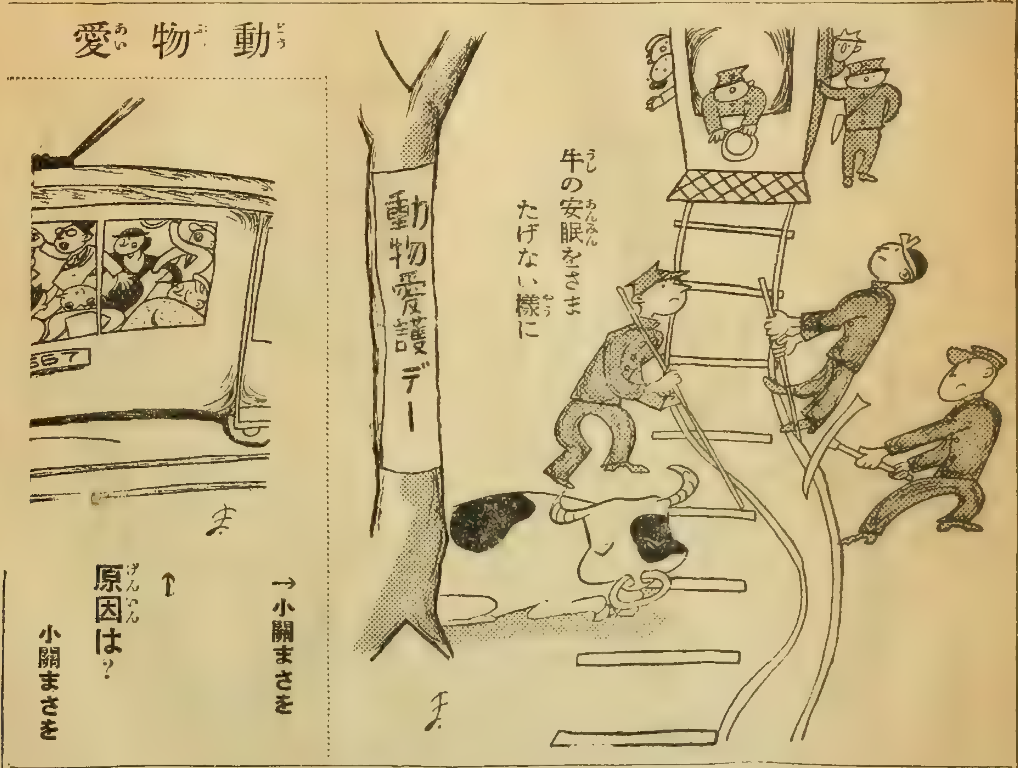
正確無比

測量師の野球試合、ハウルかヒットか、測量してみない中は何とも分らぬ。サテ／＼面倒臭いことでござる。

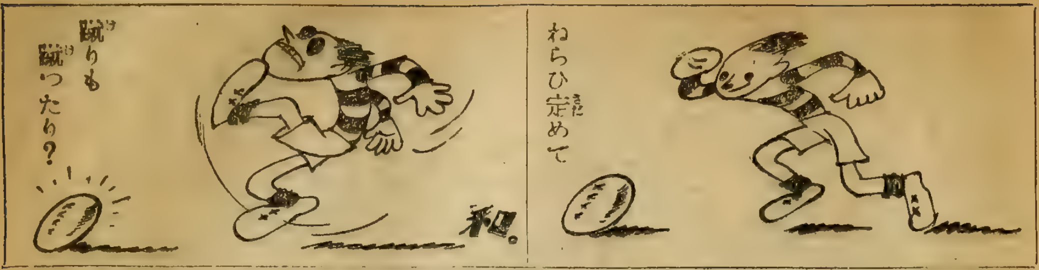


近藤日出造

蹴球選手
志村　和夫
いゝか？
蹴るぜ！

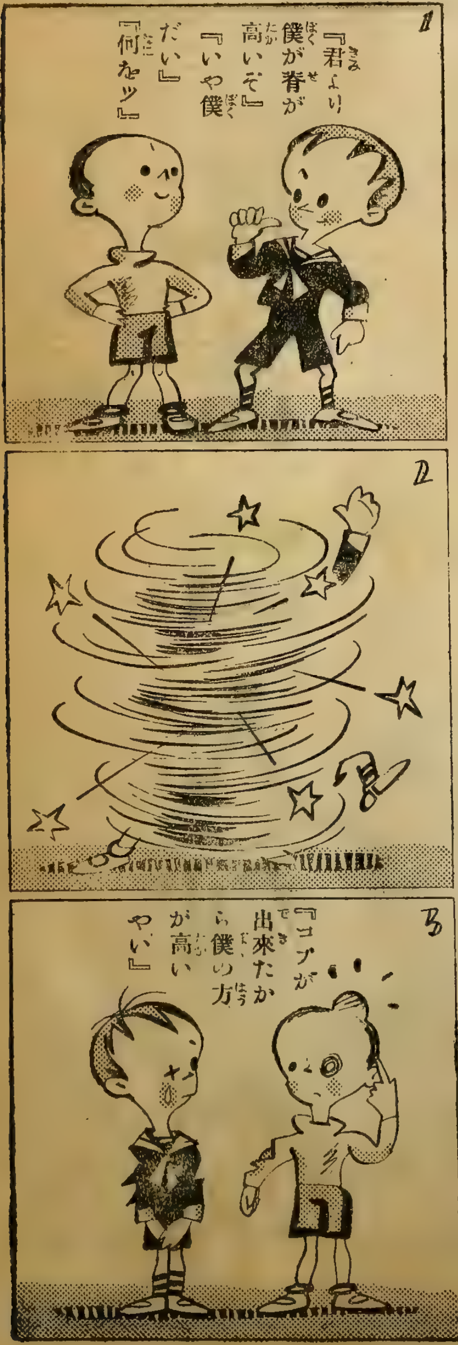

動物愛
動物愛護デー
牛の安眠をさまたげない樣に
→小關まさを
原因は？
小關まさを

ギャングと磁石　磁石を買つて歸り途、ギャングに會つた。『ヤイ手を上げろ!!』上げた次の瞬間、『ヤヤツ？』
小澤　啓

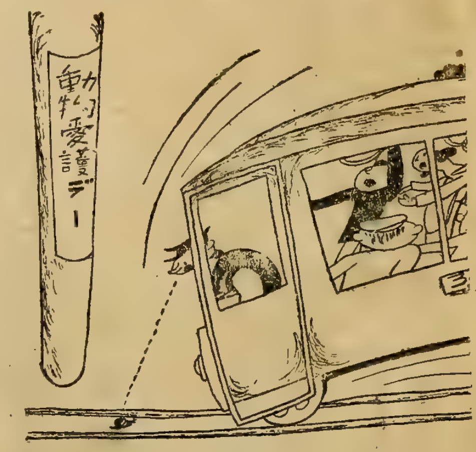


どちらの脊が高い？

近藤日出造



護デー二題



面あて……　山口義子

幕末巷談

風流活人劍

野村胡堂
羽石弘志畫

村之介にかかる疑は晴れた

「玉ちゃん、玉ちゃん。」

「…………」

「開けておくれ。」

紛れもなくお蘭の聲、ホト／＼と戸を叩く音が、村之介の逃げ道を塞いで、入口に立ちはだかつたお玉の背に傳はります。

「お蘭姐さん？」

「さうだよ、玉ちゃん、――何うしたのさ。」

虫が知らせるか、心急く樣子で、お蘭はもう一度外から叩きました。

「お蘭姐さん、眼をつぶつて入るのよ。」

不思議な事を言ひ乍ら、お玉はガタピシ掛金を外して居ります。

「何うしたと言ふのさ、自分の家へ眼をつぶつて入ると何んかの呪禁になるの。」

「あツ、眼を開いちや駄目ぢやないの、お蘭姐さん。」

立ちはだかるお玉をかき除けて、一と足中へ入つたお蘭は、全くギヨツとして了ひました。

行燈を中にして、相對したのは、大縣村之介の村どんと、錢屋五兵衞の孫娘のお京、どちらも、美しい顏を硬張らせて、お蘭の視線を避けるやうに、あらぬ方を見詰めて居るのです。

「をかしな人達だよ、本當に、何んかあつたのかい。」

緊張した重苦しい空氣を拂ふやうに、行燈の側まで行つたお蘭は、

「あツ、爺さん。」

次の瞬間、紅に染んで暖簾の下に斃れて居る父親九兵衞へ取縋りました。

「何んと言ふ虐たらしい、――誰が、誰が、

（前號迄の梗概）妖艶お蘭、怪少女お玉を先手とし、三十五萬兩の軍資金を擁する錢五組の陰謀團は、背後に隻腕の怪劍士篠原求馬及び怪手品師駒井駒造の援けを得て、縱横に活躍を續けて居る。幕府財政の爲に此大金を所望する老中阿部伊勢守は、或は小姓大縣村之介を、お蘭の父で一味の元締の九兵衞の許へ丁稚に忍ばせ、或は强盗上りの大藏鐵心に駒井駒造を搦め捕らすなど、必死の手段で金の在處を探るが更に驗がない。此折柄錢五組に取つて一大事が起つた。それは右の元締九兵衞が、一夜何者にか暗殺された事だ。知るや知らずや其時娘のお蘭は、鐵心の許で駒造を奪ひ損ね、足取り重く隱れ家さして歸つてゐた。

こんな事をしたのさ。』

白髪首を抱き上げて、自棄に振りましたが、最早こと切れて、呼び生ける手段があらうとも思はれません。太平洋の荒波を御して、錢五の密貿易船をメリケン、オロシヤまで持つて行つた、名題の船師九兵衞も、今は冷たくなつて、娘お蘭の腕の中に横はつて居ります。

『爺さん、敵は誰だえ、それだけ、——せめてそれだけでも言つておくれ。』

不思議に美しく生ひ立つたお蘭の涙が、父親の銀髮を洗つて、夕立のやうに降りそそぎますが、最早何うすることも出來ません。

『お蘭姐さん、敵は此奴だよ。』

『えツ。』

顏を擧げると、霞むお蘭の眼の前、お玉の指に差されて、村之介の端麗な脣はわなゝきます。

『違ふ、拙者ではない。』

『おいらとお嬢さんを追つかけようとして爺さんに止められたもんだから、カツとして斬つたんだよ、お蘭姐さん、敵は此奴に決つて居るよ、助太刀をするから討つてお了ひ。』

とお玉、本當に薪雜棒位は振り廻し兼ねまじき勢でした。高貴の血統を引き乍ら、輕業小屋で育つたこの少女は、玉のやうな美しさと、天才的な體術と、それから、男勝りの優れた氣象の持主だつたのです。

『違ふ、違ふ、本當に九兵衞殿を討つたなら、ノメ〳〵と此處へ歸つて來る筈は無い、それに拙者は、生きて居る九兵衞殿にこそ用事があるが、何んの怨があつて、手荒なことをするものか。』

村之介も必死の調子でした。女子供を相手に、立ち騷ぐのも大人氣なく、それに、親の讐と思ひ込まれては、さすがに迷惑千萬だつたのでせう。

『噓を言へツ。』

お玉は併し、なか〳〵引込んでは居ません。

『拙者が殺したものなら、戶を開けて出かける筈は無い、第一拙者は刄物も持つて居ない。』

『何處かへ捨てたらう。』

『それに、この泥足の跡はどうだ、板敷から疊の上へ、雪駄のまゝで入つた曲者を拙者だと言ふのか。』

『…………』

お玉も到頭默つて了ひました。村之介が冷靜になると、いろいろ自分に都合の宜い證據を見付け出して來て、一克者のお玉

の疑を次第に解いて行くのです。

『玉ちゃん、矢張り村どんでは無いやうだ。』

お蘭は靜かに顏を擧げて、湧き上る淚を拂ひ乍ら、二人の爭を押へるやうに續けました。

『それより、町內の外科を呼んで來ておくれ、歸りに町役人の方へお屆けして。』

『それは拙者が行つて來よう。』

言下に村之介が立上りました。

『いけないよ、そんな事を言つて逃げ出す氣だらう。』

『馬鹿な。』

『おいらが行つて來るよ。』

『女子供の出る時刻ではない、拙者が――』

『女子供だつてさ、――馬鹿にしちやいけないよ。』

お玉は全く女子供といふにしては『怖れ』を知らなさ過ぎました。

『兎に角拙者が――』

『逃がすものか。』

村之介が外へ出ると、それを追ふお玉、二羽の美しい蝶のやうに、夜の闇に飛出して了ひました。

殺したのは
大兵肥滿の武士

『…………』

默つて入つて來た人影に脅えるやうに、お京はお蘭の袖を引きました。村之介とお玉が出た後、家の中は死骸と女二人だけ、開け放したまゝの入口から、何物とも知れぬ人間が入つて來たのですから、これは、お京の驚くのも無理はありません。

『誰だえ。』

お蘭は振り返りました。激動の後の、絕望的な靜寂にひたつて居た心持が、急に鞭打たれたやうに緊張して、土間に突つ立つた人影を屹と見やつたのです。

『姐御、面目次第もない。』

『あッ、たの字。』

上り框に手を突いて、ゲツソリ肩を落したのは、いつぞや燒跡でお蘭を襲つた、太三郎のたの字、元は錢五組の船頭の一人ですが、身持放埒な上に、お京を挑んだり、お蘭に絡み付いたり、到頭よからぬ事まで働くやうになつて、何時の間にやら、仲間とは疎々しくなつた男だつたのです。

『何んとも濟まねえ。』

『何を言つて居るのさ、――お前なんかに取合つちや居られない、歸つておくれ。』

お蘭は相手の素性が判ると、もう振り向いて見ようともしません。

『それに就て話があるんだ、姐御。』

『うるさいねえ、取込みがあるから、歸つておくれつて言ふのに。』

『その取込み――、爺さんに間違があつたに就て、面を冠つてやつて來たんだ、姐御。』

『何んだとえ。』

『爺さんが斬られたのは――』

『あツ、お前知つて居るのかい。』

お蘭はがばと飛上ると、まだ土間にまご〱して居る太三郎の胸倉を摑んで、板敷の上へ引上げました。

『姐御、そんな事をしちや、足が泥だらけだ。』

『足なんか何うだつて構はない、さア、此處へ來て、佛の前で話しておくれ、爺さんを殺したのは誰だい、――お前かい。』

『冗談言つちやいけねえ。どんなに俺は惡い人間でも、大恩を受けた爺さんを殺せるわけはねえ、第一たつた一太刀で、肩先から胸へかけて、大袈裟に斬るなんてことが、俺に出來るものか。』

『だから、誰がこんな虐たらしい事をしたん

だ。お前は知つて居るだらう、言つておくれ。』

『言ふよ、言はなくつてさ、姐御。』

『あツ、お前、ヅブ濡れぢや無いか、何んて風をしてるんだらう。』

『だから俺は疊の上へ來るのを遠慮したんだ、大川から這ひ上つて來たばかりだもの、濡れても居るだらうよ、姐御。』

『何んだつて又大川なんかへ入つたんだ。』

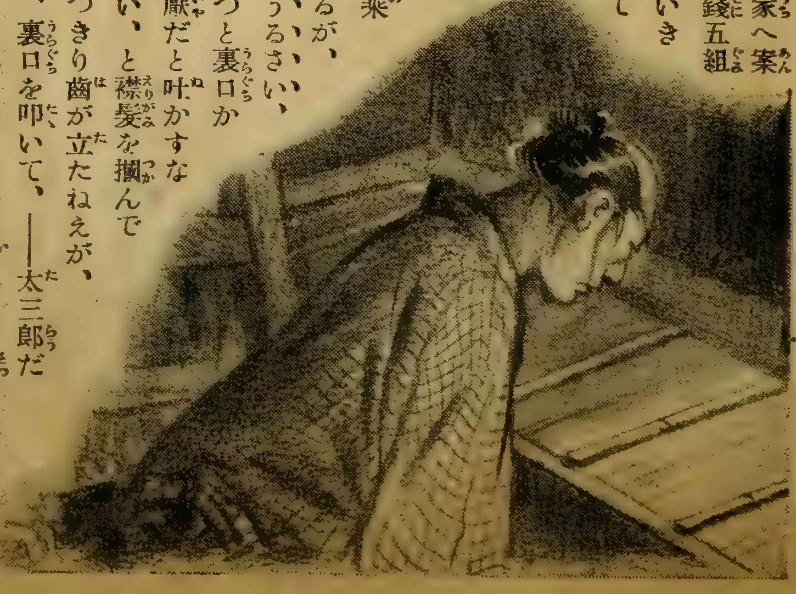
『好きで飛込んだわけぢやねえ、それもわけがあるよ。』

『自烈つ度いねえ、さア、話しておくれ。』

根太まで水が通りさうな大濡れ鼠、海松のやうな鬢をかき上げ乍ら、太三郎は話し始めました。行燈の蔭には、しよんぼりとお京、太三郎には懲りて居りますが、逃げも隱れもならず、固唾を呑んで聞き入ります。

『姐御、濟まねえ、全く濟まねえが、俺は金が欲しかつたんだ、姐御やお孃さんが、錢五島の寶を手に入れて、燒跡にバラ撒いて居るばかりでなく、阿部伊勢守樣の目の前へ、一萬兩の大金を積んだと聞いて、せめて百兩――いや十兩でも宜いから貸して貰はうと思つて、宵から此邊をうろ付いて居ると、いきなり覆面の武家に捕まつた――』

『――――』



『舟師九兵衞の家へ案内しろ、お前は錢五組の者だらうと、いきなり圖星を指しての頼みぢや無いか、一應は斷つたが、老中阿部伊勢守樣の使だ、表から名乘つて通る術もあるが、近所に聽えてはうるさい、お前の聲で、そつと裏口から叩いて見ろ、厭だと吐かすなら、手は見せない、と襟髮を摑んでの强談だ、まるつきり齒が立たねえが、仕方が無いから、裏口を叩いて、――太三郎だが、ちよいと開けてくんねえ――と言ふと、爺さんは、口小言を言ひ乍らも機嫌よく開けてくれたよ、喜んで入らうとすると、俺をかき退けて、ズイと入つたのは、その目ばかり頭巾の武家だ、驚いて店の方へ行く爺さんの後ろから、

飛付くやうにバサリと斬つて落し、豫て目を付けて置いたものか、神棚の上にあつた、手文庫をおろし、引つ抱へて、サツと飛出して了つた――』

『あ、あの手文庫を。』

『爺さんの事も氣になるが、助かりやうの無い深傷だ。それに、武家を逃しちや、俺の申譯が立たねえから、兎も角・後を追つて川岸緣を上手へ飛んだ、相手は大兵肥滿の武家で、腕は出來て居るが、逃げ足はそんなに早くねえ、追ひ付いて、及ばぬ乍ら一と太刀――と言ふと威勢は良いが、とてもそんな力はねえ、せめて、覆面を引きむしつて、面でも見てやらうとしたが、相手は恐しい早業、後から頭巾へ掛つた手を取られて、一本背負に叩き付けられ、續いてピカリと、拔き打に來あがつた、死物狂ひで轉がると、運よく一尺ばかり先は大川だ、刀の先は逃れたが、其の代り此通りの始末、姐御、――今更俺のせゐぢや無いなんて言はねえ・心がらとは言ひ乍ら、飛んでもねえ事をして了つたよ、爺さんを殺したのは、半分俺のせゐ見度えなものだ、斬るとも突くとも、勝手にしてくれ、姐御に斬られて死ねば俺は本望だ。』

錢五組の餘され者、お京などは、ゲヂ〳〵のやうに嫌つて居る太三郎ですが、さすがにメリケンまで押渡つて、九兵衞と生死の境を往來した人間だけに、斯うなると何んの未練もありません。淺ましくも濡れ腐つた袷のまゝ、死骸の前に手を突いて、ガツクリ、疊の上へ崩折れて了ひました。

『たの字、有難う、よく言つておくれだ、禮を言ふよ。』

お蘭は泣き濡れた顏を擧げました。

『えツ。』

『お前の惡いことは判り切つて居るが、親の敵は他にあるんだし、さう歸つて來て、何も彼も話してくれゝば、お前の過ちは帳消しになつたやうなものぢやないか。』

『姐御、それア、本當かい。』

『本當ともさ、阿部伊勢守の使と言はれて、戸を開けてやる氣になつたのなら、お前の罪とばかりは言へない。』

『濟まねえ、姐御、爺さん始め、仲間の者に難儀をかけた上、お孃さんや、姐御にまで絡み付いたり、――一時は夜稼ぎの仲間にまで入つた俺だ、我乍ら見下げ果てた、犬畜生のやうな野郎を、默つて勘辨してくれるかい。』

『あ、あ、それが爺さんの望みだらう、爺さんは口できつい事を言ひ乍ら、そりやお前を可愛がつて居たよ――太三郎は馬鹿だが、馬鹿は馬鹿なりに憎氣がねえ――つて。』

『濟まねえ、爺さん、勘辨してくんな、それほど迄に、この惡

黨を――』

太三郎はニジリ寄ると、笄と、九兵衞の死骸に取縋りました。

女袷を着て
佛の前へたの字が

村どんの村之介とお玉は、爭ひ續け乍ら歸つて來ました。この一對の雛のやうな美少年と美少女は、何んの因果か、事每に睨み合ひ、爭ひ合はなければならないやうな廻り合せになるのでした。

『聞いたらう、村どん。』

『フーム。』

二人は入りそびれた儘、裏口に立つて、太三郎の懺悔話を聽いて了つたのです。

『爺さんを殺したのは、お前ぢや無いが、矢張り阿部伊勢守樣の家來だぜ、村どんとは同家中だ。』

『そんな事は無い。』

大縣村之介も大タジ／＼です。

『阿部樣の家中なら、知らないことはあるまい、行つて爺さんを殺した相手を探して來ておくれよ、お蘭姐さんに助太刀して、敵を討つてやるから。』

この全身爭氣でハチ切れさうな少女は、全く相手の名前が判つたら、お蘭を引立てゝ行つて親の讐を討たせる積りでせう。

『そんな事があるわけは無い、――九兵衞を討つて宜いものなら、人手は假らぬ、拙者が此處に居るのを差し措いて、同家中から殺しに來る道理は無い――』

『言つたね、村どん。』

『あツ、何をする、女のくせに、胸倉を掴む奴があるか。』

『阿部樣から長の暇になつたと言つたのは誰だい、今聞けば、九兵衞を討つものなら人手は借らぬ、自分を差し措いて、同家中から殺しに來る道理は無いとは何んだ。』

『…………』

『到頭語るに落ちたらう、伊勢守樣の言ひ付けで此處へ來て居るのを白狀したやうなものだ、さア、もう勘辨ならない。』

お玉は輕捷な身體を利用して、村之介の胸倉に飛付くと、グイ／＼とそれを引絞りました。

『何、何をするんだ、痛いぢやないか。』

『當り前だ、痛くする積りでやつて居るんだよ。』

『離せ、こら。』

『離すもんか、さア、此處から眞つ直ぐに伊勢守樣の御屋敷へ歸つて、爺さんを殺した相手の名を聞いて來い、それから、大

藏鐵心に縛らせた駒井駒造を返して貰ふんだ、それが出來なきア、二度と此處へ寄せ付けるこつちや無い、空手で歸つて來ようものなら、首つ玉へ宙乘りしてカン〳〵ノウを踊らせるから、畜生ツ。』

何んと言ふ惡い口でせう、さう言ふうちにも、四肢を働かせて、村之介を路次の外へ引出すと、大川の方を向けて、ポンと突き飛しました。

たつた十五になつたばかりの、お人形のやうに可愛らしい小娘の力業ですが、不思議に隙間もない攻手で大縣村之介も抗ひやうはありません。

それに、本當に主君の伊勢守が、刺客を放つて舟師九兵衞を斬らせたとすると、其處は何んか深い事情がありさうで、此儘安閑として居ることも出來なかつたのでせう。

『村どん、敵の名と、駒井の小父さんだよ、敵の名を聞いて來なきア、二度と此處へ入れないから――』

さう言ふお玉の甲高い聲を後ろに聞いて、村之介はトボ〳〵と兩國の方へ行つて了ひました。

丁度その時、お蘭は思ひ直して、父親の死體を床の上に移し、太三郎とお京を手傳はせて、言葉少なに、いろ〳〵の用意をして居りました。

『姐御、奪られた手文庫には何が入つてるんだい。』

太三郎は不意に思ひ出して、こ

んな事を訊きます。
『錢屋の大旦那が盛んな頃、拔け荷の船を持つて廻つた、繪圖面だよ、お前も知つて居るだらう。』
『さうかい。』*

*メリケン、オロシヤを始め、臺灣へも、濠洲へも、支那へも通ふ海圖を、舟師九兵衞の手許に秘めて、錢五組の再擧の時節を待つて居たのです。
『ところで、あれは？』
太三郎は、言ひ憎さうに斯う續けました。
『…………』
『錢五島の繪圖面は無事かい？』
『あ、それは無事だらうよ。』
お蘭はさう言ひ乍ら、お京の方をチラリと見ました。それは先刻お京がお玉と一緒に兩國へ歸つて取つて來て、帶の間へ大事に秘めてあつたのです。
『それなら宜いが――』
太三郎は妙にそぐはない調子で口を緘みました。錢五島に隱した三十五萬兩の富は、言はばお京一人のもので、自分達の知つたことではありませんが、世間の噂が噂だけに、何んとなく氣になつてならなかつたのでせう。
『たの字、寒くはないかえ。』
『いゝや。』
『顫へてるぢやないか。』
お蘭は漸く太三郎が、大川から這ひ上つたと言ふ、ヅブ濡れのまゝで居ることに氣が付きました。

『小刻みに身體を動かして居るんだよ。』

『馬鹿だねえ、負け惜みなんか言つて。』

さう言ひ乍ら、衣桁から外したのは、父親の袷と褞袍、二枚重ねて、太三郎の後ろへ持つて行きましたが、太三郎が妙に硬張つた顔をして居るのを見ると、其儘疊の上へ置いて、そつと差覗きました。

『氣味が惡いかえ。』

『ヘツ、ヘツ、爺さんは化けて出るやうな柄の人ぢやねえが、俺にも手落があつただけに、その着物はねえ――』

『お前は思ひの外氣が小さいんだね、尤も、爺さんの形見を、お前に着せちや、私も佛樣に濟まない、氣味が惡くとも、これにしておくれ。』

押入を開けて出したのは、紅絹裏の小袖が二枚、長襦袢まで添へて、太三郎の前へ押しやります。

『姐御のかい。』

『さうだよ。』

『ヘツ、濟まねえな。』

『嫌な野郎だよ、爺さんのが着られなきア、外に男物なんかありやしない、それで我慢おし。』

『我慢どころか、ヘツ、ヘツ。』

太三郎は蔭へ廻つて、濡れた着物をクル〳〵と脫ぐと、お蘭の小袖を素肌に引掛けました。

狹い前褄、毛脛の出るのを神妙に合せて、佛樣の前へチンマリ坐りましたが、襟から、脇から、薫ずる美女の移り香は、改心した積りの太三郎をすつかり興奮させて了ひます。

『ヘツ、ヘツ。』

『何を笑ふのさ、お線香を上げて、それから水を汲んで來ておくれ、そして嘘でも悲しさうな顔をしておくれよ、何んと言ふ嫌な野郎だらう。』

お蘭に白眼まれると、龜の子のやうにヒョイと首を縮め乍ら、相變らず紅い裏と、薫ずる移り香を氣にするやうに、

『へ、へ、ヘツ。』

際限もなくニタ〳〵して居る太三郎だつたのです。

駒井駒造の 松葉燻し

大藏鐵心の中洲の道場では、一と晩殘酷な拷問が續きました。

駒井駒造の諸葛亮三郎は、雁字がらめにされた上、梁に吊されて、鞭と竹刀と稽古槍で、膾になるやうな目に遭はされまし

たが、眼も口も緘んだ切り、三十五萬兩の在所はもとより、苦痛のうめき一つあげません。

『相變らず强情だな、が、これ位のことで諦める俺では無いぞ。』

『…………』

『老中阿部伊勢守様の御聲掛りだ、町方役人が尻尾を巻いて逃げうせたのでも、大方俺の威勢は判るだらう、諸葛、この邊で言つて了つては何うだ、――』

『…………』

『錢五島は何處にある、――錢五島からどれだけの金を持つて來た、五萬兩か、三萬兩か、伊勢守様の前へ、惜氣もなく一萬兩も積んだところを見ると、先づ十萬兩かな、――それを何處へ隱した。』

『…………』

『誰か助けに來ると思ふと大當て違ひだぞ、命が惜しかつたら言へ、どうせ俺はその金を身につけるのでは無い、御上に納めて、お取立てに預るだけの事だ、今直ぐ折合へば、お前も吹擧してやるぞ。』

『…………』

燈臺が三四基、鞭を持つた大藏鐵心は、ニヤリ〳〵と鮟鱇吊にされた駒井駒造を見上げるのでした。

『言はぬか、諸葛、お前にも出世の種だ。』

『馬鹿ツ。』

あまりの事に堪へ兼ねたのでせう、駒井駒造の諸葛亮三郎は苦痛に血走つた兩眼をクワツと見開くと、思ひ切り一喝を浴せました。

『さうとも、俺は馬鹿さ、貴公は賢い、昔から師匠もさう言はれたでは無いか、だが、それほどの大才を抱いて居る貴公が兩國で見世物輕業を興行して、女子供の御機嫌を取つて居るのは何ういふ洒落だ。』

『其方如き惡人に、俺の心が解るか、馬鹿奴ツ。』

『ハツハツハツ、又怒られたが、よし〳〵此上は身體から訊く、これ、時候は少し早いが、蚊燻しの用意だ。』

『ハツ。』

豫て言ひ付けてあつたものか、鐵心が聲を掛けると、松の生葉をうんと入れた、道場の大火鉢を、駒井駒造の足の下に持つて來ました。

『存分に火を入れろ。』

『ハイ。』

十能へ一パイ、銅の大火鉢から火を移すと、一月の蚊遣りは

猛烈な煙を擧げて、駒井駒造の身體を包みます。

『あツ。』

七轉八倒の苦しみ、綿のやうな煙の中に藻掻くと、梁に吊られた駒造の身體はキリ／＼と廻つて、無殘にも咳き入る聲、

『ハツハツハツ、松葉燻しは美人でないと映りが悪いな。』

大藏鐵心それを見上げて、世にも面白さうに笑ひ崩れて居ります。此時、

『先生、歸つて參りました。』

ドカ／＼と、十二三人の門弟、煙の中へ飛込んで來ました。

『お、何うであつたな首尾は。』

大藏鐵心は、駒井駒造の下の火鉢を取り除けさせて、薄らぐ煙の中に門弟共を迎へました。

『濱町の家を二軒、二た刻あまり探し抜きました、がこの駒井駒造の住家にも、お京といふ娘の住家にも、何萬兩と言ふ金は愚か、小判一枚隱してはありません。』

『フーム、天井裏から、疊の下なども見たであらうな。』

『仰しやるまでもありません、床下から、爐の灰の中、壁の隙間から、敷石の下までも、悉く探しました。』

『さうか。』

大藏鐵心はがつかりした様子で、駒井駒造を仰ぎました。煙責めにさいなまれて、滿面苦痛に歪んで居りますが、駒造の顏には何んの表情もありません。

『如何いたしたものでせう、先生。』

『左様。』

『此上は中の郷の加賀屋へ踏込んで見ませうか。』

『いや無駄だらう、先夜あれ程の人數で向つても、何んにも見付からなかつたではないか。』

『……………』

『他に心當りの場所は無いか。』

『あと一つだけ御座います。』

門弟の一群を率ゐた――、若からぬ浪人者風の男は膝を進ませました。

『何處だ、伊勢守様への御奉公、これはきつとやり遂げずには措かぬぞ、』

心當りの場所があるなら言つて見い。』

『駒井駒造は兩國に小屋を持つて居ります。』

『お、それだツ。』

大藏鐵心は膝を打ちました、兩國の小屋と言つた時、眼をつぶつて、居た駒造の顔に、一脈の興奮が走つてピリ、と瞼の顫へたのを見逃さなかつたのです。

『駒造とその一座の者が、品玉輕業を見せる外、名題の大虎が飼つてあります、毎日何百人何千人と出入する小屋に、何萬兩匿せよう道理は御座いません。』

『いや、其處だ、多勢の人が出入るだけに、人の目に付き難いのだ、それほど恰好の匿し場所はあるまい、俺が駒井駒造でも、見世物小屋の中へ隱すぞ、行つて見イ、直ぐ。』

『もう眞夜中過ぎ、かれこれ丑刻も近くなりますが——』

『夜が明けては拙い、今が丁度宜いぞ。』

『ハツ。』

門弟共は此上抗ふわけには行きません。それに、三十五萬兩のうち三萬兩なり五萬兩なり、生れてから見た事も無い大金の顔が拜めると思ふ

張合もあつて、お互に勵まし合ふやうに立ち上りました。
人數は元の十二三人、宙を飛んで東兩國へ――。

馬鹿の權六は

猛虎の檻を開けた

『此處だ〳〵。』

『構はず入れ、遠慮をするな。』

形ばかりの木戸を押し開けて十二三人、ドカ〳〵と駒井一座の小屋の中へ闖入しました。その頃、オランダ風の手品と、小玉太夫の輕業と、大虎を始め、數々の珍らしい動物を見せて、異常の大當りを取つた見世物、正月からはズーツと休んで居りますが、それでも、中の設備には何んの變りもありません。

手々に提灯や龕燈を振り照した十二三人、自分の家のやうに入つて行くと、

『お前達、何しに來ただア。』

花道へヌツと立ち塞がつた者があります。年の頃三十五六、若くはないにしても、まだそんな年ではありませんが、小さい眼、團子鼻、唇は反つて、顎は二重になつて、月代は大虫喰ひ、背の高さ五尺八九寸もあらうと言ふ怪物、ツンツルテンの半纏に、大急ぎで締めたらしい繩の帶、大手を擴げて立つた姿は、全く言ひやうも無い不思議な人物です。

『お前は何んだ。』

『番人だアよ、權六ちふもんだ、お前達こそ何んだよ。』

『御上の御用で、この小屋を調べに來たのだ、默つて引込んで居ろ。』

『引込んぢや居られねえだよ、駒井駒造親方から頼まれて、この小屋を預かる權六だ、御上の御用なら晝のうちに來るが宜え、今時分ノコ〳〵入つて來あがると泥棒と間違へるだぞ。』

『默れ、下郎、餘計な事を言ふと、その分には捨て置かんぞ。』

『ヒヤア――』

『各〻、手分けをして、大急ぎで探さう。』

人數は三方に散りました、一隊が三四人づつ、道具裏、天井、奈落、廊下、便所、樂屋、隈なく見廻りましたが、何萬兩の大金を隱して居さうな場所はありません。

半刻ばかりの後、探し疲れた一同は期せずして樂屋に集つて居りました。

『何處にも無い。』

『引揚げようか。』

『いや、キツト此處に隱してあるに相違ない、もう一と探しだ、

夜明けにはまだ間がある。』

『あれは何んだ。』

一人は隣の小屋へ通ずるらしい、さゝやかな潜りを指しました。

『隣の小屋ではないか。』

『をかしいぞ、隣の小屋なら向ふにある筈だ。』

『行つて見ろ。』

五六人飛付いて潜戸を引開けました。

『あツ。』

『何んだ、あつたか。』

『大變なものがある。』

かかげた龕燈に照して見ると、中は四方板壁になつて、左右に戸棚を並べ、眞ん中にオランダ風な卓子と床几を据ゑた八疊ほどの部屋ですが、中にある調度、器械、小道具は名も知らぬ怪奇なものばかり、竹刀打つ業より外に知らない、大藏鐵心の門弟共が驚いたのも無理はありません。

これこそ駒井駒造の諸葛亮三郎が、貧しい財嚢を傾けて、オランダやメリケンの船から買ひ集めた、窮理學（今の物理學）やエレキテールの、精巧な器械で、駒造は日頃此處に籠つて、まだよく日本に紹介されない、いろ〳〵の學問や實驗に耽るのを、唯一の樂みにして居たのです。

『こりア、切支丹の道具ぢやないか。』

『打ちこはして見よう。』

『よしツ。』

一人は木刀を揮り上げました。これで一と撃ち、グワラ〳〵とやつたら、駒井駒造が三年がかりで集めた、窮理やエレキテールの器械は、惡戯つ子の玩具のやうに、たつた一ぺんで滅茶滅茶にされるに決つて居ります。

三十五萬兩にも五萬兩にも、何んの愛着も未練も無い駒造ですが、此實驗室を荒されたら、どんなに落膽することでせう。

『あツ、そんな亂暴なことをすると罰が當るべえ、お前さん方は本當に仕様のねえ人間だ、それを止せば、面白いものを見せてやる、此方へ來るが宜いぞ。』

權六のボヤケた聲が、頭の上から浴せるやうに響きます。

『何んだ。』

『面白えぞ、これだよ。』

權六は委細構はず、舞臺のすぐ裏に張つた一枚の古い幕を拂ひました。

『あツ。』

亂暴な門弟、浪人共も思はず聲を呑みました。灯の前に現は

れたのは、二間四方ほどの岩丈な檻で、その中には、鼻の先から尾の先まで一丈以上もあらうと言ふ、金毛の大虎、不意の闖入者と、夥しい灯に驚いたものか、頭を低く、怒れる猫のやうに構へて、眞紅の口をクワツと開いて居ります。

黄金の鈴を張つたやうな二つの眼、銀色の髯を逆立てて、くしやみを堪へたやうな恐ろしい表情をすると、續いて――ウヲーツと低い唸り聲をあげるのです。

十何人の荒武者共、一ぺんに蠅のやうに飛散りました。この小屋で虎を見せたことは知つて居りますが、あまりに不意に出逢したのと、夜中、安らかな眠を覺されたせゐか、虎の様子が想像以上に物凄いのに驚いたのです。

『お前さん方、何を探すか知んねえが、序に此檻の中も見て行つてくんろよ。』

權六はノソリと近づくと、無造作に檻の掛金を外して梁へ掛けた、檻の扉の綱を手繰りました。これを力一杯に引けば、檻の扉は眼の前に開いて、猛虎が、ノソリと出て來るのはあまりにも明かです。

『馬鹿ツ、止せツ、何をするツ。』

『ハツ、ハツ、ハツ、ハツ、役人が此小屋を調べに來たのなら、此檻の中も見なくちや惡かんべえ。』

『これ、そんな馬鹿な事を止さないかツ。』

『おつかねえ事は無いよ、虎はよく馴れて居るだ、尤も近頃は時候のせゐで少し氣が立つて居るから、知らない人間を見たら、食ひ付くかも知んねえがネ。』

『あツ、止せツ。』

十何人はゾロ〳〵と舞臺へ、土間へ、表の木戸へ逃げました。權六の手は次第に綱を手繰つて、虎の檻の扉は、もう四五寸も開いたのです。

『逃げるなよ、何んて臆病な武家だんべえ、檻の中も調べてくんろよ、あれ、

あれ、皆んな飛んで行つちめえがつた、馬鹿野郎、虎を本當に出しや、俺が一番先に喰ひ付かれるでねえか、ハツハツハツハツハツ。』

何んと言ふ横着さ、明方近い街の闇に消え去つた、十何人の武家の後ろ姿を見送つて、權六は腹を抱へて笑ひ轉げました。

『ハツハツハツハツハツ。』

求馬は單身 虎狼の顎へ

『頼む。』

『ドーレ。』

中洲の大藏鐵心の道場を訪ねたのは、隻手の劍豪篠原求馬、絶壁の如く削り取られた右肩を聳やかし、左の手を輕く兩刀の腰に當てます。

一と晩何處で過したかわかりません、道場の大玄關へ掛つたのは、まだ日も出ぬうち、其邊を掃いて居た下男は、驚いて箒を投り出しました。

『拙者は篠原求馬と申す、諸國武者修業の者だ、一手指南に預り度い、道場の主大藏鐵心殿へ取次いで貰はうか。』

何うも言ふことが亂暴、こんな武者修業などは十年に一人も來る者ではありません。尤も月

代の延び切つた、七つ下りの羊羹色の着流し、少し長刀になつた草履を突つかけた風體、兩刀は手挾んで居ても、武者修業と言ふ柄ではありません。

下男は驚いて横つ飛びに奥へ入りました。

『これは〳〵ようこそ御立寄下された、諸國御修業の御方とあれば、早速一手御指南に預り度いが、當道場の主は、折惡しく所勞で臥つて居ります。これは輕少乍ら、御道中の草鞋錢の足しにでもして頂き度い、然らば御免。』

代つて出た内弟子らしい男、道場を貰つて歩く浪人者には馴れて居りますから、盆の上に若干かの鳥目を包んだのを出して切り口上で斯うまくし立てます。

『默らつしやい。』

『…………』

『誰が草鞋錢が欲しいと言つた、篠原求馬が參つたと、主に取次がつしやい。』

『へエ――』

少し見當が違つたと思つたか、取次は面喰つて引込みました、實は主人の大藏鐵心に取次ぐまでもなく斷つたので、斯う出られると、自分一人では扱かれません。やがて四半刻ばかり、

『これは〳〵篠原樣で御座いましたか、道場の主大藏鐵心は、御名前を承つてことの外なつかしく存じますが、何分の所勞、甚だ不本意では御座るが、日を改めて御出下さるやうにと、斯様に申して居ります、御免。』

今度出たのは、昨夜號令をかけて來た浪人者、大藏鐵心の片腕と言つた男でせう、流石に眠さうな眼を擧げて、斯う言ひます。

『所勞とあらば致し方が無い、それでは昨夜から當道場に止められて居る筈の、駒井駒造殿事、諸葛亮三郎殿を申受けて參り度い。』

『えツ。』

『それも嫌とあらば、踏込んで一と勝負致さうか、確と返事が承り度い。』

『暫らく御待ちを。』

取次は又引込みました。

篠原求馬に荒れられたら、どんな事になるか、大藏鐵心は一番よく知つて居る筈ですが、斯う言はれては、まさかオメ〳〵と駒井駒造を返すわけに行きません。

『それツ。』

鐵心が號令を掛けたのでせう、道場の中は急に活氣付くと、篠原求馬を玄關に待たせたまゝ、夜討に備へるやうな騷が始ま

つたのです。
『飛んで火に入る夏の虫だ。』
『その素浪人を斬つて了へ。』
『大藏の地獄道場を知らないか。』
門弟、一味の者、食客取交ぜて二十人あまり、昨夜馬鹿の權六に虎の檻で脅かされた事も忘れ、奥で腕を拱いたまゝ、切りに肝膽を碎いて居る、師の大藏鐵心の思惑も忘れて、夢中になつて奔走して居ります。
『さア、お通り下さい。』
『御免。』
篠原求馬が玄關へ上つたのはもう陽が高くなつてからでした玄關の兩側には四人の若い門弟、さすがに襷も鉢卷もしませんが、一刀に反を打たせて、求馬を睨んで居ります。
『さても、御丁寧な御出迎。』
求馬はそれを見廻してニヤリとしました。
道場へ通ると、十數人の内弟子や食客が、左右に居流れて肩肘を張り、正面には大藏鐵心、苦り切つた顏で控へて居ります。
『篠原求馬殿と言はれたな、拙者は當道場の主大藏鐵心。』
『ウ、フ。』
篠原求馬は、あまりの空々しさに、到頭吹出しさうになりましたが、ジッとこらへて、
『申遅れた、拙者は篠原求馬、一手指南に預り度い、萬々一勝を取つた場合には、望みの品を申受ける、宜からうな大藏殿。』
『と言はれると。』
『駒井駒造殿の身體が所望ぢや。』
『拙者が勝つた場合には。』
『何んなと。』
『貴殿命を申受けても異存はあるまいな。』
『言ふ迄もない。』二人は屹となりました、瞳と瞳が刄と刄のやうに逢つて、一脈の殺氣が、サツと道場に漲ります。
大藏鐵心は座を立ちました、袴の股立を取ると、襷を十文字に綾取り、手頃の木劍を取つて、道場の中程に進み出ます、大跛乍ら見事な格服、淺黑い顏色も、高い鼻も、鋭い眼も、何んとなく迫力があつて、容易ならぬ相手といふことを思はせるに充分でした。これに對して篠原求馬は、襷も掛けず、構も直さず、——いや木刀さへ取りません。
削り取られたやうな右肩を少し前に、左を引いて、靜かに相手の出やうを見るばかり。
『篠原殿、得物は。』
と大藏鐵心、青眼に構へた木刀の蔭から眼を光らせました。

『これにて充分。』

『フーム。』

二人は二間ほどの距離に位を定めます。

『えーーツ。』

先づ大藏鐵心が氣合を掛ると、素手の相手に對して、極度に警戒し乍ら、ジリ、ジリと爪先歩きに、一尺許り近づきました。

『…………』

篠原求馬は物も言ひません。肩を少し落すと、深沈たる瞳、蛟龍の淵の如く淀んで、正面からジツと大藏鐵心を見入ります。

大藏鐵心――實は庵原山之丞、心樣は曲りくねつて、稀代の大惡人ですが、腕は實によく出來ました。千葉周作の實弟で、一時お玉ケ池の道場を背負つて立つた、千葉定吉には打ち込まれましたが、あとは殆んど負けた事の無いと言ふ曲者、併し、篠原求馬にはとても叶はなかつたのです。

求馬と刄を合せたのは、これで三度目或は四度目でせう、求馬の病中、足腰も立たずに寢て居た時の外は、たつた一度も勝つた記録を持ちませんが、惡人乍ら、非凡の人物ですから、引入れて立ち合ふ以上、必勝の計畫が無い筈はありません。

『えーーツ。』

二度目の氣合、道場の隅々に凛と響きます。さすがに恥を知つた大藏鐵心、冒頭からペテンにかけて、求馬を退治するわけにも行かなかつたでせう。ジリ〱と爪先探りに横へ廻つて、

『カーーツ。』

三度目の氣合と共に、大跛の鐵心の身體は宙に飛んで、木刀ごと求馬の頭上に殺到しました。尋常の相手なら、これで一とひしぎになつたでせうが、求馬はフワリと身をかはして、相變らず構も直さず、深沈たる瞳に相手を見据ゑます。

大藏鐵心は、思はずクラリとしました、求馬の瞳は、甘美なあやかしを誘つて、ジツと見詰められると、節々も解さうな心持。

『己れツ。』

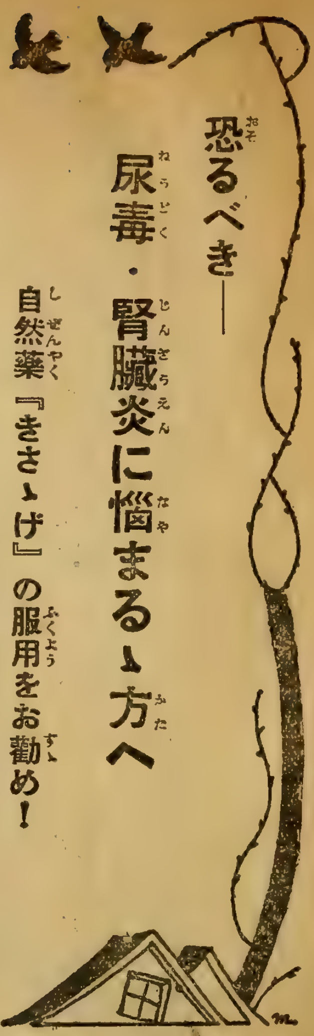
僅かに木刀を振り冠つて、齒を喰ひしばります。

併し、求馬も此時、思ひもよらぬ大難に面して居りました。

道場に並んだのは十人ばかり、これは内弟子のうちでもつまらぬ顔ぶれで、腕のあるのや智惠の逞ましいのは、鐵心の旨を含んで、隣の室から、道場の窓から、欄間の外から、最後の機會を狙つて居たのです。

一人は短筒、一人は弓矢、一人は、大藏鐵心の庵原山之丞が編んだ、猛毒を玉子の殼に詰めたのを持つて、鐵心の合圖を待つて居たのです。

（つゞく）



恐るべき――
尿毒・腎臓炎に悩まるゝ方へ
自然薬『きさゝげ』の服用をお勧め！

浄血機能

申上げる迄もなく腎臓は浄血作用を營む大切な機關でありまして、腎臓に故障を起すと血液の清潔を保つことが出來なくなり從つて不淨な血液が身體をめぐることになり恐るべき尿毒症を惹起したり又一面には血液を篩ひ分ける機能を失ふために折角攝取した榮養分も其まゝ體外に排泄される様な結果を招く事にもなるのであります。

腎臓炎を放置してゐると顔色は蒼白となり衰弱甚だしく、浮腫、倦怠、氣鬱症等を起して活動力を減殺され、遂には血壓が高まり、心臓が弱り血管は破れ易く動脈硬化、腦溢血等に罹り、腎臓機能は衰へ、萎縮腎となり尿毒症を起し取り返しのつかぬ様な不幸を招くに至るのであります。

『きさゝげ』の効目

『きさゝげ』が頑固な尿毒、腎臓病に特効あることは最近醫學界の問題となり斯病專門大家が科學的に研究實驗さるゝに至り益々其効果の偉大なることが確認され、日本藥局方として收録せらるゝに至つたのであります。

『きさゝげ』は尿中の蛋白を減じ、且つ尿の水分及固形成分殊に鹽分の排除を著しく促進する爲め、かの不快な浮腫や尿毒の作用たる頭痛、眩暈、心悸亢進をはじめ諸般の症状を退散し頑固な腎臓炎も快癒した實例が澤山にあります。

腎臓炎との御診断

東京　長島つる子

『私は春秋はいつも右耳の下にヤニが出はじまり引つゞいて浮腫、頭痛、眼精疲勞、動悸、不眠症等を惹起し食慾乏しく便通は極度に悪く身も心も置き所もなく終日憂鬱と焦燥とに附まつはれて不快な日を送るのが常なのですが醫師の診斷を受けますと立派な腎臓炎だと宣告されました。そこで醫藥の側ら嘗て婦人倶樂部誌上で三宅花圃夫人や三宅やす子夫人の腎臓病治療に關するお話の中に「きさゝげ」が効果があると述べられて居りましたので早速講談社代理部から「きさゝげ」一箱頂いて服用しました。

其効果は實に不思議で浮腫は二三日で去り便通は實によくなり、頭痛、眼精疲勞、不眠症等も忘れ自然榮養もよくなつて健康に立歸ることが出來ました。之は全くこの「きさゝげ」のお蔭と心から感謝して居ります。……』

藥價、約一ヶ月分　一圓二十錢　送料內地二十一錢領土四十二錢、米國四十八錢御希望の節は本社代理部へお申込み下さい。

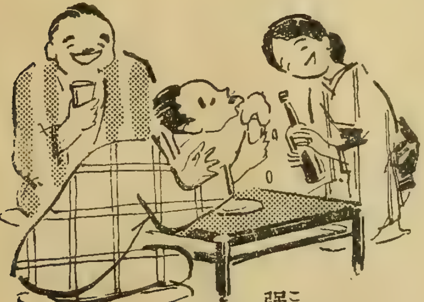
東京本郷駒込大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二一九）

ホームラン彼女の日傘踊つてる　（雨月）

子別れの間を捕手欠伸する　（つばさ）

流行唄覺えた頃は廢つて居　（進字）

溢れてるビールの泡へ口が行き　（漫步）



蚤探す電氣へ綱の有りつたけ　（中州）

强意見母が入つて金を呉れ　（賢吾）

髪結の亭主女中の役もする（富子）
待ち呆けと知らずタクシー寄つて來る（柳笑）
手作りをほめて保險屋口を切り（味津江）
肥たごを前に晝飯うまい事（夕霖）
伸ばした毛掴めば喧嘩兄が負け（青空）
モガさんの正體見たり裏長屋（和彦）
浮世川柳
素文
投句大歡迎

人道の戰士賀川豐彦先生新著

海洋小說『海豹の如く』出づ!!

見よ！これぞ新日本の大理想を描ける名著

著者は、その胸中に鬱勃たる海國日本の大理想を指示せんが爲に、或は大洋に乘出して暴風雨と闘ひ、或は僻陬の漁莊蟹舍に老漁夫と語り、普く日本の海港漁村を巡つて、水產、漁業、海洋、氣象等に關する山の如き資料を蒐集し、眞に涙ぐましき努力を續けて本書を成す。

波靑く、島綠なる內海の小漁村を中心として、四國、九州及び和歌山、靜岡、千葉、宮城、岩手、靑森の各漁港を始め、北は樺太、カムチヤツカより南は臺灣、支那海に亙る海洋を周航しつゝ、或は大洋中にて兇惡なる海賊と闘ひ、或は爽快なる遠洋漁業に從事し、或は暴風雨に襲はれ太平洋の波浪に漂泊し、或は暗夜怒濤を冒して難破船を救助する等手に汗握る場面の幾變轉、

雄大なるスケール、纎細なる描寫、興味と感激の絕頂をゆくモデル小說！

而も正義と純愛の血に燃ゆる主人公村上勇靑年を繞つて、無賴の漁夫あり、酷薄の船主あり、惡德橫暴を極むる代議士あり更に彼を戀する、可憐なる島の娘の純情あり。濃艶にして薄倖、つひに失明して悶死するうら若き娼婦あり。淸純にして聰明、た

だ聖愛にのみ強く生くる神の如き麗人あり。熱血熱情、滿眼に涙を湛へつゝ本書を成せる著者の情熱全卷に溢れ、

一讀胸躍る海の物語！　正に空前の大海洋小說!!

日本にかゝる小說未だ無し、これこそ此の著者にして初めてなし得る大名作、本書に依つて窮乏せる日本の漁民は救はれ全日本は更生するであらうと讀者悉く感嘆！

最近の著者

著者曰く――我々の祖先は海から來た。然し、今の日本人は、その出生地を忘れようとしてゐる。漁民は嘆き、漁村は頽れ、海を懼るゝ者が、日々數を增してゆく。彼等を救ふ者は日本を救ふ。海は日本の城壁であり、海は日本の大路である。

海を理解することなくして、日本の運命は打開出來ない。

我々は、山を相續しなくとも、海を相續する使命を持つてゐる。それで、私は、日本の若き子等のために、海について自覺すべきことを、この書に書き綴つた。日本の議會も、田園も、都會も、海の人に對して頗る冷淡である。殊に貧しき海の勞働者に對して日本國民が與へる注意は、まことにさゝやかである。然し私は海を忘れる事は出來ない。

黑潮は、私にこの書を書くことを命じた。太平洋は我々を招く、海豹の呼び聲に、我々は呼應して、新日本の黎明を、海洋の眞只中に仰がねばならぬ。日本の光榮ある海の歷史を忘れる者は忘れよ。私は日本をして永久に海の寵兒であらしむるためにこの書を海國日本に捧げる。

あゝ全日本の血を沸かす感激の大名篇

――誰方も直ぐ御覽あれ――

◇全國書店にあり◇　定價一圓三十錢（送料十二錢）　東京本鄉　大日本雄辯會講談社發行（振替東京三九三〇）

現代小説

善(ぜん)は滅(ほろ)びず

佐藤紅緑

林唯一畫

兩國橋畔の拾兒だつた毅と、大槻大將の隱し子である魚子とは、奇しき緣から紳商北畠昌平の手に兄妹として育てられ、軈て魚子は毅の友人的場讓二を、又讓二の妹千鶴子は毅を、互に慕ふ間柄となつたが、其時魚子は、端なくも大槻大將から父宛の手紙中に『魚子を毅に妻せられたし』との一文を見つけ、失神せん許りの驚きに打たれる。

此矢先き北畠昌平は、一夜築地河岸で捕物騷ぎに遭遇したが、追はれる兇盜が○○獨立運動の首魁李成民だと聞いた時、愕然として色を失つた。李成民！あゝそれこそは紛れもない、かの毅が實父の名ではないか！（前號迄の梗概）

浮沈一瞬

北畠昌平が瓢家から市ケ谷の邸へ歸つたのは十一時頃であつた。夫人の雪子は持病の喘息と心臟病のために四五日前から床に就いて居た。彼女は非常に氣丈な質であるけれども平素病氣に慣れないだけに、少しでも病氣になると弱りやうが激しかつた。昌平が夫人の室へ入つた時毅と魚子は母の枕元に添いて居た。

『どんな風か。』

昌平は立つたまゝ二人に言つた。

『今眠んでいらつしやいますわ。』と魚子は言つた。

『さうか、明日になると癒るだらう。』

昌平はのそ〳〵と室を出て行つた、彼は毎でも明日になれば癒るだらうと言ふのが口癖であつた。其はさう信じて言ふのではない樣にも思はれるが併し病人や看護人に取つては、其が何となく力になるのであつた。

昌平は自分の居室へ入つて洋服を着物に着替へてから暫らく火鉢に手を翳したが軈て机上の書類を手に取つた。其中には大槻大將からの手紙もあつた。

『昨日着京致し候へども多忙のため御たづねも出來ず、當分滯留の積なれば機會を見て一會仕度存居候、其の折魚子の事も取極め可申候。草々』

讀み終つて彼は其れを細かく裂いて屑籠に抛り込んだ。其れから次の書類に目を通した、其等數十通の書類は重に彼の關係する銀行諸會社の機密に屬するものであつた。

物盛なれば必らず衰ふ、太陽に朝もあれば正午もあり夕刻もある、昇天の勢に乘じて八方に手を擴げた昌平の前には誰一人として刄向ふものはない筈だが、併し禍は戸の隙間からでも入り込む。中に最も悪辣な手段を以つて彼の事業を壓迫して來るものは新政黨といふ政黨である、政黨には軍資金が要る、此の金を貯め込むには我黨内閣の時に利權を占領して、殆んど公盗の如く津々浦々を荒し廻るのである。

『なに？　政黨屋の奴！』

昌平の眼から見ると代議士などいふものは眼中にない。人格が劣等で、無智で無學で、國家の利害よりも政黨の利害を尊しとなし、政黨の利害よりも自己の利害を尊しとして居る様に見える、是等の生活狀態を知悉して居る彼は寧ろ政黨や代議士ほど愚劣にして且つ滑稽なものはないと思つて居る。

無論昌平と政黨者流とを比較すれば月と鼈の相違があるに異ひない、だが若し昌平にして所謂實業家と稱する者の様に、政黨の愚劣を知りつゝもそれを利用して自己の藥籠中のものとなせば彼の目的は見事に達せられたであらう、併し昌平には其れが出來なかつた。彼は政黨の前に頭を下げる事が嫌であつた、自分の理想を妨害するものに對しては何處までも戰つて行かうといふ決心があつた。

　これがために彼は悪戦苦闘を重ねゝばならなくなつた。現に彼が全力的に投資して居る紀州の鐵道は、死の魔所と稱せらるる隧道が幾度ともなく崩落したために數百萬は煙の如く消えてしまつた。銀行の金庫は空虚になり、其れを埋合せるために他の會社を起したが其れも蹉跌した、彼としては政黨に泣き込んで救を求むるより他に策がない、だが剛愎な彼には其れが出來なかつた。

『國家のために最も正しき事業を經營する者が、最も不正な政黨の力を借りるのは恥辱である。』

　彼は恁う信じて居る。机上の書信數十通悉く各方面からの悲報である。彼は暫らく腕を組んで考へ込んだ。

　其處へ女中が靜かに襖を開けた。

『奥田様がいらつしやいました。』

『此處へ通せ。』

　奥田惣七は笊蕎麥の頭に汗を搔いて呼急はしげに入つて來た。

『御苦勞でした、臺灣銀行の方はどうでしたか。』

『はッ其れでございます、遺憾ながら見込はありません。』

『僅か一千萬圓が？』

『一千萬圓が五百萬圓でも難かしうございます。』

『其れでは……』

　昌平は奥田の顔を凝と見詰めた、其れは奥田の顔を見て居る

のではなかつた、彼は只だ眼を其の方へ向けたまゝ頭は濛々とした煙の中に徜徉うて居るのであつた。

『社長！　どうも止むを得ません。』

『うん。』

『此の上は唯た一つの手段を取るより他に仕方がありません。』

『唯一つの手段とは？』

『政黨と妥協して利權を分配する事です。』

『いやだ！』

昌平は頭を掉つた。

『其れでなければ特種銀行を抑へつける事です。』

『抑へ付けるには？』

『社長！　社長と朝鮮總督大槻閣下とは特別の關係に居られるのですから、閣下から只だ一言、御助言があれば銀行の重圍は煙の如く解けると思ひます、丁度日の光に逢つた泡雪のやうに……これほど容易な事はありません。』

『うん。』

『たつた一言で利目が充分です、社長から御賴みになれば閣下も決して厭とは仰せられますまい。』

『いやだ！』

昌平の屹と結んだ唇から白い齒が露はれた。

『どうして？　社長、其れをなさらなければ滅亡でございますぞ。』

『いやだ。』

『さうなりますと……』

『奥田さん、あれを御覽！』

昌平は振返つて背後の屛風を指さした。金光燦たる中に筆太に書かれた鮮かな文字！

『善は滅びず　浩然』

其の傍らに大槻大將の添書。

『同感　武文』

奥田は禿げた額に手を當てたまゝ默つた。

『御苦勞だつた。』

昌平は快然と言つた。もう氣が落着いたらしい。

奥田が去つてから彼はもう一度金屛の文字を讀み返した、其の顏は次第に朗らかに其眼は淸らかに輝いた。彼は起つて夫人の病室へ行つた。夫人雪子は熱が冷めかけたので機嫌の可い顏をして居た。

『今貴方を御迎へにやらうと思つて居ました。』

『何か用か。』

『少し御相談がありまして。』

『子供等は？』
『毅も魚子ももう寝室へ參りました。』
『何の相談か。』
『魚子の事です、魚子は何處へも緣付くのは厭だと申します。』
『なぜだらう。』
『毅の御友達の的場さんに嫁つてくれと毅が言ひますので、どうだらうかと思つて魚子に訊きましたら、どんな處へも嫁くのは厭だから一生此の家に獨身で暮らさして下さいと言つて泣くのです。』
『どうしたんだらう。』
『私が考へますには魚子が私達の子でないといふ事を知つたのではありますまいか。』
『お前が言つたのか。』
『いゝえ。』
『其れぢや知れる筈がないぢやないか。』
『私もさう思ひますが、どうしても樣子が變でございます、萬一したら毅とは兄妹でないと解つたので、或ひは毅と夫婦になりたくなつたのではないかと思ひます。』
『そんな馬鹿な事があるもんか、今まで兄妹だつたものが、急に他人になつたからつて……そんな變化が起るものかね。』
『さあ其れですよ、そんな事はないとは限りません、女の心といふものはね。』
雪子は自分の手を額の上に置いて良人の顔を見詰めた、昌平も亦たしみ〴〵と痩せ衰へた妻の顔を見詰めた。互ひに沈默を續けた、さうして限りなき冥想に耽つた。
『俺には妻にも言へぬ職務上の秘密がある、妻は娘にも言へぬ血統上の秘密がある、さうして見ると魚子も亦たどんな秘密の變化が心に起つてるか解らない。』
物質萬能、智慧と精力、此の世は其れだけのものだと信じて居た昌平の頭の底に、或る不可思議な力が、より以上に人間を左右するものではなからうかといふ疑が不圖電光の如く閃めいた。
其の事があつてから四五日の後、魚子は獨り父の居室で編物をして居た。夜は更けるに伴れて雨の脚は瀧の如く強くなつた、ざあ〳〵といふ音は庭の萬樹を搖がし雨樋を鳴らし、大地を叩く。其度毎に冷え〴〵とした風が隙間から入り込んで電燈までが冷え切る樣に見える。
魚子は編物の手を休めずに續けた、此頃では新聞が毎日の樣に御父樣の銀行の事を掲載する、書かなくても可さゝうな事まで書く、御父樣は横領罪として召喚を受けるだらうと書いた新

聞もある、其等の新聞は一切病める母には見せぬ事にした。心配の餘り毅に相談すると毅は只だにや／＼と笑つて居る。

『魚さん、善は滅びずだよ。』

只だこれだけである、善は滅びないとしても不善が蔓るのはどういふわけだらう。無理が通れば道理が引込むとはいろは加留多の箴言である、魚子は其れが心配でならなかつた。

『どうなすつたらう。』

奥の間の時計がぼうんと一つだけ打つた、三十分の鈴か但しは一時の鈴か解らないが、もう十二時は確かに過ぎた。新聞に依ると御父様は法廷に引張り出されるらしい、そんな事はない、決してそんな事は……。

恁う考へてる中に彼女の眼の中に白い煙と薄鼠色の煙が動いて、きら／＼とした光線が折り／＼襖から屛風から火桶から擴がる、と彼女の手に持つた編物の針が恐しく太くなつたり細くなつたりする、ぽたりツと針が手から滑り落ちた、彼女は兩手を疊に突いたまゝがつくりと眠つてしまつた。

連日父の歸りが晩いので彼女は疲れたのである、室内は靜で、明るい電燈が其の黒光りのする髮や白い襟元や横顔や、紅い唇を照らして居る、外は暴風雨で低い雲と雨と風が喊き叫んで戰つて居る。

びしよ／＼に濡れた昌平は襖の間から入つて來た、彼は誰かを呼ばうとしたが、魚子の寢姿を見て急に立停まつた。さうして其の寢顔を凝と覗いた。

『風邪を引くよ魚さん、彼方へ行つて御寢み。』

彼の聲は優しかつた。

『あらツ。』

魚子は驚いて坐り直して微笑しながら、丸い指先で眼を擦つた、幼さい時から眠くなると丸い指先で眼を擦るのである、昌平は彼女の幼時から今日までの事が一度に頭に浮んだ。

『起きて居なくても可いのに。』

『あら、私眠つたか知ら、御免なさい御父様。』

『はツ／＼／＼、お前がさういふ顔は五つや六つの時と同じだよ、はツ／＼／＼。』

昌平は笑つた。

『御父様、早く御召替にならないの？ 隨分濡れていらつしやるわ。』

魚子は起たうとした。

『構はん／＼、魚子、私は直ぐ出て行くんだから。』

『あら此の暴風雨に？』

『うん、一寸御前を見に來たんだ。』

『では御父様、銀行が？』
昌平は默つて首肯いた。暴風雨は一段と烈しくなつた。
『銀行は駄目になりましたの？』
『魚子、お前は御父さんをどう思ふか。』
父は微笑を浮べたが、眼の底に悲みがあつた。
『御父様は善い人ですわ。』
『善い人か。』
『正しい人ですわ。』
『能く言つてくれた、魚子、私を知つてくれるのは御前と支配人の石尾ばかりだ。』
『まだ〳〵ありますわ。』
『誰だ。』
『御兄さんと御母さん！』
『うん、さうだ、其れで私は滿足だ、只だ今後世間で私を何と言ふか、新聞がどんな事を書くかと思ふとお前達に氣の毒でなあ。』
『世界中の人が御父様の惡口を書いても私は何とも思ひませんわ、キリストが荊の冠を被らせられて磔刑にされましたね。』
魚子ははら〳〵と涙を零した。
『私はキリストの萬分の一にも當らんが、併しこれが國家のためになると信ずる道の上に於て苦むのは決して恥辱と思はん。』
『私も恥と思ひません。』
『時によると私は監獄へ行かなきやならんかも知らん。』
『では御父様！』
魚子は仰天して聲を擧げた、昌平は慌てゝ手で以て制める様になし、
『御母様は？』
『御やすみになつて居ます。』
『さうか、御母様には何も言ふなよ、旅行したと言へ。』
『はい、でも御父様が……どうにかならないの？　御父様？』
『後の事は萬事石尾に賴んであるから、何でも石尾に相談するが可いよ、ぢや魚子、御母さんの事は賴むよ。』
昌平は身體を起した。
『いらつしやるの？』
魚子は泣聲になつた。
『うん、直き出て來られるからな。』
『もう少し……もう少し……御父様！』
魚子は子供の樣に父の胸に顏を埋めた。昌平は天井を仰いで涙を怺へた。
『まだ決まつたといふわけでないからな、心配おしでないよ、

氣を確乎と持つてな。』
『はい。』
『毅は？』
『御やすみです。』
『毅にも逢ふまい、御母樣にも逢ふまい。』
『でも御母樣だけは一目逢つてあげて頂戴。』
『さうだねえ。』
昌平はのそ〱と母の室へ入つた、魚子は涙を收めて父の着替の服を出し取揃へて待つて居ると軈て父は再びのそ〱と歸つて來た。
『能く眠つて居たよ。』
其聲は顫へて居た。
『一寸御起ししませうか。』
『いや〱、其の儘に。』
父は洋服を着替へ、外套も新らしく着替へた。暗い廊下を他人の家の樣に足音を忍ばして、二人は玄關へ出た、扉を開くと風が颯と室内に吹き込んだ。棕梠竹の葉末に星の光がちらほら覗いて居る。

『雨が止みましたのね。』
『又降るかも知れんよ。』
父は淋しく天を眺めた。
『御車は？』
『外に待たしてある……魚子、何か言ふ事がないか。』
『いゝえ、何んにも。』
『後の事は賴んだよ、左樣なら。』
『御父樣！』
魚子は跣足のまゝ門まで走

つた。

『もう可い／＼。』

父は足を疾めた、だら／＼坂の両側は松と楓である。父の姿が段々木立の暗に消えた、軈て自動車の音が聞えた。

足を拭いて室へ入ると父の脱ぎ棄てた着物が其儘に殘つて居る、襯衣やワイシャツに父の肌の温まりが未だ冷めきらずに居る、幼さい時から胡坐の中に抱かれて覺えのある父の匂ひである。魚子は其れを犇と顏に當てて聲を忍んで泣いた。

『だあれ？』

母の聲が次室に聞えた。

『私よ、御母さん。』

『あゝまだ寢まないの？』

『えゝ、風が騒々しいもんですから。』

『さう？　誰かと話してたのぢやない？』

『いゝえ、誰とも……』

『さう？　ぢや私、夢だつたのか知らん。』

一家の中にどんな悲惨な事があらうと、新聞は一向平氣である、人の私事を訐くのが新聞の特權だと信じて居る新聞記者に依つて作らるゝ日毎々々の新聞は事の眞相如何には御構ひなく又た其の記事のためにどれだけ多くの負傷者が出來ようと、一家がどれだけ深い損害を受けようと頓着なく、只だ事件がなるべく奇抜であり、なるべく大袈裟であり、なるべく刺戟的でありさへすれば上乘の特材料とせられて居るのだ。

北畠昌平の横領罪は新聞に取つては最も上等の事件である、毎日々々二號活字で書きのめさるゝ記事は天下の耳目を聳動さした。

『北畠さんは氣の毒ですな。』

『あんなブルジョアはどし〳〵檢擧するが可い。』

痛快を叫ぶものは事件の眞相に重きを置かずに、只だブルジョアが刑罰されたといふ快感からの叫びである。同情を表するものはどうせ實業家なんてものは皆んな遣繰算段をやるんだから捕まらないものは利口で、捕まつたものは氣の毒だ位の同情に過ぎぬ。

此等の罵詈惡口の渦巻の中に立つて敢然として奮起したのは毅であつた、彼は學校を休んで毎日實業家方面を駈けづり廻つた。今まで昌平の恩を受けて立身出世した實業家は數限りもない、昌平のために危難を救はれた會社も數限りもない、毅は其等の人々を說き廻つた、だが人の恩は感ずるも早いが忘れるも早い。救はれた時には此の人のためには生命も捧げようと感激したものゝ、扨て難關を切抜けてどうやら光りが見えて來るといかに恩人とは言へ、他人のために自分を犧牲にするほどの熱誠が消滅する。恁ういふ場合には最も重寶な言葉がある。

『いかにも御氣の毒で、私も充分に骨を折つて見ますけれども何分とも時節が時節ですから……』

恩を忘れる時節といふものが此人達の世界にあるのかも知らぬ。毅は逢ふ人毎に失望を感じた。

『世の中といふものは輕薄なものだ。』

彼はしみ〴〵と覺つた。或日彼は魚子と二人庭先で語り合つては悲歎に暮れて居ると、裏庭からのそり〳〵と入つて來る一人の男があつた。埃だらけの毬栗頭で、絣の袷を着て草履を穿き、氣の抜けた人の樣に大地を見詰めながら二人の居るのも知らぬ氣に何か獨りで唸つて居る。

『やあ、十吉君。』と毅は聲を掛けた。

『毅さん、やつ付けませうかね。』

十吉と呼ばれた青年は眞黒な顔から白い齒を露き出して言つた。

『何をだ。』

『何でもだ。』

天下無類の色黒男、胴が太く逞しく、肩には隆々たる瘤が二段に凸起し、其の腕首は恰ら鐵の樣、誰が目に見ても十人や二十人力はあると思はれるが、併し其の眼の中に何とも言へぬ正直さうな光が溢れて居る。

『何をやるんだよ。』

『何でもやるんです、此の場合ぐづ〱しちや居られません、僕は第一に銀行に火を放けるが可いと思ひます。』

『火を放ける？』

『あゝ。』

十吉は今年二十二歳の青年で、其の父石尾傳八は今北畠家の支配人である、傳八は元と銀行の小使であつたが、銀行の金二千圓を他所へ屆ける途中掏兒に盜られて首を縊らうとしたのを昌平に助けられ、其れから忠實恪勤の廉で昌平に引立てられ今では北畠家の大黑柱となつて居る。其の子の十吉は父に似て正直一方の性質だが學校の課業は好まなかつた、彼は二度も三度も落第して漸と中學を卒業したが、卒業すると直ぐ百姓になつてしまつた。筑波山の麓に土地を買つて農作をやる、養鷄をやる、山から木を伐つて下駄を造る、彼は每月一度か二度、其等の農作品を負うて上京するのであつた。

十吉は新聞を見るや否や主人の一大事とばかり驚いて上京し、父傳八に訊いた。

『御父さん、どうしたら可いでせう。』

『さうだね、御前は御前で考へろ、私は私で考へるからな。』と傳八は言つた。

いろ〱考へた結果十吉の最良案は放火であつた。

『銀行に火を放けるとどうなるんだ。』と毅は言つた。

『火を放けて燒いてしまへば銀行がなくなる、銀行がなくなれば問題もなくなるでせう。』

『さういふわけにはいかんよ。』と毅は笑つて、

『そんな事をしたら證據湮滅のために放火したと言はれるよ。』

『そんな事はない、火を放けた本人が解れば社長に疑が掛かりやしません。』

『おう。』と毅は思はず聲を擧げて十吉を見詰め、『君がそんな事をすると事件が益〻不利になるよ。』

『さうかね。』

十吉は折角の名案が否決されたので落膽して首を傾げたが軈て、

『其れぢや社長樣の惡口を書いた新聞社を叩き毀しませうか。』

『そんな事は出來やしない。』

毅は恁う言つてから儼然たる態度ではつきりと申渡す樣に言つた。

『十吉君、輕卒な事をすると却つて大事を誤まる樣になるよ。』

『貴方が不可いといふ事なら何んにもしやしません、其代りに腕づくで役に立つ事なら僕にやらして下さい、惡い奴はいつでも叩き殺します。』

『まあ靜かに成行を見て居たまへ、僕はこれから出て行く。』

毅は直ぐ銀行へ父を訪ねた。父の姿は見えない、彼は又しても實業家連を歷訪し、再び銀行の前へ來ると、こは如何に！

銀行の前は人波を打つて居た、熱狂した群集は支拂口へ〳〵と雪崩れ込み押すな〳〵と叫ぶもの、退いてくれ〳〵と叫ぶもの雜然騷然恰ら鼎が沸く樣！

入口は階段から右と左に分れて居る、右の入口と左の入口から突進する群集は窓口の處に落合つて芋を洗ふ樣に押し合ひへし合ひして居る、二三人は苦しさに堪りかねて鐵網の臺に登つた、其れを見た人々は後から〳〵と押し來る力に堪へかねて吾も〳〵と臺に登らうとした、其處にも格鬪が始まつた。

『苦しい。』

『助けてくれ。』

後から來る人は內部の人の苦痛を知らない、彼等は只だ其の粒々辛苦の中に貯へた貯金を取り損なつては大變だといふ恐怖の念に驅られて居る。

『入口を閉めろ〳〵。』

聲々が叫んだ。四五人の巡査が入口の方へ行つたが、忽ち人波に呑まれてしまつた。

『引返せ〳〵。』

悲痛な叫びが聞えた、一人の職人風の男が巡査の肩の上に立つて何か言はうとしたが巡査が怒つて引き落してしまつた、群集は喝采した。

毅は眞直に引返して事務室へ入つた、事務室は恰ら火事場の如くであつた、卓上の凡てのものが形付けられて絨毯などまで剝ぎ取つたまゝ積まれてあつた、もう支拂口には社員が寄付かなかつた、鐵網を隔てた群集は生死の境に揉みつ揉まれつして悲鳴を擧げて居る。

『御父樣は？』

唯一

毅は小使に訊いた。
『重役室でせう。』
毅は直ぐに重役室へ飛込んだ、扉は開かれてあつたので彼は直ぐ父の姿を見た、父は中央の腕椅子に凭れて太い腹を兩手で抱へ、卓子を見詰めて居る、其の左右には重役の人々が並んで居た。何れも〳〵不安の沈默と亢奮の色があつた、彼等は互ひに何人かの發言を待つもの丶如くであつた。
『毅か、どうして來た。』と父が言つた。
『御父樣に御目にかゝりたいと思ひまして。』
『さうか。』
父の聲は明快であつた、毅は其の聲を聞くと同時に父には一點の疚しき處がないのだと直覺した。
『大變な騷ぎですね。』と彼は言つた。
『うん、世間に對して濟まない事をした。』と父は言つた。此の時外の騷擾が嵐の如く起つた。
『私の考では此の急激な取付は何か他に煽動するものがあると思ひます。』
と重役の一人が言つた。
『いや、責任は私一人にあります。』
父は決然と言つた。此時扉口に一人の姿が現はれた、其れは十吉の父傳八であつた、眞白な白髮が汗に亂れて瘠せた顏は憤怒に滿ちて居た。
『社長さん、奥田が見えませんか。』
『まだ見えない、先刻から奥田の返事を待つてるんだが。』
『駄目です〳〵、奥田は裏切りました。』
『裏切?』
『會社の秘密を通信社へ漏らしたのは彼奴です。』
表の騷ぎが益々激しくなつた、重役達は一度に立上つた。
『何とかしなけりやならん。』
『可し、私が謝罪まる事にしよう。』
昌平は悠然と立ち上つた、人々は其の後に從つた。毅も廊下へ出ると突然其處で十吉に逢つた。十吉は全身汗だらけであつた。
『おう、毅さん、僕は貴方を探して居ました。』
『急用か。』
『重大な事件です。』
日頃ものに慌てた事のない十吉が重大な事件といふからには餘程の事件に相違ないと毅は思つた。
『どんな事か。』
毅は十吉を廊下の隅に連れて言つた。
『僕はこれから奥田を殺しに行きます、後に殘るのは親父一人ですから、どうか宜しく御願します。』
十吉の聲は顫へて居た。

『どうしたといふんだ。』

『そんな事があるもんか。』

『いや確かに彼奴です、今の中にどうかしないと通信社から秘密が發せられます、彼は自分の持株を全部賣つて逃げ支度にかかりました。』

『株を賣るのは奥田の都合からだ、石尾さん、私は奥田を信じます。』

『併し……』

『奥田を疑ぐるのは止めて下さい。』

傳八は蒼白になつてぶる〳〵と身を顫はしたが軈てぐつたりと椅子に凭れて男泣に泣いた。

係る時に第一番に馳せ參ずべき筈の奥田惣七が影も形も見せぬのはいかにも奇怪であると人々は思つた。併し昌平は堅く奥田を信じて居た、空壜ブローカーから今日屈指の實業家になり得た奥田の唯一の後援者は昌平である、其れが今いかに實業家の輕薄とは言へ、恩に背くとはどうして思へよう。

人の性質は善良なものであるとは昌平の持論である、彼は如何なる場合に於ても人を疑ふ事は出來なかつた。

『奥田は銀行の秘密を通信社の鹿倉といふ奴に話しました、鹿倉は其れを新聞社へ通信すると言ひました。』

『それは本當なのか。』

『本當です、僕は父に命令られて奥田の後を跟けました、繩家といふ料理屋で二人が密會しました。僕は二人の密談を聞きました、奥田は政黨の手先になつて、社長の事業一切を新政黨へ賣り付けようとして居るのです。』

『併し父は奥田を信じて居るぜ。』

『社長は人を信じ過ぎると僕の父が口惜しがつて居ます、併し僕は彼等の計畫を半分だけ破壞して來ました。』

『どんな事を？』

『僕は鹿倉を撲りました、麥酒壜で頭をコツンとやつたら眼を廻したから、口が利けぬ樣に口の中へ鐵瓶の熱湯を注ぎ込んで筆が執れない樣に右の指を二本ぽき〳〵折つて來ました。』

『亂暴だね。』

『正當防衛です。』

『奥田は？』

『奥田は逃げました。生かして置くも不可いから今日中に消してしまひます。』

『そんな事をして君はどうなると思ふか。』

『死ねば可いんでせう、僕は社長のためなら何時でも死ぬ、十二の歳から覺悟を決めて居たんです、人の食を食むものは人の事に死す、昔から決まつて居ます。』

『待つてくれ。』

『待たれません。』

『死ぬのはいつでも死ねるぢやないか。』

（つゞく）

連載漫画

無軌道船長

田河水泡

(5)オヤ〱彼方から逆立の人が歩いて來るわ
氣狂だらう
(6)オオッ向ふからも來た
(7)これやきつと此の島は逆立ち島と云ふんだぜみんな逆立ちして歩いて居るもの
逆立ちで讀み易いやうに字までさかさまだわ
(8)妙な島だね公園のベンチで休むのまで逆立ち、子供の遊びも逆立ち
全く珍しいわねえこれだから世の中は廣くみて歩きたいわねえ

(9)足で歩くとは不思議な人間だね
あらッこんなに集つて來たわ
チエッ向ふでも人並みにこつちを珍しがつてゐらア
(10)オイッ足で歩くことは、この島の法律で禁じてある。國の風習にならへ
こりア困つたなあ
(11)どうも旨く足が上らんよ
船長さん私は出來るわ
(12)足の上らん奴は逆立ちの出來るまで刑務所に收容する
そ、そんな無茶な話があるかい
(13)面倒臭い逃げちまへ

(14)困つた、ボートが沖へ流出ちやつた
泳いで逃げませう
(15)首が上についてる人間は水中を歩く便があつていゝわい
淺いから背がたつわよ
(16)やつと逃げて來たが本船の影が見えないな
あらほんとだわどうしたんでせう
(17)わたし心細くなつちやつたわ
まアいゝよ氣永に探すさ
(18)あらあんな所に走つてるわ
石炭をたいて走つてるナ
(19)追掛よう あの船には百萬圓の金貨がつんである とられては大變だ
こんな島へ上陸しなければよかつたわ

時代小説

伊達事變

白井喬二

齋藤五百枝畫

戀人雪乃を、主君伊達綱宗の側女に召された三澤頼母は、一目彼女との對面を焦り、遂に過つて藩內御爲派の者を殺す。其中綱宗は亂行の廉で隱居を命ぜられ、同時に御爲派は頼母討取に狂奔しだした。仍で頼母は止むなく御爲派と對立する刺客組の屯所へ逃れ、恰もそこへ軍資金泥棒の入つたを幸ひ、仲間入の誠意立てに單身曲者を追つかけた。が愈〻曲者を捕へて見ると、それは望四郎と呼ぶ放蕩無頼の彼が實弟ではないか！　驚きはそれのみでない、其望四郎の報せに依れば、戀人雪乃は殿綱宗侯隱居の責を負うて自害しに歸國したといふ。愕然とした頼母は現在の己が立場も忘却し、一思ひに望四郎と共に逐電を決心する。

（前號迄の梗概）

蘆の中

近づく……と云つても、跫音よりも、手で掻分ける蘆葉の戰ぎと、互ひに何か止切々々に囁く警戒の合圖と云つたものが、物々しく、殺氣立つて、蘆叢の中へ感じられるのです。

『來たね。』

と望四郎は、顏を飯櫃にゆがめて呟きました。

『どうしよう?』

賴母は、いつか望四郎の傍へ摩寄つて居りました。

『どうしよつて、困つたな。やつぱり、兄ちやん、何とかして逃げるよりほかは……』

『叱ッ、何か云つてる。』

蘆の外では、

『そろそろ水溜だぞ、要愼せい。』

『よしきた。』

『やつぱり怪しい――彼奴！』

『ふン、賴母の坊やに、一杯喰はされたか。』

『溫情主義の祟りだ。』

などといふ聲が、凍ッた息でも吐くやうに、一つ一つ、低く、然し、多分の憎しみをふくんだ調子で聞えて來るのです。

坊や……といふ聲を聞くと、望四郎は、

『クスッ。』

と笑つて、一寸、首を縮めましたが、表情は、さすがに獰惡なくらゐ眞顏でした。

『兄ちやん、そ、それ取つて――』

『何を?』

『その竹ッ箆。さつき放ッた、つまり、それ、その……爆裂竹さ。』

『うむ、これか。』

地に腹這つて、賴母は、手を差伸し、濕々した水際から、云はれた竹切を拾ひ上げました。

『それ。』

『兄ちやん。』

望四郎は、それを受取ると、土蜘蛛のやうに、もう、蘆の一方へ分け入つて居りました。

『お前、刀を拔きな。』

『刀?』

『おれを追ツ駈けるんだ。どう考へても、それツきり名案はねえ。おれを追ツ駈けながら、共々、この圍みをずらかるンだ。いゝか。うまくやんな。こ、これは爆裂竹なンだぜ。たゞの竹ツ箆ぢやねえぜ。そこんとこ、ちつと芝居氣が要るンだ。いゝか。飛び出すぜ。拔きな。』

その時、蘆の外で、

『あ、聲がする!』

と、脅えた内に、屹然と、一同、角目立たせて、こつちへ一齊に注意をむけた樣子です。

『拔きな。』

望四郎は、もう一遍顱を突出してさうさゝやくと、ザラザラと、蘆の葉先を戰がせながら逃げ出しました。

『待てツ。』

と賴母は云つたつもりですが、聲は咽喉のところに閊へて、からからと、何か掠めたゞけです。然し——刀は、拔いてゐました。その癖、拔いた刀を匿すやうに低く持つて、第一、我れから首を縮めて、どうしても追ツ駈けるとは思へない恰好で、望四郎の後から辛くも追ひ縋つて行くのです。

『爆裂竹、畜生、く、喰ふかツ!』

と望四郎は、振り顧りざま、呶鳴りました。

眞に迫つてゐるのです。

賴母もそれに吊込まれて、

『待てツ。』

と云つて、刀を一本、ニヨキツと空中に振上げました。

入日に近き西陽に照されて、それが、ぎら〳〵と光りました。

凄絶な光景。

刺客組の追手は、

『あツ、あそこだツ。』

『賴母ツ。』

『斬れツ、取逃すなツ。』

『取逃すときかんぞ!』

口々に、聲援とも、罵倒ともつかぬ事を呶鳴り散しました。

それを背後に聞きながら、

『待てツ、待てツ。』

やつと彈みのついて來た賴母は、眞とも、僞とも、我れながらわからぬ空聲を張上げながら、がさがさ、蘆の根を分けて走

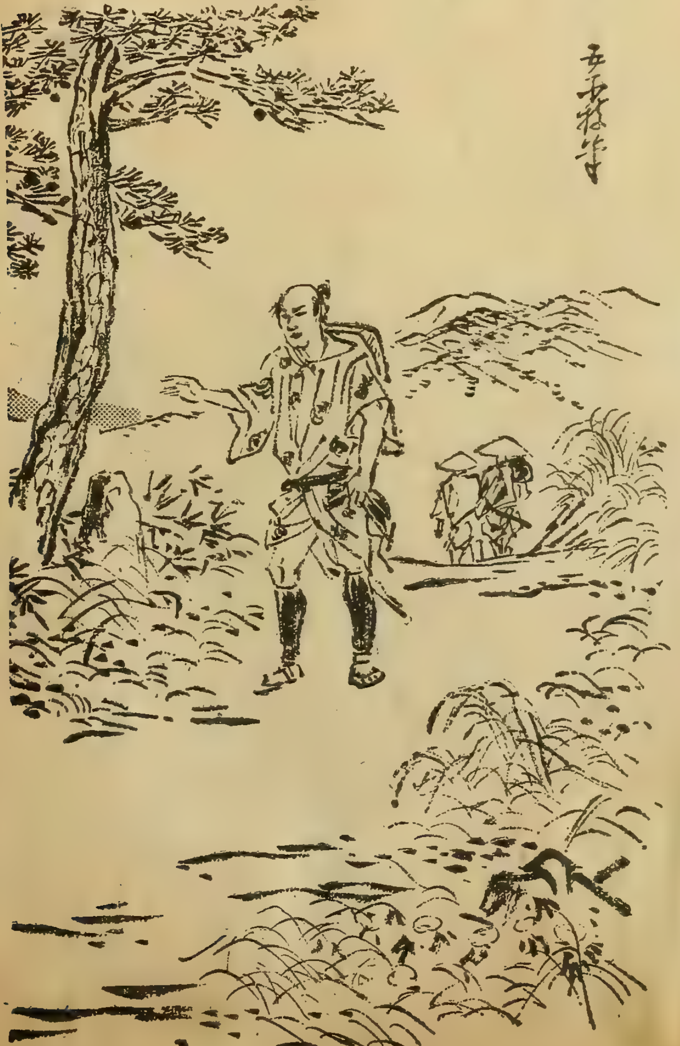
りました。
蘆の邊にだけ一所日が當つて、周圍の並木などは、却つてもう日蔭の色が昏々と垂罩めてをります。
（あそこまで行けば――）
賴母はさう思ひながら、猶も、
『待て、待てツ。』
と、刀を、滅多矢鱈に、頭の上で振翳すのでした。
潸々たる茅蜩の聲を夢現に聞きながら。

悲戀の旅

一

岩代の桑折から、阿武隈川に添うて東へ逸れる一筋の平原は、午下りまで鉛色に白く霞んで、茹るやうな夏景色でした。それが……少し刻が過ぎると、もう、蘇生ツたやうに涼風がたつて、吻とばかり、平原全體が靑々と呼吸づいてくるのであります。
右に梁川、左に半田――その邊には夕立でもしてゐるのでせうか。遠空に、さうした雲のたゝずまひが見えます。
が、無論、此つ方まで雨足のとゞく氣遣はないでせう。
だのに……恰で、今にも降籠られでもするやうに、ひどく狼狽てゝ、この街道を、無殘にいそぐ二人の旅人がありました。
急ぐ……といふよりかは、前後に、絡れ合つてゐる形です。一人が急げば、一人も急ぎ、一人が停れば、一人も停るのです。又、偶に、一人が一人を通り越すことがあれば、今度は、通り越された方がすぐ亦その後を追ふのです。二人は旅の同伴者の如くして、さうでも無いらしい。といつて、萬更らキツパリと離れ去る事のできない間柄とも見えます。よくある腐れ緣……とでもいつた關係か。かぶつてゐる菅笠が、二人とも同じ江戶のざんざら形である事も、その邊の推察がつきます。
やがて、平原の半ばで、磐城の國へまたぎ入りました。
路標に『丸森まで六里半四丁――』半と切つて四丁の端數が出してあります。
『おい、兄ちやん。こつから、さア、もう磐城だぜ。』
突然、後ろから行く旅人の一人が、かぶつてゐた菅笠を、無造作に、ぽこりと背中におとして、横鬢の汗をゴシゴシと拭きました。
よく見ると、それは……三澤賴母の弟望四郞でありました。
とすれば、數步の先きを無言で步いて行く兄ちやんなる者は、無論、當の兄賴母にちがひありません。
『おい、兄ちやん。』

さう再び呼びかけられて、頼母は歩き乍ら、
『用はない筈だ……もう話はすまい。どうか默つてゐてくれ。』
と多少、うんざりした口調です。
『さうかね。なら默つてゐよう。』
望四郎はおとなしく默りましたが、十間も行つたかと思ふと、
『だが、丸森には遲く着くね。』
と獨語のやうに呟きました。
『お前！……丸森まで行くつもりか？』
頼母は、ふと、立停つて訊きました。
『わからんな……足まかせだね、先づ。』
『止めてくれ。何つか途中でお前は宿れ。』
『さうも行くまい。』
『いや……是非。』
『さうも行くまい、兄ちやんの勝手には。』
『お前と道連れになることは、俺には堪へられん。こゝまで同伴になつて來たゞけでも、わしはお前に武士氣質を摺減されたやうに不愉快だ。とにかく……このへんで、別れ〳〵にならう。』
『そんなら兄ちやんの方が、この邊で泊つたらいゝだらう。素人宿もいゝもんだぜ。』
『わしは然うはいかん。』
『そんなら、おれもまア然うはいかんな。』
『望四郎！』
頼母の聲は思はず鋭く彈みました。
『貴樣……わしの行動を妨げるつもりか！』



『へん、又、はじまつたね、貴樣々々が。』
『言葉尻なんかどうでもよい。』
『それもさうだね……だが、大層らしく云ひなさんな。その……わしの行動つてやつは、今夜、丸森に宿つた筈の雪乃の女を追詰めてウンと云はせるつもりだらう。へん……全く立派な御行動だぜ。』
『たはけ――下司な物言ひぶりをする！』
賴母は思はず眉をひそめました。

二

ウン……と云はせる積り？　とは、何といふ神聖を汚す言葉でせう。賴母は、心の内で憤激しました。雪乃の歸國は、御殿勤の目的を果さなかつた責任を負うて、歸着早々、伊東七十郎の面前で自害するつもりだと云はれて居ります。その雪乃を、歸國の途中に要して、不心得を詰り、早計である所以を說くつもりです。いはゞ人間一人の救命手段……と思つてゐるのだから、斷じて疚しくないつもりです。假に、相手が、戀人でない普通の女性としても、これを聞きこんだ以上は、この一役は買つて出るかも知れません。勿論、江戸に滯在がたくなつた自分が、仙臺落ちの途中、その行きずりに雪乃を救はうとする行動は公明正大です。

と思つてゐるけれど、今、望四郎の如く、あつさり片づけられると、どうしたことか、心の奧底を衝かれたやうにギクリ！として、思はず變に落着かぬ氣持となりました。云はれて見れ

ば、どこかに然うした欲望の影が潜んでゐるからでありませう。

だが――それは自由な筈だ。

殊に、悪弟望四郎如きに、かれこれ批判さるべき事柄でない。

さう思ふと、全身に益々熱い憤激を感じて、

『貴様ッ、まだ跟いてくるかッ。』

と呶鳴りました。

望四郎は、

『まア、さう云ひなさんな。』

と薄氣味の悪いほど下手に出て、

『咽喉元過ぐれば熱さを忘れッてな、兄ちゃん。江戸をずらかつた時のことを考へてみれば、さうぽんぽんも云へめえぜ。』

『云へる。』

『どうしてえ。』

と聲を引つ張りました。

『貴様こそ。』と頼母は、相手の悪落着を憎む氣持にあふられながら――『あの時、斬らずに助けてやつた恩を忘れたか……貴様。』

『どの時？』

『江戸を、貴様の云ふ、ずらかる時にだ。』

『あつはつは、物も言ひよだね。』

『何――』

頼母が相手の口吻に憤ッとして、思はず足を停めて振りかへつた時、望四郎の方でも、三四間後の方で、地上に俯向いて草鞋の紐をむすび直してゐるところでした。

『おのれ……』

と口の内で呟きましたが、頼母は、又、思ひ直して、足を急がせ後をも見ずにズン／＼と歩き出しました。

しばらく行つてから振返つて見ると、後から跟いてくる筈の望四郎の姿が見えません。

『おや――』

と思つたが、跟いて來ないのは勿論幸ひでした。たゞ、これだけで、素直に離れて行く彼ではないから、多少氣がかりになります。然し、それを確かめるために亦待合せてゐたのでは、結句いつまで經つても鼬鼠ごッこですから、こゝに到つて頼母、始めて決然として歩き出しました。

山風野雨身邊洸々　樓門忽聽歡聲乃敵――

そんな場合でもないのに、どうした事か、つい、詩吟が口を衝いて出ました。

而も李王敵宣の一句。

丸森に着いたのは、夜も、もう宵とは云ひがたい刻でありま

した。

町の入口で、頼母は、

『千田屋……といふ旅籠だが――あるか？』

と訊いて居りました。

『へえ、ございます。』

『さうか。これから……何つ方側だらう。』

『側、といふよりか、ずつと裏通りでございます。山吹煎餅、といふ看板の掲つた所から、右へ半町もおはいんなさい。一寸、路が勾配になりますが。』

『いや、有難う――』

頼母は、元氣づいてそつちへ歩き出しました。

宿屋に着いた時、入口に立つてゐた番頭が、頼母の顔を見ると、

『三澤頼母様！……と仰つしやるのは、貴郎様では？』

と訊きましたので、頼母は、ゾクリと、顔色を變へました。

三

『ほ！何うしてそれを？』

と不意討に合つた形で、頼母は、浮つかり、正直な口吻を漏らしてしまひました。

『矢つ張り左様でいらつしやいましたか？』

『それにしても……何うしてそんな事が分つたのだ？』

『いえ――さつきから、貴郎様を御待ちの方がいらつしやいますので。』

『何、お待ちの方？』

『駒北様と仰つしやる――』

『え？待て、何だと、もう一遍いつてくれ。た、誰が待つてゐると申すのだ？』

『駒北様と仰つしやる……私共へ、宵の内からお泊り頂いて居りますお客様でございます。』

『こ、これ番頭、その方は、男か女か？』

『お女性のお方でいらつしやいます。』

『うーむ。』

と流石の頼母も唸つてしまひました。

追ふ方の自分が、こゝに相手の泊つた事を知つてゐるのは、前の宿で探つたのだから當然だが、追はれる方の身が、此つ方の行動を判然と知つてゐて、向ふで待つてゐると云ふのは甚だ不審に堪へない出來事でありました。

これ、何かの理由がなくては叶はぬ事です。

頼母は、草鞋を脱ぐのも忘れて、

『で、そ、そのお方は、何處に居らるゝ？』

と、もう、興奮しかゝるのを、

『とにかく、御居間をお取りなされましてから——』

と番頭に云はれ、それもさうだと、頼母は、赫々と逸る心を押へて、二階の一間に案内されました。

そこは餘り飾の無い八疊の座敷。

裏で瀧の音が、しやらしやら鳴つて居ります。晝間見たら、定めし、氣の利いた築庭でもできて居るのでせう。

女中が、

『お風呂をお召しなされますか。』

と云ふのを、頼母は、

『いや。』

と、邪慳に首を振りました。

『では、御食事は？』

『食はん！』

と云つて了つてから、空腹を堪へてこゝまで辿り着いた自分に氣がつきましたが、それを後悔するにしては、餘りに目前の出來事に緊張して居りました。雪乃に會へる？　而も雪乃の方から自分を待つてゐて呉れる——と云ふ事實、その事實の前には、饑餓も、面目も、何の物かは、全身は火の玉のやうに燃え上つて胸は高鳴つてゐるのでした。

『女中。』

『はい。』

『こゝへ、一寸、先刻の番頭を呼んでくれ。』

と云つた時、

『御免下さい。』

と云つて這入つて來たのは、丁度、その頼んだ番頭でした。

而も、その背後に立つてゐるのは、何たる事ぞ、當の雪乃ではありませんか。

『あッ？』

と云ふと瓦破と坐り直した頼母、續け樣の不意討に、度を失つた表情が、一旦蒼白になつてから、叉すぐ赤くなりました。

そして遽かには口が利けないほど、狼狽へて、膝においた兩の手が、ぶるぶる、蝶の髭のやうに顫へて居るのが見えました。

『旦那樣、さきほどお話のお客樣が、御自分の方から行らつしゃるとの事で……』

『おゝ。』

と頼母は始めて我に返つて、

『こ、此處へ、どうか此處へ！』

と聲まで顫へて居るのです。

四

『お邪魔いたします。』

さう靜かに云つて這入つて來た雪乃の面上には、普通ならぬ覺悟の色がうかんで居りました。

それは然うあるべき筈。夜中、みづから男性の部屋を訪れるのです。既に、これだけでも、婦人としての一切の形式を搔省り捨てゝゐる證據でせう。正に、逆襲に近い行動でした。これが火の玉と燃え上つた頼母の出足を叩き、咄嗟に成すことも知らず、

たゞ呆然と立竦ませてしまつた形です。

『何卒……』

『はい。』

齒切のよい返事をして、雪乃は下座のやゝ壁寄の所に坐りました。

二ヶ月の御殿勤の爲に、線はやゝ硬くみえますが、全身から發散するものは有繋に妙齢の女性らしい萠え立つばかりの華麗さです。たゞ、それを包むに地味好みの旅衣、固結の帶、胸のところの膨みは、乳房の爲ばかりではなく、おそらく、一口の懷劍を帶してゐるものでせう。白粉氣はありませぬが、顏は想像以上の美しさでした。いつの間に、こんなに乙女らしく育つたものでせう。きりゝと表情を締めてゐるだけ、そこに却つて、迫るやうな魅力を感ずるのでした。

番頭が引退つて行くと、後は二人きりとなりました。

『雪乃樣。』

賴母は、やつと聲を出しました。冷靜に呼んだつもりですが、聲は怪しく熱して、我ながら譫言のやうに響きました。

『はい。』

『久濶でしたね。』

『此間の夜……あの時もお目に懸りましたけど。』

『いや、あの時は、闇の中であつたから――』賴母はそれを會見の内に入れたくないと云ふやうに、狼狽てゝ早口に打消しました。『あれは聲のみを聞いたゞけです。會つた内に這入りませぬ。だから、やつぱり今始めて……』

『賴母樣。』

と雪乃の方でも、急いで打消すやうに云ひました。

『何れにしましてもね、今夜は、少々、お話し申上げたき事がございまして。御差支へ御座いますまいか?』

やゝ強い調子となりました。

空氣の和やぐことを恐れて、わざと、餘談を省かうとしてゐる樣子です。

賴母も氣がついて、

『私の方でも……さうだ、無論、申上げたい事がある。』

『妾が御殿勤をするやうになつた事情は、賴母樣、御承知でございませうね?』

『承知です。』

『それさへ分つて居て下されば……』

『然し、それを承知したのは人傳です。貴女からも、貴女のお父樣からも聞いたわけではない。第一、青根の御宅を訪ねた時、既に、そのことが決つてゐた筈だのに、何故、私に打明けて下

さらなかつたのです。いや……兎に角く、それが貴女の本心かどうか、さうだ、その事を一言聞かせて下さい。』

『頼母様……過ぎ去つた事はお互に云はぬことに致しませう。』

『過ぎ去つた事？　では、これから先きの事なら、貴女は、答へてくれますか？』

『いゝえ、答へるのではなく、妾の方から申上げる事がございます。』

『これから先きの事に就て？』

『はい。』

『よろしい！　承はらう。』

頼母は、思はず氣色食みました。

全く……自分も眞實は、過去の事にこだはるのでは無く、將來のことを確めたいのだ。さうだ、丁度いゝと思つて、頼母が心の時めきの爲に目を輝かした時、

『頼母様、でも、妾の申上げる意味は、貴郎のお考へ遊ばす事とは違ふかも知れませんよ。』

『え？　何がです。』

『先きの事といふ意味が？』

『意味？』

と心に振顧つて沁と考へた時、あつ、と頼母は、始めて何かに思ひ當つた様子です。

そして口早に云ひました。

『さうだ、貴女は、自害してはいけない！』

五

この言葉は今度は雪乃を狼狽させて居りました。

『あ、頼母様、な、何を仰つしやいます。』

『自害する必要はない。』

『だ、誰がです？』

『貴女が。駒北雪乃が。』

『一寸、待つて下さい。』

雪乃は、度を失つて、體勢が崩れかゝりました。

『ね、さうでせう？』

『いゝえ。』

『匿したつて駄目です。』

『頼母様。』とやつと立直つて『他人の心の臆測で、さう、つけつけ仰つしやるものではありません。』

『いや、先きの事といふ意味を云つたのです。』

『でも、妾は、そこまでの事を……』

『そこまでの事を云はなければ、私の旅は、無駄になります。』

私が、こゝまで貴女を追つて來たのは、それを引き止める爲なのだから。』

『えゝ、それなら然う致しておきませう。』

雪乃は漸く冷靜に立戻つて居りました。

『賴母樣。』

と改めて呼んで、

『それなら、さういふ事に致して、その御注告は聞いてはおきませうが。』

『中止てくれますか。』

『いえ、兎に角く……』

『中止るか中止ないか、はつきりと。』賴母も、焦り猛つて、『——三澤賴母が死を賭しての思ひです。』

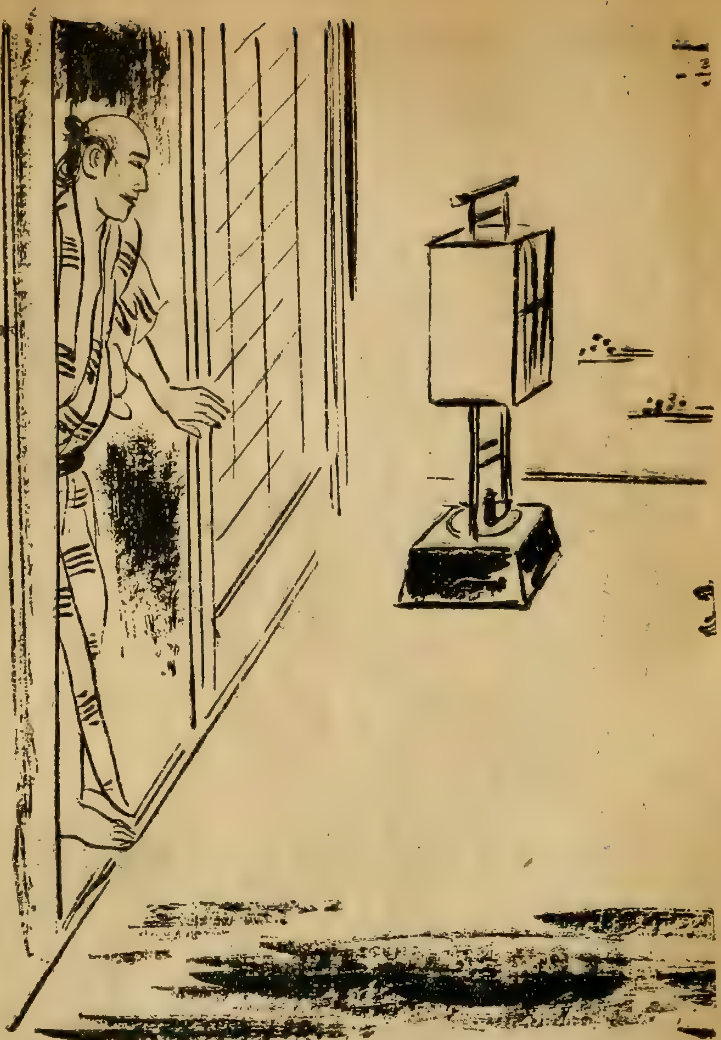
『ま、待つて下さい。』と雪乃も必死に、

『妾の方でもいふ事が……』

『あるだらうが、此の事を先きに。』

『自害……するかしないか、そんな事は申せませんが、兎に角く、賴母樣、妾が、さうした苦しみに立つ事は、あなたも、よく御分りでございますね？』

『分る。いや分らぬ。』と賴母は譫語のやうに云ひました。『それは過信だ。貴女の力などで、左右する事は、あの殿、綱宗候を、左右する事は、到底出來よう筈はない。それだのに……』



『それは過ぎ去つた事です。』

『いや、待て、そこが違ふ。綱宗侯が、御遊蕩なされたと云ふ事を、惡い事、御亂行、さう思ふから……さう思ふから、自害も、つまり、左右の人の責任も、又、雪乃様の自害などといふ事も、隨つて、起きて來る。だが、そこが違ふ。綱宗侯のお遊興が、若し、御惡業でないとすれば、雪乃様、あなたの自害は無意味になると……』

『賴母様、あなたも、諫死組に這入つていらつしやいましたね。』

『あ、あれは本意ではない。』

『過ぎ去つた事は止めにいたしませう。』

と雪乃は、再び思ひ返して云ひました。

『今夜はさういふお話をいたす筈ではございませんでした。』

『自害を引止める爲に、私はどこまでも貴女に跟いて行きます。伊東七十郎……あれに、殿の御遊興が分るか。』

『又、その話……』

『だから。』と力を入れ、『無意味な事をして頂きたくない。』

『はい、分りました。何事も、妾は潔く致します。決して、無意味な事は……』

『潔く？』

『さうです。ですから、今夜、妾は、貴郎に早くお目に懸りたいと思つて……』

『雪乃様！』頼母は叫びました。最早や、相手の心が分つて居ります。今までの事をサラリと水に流す、所謂、諒解の爲の會見です。碎いていへば、別れ話。彼女の逆襲です。さうした事を暗に恐れてゐた彼でした。だから、さうと分ると頼母は人目も恥ぢぬ赤裸々な氣持になつてしまひました。――『雪乃様！私は、貴女を慕つてゐる。今まで通り……去年のやうな、一昨年のやうな、あゝした貴女に成つて下さいッ。頼みます！』

『まあ。』

『頼みます、頼みます！』

さう云つてゐる内に、目頭が熱くなつて涙が溢れて來ました。如何なる醜體を演じ、如何なる自卑の擧動をしようとも、この美しき人の前には、猶ほ惜しからぬ氣持でした。

『ね、雪乃様。』

『貴郎は、さきほどのお傳言と違ひますね？』

『え？ 何です、さきほどのお傳言とは？』

頼母は、頭を上げて、思はず訊返しました。

『いゝえ……弟御様と仰つしやる方が、貴郎より一足先にこゝにお着きになつて。』

『何、弟御様？ あ、そ、それが何うしました？』

『途中でお兄様の御入用とやらで、金子を少々ばかり……御用立致しました。その時のお傳言に、何事も妾のお心任せにして下さるとの事で御座いましたに。』

『何ッ、金子？』

頼母は、とびあがるほど驚きました。

又、やられた。悪弟望四郎が先廻りして、騙取たのです。憎むといふより、最早や、精根も盡き果てたほどに惘れてしまひました。

だが、我れに返つて、

『己れ……』

と思はず憤激の呟きを漏した時、廊下に跫音がして、

『兄ちやん。』

と障子を開けて、顔をヌーと差入れたのは、それが亦、誂へたやうに當の望四郎でありました。

『貴様ッ。』

頼母は、戀も外聞も振捨てゝ、思はず押ッ取刀で立上つて居りました。

隣室

一

丸森の次ぎは角田といふ驛であります。然し、そこを通つてもいゝし、少し東へ寄つて亘理といふ驛を越えるのも、仙臺へ歸る適當な路順でありました。

千田屋を出た雪乃の駕籠は、この亘理路の方を選んだ樣子です。駕籠は二挺で、一挺は附女中のものでせう。一人の老仲間と、一人の侍が、その後に、徒士で扈從して居ります。――朝立ちの駕籠も、件の亘理を越え、岩沼の驛へ入つた時は、もう軒行燈に灯を入れてもよいほどの夕暮でした。

駕籠の後に、今一人、跟いて行く者があります。

それは賴母でした。

賴母は、皆よりも、三間ばかり離れて歩いて行きます。

これは私設の從者だからでせう。

時には希望に輝く目、時には失望のどん底に沈む表情。一喜一憂の樣子が明かでした。戀の奴となつてからこのかた、賴母は恐らくこんなに永く雪乃の傍に居た事はありますまい。然し、亦、固く封した駕籠の垂は、千里のへだたりをおく鐵の扉とも考へる事が出來ます。それゆゑの一喜一憂。――然し、そこには何か、奇蹟を賴む心があります。江戸にゐて、當なき放浪に悶えてゐた時より、その意味に於て、どんなに張合のある旅でありましたらう。

愈々、岩沼の旅籠屋の前に來た時、附添の侍がヅカ／＼と寄つて來て、

『三澤氏。』

と囁きました。

『は。』

と立止ると、向ふは慇懃に、

『何も申さぬ、甚だ勝手ながら、貴殿は、他のお宿をお取り下さらぬか。』

と云ひました。

『いや、私もこゝの宿と決めてゐる。』

賴母は、顏色も變へず、はつきりと答へました。

『それは甚だ迷惑だが。』

『勿論、私は私で、別々に泊るのだから。……仙臺までは、とにかく、宿も、旅も、片時も離れぬつもりだ。』

『さうか。』

侍は默つて考へて居りましたが、そのまゝ、又プイと向ふへ戻つて行つて、駕籠と一緒に旅籠の中に這入りました。

賴母も、すぐ、その後を追ひました。

旅籠の軒を這入ると、丁度、雪乃は駕籠から出て、帳場口に上つた所です。それから、裾捌きを整へながら、附女中に手を

引かれるやうにして二階に上つて行きました。
　頼母は、異様に胸の掻亂れるのを覺えました。
でも、ヂッと我慢して、そこへ腰を懸け、高盥で足を洗ひ終つた時は、もう雪乃の從者達はどこかの部屋に納つたと見え、其處にゐるのは自分一人でした。
『伊東様の御家中でいらつしやいますか？』
『伊東？』
　と訊返してから、あゝ雪乃達は、伊東七十郎の名で泊つてゐるのかと氣がつきました。
『いや……』
　と首を振つて、
『二階に部屋があるか？』
　と聞いて見ました。
『いゝえ、さきほどの御家來衆の御部屋なら何でございますが……御別客様なら、御階下で御我慢して頂きませんと。』
『さうか。』
　足を拭き終つて、
『では何處でもよい。』
　と立上ると、
『こちら様へ。』
　と女中が案内に立ちました。
帳場横の廊下を曲つた、二つ目か三つ目かの、すぐ近くの部屋でした。
　部屋の中には、未だ燈がついて居ませんでしたので、女中が中に這入つて行燈を點ける間、頼母は、部屋の外に立つて待つてゐると、隣室の客と見えて、四十がらみの武家の女房らしい年増が、そこを通りながら、
『お疲れ様で。』
　と挨拶しました。
　頼母が挨拶を返すと、品のよい微笑を浮べて、
『伊東様の御家中でいらつしやいますか？』
　と、こゝでも同じ質問を受けました。
『うむ、いや……』
　と曖昧の返事をした時、部屋の中が明るくなつたので、頼母は、一寸默禮して中に這入りました。

二

　隣の部屋では、何と勘違へしたものか、
『お隣の方、伊東様の御家來衆ですよ。』
　と、今の女房が、誰かに囁いてゐる聲が聞えました。

さう思つたなら、さう思はせておいても好いと、頼母は、そんな事は齒牙にも掛けず、頭の中はたゞ雪乃の事で一杯でありました。駕籠の後に跟いて歩いてゐる時は、宿に着いたら……と、何やら、一縷の望みを感ずるのでしたが、愈〻着いて、かうやつて落着いて見ると、やつぱり、どういふ所置を執つていいか、取着く島のない氣持です。――死を決してゐる雪乃に、戀を仕向くることの至難な事は當然ですが、さればと云つて、この二日の旅で、頼母の戀は益〻燃盛るばかりです。

たゞ、冷靜な時には、戀を捨てようと思はぬでもありません。戀を捨てゝ、雪乃の死を救ふ事にのみ沒頭しようと思はぬでもありません。戀を捨てる氣持にさへなれば、一點疚しからざる立場で、思ひ切つた態度に出られる……と思ふのですが、さて、又しても、篏み上げて來て、その冷靜さを打崩すのが強い戀心です。

あゝ、どうしていゝか分らぬ。

それと混線して頭に浮ぶのは望四郎の事でした。

丸森では、貴様ッ、と立上つた時、彼は形勢不利と見て、直ちに逃げ出しました。

二階の袋廊下に追詰めた時、彼はそこの雨戸を繰開けようとしてゐました。斬れば斬れたのですが、一寸、躊躇してゐる間に、屋根傳ひに逃げられてしまひました。

惡弟ではなく、最早や彼は惡漢です。

この騒ぎで、雪乃は自分の騙られた事を、或程度まで察して呉れたでせう。然し、此の騒ぎの間に、話半ばで、雪乃は、自分の居間に引揚げてしまひました。そのまゝ、交渉斷絶の姿となつて、後は私設從者のしがない旅。思へば、やつぱり、憎むべきは望四郎である。

何故、斬つて了はなかつたか。

この春以來の後悔です。

怯懦――未練――薄志弱行――あらゆる罵言を自分に浴せかけても、猶ほ、足らぬほどの氣持がします。

やがて、默々として夕飯を濟しました。

女中が、膳部を運び出さうとしてゐる處へ、他の女中が來て、

『あの、旦那樣。……お隣室のお客様が、若しか御差支へがなければ、一寸、お目に懸りたいと仰つしやつて居らつしやいますが？』

と云ふのです。

『わしにか？』

『はい。』

『お隣室の？』

『はい。』

『さうか。』

それどころでは無いと思ひましたが、斷わる譯にも行かないので、

『御用があるならお目に懸らう。今すぐの方が好い。』

『はい。』

女中が引退ると、時を移さず、

『御免遊ばされまして。』

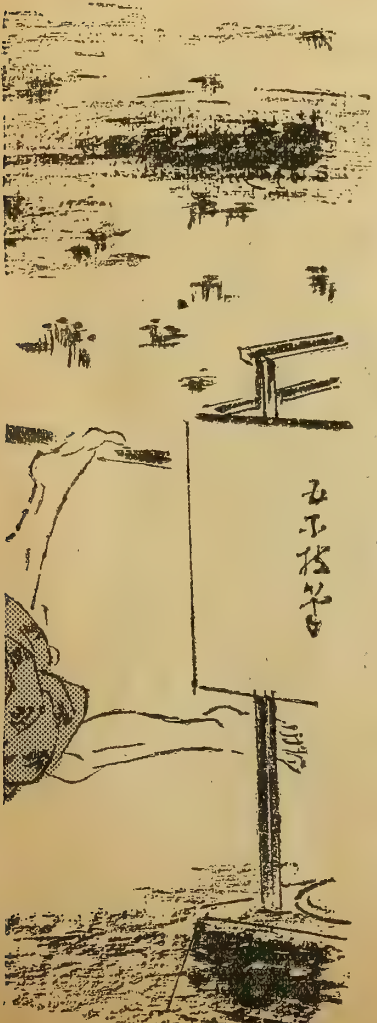
と、品を作つた聲がして、靜かに這入つて來たのは、さつき、部屋の入口で挨拶した、隣室の年增女でした。

『やあ。』

『さきほどは失禮いたしました。ま、そのまゝで、どうぞ、どうぞそのまゝにお出で遊ばして。』

賴母の坐り直すのを遮りながら、年增女は、家中同志の氣安さのやうに、肥肉の膝をゆつたりと落着けて、挨拶が濟むと、

『伊東樣の御家中には、立派な御家臣方が澤山揃つてゐらつしやるさうでございますね。』



とお世辭のやうに云ひました。

『それは采女家中の方でせう。』

『では、今日お泊のお方々は？』

『七十郎關係の者ですから。』

『あゝ左樣でございますか。それでは御學者蔓でございますわね。』

と云ふのです。

仙臺藩の事に相當詳しい者のやうです。

『何か御用事が？』

『はい、あなた方樣が伊東七十郎樣の御家中の方々と知つて、一寸お尋ねして見ようと存じまして。』

まださう信じて居る樣子でした。

三

　さうでは無いと辯解しようと思つた時、

『妾の良人は江戸で死亡なりましたので……これから、倅を連れて參る處でございます。』

と云つたので、賴母は、ふと耳を傾けました。

　今まで快活だつた年增女は、急に、スツと影るやうに顏を曇らせて、

『大きな聲では申せませぬが……七十郎樣御家中との事ゆゑ、謂はゞ同じ忠義の御同志とも申せませう。いゝえ、良人は故あつて浪々の身ではございましたが……どうか貴郎、此場限りと御聞流し遊ばして下さいましね。諫死組――と申しまして、江戸表で、何でも、さういふ人達と殿樣のお爲になるやう必死に働いてゐたのださうでございますが。』

涙含んだ顔も、良人の忠節を說く光榮の爲に、半ばは微かな輝やきを見せてゐるのでした。

『ほ、諫死組？』

賴母はぎよつとしました。

『御存知でいらつしやいますか？』

『さあ……名前だけは。』

と語を濁らせます。

『まあ、本當に。』ハラ〳〵と大粒の涙を、厚い膝頭に落しました。『良人は、その諫死組の一人でございましたが、圖らぬ事から人手に掛りましてね。』

『え、人手に？』

『はい……三澤賴母といふ、え〻、何も彼も申してしまひます。忠義一徹の良人を刀に懸けるなどと、本當に口惜しいやら無念やら。御同志に等しい伊東樣と聞いて、つい、こんな愚痴を……』

　諫死組なら、賴母は二人手にかけて居ります。然し、後のは死に到らなかつたといふ噂だから、始めの分でせう。あの時は、向ふから試合を申込まれたのです。向ふを斬らなければ、こつちが斬られて居るでせう。而も、忠義々々と、自分の良人だから、さう思ふのも無理はないが、自分に云はせれば見當違ひの忠義だ。他人の腹を資本に賣付けようとした忠義だ。それが外れたからとて、自分を斬らうとするのは、恰で、かつたゐの瘡恨みのやうなものだ。——賴母は、さう思つたけれど、ここで、その三澤賴母は自分だと名乘るわけには行きませんでした。

　それにしても……浪人者の妻だけあつて、餘りに輕卒な告白。これが普通の敵討なら、こ〻で返討に逢ふ所だと、危つかしく思ひました。

『伊東樣。』と相手は、いつの間にか伊東樣にしてしまつて、『これから、妾達、江戸へ參りまして、お濱屋敷へお伺ひいたし、片倉小十郎樣にお目通りいたすつもりでございますが……諫死組の屯所といふやうなものは何處にあるか御存じはございますまいか？　分らなければ、着早々、搜さなければなりませんので。』

『諫死組といふものが、未だあるのか知ら？』

と賴母は、ふと可笑しくなりました。誰を一體諫死するのか。

『さア？』と年增女も無造作に考へて、『あるでございませう、忠義の方々ですから。』

『私は存ぜぬ。』

『あゝさうですか。たゞ、妾の案じられますのは、御殿中の樣子が分りませんからこんな事を思ふのかも知れませんが……三澤賴母、この人は殿樣の御めかけさんの兄だか弟だかださうですから、正面に申出でてもお取立が叶ふものでせうか？』

『討狀が下つてゐる！』

と賴母は、憤激したやうに強く云ひました。

『あ、御存じですか？　えゝ、そのことは江戸の同志からも御通知がありました。ぢや本當ですね、あなた樣もその事、御存じでいらつしやれば。あゝ、それでやつと安心いたしました。』

『仇討をなさるゝお積りか？』

『その事ははつきりとは申せませぬ。』

と流石に、年増女は言葉を濁し、

『あゝ、これで事情が分り、胸がスツといたしました。有難う存じました。いづれ亦、仙臺へ歸國の上、お禮に上る事もございませう。』

と丁寧に挨拶をして、いそいそと自分の部屋に歸つて行きました。

四

その晩、夜半、寢てゐる賴母が、ふと、何か、襖のスーと開くやうな音を感じて、幻ろげに目を覺しました。

覺してゐるつもりであるが、實は、はつきりとは覺め切らぬ、夢現の境にあるやうでもあります。

隔の襖の方を、目だけを向けて見ましたが、いや見た積りですが、行燈が消えてゐるので、本當に、襖が開いたのか、或は僞なのか、はつきりとは分りませんでした。

又、うつら、うつらとして居る內に、再び、さういふ氣持がしたので、はつとして、今度は、大分正確に目が覺めました。

惡夢……では無いか。宵の內、年増女から聞いた、偶然の仇討話が氣になつて、つい、物に襲はれるやうな氣持になつたのでは無いか。そんな風に考へた時、疊の上に、ジワリ、ジワリと鼠でも步くやうな、微かな、又、間置きの跫音？を感じたのです。

と同時に、賴母は、ギクリとして、身動が出來ないやうに凝

姙娠豫防の相談所

●母體の健康を計る爲めに　●生活の安定を計る爲めに
●子女の教育を豊富に授ける爲めに……私が長年月費して苦心研究の結果簡單で確實有効、無害なる姙娠豫防方法を發見致しました。皆樣の深切な御相談相手として御來談下さい。地方のお方は切手封入御問合せ願ひます。

東京本郷神明町三六三（市電上富士前・省線駒込驛下車）
元平民病院藥局長　藥劑師　秋澤定吉

手と寢たきり、神經の先で耳を澄しました。
確かに何者か近寄つて來るのです。
いや、近寄つてではない、もう、枕頭のすぐ傍でした。
失敗ッた……と思つた途端、颯と、風が頰を辷つて、何かグサリと刺りました。いや、刺さつたのは、僅かに咽喉元を逸れて、枕の上へ發止とです。無論、賴母が、一瞬に、跳ね退いたからで、闇の中で、賴母はすばやく相手の手をムンズと摑んで、グイと捩ぢ押へました。本能的な働き。眞つ暗闇の中で無言。相手も無言。たゞ、双方の息が嵐のやうに亂れ、互ひの顏へ吹きまくるほど激しかつたのです。
一呼吸の上、
『誰だ？』
と賴母は囁きました。
訊かなくても分つた氣持です。全く、覺えのない事なら、もつと大きな聲を出して呶鳴つたでせう。然し、あくまでも內證話のやうな小聲でした。
『ぬしは、三澤賴母だらう？』
と相手は、息を、せきせき、囁き返しました。
若い聲です。十七か八位ゐの若者の聲音。
『狼藉の後で名を聞くとは、卑怯ではないか。わしは、そのやうなものではない。然し、若しさうとしても、闇に掛けるとは卑怯未練ではないか。』
『卑怯未練は汝だ。』
『君は隣室の諫死組者の伜か。』
『三澤賴母……と知つて、宵の不覺を取返しに來たのだ。』
『寢首を搔いて仇討になるか。』
『一刺してから名乘るつもりだつた。殘念だ。離せッ。』
『離せば引き取るか。』
『いや、引き取らぬ。尋常に勝負をせい。』
『その腕前では返討になる、君は。』
『いゝ、それでもいゝ。』
と身藻搔く手の先に短刀が白く光つて居りました。
相當力量のある若者でせう。然し、賴母の調子が好かつたのです。いや、調子といふより運が好かつたのでせう。
聲は立てぬが、然し、いつまでも斯うやつては居られぬ。殊に、隣室にはこの若者の母親、卽ち宵の口會つた年增女が、固唾を呑んで窺づて居るのです。既に不首尾の樣子は見て取つてゐるやうから、どんな手段に出ないとも限らぬ。たゞ、浮つかり加勢に跳出すと、伜の命が危いと思つて凝乎と機を狙つてゐるものでせう。

『離せッ。』

『待て。』

頼母は、毒刃を免れた後、不思議と心境が冴え、度胸が据つて了ひました。それは、驚くではありませんか、かうやつて、短刀の手を取押へてゐながら、雪乃の事を頭の中に描いてゐるのです。あゝ戀し戀し美しの君……そして、どうしたら彼女を自害をさせずに濟むか、そんな事をも考へてゐるのです。

さう考へた末に、ふと、心に浮んだのは、一足先に仙臺に歸つて伊東七十郎を說き伏せようといふ考へでした。この考へは、相當名案だと、自分でも嬉しくなりました。

闇の中に莞爾して、

『よし。』

と手離すと、よろよろ、蹌踉いた相手の短刀が、無言で高く閃めくと、又、眞向に飛んで來ました。

『おつと。』

その下を掻い潜つて、枕頭の旅刀を摑むと、頼母はスツと障子の方へ行きかゝる。

『おのれッ。』

と追縋る相手をポンと蹴つて、出て行く廊下の掛行燈がジージーと油泣きに泣いて居りました。

（つゞく）

美味！
滋養！
どりこの
高橋孝太郎博士創製（專賣特許）
萬人向きの高速度滋養料　主成分（葡萄糖、果糖、アミノ酸）
『どりこの』はトテモ美味しくて、滋養になるお飲物です。病人も健康者も、老人も子供も、是非御愛飲下さい。（全國有名藥店食料品店にあり）

無言の

西條八十詩

戰過ぎし北滿の
野に青草の芽ぐむとき、
靜かにわれは念ふかな、
逝ける無言の英雄を。

そは劍持たず、銃とらず、
肅々として任に堪へ、
祖國の急に殉じたる
我が可愛しき軍馬なり。

そは兜被ず、甲着ず、
砲火亂るる空を飛び、
重き使命に殪れたる
我が可憐なる傳書鳩。

ああ『一將の功成りて
萬骨枯る』と誰が言ひし、

英雄

伊藤幾久造畫

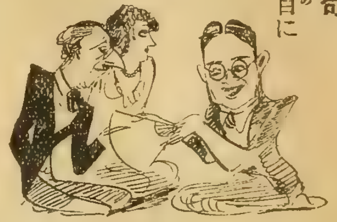
かれら無名の英雄の
小さき靈よ、いまいづこ。

今日華やかに凱旋の
將士、都を飾るとき、
かれらが眠る戰場の
冷たき土を想ふかな。

人と獸の隔てあれ、
獸と鳥の差別あれ、
ひとしく果す報國の
勳にかはりあらめやも。

戰過ぎし北滿の
野に青草の萌ゆるとき、
遠く獻げん、わが感謝、
あはれ無言の英雄に。

藝界話の種



珍妙な七言絶句

某外國公使が、六代目に白扇を出して、是非漢詩を書いて呉れと頼んだ。菊五郎オーケーと許りにすらすらと書いた珍無類の七言絶句、

時今也桔梗旗揚　梅雨小袖昔八丈
妹脊山婦女庭訓　菊吉合同歌舞伎

ウップ。

虎丸御難の巻

鼈甲齋虎丸、或る處で得意の『佃の夜嵐』をよんでゐると『虎丸、覺悟』と呼はり乍ら、ダンビラをひらめかして斬つてかゝつた一人の男、流石の虎丸も一時は驚ろいたが、

〽人違ひではごんせぬか、わしや鼈甲齋虎

懸賞 讀物投票 受賞者發表

曩に本誌四月號に於て、懸賞讀物投票を募集いたしましたところ、豫想外の大センセイションを起し、其の應募者實に夥しき數に上りました、規定により、抽籤の結果左の千五十六人が受賞者と定りました。

一等賞品　桐胴火鉢（一對）

大阪市西區本田通一ノ三六　友國利治

二等賞品　銘仙座布團（五枚組一組宛）

福岡市西新町二丁目中東　池田吉郎
朝鮮京城府堅志洞一・八　中井實
廣島市大手町四丁目　深川正夫
兵庫縣朝來郡中川村石田　藤尾榮
東京市四谷區南寺町二番地　兼田晶市

三等賞品　美術置時計

熊本市　上松秀雄　旭川市　小島重計
宇都宮市　板山勳　札幌市　坂部憲一
滋賀縣　藤村久次郎　樺太豐原　木南春子
千葉縣　鹽田正勝　三重縣　矢田明郎
福岡縣　大塚節子　奈良縣　小田花代

御家庭必備の 優秀藥御紹介

御使用下さつた方が一樣に感謝される信用ある藥品揃ひ[illegible]皆樣のために心からおすゝ[illegible]す。

東京本郷・振[illegible]
大日本[illegible]部

クイン

ふけ取り抜毛止 理想的ポマード

ドンナひどいふけ、抜毛の方でも全く噓の樣に止つてしまひます。常用すれば知らず〳〵根底からその惱みを除く事が出來ます。重寶な事には平素水油やポマードをお使ひなさる方もこのクイン一つで何にも入りません。

定價 小一圓 大一圓八十錢、黑色頭固用二圓五十錢 送料內地十五錢領土二十錢

いぼ・ほくろ除去劑。痛くなくとれる。 ヒドロアミーン

劇藥類を一切使用してありませんから皮膚をいためず、痛みなくいぼ、魚の目、ほくろ、タコ等小さなものは一回大きなものは數回の塗布で綺麗にとれます。

○定價一圓 送料內地十錢領土十四錢

丸ぢや、人に怨を買ふやうな覺えは夢にもござんせぬ……有合ふ白扇を逆に執つて、へ寄らば打つぞと身構へたり

その内に出方一同が飛びかゝつて取押へて見ると、土地の料理屋の親爺が、急に發狂したんだと判つて、虎丸急に安心して、『惜しい事をしました、もう少し對手が强ければ、張合があつたんですがね。』

律子のお題目

東劇の樂屋風呂で森律子がプカリ〳〵と好い心持相に浮いたり沈んだりしてゐると、のこ〳〵入つて來た八重子、『アラ、隨分輕さうね。』

『輕い筈だわ、油地獄のお吉で殺されたてのほや〳〵ですもの。』『ぢや、つまり湯灌ね。』

律子靑くなつて『南無妙法蓮華經々々』

長崎縣	津田 茂	大阪府	福良 茂
山形縣	的場千代治	東京市	森山 秀隆
靜岡縣	今泉 良子	愛媛縣	三好 秀吉
函館市	内田 三郎	靑森市	佐原由貴子
神奈川縣	原銀 治郎	橫濱市	松村 幸雄
東京市	秋月 麗子	神戸市	河合 正敏
鹿兒島縣	岩重 益江	滿洲奉天	阿部 政次
埼玉縣	霧戸 賢司	富山縣	谷口 敏之
岡山縣	山本サヨヱ	福島縣	渡邊仁三郎
前橋市	竹内守三郎	明石市	桑村 武男
名古屋市	野々垣光男	島根縣	安食 亮一
東京市	谷内 茂雄	宮城縣	秋保 太郎
東京市	宇田川重三郎	新潟縣	松本三智子
岐阜市	玉井 聖一	京都市	山田 政治
靜岡縣	柴田とみ子	新潟縣	酒井喜代治
京都東山	城市 義雄	大阪市	武藤 定之
東京市	岡村 澄	石川縣	中富 元平
山口縣	津村 清	秋田縣	堀川 哲
長野縣	小野 久延	平塚市	小泉 春秋
愛知縣	平野 宗次	東京市	相原 正夫

四等賞品 特製富士メダル

四等當選一千名は、紙面の都合上省略いたします、賞品の到着を以て當選と御承知願ひます。

ヘモール

内服に依る痔疾の
劃期的治療藥

何等苦痛や恥しさもなく單に内服するのみで歩行不能の痔核症や脱肛の様な症状が意外に早く恢復した等、實例が澤山ある評判の内服痔疾藥です。

○一週間分三圓　送料内地十五錢 領土五十錢

いんきん・田虫

―其の他皮膚病に特効ある

皮膚膏

皮膚病界の權威大森先生の創製に依る皮膚膏は、しみず痛まずよほど惡い、いんきん、田虫、水虫も只塗布した丈で効果があり、評判です。

○定價大二圓小一圓　送料内地十五錢 領土五十錢

セラシン

卓効ある毛髪榮養素

セラシンは毛髪の主成分たるチンチン原質、即ち毛髪素であります。之れを内服すれば毛髪に直接その榮養を補給して、毛髪の伸長發生を促す事になりますから在來の塗布毛生藥や、刺戟的の[illegible]と異り、一歩進んだものと言[illegible]ます

定價　○内用一ヶ月分[illegible]　半ヶ月分[illegible]　○外用 大三圓 小一[illegible]　○[illegible]料 内地十五錢 領土五十錢

落語

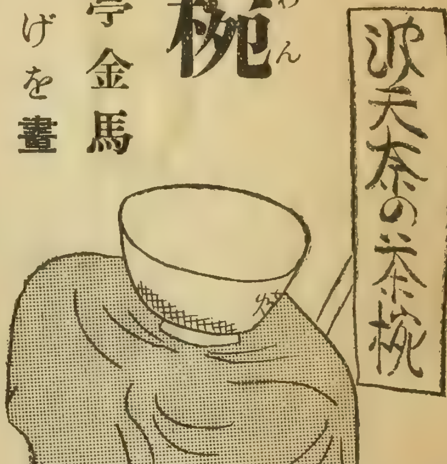
「はてな」の茶椀

三遊亭金馬

宮尾しげを畫

○物の値打といふものは誠に妙でして、誰か其道の豪い方が一寸口添へをされてえと、今迄はまるで埒もなかつた代物が、急に世間から珍重されて來ます。早い話が先達て或醫學博士が中學生の排泄する小便の中に、いとも貴重な若返り藥の素があると唱へられますと、二躍これが値打を上げて、聞く所に依ると此節では、散歩の序に悪戯坊主共が田の畔に砲列を敷いてると、傍の百姓が慌てゝ家から丼を持出し、『勿體ねえ、こん中へあけてくんろ。』と請願むさうでございます。口添への力も斯うなると大變です。

さて玆に京都の衣棚といふ町に、茶屋金兵衛略して茶金といふ茶道具屋さんがございましたが、此人が大層な道具物の鑑定家で、京都許か日本全國に名が弘まつて居りまして、茶金が指さし、或は一度褒めた代物は、忽ち五倍十倍の値が出るといふ有様でございました。この大名人の茶金が、或日の事ブラブラ歩いて清水の觀音に參詣しましたが、少々疲れて來たから傍の一錢茶屋へ入つて、



金『ごめん、好いお天氣だね。』

亭『これはお出でなさいまし。どうぞお茶を一杯。』

差出す茶椀を茶金が取つて飲まうとすると、ボタリ〳〵底が洩ります。妙だから中のお茶を零して紙で拭ひ、じつと陽へ翳して見ましたが瑾はない。所が又茶を注ぐとボタリ〳〵。そこで又茶を明けて拭つて見るが瑾は何處にもない。餘り妙ですから、長い事休んでる間頻に捻くり乍ら、『是は一つは燒きにもあるが、肉が薄い上に釉薬が少し足りなかつたかな。何にせよ面白い茶椀だ。』と、暫く眺めて居りましたが、軈て

茶代を置いて歸つて行つてしまつた。

するとこの時向ふ側の床几に、ペンキ屋さんが一人矢張り茶を喫んでゐました。これは東京を食ひ詰めて來た道樂者ですが、因よりペンキ屋をしてる位だから惡い奴ぢやない。これが茶金の樣子をしげしげ見て居つたが、

ペンキ『ねえ爺さん、俺が此處へ來て油を賣るのも隨分久しいな。すつかりお前さんとは馴染になつちやつたなア。』

亭『して見ると餘り流行るペンキ屋さんでもねえね。』

ペンキ『厭な事を言ふなよ。所で爺さん、妙な事をいふ樣だが、お前ん所で俺ア決つた樣に毎日晝食を食べてるんだが、そん時茶を貰つて飲むのに、ペンキ臭い手で店の茶碗を摑んで、ヒヨツと其の匂ひが後へついたりすると他の客の迷惑になる。そこでどうだらう、お錢は拂ふから此處の茶碗を一つ、俺らに賣つてくんないか。』

亭『いゝともサ。どうせ清水燒の瓦樂多茶碗だ、要るなら持つて行きな、錢なんかいゝよ。』

ペンキ『さうかい。ぢや此茶碗を貰つて行くぜ。』

亭『おつとゝ、そ、そいつはいけないよ。それは大切な茶碗だ。人になぞ遣れるものか。』

ペンキ『へーえ、此茶碗は良いのかい？』

亭『良いのか所の騒ぎかい。今此處に居なすつた方を誰だと思ふ。茶金といふ日本一の鑑定家でね、あの方がこれはと指さし一つすれば、道具の値打が十倍になるんだ。所が今長い事此茶碗を捻くつて眺めてゐなすつたのは、きつとこれが大した代物だからに違えねえ。それをお前が見て居つて、端錢で持つて行かうなんてのは、餘り押が太過ぎるぜ。』

ペンキ『ちえーツ、そいぢやお前も知つてたのか。實はね、俺ア東京を食詰めて此方へ來てペンキ屋をしてるんだが、こんな商賣ぢや稼ぎはつかねえ。そこで一攫千金を企んだ譯だが、どうでえ此茶碗を賣つとくれよ。此處に俺らの全財産が一圓と二錢五厘あらア。こいつをそつくり投げ出すからさ。』

亭『い、いけないよ。幾らでも此茶椀だけは賣れないよ。』

ペンキ『なに賣れねえ？ よし、そんなら賣るな、其代り此處へ叩きつけて茶椀を割るぞ。』

亭『よ、止せやい、亂暴をしちやいけない。』

ペンキ『いけねえたつて構ふかい。警察へ引つ張られたら、ツイ落して毀れたといやア言ひ拔けの道は立派に立たア。』

亭『驚いたア。人の惡い男だよ。ぢやア仕方がない。お前に讓るよ。だが儲かつたら俺にも割前を忘れちやいけねえぞ。』

酷い奴もあつたもので、到頭爺を半脅しで茶椀を手に入れましたが、扨其足で自分の巣へ歸りましたペンキ屋、どこでどう工面したか、一寸寂びのついた奇な箱へ、茶椀を大切に入れた上、これを更紗の風呂敷に包み、着物を着更へて急いでやつて來たのが、衣棚の茶金の住居。

○

ペンキ『御免下さい。茶金さんは、此方で？』

番『左様ですが、何か御用で？』

ペンキ『實は是非旦那に見て戴きたい大珍品を持つて參つたんですが、一寸お會せ下さいませんか。』

番『左様でございますか。然し何品かは存じませんが、私も當家の番頭を勤めて居ります者で、主人ならずとも、私が拜見しても同じでございますが。』

ペンキ『それがネ番頭さん、どうも貴方ぢやいけないんだ。貴方が見ると笑ひさうでね。』

番『飛んでもない、笑ひなぞは致しません。謹んで拜見させて戴きます。』

ペンキ『さうかね、ぢや辭つておくが、私ア癇癪持だから、貴方が笑ふと毆りますよ。』

番『宜敷うございます。では拜見を……。ホヽウ、いゝ風呂敷でございますな。更紗も斯う時代がつくと値打が出ます。』

ペンキ『おい番頭さん、それがいけない。誰も風呂敷を見ろとはいはないよ。中の

品物を見て下さい。』

番『へえ、只今拝見致します。』

箱から茶椀を取出しましたが、何の事だ、それは一つ五厘の清水焼の安茶椀です。

番『ウワツ、品物と仰有るのはこれですか？』

ペンキ『さうさ、時價千圓の茶椀だよ。』

番『アハヽヽ、御冗談仰有つちやいけません。清水焼の安茶椀が千圓なんて、アハヽ。』

途端にポカリツ。

番『あ痛ツ。貴方何で私の頭を？』

ペンキ『何でたア何だ。それだから辭つてあるんだ。品物を見て笑つたら毆る約束だい。』

番『約束だといつて貴方、五厘の茶椀が千圓なんて、馬鹿々々しい。……アツハヽツハ。』

途端に又ポカリツ。

番『あ痛ツ。貴方亂暴をしちやいけません。』

騒々しいから到頭主の茶金が出て來ました。

金『あ、もし、お客さん、如何にも約束を破つて番頭が笑つたのは宜敷くございません。代つてお詫びして、改めてその品を私が拝見致しませう。』

穏かに言つて茶椀を取り上げましたが

金『あツ、これはお客様、番頭が笑ふのも道理でございます。これは正銘の清水焼の三文茶椀ですよ。斯ういふ代物を持つて人の店へ來て、千圓だなどと仰有るのは、フーム、扨は貴方は河内山宗俊の眞似でも……』

ペンキ『ウワツ、冗談言つちやいけないよ。俺は強請騙りぢやねえぜ。ふん、厭なら止せよ賣らねえ迄だ。だがな旦那、こんな眞似を俺にさせた本元の人間は誰だい？茶店の床几に腰を掛けて、高慢ちきな顔をして長々と茶椀なぞを捻くつて見せるもんだから、その飛ばつちりが妙な所に飛ぶんだ。あんな眞似は一切止しにして、これからは茶を喫んだら、サッサと早く歸つて貰えてえな。くそ馬鹿々々しい何の

事だ。』

金『これは訝しな事を言ひなさる。ウーン、はてなどうも貴方は見た様な方だが……あ、今日の晝間淸水の一錢茶屋に休んで居なすつたあのペンキ屋さんだね。するてえとこれは、あの時の店の茶椀ですかい？』

ペンキ『えツ覺えがありますかい？〆め〱、どうです千圓の値打がありませう。』

金『冗談言つちやいけない。あの時此茶椀を捻くり廻したのは、隙もないのに茶が洩るから、妙だと思つて考へて居たんだ。何も品物に値打があると思つたからぢやないよ。』

ペンキ『ハーン、さうですかえ。ちよツ、私は又貴方を感心させた品物だ。千圓の

値打は確かと思ひ、茶店の爺と喧嘩づくで、全財産をハタいた末漸とこれを手に入れたんだが、そいぢやこいつは三文にもならないんですか。』

聽いて居つた茶金、何思つたか突然、

金『ウーム、豪い、貴方は豪い。』

ペンキ『えツ、えらい？ 何がね？』

金『何がつて江戸つ兒の方はどうも豪い。此茶椀は値打がなくとも、して見ると貴方は茶金の名を買つて下すつたんだ。其お志が忝いから、ムウ、お禮に私がこれを買ひませう。』

ペンキ『有難えツ、千圓に？』

金『ふざけてはいけない。誰が千圓で買ふものか。あんたが在金一圓幾らかを投出したといひなさるから、私がそれを三圓で買ひませう。然しペンキ屋さん、餅屋は餅屋の譬へ通りで、憖じペンキ屋のお前さんが道具屋になつても、いゝ儲けはあるまいから、嚮後は矢張り野心を起さないで、今迄の稼業を續けなすつた方がよからうと思ひますよ。』

ペンキ『ヒヤツ、これは御意見恐れ入りました。大きに其通りです。どうも有難うございました。番頭さん、飛んだ事で頭に瘤を出させて濟みません。勘辨して下さい。』

這々の態でペンキ屋は歸つて行きました。

○

扨其後の事、豫て御贔負を戴く某公爵樣のお邸へ、此茶金が招かれまして、い

ろ〳〵とご機嫌を伺つた末に、右の一部始終を笑ひ話として言上しました所、大層公爵様は興がれまして、『是非其茶碗を見たい。』との仰せ。そこで早速取寄せて御覽に入れましたが、茶碗は尊い方の御前でも遠慮はない。お湯をお注ぎになるとポタ〳〵洩ります。そこで湯を明けて拭つて翳して御覽になつたが瑾はありません。又湯をお注ぎになる。又ポタポタ洩る。繰り返し試された公爵は、

『公はてな？』

と甚く氣に入つた様子でしたが、軈て筆を執つて傍の短冊へ認められたのが、

　清水の音羽の瀧のおとしてや
　　茶碗もひゞにもりの下露

といふ一首の感吟。さアこれで以て其茶碗は忽ちの中に世間の評判になつてしまひました。

『公爵様が、はてなと仰有つたさうだ。』

『して見るとあれは、はてなといふ由緒のある茶碗なんだな。』

はてなは『波天奈』と鹿爪らしく漢字を宛てられ、到頭『波天奈の茶碗』といつて、京都中の評判になつてしまひました。

斯うなるといふと持主の茶金さんも喜ばずには居られない。今迄は棚の隅に抛つといた三文茶碗を、急に立派な箱に入れて短冊諸共土藏の奥に藏ふ始末。この噂を聞いたのが、豫て道具好きの鴻池善右衛門さん、大阪許りか日本一の大ブルジョアですが、これが是が非でもといふので、辭む茶金さんから强ひて千圓でこれを買取つてしまひました。

金『驚いたなどうも。三圓の瓦樂多茶碗が千圓にならうとは思はなかつた。かうなると元の賣り手のペンキ屋さんに割前を出さねばならない。どうかもう一度あの人に會ひたいものだが。』

毎日心當てにペンキ屋の來るのを待つてましたが、ペンキ屋の方では、一件以來きまりが惡いから、茶金の店の前を通るのはまるきり避けてる。その中どうした事か、ヒョツクリ衣棚を通つたから、得たりと茶金さんに摑まつた。

金『あ、待ち受けたよペンキ屋さん、さアお入り。』

ペンキ『ウヮツこれやいけねえ。……もしも私はペンキ屋ぢやありません、きよ、經師屋で……』

金『經師屋が刷毛にペンキをつけてるものか、隱さなくともいゝ、隨分あんたを待つてゐた。』

ペンキ『ひえーツ、するてえとあん時の三圓を返せつてんですか？　あれはもう費つ……』

金『そんな話ぢやないよ。實は此間の茶碗が賣れた。』

ペンキ『えツ賣れましたかい、幾に？』

金『千圓にさ。』

ペンキ『なに、せ、千圓？　うーむ。』

金『あツ、これ〳〵伸びちやいけない、氣を確にしな〳〵。實は斯う〳〵いふ譯で千圓に賣れたから、元の所有主のお前さんに、それをみんな上げてもいゝ譯だが、私の氣性として大儲けのあつた時は

土地の貧しい人を潤して上げたい。そこで其千圓の半分の五百圓をお前さんに上げ、殘る五百圓は慈善事業に寄附しようどうだそれでいゝだらう。』

ペンキ『ひえツ。いゝも悪いもあるもんですか。五百兩あればこんな土地にや居ねえ、威張つて東京へ歸らア。』

金『こんな土地、は餘計だ。ぢやア五百圓上げる。そら受取んなさい。』

ペンキ『わツ、猪が五十枚、有難えな、おう番頭さん、此間は瘤を出させて濟まなかつた。其詫び料だ、此二圓で一杯飲つておくんなさい、小僧さん、これは小遣ひだ燒鳥でも食つとくれ。』

金『いやに札びらを切るね、そんな冗なお金は使ひなさんな。』

ペンキ『えへゝ、こんな時に氣前を見せなきや見せる時がねえんでね。』

思はぬ大金を貰つてペンキ屋は有頂天で歸つて行きました。茶金も善い事をしたと大喜び、大方あのペンキ屋は勇んで故郷へ歸つたらうと噂して居りました。斯うして五六日過ぎた或夕方、俄かに町內に『えらいこつちや〳〵。』と、人の立ち騷ぐ聲が聞えますから、不思議に思つた茶金が、

金『何だ、大層な騷ぎだが。』

起ち上つて表を覗きますと、是は魂消た、既う歸國した筈の例のペンキ屋が捻鉢卷に尻端折り、馬鹿大い箱を擔いで茶金の店先へ躍り込んで來た。

金『うわツ、あんたは此間のペンキ屋さん、一體どうしなすつたい？』

ペンキ『おツ、是は旦那、どうもかうもあるもんですか。今日は一番先達ての御恩返しに上りました。苦心苦勞の末圖らずも十萬八千圓の金儲けの蔓を見つけたんです。此代物がそれだ、半分の五萬四千圓は貴方に上げます。サア一つ旦那、手を貸して下さい。』

金『な、何、十萬八千圓の代物？』

ペンキ『さうです。此間の茶碗の百八倍の大きさの品で、從つて値段も百八倍。何は兎もあれ、早速御覽なすつて下さい。』

大眞面目に言ふから、何だらうと茶金が箱の中を見ますと、是はしたり大事相にそこへ入つてるのは、底洩のする大い水甕でした。（終）

長生不老の原因となる
ホルモン腺の强健化

＝神經衰弱・老衰・不眠症・精力減退＝
＝一般生殖器障害の療法は之に限る＝

人間は貴賤貧富の別なく

長生きをしたいと思はぬ者はなく、老いたる者も『若返りたい』『精力を旺盛にしたい』と四六時中望んでゐられることゝ思ひます。

この人間通有の弱點につけ込んで、いかゞはしい『若返り藥』とか『ホルモン補給藥』と稱するものが澤山あらはれ、誇大な廣告をして盛んに吹聴しますが、多くは强精、健腦は二の次で重に催淫を目的とする極めて不親切なものであることは一度經驗して見ればすぐ解ります。斯樣な藥劑は、脊髓中にある生殖器の勃起中樞神經を刺戟して性慾を一時的に昂進させる作用がありますから、何も知らない素人の方はさも効いた樣に考へますが、事實はその反對で、若返りや長生き所かかへつて自然に反則した危險な事であります。

人間でも又他の動物でも

精神の發達、肉體の發達のためには必要缺くことの出來ないのがホルモンです。このホルモンとは體内の樞要部分にあるホルモン腺から絶えず滲出する分泌液で、若しこの分泌が衰へるとすぐ腦力も神經も生殖作用もめつきり衰弱するといふ恐ろしい結果を招來するのであります。したがつてこの分泌力を旺盛にすれば、如何なる重症の腦神經衰弱も性的神經衰弱も根本から驅逐し、早老者、老衰者をも眞に若返らせ、血も肉も、精神も生々潑剌と青春化することができるのであります。斯樣な神秘的作用あるホルモンを發見してくれた恩人は英國の大生理學者スターリング氏であります。

若返り藥「精壯」は實に

このスターリング氏の學説に基き研究發見された最新藥で、服めばたゞちに體内各種ホルモン腺や一般神經の榮養となり、神經、ホルモン腺を强健化し分泌力を旺盛ならしむる作用あるもので、在來の特効藥と稱するものに多く見る一時的の刺戟、一時的の昂奮、一時的の鎭靜、或は下等動物の不純なホルモンの力を借りて一時的の補給を目的とする姑息な若返り藥とは雲泥の相違があります。『精壯』の應用範圍は實に廣いのですが、素人に最も分り易い症狀を申上げて見ますれば、頭が重くて痛む人、夢を見る人、首筋から後頭部がつり肩が凝る人、神經が過敏で氣がいら〳〵する人、熟睡出來ぬ人、精力が衰へ根氣なき人、記憶力、思考力のなき人、性慾が減退し快感が缺乏したり、又全く感じられない人、陰萎、早漏の人、老衰者などには實に理想的のものです。惱める方はまどはず、おくせず一時も早くこの『精壯』に御信賴下さい。

大瓶（三週間分）七圓、小瓶（一週間分）二圓五十錢で送料は内地十五錢、領土五十錢。東京本郷駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九）でお取次致します。

維新志士物語

桂小五郎流泊篇

三上於菟吉

布施長春畫

駕籠忠店頭の乞食

勤王急進の長州藩と志しを一にして、討幕攘夷の實行にいそいだ、公卿雲客の主だつた人々が、朝議一變と同時に踏みもならはぬ徒歩、はだし、栖み馴れた都を遠く西を差して落ちゆかねばならなかつた、あの、世に名高い七卿落――つゞいて、その翌年の元治元年、君側の奸を拂はうとて、長州の三家老、兵を禁門に進めて、かへつて會津、薩摩の守備隊に破られた蛤御門の變――

かうした事件が加はるたびに、昨日までは尊王攘夷の先頭を切つて、禁闕守護職の會津勢、所司代、新撰組を天ッ晴れ向ふにまはしてゐた長州志士どもの、京都に於ける勢力は、殆んど根絶してしまつたのでした。隊士捕吏の群れは、少しでも長州なまりのある男と見れば、堅氣の町人をすら只は捨て置かぬ仕末、いはゆる總浚への實行をしてゐましたので、三月、半年と經つうちに、さすが、勇ましい決死の長州志士も、もはや都に、只一人として姿をのこしてゐるとも思はれなくなつたのです。

ところが、ここにたつた一人、かやうに探索のやかましい京の町に、悠然として居殘つて、天下の形勢を觀望し、折もあらば回天の大業を一擧になしとげて、日ごろの鬱懷をはらさうと企てゐたのが、後には明治の三功臣として鳴りひゞいた、木戸孝允――當時の策士桂小五郎ではありました。

小五郎は少壯三十二、學才はもとより、江戸齋藤彌九郎門の最高弟、劍氣天地をつんざくといはれた劍者――しかも奇略縱横で、風流歌絃の道にも暗からぬ秀士、さればこそ、かくも用心きびしい巷を、變裝自在、あるときは商人、あるときは乞食とまで身をやつして、日毎夜毎、さまよひつゞけることが出來たのですが、もとより多感の小五郎、ある夜、舊情淺からぬ三本木の藝子幾松の屋方に忍んで以來、幕吏の足がついて、今はたつたひとつの隱れ家として賴んでゐた、對州藩邸

留守居役、多田家にも身を寄せかね、そこを夜陰に潜みいでて、ブラリと手頼つて來たのが、伏見すぢの、とある駕籠屋——夏のことなので、夜更けながらあけ放した土間にぬッとはひると——

——お客?

と、入口にゴロ／＼して、裸を蚊にくはせてゐた雲助が、眺めて、びつくりして、

『やい、夜中に何の用で來やがつた——乞食メ！』

と、怒鳴つたのも道理、ヨレ／＼の、垢まみれの浴衣のしりをだらしなくはしよつて、髯ぼう／＼、煮染めたやうな手拭で頬かぶりをした、一人の男——それが小五郎なのですから——

『へ！ わては、親方さんの身よりのものでしてな——是非にお目にかゝりたいことがおましてさかい——』

『ナニ、手前が親方の身寄り? 馬鹿あ、言へ！ 下らねえ因縁をつけると、そのまゝには置かねえぞ——』

『馬鹿野郎！ とつとと出てうせえ！』

と、若い者がわめき立てるのを、奥で、もう蚊帳の中にもぐつてゐたらしい主じが、聽き耳を立てて、

『なにを騒いでやがるんだ！ うるせえ！』

『へえ、乞食野郎が、親方の身寄りだなんてぬかすものですから——』

『親方さん！』

と、小五郎が家内に言ひかけました。

『わたしでござりますよ——お久しぶり——ソラ、森のやつで——』

『ナニ、森——』

と、鸚鵡がへすのが聽えて、やがて、

『おお——森といやあ——』

ムクリと、蚊帳の中で起き直つて、出て來たのが主人です——

長州志士として京にとどまるすでに年あり——流轉の身の、このあたりに隠れたこともあつて、幾松の所在、三本木をもぢつて、木が三ツで森、それが桂小五郎の幾つかある隠し名の一ツであることを、俠氣のあるこのかご屋のおやぢは知つてゐたのでした。

ジツと、淺間しいすがたをみつめて、目をしばたゝくやうにした親方は、突然呆れたやうな調子で——トタンに[illegible]

『おツ！ こりやあ成程森五郎——呆れけえつたなりをして、何しに來やがつた！』

『へえ、をぢさん——何分にも悪い癖が重なりまして、とうとう

おや分に勘當され、所々方々を流浪してゐたものですから――』

と、小五郎はペコ〳〵頭を下げる。

親方は荒つぽく、

『そんなナリで店へ來られちやあ、うちの野郎どもにも面目なくつてなりやあしねえ。だが、まあ、若けえ中は仕方がねえ――足を拭いて、こつちへ上れ。』

『ありがたうござります。をぢさん。』

濡雜巾を、眞實あきれ返つた顔をしてゐる若い者から貰つて、足を淸めて、上へあがると、先きに立つた親方が――

『さあ、二階へ來い。』

行燈を下げて、あぶなかしいはしご段をのぼる主人のあとから、ノソ〳〵と跟いてゆく小五郎――

天井の低い、暑苦しい二階――

そこへ坐ると、親方は、ピタリと兩手をついて、聲をひそめて、

『マ、今時分、何としてのおいで？　野郎どもの前、ぞんざいな口を利きまして怖れ入りますが、この御時世――』

と、わびかけるのを手で制して、

『いや、わしこそとんだ迷惑をかける。さ、手を上げてくれ――でないと、人目がうるさい。』

薄暗い灯光に、しみじみと、見上げて、泣き出した主人です。

『それにしても、ようまあ、このきびしい京で、御無事でおくらしなされましたなあ。わたくしどもも、世間の評判をきくにつけ、大方、もうお國へお引きとりのことかと存じてをりましたに――』

『それが、例の意地張でな。』

と、小五郎は笑つて、

『が、あまり圖々しく立ちまはつてゐるうちに、とうとう危ふいことになつてしまつたのじや。それで、もうそなたの宿の外、天下に身を置くところもなくなり、わざ〳〵手賴つてまゐつたわけじや。』

『勿體ないおはなし――ですが、何分この手狹まで――』

と、親方は言ひわけなげです。

『いゝや、只、居候をしてゐては、目にも立たう――このわしも、自分でかごはかつげずとも、使ひ走り――文づかひ――何なりとして誤魔かすつもりだ。』

『そのお覺悟ならいつまでも――幸ひ、女房にも死に別れ、男所帶。とのさまがお氣をつけ下されば、内部の奴等は氣がつくはずがありません。では、今夜から御ゆつくりと――』

荒ツぽい稼業で年を取つた、俠氣のあるかご屋の主人、すぐ引きうけてくれたので、その晩から、ひとまづ京の近所に身を落ちつけることの出來た小五郎でした。

危急を過ぎて情人に逢ふ

伏見かご忠の食客となつた小五郎、これで當分幕吏の目は晦ませたわけですが、しかし、二階にゴロ〳〵してゐるのは危險です。それで、店の者が稼ぎに出るころは、自分も、身に寸鐵を帶びぬ息杖一本。尻切れじゆばん、素わらぢの雲助すがたで、用もないのに、伏見、京、さては枚方のあたりをほつつきまはつてゐます。

さうした身を、かの眞夏の烈々たる太陽よりも、もつと激しい情熱を以つて焦きつゞけるのは、一遍耿々の忠誠です。

——わしの身が、どのやうに苦しくとも、淺間しう見えようとも、それが何だ！　上にして恐れ多いが一天萬乘の君の御辛勞、下にしては、長州主侯御父子の苦衷——それに比べれば、この一武弁——八ツ裂きにされうも何であらう——ああ、それに致しても、一刻も早う天下の形勢を一變せしめ、王政復古の大業をなしとげたいものだなあ——

——今日も、今日、いつか初秋の夕風が、いくらか涼しさを含んで、青ぐさを吹きなびけてゐるのですが、まだ、底熱い眞紅な夕日に、肌の汗は退きかねるやうな時刻——

淀川べりを遠つぱしりをしすぎて、枚方から、山崎の方へ引ツかへして來ようとする小五郎——紅い夕日に長い影を引かせて、うらぶれの身をトボ〳〵とはこびながら、見下す川瀨には、薩藩の丸に十の紋どころを打つた船が、悠々と下つてゆくのが見えるのです。

それを眺める小五郎の胸は感慨無量——

——薩州にも、もとより勤王の志士は多い——吉井幸輔、西鄕吉之助、大久保市藏、いづれ劣らぬ人々だが、あの人達の力を以つてしても、まだ藩論を急轉させることが出來ないのだ。島津久光侯の穩和論から、長、薩、物わかれになつて、とうとう蛤御門の戰には、敵となり味方となり、そのためにわが長州は敗退したが、しかし、わしはうらまぬぞ——薩摩の人々よ！　いづれ、この情熱で、そなた達の魂を、もつと〳〵焦きこがして見せる日が必らず來るのだ——その時こそ、手を握つて、天下のために働らかうなあ——

桂小五郎は、一時の私憤私怨のために、薩摩の舊友を罵しるやうなことはなく、かうつぶやきはしましたものの、かの藩

船の薩摩武士にくらべて、あまりに變るわが身の上を思ひあはせ、しばし立ちつくしてゐたのですが、やつとのことで、また歩み出して少し行つたころ、ふと、氣がつくと、三人ばかりの足音が、うしろに迫つてゐるのが聽えるのです。

もとより油斷も隙もない小五郎――武道鍛錬の身の上に、草のそよぎにも心を置かねばならぬからだ――

――さては、何者かが窺ひ寄つたな！

と、早くも氣はつきながら、振り返へつて見るやうなことはしませぬ――足を早めて、堤を渡り切つて、山崎街道――名代の竹林の間の小徑にはひつたころには、もう日は沈んで、たそがれの薄明り。

――いつまで知らぬ顔も面倒だ。このあたりで一仕末いたして置かねば、後で不自由――

わざと、足をゆるめると、ここまで同じ間隔で付けて來てゐた、例の三人ばかりの足音――これも緩んだが、充分にからだに隙を見せてやつたのに、誘ひ込まれたか、後からだしぬけの呼びごゑ――

『これ、雲助――待て！』

わざと、ハッとしたやうに踏みとまつて、よろめいてさへ見せると――

『ソレ！』

と、掛け聲が、一度に合つて、パ、パッと踏ん込んで來る三人――きらめく十手が、後ろから、横から打つて來る。

『ナ、ナニをなされます！ 旦那がた！ わたくしは怪しいものでは！』

『ナニを！ 桂！ 京からすがたを消してから、われ〳〵とても身を窶し、心肝を碎いてゐたのだ。』

『のがれぬところ――神妙にせい！』

身をかはした桂小五郎――低く匍ふやうに腰をかゞめながら、息杖を横たへて、ジッと見上げると、十手をかざして立ち並んだ三人、いづれも相當の手の中で、差してゐるのは脇差一本づつ、町人すがただが、相當の使手です。

小五郎、怖れもしませぬが、心に緩みは見せませぬ。

『マ、何をお間違なされましたか――わたくしは、しがない雲助風情――』

『言ふな！ 貴公の人相、すがた、歩みぶり、何度となくこれまで窺ひ知つてゐるものだ！』

パッと、打ちかゝる一人を、

『お聽きわけない！』

と、呟やきざま、ビュウと息杖を横に振つて、スッと退つて身

を構へたが、その時には今の一振りで、早くも一人の役人は、肋を打たれたか、うしろざまにのけぞります。

さてこそ――と、隙間もなく一人が振り込んで來るのと同時に、今は十手ではまだるしとてか、今一人が抜きはなつ脇差――

十手が退くと、脇差が、、、さそくに斬込んで來たが、もとより齋藤彌九郎免許皆傳――塾頭までつとめて來た小五郎が、大事の前に小事こそ大事の基と、飛鳥と飛びかはして、左右に薙いだ息杖――ビユウ、ビユウと、風を斬ると見ると、新手の二人はバタバタと仆れてうめきごゑも立てませぬ。

――三人の、みじめに仆れたすがたを、ほほゑみをうかべて眺めた小五郎――

――これ等も一通りの武術は鍛錬してゐる奴ども、まさか輕く打つた息杖で死にもすまい。どれ、死骸を取りかたづけてつかはさうか――ハ、ハ、ハ。

と、笑ふと、襟髪を取つて、一人づつ、徑ばたの竹林の中に投げ込んで、そのままふりかへりもせず、スタ〱と、伏見を差していそぐ、小五郎でした。

×　　×

ところが、いぶかしいことが、重なる日があればあるもの、たつた今、捕吏三人を叩き仆した小五郎が、もの

の二三町も來て、竹林が、途絶えて、稍ゝ畑地が打ちひらいたあたりに差しかかると、とある小徑から出て來た旅すがたの女性――ふと、何氣なく旅笠をかしげて、彼の方をみつめたやうでしたが、だしぬけに、

『まア、あなたは桂さま！』

と、言ひかけて、狽てて口を噤みながらも、じッと立ち止まつて、手早く旅笠を取るのでした。

さき程、捕吏に跟けられて、突然呼びとめられたときには、覺悟もし、豫想もしてゐたこと、さして驚きもしませんでしたが、この瞬間の小五郎は、覺えもない程びつくりして、棒立になつて、片手で顏を蔽すやうにさへしました。

――これこそ、三本木の名妓幾松の、旅すがたに相違ないのです。

別れて、幾月、思へば何といふ奇遇――

ですが、草にも木にも心の置かれる小五郎――ことに、つい其處で役人を氣絶させて來たばかりなのです――人目にかかつてはと、やつと氣を靜めて前後を見まはし、通行人の影もないのを見きはめてから、まづ、みづから小徑に切れ込んで、大きな松の幹蔭の方へいそぎました。そこに祠があります。

ワク／＼と、小走りに、あとから來た幾松――とりすがらうとするのを、小五郎は少し退いて、

『すがたの變つた小五郎――さはつては汚ないぞ。』

『何で！　乞食の時さへ抱きついたのに、雲助はいい分――』

と、かまはずすがりついて、

『ようまあ、お目にかかれましたなあ――このやうなところで――思ひがけなく――』

と、幾松は、目に一ぱい淚をためて、戀人の胸に頰をすりつけるやうに、じつと／＼見上げるのでした。

『それにしても、そなたは何で今ごろこの道を――』

『つい、そこに、子供のころ可愛がつて貰つた叔母がありまして、それが明日をも知れぬといふほどに、見舞に來ての戻りみち――これも、叔母孝行のお蔭で、お目にかかれたのでござりませう。』

――その當時は、もとより質素な時代――かてて加へて、京は蛤御門の變で、家を燒かれたものも多く、火の消えた有樣で

したから、幾松ほどの妓も、かごにも乘らぬ旅すがたで、京からこの片田舍までたづねて來たわけなのでした。

『いつぞや危ふいところをおのがれなされてから、今日はもしものことがありはしまいか、明日も御無事であればよいがと、たゞそればかりを案じすごして――』

『これ、さう泣くでないぞ――いつぞやも言うたではないか――一年、二年、三年、五年、消息を絶つことがあらうと、この小五郎、たやすういのちを捨てるやうな事はいたさぬ。大君のために、出來るだけ長生きをせねばならぬからだじやと――』

と、やさしく肩に手をかけて、あふむけてゐる、白い、美くしい涙がほに見入りましたが、

『ハ、ハ、ハ。』

と、急に笑つて、

『さ、行け！　いづれゆるりと逢ふ日もあるであらう――そなたのやうな美い妓子と、見ぎたない雲助と、日ぐれまぐれの野の中で抱きついてゐるのが人目にとまつたら、それこそ天下の大評判になつてしまふわ。』

『ええ、行けとおつしやるならゆきますれど――なあ、とのさま！』

『何じや？』

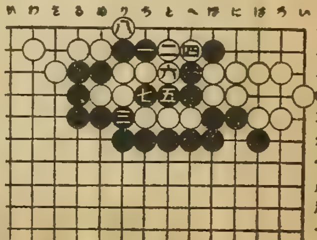
と、目と目を合せたまま――

幾松は泣きがほをもう見せまいとするやうにして、

『いく年お別れしてゐようと、では安心してお待ちいたしますが、晴れて逢ふ日が來たときに、知らぬ女じやなぞおつしやつては下さりますな。』

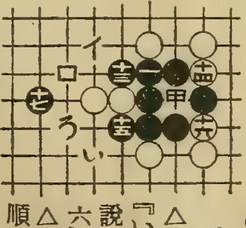
『申すまでもないことだ。その時こそ、たとへこの小五郎天下の樞機にあづかる身になつてゐるようと、松、そなたはわ

娯樂室解答



○詰碁　七段　瀨越憲作

黑先づ一と打つて置いてから、三と打つ手が良い手です。さうすれば圖の如く七までの手順を經て一半の黑は逃げます。本題は黑一、及三と打つのが妙手です。



○聯珠　珠叟　清水吾石

△⑰と打つて次『イロ』と『いろ』の兩四追勝。變化説明△⑮反對は『甲、十六』の順で勝。△⑭反對は『甲、十四』の順で勝。

○詰將棋　七段　溝呂木光治

正解手順　△八九金▲同玉△七八銀▲九九玉△八八角▲同玉△九七飛成▲同成桂△八九金迄の九手詰

○パズル――フジサンボウシキンシヤシンブンダンゴ　**○繪さがし**――人の顔と馬や田をみめぐりの神ならば　**○考へ物**――Bです。　**○判じ繪**――夕立

が宿の妻だ。』
と、きつぱりと、笑はずいふのをきいて、幾松は、
『まあ、うれしい！』
と、もう一度とりつきましたが、そこは諦めのいい女——
『では、これでお別れしますが——とのさまの御消息が、もしどうしても知りたいときには？』
『そのときには、對州屋敷の多田どのにでもうけたまはれ。さ、拙者はあとより間道をまゐるに依つて、そなたは街道へ！』
肩を押すやうにして出してやりましたが、たつた一度ふりかへつただけで、幾松のすがたは、やがて木がくれにかくれてしまひました。
しかし、この時の、この約束は見事に果されて、後年、桂小五郎が木戸孝允として臺閣に坐するとき、その內助の夫人は、この三本木の名花幾松の後のすがたであつたのです。

出石落ち

桂小五郎、幾松と、野末のたそがれに殘り多い別れをかはしはしましたが、實は、彼自身、この場から新らしく身のふり方を考へねばならぬ羽目に陷つてゐたのでした。
幾松との逢瀬に時を費やさねば、あのまま伏見かご忠の見世に戻つて、一應義理をものべて身を隱すひまもあつたでせうが、あれから大分經つてゐるので、もはや例の役人どもが、お互に呼び生け合ひ、のそ〱と京へ引き取つてゐる道に相違ありません。そして、かごかき姿の彼を認めてしまつた上は、伏見街道のかご屋といふかご屋に、しらみつぶしの手を入れようとするでありませう。
——このまま、また雲水か——
夕ぞらに、ほの紅い夕映をうけて、かすかに流れてゐる一片の雲を仰ぎながらつぶやいて、彼は間道傳へにいそぎはじめました。
心の中で決心して、今は逆に京へはひり、萬一の時には手賴らうとしてゐた一俠夫の許をたづねようとするのです。
俠夫、名を廣戸甚助と云つて、但馬出石の町人、京阪で海產物なぞを仕込んで、故鄕で商つてゐる人間なのですが、對州家に出入してゐるうちに、いつか小五郎と馴染み合ひ、一匹夫ながら、君恩の辱けなさを知る彼、泣いてこの少壯志士の艱苦に同情したのでした。
この甚助の力を借りれば、とうに安全地帶に身を忍ぶことが出來たのですが、京を去つて出石に行つてしまつては、天下の形勢を探るに便もないと、これまで京洛の地に踏みとどまつてゐたものの、しかし、この手きびしい當局の手配では、何とも五尺の身の置きがたく、却つて萬一の事を生じて後事をあやま

るかも知れぬと思ひ當つたので、今は小五郎、その俠商の手にすがらうと決心したわけなのです。

轉身には妙をきはめた、地下運動の天才桂小五郎、宵の口にいつかもぐり込んでゐた伏見の裏町――古着屋、がらくた道具屋なぞが、きたなびれて軒を並べた、一ばんうす汚ない一軒に飛び込むと、景氣のいい聲で、

『番頭さん、柄に合ふやうな着物、帶、足袋、はゞき、一揃へそろへて下さい。』

鈍い光で、すかして見て、

『おお、かご屋さん、どつかへ旅立ちかね？　さあ、意氣な渡世のことだから、荒つぽい縞ものでも――』

『ところが、番頭さん、實はね、今日、面白い賭場が立つて、當りづめ、まあ、久しぶりで兩の金にありつきやした。打明けて見ると、このわしは、東海道のものでネ、道樂がすぎての勘當、故鄕にもゐられなくなつて雲助にまで落ちましたが、少し握ることの出來たのも天のあたへ、それにどうも夢見がわるいので、おやぢやおふくろの顏を見にけえらうと思ふのさ――ですから、ずんとジミな奴を、ひとつ見はからつておくんなさい。』

『それはまあ結構な――お目出たいはなしで――さぞ、おやぢさん、おふくろさんもよろこびなさらう。では、こちらでも、うんと負けて上げませうよ。』

『いやどうも、場で勝つて、ここでまた負けて貰つてはすみませんね。ハ、ハ、ハ。』

深切な番頭が見立ててくれた、結城木綿の單衣に、紺手甲、脚絆、紺小倉の帶を貝の口に結んで、堅氣な尻はしより、スツパリと商人體に變つて、頭髮は吉原冠り、代をすますと、

『いや、いろ〱御厄介をかけました。いづれ京へ上つたらお禮に來ますよ。』

と、言ひ捨てると、輕い足どりで、京の町へ――

蛸藥師の、甚助寓へ、夜中に辿りつくと、俠商の喜びやうは一通りでありません。昨日今日の一部始終を聽いて、巧みに危難をのがれたことを祝し、幾松のあはれさを哀しみ、變裝の妙をたゝへるのでしたが、

『それにしても、よく出石へおいでなさる御決心がつきましたな。何ともお痛はしいことですが、長州樣の御運は、もう少し御辛抱にならではお開きにはなりますまい。あなたさまは、御藩中でお大事な方であるばかりか、この大日本のおんために、ゆく〱大きなお手柄をお立てなさるに相違ないおん身。早う散るばかりが、櫻の能ではムりませぬ。ひとまづ田舍で御靜養になつて、御勇氣をお養ひになるのが一ばんでムります。弟

の直藏も、お顔を拜見したらどのやうに喜ぶか知れませぬ。まあ、何にしてもお久しぶり――今晩はゆる〳〵一献お汲み下さりまして――』

夜中のことで、何の馳走といふわけでもありませぬが、銚子が出て、若い女中の酌で一ぱい――

いい程のところで、甚助――

『では、明朝はお早立ちがよろしうムりませう程に、お着更へのお仕度を御覽に入れて置きませう。いねや、先程のものを――』

女中が、立つて行つて齎らしたのは、一かさねの衣類――

『どうも、とのさまの前でムりますが、町人すがたはちとお似合になりませぬで――もしや途中でお見破られになつてはと、心ばかりのお仕度をいたしました。』

と、ニツコリする甚助。

『ホウ、拙者には町人は似合はぬか？』

と、折角伏見裏町古着屋で新裝をととのへて、多少變裝の巧みさに得意だつた小五郎、不平顏です。

『で、この仕度は？』

『船乘りで――船頭さんので――』

『ホウ！　拙者には、船乘すがたが似合ふといふのか？　いやはや！』

と、苦笑します。

『イヤ、決してお容體がと申すのではムりませぬ！』

と、言ひわけして、手を振つて、

『でございますが、わたくしにはまた別の見方がムりましてな？』

『別の見方とは？』

『とのさまのお手は、さすが御幼少から劍術の御鍛錬、ことさら天下の御名人にあらせられますゆゑ、世にいふ竹刀だこ――それで一ぱいでムります。町人には、そのやうな手をいたしたものはをりませぬで、まづ、怪しまれぬところが船乘り――それに、以前はお色が白うござりましたなれど、大分日に燒けなされたゆゑ、どこから見ても、船頭すがたなら大丈夫でムります――ちと、美男でおいでなさりすぎまするが――』

『なるほどなあ！』

と、小五郎は横手を打つて、

『いかにも、かやうな武張つた町人はムるまい――船頭、結構――』

――一日一夜の中に、三度も扮裝を變へ、口で笑つて、心で惱みを重ねねばならぬのも、みんなをん敵幕府のためではない

か——小五郎の闘志は、そのたびに強まつてゆくばかりでした。

さて、一睡して、まだ明け切らぬうちに、出かけようとする

と、甚助が——

『わたくしも、たつた一兩日で用をかたづけ、お供が出來るのでムりますが——殘念でなりませぬ。』

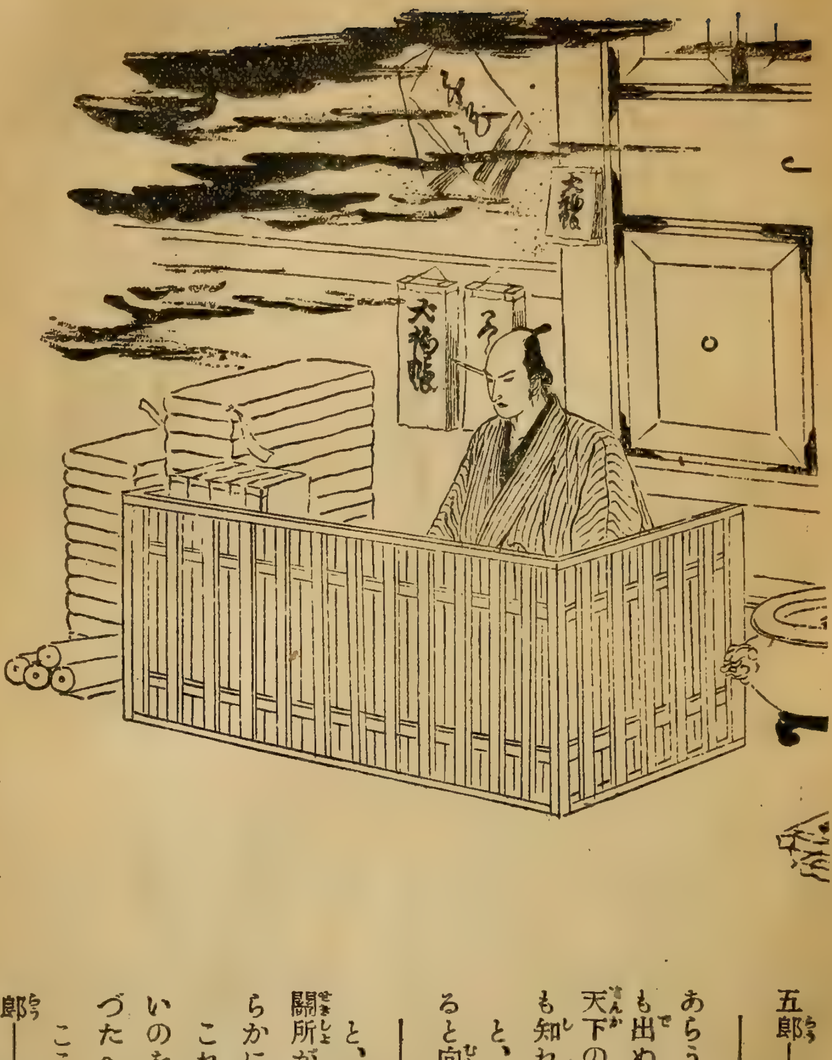
『イヤ、丹波路を越えて、但馬は僅かの道のり、案じるほどのこともあるまい——では御造作に相なつた。』

『どういたしまして——それに、どうぞ、若し途中で人改めでもありましたら、卯右衛門とお名乘り下さいまし。その名の男が、わたくしの店子の伜で、只今、伏見船に乘つてをりますゆゑ——』

『一から十までかたじけない。では、出石でゆるりと——』

髪の形さへも、甚助の手で、船乘風に、紺腹がけに羽織る上ツ張り、いなせなすがたで京を出てゆく人でした。

晩夏初秋の山路の旅——松の梢に逝く夏を惜しむ蟬のこゑの激しく、夕されば、やがて釣瓶落しの日足しの早やさを思はせて、峰を吹く風の薄ずみいろを吹きみだすのを見るのでした。



やがて、差しかかつたのが、丹波、但馬の國境——もはや出石も近いと思ふと、さすがに、道中の無事をホッとした小五郎——

——まづ、この分では、當分氣安う送れるであらう——窮屈な思ひをしてゐると、碌な思案も出ぬものじや。出石で英氣を養ふうちには、天下のおん爲めに、二ツとない妙案がうかばうも知れぬ。

と、心につぶやいて、辿つてゆくうちに、見ると向ふに、關所らしい柵門——

——ハテ！

と、肚胸をつかれましたが、かかるところに關所があらうとも思はれず、近づいてゆくと明らかに關門です。

これは出石の藩主仙石讃岐守が、世態の危ふいのを思うて、假の新關を久畑村に設け、間道づたへの士民を檢べさせてゐるのでした。

ここまで來て、引ッかへすこともならぬ小五郎——船頭らしい肩の振りやう——その肩に手拭を投げかけて、番所の前を、腰をかゞめて、通り抜けようとしました。

『コリヤ〳〵！』

と、棒を取つてあらはれた小役人——

『いづれの者で、どこへ通る？』

『へえ。』

と、今は世に響いた勤王の志士、足輕の前に膝をついて、

『わたくしは、出石町の生れで、伏見船に乘つてゐます、卯右衛門といふものでムります。ちよいとおやぢに逢ふ用事がありまして、出石までまゐります。』

『フウム、船乘か？。』

と、じツと見て、

『よし、通れ！』

——先づは——

と、胸を撫で下すひまもなく、番所玄關から、鋭どい聲で——

『まて！　そこな奴！　まて！　通ることならぬ——』

思はず、中腰になつたまゝ、キツと見やつた小五郎の瞳が、關所役人のそれと合ひます。

いかに新關とは言へ、そこを守る役人です。恐らく、かうした道にかけては、相當な眼力を持つてゐるのでありませう。

『怪しいふしがある——これへまゐれ。これへ引ツ立てえ。』

小役人ども、いづれも棒をつかんであらはれて、前後左右をかこんで、

『お調べだ——さ、それへ下座をせい！』

肩を突かれて、小五郎、定紋の幕をしぼつた番所玄關式臺下の、砂利の上に、膝を揃へて押つたて尻にうづくまりました。

正面着座の役人は激しい聲——

『これ面を上げえ。』

小五郎が、キヨトンと顏を上げます。

『生國、姓名を申し立てえ。』

『わたくしは、只今、申し上げましたやうに、お城下の生れ、卯右衛門と申しまして、伏見船に乘つてをりますがな——』

『上をあざむくことは相ならんぞ。物腰、何となく不審だ。言葉、語韻にいぶかしい訛りがある。お城下に生れたその方、まぎれもない長崎なまりはどこで得た？』

小五郎は、ギクリとした顏も見せませぬ。

『流れ渡りましたので——方々をな。長崎ばかりか、九州までめぐりめぐつてをりましたゆゑ——それにまた東海道——江戸では雲助をかせいでをりました。』

正面役人の、薄い、冷酷さうな唇に、苦々しげな微笑がひらめきました。

『ふうむ、それは天ツ晴れな渡り者だな。わしは申し立てを信用いたしつかはしてもよいが、身分證據がないと通すことはま

かりならぬ。懐中物に、何かしるしになるものはないか？』
小役人、左右からぐつと迫つて、首にかけた紐を引ッ千切らんばかり、腹掛から引き出す財布――甚助の心づかひで、判金はわざと、のこしてまゐつたので、逆さにしたところで、ころげ出したのは、小粒や小錢が、一兩たらず――
『まそツと、詳しくからだを調べえ！』
身體檢査も別に異狀がありませぬ。
鬼々しい手が、上ッ張りの單衣を引きぬがせて、からだをいぢりまはしましたが、小五郎はくすぐッたさうに身をすくめただけ、何一ツ見當りません――質屋の書付け一枚も出て來ません。
ですが、一度怪しいと睨んだ、役人は、いつかな許してはくれないのです。
『いづれにいたせ、出石お城下の者とあれば見知り人呼びいだすまで、假牢にはひつて居れ――見知り人、何ものだ――兄弟姻類申し上げえ。』
――海産商の廣戸屋甚助――甚助は京ですが、直藏の名が口から出かゝりましたが、もしや他日の迷惑をかけては――と、ぐつと呑み込んで、小五郎――
『旦那、それだけは御勘辨下さりませ。牢の中にはひつたなぞ聽いたら、出石の人達がさもわたしが惡事でもはたらいたやうに申しませう――それよりか、船頭うた、雲助うた、おつゞらうた――川すぢ、街道すぢの唄をうたつてお聽かせ申しますによつて、それでお疑ひをはらして下さりますやう――』
役人は、まさか、長州の桂小五郎とまでは思ひ込まず、たゞ、普通の身性でない奴と考へてゐるだけなのです――淋しい新關の、退屈な夕ぐれに、道中唄を聽くのも一興――
『は、は、面白いことを申す奴だ――しからば何なとうたつて聽かせえ――』
『へえ――かしこまりました。』
と、小五郎が、うたひ出す、雲助うた。

〽箱根八里はなア
　かごでも越すが
越すにや
越されぬよう
戀の路(引)

『お次は間の土山、淀の川瀨――何でもお聽に入れまする。』
小五郎、咽喉自慢な粋人――

〽坂はなア
照る〳〵

鈴鹿は曇る
間の土山
雨が降る（引）

と、やつてゐるところへ、急ぎ足で近づいた、菅笠、鐵色合羽、振分荷物の旅人――

關へかゝつて、

『願ひます。お通し願ひます。』

と、うづくまつたが、小五郎を見かけると、

『おツ！　そなたはお關所で、暢氣らしううたなぞうたつて――いつまた船乗りを止めて、國なぞへ歸つて來たぞ。』

小五郎、見返ると、京で別れた甚助です――やれ、味方が出た――と、思ひましたが、濟したかほ――

『これは甚助旦那――お久しう厶ります。が、ここのお役人さまが――』

と、言ひかけたとき、

『お旅人、そなた、廣戸ではないか？』

と、取調べ役人から聲がかゝる。

甚助が、御用品用達をしてゐるので、役人にも知人が多いのです。

『おお！』

と、ふりあふいで、

『これは關口さま――いつまたこの新關が出來ましたのか？御出役御苦勞に存じます。』

『して、これなる者、知り合ひか？』

『知り合ひどころか、店子の伜卯右衞門、仕方のないのら者で、國を出て長い奴で厶ります。』

『怪しいすぢがあつて取り調べ中なのだ。』

『どのやうなお疑ひか存じませぬが、こやつはこれで惡事だけはいたさぬ奴でござります。何とぞ、私に御免じ下されまして、お許しの上、お通しを――』

役人の顔から、今は怪しみの色が消えうせました。

『おお、そなたがそれほどに言はれるなら、勿論差し支へがない――』

小五郎も甚助も、ホッとして、コソコソと關所を去つたのでしたが、しばしゆくと、小五郎、低い聲で、

『全く、何もかも貴殿のおはからひだ。おいでなくば假牢に入れられ、遂にはとんだことになつたかも知れぬ。』

『いや、そのやうなお禮には及びませぬが、お立ちになつてから、フツと氣にかかり出しまして、もしや途中で變があつて、大事のおからだに間違ひがあつてはと思ふと、ゐても立つても

ゐられなくなり、おあとを慕つて驅けるやうにいそぎました――それでも、あゝいふ場所に恰度行きあひ、お目にかかれてなんぼうれしいか知れませぬ――』

この廣戸甚助、弟直藏兩人の深切は、小五郎の落魄時代を彩る美談の一ツで、木戸侯も一生を通じて忘れなかつたと言ひますが、その善行のために、邊土の町人が、靑史に名を殘してゐるのも、善因善果と言はねばならぬでせう。

色後家受難

さても桂小五郎、かやうな人々の同情で、但馬出石までは入り込みましたが、長州征伐を幕府がいよ〳〵實行するといふ噂がしきりなころなので、長藩浪人の行衞しらべは日に日に嚴重になるばかり、藩でも責任上人改めをきびしくせぬわけにもゆかず、その上、密偵どもも、姿を變へて市中を潜行しはじめゐるのでした。

小五郎の卯右衛門を、しばしわが家の離れにかくまつて置いた甚助兄弟も、だん〳〵に安心がならなくなり、檀那寺の昌念寺に隱したのですが、やがて、この寺のまはりまで、不思議な旅商人が徘徊するやうになりましたので、ある晩、小五郎を訪ねて來た甚助――

『さぞお退屈でムりませうが――』

町人髷に、縞物の袷、角帶をしめて、窓際の几にもたれてゐた小五郎、

『イヤ、方丈はじめ深切にしてくれるで、退屈も致さぬが、やはりあまり閉ぢこもつてゐると、このまゝ耄碌してしまひさうでなりませぬ。』

事實、いくらか窶れさへ目立つてゐるやうです。

『御氣性で無理もムりませぬが――』

と、甚助は同情に堪へぬやうに言つて、小聲になつて、

『ときに、この邊を、妙なものがウロ〳〵いたしてをるさうでムりますが、まさかお姿を見られるやうなことはムりますまいな？』

『おゝ、方丈もそのやうな事を申しをつたが、何かと人々に迷惑をかけ相すまぬ次第――』

『ところで、これは、申上げにくいお話でムりますが、これならばまづ當然はお身の上に間違はあるまいといふ隱れ家があるので、それに御動座なされては、いかゞと存じまして――只、そこへ御動座なされるには――』

甚助は、何か考へを述べようとして、言ひ澁つてゐます。

『いや、言ひ苦いも何もない――たとへ非人小屋でも、諸人に

迷惑をかけず、しばしこの身も生き伸びられゝば、それでうれしいのじや――どこでもよろしい。此宵なりと出かけよう。』

『いゝえ、それ程でもありませぬが、あなた様は、四通八達の御才氣、何なりと人のなすこと叶はぬはない方ゆゑ、商家の番頭なぞいかゞでムりませうかと――』

『お！　これはおもしろいな！　番頭、結構すぎるつとめだ。』

小五郎は微笑しました。

『で、職業は何だな？』

『左様でムります――呉服屋で――』

『いよ〳〵面白いな！　武張つた手で、色さま〴〵な美くしい絹――それをいぢつてくらすのも妙だ。』

一日も早く自由な境涯を得て、王事に盡瘁したいと、矢竹にはやるこころですが、しかし時機いたらねばいかに焦つたとて詮ないと、覺悟し切つてゐる小五郎は、少しも焦燥するやうなことはありません。

『では、早速明日にもお供いたしませう。昔は大きな店でござりましたが、只今は町はづれの小體な店――店も、内儀が二人の小僧を相手の、いはゞ、どうでもよろしい商ひで、もつとも小金はもつてゐますゆゑ、小さく暮してゆくには大丈夫な身代でござります――』

『イヤ、小店、却つて結構、朋輩が多くては、ちと閉口いたすによつてな。』

『ところがこゝに、たつた一ツ、困つた話がござりますので――』

『ほ？』

『と、申しますのは、ちと、異なはなしではござりますが――』

と、甚助は、苦がわらひをして、

『實はその家の女房――年のころは三十五六――きはめて美婦でムりまして――』

『ハ、ハ、ハ、美婦、うれしい事ではないか――御内儀さまとうやまふには、美しければ美しいほどよろしい。』

『美婦である上に、やもめ――それに、世の風評では、そのやもめを立てるに苦しんでゐますやうで――實は、この出石のもので、二三人奉公いたしましたが、どうもみなぢきに暇をとつてしまひました。』

『果報知らずな人々！　折角の思し召しをうけて置いたらよかりさうなもの――』

『生憎、その人達には、言ひなづけ、戀人がムりましたさうで――』

『ハ、ハ、とかく美女は淫を好むとか申せば、滿更うそでもな

からうが、しかし、拙者はこの通りの武骨者——まさかくどかれもいたすまいよ。』

『イヤ、どうもあぶない話で——何でも、内儀がくどいでゐるのをポーンと激しく刎ねかへしますと、すぐに辛くあたり出すさうでムりますから、その節は、ひとつ、お手和らかにおあしらひになつて下さりませ。さうすれば、當分は御安泰——たか／＼僅かの月日でムりますゆゑ——』

買はれてゆく、男めかけでもなるやうな内談をすまして、歸宅した甚助、翌日早々大よそ下ばなしがついてゐたと見えて、すぐに迎へに出向いて來ました。

小さな風呂敷包みの中に、いかにも栖み込みの手代らしい身のまはりの物を入れ、大切な旅日記、歌稿のやうなものは甚助があづかつて、世話になつた方丈、小僧に厚く禮をのべ、二人はしばし假の寓とした昌念寺を立ちいでました。

行く先は、出石、場末の丸和屋といふ呉服店——小ぶりながら、甚助噂の通り内輪の樂さうな店です。

のれんの外からのぞくと、問題の後家お秋、濃艶な年増をんなで、水々しい髪を丸髷にして、水いろの手柄、年よりぐツと若く見える、ぽつてりとした丸顔の色白——

はひつてゆく甚助を一目見ると、黒目がちな目で ニツコリして、

『おやまあ——どうぞお上り下さい。さあ、どうぞ奧へ——』

と、いふうちにも、チロリと小五郎の方へ送つた一瞥が、先入觀があるせゐか、何となく好奇好色の光りをたゞよはしてゐるやう——

奧へ通つて、親戚の卯右衞門——長らく京で、刀屋渡世をしてゐたが、このごろの騷亂で棲み憎くなり、故鄕へ歸つて來たものゆゑ、呉服の方は定めし不調法ばかりだらうが、何分とも御面倒を——と、甚助がひき合せます。

お秋後家は、いそ／＼として、

『いゝえもう、帳場に坐つて、帳合さへしてくれませば——そのうちにはだん／＼に、諸事に馴れてもくれませうし、御辛抱さへ願へれば——』

と、大した歡迎ぶりです。

甚助は、とにかくこれで、肩の重荷を下して歸つてゆく——

小五郎にすれば、いかなる昇天の龍も、機を得ざれば、硯池にすらも蟄するもの——浮婦の宿に宿をかる、亦、一生の思ひ出だと思つてゐますから、すぐにその場から、帳場の役を引きうけます。

それ以來、小切れを買ひに來る町むすめ、裏木綿一反買ふに

半ときもかゝるやうな近在のおかみさんの出入にも――

『いらつしやいまし！』

『有難う存じます。またどうぞ――』

十日、十五日、二十日――

馴れゝば馴れる世渡りの道――そして、いかに烱眼の幕吏でも長藩の錚々、桂小五郎ほどのものが、かかる小ツぽけな呉服屋の手代をしてゐるとは思ひもかけませぬゆゑ、ホトボリをさますには此の上ない世界なのです。

　ところが、この家に來て一月に、もう少しでならうとするある日の晩、お秋が、例の色つぽさで、店へ出て來て、帳場格子の側へペタリと坐ると、

『おい、近どん、清どん――今夜は早仕舞にして店をおしまひよ――私のお誕生日なので、お前たちにも御

馳走して上げるからね。』

もとより、二人の小僧、よろこんで、店を仕舞つて、大戸をバタ〳〵下してしまひます。

帳合にいそがはしい小五郎。

『ねえ、卯右さん。』

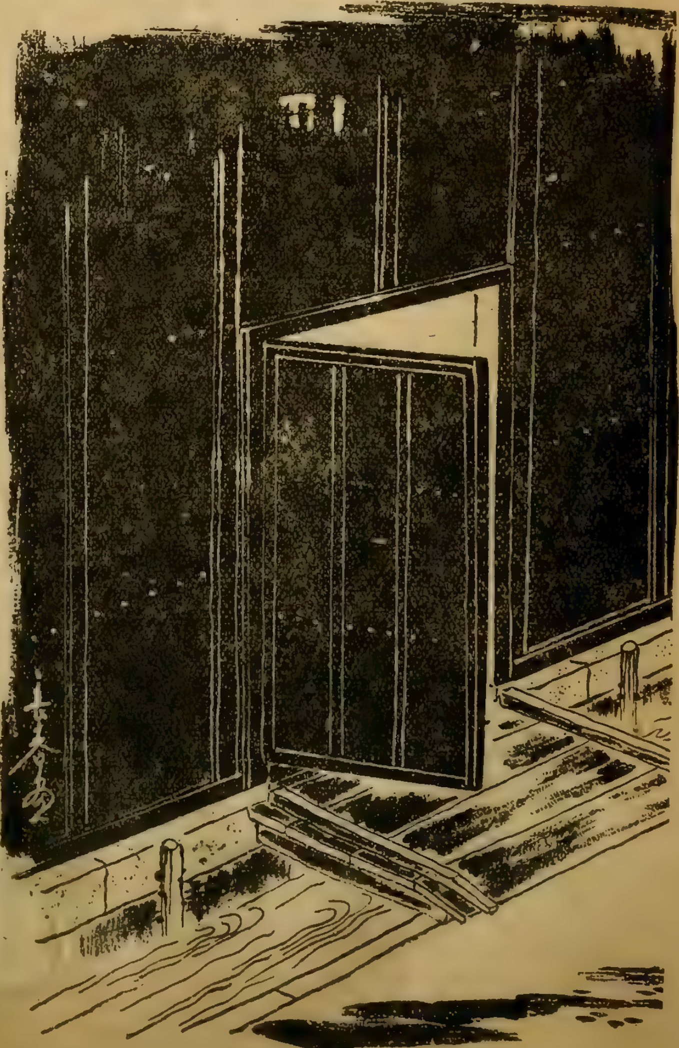
と、お秋はニツコリして、

『お前さんも、いゝかげんにして仕事を切り上げなさいな。働いて貰ふのはうれしいが、からだでもこはされては大變です。』

『へえ、有難う。もうどうやら片づいたやうですゆゑ、休息させていただきます。』

『そしてね、奥で私とお夕飯をつき合つて下さいね。誕生日の晩を一人で御飯をいたゞくのも、私も隨分淋しいから——私はもういたゞいてしまつたゆゑ、早うお湯におはひんなさいね。』

小五郎の卯右衛門、入浴をすますと、もう奥の小間に、近所の仕出し屋からはひつた料理が並んでゐて、女主人が、待ちどほしげに坐つてゐました。



『さあ、まあ一杯——何をそんなに遠慮してゐなさるんだねえ、番頭さんと云へば御家老さま——お家の柱石とやらじやあないかね——お進みなさいよ。そして座布團をしかなければ——』

小五郎は、恐る〳〵進んで、お秋後家の杯をうけます。

『さ、私にも注いでおくれ。』

と、一ぱい飲んで小五郎に獻して、

『ほんたうに、お前さんは感心ね。』

『どうしてでございます。』

『だつて、うちへ來て、もう小一月、その若さで、その容貌で、遊女買ひひとつに出るではなし――』

『どういたしまして、まだ、そんな我儘の出來る身分ではムいません――』

と、言つて、小五郎は、杯を淸めてかへします。

『あれ！ すゝいでなんて、他人行儀で厭だねえ。』

と、內儀は言つて、うまさうに杯を嘗めながら、

『それにしても、お前さん、いかに堅人だからつて、女には好みがあるだらうね。瓜實がすき、それとも丸顏が――』

『へえ、いづれでも――私なぞに、女は一生かかはりがなささうでムいますから――』

『まあ、あんなことを――私なんか、鏡を見るたび思ふのですよ――どうせ一生、このみせを一人でやつて行けるわけでもなし、入夫でもしなければならないのだが、卯右さんほどの人が、何とか思つてくれるやうなことがないものかと――』

『まあ！ 滅相な――』

『いゝえ、本氣なのさ。』

と、さすが年增ですから、乘り出した船をかへすやうなことがありません――そこは圖々しいもので――

『冗談じやありません。女の口から、どうしてこんなことがうそに言はれるものですかね――』

お秋は杯をまた獻して、

『幸ひ、私は家付のむすめ、だれに何と言はれる身ではなし、どうだらう、卯右さん、私の相談相手に、今夜からでもなつておくれでないか――』

いつか、からだがべつたりと、長火鉢に凭れかゝるやうに、だん〱手先が小五郎の方へ伸べられて來るのです。

それをつき放すほど不粹な小五郎ではありません。指だけは握らせて、

『まあ、あんまりうれしいお話で、卯右は天へも昇る氣持です。』

『じやあ、堅めに一ぱい下さい。』

小五郎は、この淫婦が、酒はあまりたしなまぬのを見て取つて、それから盛んにすゝめて見ると、案の定、やがて正躰もなく醉つてしまつた容子――

そのまゝ、その場へ橫になつて、

『卯右さん、枕を――』

と、いふので、膝をかして、うたゝねをさせると、あとは女中を呼んで頼んで、虎口をのがれる氣持で、わが寢間へと逃げ込んでしまひました。

さあ、翌日は心配です。昨夜は酒で逃げたものの、今夜があぶない――

帳場に坐つて、その事でこれほどの英雄が胸を焦してゐるとき、午少しすぎ、

『今日は――しごきにするのですから、何か見せて――』

と、はひつて來た、一人の旅裝の女。

その聲音に、ハツとして帳面から目を上げると、これは何としたことだ！　京の幾松が、旅すがたでやつて來たのです。

『しごきの切れなら、その棚にあつた。よい／＼、わしがお見せする。』

と、立ちかゝる小僧を止めて、自分で箱を下して、上りはなに行つて、

『さあ、この中からおえらみを――』

『あい、番頭さん、御苦勞さま――』

と、冷やかすやうに言つて、ソツと丸めて渡した一通の紙片――

帳場へかへつて一目通すと、京にまた出て來た故郷の同志から、いよ／＼幕府の長州征伐が近づき、今や一國の安危に關するゆゑ、京洛の變化はしばらく置き、いそぎ歸國して藩難を救つて貰ひたい――と、いふ手紙なのです。

釣錢を出すふりをして、

『今夜、この裏口へ――亥の下刻――』

と、書いた紙片を渡しました。

幾松は立ち去ります。ニツコリと笑みをのこして――

彼女がなぜ出石まで出て來たかと言へば、秘密の連絡で、京都の對州留守居多田莊藏までは、小五郎の居所が通知されてゐたので、密使として、女の方が安全と特派されて來たわけでありました。

そして、その夜以來、この但馬出石から小五郎の姿が消え失せたのでした。お秋後家の失望こそ充分に同情されるではありませんか！

×　　×

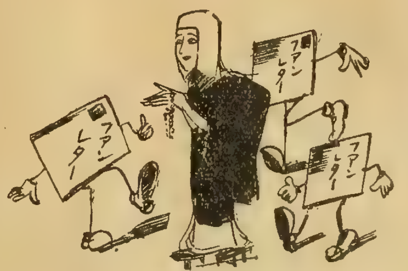
作者言ふ、漢土の忠臣は敵に近づかんとして顏に漆し、露西亞の志士は海外に流泊して物を乞ふ――維新の地下運動者の悉くは、すべて最も變轉多き陰鬱な生活を潜つて來たのだつた。しかも小五郎の、圓通自在、艱に處して綽々たる餘裕あるもの、蓋し比なきを見るのである。

（終）

映畫界噂ばなし

淡路千夜子の罪ほろぼし

寛壽郎プロの御大嵐寛壽郎と新興キネマのスター淡路千夜子とが仲が良過るといふのでスタヂオでも評判だが、その事が何時しかファンにも知れ近頃淡路千夜子の許へ來るファン・レターには物凄いのがある。



『貴孃こそは、かねぐ\生娘と信じ居り候が相手欲しやの年頃とは申せ、妻ある男に惚れ候とは、たゞ呆れる外無之、今後一切貴孃出演映畫は見ざる覺悟致し候まま何卒左樣御承知相成度 候』

と、云ふやうなのが續出し出したので、千夜子、すつかり悲觀して、新作『隱密一代男』では、罪ほろぼし(?)に尼姿となり、スクリーンからファンにお詫びしようと云つてゐる。

離婚する迄に?

その輝くばかりの美貌と、舞臺で鍛へあげた演技によつて、トーキー女優中の女王と云はれてゐるルス・チヤツタートンは、ジョージ・ブレントと結婚し、ファンをがつかりさせたが、撮影が忙がしいのでまだ新婚旅行に出かけられない。

彼女、嘆じて曰く、

『せめて離婚するまでに、新婚旅行をして見たいわ。』

デブ公の名案

『結婚適齢記』で新進女優久松美津江の父に扮した日活の人氣者デブ公田村邦男は、これ以來久松に

『君と僕とは親子關係になつたからそのつもりで。』

と、何時も仲よく食堂に連れ立つ。そしてその度毎に、

『美津ちやん、親孝行の爲めだ。君が拂つて置き給へ。』

と、いふ調子である。これには久松、すつかり弱つて、會ふ監督毎に、

『先生! 今度、田村さんが、あたしの家來になるやうな役をつけて下さい。』

と、頼んでゐる。

親友飼ひ殺し

西部活劇の王樣トム・ミックスは、その親友トニーと訣別した。この二十四年間共に暮した最愛の友は、今まで彼の爲めに數百萬ドルを儲けさしてくれたのである。

老衰と病氣の爲め瘦せ細つた友の爲めに、トムは更に立派な小屋をつくつて一生飼ひ殺しにするといふ。全世界のファンは、いづれもトニーの餘生、健かならんことを祈るだらう。

因にトニーといふのは、トム最愛の名馬である。

千惠藏の忘れもの

此間、千惠藏プロへ一通の電報が舞込んだ。

三・一五ヲワスルルナ

とある。千惠藏スッカリ面喰つて、

『何だい、こりやア、まさか、共產黨の三・一五ぢやあるまいな。』

と青くなつてゐると高津慶子プッと吹出し『國定忠治の封切が三月十五日だから、忘れないでゐて吳れと云ふ電報なんですよ。』

千惠藏やつと安心して、

『さうか、それで安心した。』

は大笑ひ。

齡五十六歲の女辯士

映畫說明者は、トーキーの勃興から受驗者が年を追うて減少して行く傾向にある。

その中で現在東京には女の說明者が六人居り、その中、最高年齡者は森松壽といふ五十六歲になる老婆であるが、昨年一回受驗しただけで見事パスしたといふ頗る出來る人だと係員も感心してゐる。彼女は獨り息子を大學に通はせ、その成長を樂しみにしてゐるさうだ。

ハリウッドの珍流行

最近ハリウッドで妙な事が流行してゐる。

と、云ふのは、數年前までは著名女優と云ふと、きまつて、毛並美しい小犬を連れてゐたものだが、最近、子供を養ふ事が流行(?)し出したのである。若いジョーン・ブロンデルとか、リリアン・ロスとか云ふ花恥かしき佳人連が、さも自分の子供らしく、可愛いゝ坊や（又は孃や）を得々と抱へて散步してゐる。

とにかく、世にも不思議な流行があつたものである。

○『？！……』

○バラ〳〵の本場ア

歌舞伎芝居の大向の呼び聲に『音羽屋ア』『高島屋ア』『播磨屋ア』『大統領』といろいろ聲をかける中に『イヨウバラ〳〵の本場』といふのがある。何だらうと考へて見たら菊五郎の本名『寺島』だは手數がかゝる。

○賛・詩・語・六・質

○『この掛物の繪の賛は何と讀むのかなあ。』
△『イヤそれは詩ですよ。』
○『ぢやあその布袋の繪にある詩は誰が書いたんだい。』
△『これは澤庵和尚の語だよ……』

賛と云へば詩、詩と云へば語だといふ。よし、今度は一つ餘計に云つたら間誤つくかと思つて、

○『なるほど、ほかの掛物の繪の上に書いてあるのは六でせうな。』
△『さあ、ろくなものぢやないが、あれは質に取つたものさ。』

○梯子パズル

――兩側の鍵を解て眞中のコマへ適當な言葉を嵌めて下さい

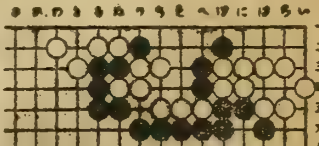
雑誌の名	富士	日本の名山
作戦中兵をこらす人		頭に冠るもの
事業のこと		織物の名
記念にとるもの		日々の讀物
作家の世界		食べ物
趣味		

○白河夜船問答

問　白河夜船に何を積むか
答　一日の疲れを積む
問　白河夜船を襲ふものは
答　睡魔

○詰碁新題

七段　瀬越憲作出題

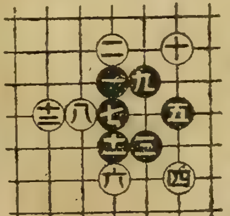


黒先手にて何か手段がありませうか。

珠叟

○聯珠模勝問題

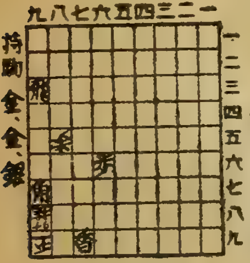
清水吾石出題



△黒㊂から追手詰で最も容易に勝つ但題形が上下同形、結果も上下同形で上下兩方に勝を作る事

○詰將棋新題

七段　溝呂木光治出題



問　白河夜船が顚覆するとどうなる
答　鼻の提灯が消える

○考へ物

『君の家ぢや近い中に誰か洋行するさうですね、一體誰なんですか?』と友人AがBに聞きましたら、Bが言ふには『うん、洋行する男の父親は、私の祖父の子に當ります。而し私には兄弟は有りませんし、父親にも兄弟がありません』と答へました。ハテ誰が洋行するのでせう。

○繪さがし――この繪の中に二つのものがかくれてゐます、何と何でせう?

○謎の一騎打

ある料亭で遊人の旦那と幇間の釜八が、
釜『旦那樣とかけて春の夕暮と解く、その心は?』
旦『分らんね』
釜『くれさうでくれぬ』
旦『ハ、ア成程うまい、然らば釜八とかけて秋の夕暮と解く、その心は?』
釜『分りませぬ』
旦『くれん先から星がある』

○判じ繪――この繪を何と讀みませうか?

本欄解答は全部四二六頁にあります。

長篇小說

晴曇

久米正雄

大橋月皎畫

【前號迄の梗概】友人辻村の戀人幸子を奪ひ、以前の戀人房子を懷姙の儘で見捨てた黑田は、新婚旅行から歸つた當日、其房子が難產の末、嬰兒を殘して急死した通知を辻村から受取る。此經緯を知つた幸子の父の斯波氏は、一件を彼女にどう處置すべきかに迷ひ、とゞ黑田の口づから、幸子に向つて過去一切の僞らぬ告白を敢てさせた。所が意外やこれに對して彼女は、過去は問はず此將來どんな場合にも、自分が黑田を選んだ事を、後悔させぬ樣にしてくれゝばいゝと夫に答へたのみか、『今の貴方の責任として、辻村さんの所へ行つて、一刻も早く其嬰兒を引取つて來て下さい』と勸める。

七夜の前日

郊外生活の午後四時は、それ〴〵の家庭の主婦に取つて、最も忙しい時間だつた。不幸な姉の歿後、その野邊送りの涙の、乾く間も無く、兎も角も姉の遺志に從つて、辻村の家事を手傳ふ事になつた貞子は、その馴れぬ家政と更に又馴れぬ育兒とで、殊に忙しかつた。其上今日は、賴んで置いた看護婦が、鳥渡用があつて家に歸つたので、彼女は一倍忙しがつた。が、彼女は少しも不平は感じなかつた。忙しいのなぞは、何でも無かつた。姉の事を考へると、不平なぞを云へた義理ではないと思はれた。

醫師や看護婦に敎はつて、貞子は嬰兒の人工營養の——牛乳の薄め方も分つた。不幸なる——否考へやうに依つては、幸福なる嬰兒は、母體の苦難にも係らず、一兩日にして完全に肥立つて行つた。母乳が無いので、マクリなぞを飮ませて、一應胎便を排泄させた後、その無心の唇は、直ぐ知らぬ乳房を求めて、ガーゼの小さい球やゴムの吸口を、チウ〳〵吸つた。時としては眞の母を求むるかの如く、激しく泣く事もあつたが、併しそれでも其ゴム乳首を適宜に含ませさへすれば、可哀さうな位ぴつたり泣き止んだ。——生れ出た

嬰兒は、天の攝理か、實に健全だつた。それは不幸中の幸ひだつた。

今も貞子は、奥の座敷の小さい床で、嬰兒に薄めた牛乳を飲ませ、——その時間も醫師の指圖に從つて、薄い番茶を飲ませる時と、營養を攝らせる時とを嚴守した。——安らかに寢付くのを待つて、臺所へ出た。

四時と云へば、もう辻村が歸つて來るのに、間も無い時間だつた。夕餉の仕度は、姉が居なくなつてから、家でやらされてゐたので、割合に馴れてゐた。それで彼女は、エプロン

姿も甲斐々々しく、一と通り炊ぐものは炊ぎ、煮るものは煮て、彼がいつ歸つてもいゝやうに調へた。それに今日は辻村が、久しぶりで街の方へ出て行つたので、歸りに牛肉を買つて來るから、そのスキ燒をしようと云ふ事になつてゐたので、外のものは簡單に濟んだ。

ブッ切りにしてゐた葱の香が、ふと彼女の眼に沁みた。彼女は思はず涙ぐんだ。涙ぐむと、その涙に連れて、姉の事を思ひ出すともなく、急に胸が迫るのを覺えた。悲しいのではなかつた、況んや嬉しいのでも無かつた。夕暮の仄かな臺所の片隅で、彼女は只泣けて泣けてならなかつた。

ふと、澄んだ鈴の音が鳴つて、表ての形ばかりの門の格子戸ががらりと開いた。おや、お歸りになつたのかしら？　と彼女は思つた。そして急いで、エプロンの端で涙を拭いた。

つゞいて、玄關の戸が開くのが聞えた。

彼女は、眼の縁の赤いのを氣にして、出て迎へるのを、まだ逡巡してゐた。

『――今日は！　御免なさい！』

さう云ふ聲は、確に澤野のだつた。信子は、違ふ意味での懐しさに、直ぐ立つて行かうとして、まだ涙の痕を一生懸命拭き取らなければならなかつた。

『お留守ですか？　御免なさい！』

聲は猶もさう呼んだ。

『はい。――鳥渡、お待ち下さい。』

貞子は、やうやく涙を拭ひ終へた。そして猶も、その薄い化粧の脱げた跡を、如何に親友とは云へ、人に見られるのを恥しがつて、急いでコムパクトの布で眼の下を叩くと、その楚々たる頰に微笑を浮べて、玄關の方へ出て行つた。――彼女の、姉に似て姉よりも肌目の細やかな、象牙のやうに澄んだ頰は、鳥渡した化粧で直ぐ冴えた。そして泣き濡れてゐた眼は、一種の深い陰影を帶びて、沁々と黒く濕ほつてゐた。

障子を明けると、そこには果して澤野が病院の歸りででもあらう、黒い鞄を提げ、黒いモオニング姿で、厳つく立つてゐた。

『いらつしやいませ。お待たせして、失禮しました。』

『いや、今日は！』彼は少しくその青い剃痕の見える頰に、僅

か乍ら血を上せて挨拶した。『辻村は居ないんですか？』
『はい。鳥渡。――でもまアお上り遊ばして。もう直ぐさうしてゐる中に歸つて參りませうから。』
『貴女、お一人ですか？――看護婦は？』
澤野は何故か鳥渡こだはつた。
『看護婦さんは、鳥渡自家とかに用があつて、今日一日だけ暇を吳れと云ふんで、出して差し上げましたの。もう赤ちやんの事も、大概大丈夫ですし、私一人でもどうにか間に合ひますんで。……』
『あゝさうですか。そいつは却つてよかつたかも知れない。』澤野は獨語くやうにさう云つて『ぢやア、鳥渡失禮して歸りを待ちませうかな。』
『どうぞ。――』
澤野は靴を脫いで上つた。そして遠慮無しに、帽子掛へ帽子を掛け乍ら訊ねた。
『赤ん坊は？』
『奥の部屋に寢せてありますわ。よく寢入つてゐるんですのよ。』
貞子は自ら聲をひそめた。
『一つ、見てやりませうかな、どんな樣子だか。』
『どうぞ。――』
澤野は、勝手を知つてゐるので、つか〱と奥へ通つた。そして、其處に敷いてある小さな敷布團と、赤と黃のメリンス仕立の夜着から、赤く露出させてゐる小さな頭顱を眺めた。小さな、併し確かな律を刻んで、その赤い鼻腔は膨らみ、且つ萎んだ。
『……あゝ成程。申分ない經過ですね。――顏の黃疸味も取れて、眼鼻立も赤ん坊らしく整つて來たぢやありませんか。』
『お蔭さまで。……』
貞子は更に聲をひそめた。
『大丈夫ですよ。まだ音響に對して、感覺はありませんから。』
『まア、さうでしたわね。』
貞子は微笑した。
『かうして見ると、なか〱姉さんに似てゐますね。』
『それに私、不思議にさう思ふんですけれど、辻村さんによく似てゐやしませんか？　私、時々ふいと錯覺と申しますか何と申しますか、辻村さんがほんとに可愛がつてあやしたりしておゐでになると、ほんとにあの方のお子さんだと、思つて了ふことがありますわ。姉さんはお亡くなりになる時、胎教でさうしたと申して居りましたが、何か醫學上、そんな事がありますでせ

うか？』

『さア、まさかそんな譯にも行きますまいがね。――氣のせるでさう見えるんですよ。』

『さうでせうねえ。』

『どうです？　併しかうして育てゝ見ると、可愛いゝと云ふより、手がかゝつて、面倒で仕様が無くはありませんか？』

澤野の問は、醫者らしい直截さに滿ちてゐた。

『いゝえ。』貞子は鳥渡虚を衝かれて、少し赤くなり乍らも、直ぐさう強く打消した。『そんな事はありませんわ。手數は手數ですけれど、そして、何だか只赤いだけで、何の心も無い生物ですのに、かうして一週間近く手塩にかけて、育てゝ來て見ますと妙に可愛いくて。――』

『へゝえ、さうですかねえ。――尤も藁の上から貰つて來ると、吾が子のやうな氣がするもんださうだけれど、貴女までがさうですかねえ。――すると、貴女は今、此の子を他處へやるのはお厭ですか？』

『えゝ。――私もう此の子を、手離したくはございませんわ。それに姉の遺言もありますし、……何だか、私の手で育てられるものなら育てゝ見たうございますわ。』

『へゝえ、さうですかねえ。尤もさうかも知れませんね。女の人つて、相當みんな母性と云ふものは持つてゐるらしいですからね。――でも、辻村はどうですか？　彼奴も可愛がつてゐますか？』

『それは、辻村さんの方が、もつと可愛がつてゐらつしやる位ですわ。不思議に。――それは何と云つたつて、お姉さまの忘れがたみと云ふ點もあるでせうけれど、赤ん坊つて云ふものには、不思議に凡てを忘れて、愛させるものがあると見えるんですわねえ。』

『ふうむ。さうですか。』それから澤野は急に語調を變へて、『すると貴女がたは、お二人で姉さんの遺言どほり、どこ迄も此の子をお育てにならうと仰有るんですね？』

『……えゝ。まア。』

貞子は僅に紅を潮して、下を向いた。

『すると貴女は、結局お姉さまの代りに、ずつと辻村のところに居て下さるんですね？』

『……それは、分りませんけれど。……』

『さうですか。』澤野は、吻と惱ましげな吐息をついて、『いづれにしても、僕は鳥渡、違つた考へを持つてゐました。僕は實は此の赤ん坊が居る事は、矢つ張り寧ろ邪魔だと云ふ風に考へてゐたものですから。――でも、貴女は若し、貴女自身に本當の

お子さんが出來た時の事を、お考へになりませんか？』

貞子は赤く染めた顏を、はつきりと上げた。

『まア、私、そんな事、考へませんわ。』

『考へないと仰有るのは、辻村と結婚はしないと云ふ意味ですか？』

『……存じませんわ。』

貞子は今度は完全に下を向いた。その可憐に淸い頸を、澤野は屹と見下し乍ら、

『では、貴女にほんとのお子さんがお出來になつても、愛は變らないと仰有るんですか？』

『えゝ。――』

『辻村も、さう思つて居るでせうか？』

『私には分りませんけれど、彼の方もさう思つてゐらつしやりはしないかと存じます。』

『不自然でなくですか？』

『えゝ。――だつて彼の方は、結局あれ程姉さんの事を思つてゐて下さいましたし、私も姉さんを愛して居ましたから。……その姉の死床の枕許で、私たちは誓つたのですもの。……』

『成程――姉さんを通して、さう迄愛し合つてゐらつしやるとすれば、貴女がたは幸福ですね。』

『幸不幸は、私たちには分りませんけれど。……』

二人は思ひ〳〵に口を噤んだ。

其時、又ちりん〳〵と表ての方で、澄んだ鈴の音がして、ガラリと勢ひよく、門の格子戸を開けるのが聞えた。

『あら、お歸りですわ。』

唐人の寢言？

『……やア、君が來てゐて吳れたのか。』

辻村は、玄關から上つて來て、澤野の姿を認めると、さう人懷つこく云つた。――悲しみに窶れた彼の顏は無精髯が僅に伸びて、何か受難の聖者と云つたやうな、一種の陰影を帶びて見えた。

『やア、留守の間に上つて、君の歸りを待ち兼ねてゐた。――一體何處へ行つて來たんだ？　まさか、もう勤め先へ出てゐる譯ぢやあるまい。』

『うむ。まア、ね。』と辻村は鳥渡先づ曖昧に答へたが、貞子の方へも掛けて、『今日は色々な所を、先づお禮巡りみたいな事をして、それから、區役所へ行つて來たよ。』

『區役所へ？――何しにだい？』

澤野は、烏渡眉をひそめた。

『いや、子供の出生屆にさ。だつて明日でも、一週間になるからね。――早いもんだ。もう初七日、いや、お七夜と云ふのかな。いづれにしても此際は、不幸な事に同じ事だが、……その七の日が近づいたんでね。――貞子さん。幾ら考へたつて仕方が無いから、結局、烏渡可笑しい名だけれど、房助つて云ふのに決めて屆けて來たよ。房助。房子の房と、僕の伊助の助を只、單純に結び合せてね。』

『まア。さうでしたか。』

貞子は、只、何となくもう涙ぐんでゐた。

『ふうむ。』澤野もやゝ呻るやうにして『すると、矢つ張り君の子供としてかい？』

『あゝ、さうさ。』辻村は悲しげな微苦笑をした。『ところが、殘念乍ら矢つ張り、庶子としてしか認めて吳れなかつた。君。お役所なんて、隨分融通のきかない所だね。幾ら、ちやんとした内緣の妻で、生んで、生むと同時に死んだんだから、結婚屆と死亡屆を一緒に出して、正式に實子にして吳れと掛けあつたんだが、その手續が逆になるとかどうとか云つて、なか〳〵埒が明かないんだ。だからまア兎に角、庶子で我慢する事にして、屆ける事は屆けて來たがね。』

『ふうむ。』澤野は又呻つて、『だが、そいつは君、少し早まりやしなかつたかい？』

『早まつた？』

『うむ。さうだ。――もう一日、尠くとも待つて見る手は無かつたかい？』

『どうして？』

辻村は不審の眼を瞠つた。

『どうしてつて事はないけれど、實はね、辻村。』澤野は語調を改めて云ひ出した。『實は其件に就いて、黑田が、――あのもとの黑田が、今日此處へやつて來るんだがね。』

『黑田が？』

辻村はさすがに色を失つて、その澤野の意外な言葉に、眼を瞠るのみだつた。

貞子も傍から、鋭い瞳をぢつと上げた。

『うむ。あの當の黑田がさ。そして君達に會つて、詫まるべき點は詫まり、又當然引受けるべきものは引受けるから、その話の立會ひに、僕にも來て吳れと云ふので、實は僕もやつて來たのだがね。』

『ふうむ。だが、どうしてあの黑田が、今になつてそんなに、此處へやつて來るなんて、云ひ出したのだい？』

辻村は、いつの間にか坐り直してゐた。
『それは實は、君たちに默つてゐたけれど、僕はあんまり向うの仕打が癪に支つてならなかつたのでね。賴まれもしないで、餘計な事をしたと、君たちは云ふだらうが、僕はあの幸子さんのお父さんに、――つまり黑田の岳父の斯波さんに、直接會つて、一部始終をすつかり、公平な僕の立場から見たところを、打明けて了つたんだ。そして然るべき處決を、友人として要求してやつたんだ。若しそれでも、向うで不問に付するやうだつたら、僕は僕としての考へがあると云ふんでね。』
『ふうむ。そんな事を、君がして吳れたのか？』
辻村は更に眼を瞬つた。
『うむ。あの斯波と云ふ人も、初めは僕の云ふ事を聞いて、何か僕が恐喝にでも來たらしく、考へてゐたやうだつたが、だん〳〵僕の眞意が分ると、さすが物分りのいゝ紳士だ。いづれ相當の返事をすると云ふので、僕もやうやく納得して引揚げたんだが、その結果がとう〳〵今日さ。――さすがに黑田の奴も、俺の正面攻擊には、參つたものと見えて、先刻僕ん所へ電話をかけて來て、何とか相當の解決を付けたいから、立會つて吳れとさう云ふのさ。』
『おい澤野。何だつて君は又、そんな餘計な事を、僕に默つてして吳れたんだ？　何だつてそんな、恐喝めいた告げ口なんぞ、君からして

呉れたんだ?』

辻村は、稍ゝ進み寄つて、さう澤野を責めた。

『だつて君、あれだけぢやア、あんまりぢやないか、あんまり君たちか甘くて齒搔くて、見てゐられないぢやアないか!』

『いや、その友情から出た、一種の正義觀に對しては、僕は先づ何と云つてお禮を云つていゝか分らない。併し、そんな風に斯波氏を脅やかして、側面から報復めいた手段を講ずるなんて、君、そんな必要があれば、僕自身でそれをやるよ。』

『ところが意氣地無しの君には、それが出來なからうぢやないか。だから代りに俺がやつたんだよ。』

澤野もやゝ氣色ばんで云つた。

『いや、意氣地なしと君は云ふかも知れないが、俺は又俺で少し別な心境から、さう云ふんだよ。俺はその心境を、實はあの房子さんから默つて、滿足して死んで行つた、あの房子さんから、敎へられたのだ。そしてあの房子さんの心持に對しても、そんな淺墓な事は出來なかつたのだ。澤野君。そんな事は決して復讐ぢやない。復讐なら、もつと遠くにあるんだ。俺は房子さんの死後、あの人の日記に、銘のやうに記されてゐる言葉を讀んで、はつきりそれを知つたのだよ。それは、Vengence is Mine. Saith the Lord. と云ふのだ。復讐は汝にあり、神是を酬いん! さうだ。眞の復讐と云ふものは、神の手にあるんだ!

さう思つたから俺も、今は只自分の分だけを守つて必死に此の片隅の幸福に安住して、永い眼で、神の行はうとするところを見てゐるのに。……』

『いや、まアいゝぢやないか、そんな唐人の寢言は。基督だかトルストイだか知らないが、俺は俺で俺の立場から、さう間違つたと云ふ程の事もして居ないんだから。折角、あの黑田の奴が來ると云ふものなら、來させて、詫まるなら詫まらせて、責任を負ふべきものは負はせて、それで普通の解決をしてから、永い眼で見ようと、神の手に任さうと、それでいゝぢやないか。もう幾ら何と云つたつて、黑田の來るのは旣定の事實だ!、何も此方から賴んだ譯ぢやないから、構はないぢやないか。まア會ふだけ會つて、君の云ひたい事だけ云つてやれよ。俺は君の氣持まで强制する譯ぢやないんだからな。』

『で、黑田は一體、何時頃來ると云つてるんだい?』

『五時頃つて云ふ話だつたから、もう來るだらう。』

『五時頃?』

さう云つて辻村が、振り向くやうに後ろの掛時計を仰いだ時だつた。少し澁つたやうな鈴の音が、チリ、チリチリンと表てで鳴り響いた。

三人はさすがに固唾を飲んだ。

宣言

表ての門の戸は、又鳴つて、閉められたらしかつた。

そしてやがて、玄關の戸が開いて、

『――御免下さい。』

と訪ふ聲がした。――擬ふ方もない、黑田の、今は斯波欣哉の聲だつた。

『あ、黑田だ。』澤野が、眼配せして貞子に云つた。『黑田だつたら、兎に角通して下さい。』

貞子は立つて、白い頰は益々白く澄ませ乍ら、眼色だけを燃やして、靜に出て行つた。

『――いらつしやいまし。』

やがて障子を明けて、彼女のさう淑かに挨拶するのが聞えた。

『あ、あの、貴女も此處にゐらしたんですか?』欣哉の、少し狼狽したらしい聲音が、續いて響いた。『辻村君は、いらつしやいますか?』

取り澄まして、冷靜を裝ひ切つた鼻聲だつた。

『はい。おいでになります。』

『それからあの、澤野君が見えて居りますでせうか?』

『はい。お見えになつておいでになります。』

『ではどうぞ、黒田が來たからと、さう仰有つて下さい。』

彼は自分の元の姓を名乘つた。

『お待ち申して居りました。どうぞお上り下さいませ。』

ぴしりとした貞子の挨拶だつた。

『さうですか。――では失禮します。』

やがて、飽く迄平氣を裝うた、欣哉の洒落れた背廣姿が、辻村と澤野の坐つて居る、そこの茶の間の閾際に現れた。――辻村は、何と思つたかその前に、奥の嬰兒の寢てゐる室を、ぴしりと閉め切つてゐた。

『――やア。』

欣哉は先づ、先に認めた澤野に、さう押し付けたやうな聲で云つた。

『――やア。』

澤野も應じた。

『失敬。』

それから欣哉は、辻村にさう云ふと共に、鳥渡頭を下げた。

『いや。――』

辻村も應じた。――凡て立つたまゝだつた。

『まア入り給へ。』

澤野がさう云つた。

『難有う。――では失敬。』欣哉は入つて來ると、入口に近く、離れて坐つた。『突然お邪魔をして、甚だ失禮とは思つたが、結局、どうせ一度は來なくちやならないと思つて、思ひ切つてやつて來た。』

『いや。――』

辻村は只腕を組んだまゝだつた。

『申し遲れて、甚だ何だが、今度は又飛んだ事で。――旅行から昨夜歸つたばかりでね。初めて知つて吃驚した。ほんとに飛んだ事だつた。』

彼はさう云つて、取つてつけたやうに、叮嚀にお辭儀をした。

『いや。どうも。……』

辻村は三度び、欝然とさう云ふのみだつた。

『澤野君には、留守中大變いろ〳〵御世話をかけたさうで、濟まなかつたと思つてゐる。』

その語調は、勿論幾分の皮肉を含んでゐた。

『いや、別に。――僕は只辻村の友達として、自分の氣の濟む事をやつただけさ。御禮は痛み入る。』

澤野も皮肉に應じた。

『時に、房子さんの位牌は何處だね。僕にも、手を合させて貰ひたいが。……』

欣哉は又辻村の方を向いた。

『いや、房子さんの位牌なら、二階の、俺の書齋だがね。――まア改めてそれにも及ぶまい。その氣があるなら、お墓へでも詣つて貰はう。』

『さうか。』と、欣哉は兼ねて覺悟したのか、眉根一つ動かさないで、只、例の白皙な顏を、紙の如く褪めさせたまゝ、『ぢやアさうしよう。――そして赤ちやんは丈夫かね？』

『あゝ、難有う。お蔭さまで、非常に健康に育ちさうだ。』

『何處に居るんだね？』

彼は、母親の里にでも、預けてあるのかと思つたらしかつた。

『奧に寢かしてある。――今よく寢てゐるところだ。』

『見せては呉れられまいかね？』

『見たいのか？』

『いや、――見せて貰へたら、見せて貰ひたいと思ふ。』

欣哉の顏には、一種不可思議な表情が浮んだ。

『だが、その必要も無からう。お互ひに。――』

辻村はぐつと腕を深く組んだ。
『だが、』欣哉は澤野の方をも見巡した。
『實は僕は、その赤ん坊の事で、相談があつて來たのだがね。』
『と云ふと？』
今度は澤野が、簡單に、併し手強く訊き返した。
『實は其件に就いて、家の者ともよく話し合つての事なんだがね。——前にあつた事は、色々甚だ濟まない事もあるが、それはもう過ぎ去つた事で、云つても返らぬ事だから、それはそれとして、尠くとも先づその生れた子は、責任上、兎も角僕が引取る事にしたいのだがね。』
『君が引取る？』
辻村は一歩詰め寄るやうにした。
『まア待ち給へ、辻村。』と澤野がそれを制して、
『では、先づ君は、その君の、房子さんに對して犯した罪を、認めると云ふのだね？』
『うむ。』欣哉はさすがに苦い顏をした。『だから其點は、甚だ濟まないと思つてゐる。が、偶然、人生の行路の上で、さう云ふ運命に立至つたのだから、もう過去は過去として、お互に諦めて貰ひたい。が、併しその結果に對して、僕が知らぬ顏をして

ゐたのは、誠に濟まなかつた。だから、改めて僕はその責任を負ふ。――房子さんの子は、僕が引取つて何とかするから、それで凡てを水に流して貰ひたい。』

『君が引取る？』辻村は又堪らなくなつて云つた。『君が引取つて、どうすると云ふんだ？　君と幸子とで、育てると云ふのか？』

『うむ。まアさうだ。其點は、決して惡いやうにはしない積りだから、まア安心して任して貰ひたい。』

『いや、馬鹿を云つては不可い。たとひ如何なる條件で、あの子を君たちに渡すとしても、君の手で、即ち君と幸子と二人の手で、育てるなんて事は迚も出來やしない。それに第一あの子は、君がどんな理由を付けようと、決して君の子ぢや無いんだ。あの子は房子さんの子だ。俺の子だ。今では俺と貞子さんの子だ。そして只單に、故人に對する責任から云つても、僕たちは君になんぞあの子を渡せるものか！』

さすがに辻村は、興奮してさう叫ぶやうに云つた。

『ふうむ。さうすると君は、どうしても僕にはその子を、渡す事が出來ないと云ふんだね？』

『さうだ。』

『そして僕の、その子の父としての權利も、認めないと云ふんだね？』

『さうだ。――だつて君は、是迄何回となく、あの子の父親である事を、自分自ら否定したぢやないか。』

『さうか、では念のために改めて訊くが、君は僕があの子の父親でないと認めるのだね？』

『さうだ。』

『君はそれを本氣で云ふのだね？』

冷然と彼は念を押した。

『勿論！』

『卑怯者！』突然、傍に聞いてゐた澤野が、さう叱呼した。『黒田、貴樣はさう云ふ辻村の言葉をいゝ事にして、今更、責任を逃れようと云ふのか？』

『いや、そんな事は無い。たゞ僕は、辻村が飽く迄さう云ふなら、さう云ふで只綺麗に、後の紛紜が無いやうに、ちやんと話を付けたいんだ。』

『話を付けるとは？』

澤野が訊ねた。

『それで何も僕が只默つて、責任を逃れようと云ふのぢやない。だが、どうしても此方で、其子を渡さずに育てたいと云ふなら、仕方が無いからかうしよう。――俺は俺で、俺の責任と

じて、其子の養育費として、茲で二萬圓出さう。だからそれで、一つ君たちの手で、心配ないやうに育て、且つ教育を施してやつて貰ひたい。其代り、もうそれつきり、お互に綺麗さつぱりと、縁を絶つて貰ひたいんだ。』

『二萬圓？』辻村は、悲しげに苦笑した。『二萬圓とは又、高くもなく低くもない、うまい値段を付けたものだね。』

『併しそれだけあれば、どうにか大學位迄はやれるだらう。』

『やれる所ぢやない。難有いお金だ。』と、辻村は嗤つて、『だがお生憎だけれど、俺達はお金なら要らない。自分たちの子供を育てる位の事はどんな事をしたつて出來るからな。たとひ百米十一秒フラツトの足で、巡査をしたつて、君たちの世話にはならない。』

『では、どうしようつて云ふんだ。――是程迄に下手に出て、俺の方から云へばいゝ氣になつて、君たちはそんなら、只、あの子を何となく君たちの手に殘して置いて、何時迄も俺の良心を惱まさうと云ふのか？』

欣哉は威丈高になつて云つた。

『バカを云ふな。――そんな風に僻むんなら、僻むのも自業自得だが、俺たちの考へはそんな下らない所にあるんぢやない。俺たちはな。生れ出たあの生命そのものを、人間そのものを愛してゐるからこそ、喜んであの子を育て上げようと云ふんだ。それに飽く迄、房子さんの分身だからこそ、忘れ形見だからこそ、愛してゐるのだ。だから君たちの手に渡して、無辜の幼いものゝ生命を、無殘に扱ふ貰子殺しの手に任ねる事なんぞは、死を賭しても出來ないんだ。――だからもう君なんぞは、急に岳父か誰かに責められて、慌てゝ責任を感じ出したり、父の權利を主張したりしないでいゝ。君は君として、まだしも飽く迄白を切つて、僕たちを對手に爭ひを續けた方が、いかにも剛愎な君らしくていゝんだ。――さア、もうかう迄云つたら、お互ひの氣持は分つたらう。分つたら歸つて呉れ給へ。そしてお互ひに、どつちが眞の人生の道を歩んだ、幸福なものであるかを、神樣に判斷して貰はう！』

辻村は、貞子の同じ興奮に滿ちた眼を、身近にはつきり意識し乍ら、さう昂然と云ひ切つた。……　（をはり）

×　×　×

（永らく愛讀を賜つた『晴曇』青春篇、是を以て一と先づ終りと致します。いづれ雨霽常なき人生篇は、近い内に筆硯を改めて、諸兄姉に見ゆる機があるだらうと存じます。豫想外な好評と共に、既知未知の方々から、多大の御聲援を賜りました事を改めて厚く御禮申します。昭和八年四月――作者）

觀相にあらはれた

馬越恭平翁

大器晩成の人

觀相家　櫻井大路

血の滲むやうな苦闘と波瀾の九十年、今大往生を遂げた、財界一代の巨頭、ビール王馬越恭平翁を私の立ち場骨相上から偲んで見る。

馬越翁は所謂大器晩成型である。口から顎にかけて一體に性格が着實で、一攫千金を夢みるやうな山かんの心持など微塵もなく、一時を僥倖するやうなことのないのが今日の大をなしたのである。翁の前半生は誠に苦しみぬいたもので『みんなやり直しだ』と元氣づけては更生の一路に驀つてゐたにも拘らず六十までは大した成功さへもしてゐなかつた程で既に普通人ならば之で一生の終りなのに、それから今日を築きあげたといつてよいのである。馬越翁の骨相は鼻から下が充分に揃つて、口が大きく肉があつて法令（鼻側から口邊への線）のすぢが一本で枝が出てをらず、顎の方に眞直に落ちてゐるのは長壽の標本型で九十までの長命をした、それから達磨大師が老年の運は專ら口をさしていふと言つた位で、口のまはりが非常に大切なもので

す。翁のやうに顎の骨が横に平たく少し長めなのは福の標本といつてよい、馬越翁と並んで財界一代の巨頭たりし澁澤、淺野、大倉さんなども同樣の型だつたこともおもしろい現象で、骨格上の一種の標本といつてよい。

昔から運、根、鈍といふが、此の大器晩成型の人は、實に努力家で、根氣がよく、終始一貫して忍耐力強く、他から見るとさほど才子には見えないものだが、篤實ですから自然に人がついて來ます。世には折角此の晩成の骨格を持ちながらも、小成に安んじて老成といふ事を心がけない爲に、大成功をしないものがあります。だから其の人の心がけ如何が大事なことになります。此の點實に馬越翁は九十の高齡で大往生するまで寸秒も休むことなき奮闘努力をつゞけられたことは古來稀に見る所で、誠に若い人たちの學ぶべき手本だと思ひます。

成功者の相

觀相家　石龍子

翁が米壽を越えて九十歳の高齡を保つたゐの健康力を物語つてゐるのは大きな兩頰骨と大きく肉づき豐かに揃つた耳です。

それに翁の樣に鼻の下から口唇までの長いのは古來長壽の符號とされてゐます。

此の健康と長壽は慥に翁が成功された第一要素であります。

顏が骨張り筋張つて盛り上つてゐますが、これは筋肉骨格が立派で、腦と内臓が頗る健康な徵です。

これは古來水夫、軍人、又は探檢家、殖民家特有の貌で不屈不撓なことをハッキリ物語るもので、これが翁が大成功した第二の要素となつてゐます。

また顎は豐かで、口唇も締り、鼻唇溝（鼻の兩脇の線）が深くハッキリしてゐて、口と顎を繞つてゐるのは嚴格と秩序整然とした性格を現はし、又家庭でも社會でも慈愛の情が豐かな證據です。そして耳が大きくて、その位置も高く、よく揃つてゐますが、かういふ人は古來人の和と福德があつて、世間も廣く賑かに渡り、よく義務を重んずる相で、翁の道德心の強大なことがよくわかります。これ翁が大成功の第三の要素と云へます。

なほ額が廣く、三紋（額の線）が整然と表はれてゐますが、これは正義と博愛の念の強いことが一目でわかります。眉毛の線が柔かで優しいのは、幼時から修養と努力を續けて來た徵で、その精進の賜物があつたればこそあの成功をかち得たのであります。

しかし、實業界の旗頭となつたほどの翁の觀相上最も重大な點は耳の上方側腦部が非常に張り切つてゐることで、貨殖、理財の力、商賣の掛引の才に素晴らしく惠まれてゐる徵です。

さて、かやうに道德、健康、意氣、愛情、智力等々惠まれた非凡の才能とを十二分に發揮眞一文字に突進み遂に實業界の巨頭の榮冠を得、更に老來益々圓熟の境に達して時代の偉人としての大風格を具へられたといふのが觀相上から見た翁であります。此の大非常時に當つて此の偉大なる人材を失つた事は國家、社會の爲めに痛惜に堪へません。

コツク君の思ひつき　林京太郎

痛快奇抜 飛切り面白讀物選

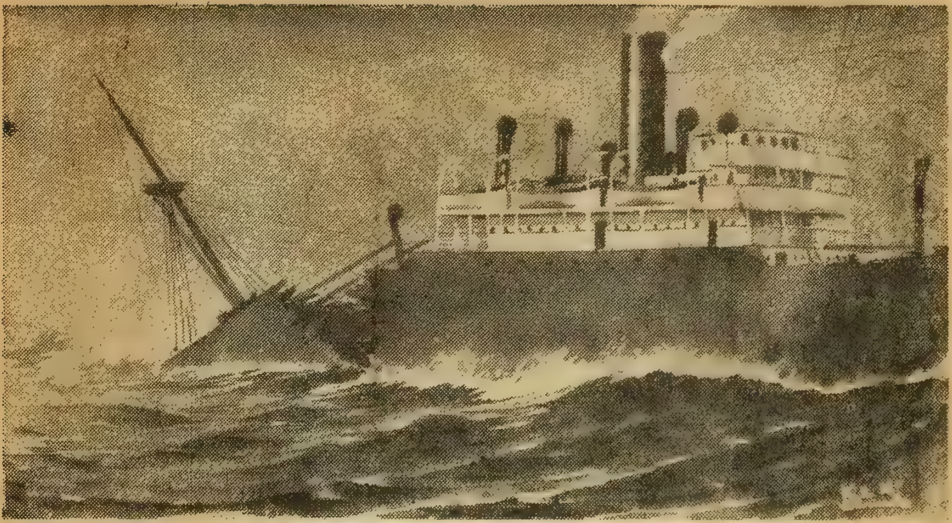
◇猛獸船の遭難……小山荘一郎

◇拳闘床屋……林家正藏

◇命の賣りもの……桃川若燕

◇越中異國譚……菊田一夫

◇敵艦を貰つた男……安藤盛



さながらの地獄!!

猛獸船の遭難

=熱帶海上に起れる空前の大事件=

小山莊一郎
椛島勝一畫

極樂船か地獄船か

印度、阿弗利加の沿岸を廻つて、大西洋へ出て、歐米へ向ふ汽船は、毎年數へ切れない程澤山あるが、その中に變つた船が二つある。

それは生きた荷物を乗せてゐる船である。

その一つの方を船乘仲間では、『鳥船』と輕く呼ぶ。そしてもう一つの方は、『猛獸船』で通つてゐる。兩方とも貨物船なぞを兼ねてるのもあり、專用のもあるが、その數は隨分ある。

これらの汽船は、いづれも、歐米の、何百箇所の動物園へ、熱帶の鳥類や、獸類を運ぶ船ではあるが、その積んでゐる生きた荷物の種類によつて、船の中の樣子はがらりと違ふ。

鳥船の方は、本當に繪にもかけないやうな美しい可愛い小鳥が、時に何千羽大きな假籠の中で、百囀りに囀つてゐる。眩いばかりの孔雀や、極彩色のやうな羽色を輝かしてゐる鸚鵡や、インコなぞの變り鳥が、船中に巾を利かせて、船内は、さながら極樂船ともいひたいくらゐだが、猛獸船の方になると、打つて變つてとても物凄い。

ちよつと油斷をすると、乘つてゐるお客さんの坊つちやんを失敬して、おやつ代りにむしやむしやと、頭から平げるのに、ものの五分もかゝらないといふ猛獸が何百も檻の中で眼を光らせ、牙をむいて、咆えたつ樣は全く恐ろしい此の世ながらの地獄船である。

歐洲大戰中はこの猛獸船の往來が中止されてゐたが、大戰の終り頃、もう大抵よからうと、この鳥船と猛獸船とを合併したやうな、特別の猛獸船が倫敦を出發した。

この口開け一番の特別猛獸船チヤタム號は、逆に、阿弗利加の猛獸産地から、印度大半島、スマトラ熱帶島と言ふ順序で、はるばる和蘭領の爪哇島までもやつて來た。そして行く先々の港で、猛獸問屋の代表達はとても慾張つて、大小さまざまの獸や鳥類を買込んだ。爪哇島の『バンユアンギ』港で、年齢百年以上の大鰐を六匹、爪哇蟒を七匹買入れ、そこをチヤタム號が出帆した時には、船の中は東京の滿員電車のやうに、猛獸や爬蟲類や熱帶鳥類とで、ぎつしり滿載されてゐた。

鳥狩の名人船長

さて、船長は、これから太平洋を横斷して巴奈馬運河

を通過し、紐育で、猛獸を半分以上賣り拂つて後、歐羅巴へ向はうといふ豫定のもとに錨を上げたが、乘組んで來てゐる倫敦の猛獸仕入屋シーモアーが、

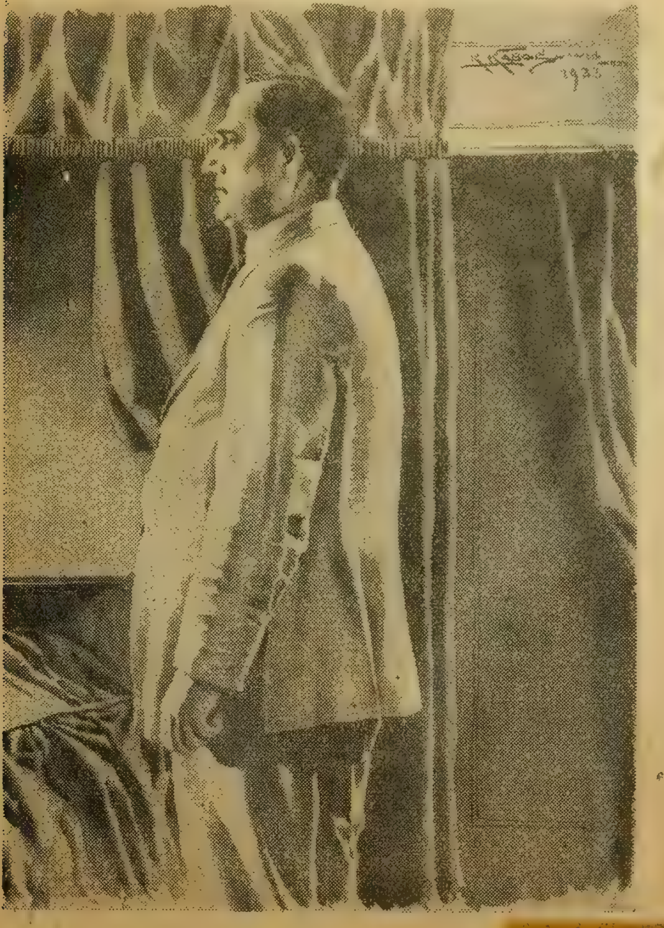
『この一番船で儲けなけりやー、死ぬまで儲ける時はありやーしませんや。』

と頑張つて言ふことをきかない。

彼は爪哇の眞東に續く恐ろしい熱帶島にだけしか居ないと云ふ一丈近い大トカゲを、どうしてもこの一番船へ積み加へて歸りたいのだつた。

年は四十を越した許り、元氣一杯の猛獸船長サツトン氏はシーモアー君に言つた。

『君、大トカゲを仕入れることは難しいよ。君が自身で上陸して大トカゲの親類見たいな人喰人種でも使つて、捕へて來るより仕方があるまい。大トカゲの出る島に生優しい所は無いからね。君は動物の仕入では玄人だが、動物の生擒にかけてはまだ迚も駄目だ。わしは大トカゲ獵には實地の經驗を持つてゐる。そのわしが云ふことだ、まあよく聞いてくれ給へ。この爪哇島から東隣のサムバワ島、コモドー島へかけて、大トカゲは確かにゐるにはゐるが、捕へるのは大變だ。カンカン照りの石山の大干割れ目から、草原へ殆ど姿を見せず魔のやうに驅け出して來る八尺トカゲの草擦の音を聞くと、鬼のやうな蠻人共でも、地面にピツタリ臥ちまふつて位恐ろしいものなんだからなあ。この船には大小の阿弗利加鰐と、印度鰐が、八、九匹も積んである。今度だけは山鰐まで慾張るのは諦めたらどうだね。』



『いや、旦那諦められませんや。まあ考へても見て下せえ。まだ世界の何處の動物園にも一丈トカゲはゐないんですぜ。だからなほさら、そのどえらい『山鰐トカゲ』てえのを、倫敦に持つて歸りてえんです。値段から言つても、普通の鰐の百倍もする代物ですからな。それからあなたへの御禮と、捕へる費用とは此際どんなにかゝつたつて決して厭ひません。なにしろ熱帶の海の島狩にかけては、[illegible]鬼船長といはれるサツトンさんぢやありませんか。その凄い巨腕をここで一番振るつて見てはどうです。』

『ハハヽヽ。わしが、熱帶の島廻りが飯より[illegible]好きなところにつけ込んで、君はまた、いやにうまく持ち込んだね。君、一口に一丈トカゲと云ふが、まあ實際捕へにかかつて見たまへ。こんな氣味の惡い、捕へにくい代物はありやーしないよ。けれども君がそれまで熱心に言ふのを知らん顔も出來まい。まあ一つ考へて見よう。だが、明日の朝まで待て。』

檻を拔け出た黑豹

[illegible]サツトン船長は、トカゲ島で通るコモドー島に立寄らうとせず、夜中のうちにその沖合を通過してしまつた。高さ一萬六千呎の深海の底から噴き上げてゐる海中大火山クノンガ・エピを右に見て、東へ東へと進んで、もすこしで世界一の人喰人種のゐる、西ニューギニアに着かうとした時、慌て出したのは猛獸商シーモアーである。

シーモアーは日が暮れるのを待ちかねて、ほつと一息休んでゐるサツトン船長のところへやつて來た。

『おい船長。この船をニューギニアへ航つてどうするんです。あそこには三四尺のトカゲしかゐないことはあなたもよく御存じぢやありませんか。』

『君、癇癪起すにはまだ早いよ。この船をニューギニアなんぞへやつてたまるものか。今我々は、アラフラ海の別天地目がけて進みつゝあるんだよ。汽船航路からうんと反れてゐるんで、航海者でも殆ど知らないが、大きな無人島さ。六年前わしはその別天地で、倒れかけた煙突のやうな、長い動物を見た。その動物の體の三分の二は草原に隱れてゐたから、大トカゲだか、蟒だか見當が附かなかつたが、君がわしと一緒にその島へ上陸したら、きつと素晴しい結果になるぜ。まあ、萬事わしに任せて置きたまへ。ハツ、ハツ、ハツ、ハツ。』

船長は悠然と笑つてゐる。

『では何時、その島へ着くんです。』

『明日の朝早く、——月世界に見るやうな瘤々山の姿が船から見えるだらうよ。』

翌朝になると海は非常な濃霧に包まれてゐる。

船の行く手が全く見えないから、とても危險で仕樣がない。猛獸船は汽笛を絶えず鳴らして、他の船との衝突を用心しながら、停つてゐるかと思はれるくらゐの遲さで航海してゐた。

ところが、不思議なことにはこの船が何だかむかつ腹を立てたやうに勝手に速力を增して來たのだ。サツトン船長は最上甲板から、眞下の海を睨んだ。

霧を透かして、わづかに見える海の面は恐ろしく漲り動いてゐる。

『潮流の非常に速い所へ乘りかかつたぞ。』

船長は側の運轉士に、

『逆航。』

と怒鳴るやうに命じた。

丁度この時である。

船首の船底からずつと船腹へかけて、乘組員全體の鼓膜が、カーンと無感覺になつてしまふやうな物凄い大音響が起ると同時に、船内に立つてゐた總ての人は、皆んな前へよろめいた。中には倒れた人もあつた。人ばかりではない。假檻の中に入つてゐた、二十頭の阿弗利加象、印度象、七頭の犀、十一頭のライオン、六頭の黑豹、七頭の河馬、十八頭のベンガル大虎、阿弗利加、印度、スマトラの大小鰐、それから大中小さまざまの蛇、蟒、四種類の毒蛇等、合計四十九匹の恐ろしい爬蟲類。そ

れに船首の方の中甲板、下甲板に積んださまざまな熱帶鳥類が八百二十一羽、これ等がこの不意の大音響に驚いてしまつたのだ。

檻の中に立つてゐた總ての猛獸は猛烈に人間同樣に前へのめつた。

そして重い象や、河馬は、假檻の羽目板や、鐵格子に、鼻面を突き當てたものも尠くなかつた。體が重いだけ、ぶつ突けた痛さも烈しい。恐ろしい猛獸共の驚きと、痛さと、不安と、憤怒と一緒になつて、一時に勃發した大騷動は、阿鼻叫喚と言はうか、猛獸地獄の出現と言はうか、とてもペンや、口では現はしにくい凄じい光景であつた。然し、大膽なる船長は少しも慌てなかつた。

『總員上へ。前甲板へ集れ。』

と、號令した。

號令は總ての下層甲板へ電話で傳へられた。同時に船長は、船橋から飛鳥の如く驅け降りて衝突の音響を眞先に起した前甲板へ突進した。

船長がまだ船の一番端へ達しないのに、船の後部の上甲板に恐ろしい新たな出來事が起つた。それは機敏な阿弗利加産の黑豹夫婦の假檻が、デッキに打ち附けてあつた檻底のボルトが除れて轉覆つたのである。

濃霧の中の急潮流の爲めに、アラフラ海の暗礁に乘上げてしまつた猛獸船が、その恐ろしい衝突と共に、船が横倒れかけると、へし曲つた假檻はデッキの上を轉がり出した。

そしてデッキの欄干で危く止まると、檻の底の壞れ目から、黑豹の雌が、無理矢理に首を出した。

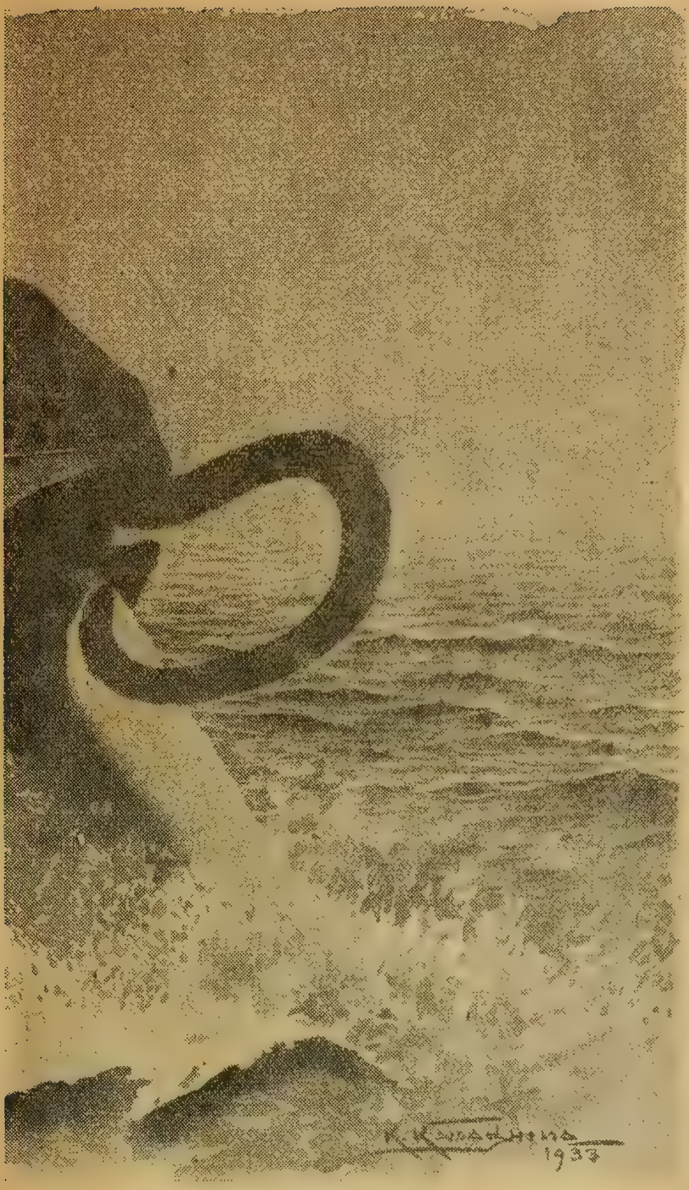
素裸かの鬼土人

眼を光らせた雌豹が、黑い體を甲板上に拔け出した時、今まで尻下がりになつてゐた船は、横に危く傾いた。欄干に引つかかつてゐた假檻は、雄の黑豹を入れたまゝ海中へ滑り落ちた。するとデッキの雌豹は夫の身の上を氣遣つて、眞白な飛沫を、睨んでゐる。檻は木の厚板の底を上にして水に浮んだ。

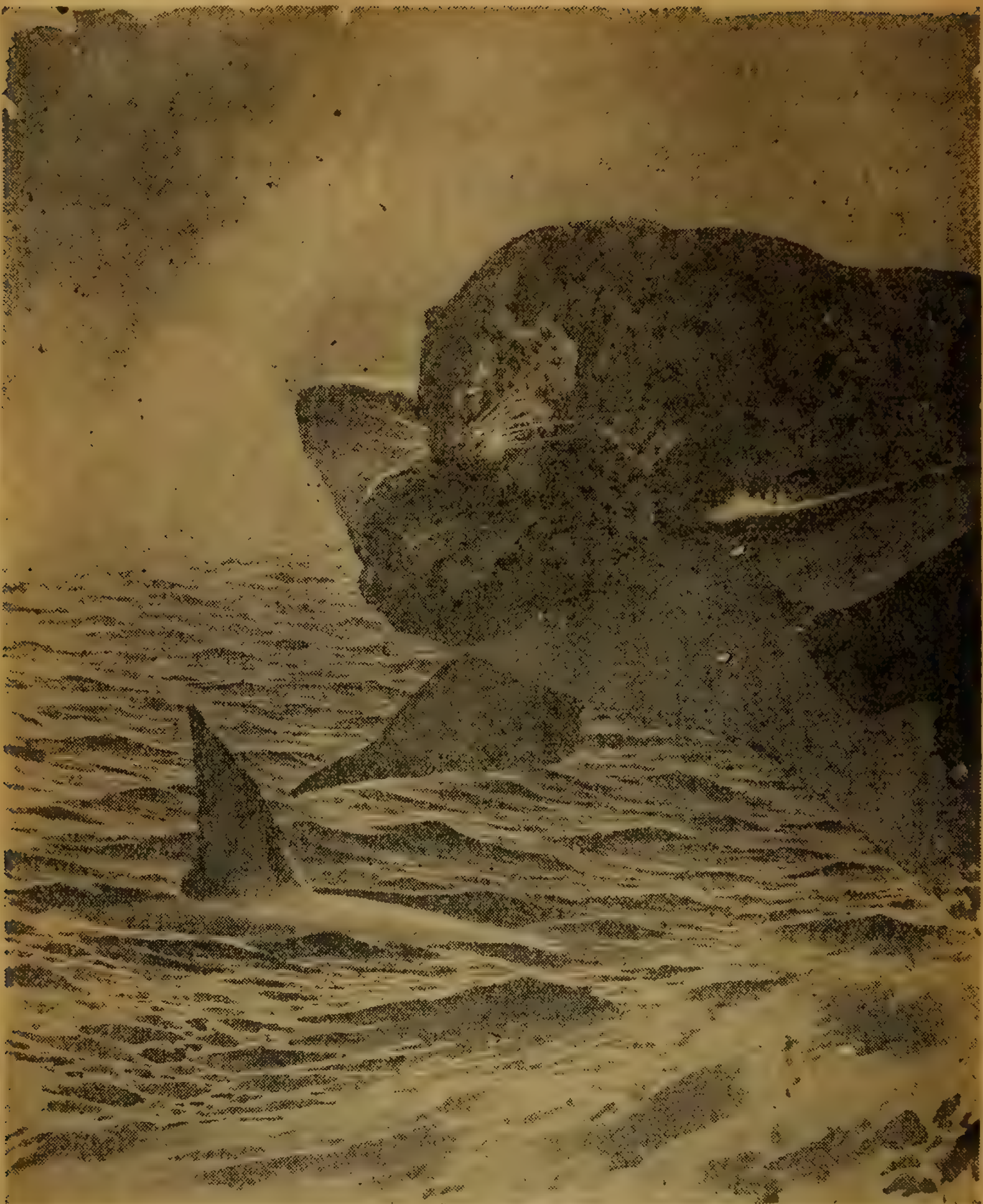
今雌が拔出た底の割れ目から、びしよ濡れの雄豹も體を長くして拔け出ると、檻は水中で回轉して、雄豹は覺えず檻から離れて、泳ぎ出した。その刹那!! 彼の體は胴から上、眞半分になつて、裂け散る白波が眞紅に染つた。

黑豹の雄は今、アラフラ海の恐ろしい荒鱶に、胴から下を喰切られたんだ。その瞬間豹の黑い上半身は、浮いてる檻に前

足でしがみ附いてゐる。
　大方異つた鱶だらう。そのあはれな上半身を喰ひ去らうと現れたが、檻が邪魔で駄目だつた。
　咽喉の所に口が附いてゐる大鱶は、水面の獲物を咬む時、どうしても背泳にならなければならない。



　大鱶が一旦白い腹を見せて、平泳ぎになると同時にその獰猛な頭を目がけて、電光の如くデッキから飛び附いたものがある。それは自分の夫が喰切られたのを見てゐた雌の黒豹だつた。白い鋭い歯は牙は、ぬるぬるの大鱶の、鼻面に、死物狂ひに咬みついた。かうなると鱶には頭の上にゐる敵を咬み返すことは無論出來ない。かう言ふ場合、鱶が精々やれることは、頭上の敵を振るひ落しておいて、一旦自分は水中に戻つて、下から咬み直すことである。だが、豹は鱶の頭から背へかけて猛烈にしがみついてゐる。その二十本の鋭い曲り爪は存分に鱶の肉に喰ひ入つてるのだからなかなか離れつこはない。
　鱶は早く水深く潜つて逃げれば、それが一番いいのだが、鼻の頭を咬み切られ



る痛さ苦しさにすつかり慌てゝしまつて、水面に出沒して狂ひ廻つてゐるうちに、機敏で利巧な黑豹は、つひに大鱶の右の眼玉をガツプリやつた。

と、一丈五、六尺もある鱶の巨體が水面上五、六尺の高さに、跳ね上がつた。黑豹はそれでも、かじり附いてゐた。水に落ちた大鱶は、今度は猛烈な水中横轉を初めた。これにはさすが身輕で、そして圖抜けて執念深い黑豹も、ほとほと、參つて來たらしい。

この猛烈な水中格鬪の眞最中、船の中の、猛獸共は如何なつたか。

大釣鐘をゴウン、ゴウン

撞き鳴らすやうな、憤怒の唸り聲か、大汽船のサイレンとごつちやになつて響き渡る中に、大小無數のけたたましい鳥の聲が加はつて何とも彼とも言ひやうもない、大騷動が現出した。

船長は、船の底が一箇所壞れても、船內總てに浸水するので、それを防ぐ爲めに區切り戶卽ち隔壁を締めさせると同時に、自分は今乘上げてゐる船首の一番前方へ驅け寄つた。そして體を船の外へ乘り出して船底の方をぢつと見下した。渦卷く波の底に暗礁は漆のやうな色をして見える。船は隨分深く暗礁に乘上げてゐるらしい。その內に朝霧もよほど薄れて來た。

暗礁の前はどうも地續きらしいのである。

ぼうつと見えるのは岩濱らしい。その岩濱に白いものがふわふわ見える。霧ぢやない煙だ。

その向ふに赤いものが、ぺろぺろ動いてゐる。それは火だ。火の側に動いてゐるものがゐる。獸ぢやない。獸のやうな人間が今火を濱で焚いてるんだ。

『彼奴らはあゝして火を焚いて此危險な暗礁を、船に向つて親切に知らせようとしてるんだな。』

船長は一時かう思つたが、すぐ思ひ直はした。

『いや、いや、輕はずみに有難がるわけにはいかない。ここは數年前自分が上陸したことのあるモルワランの大無人島の荒磯に違ひない。無人島にあの素つ裸の鬼土人！　こりやー油斷がならぬわい。』

身を引締めた船長の背後からシーモアーの聲、

『船長。この船は今ニユーギニアの岩だらけの海岸にぶつ突けたんですな。』

船體眞二つ

船長が答へようとすると、悲鳴と怒聲とが緊張した船內から混亂して聞えて來る。

『向ふは陸地ぢやないですか。皆を上陸て下さい。』

『あつ、ライオンと豹と虎が置いてある中甲板にはもう人間は居られません。彼等はみんな氣が狂つて、半分以上檻から暴れ出ました。』

『縞（印度虎）が一匹上甲板の後部で客を嚙み倒しましたから今射殺して來ました。』

『中甲板でライオンに追はれて最後部室の大窓から海に飛び込んだ機關士のギルバートは鱶にやられてしまひました。』

あちこちから驅けつけて來た人々の、息詰る報告や叫聲を、ぢつと聽いてゐる船長にドツと突當つたものがある。それは別

人のやうになつてしまつて今ここへ飛込んで來た一等運轉士グラハム君であつた。彼は左の手首を喰ひ切られてゐる。手の動脈から猛烈に血を噴く。

船長初め五人がかりで手巾を出して、その手を四ケ所も五ケ所も堅く括つて血を止める。

『船長、獨斷で、猛獸デッキ（中甲板）から上甲板への梯子の昇降口を蓋をして來ました。上甲板に私のこの手を咬み切つたやうなやつが、皆押上つて來たらこの船の人間が全滅だと思つたからです。』

『人間はもう下にはゐないか。』

『いや。まだ少しは殘つてゐます。』

『さうか。』

と言つた船長の一語には何とも言へぬ苦痛の響きがあつた。

船長はいつもに似ず非常な早口でそこに集つてゐる二十幾人の人々に云つた。

『ドクトルと看護役二人はここでグラハムに充分手當てをしてゐてくれ。それからこの船長に、船長の當然なすべき仕事を立派にさせたいと思ふ人はわたしに跟いて來てくれ。』

言ふかと思ふと船長は、ポッケットの大型自動ピストルを左手に摑み出して、さつさと後部甲板さして歩き出すと、そこにゐた殆ど總ての人々も、てんでんに護身ピストルを握りしめて、船長の後へ跟いて行く。

『船長。行つちやいけない。後部へ行つたら縞が二三匹ゐる。彼等の口はもう血だらけですぜ。ここでみんながピストルを構へ、圓陣を造つて來るやつだけを防ぐより仕方がないですぞ。おい、皆、船長を止めろ。』

手首の無い運轉士は、自分の大負傷の痛苦を忘れてかう言つた。

『グラハム。君が殘つてる一本の手で、上甲板の我々を救けようと昇降口を蓋した勇氣と好意は感謝に堪へない。が、船長としてわしは君と考へが違ふ。たとへ一人でも二人でも仲間を猛獸甲板に締込んで見殺しにすることは出來ない。君は心配せずと自分の名譽の職務負傷を充分にそこで手當してくれ給へ。わしが萬事を片附けて來るから……。』

言ひ終つた船長は大勢を伴れて後部の猛獸甲板の上の出口へ突進した。

『おい、これから我々は二つの昇降口に頑張つて、逃げ上がつて來る總ての人々を命がけで助け出すんだ。そして人間を追ひかけて來る總ての猛獸を總がかりで仕止めるんだ。いいか、確り頼むぞ。』

船醫と看護役を殘して十九人煙突の横まで驅けて來た時、ギーツと言ふ無氣味な音が二回、三回、續いて起つたと思ふと、船尾の方が水中へ降がつて行く。するとギーツと言ふ音が、ガーツと爆發するやうな大音響に變つた瞬間、おゝ、そこには何と凄まじい光景が展開されたことであらう。

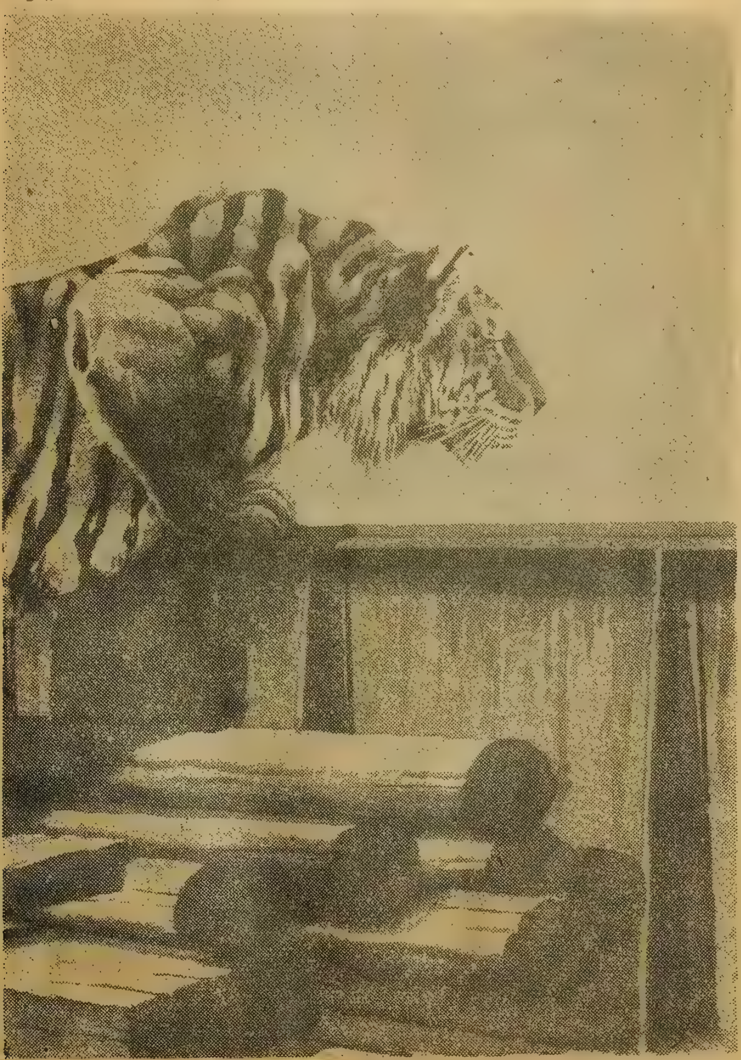
四千九百二十噸のチヤタム號の機關室と、船の後部の三分の一との境目からさながら、子供の筆入でも折るやうに、グワーツと口が開いて、割れ落ち出したのだ。

この時さすがに十九人は落潮の爲めに割れ落ちる船體の方に足を蹈みかけてゐなかつた。

『危ない。止まれ。』

と船長が怒鳴つた時は十九人は大暗礁に乘上げたまゝ、退潮に置いてけぼりを喰ふ船體の方に踏止まつた。

十九人はその殘された三分の二の船體から海に呑まれて行く大割れ目を瞰下した。



船體が二つに分離する前、分離した三分の一が沈沒する前、殆んど逆立ちになつた猛獸甲板を、船の大割れ目に攀登つて海へ飛び込んだのは、眞先にベンガル虎であつた。

次ぎは血だらけの豹と黒豹、その次ぎがライオン三頭、これらは皆假檻を暴れ出て、直立する甲板を、無理矢理に這ひ登つて、海に逃げた猛獸中の大勇者である。

犀や、河馬や、象は一頭も出て來なかつた。體の大きい連中は、船體の三分の一と一緒に七百尋の深い海底に、姿も見せず沈んでしまつた。その跡の海面には船の機械油が薄うく浮いてただけであつた。

不意の毒矢

が、河馬や、象や、犀の方が、機敏に海へ飛込んだ連中より仕合せであつたかも知れない。豹や、虎や、ライオンなどは、霧の晴れない前に、一筋の毛さへ殘さず無數の大鱶に平らげられた。さつきの黒豹夫婦と同じやうに、みんな潮水を血に染めて消えて失くなつてしまつたからだ。

チヤタム號は人間ならば膝から下を斬取られたも同様な、身動きならぬ船の死骸となつてしまつた。

大膽無類のサツトン船長も、堅く唇を嚙み締めて、グラハム運轉士の所へ戻つて來た。

十九人も無論そこへ集つた。
『船長、早く陸地へ上がらせて下さい。あそこに土人も見えるぢやありませんか。』
體も心も疲れ果てたシーモアーは、これだけ言ふのが關の山だつた。
『いやその土人が厄介なんだ。ひよつとするとこの邊の土人は鱶より恐ろしいぞ。』
この問答が終りきらないのに、シーモアーは今まで倚りかゝつてゐた船首の鐵欄干から俯向きにデツキに倒れるなり全身を振るはしてのた打ち廻る。
彼の背中には變な木の矢が突つ立つてゐる。
『人喰土人の毒矢だ。みんな横になれ。』
船長は叫んだ。その船長の横鬢を掠つて、危い二の矢が飛び去つた。
危險でゐられなくなつたから、シーモアーと、グラハム運轉士とを介抱しながら、みんな中甲板の安全な船室へ降りて來た。
そこで船醫が充分の手當をしたが、シーモアーは助からなかつた。
モルワラン島の土人も、居据つてゐる、幸ひに船中まではその日は襲來して來なかつた。
日が暮れるのを待つて船長は、この時まで、船の後部上甲板の一部に、最も嚴重な假檻に入れた氣の荒い阿弗利加象を二頭、大勢がかりで檻のまゝ大暗礁の上へ降ろした。そして二頭とも檻から解放した。
それを見すまして、船長以下はまた中甲板の船室へ戻つて船の窓から、二頭の荒象の行衛を見守つた。
遠攻めの形で、岩濱にかがり火を焚いて、集つてゐた島の土人達は、七八十人總立ちになつた。弓矢を持たないものは變な恰好の槍を摑んでゐた。
彼等は、昂奮しきつてゐる阿弗利加象の、何哩先までも聞えるやうな咆哮り聲に膽をつぶした。しかもその聲の主はこの島で一番大きな生物として恐れてゐる大トカゲの何十倍もあつた。それこそ本當に生れて初めて見る異樣な恰好だつた。暗をすかして一見した彼等は覺えず、後方にたじたじとなつたが、さすが一齊に蹈み止まつて、この思ひがけなき大敵に向つてお得意の毒矢を雨のやうに射かけたのである。が、總ての毒矢は大象の厚い皮膚には一本も立たなかつた。
槍を持つて突つかかつた鬼土人の二人は、唸りを立て、振廻す大象の大鼻に二人とも横面を張り倒されて、首の骨を碎かれ、血を吐いて息絶えた。
これを見た土人達はもうとても敵はぬと諦めたらしくみんな島深く逃げ去つてしまつた。
船長以下は船の内で、十二分に土人と戰ふ仕度をして翌朝島

へ上陸した。そして三日もたたないうちに、島全體を征服してしまつた。

今現に彼はモルワランの大トカゲ島の支配者となつてゐるが、島中の土人も彼のことをいまだに『船長、船長』と呼んでゐるさうである。

この島で毎年猛獸商シーモアーが、土人の毒矢に當つて死んだ日が來ると、船長は島の大トカゲの革で拵へた、奇々怪々な獵衣を着込んで、頭にはトカゲの奇態な帽子を被り、死んだ人を記念する爲めに島中總がかりの大トカゲ狩をやるさうである。その時はもうすつかり人馴れがしてゐる二頭の象がお伴をするさうだ。

この島のまだ世界に知られない一丈二尺の大トカゲは、世界に知れてゐるコモドー島の大トカゲのやうに、やつぱり豚が大好きであるとのことである。

月世界のやうな高い高い大瘤山の山峽に、巧みに誘ひ込まれた大トカゲが、小豚を一口に呑み込む……大トカゲは猛獸のやうに獲物を喰ひ切つて喰べない、彼は蛇のやうに呑む……ところを、このモルワラン島の王樣である、ありし昔の船長サツトン君が、二連發獵銃で、ものの見事にトカゲを仕止める手際はなかなか冴えたものであるとのことである。

この話は、去年の春、北濠洲の海岸に、アラフラ海から流れ着いた漂流者の直話であるが、何しろ漂流者のことだから、これを根掘り葉掘り聞いた濠洲政府の役人もこれ以上詳しくは今のところ分りかねるさうだ。

たゞ、ここでは……『行衞不明』の四字だけで葬られてしまつてゐる世界中の多くの汽船の中には、このやうな目に逢つてゐる汽船もあると言ふことを、讀者諸君に知つて頂きたいのである。

（完）

キングレコードの大傑作

大日本雄辯會講談社編修發行
十吋一枚一圓五十錢
全國蓄音器店ニ有リ

落語

拳鬪床屋

林家正藏

清水對岳坊畫

『失敗つた。今朝床屋へ行くのを忘れちまつたぞ。出先だが仕方がない、オヤ此處に床屋があるな。エ、今日は――結構なお天氣で。』

『そんな事は俺の故ぢやねエ。』

『エヘ、へ。親方かね、貴下は。』

『よく見ろ、こんな頭の禿げた眼のくぼんだ齒の抜けた小僧があるか。何だお前は、下駄でも持つて行かうてのか。』

『下駄泥棒ぢやねエよ。』

『何しにやつて來たんだ。』

『一ツやつて貰ひたいんで。』

『何をやるんだエ。』

『頭だよ。頭を一ツやつて貰ひたいんだ。』

『一ツとことわらなくつたつて、人間の頭は大槪一ツだ。それともお前さんは豫備にもう一ツ頭があるのかエ。』

『冗談言つちやいけねエ。何うだらう、直ぐやつて貰へるかね。』

『やる、やるつて何處へ配達するんだエ、運送屋ならこゝから三軒目だが。』

『困つたな。いゝえ、さうぢやねエんで。頭をこしらへて貰ひてエんですよ。』

『お氣の毒だが俺の家は人形屋ぢやないから、頭は出來ねエ。』

『エへ、へ、。好い男にして貰ひたいん

だよ。』

『こりや闘々しい野郎が來やがつたな。お前さん鏡を見た事があるかい。』

『そりやあるさ。』

『そんならその面が、何う肥料をやつたつてそれより育たねエ事位解りさうな物だがな。』

『人の顏をトマトと間違へちやいけねエ。解らない人だな。ではまた來まさア、さやうなら。』

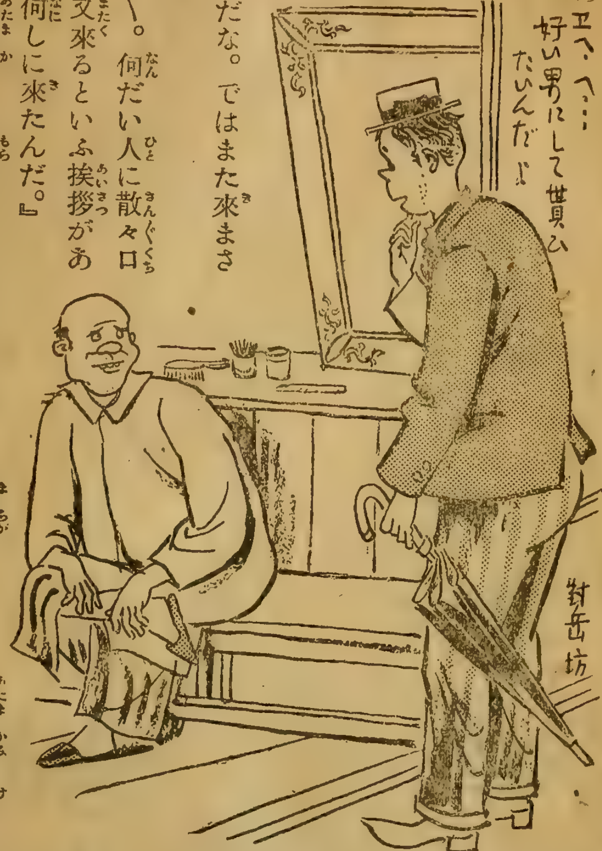
『オイ〳〵待て〳〵。何だい人に散々口をきかせて置いて又來るといふ挨拶があるか。一體お前は何しに來たんだ。』

『だからさ。この頭を刈つて貰ひたいんだよ。』

『そいつは困つたな。』

『困つた？ だつてお前さんの家は床屋だらう。』

『そりや床屋だ。然しそんな頭を買つたところで、火鉢にもならねエし植木鉢にもならねエ。』



『あれ、まだ間違つてゐる。頭の髮の毛を刈取つて貰ひたいんで。』

『それならさうと何故早くさう言はないんだ。』

『先刻から言つてるぢやねエか。では出來るかね。』

『何だと？』

『だから、出來るか――てエんで。』

『この野郎、出來るか出來ねエか表の看板を見たら解るだらう。此方へ入ンねエ。』

『驚いたナ。では直ぐやつて貰へるね。』

『大概見たら解りさうなものぢやねエか俺は斯うして先刻から往來を眺めながら顎の髯を拔いてゐるんだ。客を待たして顎の髯を拔いてゐられるかッンだ。』『へエ。』『何うもお前さんは男のくせにお喋りだな。大體こゝへ默つて入つて來て、默つてこの腰掛へ腰をかけさへすればそれでいゝんだ。さうすれば私の方で默つてゐても髭も剃るし頭の髮も刈る。何事も超高速度時代だぜ。』

『なるほどね。なか〳〵親方はモダンだね。ところでお湯はあるかね。』

『何うするんだ。辨當でも食ふのかね。』

『冗談言つちやいけねエ。床屋へ辨當を持つて來る奴があるものか。顔を濕すお湯だよ。』

『自家では顔を濕すのはみんな水だ。好い若い者が何だ、湯だなンて贅澤言ひなさんな。滿洲へ行つてゐる軍人の事を考へて見るが好い、水で濕すのも勿體ない位だ。』

『鉛筆を削るンぢやねエよ。顔を剃るんだぜ。湯水で濕さずにやられちやあ……』

『一體頭寒足熱といつて人間の頭は冷す程好いんだ。サア水で澤山々々。』

『ペツ／＼。待つて呉れ親方。さう緣日の植木へ打ツかけるやうに打つかけられちや耐らねエ、それに親方この水はその水瓶の中の水かい。』

『さうだよ。それが何うかしたかね。』

『何うかしたかぢやねエぜ。その水瓶には青苔が生えてゐるぢやねエか。隨分古いんだらう。』

『いや、さう大して古くもない。』

『何時頃汲み込んだ水だね。』

『サア——あれは昭和だつたかな。』

『不可ねエ／＼。大正年間に汲み込んだ水なんてのは困る。オイ／＼小僧さん、濟まねエが、清潔な水を汲んで來て呉れ。』

『冗談言つちやいけねエ。俺の所の小僧は仕事を覺えるために居るんで、水を汲むために置いてあるんぢやねエ。それ程新しい水が欲しければ、自分で行つて汲んで來なせエ。この直ぐ裏に井戸があるから。序にバケツに二三杯頼む。』

『冗談ぢやねエ。好いよ／＼、この水で結構だ。我慢する／＼。』

『さう來なくつちやいけねエ。滿洲に居る我が軍人の……』

『解つた／＼。ヤア／＼親方、この水瓶の中には何だか浮いたり沈んだりしてる

ろぜ。』
『うん、盛に活動してゐるよ。』
『何だい、これは。』
『ボーフラさ。ボーフラや蚊になるまでの浮き沈み――といつて、これでもなかなか苦勞してゐるんだ。』
『ボーフラに同情してゐちや困るな。何とかならねエかね、このボーフラを。』
『さういふ所で人間の馬鹿と利巧がはつきり解るな。何でもないぢやないか。傍に洋杖があるだらう。それでその水瓶の端をトン〳〵と叩くと、ボーフラは驚いてみんな沈んでしまふ。その隙を狙つてチヨイ〳〵顏を濕すんだ。』
『何うも際どい藝當をやるんだな。然しなるほど斯うしてトン〳〵と叩くと、アハハみんなボーフラめ沈んぢまやがつた。面白い〳〵。』
『お前さん、ボーフラ見物に來たのかい。』
『誰がボーフラなんか見物に來る奴があるもんか。』『では早く此方へ來なせエ。』
『あ、いけねエ。ボーフラが二三匹髭の間に

附着いて來た。』
『大丈夫だ。ボーフラは食ひつかねエから。』
『ではお願ひしますぜ。』
『よし。斯う引受けたからにはもう此方のものだ。何うしようと此方の勝手だ。』
『何だか胸騒ぎのする言葉だね。』
『大丈夫だ。心配しねエで靜かにしてゐなせエ。第一もう心配しても追つかねエ。』
『エヽ?』
『大丈夫だつて事さ。オイ奴々――また居眠りをしてゐやがる。手前も毎日々々幾ら稽古だからといつて、炮烙の尻ばかり削つてゐるのぢや張合があるめエ。偶には生きた人間の面を削つてみろ。』
『モシ親方々々――』
『うるせエな。サア此處へ來い。こりや少し大振りだから稽古には持つ

て來いといふ面だ。サア此處へ來てやつてみろ。』

『稽古？ モシ親方、私は錢を拂ふんだよ。』

『當然よ。誰がこんな面積の廣い面を無代でやる奴があるかい。サア奴、やつてみろ〱。』

『あれ到頭小僧がやつて來たぜ。だが顏の割に恐ろしい背の高い子供だな。オイ〱小僧さん、お前幾つだい。』『九歳だよ。』

『九歳？ 九歳にしては背が馬鹿に高いな。』

『足駄を穿いてるんだよ。』

『足駄を？ アツなるほど。だが隨分高い足駄だな。そんな足駄を穿いてゐてよく轉ばないね。』『ナアニ、チョイ〱轉ぶよ。』

『チョイ〱轉ぶ？ その剃刀を持つた儘でか。』

『この間轉ぶ拍子にお客さまの咽喉笛を切つた。』『エヽツ、待つて呉れ。今日は轉ばないやうに賴むぜ、いゝか。』

『だけど正午の警笛が鳴ると何時も轉ぶ。』

『オイ〱、あと三十分で十二時だぜ。驚いたなこりや。然しウム〱却々馬鹿に出來ないぞ。身體は小さいが流石は親方がやかましいだけあつて一寸も痛くない。』

『お客さん、痛くない筈だよ。まだやらないんだもの。サア愈々これからだよ、ソレ。』

『アイタヽタヽタ――待つて呉れ〱。こりや痛え、オヽ痛え。』

『ヤイ〱奴。何をしてやがるんだ。ビク〱するからいけねエんだ、間拔め。度胸を据ゑろ、人間だと思ふな。炮烙の尻だと思へ。』

『冗談言つちやいけねエ。炮烙の尻と一緒にされて耐るか。』

『サア退け〳〵。俺のやるのをよく見てゐるんだ。いゝか、オヤこんな剃刀で人間の面が剃れるか。こりや足駄の歯を削る上りの剃刀ぢやねエか。なるほどこれでは痛からう、アハヽヽ。』

『オイ〳〵親方。では下駄の歯を削る剃刀で私の顔を剃つたのかい。私はもう歸る。』

『惡氣でやつたんぢやない。間違へたんだ。』

『幾ら間違へたといつたつて、下駄の歯と人間の顔と――兎に角もう澤山だ。』

『さうはいかねエ。お前さんの方は澤山でも、まだ此方は澤山ぢやねエ。何しろ一旦此方へ預かつたからには、何とかしねエ中は歸さねエ。』

『捕虜だね。だが親方、私はこれでも生きてゐるんだからね。』

『解つてゐる。呼吸があると思へばこそ剃刀で剃つてゐるんだ。死んでゐるんならこの儘煮湯へ突込んぢまふ。』

『鶏を料理するんぢやないよ。』

『サア小僧その剃刀を持つて來い。ヨシヨシ。サアよく見て居ろ。斯ういふ客は、フリの客で二度とは來ねエ客だ。だからウンと膽を据ゑてやらなくつちやいけねエ。髭なんざア半分位殘つたつて構はねエ。』『オイ半分ぢや困るよ。』

『默つて〳〵。ゴリ〳〵逆剃りでやつちまふ方が早いんだ。そりや痛いには痛いが、痛いのは客が痛いんだから心配するな。』（ツーツーツー）

『アイタ〳〵。痛エ痛エ。』

『よく痛エ〳〵といふ男だな。それに剃るたンびにさう動くと剃刀が止まらないから咽喉佛に氣をつけて呉れ。』

『もう止すよ。ヘンな心持になつて來た。』

『さうはいかねエ。任された身體だ。俺が好いやうにするから。』

『この上好いやうにされて耐るものか。』

『泣聲を出しなさんな。お前も好い若い者ぢやねエか。滿洲へ行つて見ろ。戰爭

で弾丸に當つて死ぬ人さへある。』
『戰爭と床屋と一緒にされちやゝり切れねエ。何しろお手柔かに頼みますぜ。』
『大丈夫だ。殺しやしないから。』
『殺されて耐るか。』『さあ、オイ小僧よく見ろ。俺の手許を見ろといふンだ。ナニ？ このお客の鼻は妙な形だと？ 何を言やがる。こりやお前胡坐をかいてるんで生涯直らねエ。』
『アレ、さう鼻を引張つちや痛エよ。』
『サアよく見るんだ、いゝか。アレおい小僧、何故さう傍見ばかりしてやがるンだ。この野郎め。』（ポカリ）『アイテーツ。』『俺の仕事を見て居なけりや何時までたつても一人前にやなれねエぞ、間抜けめ。』（ポカリ）
『アイテーツ。親方少し待つて呉れ。お前さん叱言は小僧に言つて、拳固は私の頭だよ。』『あゝ、さうか。道理で頭が近い所にあると思つた。』
『冗談言つちやいけねエ。小僧さんは兎に角として早くやつて貰ひてエな。』
『ぢやまあ仕方がねエ。もう十二時だ。臺所へ行つて湯でも沸せ。』
『有難エ〳〵。これで毆られるのだけは助かつた。』『ヤア濟まない〳〵。』
『親方は全く威勢が好いね。そんな具合ぢやさぞ勝負事が好きだらうね。』
『勝負事？ 勝負事は勝負事だが、私の好きなのはスポーツだよ。』
『スポーツ？ ホイ、これはハイカラだな。では野球かね。』
『野球なんかもう卒業しちまつて、近頃では拳闘に凝つてゐる。』
『拳闘？ あの土左衛門の手袋みたいなものを穿めて、ポン〳〵ブン毆る、あれかい。』
『さう簡單に言ふが、あれで却々面白いものさ。第一もう一流の選手となると、却々さうポン〳〵毆らせないな。』
『さうかね。』『さうとも。先づ斯う左の顎突上（アッパー・カット）が入る……』
『アイテヽテヽ。何だつて親方、突然に私の顎を突き上げるんだ。』
『ところがそれが一流選手になると、パツと斯う右の手で避ける。』
『危ねエ〳〵。親方の右の手にや剃刀を持つてゐる。』
『すると敵もさる者さ、直ぐ反對に左頰打（フック）。』
『イテーツ。横面を張りつけちや……』
『ところがそれも右の手で避ける。』
『アツ。アーツ。いけねエ。親方、お前さん私の眉毛を片方スーツと落しちまつたぢやありませんか。』
『ヤア――こりや失敗つた。お前が早く避けねエから……』
『冗談言つちや不可ない。私は呉服屋の番頭だが、眉毛を片方落されたんでは、今日からお店へ出る事が出來ない。』
『なるほど。では斯うしなせエ。當分店番は横を向いて坐るに限る。』（をはり）

肺結核は治る

—要は治療法如何にある—

★肺結核治療の要諦

元來肺結核は不治の病として一般に恐れられて居ましたが、現代の進步した醫學に於ては決して不治ではない事が立證されて居ります。然しながらこの結核菌は猛烈な繁殖力を有して居りますので從來の所謂對症療法ではどうしても思はしい効果が得られなかつたのであります。

ところが我々が日常呼吸して居る空氣中には多數の結核菌があつて、之を吸込んで居るにかゝはらず、全身に抵抗力を有つて居る健康者は決して肺病や肋膜に罹らないと云ふ事實によつて見ますと、先づ對症療法よりも榮養療法を採り、白血球の活動を盛んにし、全身の抵抗力を養成し、結核菌に蝕ばまれた病竈を新生せる結締組織で包圍してしまふ事によつて病菌を殺し極めて自然的に治癒させる事が最も合理的な結核治療法であると云ふ事が出來ます。これが最近の醫學界に於て榮養療法が頻りに唱へられて來たわけでありますが、臨床醫學の常に當惑する事は即ち如何にしたら榮養をよくする事が出來るかと云ふ事で、この一事が肺結核治療の鍵であります。

★合理的榮養强壯劑とは

然らば何が一番合理的な榮養劑であるかと云ふと、現在に於てはやはり細菌學、病理學界の權威として世界的に名聲を博して居る、醫學博士山內保先生の創見された榮養促進法が最も信用の置けるものでありませう。

山內博士は有名な巴里パストール研究所に於て、醫聖メチニコフ博士指導の下に苦心研究される事十餘年、數多い實驗の結果、健康的血液を增生する最も合理的な結核榮養劑『ブレーヴロール』を完成されたのです。

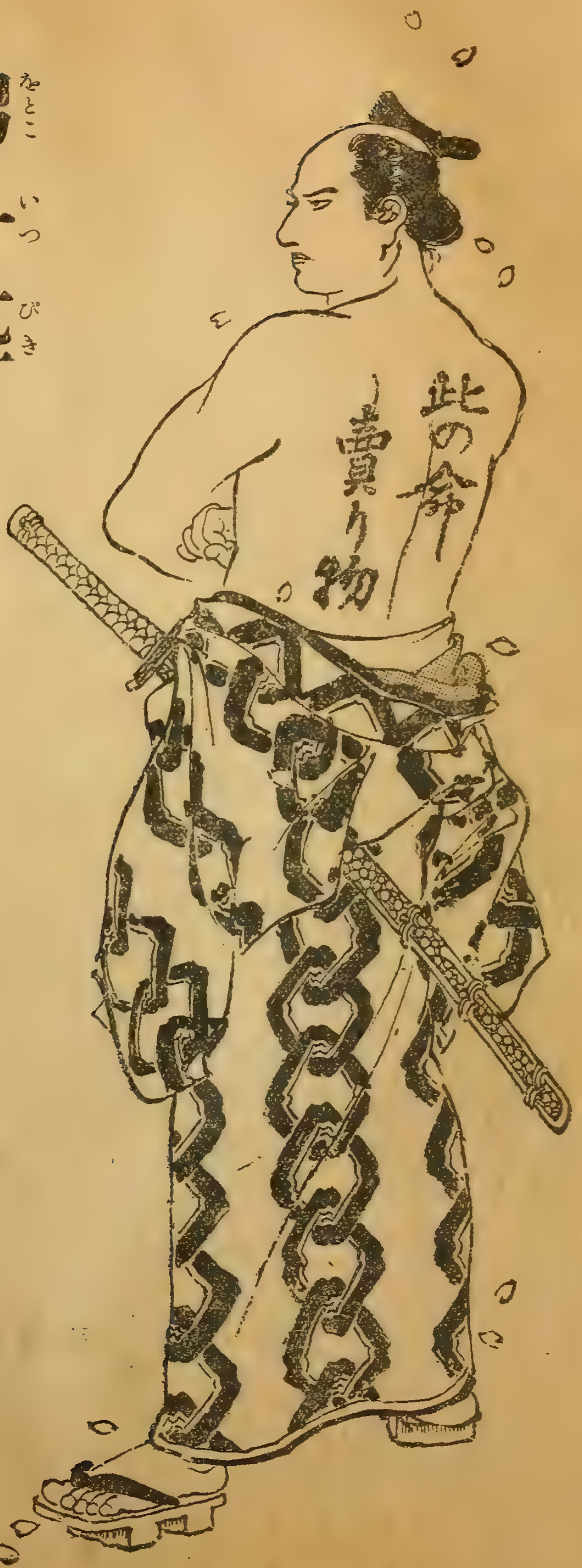
この『ブレーヴロール』は即ち、血液の要素を多量に含有し、內臟組織、神經實質の主成分を包含し、生命の原動力なる神經系統、殊に胃腸等の榮養を司る內臟組織の細胞に活力を與へ、全身の機能を旺盛にする特殊藥を配劑し、而も普通容易に消化し難き是等の各成分を容易に消化吸收せられる狀態とし、どんなに消化機能が衰弱し、食慾が減退してゐる患者でも愛飮する事が出來る樣に、非常に美味芳香を加味させてある滋養强壯劑でありますから、肺結核は勿論の事、肋膜炎、貧血症、老衰病、婦人病、精力減退、神經衰弱、榮養不良、虛弱腺病質等の治癒促進には、無比の榮養强壯劑と云ふ事が出來ます。

この『ブレーヴロール』の發見こそ肺結核治療に一大革命を齎したもので肺結核患者にとつては非常なる福音であります。

『ブレーヴロール』は約三百瓦入一瓶二圓八十錢ですから、全國有名な藥店、百貨店藥品部でお求め下さい。若し品切れの節は送料內地三十三錢、領土六十二錢を添へ、東京本鄉・大日本雄辯會講談社藥品部(振替東京六六二九)へ御注文下さい。

男一匹「命の賣りもの」

桃川若燕
井川洗厓畫



千兩の命に百兩の手附

白鬼の權六は、肌を脱ぐと背中一ぱいに「此の命賣りもの」といふ、きび〱した刺靑があつた。

○「權六、其方の命は賣り物か。」

權「看板通りぢや。」

○「幾らで賣る。」

權「相手次第ぢや、相手の出やうに依つては、金を山と積まうと賣らぬ、又事と次第に依つては只でも賣る、乃公の命は氣で賣るのぢや。」といつてニッコリ笑ふ。

權六はまだ年は二十五六、色のクッキリと白い、繪から脱出したやうな美男、權六の往來姿を見れば、若い娘達はその後を慕つて歩いて、止まるところを知らないといふほどに、浮氣女のあこがれの的となつてゐた。が、當の權六、それには目も掛けず、ニッコリともすることはなかつた。併し武者ぶるひしたが最後、六尺有餘の大男五六人、一度にかゝつてもびくともせず、手玉に取るほどの武勇の持主であります。色の白い、鬼のやうな男といふところから誰がつけるともなく、人が白鬼の權六と呼ぶやうになつた。

權六は元は九州の武士、大小を捨てゝ俠客になつた。德川の末期、旗本の風紀は頽れ、强きを挫き、弱きを助けるといふのを看板の俠客も、その俠氣は只名のみで、博奕を本業のやうにしてゐる似非俠客、その俠客と旗本との葛藤は日を追うて烈しくなつて行く、その間にあつて權六は、何方にも附かず、自分の思ひの儘に振舞つて、天下の往來狹しと濶步して居ります。

ある日、本所の北割下水に屋敷のある、旗本の內でもその頃亂暴者の一人に算へられた宍戸平十郎の所から、家來を使にして、京橋の權六の家へ迎ひが來た。氣のさくい權六は直ぐに宍戸の屋敷へ出て行つた。平十郎の側には同じ小ッ旗本仲間の、同氣求むる惡武士が五六人、一座となつて酒宴を開いてゐた。

『白鬼の權六にございます、態〻のお使ひ、何の御用でございますか。』と輕く會釋をした。

平「おゝ權六か、よう參つた、先づ一杯飲め。」平十郎

は自分の前の盃をグッと乾して權六に差した。權六はその盃を受けて、滿々と酌がれた酒を、一息に飮んで平十郎に返した。

權『して御用と仰しやるは……』

平『申すまでもない、其方の看板、命を賣ると聞いて呼び寄せた、確と賣るのか。』

權『看板に僞りはございませぬ。』

平『ウム、然らば其方の命買はう、賣つて吳りやれ。』

權『賣れとあれば賣りませうが、買つてこの命、何に使ひなさる。』

平『少し入用あつてぢや。』

權『少し入用ぢや分りませぬ、その入用の途に依つては折角の望みでも賣ることはお斷りぢや、何に使ひなさる、新刀の試し物か、それとも私の命を買つて、一生自由にしようといふ女でもあつて、その取持か、アハヽヽヽ。』

吹き飛ばしさうな大きな聲で笑つてケロリとしてゐる。

平『權六、冗談は措け、眞實其方の命が些と入用ぢや、賣つて吳りやれ。』

權『サ、賣り物ゆゑ賣りもいたしますが、今申した通り、使ひ途に依つてはお斷りぢや、何に使ひなさる。』

平『其方は駒形の武藏屋重兵衛を存じてをるか。』

權『まだ會つたことはございませぬが、名前は聞いて居ります。どうやら旦那方とは、近頃仲の惡い樣子……』

平『申す通りぢや、重兵衛を初め身内の者共、事毎に吾々旗本

に逆つて、無禮の數々、捨置けぬ奴ぢや。そこで其方に頼みといふは、その重兵衛の首、其方に取つて貰ひたいといふのが頼みぢや、なれど、重兵衛めは中々の腕前、又隨ふ町奴と稱へる者共も、腕前の勝れた者が多いとのこと、萬一仕損じたら其方の命はないものぢや、その命、この宍戸平十郎に賣つては呉れまいか。』

　權六はハタと膝を打つた。

權『では重兵衛の首を取るか、權六の命を捨てるか、首と命の賭け事か。』

平『如何にも……』

權『面白いツ、引受けた、頼みが面白い、相手に依つては引受けませぬが、先方は今賣出しの武藏屋重兵衛、旗本衆が寄つてたかつて掛つても敵はぬ、男の中の男といはれる、その重兵衛と、命と命の取合なら、腕が鳴つて面白い、引受けた、ウンと呑込みました。』

　權六はトンと平手で胸をたゝいた。

平『併し權六、相手は武士も及ばぬ腕前、大丈夫か。』

權『サアその武士の旗本衆が、大勢寄つても敵はねばこそ、この命を買つての頼み、先づ權六の腕は、旗本衆に勝れてゐる筈、その腕を見込んで態々の頼みが權六トンと氣に入つた、お引受け申す。』といひながら居列ぶ人の顏をズイと見渡してニヤリと笑つた。平十郎も他の旗本達も嫌な顏をした。何も自分達が寄つてたかつて敵はぬから、重兵衛の首を取つてくれと權六に賴んだのではない。けれども自尊心の高い權六は、一人でさう定めての呑込み顏。

平『では權六、重兵衞の首、必らず取つて見せるか。』
權『必らず取るか取れぬか、權六の命を捨てるつもりなら取れませうわい。』
平『では確と其方の命、宍戸平十郎が買つたぞ。』
權『ヘエ、確かに賣りました。』
平『して代價は何程ぢや。』
權『千兩さね。』
平『ナニ千兩……』平十郎は眼をみはつた。
權『高いかね、人間の命は千兩でも買へぬといふのを、グツと負けて千兩、それとも千兩の金がねえといふなら、命の買ひツ振が氣に入つた、幾らかくらとはいひませぬ、出したいだけお出しなせえ。』
人を人とも思はぬ度胸、ズバ〳〵といつてのけた。
平『ウム、これだけ持つて參れ。』
平十郎は手文庫の中から取出した金包み二つ、ポンと權六の前へ投つた。
權『殿樣、こりやア百兩だね、百兩の抵當に編笠一蓋といふ比喩もあるから、千兩の抵當に百兩も仕方がねえ、無いよりは增し、歸りに困つてゐる者があつたら、施してやりませうよ。』といひつゝ、五十兩包みを二つ、手に取つて懷へ收めた。
權『では殿樣、お賴みはそれだけですかね。』
平『おゝツ、必らず賴んだぞ。』
權『男が男への賴み、御念には及びませぬ――では殿樣、御免なせえまし。』
平『マア宜いではないか、一杯飮め。』
權『ナーニ酒を飮みに來たのぢやございませぬ、お愛想に一杯は頂いたが、殿樣から飮ませて頂かねえでも、飮みたけりやア一人で買つて飮む、權六は御馳走酒は大嫌ひさ。』
平『强い挨拶ぢやの。』
權『アツハツハヽヽヽ、失禮をいたしました。』
口の憎い奴だと、旗本の連中は權六の顏を睨むやうに見た。
それを後目に掛けて權六は、肩で風を切るやうにしてその場を去つた。
『憎くき口の奴……ぢやが氣味の好い奴ぢや、喃笠原……』
『いかさま、あの度胸があれば重兵衞を……』
『おゝ殺らうも知れぬて。』
又盃は交されて、一しきり雜談に花が咲きました。

阿房陀羅坊主の玄哲

その頃、淺草の駒形河岸にゐて、諸侯への人入稼業、似非俠

客の多い中に、これこそ眞の俠客と、謳はれてゐる武藏屋重兵衞、その娘のおみつは、年は十八、色のクッキリと白い、眼の涼しい、やさしい中にもキリヽとした顔だち、結綿に結つた島田がしつくり合つて、たまらなく粹に見えて、生意氣に走らないといふ、手數のかゝつた下町風の娘。

暑い晩でした。おみつは門口に出て、縁臺に腰を掛けて、川から吹いて來る風に當つて涼んでゐた。

と、チヤラポコ〲と、木魚をたゝく音が聞えて來た。

（あゝ阿房陀羅經が來たよ）と思つてゐると、やがておみつの側へやつて來たのは、その頃江戸の市中、何所へ行つても嫌はれてゐた玄哲といふ願人坊主。

チヤラポコ〲チヤラポコ〲……

玄『エー奇妙頂來、氣まぐれ厄介、道樂寺の阿房陀羅坊主が、釣鐘建立、その又おまけに、鼻の下空殿建立に、木魚の頭を無暗にたゝいて、唱へ上げますお經の文句、これを何よと尋ねて見れば、青物づくしで八百屋の騷動、さても花のお江戸で名代のお七は、八百屋久兵衞が箱入蜜柑、おツと違つた箱入娘に、蟲が附いたと知らぬ白瓜白髮の親父、日蔭の豆さへ時來りやはじける、戀の緋鹿の子振袖姿……』チヤラポコ〲チヤラポコ〲……

みつ『うるさいねえ。』おみつはうるささうにいつた。

玄『振袖姿のお七の振袖、吉三が引いたか、お七が目顔で吉三にいつたか、そこまで坊主は少しも知らない。』

チヤラポコ〲チヤラポコ〲……

みつ『うるさいツたらね。』

玄『うるさからうが、佛の爲めだよ、へツ、お手許は御面倒ながら、志ざす佛の供養……』といひながらおみつの側へ寄つて來て、いきなり手をグイと握つた。

みつ『アレツ、何をするんだよ。』

玄『少し用があるんだ、此方へ來ねえ。』

みつ『アレツ、阿房陀羅經のくせに何をするのさ。』と手を振り拂はうとする。

玄『えゝい、ジタバタするな。』と摑みかゝつて來た。

みつ『アレーツ、誰か來てー。』と聲をおげようとするのを構はず、阿房陀羅經の玄哲は、おみつを小脇に抱へ込んで、暗を幸ひに、河岸ツぷちの方へ、飛鳥のやうに走つて行く。重兵衞は留守、子分達は湯にでも行つてゐたと見えて、誰もこの騷ぎを知らなかつた。

藏前の通りを、ふるひ付きたいやうな粹な姿を、風に吹かせながら歩いてゐるのは白鬼の權六。

折しも向ふから一人の坊主が付いて走つて來る一挺の駕籠。

『アレーツ、助けて、助けて……』

摺れ違ひざまに耳に入つた女の聲。

權『待てツ。』權六は飛びかゝつて、駕籠の棒に手を掛けて、ズル／＼ツと後に引いた。その大力に駕屋はヨロ／＼として駕籠を其所へ下ろした。

『ヤア何をしやアがる。』と駕籠のそばに付いてゐた坊主は、拳を固めて打たうとした。

玄『ヤア貴樣は、白鬼の權六だな。』

權『おゝ手前は阿房陀羅經の玄哲か、又何か惡い事を賴まれたな。』

玄『ヤア知らぬ知らぬ……サア駕屋、早く行け／＼。』

權『待てツ、この駕籠はめつたにや

らぬぞ、その駕籠の中の女を出せ。』
玄『知らぬ〳〵。』
權『汝ツ、知らぬといへば斯うしてくれう。』
胸倉ムンズと引ツ摑んだと見えたが、肩にかけてズンデンドウ、玄哲は鞠のやうに、向ふへけし飛んだ、駕屋二人もその勢ひに恐れをなして、暗の中をいづくともなく逃げて行く。
權六は手早く駕籠の周圍を縛つてある繩を解いた、垂をはね上げれば、中からころがり出た若い娘。
權『姐さん、もう大丈夫だ、心配しなさるな。』
みつ『ハイ、有難う存じます――私が涼んで居りますと、あの阿房陀羅經が來て、私を無理に駕籠に乘せて……』
權『おゝ危ねえところだつた、……見れば美くしい娘さん、かどはかして、賣飛ばさうとしての仕事か。』
みつ『イヽエ、あの坊主が、本所の割下水、宍戸平十郎といふお旗本から、連れて來いと頼まれたとのこと……』
權『エツ、宍戸平十郎……ウム、やつぱりさうか。』
權六は考へ込んでゐたが、
權『姐さん、家は何所だね。』

みつ『ハイ、此の先の駒形の河岸通り、武藏屋重兵衛といふのが私のお父さん……』
權『エツ武藏屋重兵衛……さんの娘さんか。』
宍戸から首を取つてくれろと頼まれた武藏屋重兵衛の娘を助けるとは不思議な緣もあるものだと思ひながら、見下ろす顏。おみつは白鬼の權六といふ名は聞いてゐるが、どんな人かと見上げる顏。
七月十日の月は、この二人の派手な姿をくツきりと照してゐる、一つの美くしい畫面であります。
權『姐さん、重兵衛どんに會ひたいことがある、家まで送つて上げようかの。』

みつ『ハイ……どうぞさう願へれば……』といふのも口の中、おみつは羞かしさうに衣服の亂れを繕つた。

權『待ちなせえ、往來にこんな駕籠があつては邪魔になる、片付けて行つてやらうか。』といひながら、足でパツと蹴飛ばせば、駕籠は道端の大溝の中へボチヤーリ……

權『フム、これで宜い――サア行かうか。』

みつ『アイ……』

二人は列んで歩き出した。

重兵衛の娘といふのを幸ひ、一緒に行つて重兵衛に會ひ、次第に依つたら平十郎に賣つた命を投出すか、重兵衛の首を取るか、命と首のきまりを附けようと、はち切れさうな勇氣と興味とを以て、おみつを送つて駒形の武藏屋の家へ來た。

男の中の男一匹

武藏屋の家では、急を知つて、今大勢の子分がおみつの行衛を尋ねようと、八方へ散つた所でありました。

權六に助けられて來たと聞いて、重兵衛夫婦は喜こんで、權六を奥の座敷へ案内をした。重兵衛は、初對面の挨拶から、娘を助けて呉れた禮を述べた。重兵衛に會ふまでの權六は、大勢の荒くれ男を、木偶のやうに使つてゐる重兵衛、どんな挨拶をするか、挨拶の出やう一つでは喧嘩をふつかけて、親の讓りの關の孫六、此の刀に物をいはせて重兵衛の素ツ首、ぶち落して呉れようといふ氣が、身體中に滿ち〳〵てゐたが、初對面の謙遜した物やさしい挨拶に、先づ張り詰めた氣を拔かれてしまつた。それから色々の世間話し、話しをしてゐればしてゐるほど、重兵衛の大きな奥床しい心持ちが分つて來た。殊に重兵衛夫婦と、おみつが代り〳〵の話し、これまで宍戸平十郎から度々おみつを妾にしたいと申込んで來たが、其の度に重兵衛が膠もなく斷つてゐたのを遺恨に思つて、重兵衛を恨んでゐるといふことを聞いてゐたが、今夜阿房陀羅經の玄哲におみつを誘拐させようとしたのだといふことが、ハツキリと分つた。

權六はヂツと考へ込んでゐたが、

權『武藏屋の元締、この權六は、お前さんに詫をしなければならねえことがある。』

重『改つてこの重兵衛に詫ることとは……』

權『誠に申譯がない、……今夜私が此方の家へ來たのは、娘さんを助けて送つて來たのもあるが、其の實をいへば元締、お前さんの首を貰ふ積りだつたのだ。』

重『へエ、この重兵衛の首を……』流石に重兵衛も眼を睜つて權六の顏を見た。

權『とばかりでは分るめえが、元締、之を見てお呉んなせえ。』といひつゝ諸肌グイと脱ぐと、例の『此の命賣りもの』の大字の刺靑、重兵衞きつと見て、

重『此の命賣りもの……權六どん、珍らしい刺靑、かねて噂には聞いてゐたが、命を賣りなさるのか。』

權『おゝ看板に僞りなし、買はうといふ者に賣る積りだつたが、此の命、買ひ手が附いた。』

重『誰が買ひましたな。』

權『本所の旗本、宍戸平十郎……』

重『えツ……宍戸に賣りなすつたか。』

權『おゝ千兩の手附百兩で賣つた……元締、いま懺悔をするが、宍戸平十郎は立派な天下の旗本と思つて命を賣つた、その命の使ひ途はと問へば、いま旗本に楯を突く武藏屋の重兵衞、目の上の瘤、首を取つて貰ひたい、だが腕前が勝れてゐるゆゑ、此方が命取られうも知れぬ、それで此の命買ひたいと、天下の旗本が頼みぢや、頼み手は天下の旗本、相手は今江戸隨一と男を賣つてゐる武藏屋の元締、首取るも花、命取られるも花と思つて、頼みが氣に入つて引受けた……だが、いま話しを聞いて、立派な天下の旗本と思つたは私の眼違ひ、破落戸にも等しい喰はせもの、愛想が盡きた、さういふ風上にも置けぬ奴に、命買はれたのがいかにも權六口惜しい、重兵衞どんは弱きを助けて情けを施すお志、流石は男の中の男一匹、權六つくぐ感心しました。さういふ人を一日でも二日でも首取らうとしたのが恐ろしい、私は詫をする、元締、勘辨して下せえ。』といひつゝ重兵衞の顏を見た權六の双眼には涙が光つてをります。

重『イヤ權六どん、その挨拶では痛み入る、それしきのこと詫るには及ばぬ、氣にも懸けませぬ、この重兵衞の首、取れる者には何時でもやる、アハヽヽヽ。』重兵衞のいふことは流石に大きかつた。

權『面目ない、だが、欺されたが口惜しい、宍戸平十郎に命賣つたが殘念ぢや――だが、其の內に機會を見て、宍戸の素ツ首ぶち落して、それを土產に改めてお詫をする時もあらう、それまでは何にもいはずに許して下せえ。』

重『ナーニ、そのやうに氣を使つては、その背中の刺靑が泣きますぞ、アハヽヽ……コレ娘、サアく酒だく。』

戀わづらひ

此の事があつてから以來、權六は、京橋の住所をたゝんで、重兵衞の家の食客の身となりました。

スルト娘のおみつが、此の頃氣が浮かない、一間に閉籠つて

涙ぐんだり、溜息を吐いたりしてゐることもある。此の頃では床に就くやうになつてしまつた。目の早い母親がそれとなく聞いて見ると、それが權六を慕つての戀わづらひといふことが分つた。

重『ウム無理はねえ、男の乃公でさへ惚れてゐるのだ、娘が惚れるのはあたりめえだ、尤もだ。』

女房『お前さん尤もだ尤もだと一人合點をしてゐないで、何とかしてやらなければ、おみつは死んでしまふよ。』

重『ウム……』

女『ウムぢやアないよ本當にさ、若い者は氣が短かいから、ウツカリしてゐると三原山へ登つてしまふよ。』

　そんなこともいひますまいが……

女『お前さんが掛合ふのが嫌だといふなら、私が權六さんに話をして、おみつの婿になつて貰ふよ、もしおみつを女房にするのが嫌だといつたら、私がお嫁になるよ。』

重『馬鹿をいへ、お前の様な婆アを誰が貰ふものか、乃公だからガラクタ道具だと思つて我慢をしてゐるんだ。』

十五

女『オヤ、ガラクタ道具だといひだね、ガラ—タ道具が口を利くかえ。』

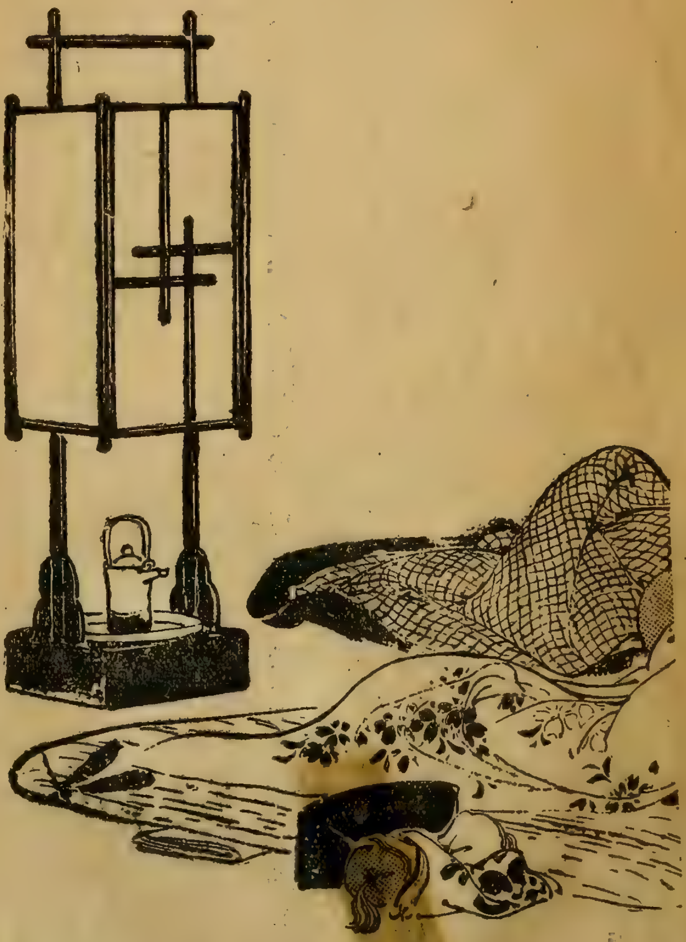
重『何をいやアがるんだ、お前と此所で喧嘩をしたつて始まらねえよし、これから乃公が權六さんの所へ行つて話をして來る。』

重兵衞は銀鎖の付いた大きな煙草入を下げて權六の部屋へ入つて來た。權六はいま起きたばかり、大きな欠伸をしてゐた所でした。

重『權六さん、今お目覺かね、よく寢るね。』

權『ハツハ、寢る子は丈夫だと聞いて居ります。』

重『冗談いつちやいけねえ、まだ子供の積りか…… 權六さん、今日はお前さんにお願ひがあるんだ。』



權『何です元締、改つて願ひなどと……』

重『實は今年十八になる娘が惚れて、是非女房になりたいといつて患つてゐるんだ。』

重『ハア、元締、今年お幾歳だ。』

重『私は六十一だ。』

權『老いて益々盛んだな、中々隅に置けねえ、六十一になる爺さんに十八になる娘が惚れるといふのも、前世の因縁づく、何れ揃ひの衣服に淨瑠璃の出語り、心中の場所は向島などが誂へ向……』

重『オイ權六さん、何をいつてゐるんだ、乃公ぢやアねえ。』

權『さうでせう、いくら物好きな女だつて變だと思つた。』

重『ふざけちやいけねえ、その女といふのは娘のおみつだ。』

權『あゝおみつさんか——もう年頃だし、容色が好いから無理

もない、惚れた相手は何でございますね。』

重『何だと聞くまでのことはない、お前さんだ。』

權『えツ私かえ——私に惚れたのかね。』

重『ウム、娘はお前さんと夫婦になりたい、夫婦になれなければ死んでしまふといつて、カルモチンも猫入らずも澤山買込んである。乃公にも呑めといふのだが、これぱかりは斷つた。』

權『ふざけちやいけねえ元締、人をからかつちや困る。』

重『からかふのぢやねえ、本當の話しだ、どうかおみつと夫婦になつて、この武藏屋の婿になつちや下さるまいか。』

　權六は腕を組んで考へ込んでゐる。

重『どうだね、お前さんの返事次第で、娘の病氣も癒るんだ、どんなものだらうな。』

　權六は、ホツと太い息を吐いて、

權『元締、折角だが、お斷りをいたします。』

重『斷る……ぢやアおみつが氣に入らねえといふのかね。』

權『何の、駒形小町とさへいはれる容色よし、この權六には過ぎたおみつさん、何で氣に入らねえなどと……』

重『それぢやア武藏屋の婿になるのが嫌だといひなさるのか。』

權『何の勿體ねえ、そんなことが……』

重『なけりやウンと承知をして貰ひてえ……默つてゐるところを見ると、嫌なのか。』

權『元締ツ。』權六は坐り直つた。

權『おみつさんや、元締のお志しは有難い、だが此の權六が人らしい男なら、おみつさんを女房にもするが、御承知の通りの元締の厄介者、たとへ武藏屋の婿になつたにしても、まだ元締のやうに人を使ひこなして行くことは出來ませぬ。こちらの子分の中には、申しては失禮だが、まだ一人前の男にならないのに、女房を持つてゐる者もゐるが、この權六はそんなことは出來ませぬ、何年か後ち、元締の引立てゞ、一人前の男になつたらおみつさんを女房にしますが、迚も此の權六、一人前の男にはなれさうもない、人の厄介者でおみつさんに心配をかけるのは心許ない。それよりはおみつさんは、武藏屋重兵衛といふ立派な俠客の娘、どこからでも立派な男が婿に來る。私のやうな者に心を懸けるといふのは心得違ひ、もつと權六が、人に立てられるやうな立派な男になつたら、女房に貰ひませう、マアそれまでは、折角だが、諦めて頂きたうございます。』

　重兵衛はヂツと權六の顏を見てゐましたが、

重『さうか、お前さんがさういふ氣なら、私も强てとはいはない、餘計な心配をかけて濟まなかつた。』

　それ以上重兵衛はその事を口に出さなかつた。

女房の包圍攻撃

重兵衛は部屋へ戻ると、

重『ヤイ三八、源助、傳六、幸吉、みんな此所へ來い。』

と大きな聲で子分達を呼んだ。武藏屋の店の方で集つて世間話しをしてゐた連中、

甲『オイ、元締が一人々々名前を呼んでるぜ、何か呉れるのかな。』

乙『慾張るな……元締、何か御用でございますか。』

重『用があるから呼んだのだ、女房を持つてゐる奴は、みんな揃つて此所へ來てくれ。』

乙『へエ……オイ女房を持つてゐる者は揃つて來いとよ。』

甲『さうか、何だらう、女房に反物に小遣でも付けて呉れるといふのかしら。』

女房のある連中が揃つて重兵衛の前へ來た。

甲『へエ元締、何ぞ御用でございますか。』

重『ウム、揃つた奴等、みんな女房を持つてゐるか。』

甲『へエ、どうも有難う存じます。』

重『何を禮をいふんだ。』

甲『何でございませう、女房に反物一反に、少ないけれどもといふんで、小遣の少しも下さらうといふ……』

重『何をいやアがるんだ……オイ皆んな、外ぢやアねえが、今日限り女房を離縁してしまへ。』

甲『へエ、元締、何で姐御を離縁するんで、姐御に惡い事があつたら、私共がお詫をいたしますから……』

重『何をいやアがるんだ、乃公の女房を離縁するんぢやアねえ、手前達の女房を離縁して來いといふんだ。』

甲『エヽツ私の女房を……そりやアいけねえ元締、彼女と私と夫婦になつたのは、一通りや二通りの……』

重『何を泣くんだ。』

甲『それを何の罪もねえのに、離縁をしろとは、そりや聞えませぬ重兵衛さん……』

重『何をいやアがるんだ……だが藪から棒に女房を離縁しろといつたら驚ろくだらう、その理由を聞かしてやる。』

甲『へエ、聞きませうとも、理由を聞かねえで離縁をした日にやア、彼女だつてどんなに泣くかア知れやアしませぬ。』

重『又始めやアがつた……家にゐる權六さんだ、娘のおみつが夫婦になりてえといふので、患つてゐるんだ。乃公からその事をいつて、夫婦になつてやつてくれと頼んだ所が、權六さんのいふには、自分はまだ出世前だ、假令おみつと夫婦になつたと

ところで、武藏屋重兵衞の子分同樣だ、女房を持つても食はせることが出來ねえ、家の子分の内には、まだ親分の厄介になつてゐて、碌に氣の利いたことも出來ねえのに、女房を持つてゐるが、よくあれで女房を食はせて行ける、察する所家へ歸れば女房が内職でもして、生計を助けてゐるので、女房に頭が上がらねえで、女房の褌でも洗つてやつてゐるに違ひねえ、あんな子分達の眞似はしたくねえ、自分は一人前の男になつたら女房を貰ふが、それまでは貰はねえといふんだ。成程言はれて見ると尤もだ、手前達は意氣地のねえのに女房を持つてゐるのは間違ひだ、サツサと家へ歸つて女房を追出してしまへ。』

甲『ナール程、さうかね、尤もだ、どうだ兄弟。』

乙『成程さうだ、全體腰卷なんざア洗ひたかアねえんだが……』

甲『お前洗つてやるのか。』

乙『洗つてやらねえと毆られるんだ。』

甲『オヤ〳〵……』

子分が家へ歸つて此事をいつたから、サア大變、子分の女房達八九人ゾロ〳〵揃つて權六の部屋へ乘込んで來た。權六は勞働争議でも起つたかと思つた。

權『ヤアこれは子分衆のお内儀さんか。』

○『何が子分衆のお内儀さんなんだよ、オイ權六さんッ。』

權『ホヽツ、恐ろしい勢ひだな、どうか咽喉へ喰ひ付くだけは御免を蒙る。』

○『返事の仕樣に依つては咽喉へ喰ひ付くよ——オイ權六さん、お前さん元締から、おみつさんと、夫婦になつてくれろと頼まれた時に、何とおいひだえ、出世前の身體だから女房は持たない……それは宜いさ、けれども家の子分達のやうに、親分の厄介になつてゐて、碌な事も出來ないのに女房を持つてゐるが、よくあれで女房を食はせて行ける、察する所家へ歸れば女房が内職でもして、生計を助けてゐるんだらう、あんな意氣地のない子分達の眞似をして、女房を持ちたくないとは何だよ。』

權『ハア、成程。』

○『何が成程だよ、全體私がどうして三次さんと夫婦になつたか知つてるかよ、私が日本橋の油屋に奉公をしてゐた時分に、三次さんがちよい〳〵來て、お前は樣子が好いねといつて、お臀を一つ叩いたのが始まりなんだよ。』

權『アハツハ、それは恐れ入つた、餘程目に立つお臀と見えるな、雨宿りには丁度宜からう。』

○『何をいふんだよ、だから元締が、尤もだから皆んな女房を離縁して來いと、家の人達にさういつたものだから、先刻私達は離縁されてしまつたんだよ。もう斯うなつたら勘辨出來ない

よ、みんなで寄つてたかつて、木綿針で、ちよい〳〵身體中を突ツつくからさうお思ひ、本當に何といふ男だらう……』

△『お勝さん、お泣きでないよ――サア今度は私に少し言はせておくれ……オイ權六ツ。』

權『ホツホ、今度は荒ツぽいな。』

△『荒ツぽいともさ、宜い加減におしよ、お前さん、何とおいひだえ、內職をして生計を助けてるから、女房に頭が上がらないで、女房の腰卷を洗つてやつてるに違ひないつて――あたりまへさ、女房が亭主に腰卷を洗はせるのが何が不思議なんだい、何の爲めに亭主を飼つて置くんだよ、朝は先に起きて貰つてさ、お飯を炊いて貰つたり、水を汲んだり、腰卷を洗濯させる爲めぢやアないか、全體亭主なんてえものは、時々仕置をしてやらないと癖になるんだよ、私なんざア家の人を時々簞笥の隅ツこへ押付けて、煙管で毆り付けて仕置をしてやるんだよ、けれども此の頃は煙管の羅宇が高くなつて、亭主を仕置する爲めに、煙管一本折つてしまふのは勿體ないから、此の頃では山葵卸しでゴリ〳〵面を引ツ搔いてやるんだよ。』

權『ホヽツ、亂暴だな。』

△『あたりまへだよ、それをお前さんが下らないことをいつたものだから、皆んな斯うして離緣をされてしまつたぢやアないか――それともお前さんがおみつさんと夫婦になれば、私達も元に納まるんだが、何でも嫌だといふなら私達も只では置かないよ、煙突へでも何でも登つてしまふんだから……』

恐ろしい權幕で、女房連の包圍攻擊を受けたので、流石の權六も辟易して、

權『マア待つてくれ、元締も人が惡い、搦手から攻め付けたのか――此の權六は、一旦言ひ出したことは、誰が何といはうとも、ウムとはいはねえ――だが、私にも少し考へがある、二三日考へさせておくれ。』

△『ぢやア三日待つて上げるから、それまでに性根を据ゑて返事をしておくれ、女だつて負けちやアゐないんだよ權六さん。』

雲雀のやうに囀つて女群は、引揚げて行きました。

買戻した命

權『元締、お前さんやおみつさんの志、淚の出るほど有難い、だがおゝといはれねえ譯があるからお斷りしたんだが、これからおみつさんと夫婦になつても宜いやうに、極りをつけて來ることがある、それまで待つてお吳んなせえ。』謎のやうなことをいつて權六は出て行かうとした。

重『オイ權六さん、待ちねえ。』重兵衛は呼止めた。

權『何でございますね。』

重『極りを附けるにや素手ぢやア行けめえ、之を持つて行きなせえ。』ポンと投げ出した五十兩包二つ。

權『元締、分つてゐなすつたのか。』

重『分らなくつてどうするものか、それで賣つた命、買戻して來なせえ。』

權『お丶忝じけない。』

事實權六は、宍戸から貰つた百兩の金は、其の日の内に貧しい者に片ツ端から分けて與へてしまつたのでありました。さうして武藏屋へ來てからも、宍戸から賣つた命、買戻したいと思ひながらも、この百兩の金がない爲めに、不快な日を送つてゐるたばかりでなく、命をその儘におみつと夫婦になることは好まなかつたのであります。それと察して重兵衛が投出した百兩は、權六には膽に銘じて嬉しがつた。その金を押頂いて武藏屋を出て行つた。

本所割下水の宍戸平十郎の屋敷では、今日も五六人の旗本、あばれ者が集つて酒宴最中、權六は長脇差を左手に、恐れ気もなくヅカ／＼と其所へ通つた。

平『權六か、何の用があつて參つた。』おみつを奪ひ返されてゐるから、平十郎は不機嫌な顔で權六を睨んだ。

權『此の間賣つた命買戻しに來た。』

平『重兵衛の首、貴様には取れぬのか、イヤサ命が惜しくなつ

たのか。』
權『默らツせえ、男の中の男一疋、白鬼の權六は、命は惜しくねえ。』
平『然らば何で買戻す。』
權『買ひ手が氣に食はねえ。』平『何と申す。』
權『相手の男の武藏屋重兵衞、賴み手は立派な天下の旗本と思へばこそ、權六は乘氣になつて命を賣つたが、其の旗本は破落戸にも等しい喰はせもの、誘拐、盜賊、武士の風上にも置けぬ奴に賴まれて、大切の命を賣つたが心外ぢや。』
平『默れ權六、武士を捉へて破落戸にも等しい喰はせ者とは何事だ、イヤサ誘拐、盜賊とは何事だ。』
權『おゝツ言つて聞かせう、花川戸の桔梗屋といふ吳服屋に火を放つて、土藏の金を盜ませたのも、平十郎貴樣の所業。』平『ヤツ……』
權『それのみでない、此の間の晩、武藏屋の娘を、玄哲に誘拐させようとしたのも貴樣のいひつけ、それが天下の旗本のする事か、イヤサ誘拐といつたが誤りか、盜賊といつたが廣言か。』
平『ウーム……』

權『盜賊に等しい似非武士に、此の權六の命は賣れぬ、今日限り返して貰ひに來た。』
權六は一本調子にガミ〳〵と嚙付くやうに言つてのけた。斯ういはれると、一々事實であるから、平十郎は只虛勢を張る外

はなかつた。

平『默れツ、武士に向つて無禮の一言、一旦百兩の金を遣はして買つた命、何と申さうとも戻さぬぞ。』

權『戻さぬといふなら、此方から戻してやるツ。』といふかと思へば懷の百兩の金、右の手に引ツ摑んで、平十郎の面上狙つて發止と投付けた、身を躱さうとしたが遲かつた、金包みは平十郎の横ツ面に發止と當つて、紙は破れてバラ〳〵ツと金は四邊に燦爛と散つた。

平『無禮者ツ。』平十郎は立上がつた。

平『一旦買つた命、渡さぬとあれば、刀に掛けても取つて見せるぞ。』

權『おゝツ、刀にかけて取るとあらば、此方も腕づくでも戻して見せうか。』

平『ヤア奇怪な一言、ソレツ……』目配せをした。おツ取り刀で立上がつた旗本五六人、それに從ふ七八人の暴れ者。權六は右に握り〆めた拳、寄らば唯一打ちと身構へた。その勢ひに呑まれて旗本達は、口には大きなことをいつても、刀の柄に手を掛けてゐながらも、拔かうともしなかつた。

權『サア拔けツ、拔けぬかハツハヽヽヽ、拔いたが最後、貴樣達の首、片ツ端から、血煙諸共中天に飛ばしてくれうと思つたが、刀拔くことも出來ぬ腰拔け者の首、斬るも刀の手前耻かしい、今日の所は、命はそつちに預けて置く、此の後惡い事をしたことを聞いたら、今度は此方で預けた命、取りに來るぞ、白痴めツ、ワツハツハヽヽヽ。』

吹飛ばすやうに笑つて、堂々と力足踏み鳴して權六は宍戸の屋敷を出て行つた。

それから間もなく權六は、重兵衞の娘のおみつと、目出度く華燭の典を擧げました。

（をはり）

朗らかな忍術講談

忍術と言へば何人も第一に指を猿飛に屈す。眞田十勇士の殘黨猿飛佐助、命を受けて德川方の機密を探るべく諸國を漫遊、遂に江戸城大奥へ忍び込み家康の寢首をうかがふ。變幻出沒、手に汗握る快講談、猿飛佐助目下大評判です、（定價一圓送料十二錢、本社發行）

ニキビ吹出物に
一番よく効く藥

ニキビや吹出物でお困りの方には、何よりも『にきびとり美顔水』をお勸めいたします。頑固なニキビにも特によく効きますので最も信用のある專門藥です。

これまで色々な藥や方法で失望された方でも、この藥の顯著な効能にだけは滿足されますでせう。

尚ほこの藥は美容藥としても比類なき効果があり、暫く御常用になりますと、シンから垢ヌケがして、キメの細かな、ツヤ〳〵した美しいお顏になりますので、入浴後、洗面後、お顏剃り後等には、婦人方にも男子方にも廣く賞用されてゐます。

喜劇

越中異國譚

菊田一夫

小野佐世男畫

第一景　出發

維新前の下田港——港内。

舞台右手に小さな棧橋があつて、そこに小さな和船がつないである。そのずつと向ふにかすかな煙を吐いて黑船が數隻碇泊してゐる。

見送りの武士、町人大ぜいに取卷かれて頓田琴也感激の涙にむせんでゐる。

武士、町人達盛んに『萬歳々々』を連呼する。

下田奉行黑井船之守左手より登場。

黑井　靜まれ〱、者共騷がしいぞよ、靜まれと申すに——、頓田琴也は何れに居る？

頓田　（進み出て）ハハツ、これに控へて居りまする。

黑井　おう、頓田か。今度の役目の儀、御苦勞ぢやのう。

頓田　ハハツ、不肖身命にかけてきつと役目の儀、相果しまするでございます。

黑井　砲術研究は刻下の急務、急ぐに勝さるはなけれども、紅毛人と雖も我が日本國より、その方が砲術研究に參つたと知らば用心が上にも用心なすは必定、必らずともに心して探れよ、仕損じたならば命はなきものと思へよ。

頓田　ハヽツ元より覺悟の上にござりまする。

黑井　もはや、心殘りはあるまい、早く行け。

頓田　御言葉返して恐れ入りまするが、唯一つ心に殘ることがござりまする。

黑井　うむ、その心殘りとは。

頓田　不肖頓田琴也、つい最近妻帯いたしましてござりまする。

黑井　家內を持つたと申すか、そりや芽出度いのう、その家內はシヤンか。

頓田　ハツ、色は白く、眼は黑眼勝ち、むつちりとした肌のシヤンにござります。

黑井　ほゝう、むつちりとした肌の――貰ひたてか、嬉しいであらう。

頓田　そりやもう、嬉しいのなんのつて。

黑井　さうであらう、チクシヤウ。（頓田の頰つぺたを厭といふ程つねる）

頓田　痛いツ。

黑井　痛みを感じる程なれば先々重疊ぢや、だがしかし最早その樣な事は氣にかけるでないぞ。

頓田　ハツ？

黑井　その方の女房は余が引受けてとらす。

頓田　と、言ふと？

黑井　その方の留守の間は余が引受けておいてやると申すのぢや、どうぢや安心いたしたらう。

頓田　じよ、冗談でせう、危なくて仕樣がねえや。

琴也の妻かよ登場。

かよ　琴也樣。

頓田　かよか、隨分共に達者でくらせよ。

かよ　何故か、そなたをやりたうもないわいな。

頓田　此期に及んでその樣に未練がましいことを申すでない。

かよ　厭ぢや、異人の女は、情が深いと

やら、お前樣なぞは一人でおいでなされては異人の女に惚れられてしひまする、お前樣は唯さへ稀な好男子。

黑井 嘘つきやがれ、どうかと思ふよ。

頓田 これかよ、そちは某の石部金吉をよく存じてゐるではないか、某しの樣なそちに忠實な男を捉へてその樣な心配するとは、そちや認識不足ぢやぞ。

かよ はい(と默つて包物を琴也に渡す)

頓田 何んぢや、これは？

かよ はい、大和武士の魂にござります。

頓田 魂は此刀ではないか。

かよ いゝえ、その他に日本人として離してはならぬものがござりまする、船の中でとくと御覽ぜられませ。

頓田 うむ、かたじけない。

かよ でも、これが汚れた時、お捨てなさるにしても異人にみられては、汚れてゐれば國の恥、心してお捨なされませ。

頓田 何かは知らねども、忝けない、厚く禮を申すぞ。

かよ それではお別れの……

頓田 キツスか。

かよ あいなあ。(ト二人は抱き合つて高いキツスの音)

黑井 いゝ加減にいたせ、――馬鹿者奴ツ。

暗轉

第二景

太平洋の波の上

舞台黑船の甲板上。

船長と頓田が甲板のてすりにつかまつて話してゐる。

頓田 船長殿。

船長 何んですか。

頓田 下田を出てよりもはやどれ程參つたであらう。

船長 さうですな、もう三分の一は來ましたかな。

頓田 指折り數へて四十五日、浪路はるかに來れども見渡すかぎり海だらけ、でも海はでつけえなあ。

船長 變な聲を出さないで下さいよ。

頓田 (懷中からおかよがくれた包物を出す)俺の戀しいおかよがくれたんだ、この移り香何んといふ奧床しい匂だらう、おう戀しいかよちやん。(てすりの上に乘上る)

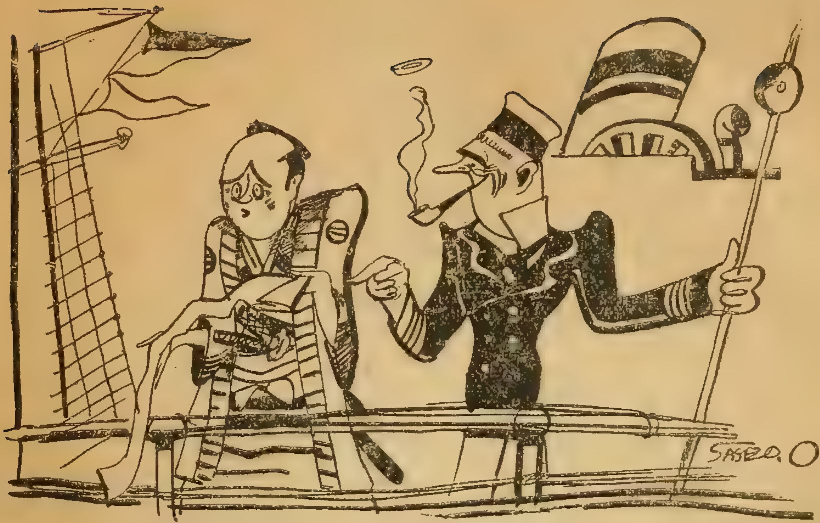
船長 海へ落ちるからおよしなさいよ、仕樣がない人だなあ。

頓田 (包みの中から一通の手紙を出して讀み、そしてすゝり泣く)

船長 何を泣いてゐるんです、又妻君を思ひ出したんですね、女々しいぢやありませんか、今更泣くなんて。

頓田 そりや君が泣くなといふのも無理はないよ、併しこの可憐な思ひやりの

ある手紙を讀んでみろ、これが泣かずにゐられようか。



船長　何んだか知らないが讀んでみて御覽なさいよ。

頓田　泪でせきとめられて聲も出ないだらうが、まあ聞いてくれたまへ、（讀み上げる）あなたはとう／＼行つてしまひましたわ、何んといふ悲しいことでせう、これをお讀みになる時分はあなたと私は遠く／＼はなれてゐますのね、あなた地下鐵私はバスよ、戀のストツプまゝならぬ（ト讀み終り暗然として涙を拭ふ）どうぢや悲しからうが。

船長　いや、無理ない、無理ない、所でその包みの中には何が入つてるんですか。

頓田　これか、こりや妻が情のプレゼント、大和武士の魂ぢやわい。

頓田、包物をひろげる、中からは越中褌が出て、颯爽として海風にひるがへる。

頓田　ても、朗らかな贈物ぢやのう。

暗轉

第三景　ホテルの玄關

舞台、右手にカウンタアー。

秘密探偵局長シュベイク登場。

シュベイク　（ホテルのボーイに）僕はかういふ者だがね、今日、此處へジャパンといふ國から來た男が泊りに來る筈ぢやが、その奴は當アメリカ合衆國の砲術の機密を探りに來たスパイぢや、もしその男が來たら樣子を見張つてゝ貰ひたい。

ボーイ　かしこまりました。

頓田登場。

頓田　賴まう／＼。

シュベイク　おい何だか變な服裝した奴が賴まうつて言つてるぞ、何んだか知らないが賴まれてやれ。

ボーイ　いらつしやいませ、何の御用で。
頓田　其方の宅は旅籠であらう、拙者一泊いたす。
ボーイ　では宿帳をお願ひいたします。
頓田　面倒ぢや、つけておけ。
ボーイ　何んとつけます？
頓田　遠からんものは音にもきけ、近くばよつて目にもみよ。
ボーイ　遠くないから大丈夫ですよ。
頓田　大日本、徳川幕府悪井九紋守が家來、城九郎兵衞がその又家來頓田琴也なるわ。
シユベイク　エツ。（立上る）
ボーイ　シーツ。（と目で合圖して）ではどうぞこちらへ。
と、ボーイ、頓田を案内して退場。
シユベイク凝と睨んで見送る。
スパイ、マタ・ハリ登場。
マタ・ハリ　シユベイクさん、何見てるの。
シユベイク　うむ丁度いゝ所へ來た。

マタ・ハリ　用事？
シユベイク　うむ、一寸耳を貸せ、（さゝやく）なあ。
マタ・ハリ、判つたわ。
シユベイク　ぢや行けツ、――待てマタ・ハリ、お前腕をふるつて俺の爲に働いてくれるのはありがたいが、熱情の餘あの男へ惚れたりしてくれるな、何時の場合でも、この俺とお前の仲を忘れるなよ。
マタ・ハリ　そんなこと判つてるわ。
シユベイク　マタ・ハリ。（とマタ・ハリを抱かうとする。）
マタ・ハリその手を輕くはらつて退場。
シユベイク　マタ・ハリ〳〵、スパイとは言へ狂ほしくも美しき、マタ・ハリ。
（次第に熱して來て唄ひ始める）
……消えゆくあし音
去りゆくあの影……
暗轉

第四景　ホテルの一室

上等のホテルの部屋、ベツド、テーブル椅子など程よく飾つてある、頓田の泊つてゐる室である。

マタ・ハリがベツドにねそべつてゐる。

頓田登場。

頓田　はてな、部屋を間違へたのかな。

マタ・ハリ　此處は貴方の部屋なのよ。

頓田　やつぱり間違ひではござらなんだか、然らば貴殿はどなたでござる。

マタ・ハリ　私、マタ・ハリつて言ふの。

頓田　何、マタ・ハリ。さらば膏藥の一種でござるな。

マタ・ハリ　あら厭だわ、私の名前よ、私、今寂しいのよ、私を愛してくれないこと？

頓田　拙者には妻がござる。

マタ・ハリ　妻があつたつてさ、妻は妻、戀人は戀人よ。

頓田　そりや元より拙者とても好きな道でござる。

マタ・ハリ　ね、よく判る坊やだわ、ね、ね、愛して頂だいね。

頓田　O・K、O・K、ザツツ、O・K。

マタ・ハリ　（頓田の懐中からのぞいてゐる汚れた越中褌をひつぱり出さうとする）あら、これ何なの。

頓田　（慌てゝ取返して）こ、これは拙者の秘密でござる、そつと隱しておく秘密でござる。

マタ・ハリ　あら秘密なの、判つたわ。（立上ると同時に走つて退場）

頓田　これさ何處へ行くのぢや、秘密をさとられたか、うむしまつた、とんだこいゝとなり。（と後を追つて退場）　暗轉

第五景　ホテルの廊下

シュベイクが人待顔に佇んでゐる。

マタ・ハリ登場。

マタ・ハリ　判つたわよ。

シュベイク　何か秘密書類らしいものを持つてゐたか。

マタ・ハリ　えゝ何だか胸の處にあるポケットに紐のついた白い布が入れてあつたわ、きつとあの布の中に秘密書類が入れてあるのよ。

シュベイク　さうか、有難う、君にその秘密書類を盗み出す自信があるか。

マタ・ハリ　えゝ、あるわ。

シュベイク　では、第二段の作戦としてその秘密書類の入つた白い布を盗み取ることを命ずる、注意してやれ。

マタ・ハリ　大丈夫よ。

シュベイク　では盗み取つたらすぐに探偵局へ持つて來てくれ。（退場）

マタ・ハリ　（物憂さうに歩き廻る）スパイなんて厭な商賣だわ、それに何んだかあのキモノを着た坊やは馬鹿々々しい程純情なんだもの、これが戀つていふものかしら。

頓田登場。

頓田　マタ・ハリ殿か、何故逃げられたぢや。

マタ・ハリ　御免なさいね。

頓田　何か機嫌をわるくされたかと思うて拙者案じ申したわ。

マタ・ハリ　あなたは素直な方ね。

頓田　いや左程でもござらぬ。

マタ・ハリ　私ね、實はスパイなのよ。

頓田　えツ。

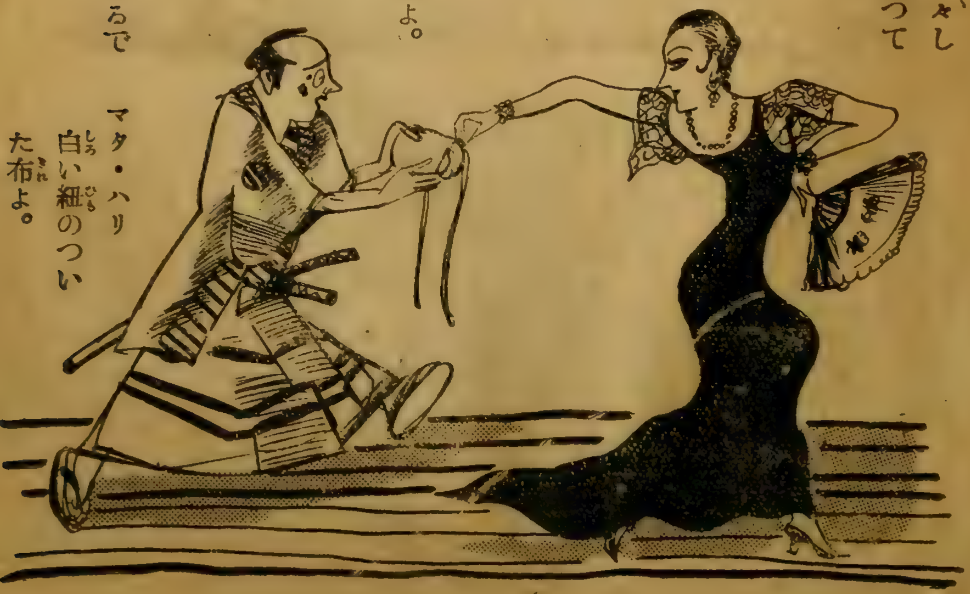
マタ・ハリ　でも安心してね、私、今ではあなたを愛してゐるの、あんた注意しなきや駄目よ。

頓田　いや、かたじけない。

マタ・ハリ　あんた白い布を持つてゐるでせう。

頓田　白い布？

マタ・ハリ　白い紐のついた布よ。



頓田　あ、あれでござるか。

マタ・ハリ　あれかぢやないわよ、あれが大變なのよ、あなた、あれをしつかり身につけてゐないと大變よ。

頓田　いや、あれは此間迄身につけてゐたでござるが、餘り汚れたので捨てようと思つたが、捨て場に困つて居るのぢや。

マタ・ハリ　まあ捨てるつて？　なんてことを言ふの、あれはあんたの血と汗の結晶ぢやないの。

頓田　そりや汗もついて居るなれど。

マタ・ハリ　まあ汗にまみれて、何んて素敵なんでせう。

頓田　そなたは變態でござるか。

マタ・ハリ　暢氣なこと言つてる場合ぢやないわよ、今にも探偵局の手が廻つたらどうするのさ。

頓田　をかしいなあ。

マタ・ハリ　をかしかないわよ、ぢや私があづかつてゝ上げるわ。

頓田　いや餘り汚れてゐる故。

マタ・ハリ　いゝつたら。

頓田　いや、氣がねでござる。

マタ・ハリ　いゝのよ、遠慮しなくても私あなたを愛してるんですもの。

頓田　左樣か、では、御渡し申す。（と越中褌をマタ・ハリに渡す）

マタ・ハリ　此の秘密の袋は隨分、汚れて、何んだか匂ふのね。

頓田　いやはやとんと恥しうござるよ。

マタ・ハリ　でも偉いわね。（と、感にたへた樣に越中を抱きしめる）暗轉

第六景

秘密探偵局の一室

堂々たるテーブルを前にしてシユベイクが厳然とかまへてゐる、その前に、捕へられたマタ・ハリと、頓田琴也、その横に通譯――

シユベイク　（おごそかに）いくら逃亡したつて、アメリカ秘密探偵局の手は何處迄も追ひつくのだ、マタ・ハリ、貴樣も覺悟はしてゐるだらうな。

マタ・ハリ　勿論よ。

シユベイク　おい通譯。

通譯　ハツ。

シユベイク、頓田には判らぬ英語で通譯をつかまへて盛んにまくしたてゐる、そして、マタ・ハリの持つてゐる越中褌を取り上げる。

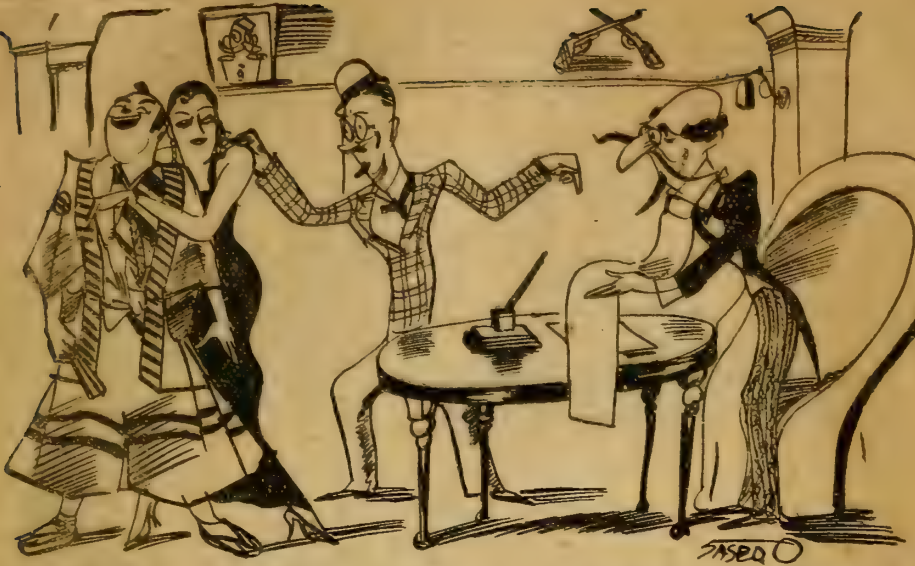
マタ・ハリ　まあ、頓田さん、秘密の袋を取られちやつたわよ。

頓田　弱つたことが出來たな。

マタ・ハリ　私達死刑だわ。

頓田　死刑？　アメリカではあれ程のことで死刑にいたすのでござるか。

マタ・ハリ　だつて、あれ秘密書類が入つてるんぢやないの。



頓田　あ、それで判つた。

マタ・ハリ　何が判つたのさ、いやね、暢氣な顔をして、あれ何なのさ。

頓田　あれは、いとも恥かしき、ジャツパン・ヅロースでござる。

マタ・ハリ　あら、まあ、いやだわア。

頓田　アハハハハ。(笑ひ轉げる)

通譯　日本のおさむらひさん。

頓田　何んでござるか。

通譯　局長殿があの不思議なる匂ひのする白布のことをおきゝです、あれは何んですか。

マタ・ハリ　(頓田にさゝやく)

頓田　(うなづいて)あれでござるか、あれは、日本のナプキンでござるよ。

通譯　(シュベイクにそれを傳へる)

シュベイクうなづいて首に越中褌をかけ、紐で首をしばり、斯うするのかといふ様に頓田をみる。

通譯　あゝやるのですか。

頓田　さうです〳〵、それを差上げると言つて下さい。

マタ・ハリ、クス〳〵と笑ふ。

通譯傳へる。

シュベイク　オウ、ジャパニイスナプキン、ベリグツド、ベリグツド。

頓田　イエス、イエス。

マタ・ハリ　シュベイクさん、口をふくのよ。

シュベイク嬉しさうに口を拭く。

頓田　イエス、イエス。

シュベイク　サンキュー〳〵。

頓田　いゝえ、どういたしまして。

マタ・ハリ　これで私達助かつたのよ。

頓田　それよりか、褌の捨場が出來てホツとしたよ、馬鹿野郎、アメリカ人なんてなア、そんなものだ、では行かうではござらぬかマタ・ハリ殿。

マタ・ハリ　えゝ、歸る時日本へ連れて行つてね。

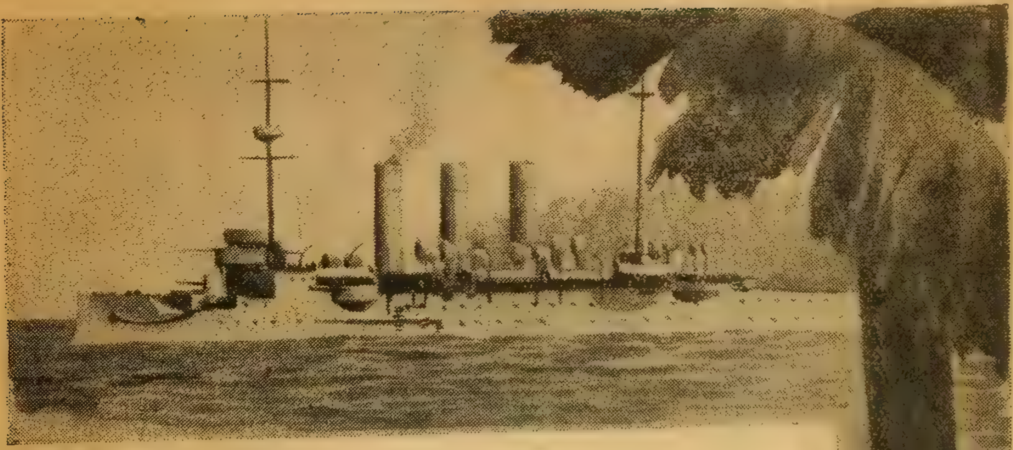
二人退場しかける。

シュベイク　サンキュー、ジャパニイスゼントルマン。(盛んに口を拭く)

頓田　少し臭からう、左様ならあばよ。

頓田、マタ・ハリ愉快さうに笑ふ。

――(幕)――



空前絶後の戰爭ロマンス

敵艦を貰つた男

――快男兒小峰磯吉君の手柄話――

安藤盛

ヘルメット帽の偉丈夫

『うゝん、うゝん、うゝん！』

三人の土人達は、必死だ。――

い、い、い、

しやもじのやうな櫂に、渾身の力をこめて、長さ三間ばかりの獨木舟を漕いで居た。此の舟は此の界隈特有のもので、舳と艫とが角を生じたやうに尖つてゐて、赤や黒の泥繪具で彩

色してあつた。

カヌーは、まるで辷るやうだ。桔梗色の金紗其のまゝな赤道直下の海上をスーツスーツと飛魚の如くにすゝむ。舳には、純白な背廣服をきて、ヘルメツト帽を被つた堂々たる偉丈夫が乘つてゐて、

『今一息だ！』

と、土人達を勢づけてゐた。

こゝは何處？

つい二三ケ月前までは、獨逸領となつてゐたニユウギニアの一角、一九一四年歐洲大戰が初まると同時に、この島を守備してゐた獨逸艦隊は、日本艦隊と英國濠洲艦隊とに追ひまくられて、姿をくらまして了つた。だが、彼等もさるもの、巧みに南洋諸島の間に出沒して、通りがかりの各國汽船を沈めたり脅かしたりしてゐた。おのれやれ、と思うて、行方をさがしてゐたが、何處にひそんで居るのか、かいもく見當がつかなかつた。

アドミラルテイ・アイランドには、この時三隻の英國濠洲軍艦が碇泊してゐたが、實はぐつたりと疲れ切つて、乘組員達も晝寢の眞最中。

カヌーは、今、其の旗艦の舷門についたのだ。

やがて、ヘルメツトの偉丈夫は、司令長官に取次を求めると、

『ミスター・コミネか、オーライ。』

知り合つてゐる間柄と見えてわざ〳〵参謀長が出て來て、にこ〳〵と迎へた。

『いかにも、閣下。』

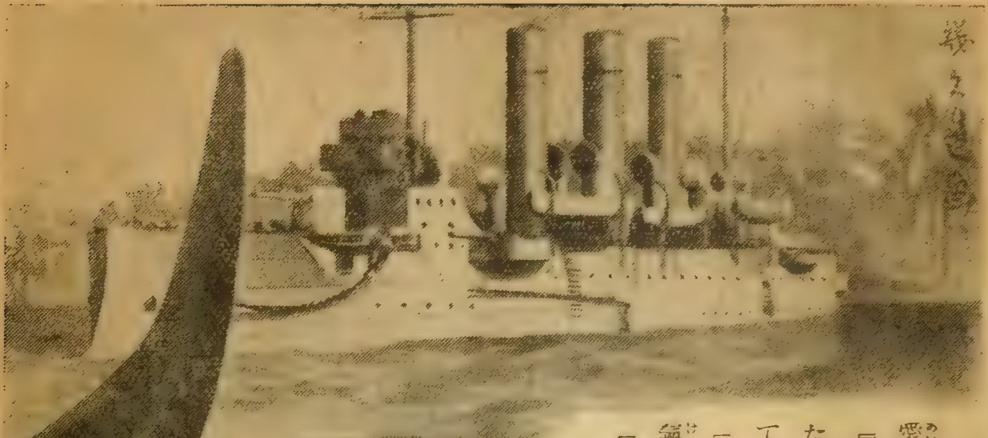
ミスター・コミネ。彼は、日本人であつた。彼の姓は小峰、名は磯吉。日露戰爭の直後、賣藥行商となつて、此の島に渡來し、十年間の努力の後、今では手廣く造船業を營む傍、漁業の方にも手を着けて居た。

で、日本人小峰は、土人の間には神さまのやうな信頼をうけて、彼の云ふことなら、何事にかゝはらず聞き入れられた。この島が獨逸領であつた當時は、獨逸海軍の士官達は、入れかはり立ちかはり小峰の許をおとづれて援助をもとめて居た。

この獨逸軍艦が行方をくらましてから、躍起となつた英國濠洲艦隊は、かねてから小峰にも獨艦搜索方を依頼して置いた。

その小峰が、司令長官室にゆつたりと現はれた。心は焦いてゐるらしかつたが、さう云ふ態度は更に見せなかつたので、

『やア、ようこそ。』



司令長官も座を立上つて、愛想よく彼の手を握つた。

『閣下、御報告に參りました。』と、小峰氏は語調を改めて云つた。

『おう。』と、司令長官もやゝ氣色ばんだ。

『貴艦隊の御依頼により我々が全力をさゝげて探し求めてゐた獨逸軍艦が一隻、こゝから三十海里南方の入江に潜伏して居ります。』

『しめた！』

此の一言をきくと、司令長官は、躍りあがるやうに喜んだ。

『私達、一生懸命さがして居りました、どうしても分りません。……實は、乘組員の士氣にも關係します、今日あたりは、空彈でも放して、射撃の演習をしようかと思うて居りました、ところへ報せてくれました、私達、大喜びです、感謝します、我艦隊は、これより直ちに出動いたします。』

『いや、待つて下さい。』

小峰氏はあわてゝ、司令長官の言葉をさへぎつた。

『出動するのは待つて下さい。』

『ふう、あなた、何うするつもりですか。』

『私は日本人です、日本人には、武士道があります。私が斯うして貴官のもとに、敵艦隊の所在を報告に參りましたのは、英國が我國と聯合國であるからです、しかし、敵とは申し乍ら獨逸の艦をあなた方の手をかりて打沈める事は、私共としては、いかにも忍びません、なぜと仰有いますか、御覧なさい、獨逸の艦は、貴艦隊と日本艦隊とに追はれ乍らも、島蔭にかくれつゝ、あれ丈の敵對行爲をつゞけたことは、敵乍らも天晴です、そこを見てやらぬといけません、今貴艦隊がどつと押し出して行つて、此の艦を沈めることは、親指の腹で飯粒をつぶすより

もいと易いことです、敵の艦は破れてゐます、敵の水兵は疲れてゐます、彈藥も缺乏して居ります、燃料も不足して居ります、そんな艦と戰つて、そんな艦を沈めて見ても、貴艦隊の名譽とはなりますまい、のみならず、さうなると獨逸の艦も死ものぐるひで敵對します、その結果は、貴艦隊に致命的な損害を與へることは出來なくても、それ相當の被害がありませう、貴艦隊に於ても、勢 死傷者を出すことになりませう、そんな事をなさるよりも、いつそ此方の態度を明かにし、敵の面目を立てゝ、降伏させるがよろしい、さすれば、一彈も費さず、一兵も損ぜず、まる／＼敵の艦を一ぱい生捕にすることが出來ます、日本に傳はる兵書には、戰はずして勝つ、これ戰のその上なるものと敎へられて居ります。』

『分りました、だが、ミスター小峰、それには、勸降の使者を出さねばなりますまい。』

『勿論です。』

『ところが、今のところ、殺氣立つてゐる敵中へのり込むことは、見す／＼此方の軍使を殺しにやるやうなもので、選ばれて行くものも迷惑だらうが、第一、上官としてもさう云ふ命令を與へに

くい事情もある。』

『よろしい、それなら私が參りませう。』

『何！ 君が行つてくれる。』と、司令長官は屹となる。

『私が、必ず降伏させて參ります……貴官は、私の身柄を敵の艦へ送りとゞける爲、ランチをおかし下さればそれだけで結構です。』

『これは驚いた、君は、ほんとうに勸降使となつてくれるか。』

司令長官は、意外な面色だつた。

『私は日本人であります、日本人には、舌は二枚ありません、必ず貴官の御希望に添ふやうに使命を果して參ります。』

『必ず！』

司令長官は、小峰氏の一言をくりかへすと、その尾につれて、小峰氏は云つた。

『いかにも、閣下。』

單身敵艦に入る

眞黑な大空に黃金の鋲を叩き込んだやうに星が瞬いて居た。椰子の林も黑々と横つて、渚の砂がほんのりと白く浮いて居る闇の中を音もなく走る一隻のランチ、夜明け方になると、海の中に茂つたマングローブの森林の中に姿をかくしたが、折しも好い鹽梅に靄がかゝつて來た爲、又今迄のコースを取つて靄の中を進んで行つた。

中には、英國水兵が二十名餘、手に手にピストルを持つて警戒して居る眞ン中にごろりとなつて寢て居る男、何の屈托もなさ相にぐう〳〵と鼾をかいて居た。

それが、勸降使小峰磯吉氏だ。

忽ち、もやの立ちこめた入江の岸近くに黑々と横はる獨艦の影が浮き出た。

『ミスター・コミネ、起きた、起きた。』

英國水兵に小突かれて、彼は、やつと眼をさました。

『敵艦です、あなた、どうします？』

『何は構はず、舷側へのりつけるンだ。』

『それから？』

『艦へ上るのは、私一人でよい、諸君は、ランチの底にかくれて居なさい。』

『それから？』

『その先は、どうなるか、私にも分らない、事によると、私は、屍になつてランチへ運ばれるかもしれない、その時は、海の中へドブンと投りこめばよい……』

二十名の護衛水兵は、小峰氏の度胸にあきれて了つた。自分

達は、てツきり獨逸軍艦へ同行せねばならぬのだと思ひ込んでゐたところ、我が小峰氏は、單身敵中に入らうといふのだ。又、事實、ぴく／＼ものゝ護衛などを同伴することは、足手まとひでもあるのだ。

ランチは、今、エンジンの音を低め、ピタリと獨艦の舷側に吸ひつくと、小峰氏はヒラリとタラツプに駈け上つて、棒のやうに甲板に突立つた。と、同時に、英國水兵達は、ランチの底に身をひそませた。

『おや。』

甲板に上つて見て、小峰氏はどきりとした。そこら中一ぱいに取り亂したまゝで、木の皮だの木の枝だのが、堆く掃きよせられてゐた。人影はさつぱり見えなかつた。

艦の形で推すと、小峰氏が見覺えのあるニユウギニア守備の砲艦であつた。

『艦をすてゝ、みな逃げたな……だが、それでは獨逸人らしくないな。』

彼は、ふとさう考へた。

『とまれツ！』

いきなり前甲板の主砲塔の下から、武裝した水兵が現はれた。ボロ／＼に破れた垢じとりのしさうな服をきて居た。

『誰だ？』

『私は、日本人小峰だ、君等の友人だ、艦長殿は居るか？』

『うむ、ヘル・コミネか……君の名は知つてる、よく來てくれたな。』

眞黑な手を出して、番兵はヘル・コミネの手を握つた。

『艦長は？』

彼は、再び聞きかへした。

『まだ眠つてゐる、三日前からの疲れでな、……しかし、君の名をいうたなら、艦長殿は起きてくれるかもしれない。』

『此の砲艦の艦長殿は、たしかアンドレーア中佐だと思ふが…』

『さうだ。』

『それなら、私の友人だ。よく知つてゐる。必ず起きてくれる。』

『うむ、さうか。』

番兵は、懐しさうに斯う云つて、艦長室の扉の前に立つた。

ハラキリの覺悟

『默れ、日本人！』

艦長室から、斯う云ふ罵聲が洩れたのは、それから間もなくだつた。

只事ではないと見て、番兵が、鍵穴からのぞいて見ると、こはいかに、アンドレーア中佐は、拳銃を小峰氏に擬して居る。その銃口の前に立つて、小峰氏は、泰然として居る——

中佐の叱聲はつゞく。

『降伏とは何事であるか、勿論、我が艦は長い間潜行をつゞけてゐた爲、焚く石炭がつきて了つた、やむを得ず、此の入江にかくれて薪を伐り出して、その積込をして居る矢先、濠洲艦隊に發見されたのは、我等の運の盡きである、優勢なる敵艦隊が此の沖合に於て、我等を待ちうけて居ると云ふことなら、もはや免れぬところと觀念するより外に途はない。しかしだ、獨逸の軍人には、進んで死を選ばうとも、退いて生を貪るものは、一人も居らない、たとへ艦は粉微塵にならうとも、辭するところではない、我等は最後の一人が最後の一滴の血をさゝげる迄、戰つて戰つて戰ひぬかうと思ふ、それがカイゼルから我々に賜はつた勅語である、武士の情を知る日本人ならば、直ちに此の室を去れ、もし君が聽かずんば、射つぞ。』

中佐は、凛然として云ひ放つた。

『貴官の御意志はよく分りました、ついては、二分間待つて下さい。』

と、小峰氏は答へた。

『二分間！』

中佐は、鸚鵡返しにいつて、小峰氏を見守つた。

『さうです、二分間でよろしい、私は、英國艦隊にも、又貴國軍艦にも、一人の犧牲者を出さず、十分双方の面目を立てた上、貴官に降伏をすゝめたつもりであるが、只今の御話を伺へば、一々尤もです、貴國に貴國人の取るべき態度があるならば、日本には日本人のとるべき態度があります、かういふ時には、日本人は、ハラキリをして、自分の立場を明かにすることになつ

て居るので、二分間丈私に此の部屋を御貸し下さい。』

どつかと坐りこんだ。彼は、兼て覺悟して來たらしく、ふところには、一本白鞘の短刀をのんでゐた。彼が祖國を出發の際、友人から贈られた無銘の古刀、スラリとぬき放つと、ピカリと一閃した。

『ハラキリ！』

中佐はあわてゝ、小峰氏の利き腕を抑へながら、

『ハラキリ、待ちなさい。』

と、押し止めた。

『折角ですが、私も日本人です、日本人には、進んで死を選ばうとも、退いて生を貪るものは一人も居りませぬ……』

『私の眞似をしてはいけない、あなたは、今死ぬ時ではないのです。』

『いや、その御言葉は、私から貴官に返上いたします、貴官は、こゝで最後の一戰を試みようとなさる勇氣は敬服に値ひ

しますが、今死ぬ時ではありますまい、日本の武士道によれば、死すべき場合に恥を忍んで生き永らへて忠義を立てることもあります、貴官が多數の部下と共に、立派に戰死をなさるのは、壯は壯です、快は快です、しかし獨逸の將來は、まだ貴官等を必要として居る筈です、私は少くとも、さう信じて、貴官方に、ほんとうの忠義を立てさせようと念じてゐたのですが、御聽入にならなければ、致方ないことであります、私は、貴官に銃殺さるゝのは、恥辱ですから、此の場で切腹いたします、どうぞ、私の屍は、此の艦と一緒に海底へ沈めて下さい、中佐殿、御免。』

ぐざと、小峰氏は、刀尖を突き立てようとしたが、腹の皮が太鼓の皮のやうに堅く突つ張りかへつて居た。

『ま、ま、待ツて……』

をどりこんだ番兵と一緒に、中佐は、小峰氏から無理矢理に短刀を奪ひとつて、

『おい。』

小峰氏の肩をしツかりと抱きすくめた。戰ひつかれて、げツそりとこけた中佐の頬には、はら／＼と、涙が傳はつた。

『ヘル・コミネ、分つた、分つた、死なないでくれイ。』

『では、降伏して下さるか。』

『いゝ

『どうなさる御決心ですか。』

『濠洲艦隊に降伏しては、陛下に對してわしの面目が立たぬ、……されば云つて、君にさう云はれると、わしも可愛い部下をムザ／＼と犬死させたくはない……わしは、此の艦を君に獻呈する、どうか、君の心のまゝに處分してくれイ……だが、斷じてわしは降伏するんぢやないぞ。』

中佐は、双手で頭をかゝへ、よろ／＼とよろめいて、室内の大卓子の處迄ゆくと、それに身をさゝへ、やつと立ちどまつて顏をあげた。頭上には金縁にかざられたカイゼルの額面が掲げてあつた。中佐は、カイゼルの前に跪いて祈つてゐた。そして、いつ迄も、すゝりあげてゐた。

× × ×

一萬五千ポンド、日本の金にして十五萬圓の賞金が、英國政府から小峰氏に授與された。彼は、その中の三分の一は、捕虜になつて不自由な生活をして居たアンドレーア中佐以下の乘組員へ與へ、他の三分の一は、ニユウギニア土人の救濟基金とし、殘の三分の一は自分の事業に投資して、今では、小峰磯吉氏は、ニユウギニア切つての名物男になつて居る。

（をはり）

＝さしゑ　伊藤幾久造＝

呼吸器疾患の合理的治療法

肺炎、肺結核、百日咳、其他呼吸器病の方々は、簡單で效果の多いゲンコール吸入療法が最も有効！

肺結核に罹つたら最後なかなか全治しないと言はれ、その療法も極めて困難とされて居ります。毎年この病で斃れる數は實に十五萬と言ふ夥しい數に上つて居ります。

この恐るべき肺結核の病原菌は結核患者が吐き出す一塊の痰の中に無慮三億も居ると稱されて居ります。

この病原菌は非常に強いもので容易に死滅しません。然し日光の直射に對しては極めて弱く、數時間で死滅してしまふとされて居ります。だから日光療法が主張され患者には日光の當る部屋を選べと、やかましく云はれるのでありまして、現に結核性の腹膜炎などは腹を切開して日光に晒せば完全に癒せると言はれて居ります。

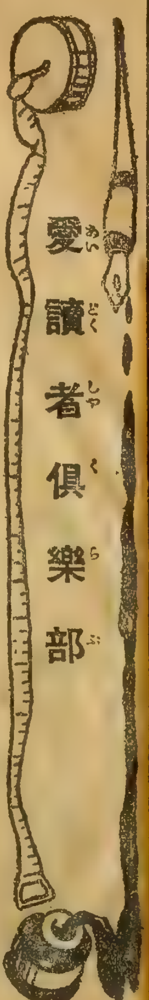
然し實際の場合は肺を切開して日光に晒すといふ樣な事は出來ませんが、何れにしても肺結核療法に最もよいことは直接療法で、強い作用のある殺菌藥を吸入することが治療の原則であり近道であります。

こゝに於て吸入藥ゲンコールは、藥液を吸入すると同時に直接病患部に作用しますから效果の確實な上に何等呼吸器道粘膜を害する等のこともなく消毒殺菌の作用、痰を溶かす作用、痰を出易くする作用、咳を少くする作用などを併せて行ふと言ふ譯で各作用が直接でありますから內服藥よりも效果を認めることが容易であり、吸入器さへ準備すれば何時でも自由に簡單に出來るので大好評であります。この吸入療法こそ呼吸器疾患に對する合理的治療法でその效力については多數實驗者の報告によつても明かなことであります。

ゲンコールは殺菌、消毒、消炎、袪痰の特殊作用を有し解熱を促進する效果に於て學界に貴重されてゐるユーカリプトス・グローブル樹の生葉より抽出せる藥液を主として、之に數種の藥劑を集成配合したもので、肺結核、百日咳、氣管支カタル、肺炎、喉頭結核、喘息にも賞用され好成績を收めて居ります。呼吸器の弱い方は豫防に、初期疾患の方、重病に惱まるゝ方は至急御試み下さい。

吸入藥ゲンコールは藥價家庭用一圓二十錢、德用瓶二圓、送料內地三十五錢、領土六十五錢、米國四十八錢。御註文は東京本鄕大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二一九）

（御註文の節は富士六月號に依る旨御記入下さい）



愛讀者倶樂部

富士を讀んで

東京　深井　淡水

五月號を拜見、特輯號として、とても素晴しかつた。殊に特選讀物はどれもこれも素敵に面白い。今後、此頁だけは是非とも續けて頂きたい。所謂連載ものばかりではどうしても興が薄い。此點四月號は少々失望した。『冨士』は大衆雜誌として讀切講談二つ位は毎號載せてほしい。『特輯、笑ひの探檢隊』は前號に引續いて今月も面白く見た。續きものでは何と云つても村上浪六氏の『すてうり勘兵衞』と佐藤紅綠氏の『善は滅びず』は毎號待たされる。漫畫滿載の頁もずつと續けてお願ひします。それから落語も一篇位是非、兎に角今月は隅から隅まで大滿足で拜見しました。

風かをる

その差は僅か一二間だが、先と後とは大違ひ、先は『郊外の微風』風は良いな新綠の匂ひが、後すると『くさい風だな』

横濱　木村九平

冨士五月號

東京　井上　一男

冨士五月號は讀物特輯だけあつて實に豐富なのに驚いた。殊に米國太平洋艦隊は聯盟脱退後内外共に重大時局に直面して、太平洋の平和は何時破れるやも知れない今日、米國海軍の行動及其の詳細を知らんと欲するのは國民全部の希望であらうと思ふ。この意味から今後ともどしどし各國の國情等を發表されんことをお願ひいたします。

一等當選の喜び

福岡縣　森文太郎

昨日冨士大懸賞一等當選賞品の美事な自轉車が到着椎田驛で受取り早速自轉車屋で組立て貰ひました。運送店主、自轉車屋主人驛員其他の人々が集つて來て『おめでたい、一杯買へ』と騒ぎ立てる有樣、さて組立てゝは貰つたが、乘るには勿體なく、手で押して町中を自慢顔で引廻しました。本屋の店頭へ來ると四月號が出てゐましたから少し張り込んで十册ばかり買ひ込み、自轉車に積んで長閑な初春の光に滿ちた山峽の道を一里半ばかり上つて歸宅すると、母は門前に

漫畫題（實演つきのお話？）

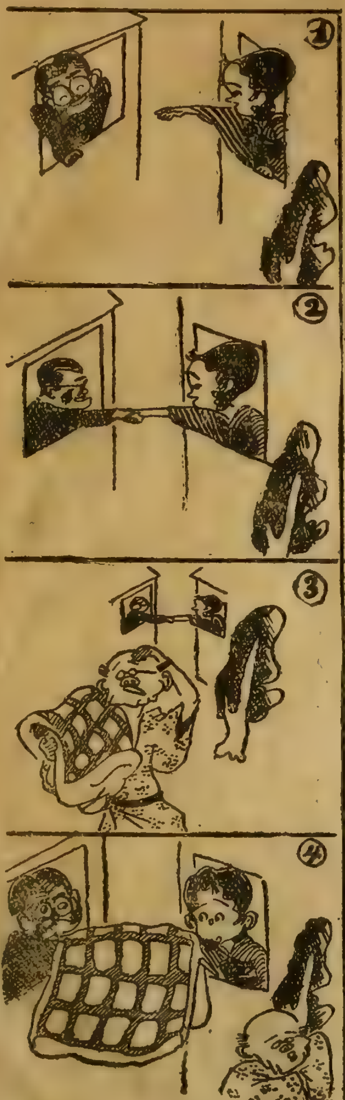
名古屋　高倉　正賀

出迎へてくれ『有難い、有難い』と涙を流して喜びました。其内、親類や近所の人々が集つて門前市をなし、夜は祝杯をあげて、招待した人々に富士を一冊づつ配りました。一同、富士の內容の充實して面白いと賞めぬ者はありませんでした。私は兼々自轉車を欲しいと思つてゐた際とて、全く嬉しく此自轉車を私の一代道具として、紀念のため永久に保存する考へです。先は取敢へず御禮まで、末筆乍ら社長様をはじめ皆々様の御幸福を祈り上げます。

富士十二ケ月川柳 東京 宗像雅照

一月、歌留多にもあきて炬燵で富士を讀み
二月、探梅へ行くにも富士を離さない
三月、白酒へ呼ばれて富士を友に連れ
四月、花の留守退屈しない富士があり
五月、お柏餅の手を拭いてまた富士を見る
六月、梅雨期を富士朗らかにさせてくれ
七月、藪入へ母親富士を買つてやり
八月、避暑にゆく汽車富士黨が五六人
九月、面白い富士に殘暑を忘れてる
十月、富士買つて燈火親しむ候となり
十一月、酉の市歸りに富士を買ふと極め
十二月ボーナスで新年號の富士を買ひ

山口縣 森本 春生



1. マア貴方、 2. 握手しませう。 3. ハテ、布團の干場は？ 4. これは丁度良い工合だて。

島の娘替唄 横濱市 恩田國峰

〽ハア、社に馴染めば
男十六讀みざかり
人目忍んで
富士と一夜の讀み更かし

〽ハア、町は人波
買へぬ人等のくやし顔
主は讀者よ
今ぢや、やめられぬ富士の味

〽ハア、讀めばよせない、
夜毎夜毎のまくら元
雪はちらちら
讀んで夜明す富士讀者

笑話 安全第一 神戸市 藤本瑞松

『僕の地方には一度も衝突したことのない安全な鐵道があるよ』
『本當かい、それはまた大したも

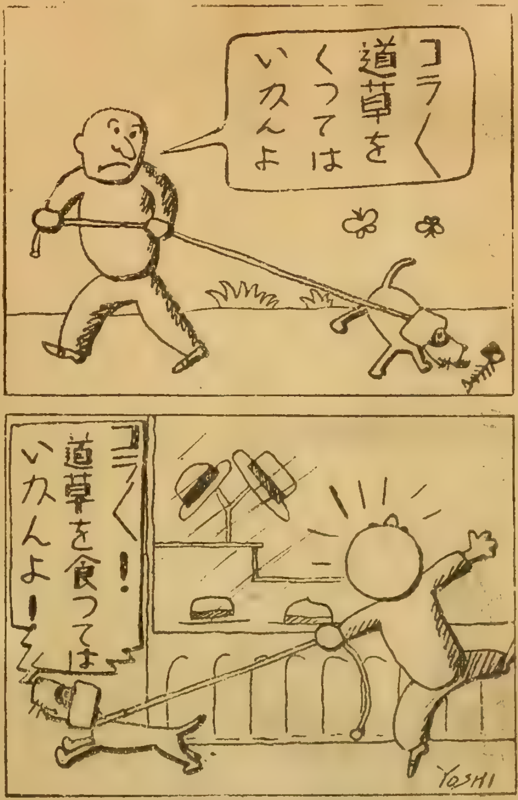
のだな。』『いや、汽車が一つしかないんだ』

笑話　射撃　青森市　松本三郎

中隊長『本官の命令なくして絶對射撃をしてはならん。』訓示終つて中隊長馬に乘らんとする時下腹部に聲あり、ブウ。中隊長『今のは射撃にあらず、間違へんやうに……』兵士『ワハハ、、』

笑話　睡眠劑　小石不二夫

教師『今日の話は少しは藥になつたらう。』生徒『ハイ、隨分なりました。何しろ催眠劑になつた程ですから。』



東京　山口善平

滑稽和歌　東京　石川八郎

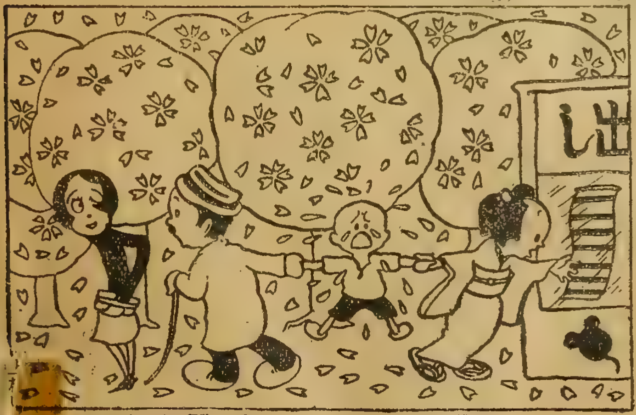
◇泣くなよと吾子に與へし菓子なれど半ば以上は子守食ふなり

◇あるなしの數本なれど禿の身に如何に嬉しきものとかは知る

◇エンヤコラ女土方は脊に双見おぶつて朗らかに働らき居れり

笑話　片目　香川縣　更紗カズヨシ

片目の男『俺は片目だつて普通の人より餘計に見えるぞ。』男『馬鹿な、そんなことがあるものか。』片目の男『お前は俺の片目しか見えまいが、俺はお前の二つの目がチヤンと見えてゐらあ。』



お花見に來たです。　山口市　羽野駿久

笑話　忠實な女中　東京　増山優

女中『奥樣袋が來ました』奥樣『袋つて一體何なの。』女中『あのウ袋です』奥樣『あ

あお前のお母さんのことなの…
…。どうして袋なんて云ふの』
女中『でも、奥様が自分のことに
におをつけては不可ないと仰言
つたんですもの』

昔が今だつたら

兵庫縣 塚北勉

鳥居强右衞門……『ぢや、この潜水服を着て首尾よく城を拔け出してみせるよ。』

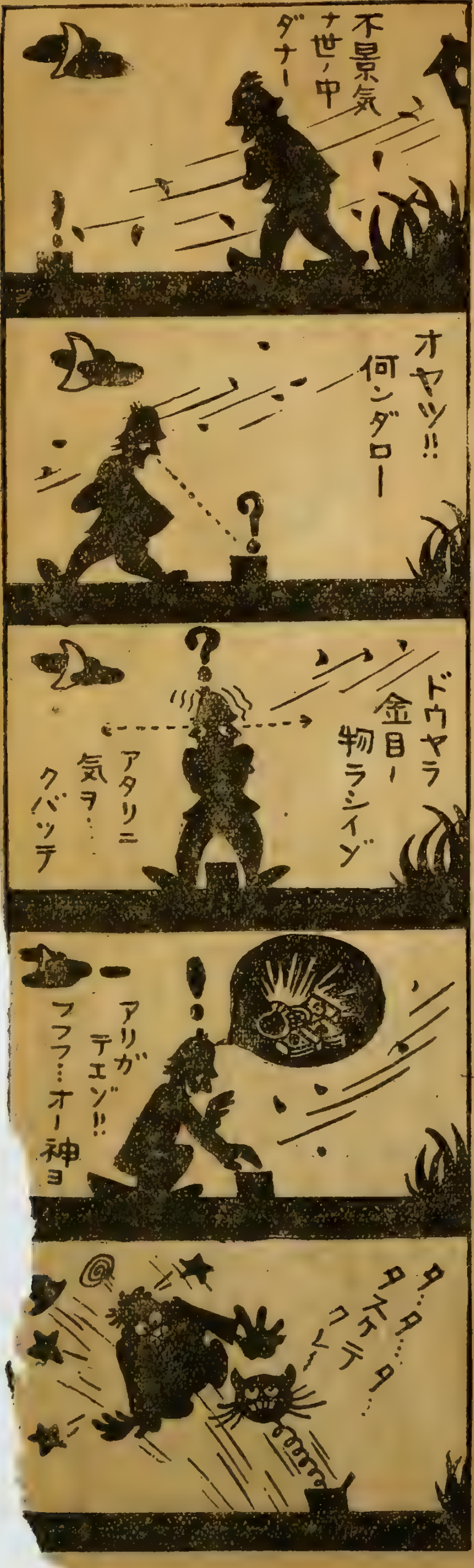
常磐御前……『今若も、乙若もさあ早く滑りや。』とスキーで大猛進

北條時宗……『暴風雨のオールトーキーはなか〳〵骨が折れるわい。』と海洋大活劇『元寇の役』を撮影

阿倍仲麿……『望遠鏡で見てもやつぱり三笠の月は同じだなあ、あゝ日本へ歸りたや。』

熊谷直實……『おうい、返させ給へ。』とメガホンを口にあてて大音聲

高山彦九郎……JOAK、唯今より、高山先生の『勤王攘夷に就て』と題する御講演がはじまります。『エ、、そも〳〵吾國は、……』



暗夜のビツクリ箱 横濱 大高喜久三

(讀者の漫畫は此他本誌三三〇頁『傑作漫畫集』の中に發表してあります。)

投稿大歡迎

(種類)笑話、川柳、漫畫、冨士讀後感等其の他何でも。用紙端書に限る。掲載の分には薄謝を呈す。

『東京哀歌』の歌

靜岡縣 星讓二

一、温室に咲いた　バラの花。
命をかけて　摘んだ花。
今日は悲しく　人の手に

二、冷たい戀の　矢おもてに
若きこの身を　さらしつゝ
廣い東京の　小夜あらし

9-125

御注文の仕方

○本社發行の書籍雜誌は、お近くの書店でお求め下さい。若し品切で御手に入らぬ時、又は近くに書店のない方は、直接本社へ御注文下さい。

○本社への御注文は前金に限ります。

○御送金は振替貯金が一番安全で且送金代が安くすみます。振替貯金の用紙は郵便局にあります。その使ひ方も局でよく敎へてくれます。

○郵便爲替や郵便切手代用でも結構ですが、郵便切手代用の時は必ず一割增に願ひます。

○爲替や切手を封入した郵便物は、せひ書留郵便に願ひます。

○代金引替と集金郵便は一切扱ひません。

○御注文書には必ず書籍名なり雜誌なら雜誌名と何月號からといふ事をハツキリお書き下さい。

○御住所と御名前とはせひ、楷書で願ひます。

○御注文は大日本雄辯會講談社營業部宛に願ひます。振替口座は東京三九三〇番です。

○代理部への御注文は大日本雄辯會講談社代理部宛に願ひます。代理部の振替口座は東京六六二九番です。

○本誌へ廣告掲載御希望の方は大日本雄辯會講談社廣告部宛御照會下されは、詳細御報知御相談に應じます。

定價表

	國內及滿洲支那（送料共）	諸外國（送料共）
一冊	金五拾參錢五厘	金七拾錢
三ケ月	金壹圓五拾錢	金貳圓壹錢
六ケ月	金貳圓九拾四錢	金參圓九拾六錢
一ケ年	金五圓七拾六錢	金七圓八拾錢

特大號で定價を上げた場合は、その增した分だけ右表の外に頂きます。

昭和八年五月三日印刷納本
昭和八年六月一日發行　第六卷第六號

毎月一回
一日發行

編輯人　林　公平
發行人　木村　喜市
印刷人　渡邊　一郎
東京市小石川區西古川町二十五番地

印刷所　中外印刷株式會社

發行所　大日本雄辯會講談社
東京市本鄕區駒込坂下町四十八番地
振替口座東京三九三〇番

電話小石川
（代表）8080
（宿直用）8081
8082
8083
8084
（代表）8085
8086
8087
8088
8089
（代表）8090
8091
8092
8093
8094

元取次店　東京堂・東海堂・北隆館・大東館

禁複製
本誌に掲載せるものは、一切これを無斷にて掲載し、又は單行本に收錄し、或は脚色・上演・映畫・撮影その他複製を禁ず

梅毒は今が治療の絶好期です

梅毒は恐しい全身病

ニキビ吹出物も梅毒性が多い

注意すべき病状

神經衰弱にでも罹つた樣に氣分勝れず、どこが悪いと云つて目立つた症狀はないがどうも身體が倦るく記憶力や思考力が減退して、時々顔や手足或は全身的にニキビの樣な吹出物が出來それが自然に治つたり又出來たりして、人に依つては頭や首筋などへ頑固な腫物などが出來、それが普通の塗布藥や内服藥などでは却々治らぬと云ふ方方の多くは一度梅毒に侵され治療はしたが全治しなかつた方か或は親の梅毒が遺傳した遺傳梅毒の方々であります。

從つて前述の樣な症狀を放つて置くと、外部的症狀が悪化するばかりでなく漸次胃腸を初め心臓、腎臓、肝臓、眼、肺臓等凡ゆる方面を侵され、著るしく食慾が減退して便秘したり、毛髪が抜けたり、呂律はあやしくなり、頭が馬鹿になつて、歩行はよいく\になり、往々痲痺性痴呆症となつて狂ひ死する事が少なくありません。

梅毒の治療法

これ程恐ろしい梅毒も初期に徹底的に治療すれば割合に治癒し易いのですが、初期の治療が不充分で治し切らぬと治療困難になると云はれて居ります。

それは梅毒菌スピロヘータが今迄の治療法に對し抵抗力が出來る關係上同じ療法を繰返すと效力が薄くなるからで、その意味に於て永年梅毒の爲めに惱まされ色々の療法を行つても思ふ樣に體内の毒が取り切れぬと云ふ方々へは内服藥療法をおすゝめします。

獨逸ベルツ博士日本政府登録商標

内服藥ベルツ丸は梅毒の治療を目的とする驅梅藥でありますから、永年苦しめられて居る梅毒、體毒、冷え毒、腦梅毒、横痃、潜伏梅毒、遺傳梅毒、梅毒性リウマチス、ニキビ吹出物等凡て梅毒性疾患に惱まされて居る方々は一日も早くベルツ丸を御試み下さい。服用日を追うて氣分は爽快になり食慾も進み、頭痛や頭重などもいつとはなしによくなつて恐しい毒素は大小便と共に自然體外に排泄され、副作用などに惱む心配もなく知らず識らずの内に恐しい梅毒から救はれる事が出來ます。

藥價は二十日分三圓、三十五日分五圓、七十五日分十圓、百六十日分二十圓、二百六十日分三十圓、送料内地十五錢、領土四十七錢、代金引替の方は切手三十錢封入して東京市本郷區駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九番）へ御申込み下さい。

東京市日本橋區濱町三ノ四〇番地

發賣元 **鈴木日本製薬社**

電話浪花百五・百六番

振替東京百五番

FUJI
Published monthly by the Dai Nippon Yubenkai Kodansha, Tokio, Japan.

(MADE IN JAPAN)

大正十五年九月十二日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）昭和八年五月三日印刷納本 昭和八年六月一日發行 冨士 第六巻 第六號
定價金五拾錢（送料三錢五厘）

Start filing
vol 6 #6
June 1933

9-12
SEP 1 3
SEP 1 6
SEP 1 8
SEP 2 5
SEP 3
OCT -
OCT -
OCT 1
OCT 1
OCT 2